高松市埋蔵文化財調査報告　第 177集

新病院整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

萩前・一本木遺跡Ⅰ

－第２分冊－

2017 年 3 月

高松市教育委員会

本　文　目　次

（第２分冊）

第Ⅲ章　調査の成果
第３節　遺構と遺物
Ｂ　居館区画……1
（１）竪穴建物……5
（２）掘立柱建物……73
（３）柵列……93
（４）ＳＤ……94
（５）ＳＫ……104
（６）ＳＰ……120
Ｃ　周辺区画……121
（１）竪穴建物……128
（２）ＳＤ……152
（３）ＳＫ……178
（４）ＳＸ……187
（５）ＳＰ……191
第４節　遺構外出土遺物……192
第Ⅳ章　自然科学分析……194
第１節　14-SD70 堆積土壌分析……194
第２節　放射性炭素年代……204
第３節　検出された液状化噴脈における礫径について……208
第Ⅴ章　まとめ……215
第１節　萩前・一本木遺跡の集落の変遷……215
第２節　萩前・一本木遺跡における古墳時代後半期の遺物諸相……223

挿　図　目　次(1)

図 1　第 14・27 調査区平面図 (S=1/200)(1) ....1・2
図 2　第 14・27 調査区平面図 (S=1/200)(2) .... 3・4
図 3　14- 竪穴 1　平・断面図 6
図 4　14- 竪穴 1　平・断面図及び出土遺物実測図 7
図 5　14- 竪穴 1　カマド 8
図 6　14・27- 竪穴 22　平・断面図及び出土遺物実測図 (1) 10
図 7　14・27- 竪穴 22　カマド及び出土遺物実測図 (2) 11
図 8　14・27- 竪穴 20　平・断面図 12
図 9　14・27- 竪穴 20　カマド及び出土遺物実測図 13
図 10　14- 竪穴 19　平・断面図 14
図 11　14- 竪穴 19　カマド及び出土遺物実測図 15
図 12　27- 竪穴 3　平・断面図 16
図 13　27- 竪穴 3　カマド及び出土遺物実測図 17
図 14　14- 竪穴 4　平・断面図 18
図 15　14- 竪穴 4　断面図 19
図 16　14- 竪穴 4　カマド 20
図 17　14- 竪穴 4　床面遺物出土状況及び出土遺物実測図 21
図 18　14- 竪穴 25・28・31　平・断面図 22
図 19　14- 竪穴 25・28　断面図及び出土遺物実測図 23
図 20　14- 竪穴 40　平・断面図及び出土遺物実測図 25
図 21　14- 竪穴 26　平・断面図 28
図 22　14- 竪穴 26　断面図及び出土遺物実測図 29
図 23　27- 竪穴 1　平・断面図 30
図 24　27- 竪穴 1　カマド及び出土遺物実測図 31
図 25　14- 竪穴 5　平・断面図 32
図 26　14- 竪穴 5　カマド及び出土遺物実測図 33
図 27　14- 竪穴 16　平・断面図 34
図 28　14- 竪穴 16　カマド及び出土遺物実測図 35
図 29　14- 竪穴 15　平・断面図 38
図 30　14- 竪穴 15　断面図・カマド及び出土遺物実測図 39
図 31　14- 竪穴 21　平・断面図 40
図 32　14- 竪穴 21　カマド及び出土遺物実測図 41
図 33　14- 竪穴 2　平・断面図 ....43・44
図 34　14- 竪穴 2　カマド及び出土遺物実測図 45
図 35　14- 竪穴 30　平・断面図 (1) 46
図 36　14- 竪穴 30　平・断面図 (2) 47
図 37　14- 竪穴 30　カマド 48
図 38　14- 竪穴 30　遺物出土状況 49
図 39　14- 竪穴 30　出土遺物実測図 50
図 40　14- 竪穴 23　平・断面図 52
図 41　14- 竪穴 23　断面図及びカマド 53
図 42　14- 竪穴 23　出土遺物実測図 54
図 43　27- 竪穴 7　平・断面図 55
図 44　27- 竪穴 2　平・断面図 56
図 45　27- 竪穴 2　断面図及びカマド 57
図 46　27- 竪穴 2　遺物出土状況及び出土遺物実測図 58
図 47　14- 竪穴 18　平・断面図 59
図 48　14- 竪穴 18　カマド及び出土遺物実測図 60
図 49　14- 竪穴 12　平・断面図 61
図 50　14- 竪穴 12　断面図及びカマド 62
図 51　14- 竪穴 12　出土遺物実測図 63
図 52　27- 竪穴 140　平・断面図及び出土遺物実測図 64
図 53　27- 竪穴 130　平・断面図 66
図 54　27- 竪穴 130　カマド及び出土遺物実測図 67
図 55　14- 竪穴 29　平・断面図 68
図 56　14- 竪穴 29　カマド及び出土遺物実測図 69
図 57　14- 竪穴 24　平・断面図 70
図 58　14- 竪穴 10　平・断面図 71
図 59　14- 竪穴 32　平・断面図 72
図 60　14- 掘立 1　平・断面図 74
図 61　14- 掘立 2　平・断面図 75
図 62　14- 掘立 3　平・断面図 76
図 63　14- 掘立 6　平・断面図 ....77・78
図 64　14- 掘立 7　平・断面図 80
図 65　14- 掘立 9　平・断面図 81
図 66　14- 掘立 11　平・断面図及び出土遺物実測図 83
図 67　14- 掘立 12　平・断面図 85
図 68　14- 掘立 13　平・断面図 86
図 69　14- 掘立 14　平・断面図及び出土遺物実測図 88
図 70　14- 掘立 15　平・断面図 88
図 71　14- 掘立 16　平・断面図 89
図 72　27- 掘立 16　平・断面図 90
図 73　27- 掘立 1　平・断面図及び出土遺物実測図 91
図 74　14- 掘立 100　平・断面図 92
図 75　14- 掘立 10　平・断面図 92
図 76　14- 柵列 1　平・断面図 93
図 77　14-SD1・2・3　平・断面図及び出土遺物実測図 95
図 78　14-SD29、14-SD-39・27-SD139　平・断面図及び
出土遺物実測図 96
図 79　14-SD46・53・380　平・断面図 97
図 80　14・27-SD60、14・27-SD70　平・断面図 99
図 81　14・27-SD70　断面図 100
図 82　14・27-SD70 出土遺物実測図 101
図 83　27-SD12　平・断面図及び出土遺物実測図 103
図 84　14-SK55・5　平・断面図及び出土遺物実測図 104
図 85　14-SK22・23・24・52・54・57　平・断面図 106
図 86　14-SK77・80・84・98　平・断面図 107
図 87　14-SK165　平・断面図及び出土遺物実測図 108
図 88　14-SK99・100・152・155・160　平・断面図 109
図 89　14-SK170・176・180・184・185・186・229・234
平・断面図 111
図 90　14-SK238・235・260・263・266・272　平・断面図 113
図 91　14-SK275・278・284・285・286・287・319　平・断面図 115
図 92　14-SK288・322・324・325　平・断面図 116
図 93　14-SK378・399　平・断面図及び出土遺物実測図 117
図 94　14-SK401・404・406・407・409・410・469　平・断面図
及び出土遺物実測図 119
図 95　27-SK19・125　平・断面図及び出土遺物実測図 120
図 96　14-SP240　平・断面図及び出土遺物実測図 120
図 97　第 28・29・37・39・41・46 調査区
平面図 (S=1/200) ....121・122
図 98　第 36・38・47 調査区平面図 (S=1/200) ....123・124
図 99　第 30・32・33 調査区平面図 (S=1/200) ....125・126
図 100　第 31・34 調査区平面図 (S=1/200) 127

挿　図　目　次(2)

図 101　28- 竪穴 1　平・断面図及び出土遺物実測図 128
図 102　29- 竪穴 80　平・断面図 129
図 103　29- 竪穴 80　カマド 130
図 104　29- 竪穴 80　出土遺物実測図 131
図 105　29- 竪穴 30・46- 竪穴 12　平・断面図 132
図 106　29- 竪穴 20・46- 竪穴 35　平・断面図 133
図 107　29- 竪穴 20・46- 竪穴 35　カマド及び出土遺物実測図 134
図 108　28- 竪穴 4　平・断面図及び出土遺物実測図 135
図 109　28- 竪穴 4　カマド 136
図 110　41- 竪穴 3　平・断面図及び出土遺物実測図 138
図 111　28- 竪穴 3　平・断面図 139
図 112　28- 竪穴 3　カマド 140
図 113　28- 竪穴 3　出土遺物実測図 141
図 114　28- 竪穴 6　平・断面図及び出土遺物実測図 142
図 115　28- 竪穴 30　平・断面図 143
図 116　28- 竪穴 30　カマド及び出土遺物実測図 144
図 117　46- 竪穴 1・46- 竪穴 5　平・断面図 146
図 118　36- 竪穴 12　平・断面図 147
図 119　29- 竪穴 50　平・断面図及び出土遺物実測図 148
図 120　41- 竪穴 2　平・断面図及び出土遺物実測図 149
図 121　29- 竪穴 45　平面図及び出土遺物実測図 150
図 122　41- 竪穴 4　平・断面図 151
図 123　30-SD7・32-SD21　平・断面図 152
図 124　30-SD7　出土遺物実測図 153
図 125　30-SD2・6　平・断面図 154
図 126　29-SD35・62・64　平・断面図及び出土遺物実測図 155
図 127　29-SD10・31-SD1　平・断面図及び出土遺物実測図 157
図 128　32-SD20　平・断面図 158
図 129　32-SD20　出土遺物実測図 159
図 130　36-SD10　出土遺物実測図 160
図 131　36-SD10　平・断面図 161
図 132　33-SD1・2　平・断面図 162
図 133　33-SD1・2　出土遺物実測図 163
図 134　41-SD1　出土遺物実測図 164
図 135　41-SD1　平・断面図 165
図 136　39-SD1　平・断面図及び出土遺物実測図 166
図 137　28-SD22・SD10　平・断面図 167
図 138　32-SD1・10、34-SD2　平・断面図及び出土遺物実測図 169
図 139　36-SD1・2・4　平・断面図 171
図 140　36-SD3・5　平・断面図 172
図 141　36-SD6・7　平・断面図 173
図 142　36-SD8・9　平・断面図 174
図 143　36-SD11　平・断面図 175
図 144　38-SD1・2　平・断面図 176
図 145　38-SD3・41-SD2・47-SD1・46-SD3・4　平・断面図 177
図 146　28-SK5 平・断面図及び出土遺物実測図 178
図 147　29-SK1・11・12・13・14・15・16・17　平・断面図及び出土遺物実測図 180
図 148　29-SK18・19・21・33　平・断面図及び出土遺物実測図 181
図 149　29-SK36・41・51・58・65・66　平・断面図及び出土遺物実測図 183
図 150　30-SK5・32-SK2・3・12・13・15・34-SK4・5 平・断面図 185
図 151　37-SK1・2・39-SK2・46-SK6・10　平・断面図及び出土遺物実測図 186
図 152　29-SX54・60・61　平・断面図及び出土遺物実測図 188
図 153　30-SX1・32-SX22・23　平・断面図 189
図 154　34-SX1・3　平・断面図 190
図 155　34-SX3　出土遺物実測図 191
図 156　29-SP5・32-SP14 平・断面図及び出土遺物実測図 191
図 157　遺構外出土遺物実測図 (1) 192
図 158　遺構外出土遺物実測図 (2) 193
図 159　調査地点の層序及び分析資料採取位置 195
図 160　1 地点の資料及び X 線写真 197
図 161　2 地点の資料及び X 線写真 198
図 162　3 地点の資料及び X 線写真 199
図 163　植物珪酸体含有の層位的変化 202
図 164　暦年較正結果 (確率分布：2 σ) 206
図 165　調査した噴脈検出箇所 208
図 166　粒径加積曲線 (第 7 調査区) 210
図 167　粒径加積曲線 (第 9 調査区) 212
図 168　41- 竪穴 1 断面図 214
図 169　遺構変遷図 (古墳時代中期) 217
図 170　遺構変遷図 (古墳後期) 218
図 171　遺構変遷図 (飛鳥～古代) 219
図 172　遺構変遷図 (中世) 220
図 173　須恵器杯蓋 (上段)・杯身 (下段) の法量 225
図 174　土器形態分類図 (1) 226
図 175　土器形態分類図 (2) 227
図 176　土器形態分類図 (3) 228
図 177　古墳時代後半期土器様相 (1) 230
図 178　古墳時代後半期土器様相 (2) 231
図 179　古墳時代以降の土器様相 (3) 232

挿　表　目　次

表 1　植物珪酸体含有量 ･････････････････････････････ 201
表 2　放射性炭素年代測定結果 ･････････････････････････ 206
表 3　樹種同定結果 ･････････････････････････････････ 206
表 4　第 7 調査区の液状化跡の粒径の通過質量百分率 ･･･ ･ 209
表 5　粒度試験結果一覧表 (第 7 調査区) ･･････････････････ 210
表 6　第 9 調査区の液状化跡の粒径の通過質量百分率 ･･････ 212
表 7　粒度試験結果一覧表 (第 9 調査区) ･･････････････････ 213
表 8　遺構一覧表 (1) ･･････････････････････････････････ 221
表 9　遺構一覧表 (2) ･･････････････････････････････････ 222
表 10　土師器甕属性相関表 ･･････････････････････････････ 224
表 11　遺構ごとにおける土器組成集計表 ･･････････････････ 233

挿　図　版　目　次

図版 1　土壌薄片写真･･････････････････････････････････････ 200
図版 2　炭化材･･ 207
図版 3　第 7 調査区の噴礫の状況･････････････････････････ 208
図版 4　第 9 調査区の噴礫の状況･････････････････････････ 211

図１　　第 14・27 調査区平面図（S=1/200）（1）

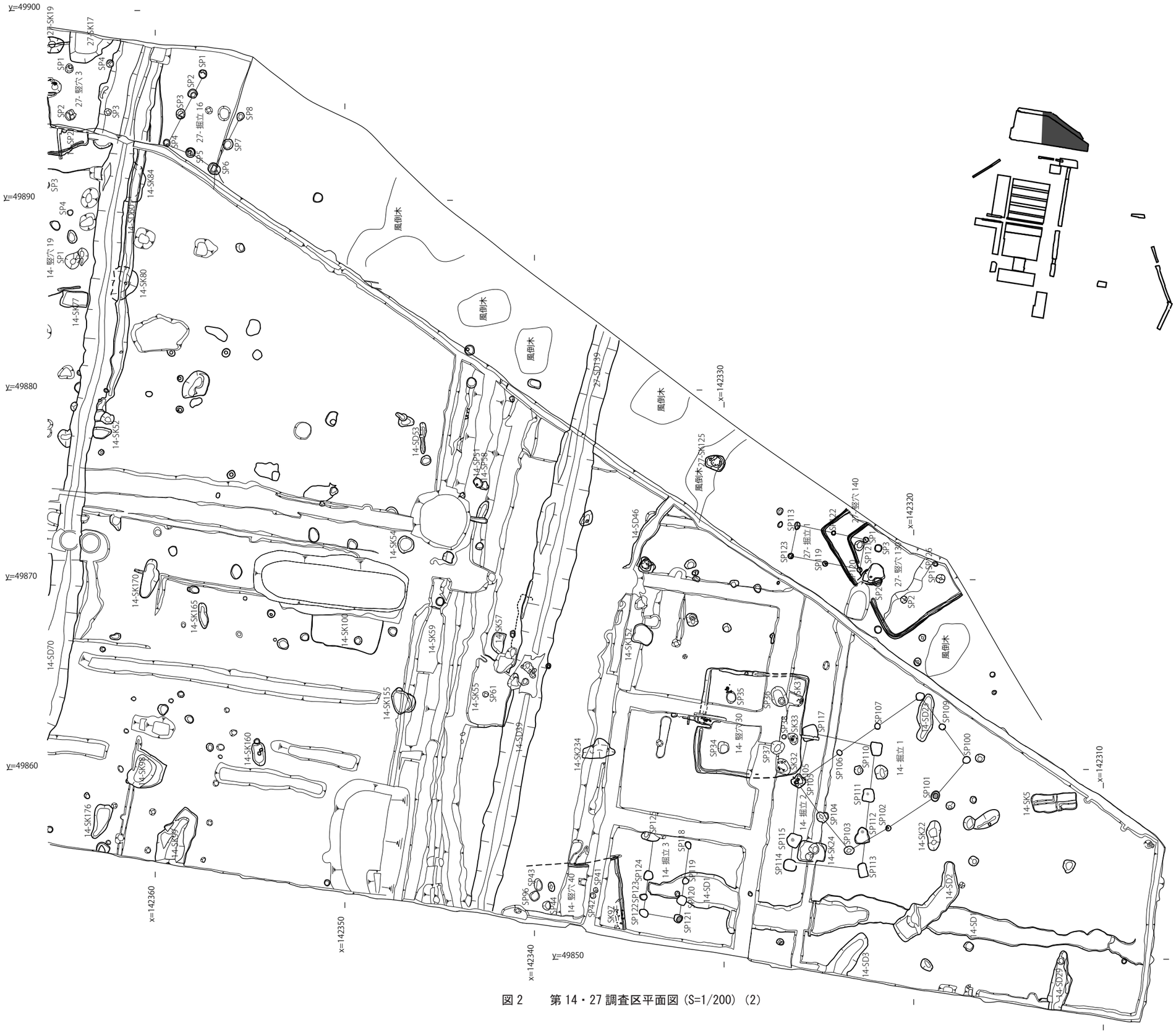


図2　　第14・27調査区平面図（S=1/200）（2）

第Ⅲ章　調査の成果

第３節　遺構と遺物

Ｂ　居館区画 (図１～２)

(１)　竪穴建物

14 －竪穴 1(図３～５)

第 14 調査区北西側で検出した竪穴建物である。平面形状は方形である。主軸方位 N-14°-E、検出面の標高は 35.6m である。規模は、長辺約 6.00m、短辺約 5.70m、深さ 0.60m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (ＳＰ１～４)、土坑 (ＳＫ６)、ピット (ＳＰ５) を、掘方面で土坑 (ＳＫ７) を確認した。

埋土は灰黄褐極粗砂混じりシルトと灰黄褐シルトである。埋土から土師器高杯 (360・361)・手捏土器 (363)、須恵器杯身片、土師器高杯片、粘土塊が出土した。

貼床は灰黄褐細礫混じり細砂～シルトである。遺物は台石 (S33)、カマドの西側の床面直上から土師器高杯片が出土した。

カマドは竪穴建物北側中央やや東よりに作り付けられる。長い袖を持ち、カマド構築材は灰黄褐シルトである。カマド内部には炭化物を多量に含む黒褐シルトの堆積が確認でき、カマド機能時の炭層と考えられる。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.09 m、深さ約 0.04m、埋土は灰黄細砂～シルトである。遺物は出土していない。

支柱穴は４基確認した。ＳＰ１は楕円形を呈し、長径約 0.62 m、短径約 0.42 m、深さ約 0.52m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方の上層が極暗褐シルト～粘土、中層が暗褐粗砂混じりシルトと黒シルト～粘土、下層が地山ブロックを含む黒褐粗砂混じりシルトである。ＳＰ２は楕円形を呈し、長径約 0.72 m、短径約 0.53 m、深さ約 0.80m を測る。断面形状はＶ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐粗砂～シルト、掘方が黒褐小礫混じり細砂～シルトと黒褐粗砂～シルト、褐粗砂～シルトである。ＳＰ３はやや歪な円形を呈し、直径約 0.69 m、深さ約 0.53m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒粗砂～シルト、掘方が黒褐粗砂～シルトと黒褐細砂～シルト、褐粗砂～シルトである。ＳＰ４はやや歪な円形を呈し、直径約 0.56 m、深さ約 0.65m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。柱痕が確認でき、柱痕が黒粗砂混じり粘質土、掘方上層が黒褐細砂～シルト、中層が黒褐シルト～粘土と黒褐小礫混じりシルト～粘土、下層が黒褐細砂～粘土である。支柱穴から遺物は出土していない。

ＳＰ５は竪穴建物南側やや東寄りで検出したピットである。やや歪な円形を呈し、直径約 0.49 m、深さ約 0.04m を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。土師器甕 (362) が正位で出土した。底部は残存していない。埋土は、土器内の埋土が灰黄褐礫混じりシルト、掘方がにぶい黄褐細礫混じりシルトである。

ＳＫ６は竪穴建物南側中央で検出した不整形な土坑である。長軸約 1.01 m、短軸約 0.63 m、深さ約 0.29 mを測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が褐灰シルト、下層が灰黄褐細砂～シルトと黒褐細砂である。

ＳＫ７は竪穴建物南東隅で検出した隅丸長方形の土坑である。貼床面で上面を検出したが、正確な遺構プランは掘方面まで掘削後に確認できた。長軸約 0.82 m、短軸約 0.52 m、深さ約 0.30 mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は４層に分層でき、上層が黒褐シルト、中層が黒褐シルトと灰黄褐細砂、下層が黒褐シルトである。遺物は土師器高杯 (359) が出土した。その他図示できなかったが、ＳＫ７から土師器高杯片・甕片、製塩土器片が出土した。

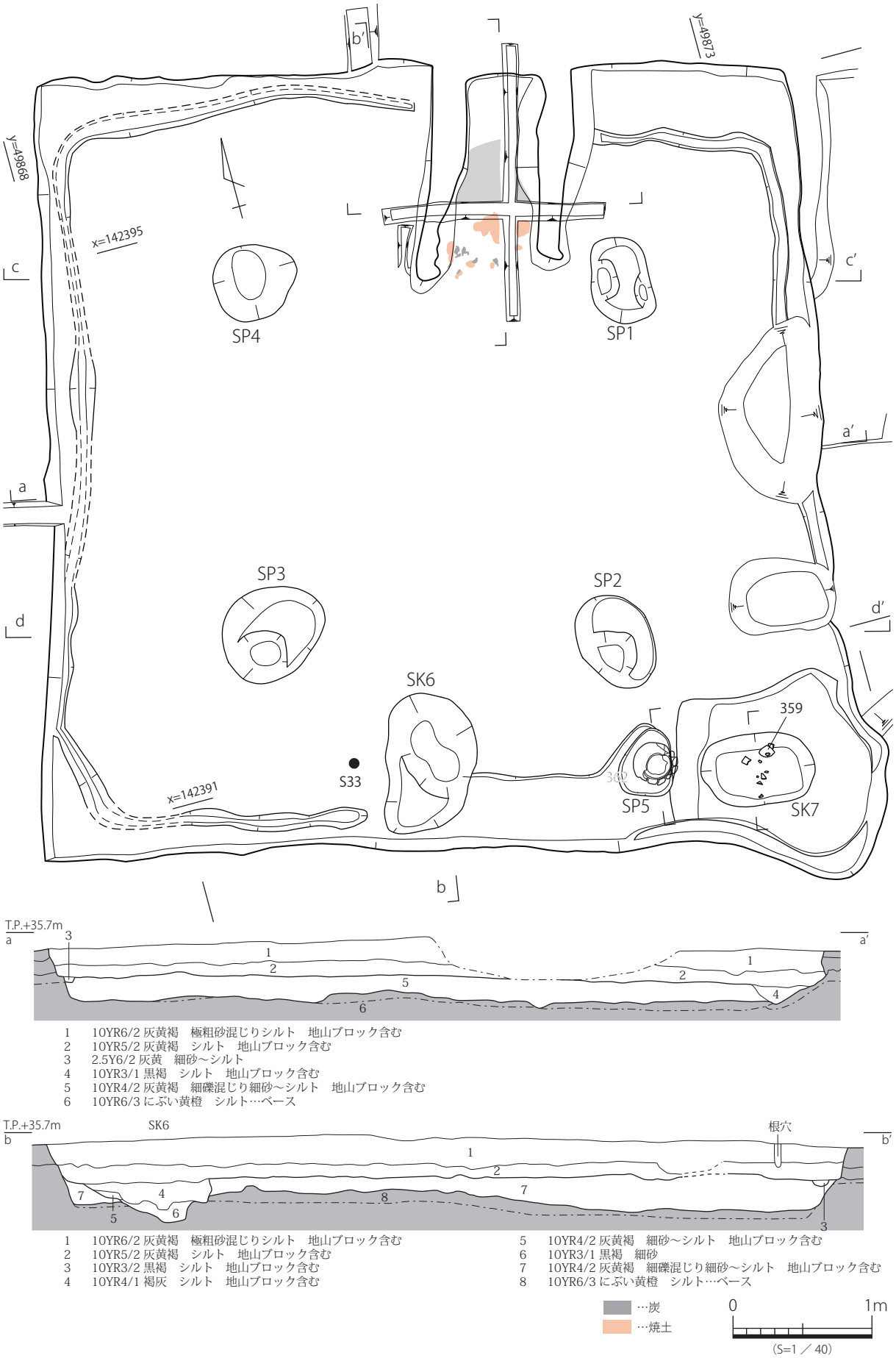
本遺構からは、埋土上層から須恵器杯身片が１点出土しているが、それ以外はすべて土師器片であった。土師器高杯 (359・360・361) の特徴から、古墳時代中期中葉と推定しておく。

14・27 －竪穴 22(図６～７)

第 14 調査区北東側で検出した竪穴建物である。平面形状は歪な方形を呈する。主軸方位 N-10°-W、検出した標高は 35.5 ～ 35.4m である。規模は、長辺約 4.20m、短辺約 3.65m、深さ約 0.40m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと支柱穴 (27- ＳＰ 101・102) を検出した。

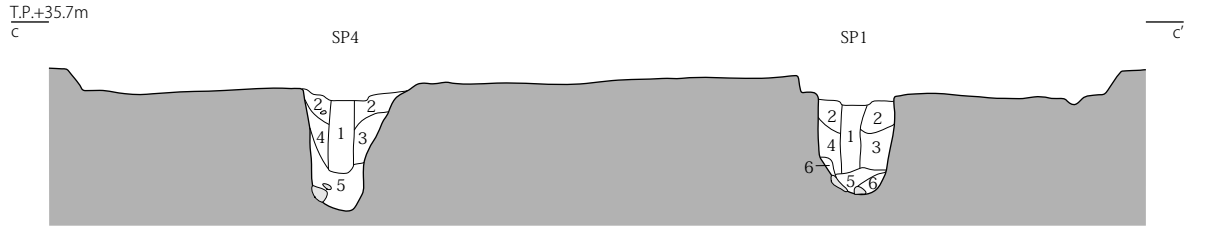
埋土は黒褐粘質シルトと黒褐シルトである。遺物は須恵器杯蓋 (365・366)・無蓋高杯 (367)・土師器杯 (373・375)・高杯 (371)・甑 (381)・甕 (376・378・379)、製塩土器 (370)、弥生土器



1　10YR6/2 灰黄褐　極粗砂混じりシルト　地山ブロック含む
2　10YR5/2 灰黄褐　シルト　地山ブロック含む
3　2.5Y6/2 灰黄　細砂～シルト
4　10YR3/1 黒褐　シルト　地山ブロック含む
5　10YR4/2 灰黄褐　細礫混じり細砂～シルト　地山ブロック含む
6　10YR6/3 にぶい黄橙　シルト…ベース

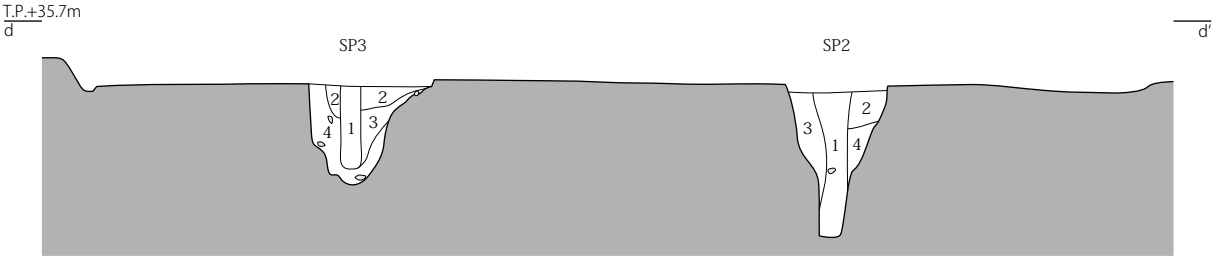
1　10YR6/2 灰黄褐　極粗砂混じりシルト　地山ブロック含む
2　10YR5/2 灰黄褐　シルト　地山ブロック含む
3　10YR3/2 黒褐　シルト　地山ブロック含む
4　10YR4/1 褐灰　シルト　地山ブロック含む
5　10YR4/2 灰黄褐　細砂～シルト　地山ブロック含む
6　10YR3/1 黒褐　細砂
7　10YR4/2 灰黄褐　細礫混じり細砂～シルト　地山ブロック含む
8　10YR6/3 にぶい黄橙　シルト…ベース

図 3　　14- 竪穴 1　平・断面図



1　7.5YR2/1 黒　粗砂混じり粘質土
2　7.5YR3/2 黒褐　細砂～シルト　炭化物含む
3　7.5YR3/2 黒褐　シルト～粘土　5YR4/4 にぶい赤褐　シルトブロック 5%
4　7.5YR2/2 黒褐　小礫混じりシルト～粘土
5　7.5YR3/1 黒褐　細砂～粘土　5YR4/4 にぶい赤褐　シルトブロック斑状に 5%　炭化物含む

1　7.5YR3/3 暗褐　シルト　やや粘質
2　7.5YR2/3 極暗褐　シルト～粘土
3　10YR3/3 暗褐　粗砂混じりシルト　地山ブロック多量含む
4　10YR2/1 黒　シルト～粘土
5　7.5YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト　ほぼ地山土で構成
6　10YR4/3 にぶい黄褐　小礫混じり粗砂～シルト　地山土で構成



1　7.5YR2/1 黒　粗砂～シルト　やや粘質
2　10YR3/2 黒褐　粗砂～シルト　径 1 ㎝大の亜円礫含む
3　7.5YR3/2 黒褐　細砂～シルト　やや粘質
4　7.5YR4/3 褐　粗砂～シルト　ほぼ地山土で構成　径 5 ㎝大の亜円礫含む

1　7.5YR2/2 黒褐　粗砂～シルト　やや粘質
2　7.5YR3/2 黒褐　小礫混じり細砂～シルト　地山ブロック斑状に 7%
3　7.5YR2/2 黒褐　粗砂～シルト　やや粘質
4　7.5YR4/3 褐　粗砂～シルト　ほぼ地山土で構成

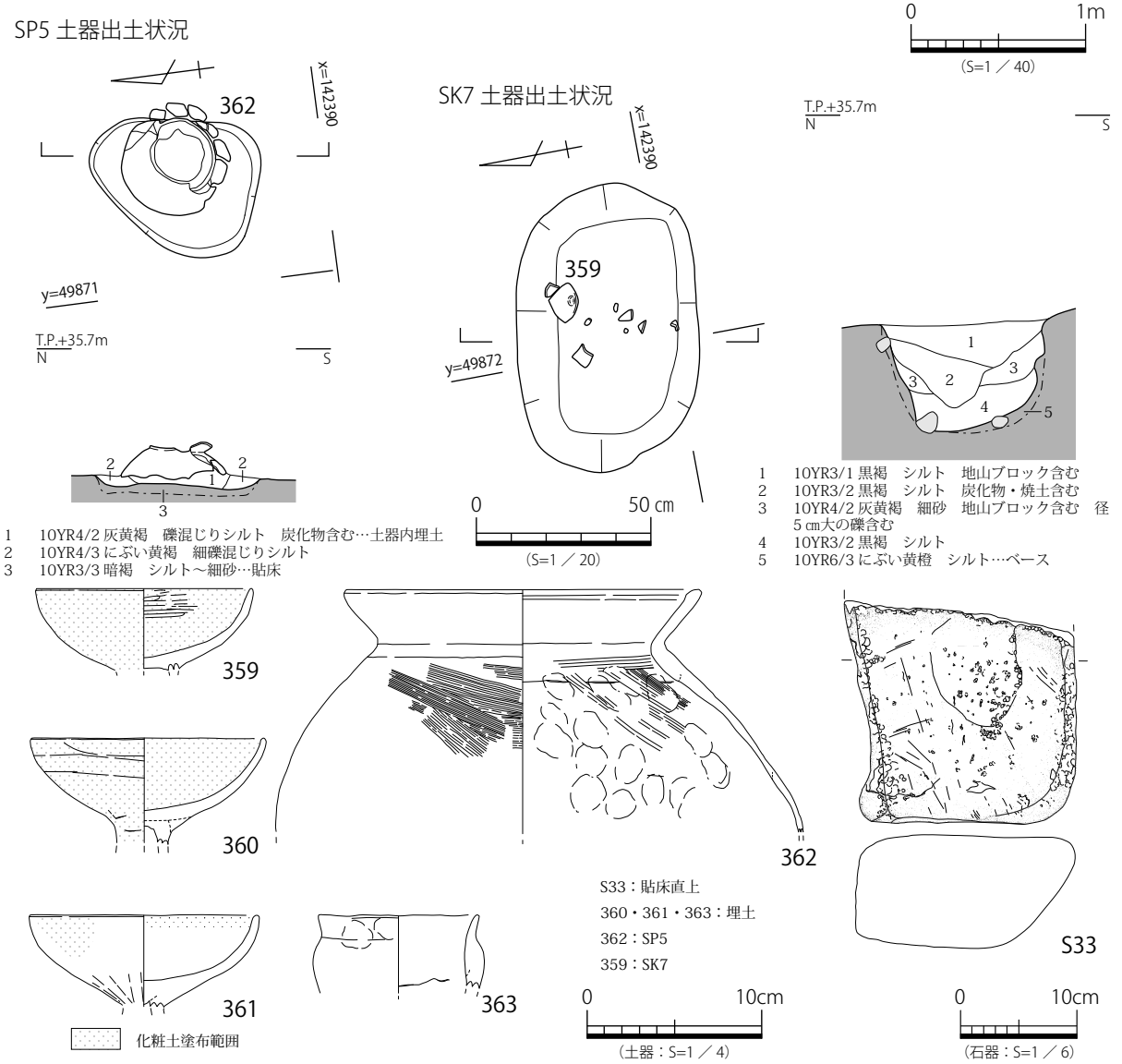


図 4　　14- 竪穴 1　平・断面図及び出土遺物実測図

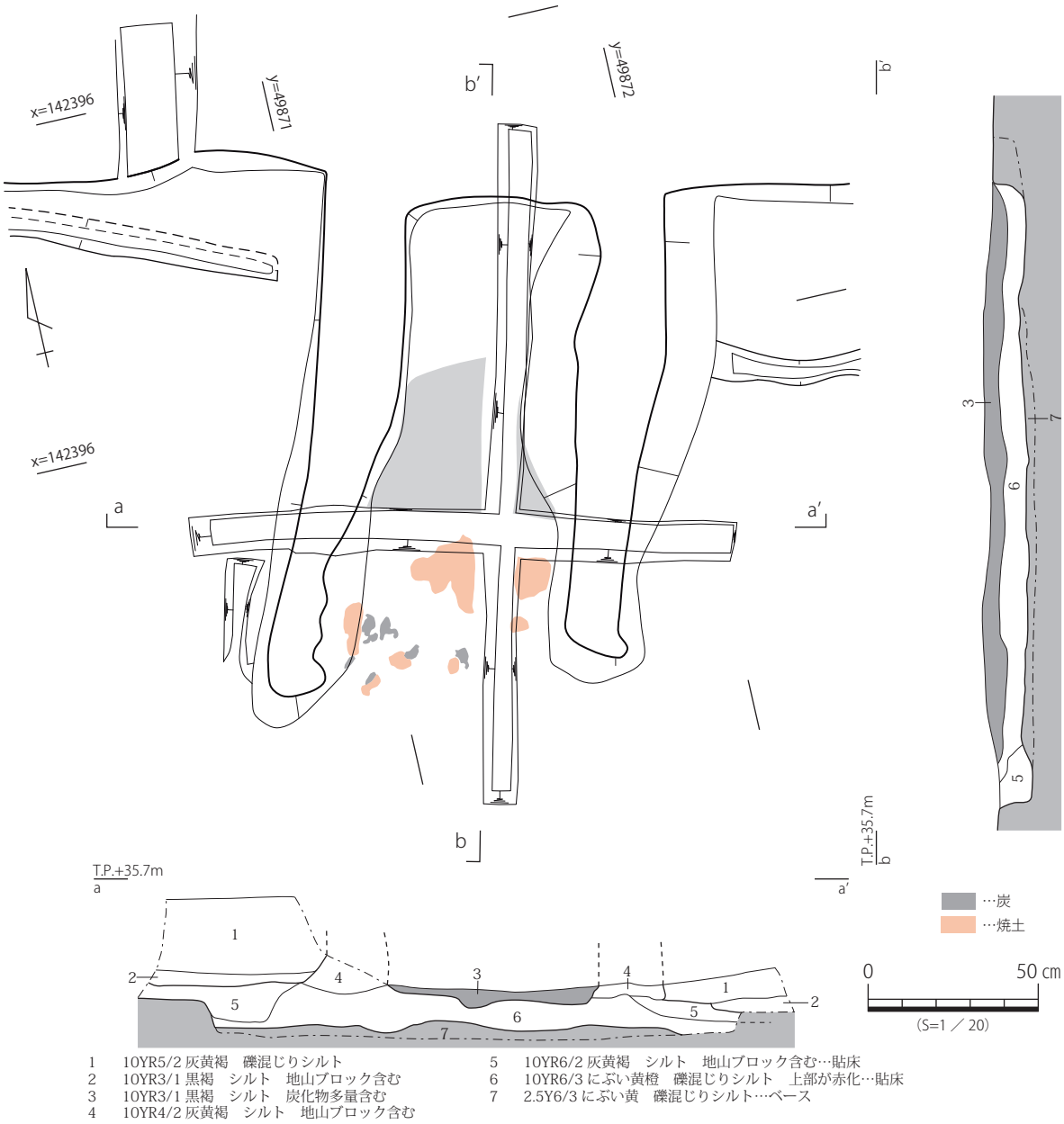


図５　　14- 竪穴１　カマド

(383) が出土した。その他図示できなかったが、須恵器杯身片・高杯片・壺片、土師器甑片・甕片・高杯片・壺片・製塩土器片、臼玉が出土した。

貼床は地山ブロック土を含む黒褐粘質シルトと暗褐粘質シルト、暗褐細砂～シルトである。貼床直上から須恵器杯蓋 (364)・甕 (368)・土師器高杯 (372)・杯 (374)、臼玉 (S34) が出土した。カマド周辺の貼床近くから土師器甑 (382)・甕 (377)・鍋 (380)、製塩土器 (369) が出土した。

カマドは北カマドで、竪穴建物中央やや東寄りに作り付けられる。カマド構築材は褐シルトである。カマド内部は掘窪めめる。カマド内部に炭化物層が確認でき、カマド機能時の堆積層と考えられる。カマド埋土上層は、黒褐シルトと暗褐中粒砂混じりシルトで、焼土塊や炭化物を含むことから、カマドの上部構造の崩落土と考えられる。

支柱穴は東側の２基を確認した。27- ＳＰ 101 は円形を呈し、直径約 0.31 m、深さ約 0.23m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は単層で、暗褐細砂～シルトである。27- ＳＰ 102 は円形を呈し、直径約 0.25 m、深さ約 0.23m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は単層で、暗褐細砂～シルトである。

出土遺物の年代から、ＴＫ 208 型式併行期と判

断できる。

14・27 ―竪穴 20(図 8 ～ 9)

第 14 調査区南東側・第 27 調査区中央で検出した竪穴建物である。14- ＳＫ 246 を切り、27- 竪穴３に切られる。主軸方位 N-1°-E、検出面の標高は 35.7m である。平面形状はやや横長の方形を呈する。規模は、長辺約 5.50m、短辺約 4.00m、深さ約 0.40m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (14- ＳＰ１・２、27- ＳＰ２) を検出した。

埋土は、にぶい黄褐シルトと褐シルトである。遺物は出土していない。

貼床は褐シルトとにぶい黄褐シルト混じり細砂である。

カマドは竪穴建物北側中央やや西よりに作り付けられる。カマド構築材は灰褐粗砂混じりシルトとにぶい黄褐シルトである。カマド内部には炭化物を多量に含む堆積が確認でき、当時の機能面と考えられる。遺物はカマドから土師器甕 (384) が正位で出土した。

周壁溝は西側で確認でき、幅約 0.15 m、深さ約 0.13m を測る。埋土は暗褐シルトである。

支柱穴は３基確認できた。14- ＳＰ１は円形を呈し、直径約 0.36 m、深さ約 0.12m を測る。断面形状は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方がにぶい黄褐シルトと暗褐シルト、黒褐粘土である。14- ＳＰ２は 27- 竪穴３に切られるために全体の形状は不明であるが、円形を呈すると考えられる。直径約 0.44 m、深さ約 0.22m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐粘土、掘方が褐シルト～粘土である。27- ＳＰ２は撹乱に切られるため、全体の形状は不明であるが､楕円形を呈すると想定できる。短径約 0.33 m、深さ約 0.15m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は単層で、灰黄褐シルト混じり細砂である。

竪穴建物の周辺や貼床面には、大量の礫が確認できた｡後述する地震の影響によるものと想定できる。

27- 竪穴３との切り合い関係から、古墳時代中期中葉と判断できる。

14 ―竪穴 19(図 10 ～ 11)

第 14 調査区中央東よりで検出した竪穴建物である。14- ＳＤ 70 に切られるため、全体の形状は不明であるが、方形を呈すると考えられる。主軸方位 N-15°-W、検出面の標高は 35.8 ～ 35.7m である。規模は、長辺約 6.50m、短辺約 4.9m 以上、深さ約 0.20m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (ＳＰ１)、ピット (ＳＰ３・４) を検出した。

埋土は黒褐シルト～粘土である。遺物は須恵器杯蓋 (385)・製塩土器 (386) が出土した。その他図示できなかったが、土師器壺片が出土した。

貼床はにぶい黄褐シルト～粘土である。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられる。カマド構築材は暗褐シルト～粘土とにぶい黄褐シルト、褐極細砂～シルトである。カマド内部には焼土や炭化物を多量に含む層が確認できた。カマドの上部構造の崩落土の可能性が考えられる。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.12 m、深さ約 0.04m を測る。

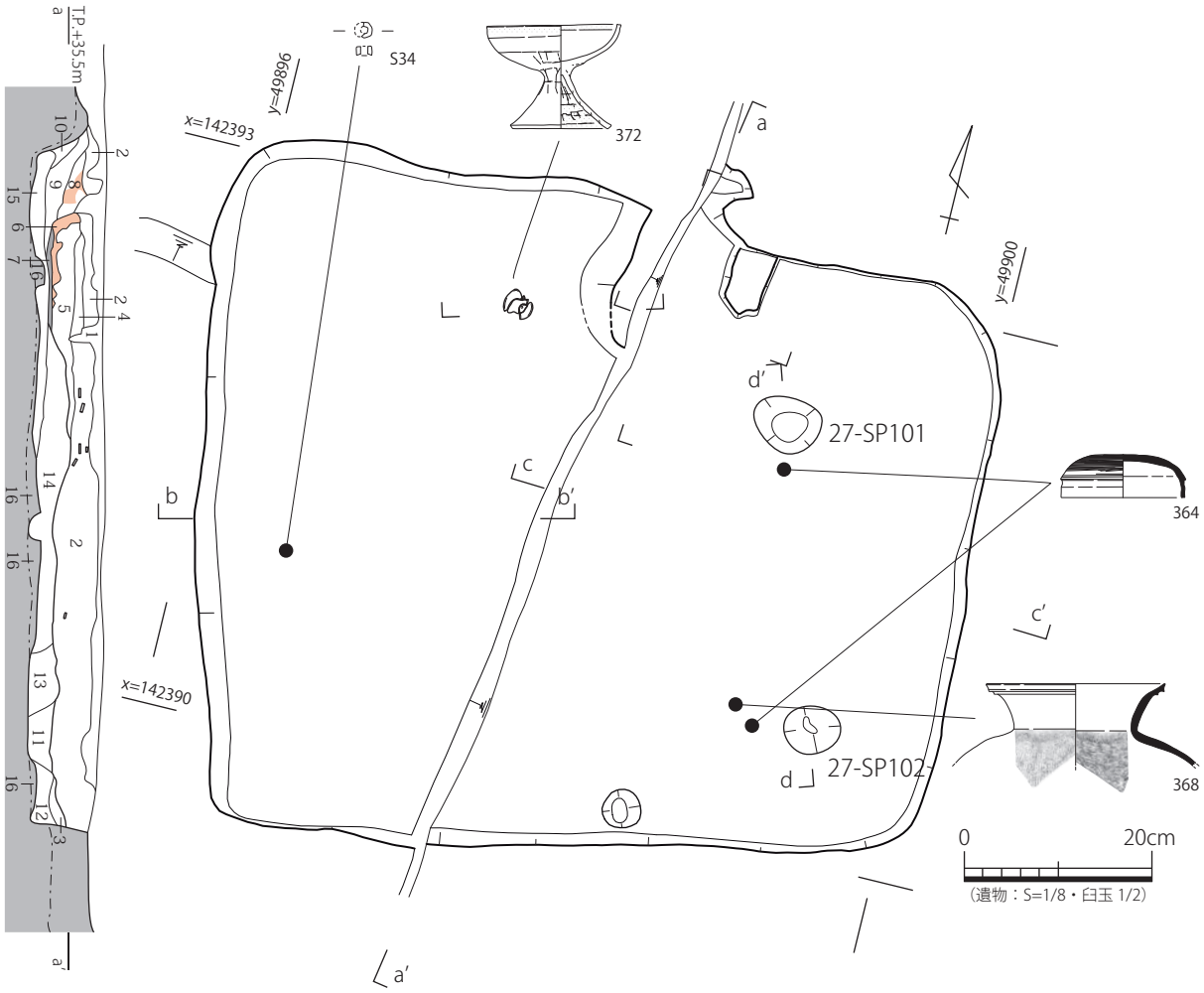
支柱穴は北西側の１基が確認できた。ＳＰ１は円形を呈し、直径約 0.44 m、深さ約 0.27m を測る。断面形状は椀状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方がにぶい黄褐シルトと暗褐シルト～粘土である。

ＳＰ３は円形を呈し、直径約 0.34 m、深さ約 0.15m を測る。断面形状は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方がにぶい黄褐シルトである。ＳＰ４は円形を呈し、直径約 0.26 m、深さ約 0.18m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方がにぶい黄褐シルトである。

14- ＳＤ 70 の切り合い関係や竪穴建物の方位、出土遺物などから、ＴＫ 23 型式併行期と判断できる。

27 ―竪穴 3(図 12 ～ 13)

第 27 調査区中央で検出した竪穴建物である。27- ＳＤ 70 と 27- ＳＫ 17、撹乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、平面形状は方形を呈すると考えられる。第 14 調査区では確認できなかった。主軸方位 N-8°-W、検出面の標高は 35.8m である。規模は､長辺約 4.5m 以上､短辺約 3.9m 以上、



1　2.5Y4/3 オリーブ褐　細砂　炭化物多量含む　土器片含む
2　10YR2/3 黒褐　粘質シルト　炭化物多量含む　土器片含む
3　10YR3/4 暗褐　細砂～シルト
4　10YR3/2 黒褐　シルト
5　10YR3/2 黒褐　シルト　地山ブロック 5%　炭化物少量含む　土器片含む
6　5YR3/6 暗赤褐　シルト
7　5YR2/1 黒褐　粘土…炭層
8　5YR3/6 暗赤褐　シルト
9　10YR3/3 暗褐　シルト　地山ブロック 3%
10　10YR3/4 暗褐　シルト　地山ブロック 5%
11　10YR3/2 黒褐　粘質シルト　炭化物含む　土器片含む
12　10YR3/3 暗褐　細砂
13　10YR3/4 暗褐　粘質シルト　地山ブロック斑状に 10%　炭化物含む
14　10YR2/3 黒褐　粘質シルト　地山ブロック 3%　土器片含む
15　10YR3/2 黒褐　細砂～シルト　地山ブロック 10%
16　10YR3/3 暗褐　細砂…ベース

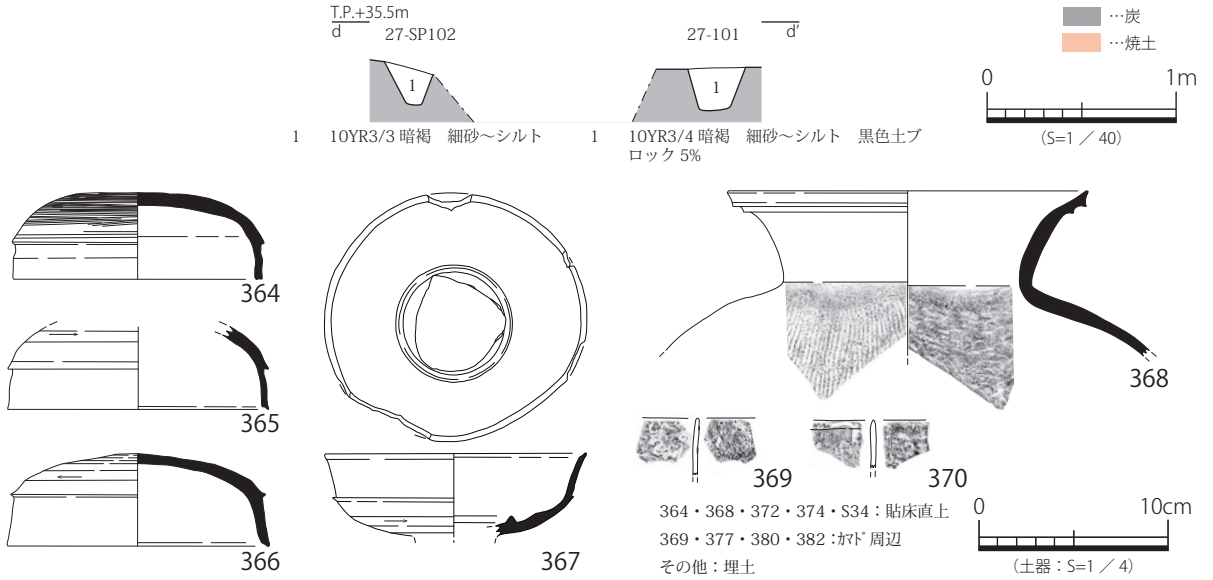
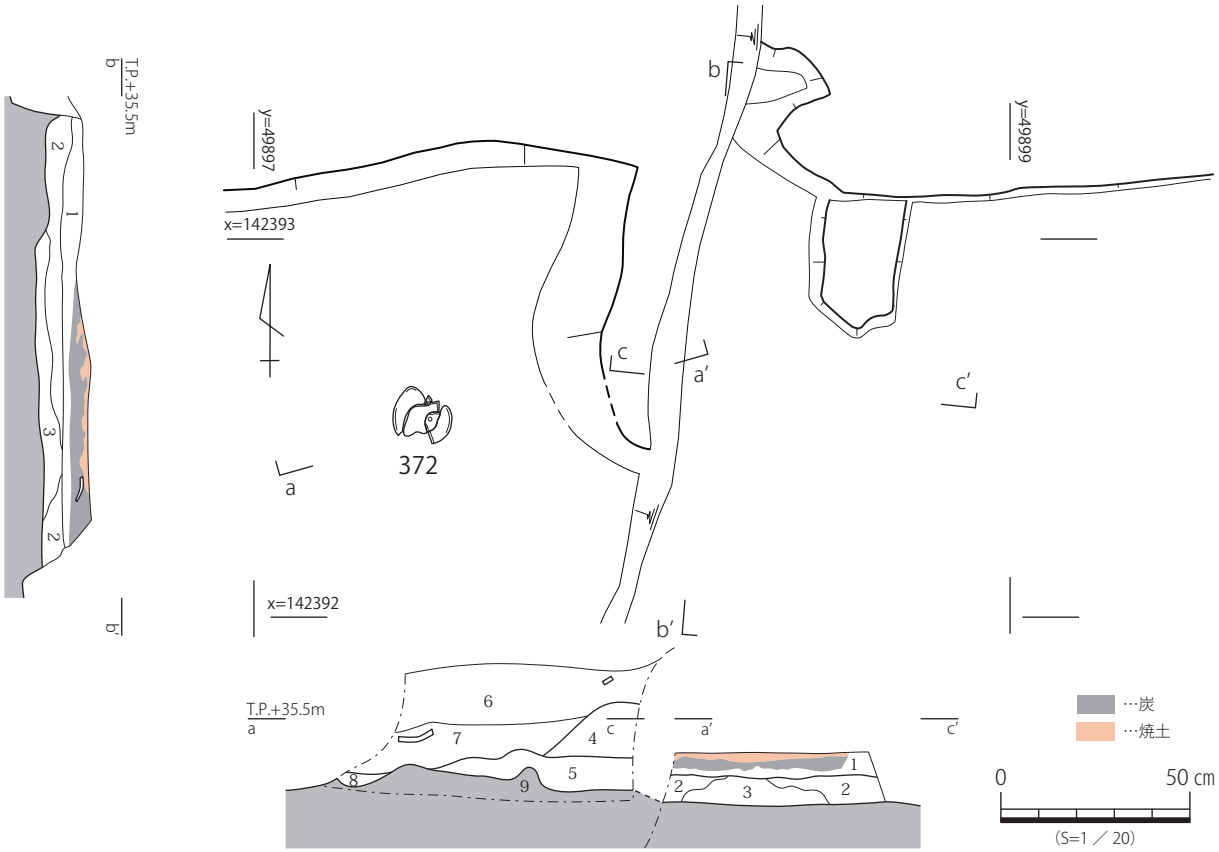


図 6　　14・27- 竪穴 22　平・断面図及び出土遺物実測図（1）



1　10YR3/3 暗褐　中粒砂混じりシルト
2　10YR4/1 褐灰 +10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト
3　10YR3/3 暗褐　中粒砂混じり微細砂～シルト　径 2 ～ 3 ㎝程度の黒褐色粘質シルトブロック 20%　径 1 ～ 3 ㎝程度の灰黄褐色微細砂～シルトブロック 7%
4　7.5YR4/4 褐　シルト
5　10YR3/2 黒褐　細砂～シルト
6　7.5YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト　炭化物・焼土含む　土器片含む
7　10YR2/3 黒褐　細砂～シルト
8　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト　しまりあり
9　10YR3/3 暗褐　粗砂混じりシルト

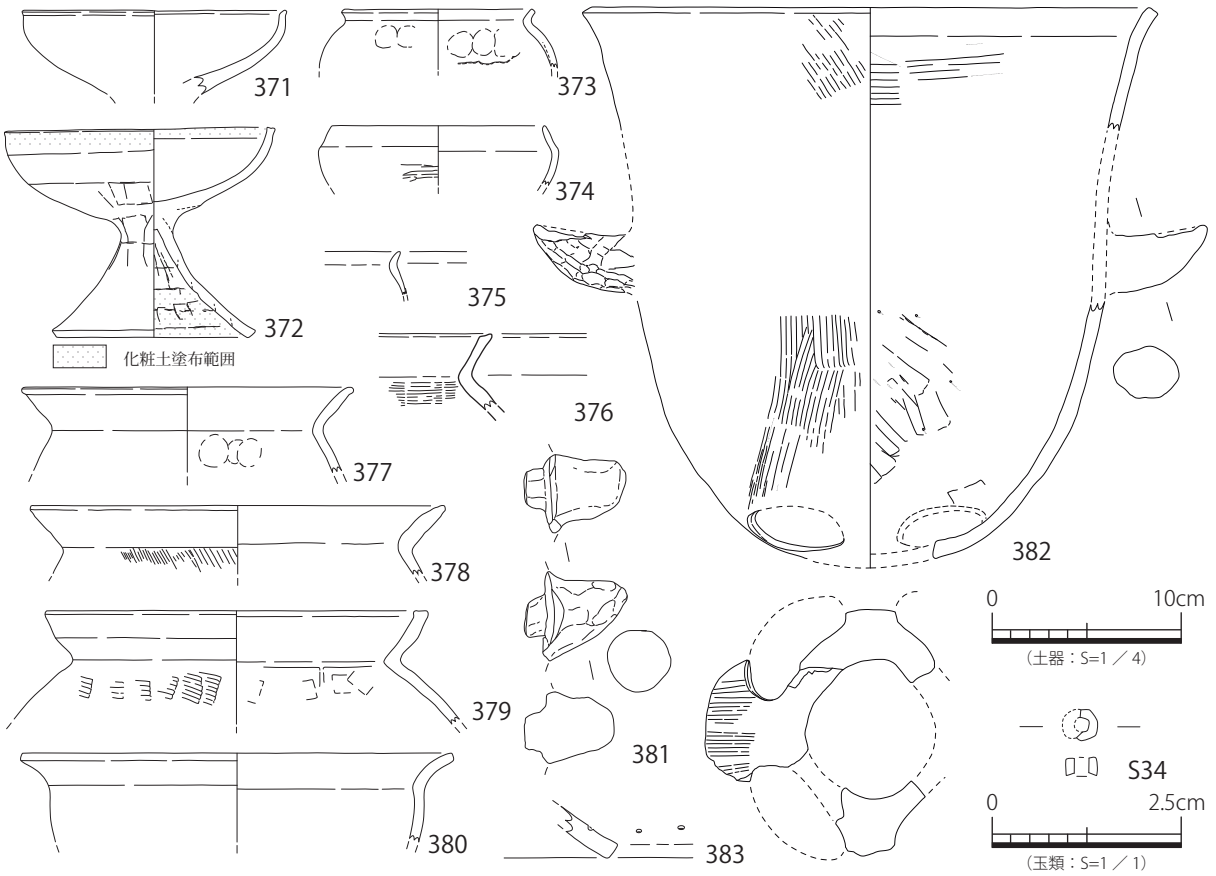


図 7　　14・27- 竪穴 22　カマド及び出土遺物実測図 (2)

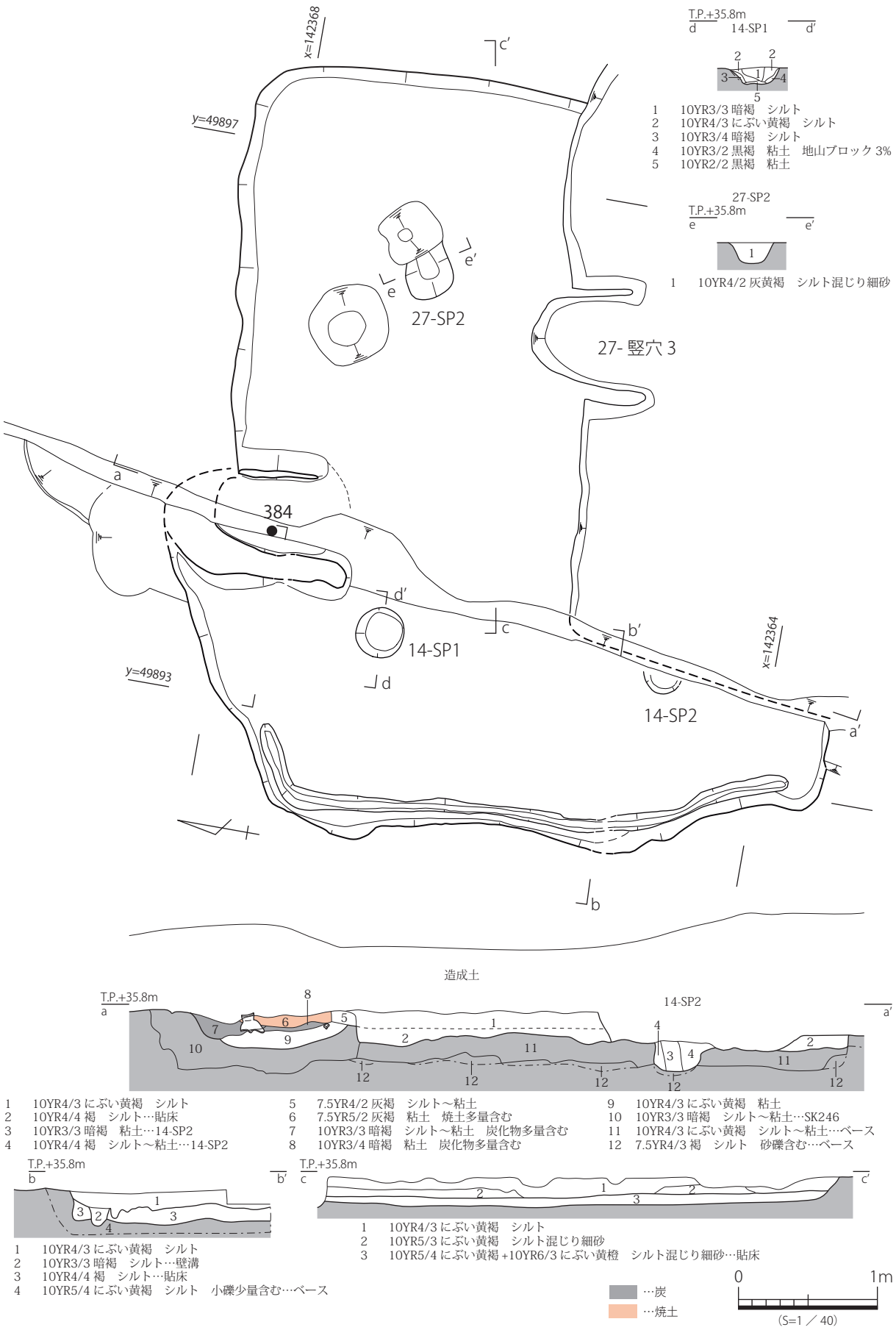


図 8　14・27- 竪穴 20　平・断面図

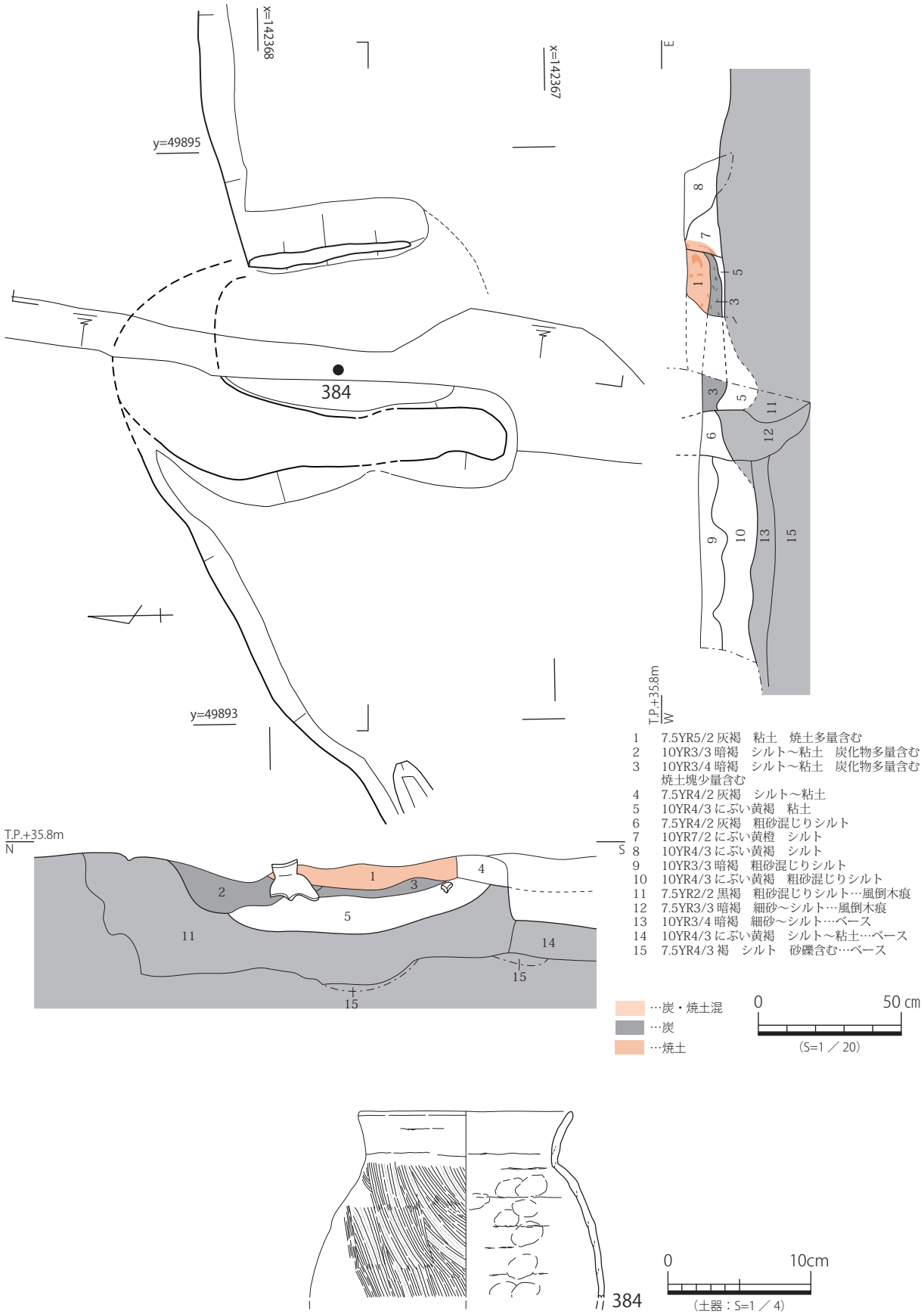
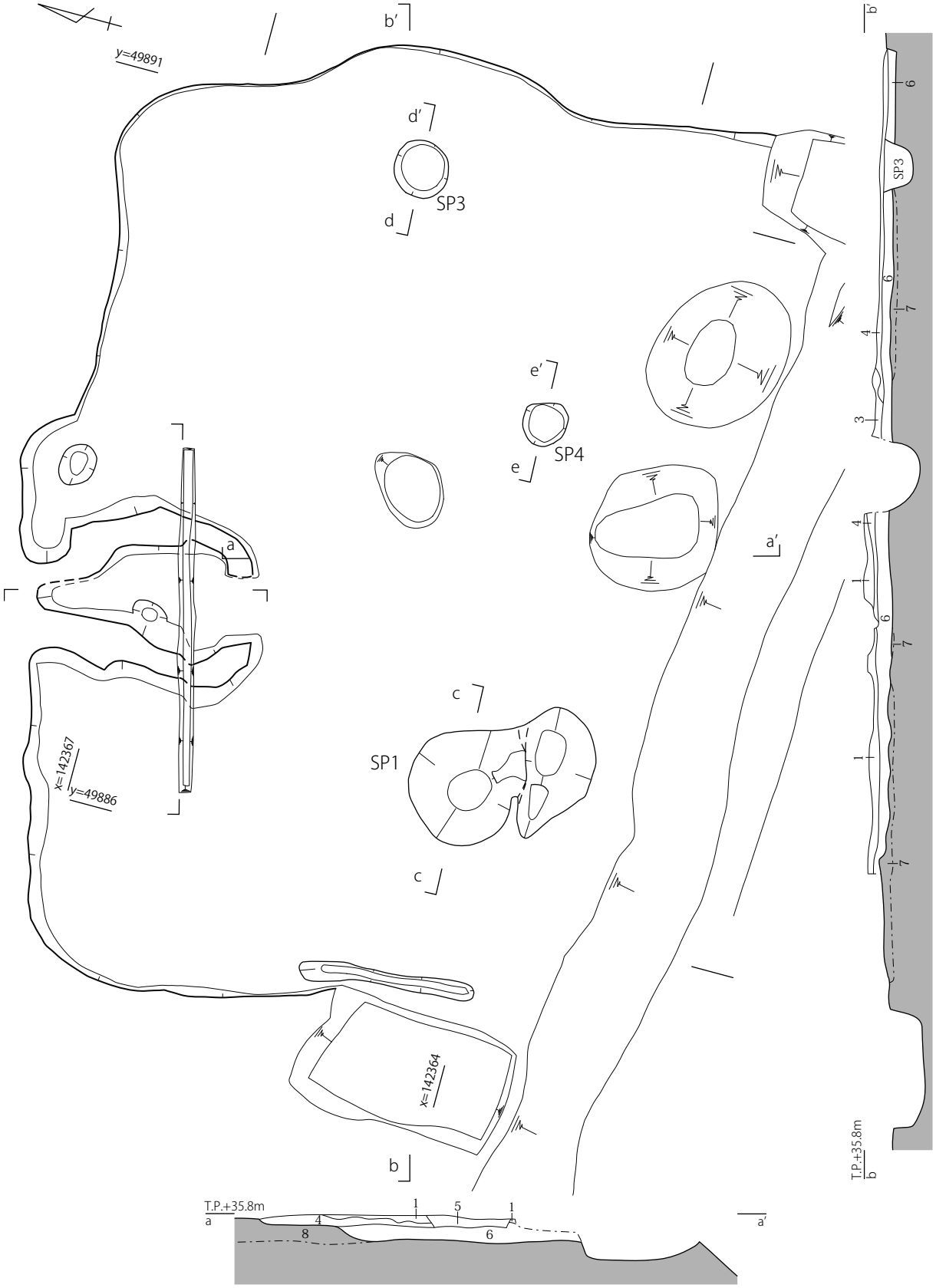


図 9　　14・27- 竪穴 20　カマド及び出土遺物実測図



1　10YR3/2 黒褐　シルト～粘土
2　10YR3/3 暗褐　シルト～粘土
3　10YR3/4 暗褐　シルト～粘土
4　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト～粘土　小礫少量含む…貼床
5　10YR3/3 暗褐　シルト～粘土
6　10YR4/3 にぶい黄褐　極細砂～シルト…貼床
7　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト…ベース
8　10YR5/4 にぶい黄褐　シルト　小礫～砂多量含む…ベース

図 10　14- 竪穴 19　平・断面図

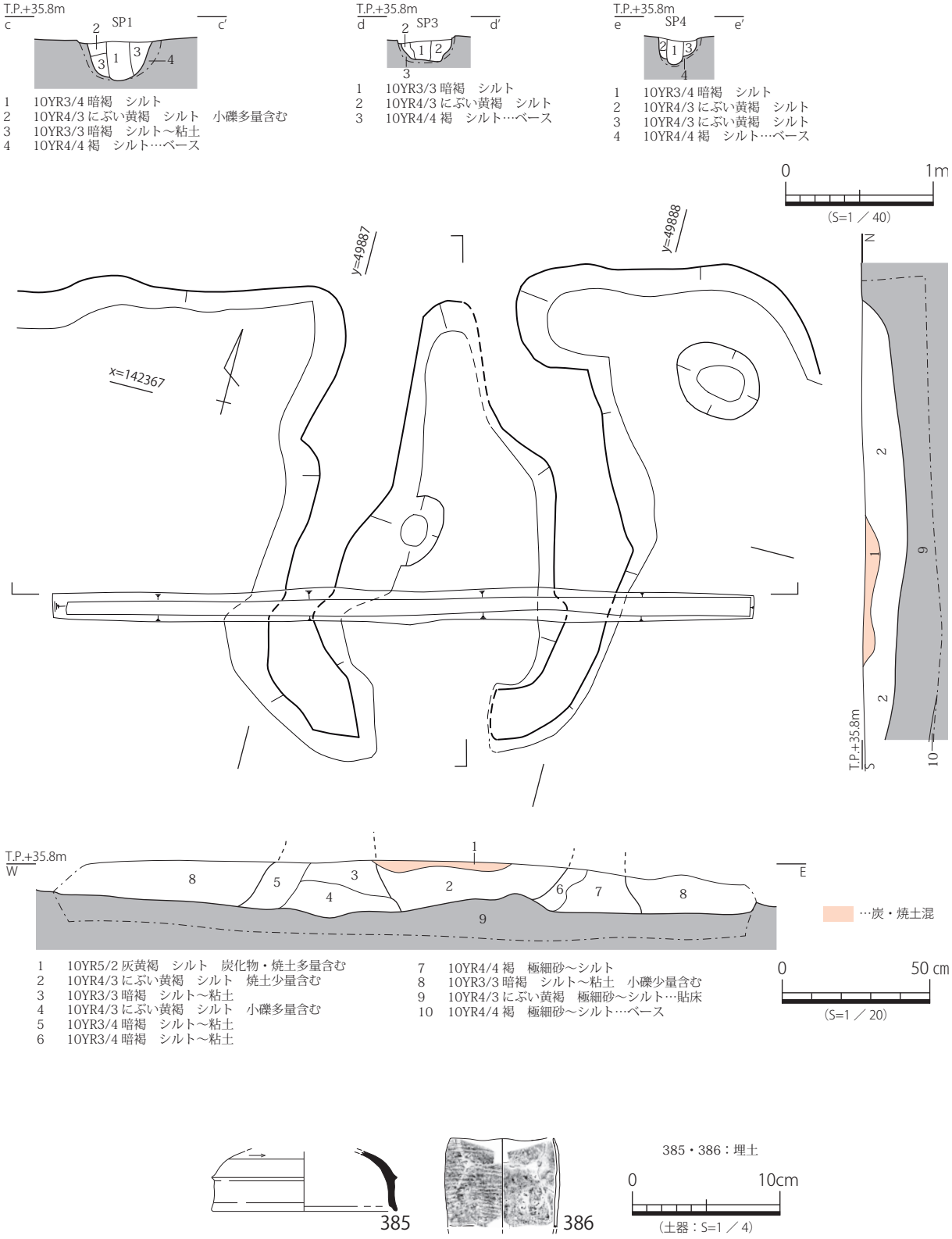
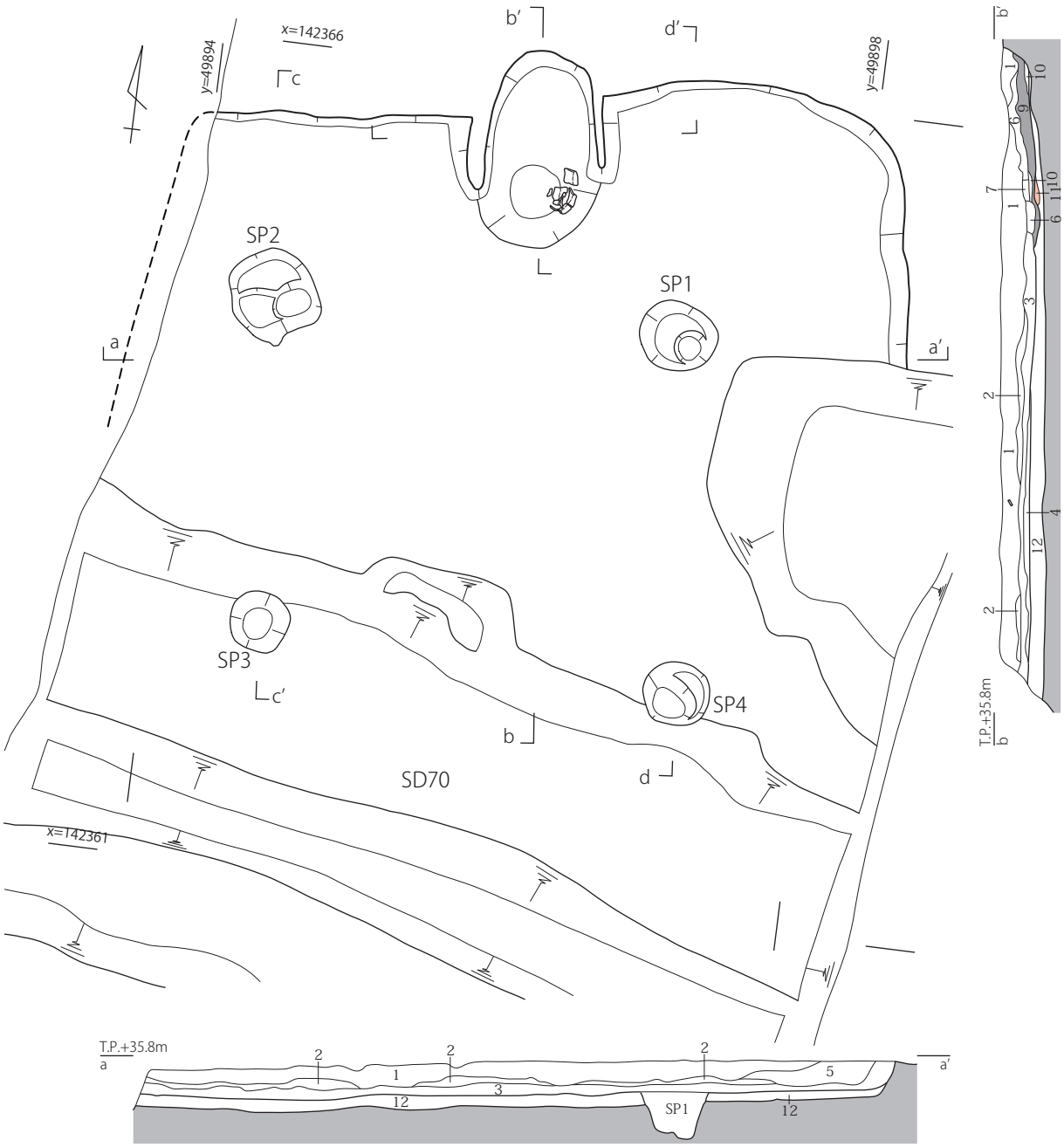
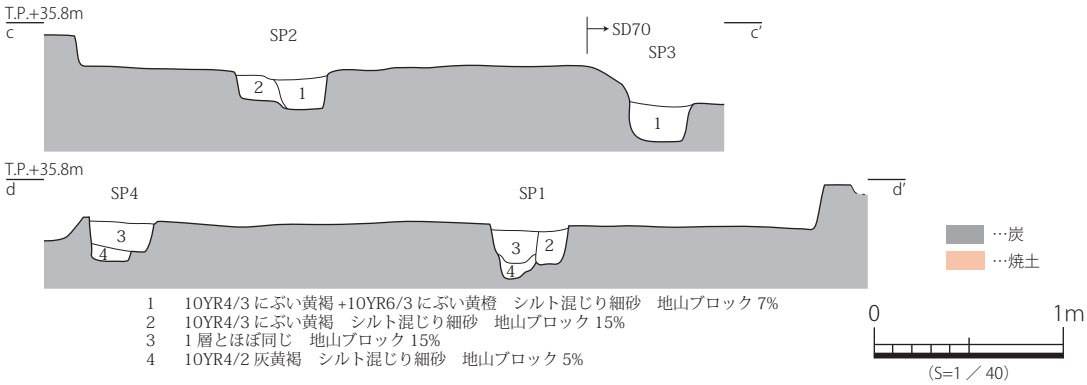


図 11　14- 竪穴 19　カマド及び出土遺物実測図



1　10YR5/3+10YR4/3 にぶい黄褐　シルト混じり細砂　炭化材粒若干含む
2　10YR5/3 にぶい黄褐　シルト混じり細砂
3　10YR4/2 灰黄褐　シルト混じり細砂
4　3 層とほぼ同じ　地山ブロック多量含む
5　10YR5/3 にぶい黄褐 +10YR4/1 褐灰　シルト混じり細砂
6　2.5Y8/2 灰白　シルト　焼土・炭化材粒含む…天井部崩落
7　2.5Y8/2 灰白　シルト + 焼土
8　10YR5/4 にぶい黄褐　シルト混じり細砂　焼土含む
9　10YR4/2 灰黄褐　シルト混じり細砂 + 灰
10　10YR5/2 灰黄褐　シルト混じり細砂
11　焼土
12　10YR7/4 にぶい黄橙　シルト質細砂 +10YR4/3 にぶい黄褐　シルト質極細砂…貼床



1　10YR4/3 にぶい黄褐 +10YR6/3 にぶい黄橙　シルト混じり細砂　地山ブロック 7%
2　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト混じり細砂　地山ブロック 15%
3　1 層とほぼ同じ　地山ブロック 15%
4　10YR4/2 灰黄褐　シルト混じり細砂　地山ブロック 5%

図 12　27- 竪穴 3　平・断面図

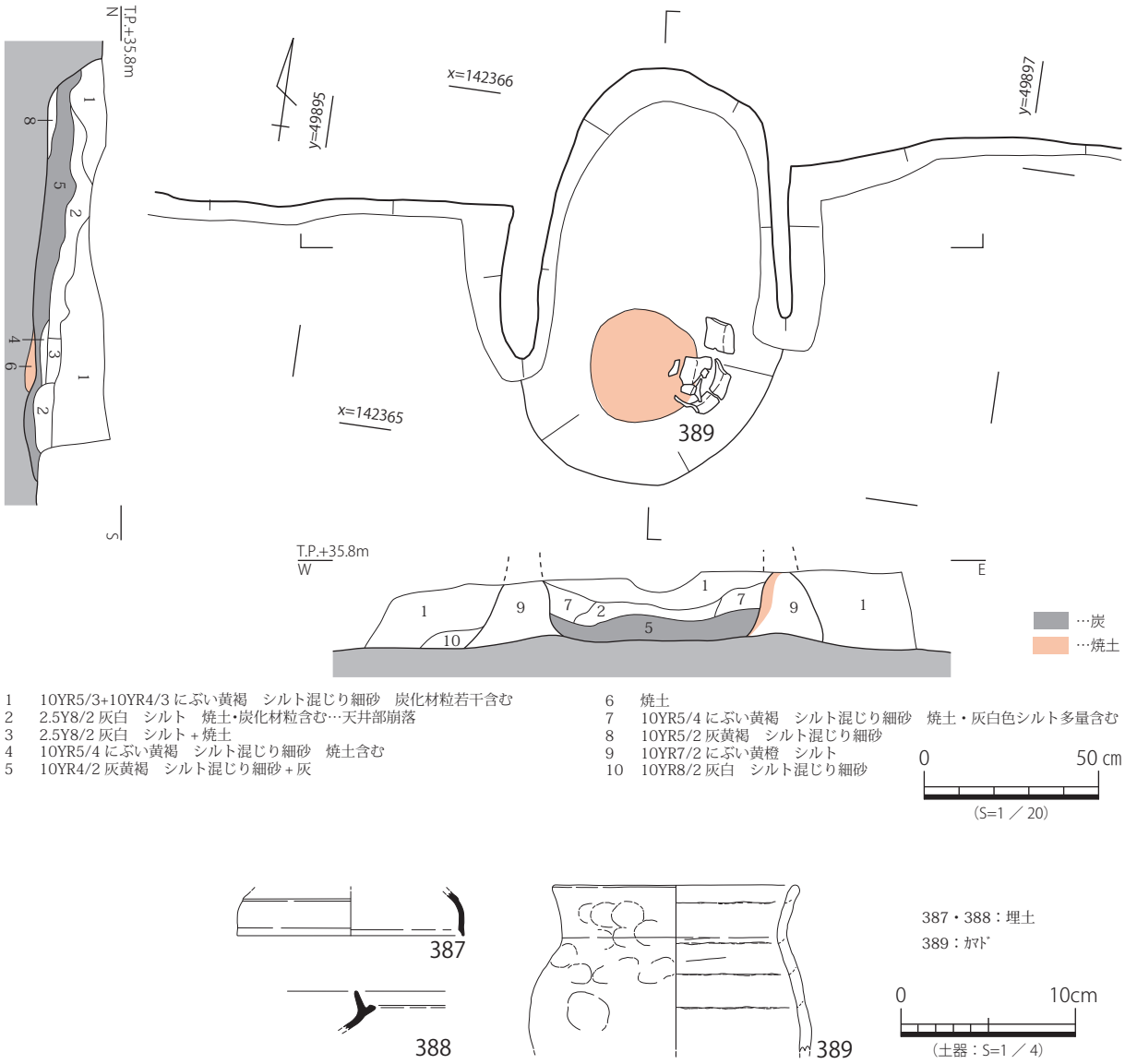


図 13　27- 竪穴 3　カマド及び出土遺物実測図

深さ約 0.30m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと支柱穴 (ＳＰ１～４) を検出した。

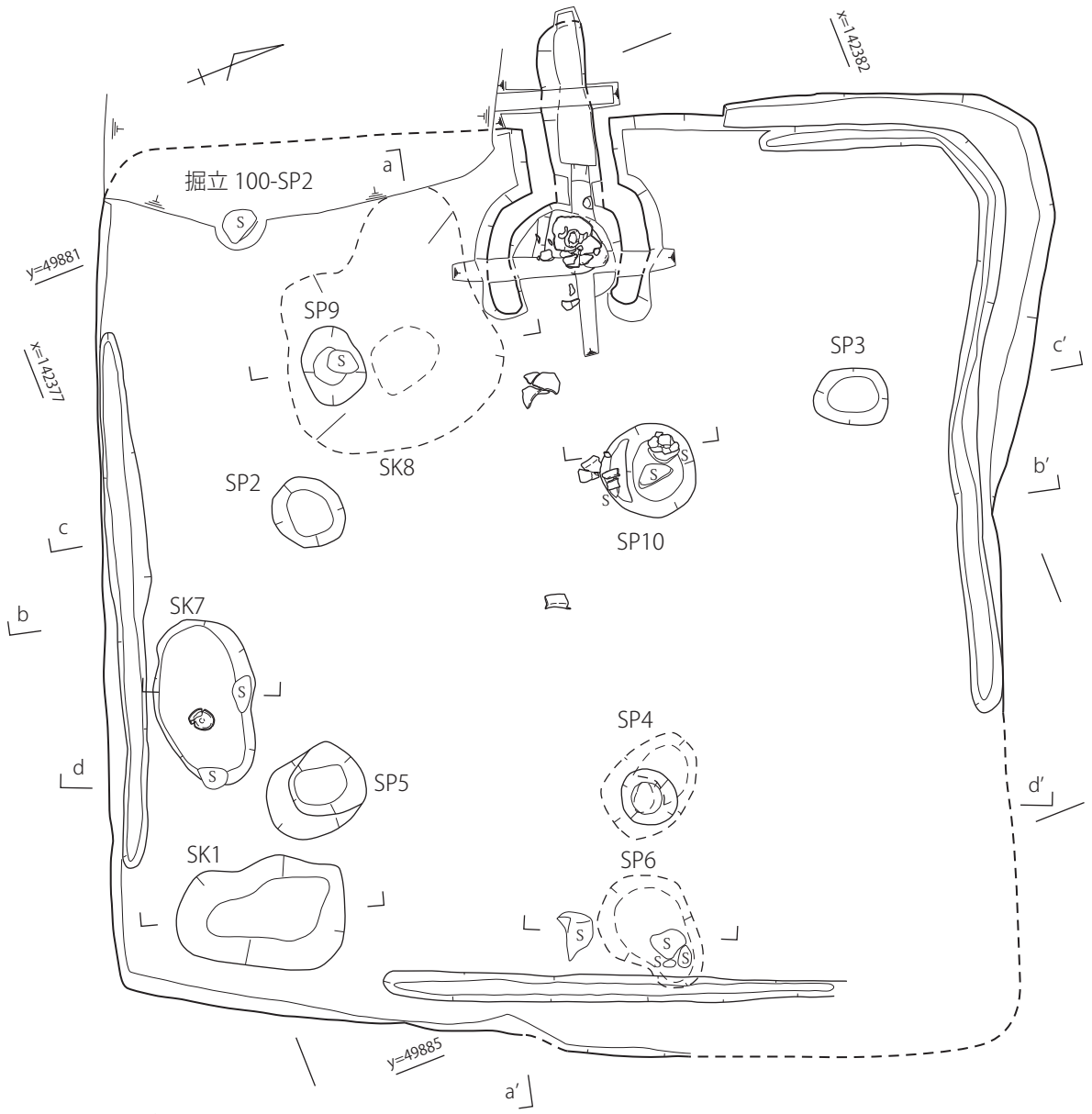
埋土はにぶい黄褐シルト混じり細砂と灰黄褐シルト混じり細砂である。埋土から須恵器杯身 (388)・杯蓋 (387)、須恵器杯身片・杯蓋片・壺片、土師器甕片が出土した。

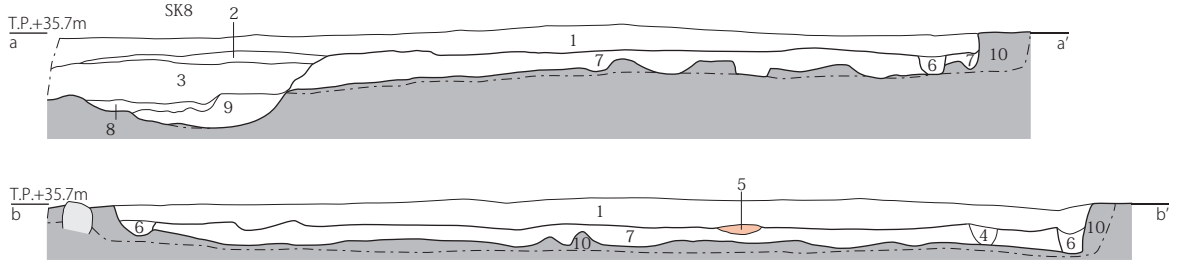
貼床はにぶい黄橙シルト質細砂である。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられる。カマド構築材はにぶい黄橙シルトである。カマド底部には炭化物層が確認でき、機能面と考えられる。遺物は土師器甕 (389) が出土した。図示した遺物の他に、カマドから須恵器壺片が出土した。

支柱穴は 4 基確認できた。ＳＰ１は円形を呈し、直径約 0.42 m、深さ約 0.29m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。埋土はにぶい黄褐シルト混じり細砂と灰黄褐シルト混じり細砂である。ＳＰ２はやや歪な円形を呈し、直径約 0.48 m、深さ約 0.20m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土はにぶい黄褐シルト混じり細砂である。ＳＰ３は円形を呈し、直径約 0.34 m、深さ約 0.18m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土はにぶい黄褐シルト混じり細砂である。ＳＰ４は円形を呈し、直径約 0.34 m、深さ約 0.23m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は上層がにぶい黄褐シルト混じり細砂、下層が灰黄褐シルト混じり細砂である。

14- 竪穴 20 を切り 14- ＳＤ 70 に切られること





1　10YR3/2 黒褐　細礫混じりシルト　炭化物含む　土器片含む
2　10YR3/3 暗褐　細礫混じりシルト
3　10YR3/3 暗褐　シルト　地山ブロック 5%　炭化物含む
4　10YR3/3 暗褐　シルト
5　5YR3/6 暗赤褐　シルト…焼土層
6　10YR3/3 暗褐　礫混じりシルト…周壁溝
7　10YR3/3 暗褐　細礫混じりシルト　地山ブロック斑状に 3%　炭化物含む…貼床
8　10YR3/4 暗褐　シルト…SK8
9　10YR4/4 褐　シルト…SK8
10　10YR4/4 褐　細砂～シルト…ベース

…焼土

0　1m
（S=1／40）

図 14　14- 竪穴 4　平・断面図

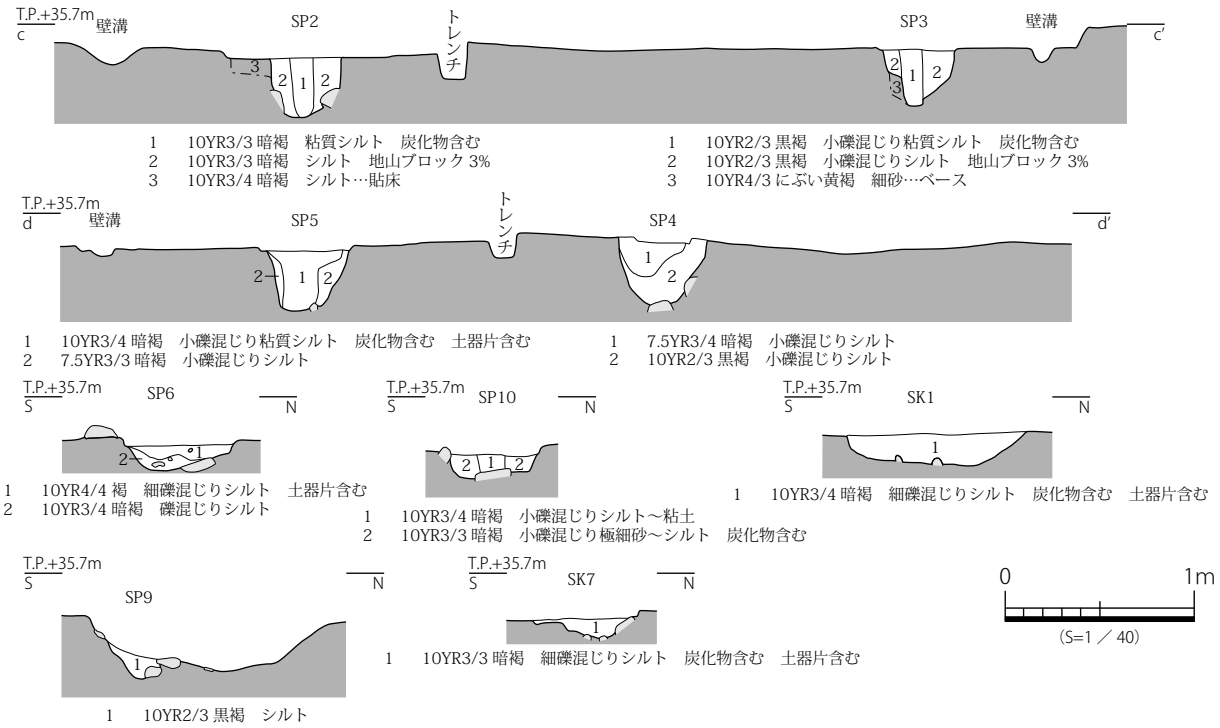


図 15　14- 竪穴 4　断面図

から、ＴＫ 23 型式併行期と判断できる。

14 －竪穴 4 (図 14 ～ 17)

第 14 調査区中央南側で検出した竪穴建物である。平面形状は方形を呈する。主軸方位 N-72° -W、検出面の標高は 35.7m である。規模は、長辺約 5.50m、短辺約 5.20m、深さ約 0.50m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (ＳＰ３・５・２)、土坑 (ＳＫ１・７・８)、ピット (ＳＰ４・６・９・10) を検出した。

埋土は黒褐細礫混じりシルトで、遺物は須恵器杯身 (393・395)・杯蓋 (391・392)・瓹 (398)、土師器杯 (401・402)・高杯 (403)、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片、土師器甑片・甕片・高杯片・壺片、製塩土器片、粘土塊が出土した。また北東埋土から須恵器無蓋高杯 (399) や瓹 (397) や器台片 (400) など古相を示す土器も出土している。

貼床は暗褐細礫混じりシルトで、貼床直上からは須恵器甕 (396)・杯身 (394)、土師器甕 (409)・甑 (405)、須恵器杯身片・杯蓋片が出土した。

カマドは西側中央に作り付けられ、煙道が延びる。カマド構築材は、にぶい褐細礫混じりシルト～粘土と粗砂混じりシルト～粘土である。カマド中央は掘窪め、支脚石を配置する。カマド内部には、土器のほか焼土や炭化物を多量に含む堆積が確認でき、カマド上部構造の崩落土と考えられる。遺物はカマド内部から土師器甑 (406・407)・小型丸底壺 (404)、須恵器高杯片、土師器甕片・甑片が出土した。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.15 m、深さ約 0.14m、埋土は暗褐礫混じりシルトである。

支柱穴は３基確認できたが、歪な配置となる。東南側の支柱穴は確認できなかった。ＳＰ３は楕円形を呈し、長径約 0.38 m、短径約 0.32 m、深さ約 0.31m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐小礫混じり粘質シルト、掘方が黒褐小礫混じりシルトである。ＳＰ５は楕円形を呈し、直径約 0.44 m、短径約 0.47 m、深さ約 0.34m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐小礫混じり粘質シルト、掘方が暗褐小礫混じりシルトである。遺物は製塩土器片が出土した。ＳＰ２は円形を呈し、直径約 0.41 m、深さ約 0.32m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐粘質シルト、掘方が暗褐シルトである。

ＳＫ１は南東隅で検出した、やや歪な隅丸方形の土坑である。長軸約 0.97 m、短軸約 0.61 m、深さ約 0.17m を測る。断面形状は逆台形を呈する。

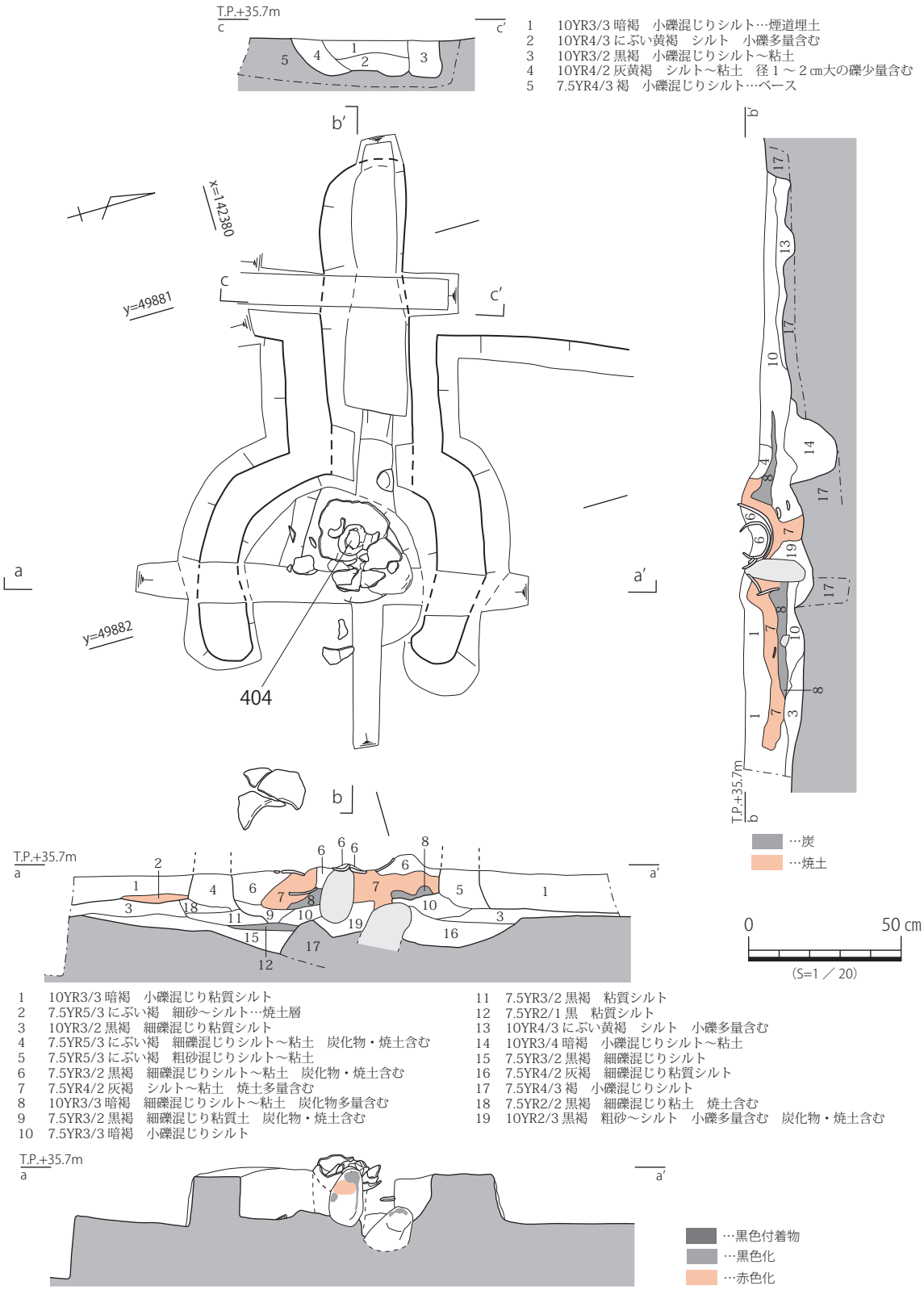


図 16　14- 竪穴 4　カマド

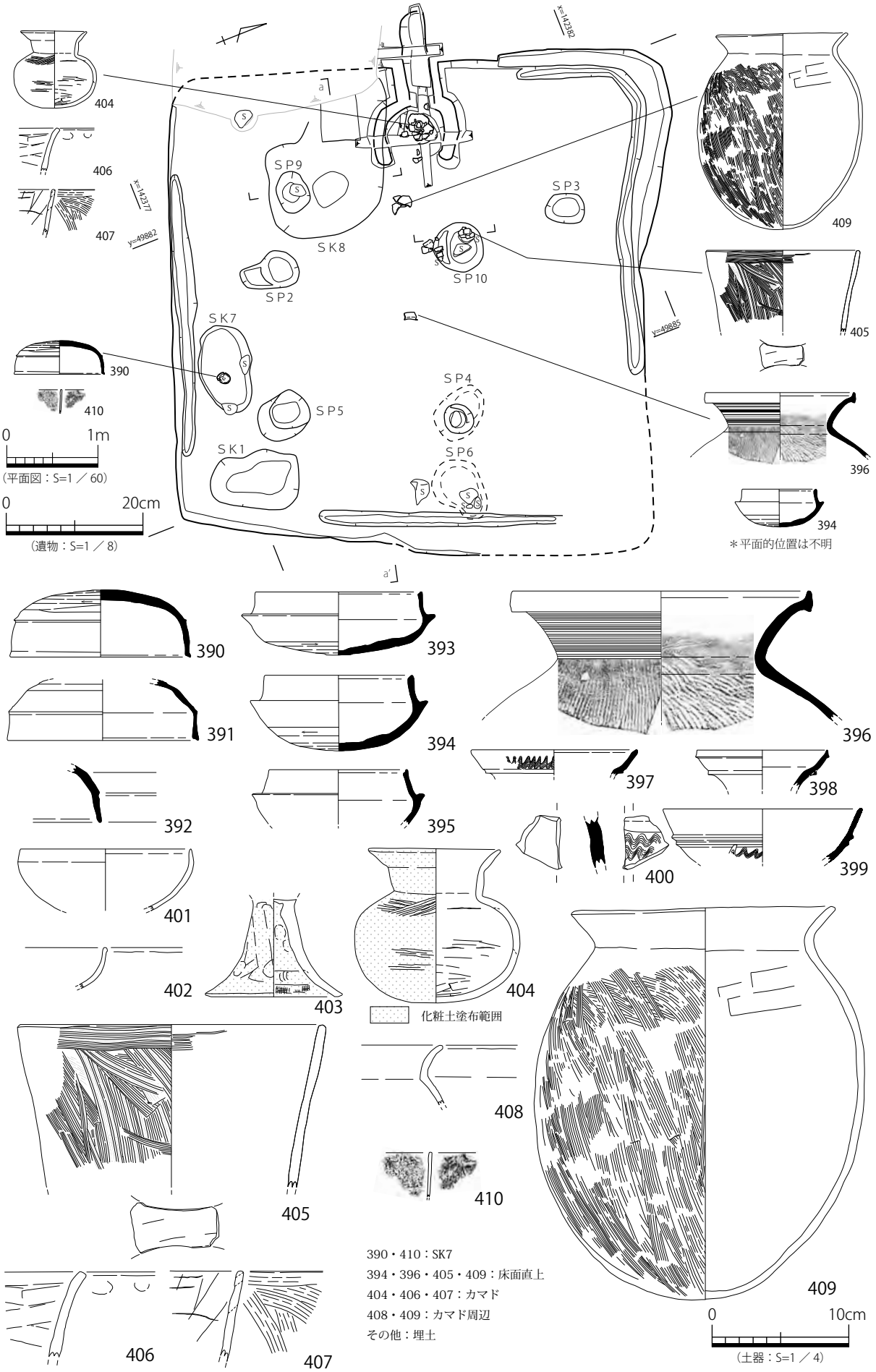


図 17　14- 竪穴 4　床面遺物出土状況及び出土遺物実測図

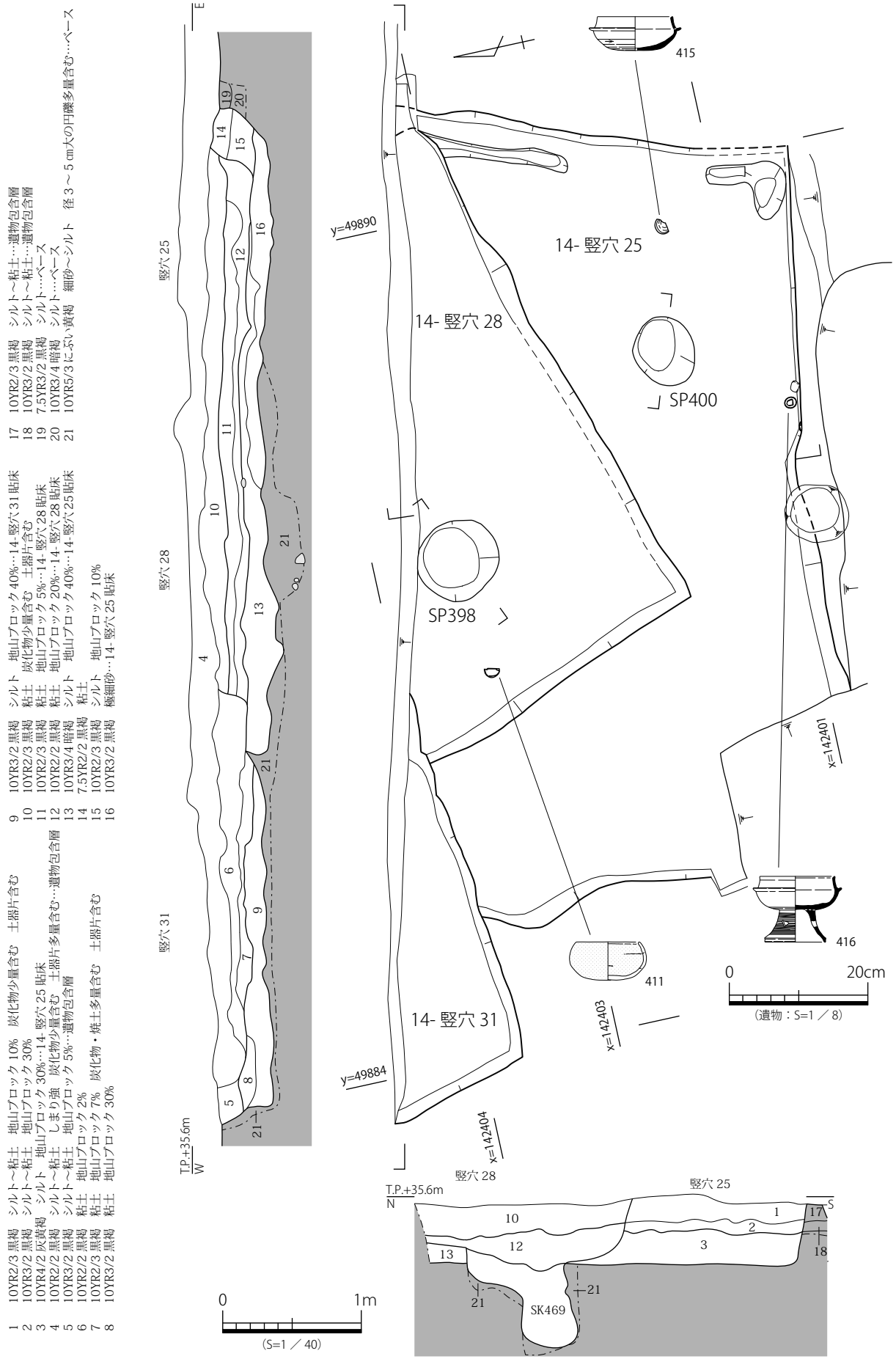
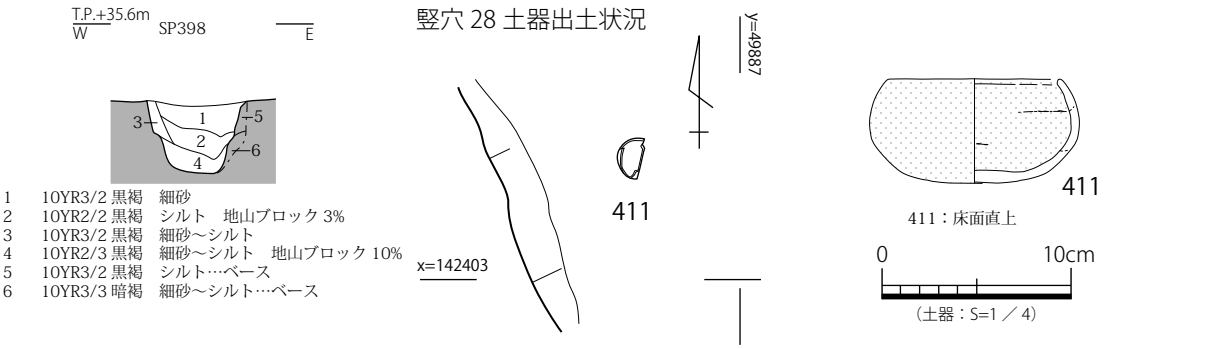


図 18　14- 竪穴 25・28・31　平・断面図

14- 竪穴 28



14- 竪穴 25

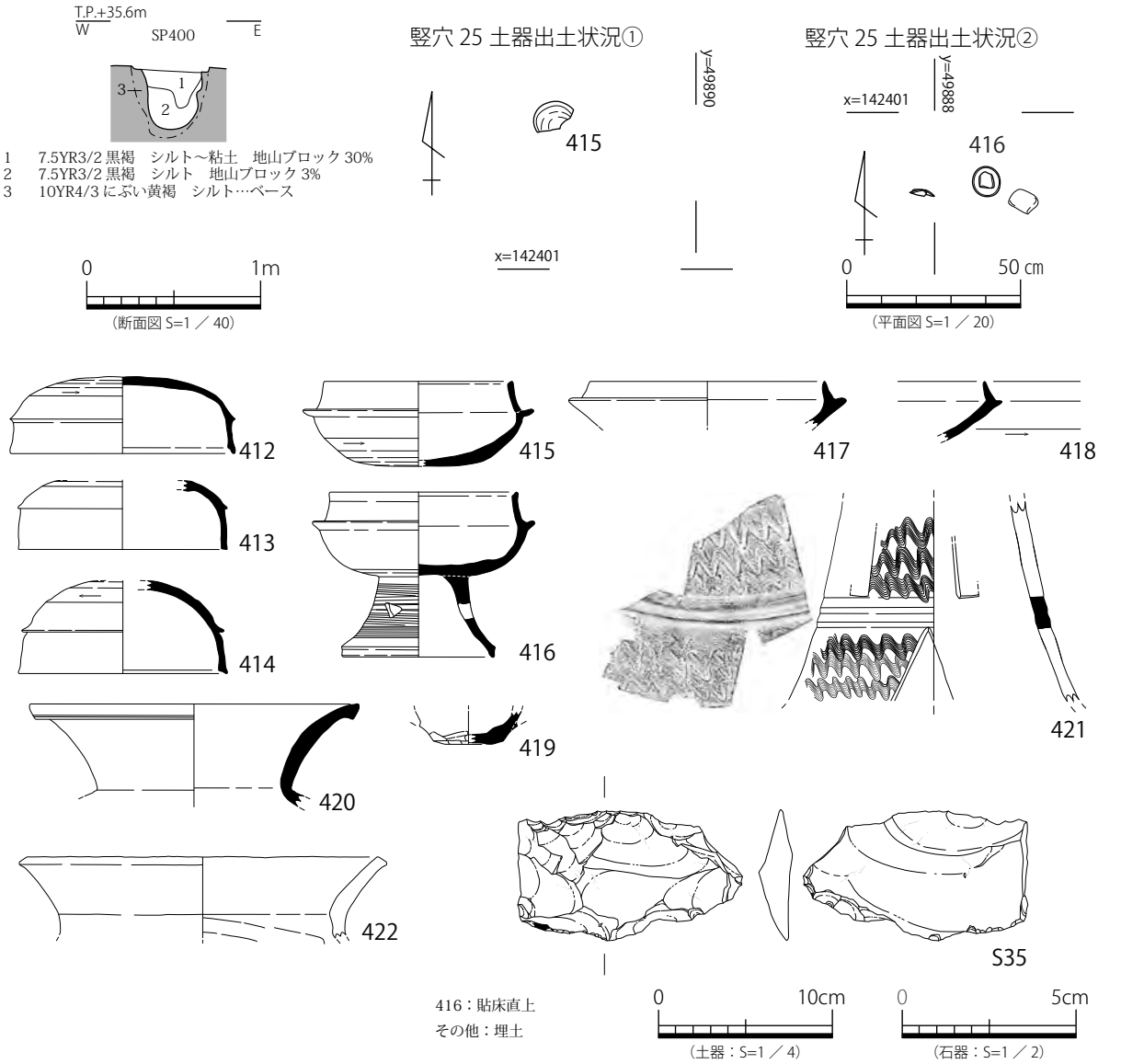


図 19　14- 竪穴 25・28　断面図及び出土遺物実測図

埋土は単層で暗褐細礫混じりシルトである。遺物は製塩土器片が出土した。

ＳＫ７は中央南隅で検出した楕円形を呈する土坑である。長軸約 0.97m、短軸約 0.58 m、深さ約 0.10m を測る。断面形状は不整形である。埋土は単層で暗褐細礫混じりシルトである。遺物は須恵器杯蓋 (390)、製塩土器片 (410)、土師器高杯片・甕片が出土した。

ＳＫ８は南西側で検出した、不整形な土坑である。撹乱に切られるため、全体の形状は不明である。残存長軸約 1.25 m、幅約 1.02 m、深さ約 0.30m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は４層に分層でき、上層が暗褐細礫混じりシルト、中層が暗褐シルト、下層が暗褐シルトと褐シルトである。遺物は出土していない。

ＳＰ４は円形を呈し、直径約 0.46 m、深さ約 0.35m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。埋土は暗褐小礫混じりシルトと黒褐小礫混じりシルトである。ＳＰ６は楕円形を呈し、長径約 0.57m、短径約 0.54 m、深さ約 0.17m を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は褐細礫混じりシルトと暗褐礫混じりシルトである。遺物は土師器甑片・甕片が出土した。ＳＰ９はＳＫ８に切られるため、全体の形状は不明であるが、円形を呈すると考えられる。直径約 0.27 m、深さ約 0.20m を測る。断面形状は不整形である。埋土は黒褐シルトである。ＳＰ 10 は円形を呈し、直径約 0.46 m、深さ約 0.13m を測る。断面形状は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐小礫混じりシルト～粘土、掘方が暗褐小礫混じり極細砂～シルトである。遺物は出土していない。

埋土からはやや古相を示す土器も出土しているが、床面出土の年代からＴＫ 23 ～ＭＴ 15 型式併行期と判断できる。

14 －竪穴 25(図 18 ～ 19)

第 14 調査区北側で検出した竪穴建物である。14- 竪穴 28・29・31 に切られ、調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-8°-E、検出面の標高は 35.6m である。規模は、長辺約 5.40m、短辺約 3.2m 以上、深さ約 0.50m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、周壁溝と支柱穴 (ＳＰ 400) を検出した。

埋土は地山ブロック土を含む黒褐シルト～粘土である。遺物は埋土から、須恵器杯身 (415・417・418)・杯蓋 (412・413・414)・把手付椀 (419)・甕 (420)・器台 (421)、土師器甕 (422)、微細剥離痕のある剥片 (S35)、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片・甕片・壺片・甑片、土師器甕片・高杯片・壺片、製塩土器片、サヌカイト製の剥片が出土した。

貼床は灰黄褐シルトである。南端の床面直上から須恵器高杯 (416) が正位で出土した。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.10 m、深さ約 0.11m を測る。

支柱穴は１基確認でき、ＳＰ 400 は円形を呈し、直径約 0.35 m、深さ約 0.36m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。埋土は上層が黒褐シルト～粘土、下層が黒褐シルトである。

出土遺物の年代から、ＴＫ 23 ～ＭＴ 15 型式並行期と判断できる。

14 －竪穴 28(図 18 ～ 19)

第 14 調査区北側で検出した竪穴建物の可能性がある遺構である。14- 竪穴 31 に切られ、調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-18°-W、検出面の標高は 35.55m である。規模は、長辺約 4.30m、短辺約 2.4m 以上、深さ約 0.60m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、ＳＰ 398 を検出した。

埋土は黒褐粘土である。遺物は製塩土器片が出土した。

貼床は地山ブロック土を含む黒褐粘土である。遺物は床面直上から土師器杯 (411) が出土した。

ＳＰ 398 は円形を呈するピットである。直径約 0.52 m、深さ約 0.39m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。埋土は上層が黒褐細砂と黒褐シルト、下層が黒褐細砂～シルトである。

出土遺物の年代と切り合い関係から古墳時代後期前半以降と判断できる。

14 －竪穴 31(図 18)

第 14 調査区北側で検出した竪穴建物の可能性のある遺構である。14- 竪穴 25・28 を切り、調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-10°-W、検出面の標高は 35.4m である。規模は、長辺約 2.4m 以上、短辺約 1.0m 以上、深さ約 0.35m を測る。

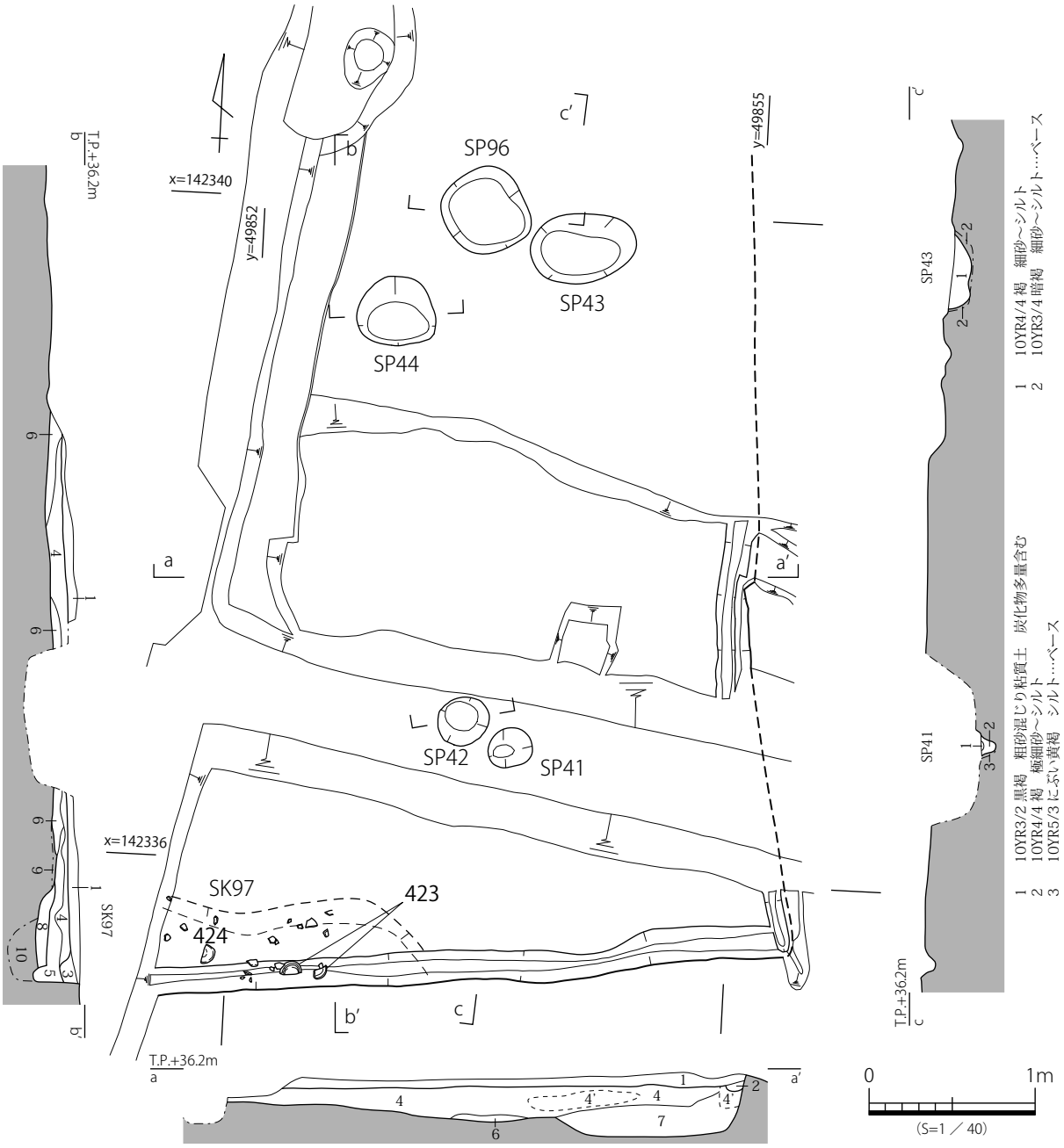


図 20　14- 竪穴 40　平・断面図及び出土遺物実測図

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行ったが、竪穴建物に付属する遺構は確認できなかった。

埋土は黒褐粘土である。図示できなかったが、埋土から須恵器高杯片が出土した。

貼床は地山ブロック土を含む黒褐粘土と黒褐シルトである。

時期は古墳時代後期頃としておく。

14 －竪穴 40(図 20)

第 14 調査区南西側で検出した竪穴建物である。竪穴建物北側は後世に削平を受け、検出面が下がる。また撹乱に切られ、調査区外へと広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-84°-E、検出面の標高は 36.15m である。規模は、長辺約 4.3m 以上、短辺約 4.0m 以上、深さ約 0.25m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、周壁溝と支柱穴の可能性があるピット（ＳＰ 41・42)、ピット（ＳＰ 43・44・96) を検出した。

埋土はにぶい黄褐粗砂混じりシルトで、遺物は須恵器杯身片・杯蓋片・壺片、土師器高杯片が出土した。

貼床は、灰黄褐粗砂混じりシルトと褐細砂～シルト、にぶい黄褐粗砂混じりシルトである。遺物は床面直上で須恵器杯身 (423・424) が出土した。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.20 m、深さ約 0.09m を測る。埋土は黒褐粗砂混じり粘質土と黒褐粗砂混じりシルトである。

ＳＰ 41 は円形を呈し、直径約 0.16 m、深さ約 0.12m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐粗砂混じり粘質土、掘方が褐極細砂～シルトである。ＳＰ 42 は円形を呈し、直径約 0.24 m、深さ約 0.12m を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。柱痕が確認でき、埋土はにぶい黄褐礫混じりシルト、掘方が褐細砂～シルトと暗褐細砂～シルトである。

出土遺物の年代からＴＫ 47 型式併行期と判断できる。

14 －竪穴 26(図 21 ～ 22)

第 14 調査区中央北側で検出した竪穴建物である。14- 竪穴 29・12 に切られる。主軸方位 N-10°-E、検出面の標高は 35.6 ～ 35.5m である。平面形状は方形である。規模は、長辺約 6.40m、短辺約 6.40m、深さ約 0.40m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、周壁溝、支柱穴（ＳＰ１・３～５)、ピット（ＳＰ２) を検出した。

埋土は黒褐細砂混じりシルト～粘土と暗褐シルト混じり細砂である。埋土から土師器甕 (425)、砥石 (S36)、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片・壺片、土師器甕片が出土した。

貼床は褐細砂とにぶい黄細砂～シルトである。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.12 m、深さ約 0.09m を測る。埋土は黒褐細砂混じりシルト～粘土と黒褐シルト～粘土である。

支柱穴は 4 基確認できた。ＳＰ１は円形を呈し、直径約 0.39 m、深さ約 0.40m を測る。断面形状はＶ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト～粘土、掘方が灰黄褐シルトである。ＳＰ３は円形を呈し、直径約 0.32 m、深さ約 0.51m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト～粘土と黒褐シルト、掘方が暗褐シルトである。ＳＰ４は楕円形を呈し、直径約 0.50 m、深さ約 0.38m を測る。断面形状はＶ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘方が地山ブロック土を含む黒褐シルトとにぶい黄褐極細砂～シルトである。ＳＰ５はやや歪な円形を呈し、直径約 0.26 m、深さ約 0.33m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。埋土は上層が黒褐粘土、下層が黒褐シルト～粘土である。

ＳＰ２は円形を呈し、直径約 0.41 m、深さ約 0.15m を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は単層で暗褐シルトである。

14- 竪穴 12・14- 竪穴 29 との切り合い関係や竪穴建物の方位、出土遺物の年代から古墳時代中期後半～後期前半と推定できる。

27 －竪穴 1(図 23 ～ 24)

第 27 調査区北東隅で検出した竪穴建物である。撹乱に切られ、調査区外へ広がるため、全体の形状は不明であるが、方形を呈すると考えられる。主軸方位 N-7°-E、検出面の標高は 35.5m である。規模は、長辺約 4.9m 以上、短辺約 3.5m 以上、深さ約 0.25m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴（ＳＰ１・２)、ピット（ＳＰ３) を検出した。

埋土は、にぶい黄褐粘質シルトと灰黄褐粘質シルトである。埋土から須恵器杯蓋 (426)・高杯 (428)、

須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片、土師器甕片・高杯片・壺片、製塩土器片が出土した。

貼床はにぶい黄橙シルトである。遺物は床面直上から須恵器杯身 (427)・高杯 (429)、土師器鍋 (430) が出土した。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられ、カマド内部は掘窪める。カマド構築材は黒褐シルトである。カマド内部には炭化物や焼土塊を含む堆積が確認できた。カマドの上部構造の崩落土と考えられる。遺物はカマド内部から土師器甕片が出土した。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.20 m、深さ約 0.04m を測る。埋土は灰黄褐粘質シルトである。

支柱穴は西側の２基が確認できた。ＳＰ１は楕円形を呈し、長径約 0.44 m、短径約 0.38m、深さ約 0.31m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。埋土は黒褐微細砂～シルトと灰黄褐粗砂混じりシルトである。ＳＰ２は円形を呈し、直径約 0.32 m、深さ約 0.24m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は単層で黒褐微細砂～シルトである。

ＳＰ３は円形を呈し、直径約 0.44 m、深さ約 0.18m を測る。断面形状は皿状を呈する。埋土は上層が黒褐細砂～シルト、下層がにぶい黄褐小礫混じり細砂～シルトである。遺物は土師器鍋 (430) が出土し、貼床直上の遺物と接合した。

出土遺物からＭＴ 15 ～ＴＫ 10 型式併行期と判断できる。

14 －竪穴 5 (図 25 ～ 26)

第 14 調査区中央で検出した竪穴建物である。平面形状はやや歪な方形である。主軸方位 N-14° -E、検出面の標高は 35.8 ～ 35.7m である。規模は、長辺約 4.60m、短辺約 4.40m、深さ約 0.30m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドの一部と周壁溝、支柱穴 (ＳＰ１～４)、土坑 (ＳＫ５) を検出した。

埋土はにぶい黄褐細礫混じり細砂～シルトで、須恵器杯身 (434)・杯蓋 (433)、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片・壺片、土師器甕片・高杯片・製塩土器片が出土した。

貼床は褐礫混じり細砂である。遺物は床面直上から須恵器杯身 (435)・杯蓋 (431)、土師器甕 (436)、その他図示した遺物の他に、土師器甕片が出土した。また貼床内から須恵器瑳片が出土した。

カマドは竪穴建物北側中央で基部の一部が確認できたが、カマド袖は削平により確認できなかった。カマド内部には、炭化物と焼土を多量に含む暗赤褐粘質シルト層が確認できた。カマド機能時の堆積層と考えられる。

周壁溝は西側で確認でき、幅約 0.20 m、深さ約 0.12m を測る。埋土は黒褐粘質シルトである。

支柱穴は４基確認できた。ＳＰ１は円形を呈し、直径約 0.51 m、深さ約 0.24m を測る。断面形状は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい黄褐シルト、掘方がにぶい黄褐シルト混じり細砂～細礫と褐シルトである。ＳＰ２はやや歪んだ円形を呈し、直径約 0.62 m、深さ約 0.38m を測る。断面形状は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細礫混じり粗砂～シルト、掘方の上層が黒褐粗砂混じりシルトと灰褐細礫混じり粗砂～シルト、下層が黒褐細礫混じり細砂～シルトとにぶい黄褐粗砂～シルトである。遺物は土師器甕片が出土した。ＳＰ３は楕円形を呈し、長径約 0.52 m、短径約 0.52 m、深さ約 0.36m を測る。断面形状は歪な逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐粗砂～シルト、掘方上層が黒褐細礫混じり粗砂～シルト、下層が黒褐粗砂混じりシルトと黒褐細礫混じり細砂～シルトである。ＳＰ４は円形を呈し、直径約 0.55 m、深さ約 0.32m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい黄褐中礫混じりシルト、掘方がにぶい黄褐細砂混じりシルトである。遺物は須恵器杯蓋 (432) が出土した。

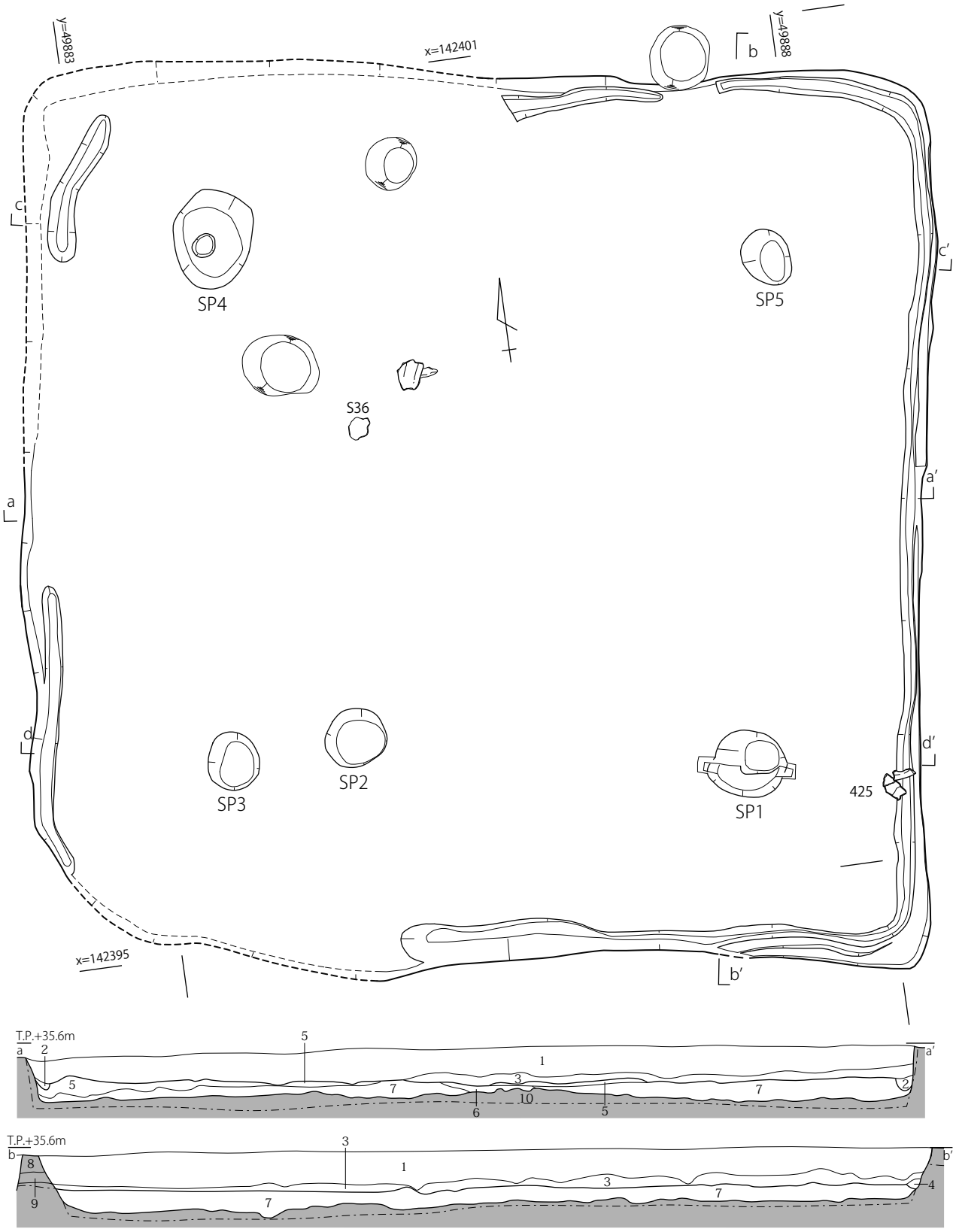
ＳＫ５は、竪穴建物南西隅で確認した土坑である。楕円形を呈し、長軸 1.08 m、短軸約 0.78 m、深さ約 0.07m を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は褐粘質シルトである。遺物は土師器甕 (437)・杯蓋片が出土した。

出土遺物の年代から、ＴＫ 10 型式併行期と判断できる。

14 －竪穴 16(図 27 ～ 28)

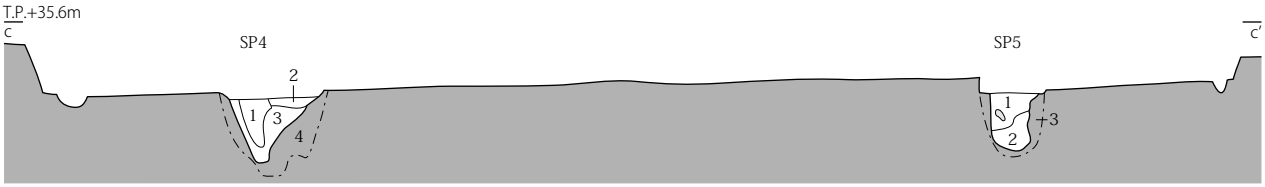
第 14 調査区北東側で検出した竪穴建物である。27- 竪穴 2 に切られる。主軸方位 N-83° -E、検出面の標高は 35.5m である。平面形状は横長方形を呈する。規模は、長辺約 6.8m 以上、短辺約 5.50m、深さ約 0.20m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと支柱穴 (ＳＰ１～３) を検出した。



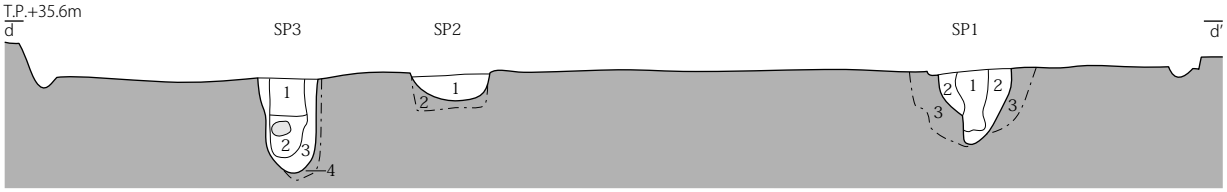
1　10YR3/2 黒褐　細砂混じりシルト～粘土　径２～３㎝程度の地山ブロック 10%　炭化物含む　土器片含む
2　10YR3/2 黒褐　細砂混じりシルト～粘土　径１㎝未満の地山ブロック斑状に含む…周壁溝
3　10YR3/3 暗褐　シルト混じり細砂　径３㎝程度の地山ブロック 20%
4　10YR3/2 黒褐　シルト～粘土　地山ブロック 30%…周壁溝
5　10YR4/6 褐　細砂…貼床
6　10YR4/4 褐　細砂　黒色シルトブロック含む…貼床
7　2.5Y6/4 にぶい黄　細砂～シルト　地山ブロック 7%…貼床
8　10YR2/3 黒褐　シルト～粘土…遺物包含層
9　10YR3/2 黒褐　シルト～粘土…遺物包含層
10　2.5Y7/4 浅黄　シルト…ベース

図 21　14- 竪穴 26　平・断面図



1　10YR2/3 黒褐　シルト　地山ブロック 30%
2　7.5YR3/2 黒褐　シルト　地山ブロック 10%
3　10YR4/3 にぶい黄褐　極細砂～シルト　地山ブロック 30%　小礫少量含む
4　10YR4/3 にぶい黄褐　極細砂～シルト　小礫少量含む…ベース

1　10YR2/3 黒褐　粘土　地山ブロック 2%　小礫少量含む
2　10YR3/2 黒褐　シルト～粘土　地山ブロック 20%
3　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト　小礫少量含む…ベース



1　10YR3/3 暗褐　シルト～粘土　地山ブロック 15%
2　10YR3/2 黒褐　シルト　地山ブロック 10%　径 10 ㎝大の円礫少量含む
3　10YR3/3 暗褐　シルト　地山ブロック 30%
4　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト　砂礫少量含む…ベース

1　10YR3/3 暗褐　シルト　地山ブロック 20%
2　10YR4/3 にぶい黄褐　極細砂～シルト　小礫少量含む…ベース

1　10YR3/2 黒褐　シルト～粘土　地山ブロック 2%　炭化物少量含む
2　10YR4/2 灰黄褐　シルト　地山ブロック 30%
3　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト　小礫少量含む…ベース

0　1m
（S=1 ／ 40）

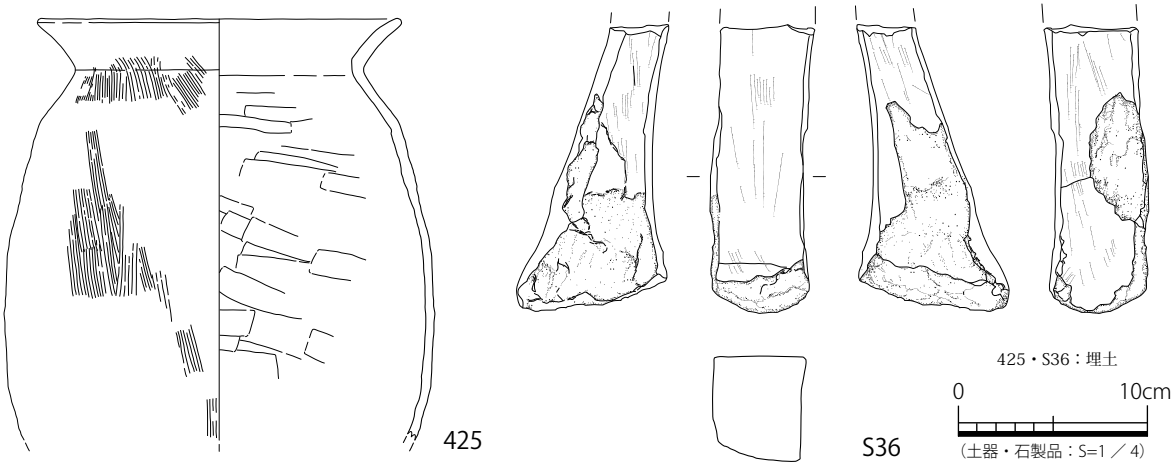


図 22　14- 竪穴 26　断面図及び出土遺物実測図

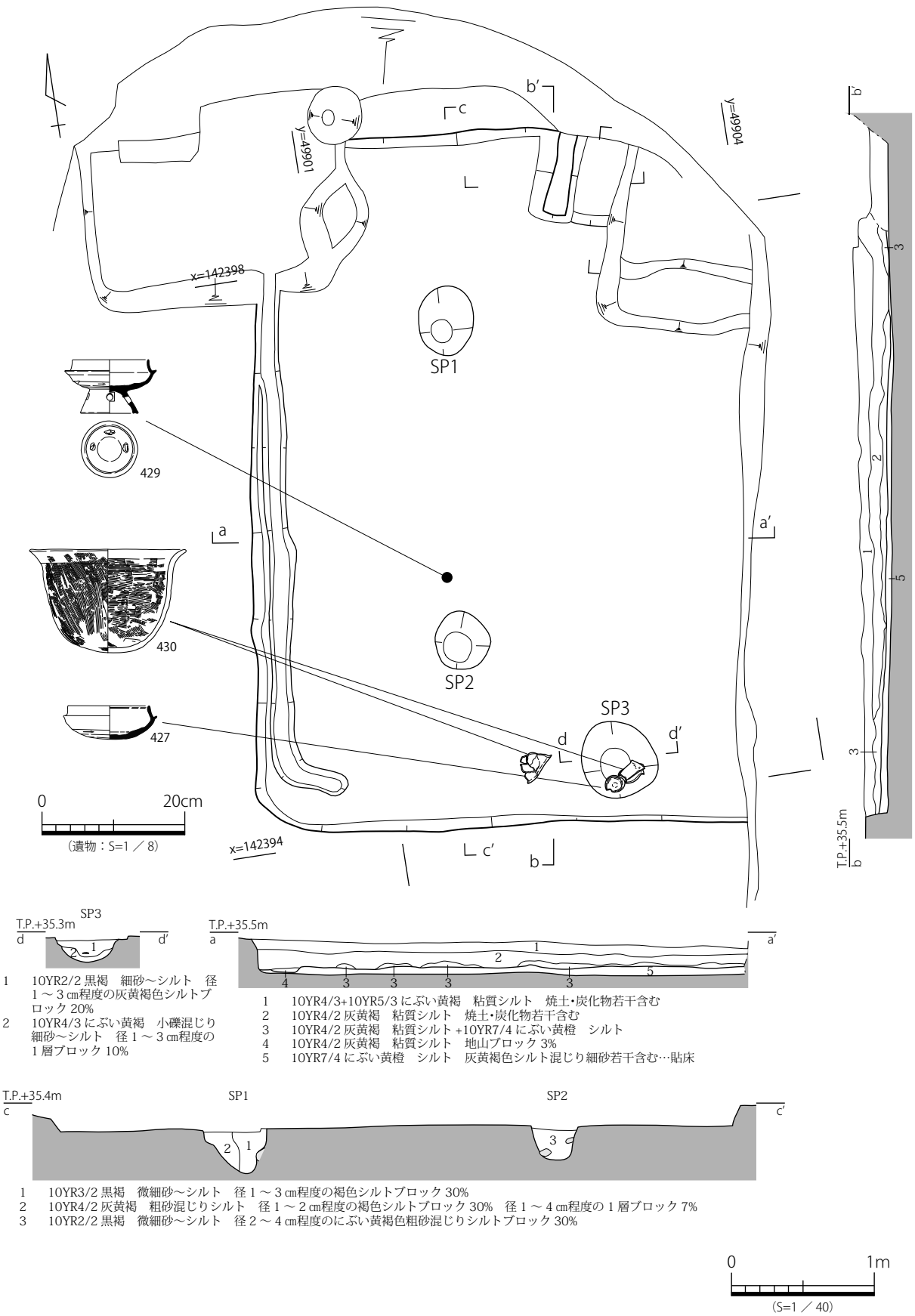
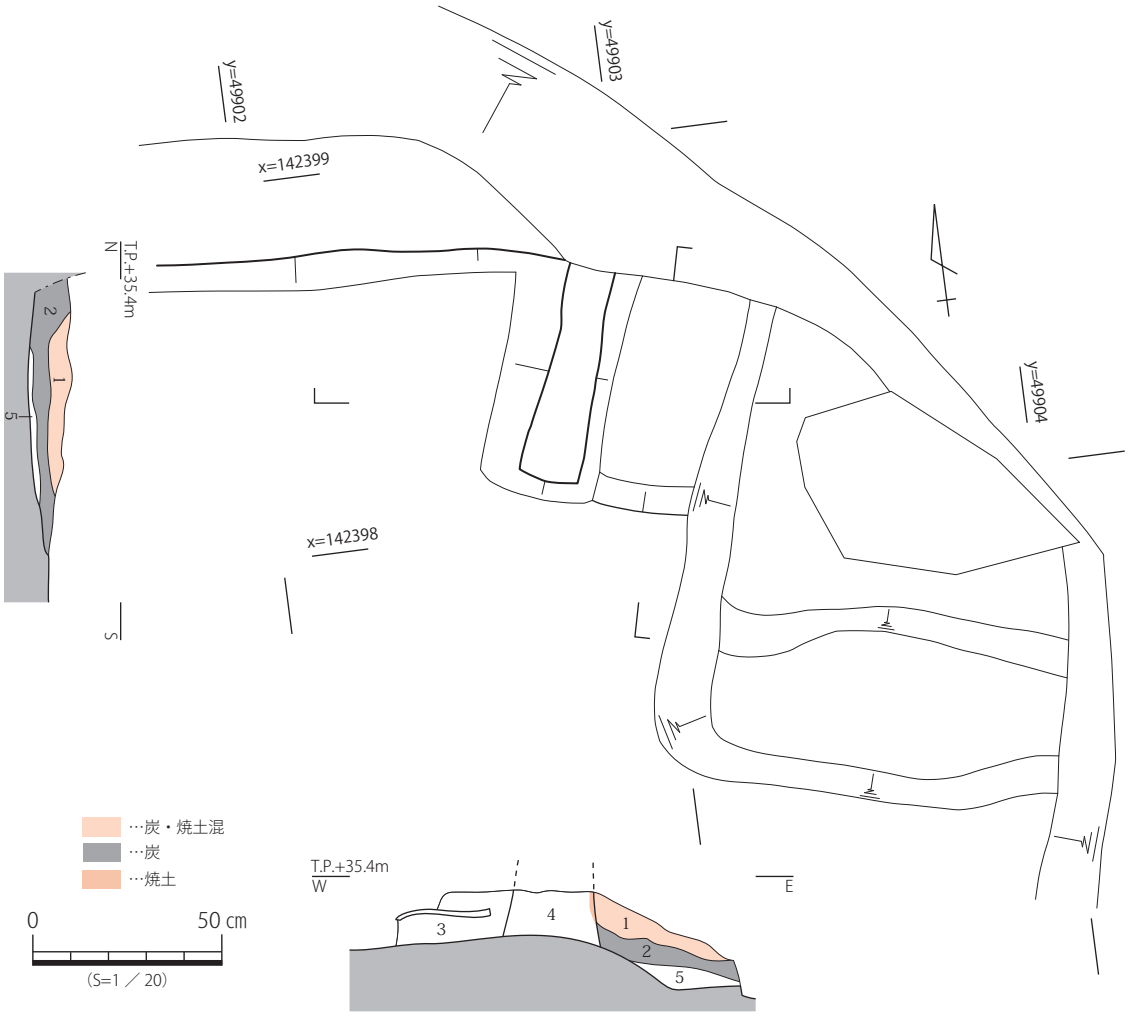


図 23　27- 竪穴 1　平・断面図



1　10YR3/2 黒褐　細砂～シルト　径 3 ㎝程度の灰黄褐色シルトブロック 30%　焼土・炭化物多量含む
2　10YR2/3 黒褐　細砂混じりシルト～粘土　焼土含む　炭化物多量含む
3　10YR3/2 黒褐　細砂混じりシルト　土器片含む
4　10YR2/3 黒褐　シルト…カマド袖
5　10YR5/2 灰黄褐　シルト

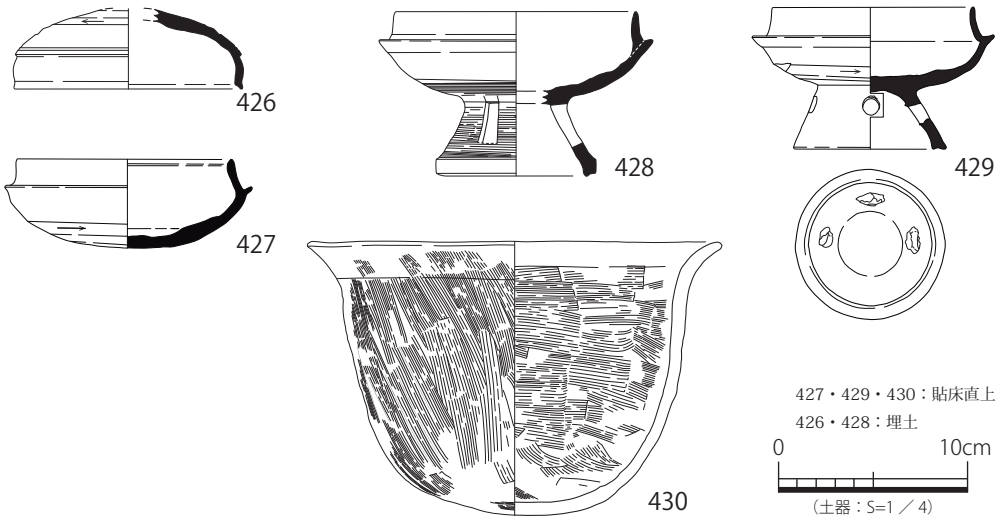
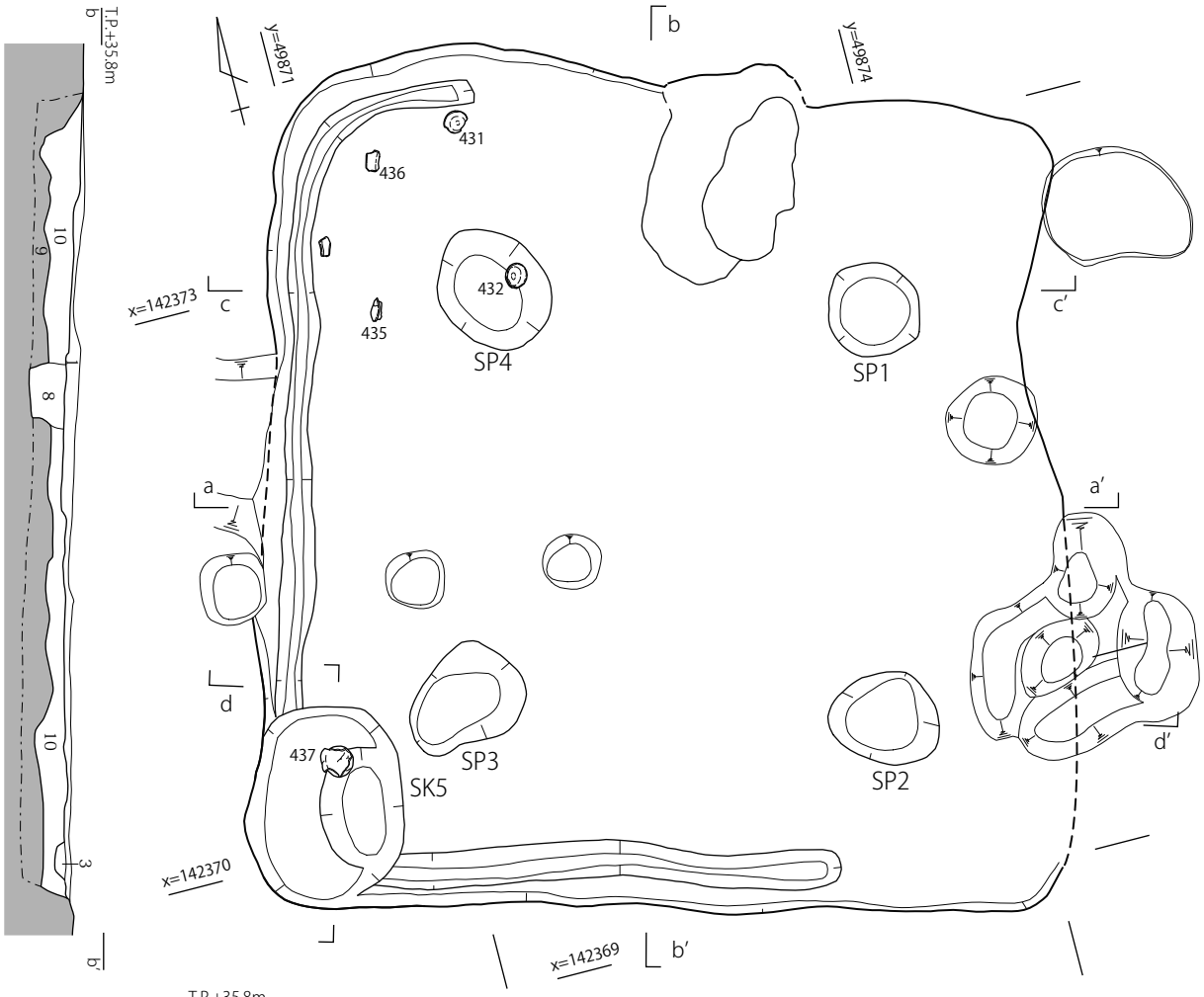
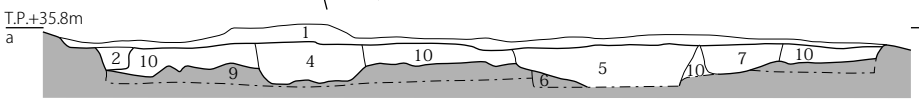
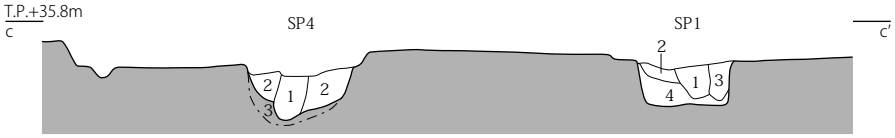


図 24　27- 竪穴 1　カマド及び出土遺物実測図





1　10YR4/3 にぶい黄褐　細礫混じり細砂～シルト
2　10YR2/3 黒褐　粘質シルト…周壁溝
3　10YR3/4 暗褐　粘質シルト
4　10YR3/2 黒褐　シルト　地山ブロック 40%
5　10YR3/2 黒褐　シルト　地山ブロック 30%
6　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト
7　10YR3/2 黒褐　シルト～粘土　地山ブロック 40%
8　10YR3/2 黒褐　シルト　地山ブロック 20%
9　10YR5/3 にぶい黄褐　シルト　砂礫多量含む…ベース
10　7.5YR4/3 褐　礫混じり細砂

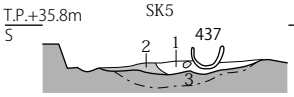


1　10YR4/3 にぶい黄褐　中礫混じりシルト
2　10YR5/3 にぶい黄褐　細砂混じりシルト
3　10YR4/4 褐　シルト混じり中粒砂…ベース

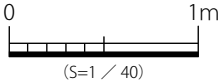
1　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト
2　10YR5/3 にぶい黄褐　シルト混じり細砂～細礫
3　10YR4/4 褐　シルト
4　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト混じり細砂～細礫

1　10YR2/3 黒褐　粗砂～シルト　地山ブロック 3%
2　10YR3/2 黒褐　細礫混じり粗砂～シルト
3　10YR2/2 黒褐　粗砂混じりシルト
4　7.5YR3/2 黒褐　細礫混じり細砂～シルト　地山土で構成

1　10YR3/3 暗褐　細礫混じり粗砂～シルト
2　10YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト
3　7.5YR3/2 黒褐　細礫混じり細砂～シルト
4　7.5YR4/2 灰褐　細礫混じり粗砂～シルト
5　10YR4/3 にぶい黄褐　粗砂～シルト　地山土で構成



1　7.5YR4/4 褐　粘質シルト　炭化物・焼土含む　須恵器片含む
2　7.5YR4/6 褐　粘質シルト　炭化物・焼土多量含む　須恵器片含む
3　10YR2/3 黒褐　細礫混じりシルト…貼床



（S=1 ／ 40）

図 25　14- 竪穴 5　平・断面図

1　5YR3/2 暗赤褐　粘質シルト　炭化物・焼土多量含む
2　7.5YR5/4 にぶい褐　細砂　細礫含む
3　7.5YR5/4 にぶい褐　礫混じり細砂　焼土含む
4　7.5YR4/3 褐　礫混じりシルト

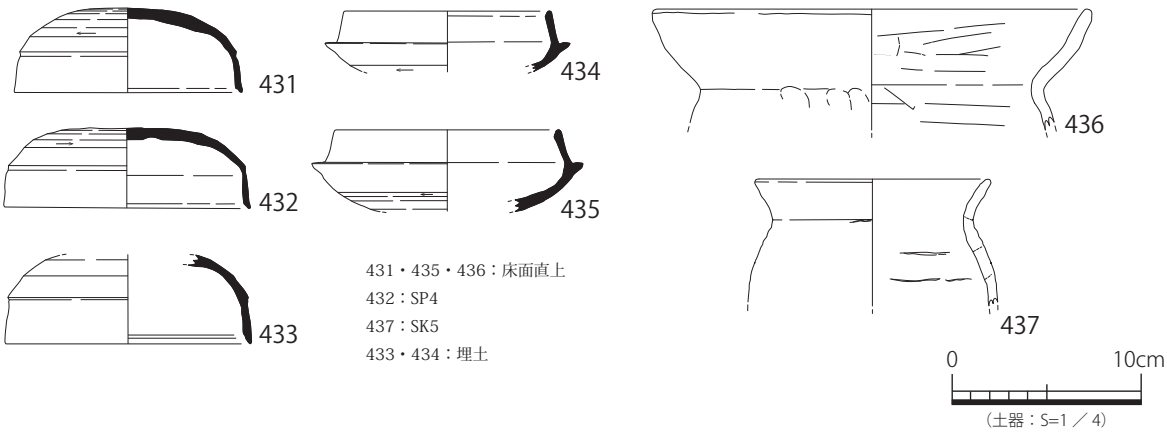
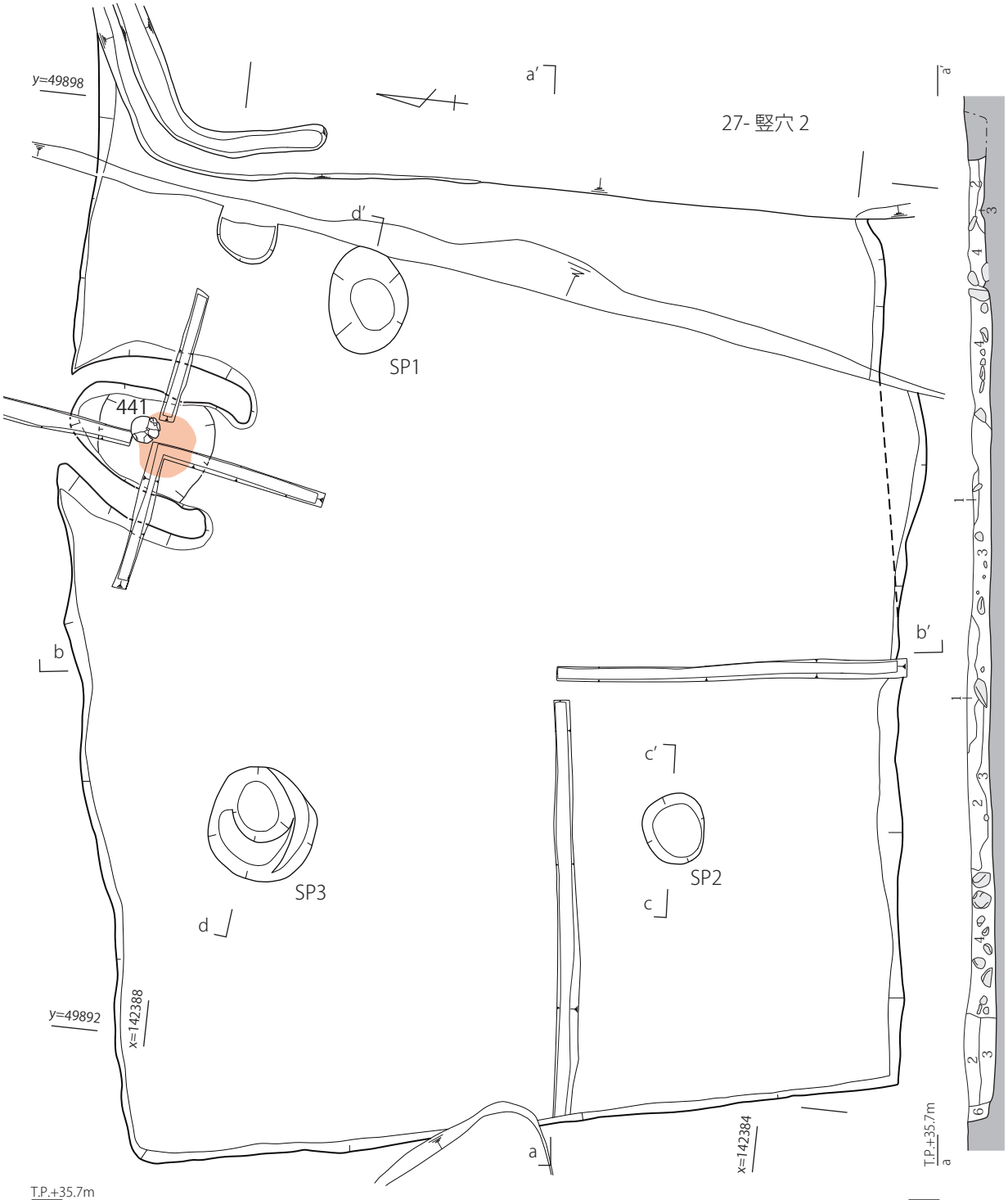


図 26　14- 竪穴 5　カマド及び出土遺物実測図



1　10YR3/4 暗褐　シルト
2　10YR3/3 暗褐　シルト
3　10YR3/4 暗褐　小礫混じり粗砂～シルト　土器片含む
4　礫層　径 5 ～ 20 ㎝大の礫…墳礫か？
5　10YR3/4 暗褐　シルト
6　10YR3/4 暗褐　細礫混じり細砂～シルト

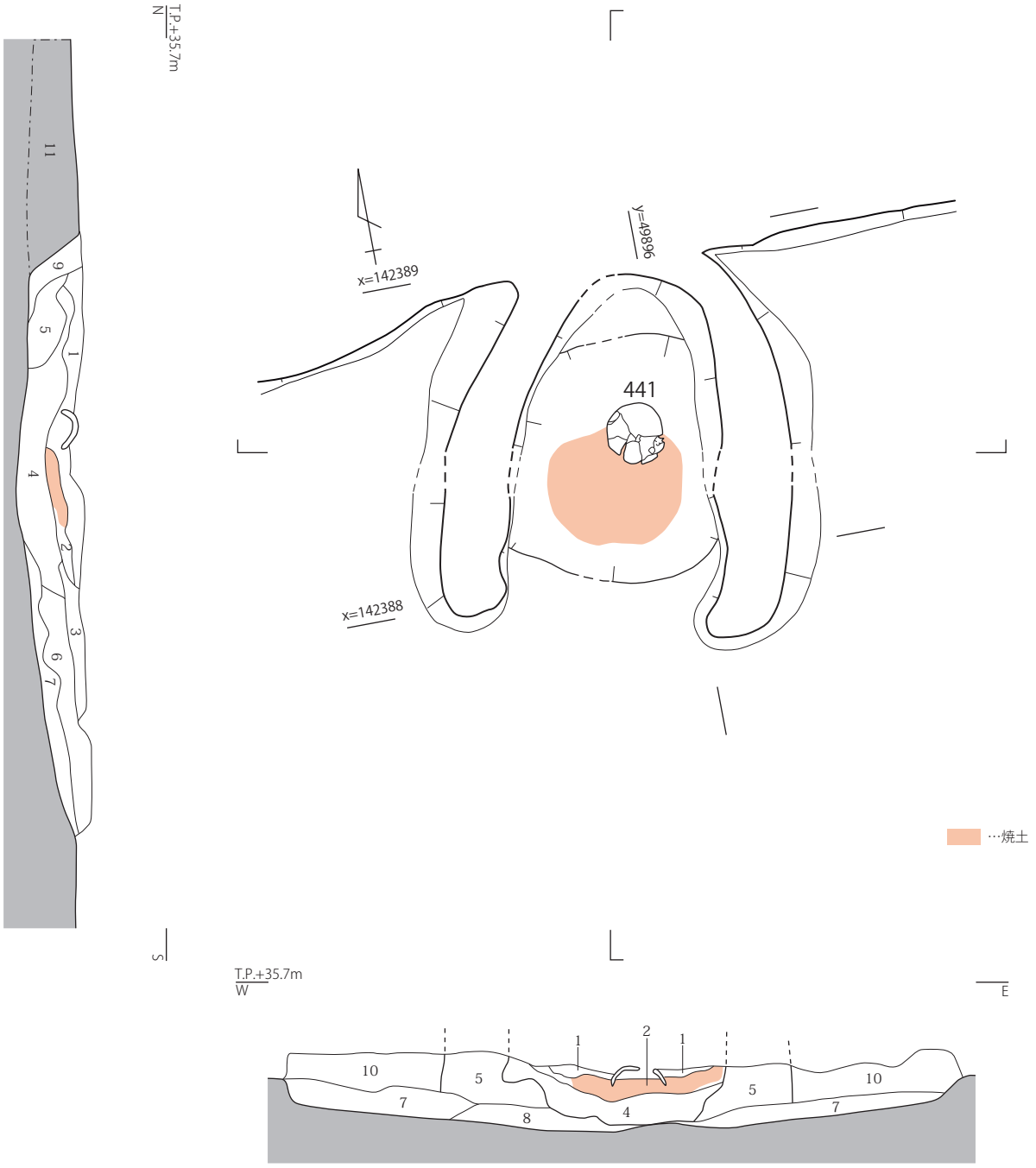
0　1m
（S=1 ／ 40）

1　10YR3/3 暗褐　細礫混じりシルト
2　10YR5/3 にぶい黄褐　礫混じり細砂
3　10YR4/4 褐　礫混じりシルト　径 2 ～ 10 ㎝大の礫含む

1　10YR3/4 暗褐　シルト
2　10YR3/4 暗褐　礫混じりシルト

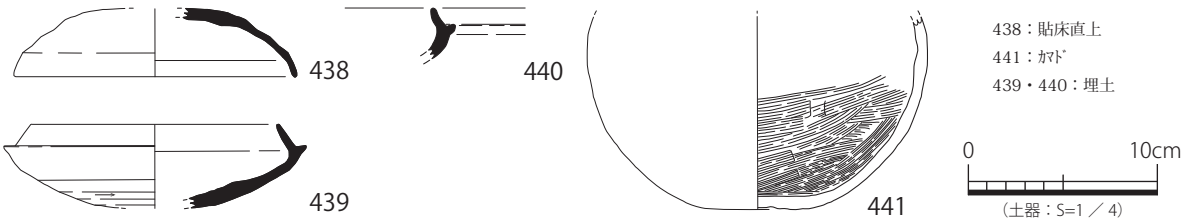
1　10YR2/3 黒褐　シルト　径 5 ㎝大の礫含む　焼土含む
2　10YR3/4 暗褐　細礫混じりシルト　地山ブロック斑状に 5%　焼土含む

図 27　14- 竪穴 16　平・断面図



1　5YR2/3 極暗赤褐　粘質シルト　炭化物・焼土・灰多量含む
2　5YR4/6 赤褐　細砂～シルト　土器含む…焼土層
3　7.5YR3/4 暗褐　細砂～シルト　炭化物少量含む　土器片含む
4　7.5YR3/3 暗褐　シルト　炭化物・焼土多量含む
5　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト　しまり強　黄色ブロック含む
6　10YR4/3 にぶい黄褐　細礫混じりシルト
7　10YR4/3 にぶい黄褐　細礫混じりシルト…貼床
8　10YR4/3 にぶい黄褐　礫混じりシルト…貼床
9　10YR3/4 暗褐　シルト
10　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト
11　10YR4/3 にぶい黄褐　礫混じりシルト…ベース

0　50 cm
(S=1／20)



438：貼床直上
441：ｶﾏﾄﾞ
439・440：埋土

0　10cm
(土器：S=1／4)

図 28　14- 竪穴 16　カマド及び出土遺物実測図

埋土は暗褐シルトで、埋土から須恵器杯身(439・440)、須恵器高杯蓋片が出土した。

貼床は暗褐小礫混じり粗砂～シルトである。床面直上から須恵器杯蓋 (438) が出土した。

カマドは竪穴建物中央やや東よりに作り付けられる。カマド内部は掘窪める。カマド構築材はにぶい黄褐シルトである。カマド内から、土師器底部(441) が出土した。図示した遺物の他に、カマドから須恵器杯蓋片・杯身片、土師器甕片・土師器片が出土した。

支柱穴は３基確認できた。ＳＰ１は楕円形を呈し、長径約 0.71 m、短径約 0.51 m、深さ約 0.30m を測る。断面形状は椀状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘方が暗褐細礫混じりシルトである。遺物は製塩土器片が出土した。ＳＰ２は円形を呈し、直径約0.41 m、深さ約0.14mを測る。断面形状は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細礫混じりシルトとにぶい黄褐礫混じり細砂、掘方が褐礫混じりシルトである。ＳＰ３は円形を呈し、直径約 0.75 m、深さ約 0.20m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は上層が暗褐シルト、下層が暗褐礫混じりシルトである。

出土遺物からＭＴ 85 ～ＴＫ 43 型式並行期と判断できる。

14 －竪穴 15(図 29 ～ 30)

第 14 調査区中央東側で検出した竪穴建物である。主軸方位 N-0° -W、検出面の標高は 35.7 ～ 35.6m である。14- ＳＫ 238・215 に切られる。平面形状は横長方形を呈する。規模は、長辺約 6.80m、短辺約 5.30m、深さ約 0.30m を測る。竪穴建物中央に、礫層が確認できた。後述する地震の痕跡の可能性がある。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (ＳＰ１～４)、を検出した。

埋土はにぶい黄褐粗砂～シルトである。遺物は須恵器杯蓋 (442)、須恵器杯蓋片、鉄滓が出土した。

貼床は、にぶい黄褐粗砂混じりシルトで、礫層のため一部で確認できない部分があった。遺物は床面から２～ 3㎝上で須恵器杯身 (467)・杯蓋 (444) が出土した。このうち須恵器杯身 (467) は他に 27- 竪穴２・27- 竪穴７で取り上げた破片と遺構間接合しており、後世の地震の影響を考えると、帰属が判然としない。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付ける。カマド底部には、炭化物層が確認でき、機能面と考えられる。遺物は須恵器杯蓋 (443) が出土した。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.09 m、深さ約 0.04m を測る。埋土は暗褐粗砂～シルトである。

支柱穴は４基確認できた。ＳＰ１は円形を呈し、直径約 0.29 m、深さ約 0.17m を測る。断面形状は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細礫混じりシルト、掘方が暗褐シルトと褐細礫混じりシルトである。ＳＰ２は円形を呈し、直径約 0.32 m、深さ約 0.20m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方が褐シルトである。ＳＰ３は円形を呈し、直径約 0.36 m、深さ約 0.07m を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細礫混じりシルト、掘方が褐細礫混じりシルトである。ＳＰ４は円形を呈し、直径約 0.24 m、深さ約 0.14m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細礫混じりシルト、掘方が褐細礫混じりシルトである。

出土遺物の年代からＴＫ 10 ～ＴＫ 43 型式併行期と判断できる。

14 －竪穴 21(図 31 ～ 32)

第 14 調査区中央で検出した竪穴建物である。主軸方位 N-16° -E、検出面の標高は 35.6 ～ 35.5m である。平面形状はやや横長の方形を呈する。規模は、長辺約 5.60m、短辺約 4.40m、深さ約 0.40m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (ＳＰ１～４) を検出した。

埋土は暗褐シルトで、埋土から、長頸鏃 (T21)、土師器甕片・高杯片・製塩土器片が出土した。

貼床は地山ブロック土を含む暗褐シルトとにぶい黄褐礫混じりシルトである。貼床直上から遺物は出土していない。

カマドは竪穴建物北側中央やや西寄りで確認した。煙道が竪穴建物の外へと延びる。カマド構築材はオリーブ褐シルト混じり細砂である。カマドの底部には炭層が確認できカマド使用時の機能面と考えられる。遺物は土師器体部片と須恵器杯身 (445) が出土している。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.17m、深さ約 0.08m を測る。埋土は黒褐砂礫混じりシルトと褐

シルトである。図示した遺物の他に、カマドから土師器高杯片、粘土塊が出土した。

支柱穴は４基確認できた。ＳＰ１は円形を呈し、直径約 0.45 m、深さ約 0.25m を測る。断面形状は椀状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい黄褐シルト混じり細砂、掘方が暗褐シルト混じり細砂である。ＳＰ２は一部撹乱に切られるが、円形を呈すると考えられる。直径約 0.60 m、深さ約 0.20m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は上層が暗褐シルト、下層がにぶい黄褐細砂～シルトである。ＳＰ３は楕円形を呈し、長径約 0.62 m、短径約 0.45 m、深さ約 0.29m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト混じり粗砂、掘方が黒褐粗砂混じりシルトである。ＳＰ４は楕円形を呈し、長軸約 0.55 m、短軸約 0.40 m、深さ約 0.27m を測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が極暗褐細砂混じりシルトとにぶい黄褐シルト混じり細砂、下層が暗褐シルト混じり細砂である。

出土遺物の年代からＭＴ 85 型式併行期と判断できる。

14 －竪穴 2(図 33 ～ 34)

第 14 調査区中央で検出した竪穴建物である。14- 掘立 6 に切られる。主軸方位 N-0°-W、検出面の標高は 35.7 ～ 35.6m である。平面形状はやや歪な方形を呈する。規模は、長辺約 7.20m、短辺約 7.20m、深さ約 0.35m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (ＳＰ１～４) を検出した。

埋土は灰黄褐粗砂～シルトとにぶい黄褐細砂～シルトである。埋土から須恵器杯身 (446)、鉄滓 (T22)、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯蓋片、粘土塊が出土した。

貼床は暗褐粗砂混じりシルトである。

カマドは竪穴建物北側中央やや西寄りに作り付けられ、煙道が竪穴建物の外へと延びる。貼床施工前にカマド袖部を構築する。カマド構築材は暗褐シルトと黒褐シルト～粘土である。カマド内部には炭化物や焼土塊を含む堆積が認められ、カマドの上部構造の崩落土と考えられる。

周壁溝は竪穴建物全体で確認でき、幅約 0.17m、深さ約 0.13m を測る。埋土はにぶい黄褐細砂～シルトと灰黄褐細砂～シルト、褐細砂～シルト、黒褐粗砂混じりシルトである。

支柱穴は４基確認できた。ＳＰ１はやや歪な円形を呈し、直径約 0.45 m、深さ約 0.17m を測る。断面形状は椀状を呈する。埋土はにぶい黄褐シルト～粘土と暗褐粘土である。ＳＰ２は円形を呈し、直径約 0.40 m、深さ約 0.20m を測る。断面形状は椀状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト～粘土、掘方が暗褐粘土である。遺物は土師器甑 (447) が出土した。ＳＰ３は円形を呈し、直径約 0.34 m、深さ約 0.24m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方が黒褐シルトと極暗褐シルトである。ＳＰ４はやや歪な円形を呈し、直径約 0.49 m、深さ約 0.21m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。埋土は上層が黒褐シルト～粘土、下層が極暗褐シルト～粘土である。

出土遺物からＭＴ 85 型式併行期と判断できる。

14 －竪穴 30(図 35 ～ 39)

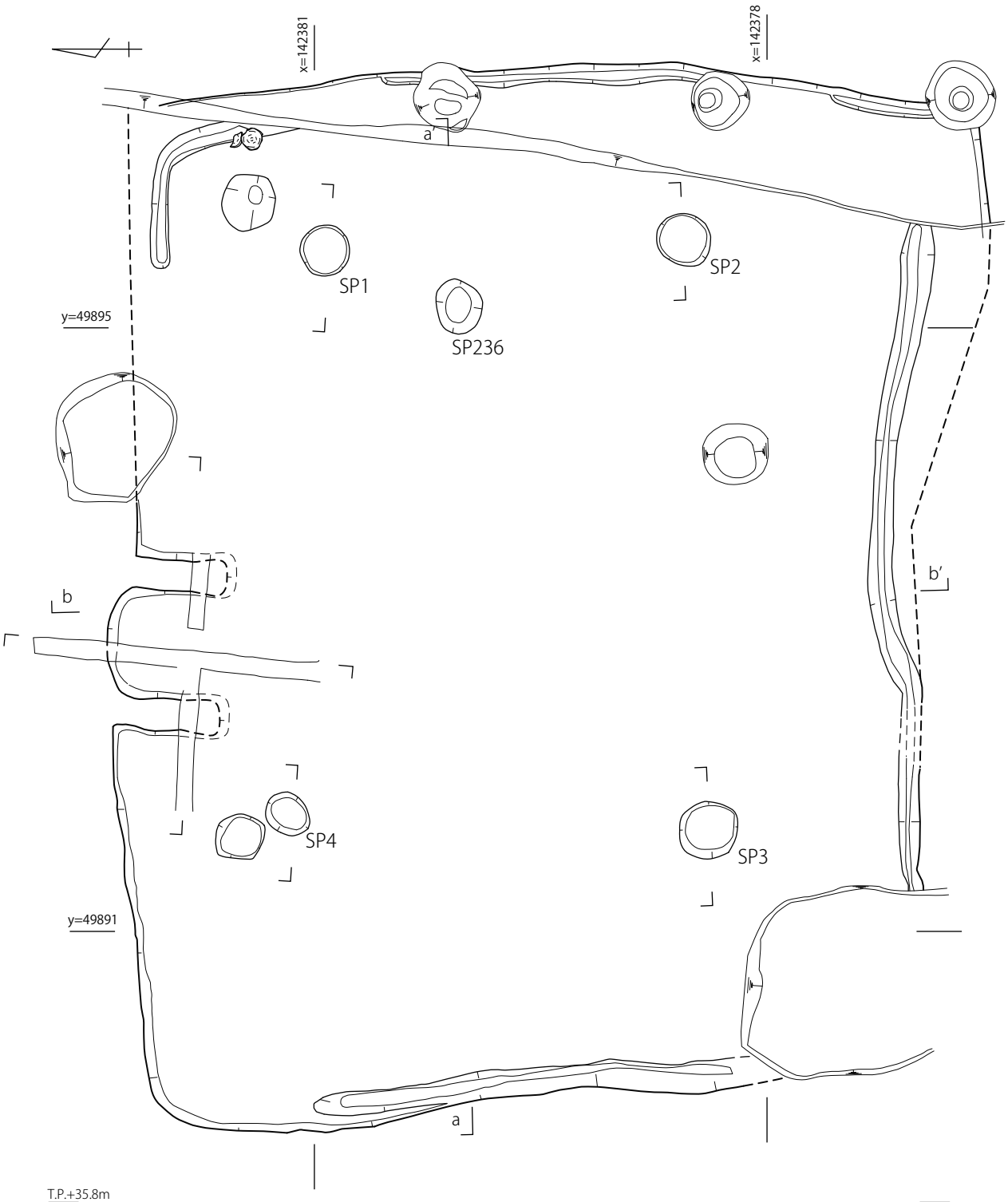
第 14 調査区中央南側で検出した竪穴建物である。主軸方位 N-7°-E、検出面の標高は 36.2m である。一部撹乱に切られる。平面形状は方形を呈する。規模は、長辺約 5.60m、短辺約 5.50m、深さ約 0.50m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (ＳＰ 35 ～ 37)、土坑 (ＳＫ 31 ～ 33)、ピット (ＳＰ 38) を検出した。

埋土は、にぶい黄褐細砂と褐細砂～シルトである。埋土から鉄製刀子 (T23)、須恵器杯蓋 (448・449)・器台 (455)、土師器鍋 (456)、打製石斧 (S37)、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯蓋片・壺片・短頸壺片・甕片、土師器甑片・甕片・高杯片・製塩土器片・粘土塊が出土した。

貼床は非常に厚く、上層が褐細砂～シルト、中層がにぶい黄橙細砂、下層がにぶい黄褐シルト混じり細砂である。遺物は床面直上から土師器甑 (460)・鍋 (457) が出土した。ＳＰ 35 近くからまとまって出土した鍋 (457) は、破片ごとに被熱の違いがあり、破砕後に被熱を受けている。

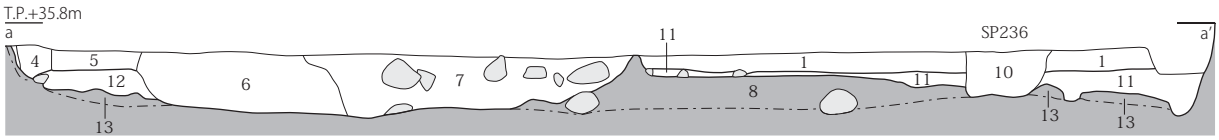
カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられる。カマドの東半分は撹乱によって切られる。カマド構築材はにぶい黄褐細砂～シルトである。カマド中央は掘窪め、中央に土師器甕を据える。その他カマドから須恵器杯身 (453) が出土した。カマドから出土し



1　10YR4/3 にぶい黄褐　粗砂～シルト
2　10YR3/3 暗褐　粗砂～シルト
3　10YR5/3 にぶい黄褐　粗砂混じりシルト
4　10YR3/3 暗褐　粗砂混じりシルト
5　10YR4/3 にぶい黄褐　小礫混じり粗砂～シルト
6　7.5YR5/3 にぶい褐　砂礫
7　7.5YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト
8　7.5YR4/2 灰褐　小礫混じりシルト　小礫～中礫混じりの径５～10㎝大の亜円礫多量含む
9　7.5YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト
10　7.5YR4/3 褐　粗砂混じりシルト…14-SP236
11　10YR5/3 にぶい黄褐　粗砂混じりシルト
12　10YR5/3 にぶい黄褐　粗砂混じりシルト
13　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト
14　7.5YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト

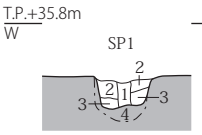
0　1m
（S=1／40）

図 29　14- 竪穴 15　平・断面図

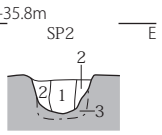


1　10YR4/3 にぶい黄褐　粗砂～シルト
2　10YR3/3 暗褐　粗砂～シルト
3　10YR5/3 にぶい黄褐　粗砂混じりシルト
4　10YR3/3 暗褐　粗砂混じりシルト
5　10YR4/3 にぶい黄褐　小礫混じり粗砂～シルト
6　7.5YR5/3 にぶい褐　砂礫
7　7.5YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト
8　7.5YR4/2 灰褐　小礫混じりシルト　小礫～中礫混じりの径 5 ～ 10 ㎝大の亜円礫多量含む
9　7.5YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト
10　7.5YR4/3 褐　粗砂混じりシルト…14-SP236
11　10YR5/3 にぶい黄褐　粗砂混じりシルト
12　10YR5/3 にぶい黄褐　粗砂混じりシルト
13　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト
14　7.5YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト

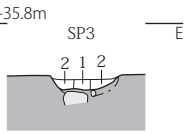
0　1m
(S=1 ／ 40)



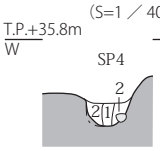
1　10YR3/4 暗褐　細礫混じりシルト
2　10YR3/3 暗褐　シルト
3　10YR4/4 褐　細礫混じりシルト
4　10YR4/3 にぶい黄褐　細礫混じりシルト…ベース



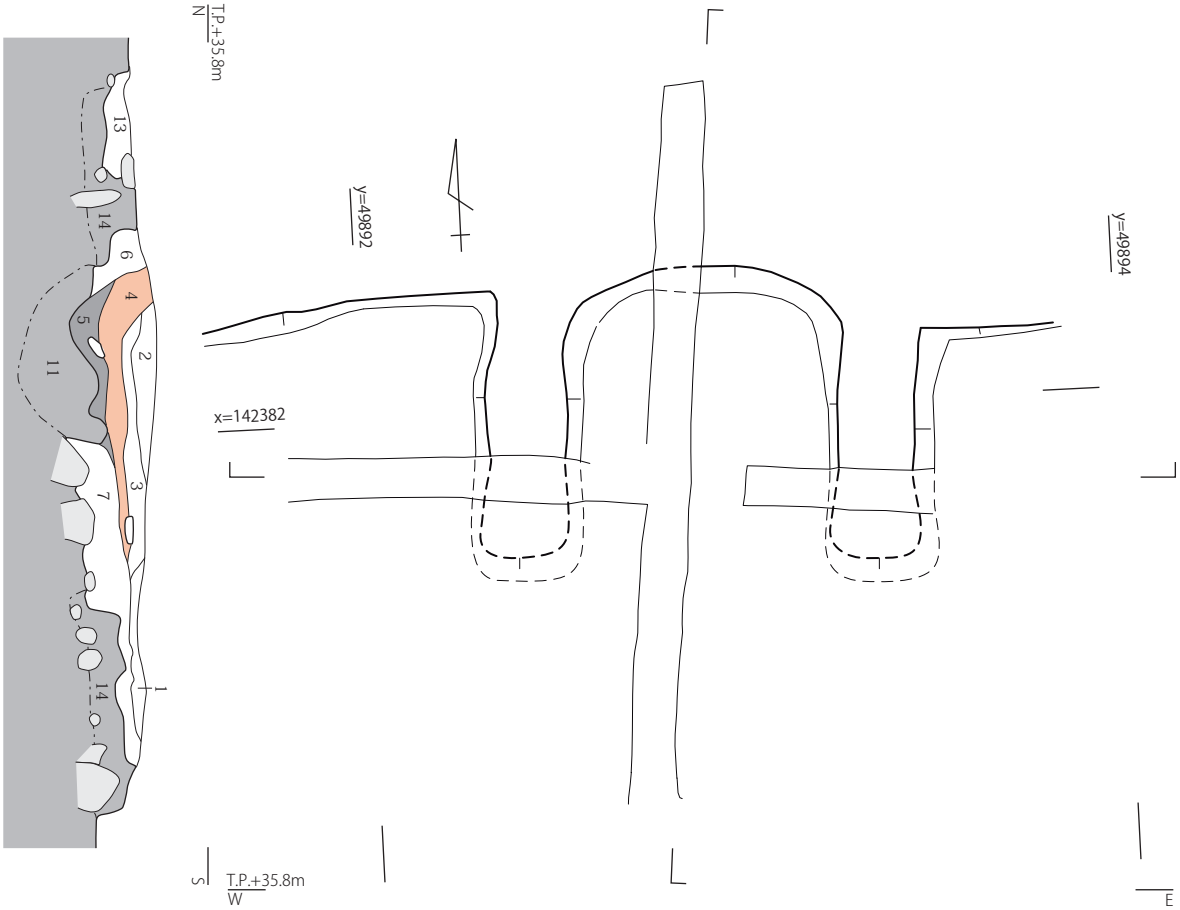
1　10YR3/3 暗褐　シルト
2　10YR4/4 褐　シルト　地山ブロック 3%
3　10YR4/4 褐　シルト…ベース



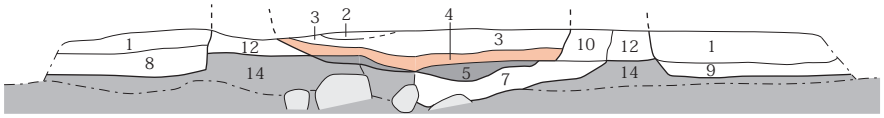
1　10YR3/3 暗褐　細礫混じりシルト
2　10YR4/4 褐　細礫混じりシルト



1　10YR3/4 暗褐　細礫混じりシルト
2　10YR4/4 褐　細礫混じりシルト

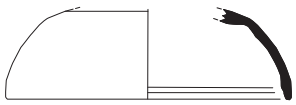


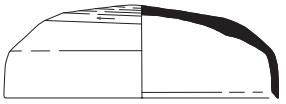
…炭
…焼土



1　7.5YR4/2 灰褐　粗砂混じりシルト
2　7.5YR3/3 暗褐　粗砂～シルト
3　7.5YR4/3 褐　粗砂混じりシルト　焼土塊 7%
4　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト　炭化物・焼土塊多量含む
5　7.5YR3/3 暗褐　細砂～シルト　粘性あり　炭化物・焼土塊多量含む
6　7.5YR3/1 黒褐　小礫混じり細砂～シルト
7　7.5YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト
8　7.5YR4/2 灰褐　小礫混じりシルト
9　7.5YR3/3 暗褐　粗砂混じりシルト　焼土塊 5%
10　7.5YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト　炭化物・焼土含む
11　7.5YR4/3 褐　シルト…ベース
12　7.5YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト
13　10YR3/2 黒褐　小礫混じり細砂～シルト
14　7.5YR4/3 褐　砂礫層…ベース

0　50 cm
(S=1 ／ 20)

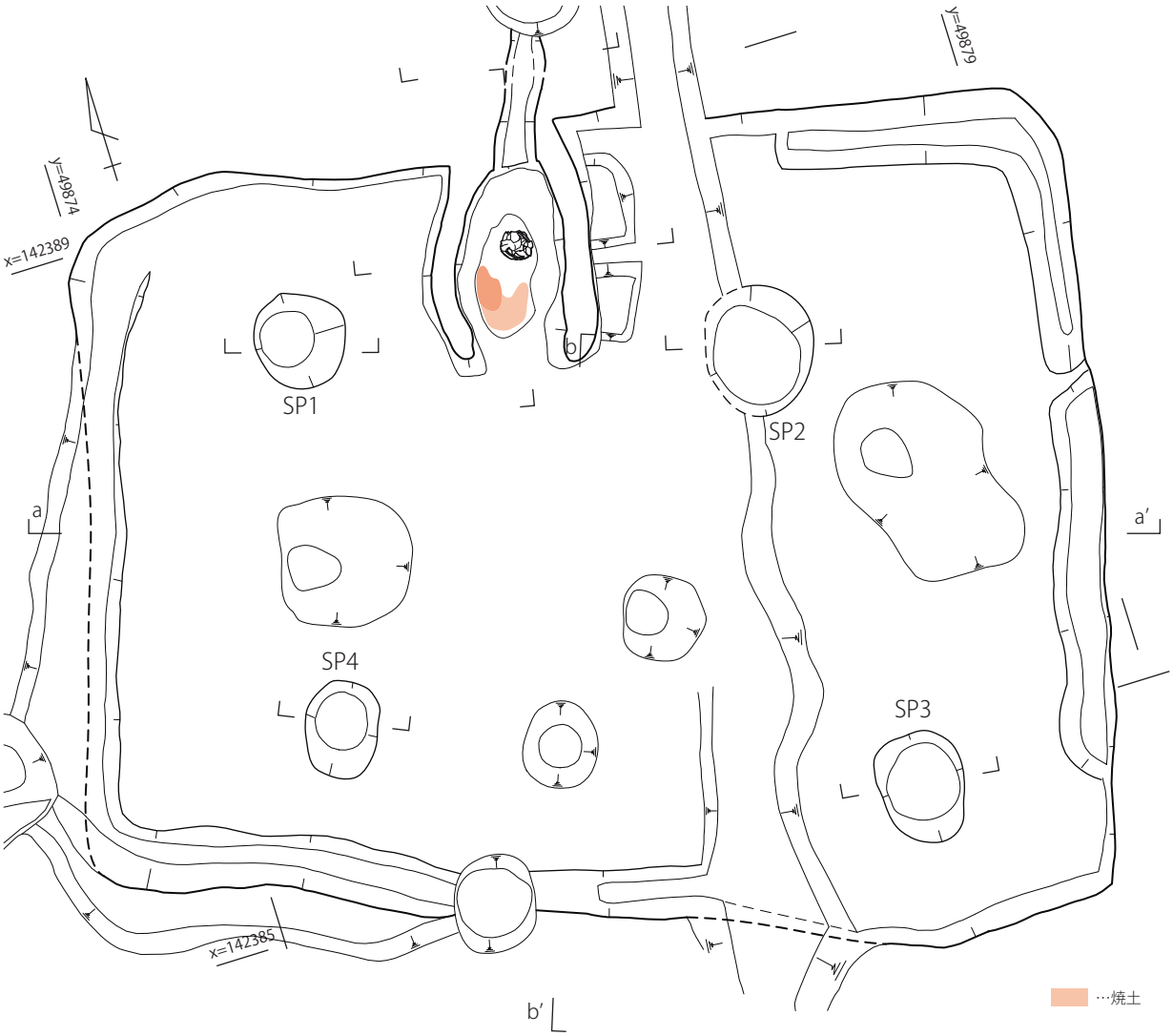


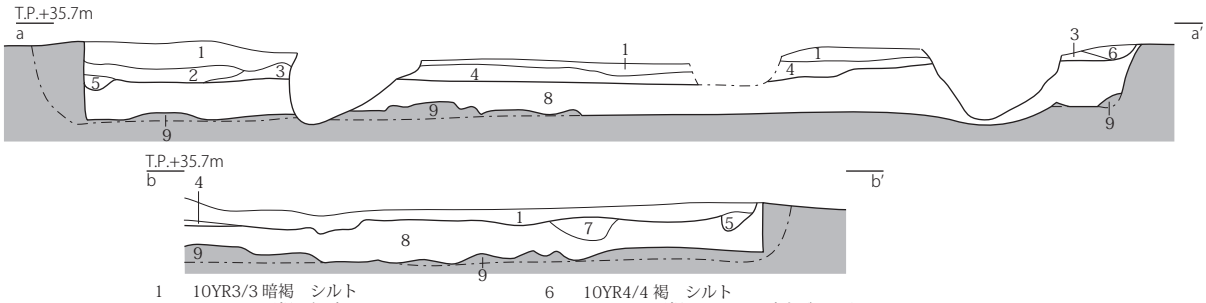


442：埋土
443：カマド
444：床面直上

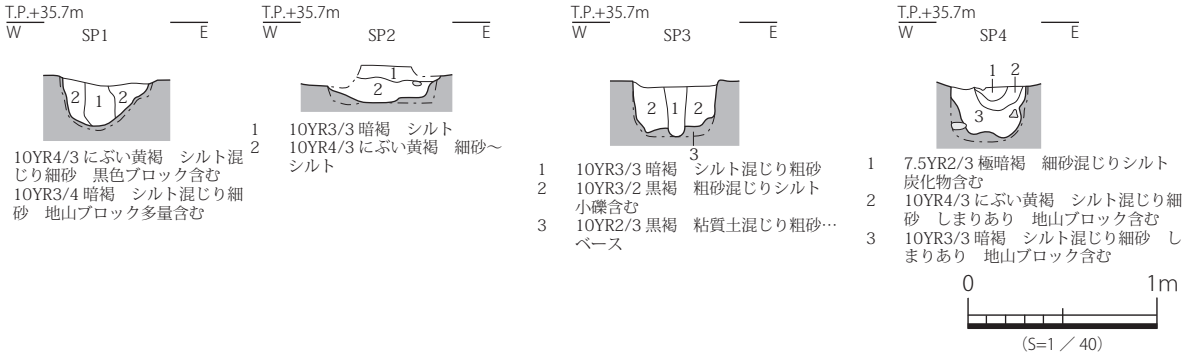
0　10cm
(土器：S=1 ／ 4)

図 30　14- 竪穴 15　断面図・カマド及び出土遺物実測図





1　10YR3/3 暗褐　シルト
2　10YR2/3 黒褐　細砂～シルト
3　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト
4　10YR3/4 暗褐　シルト　地山ブロック 5%
5　10YR2/3 黒褐　砂礫混じりシルト
6　10YR4/4 褐　シルト
7　10YR2/3 黒褐　シルト　地山ブロック 3%
8　10YR4/3 にぶい黄褐　礫混じりシルト
9　10YR4/3 にぶい黄褐　小礫混じりシルト



SP1
1　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト混じり細砂　黒色ブロック含む
2　10YR3/4 暗褐　シルト混じり細砂　地山ブロック多量含む

SP2
1　10YR3/3 暗褐　シルト
2　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト

SP3
1　10YR3/3 暗褐　シルト混じり粗砂
2　10YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト　小礫含む
3　10YR2/3 黒褐　粘質土混じり粗砂…ベース

SP4
1　7.5YR2/3 極暗褐　細砂混じりシルト　炭化物含む
2　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト混じり細砂　しまりあり　地山ブロック含む
3　10YR3/3 暗褐　シルト混じり細砂　しまりあり　地山ブロック含む

図 31　14- 竪穴 21　平・断面図

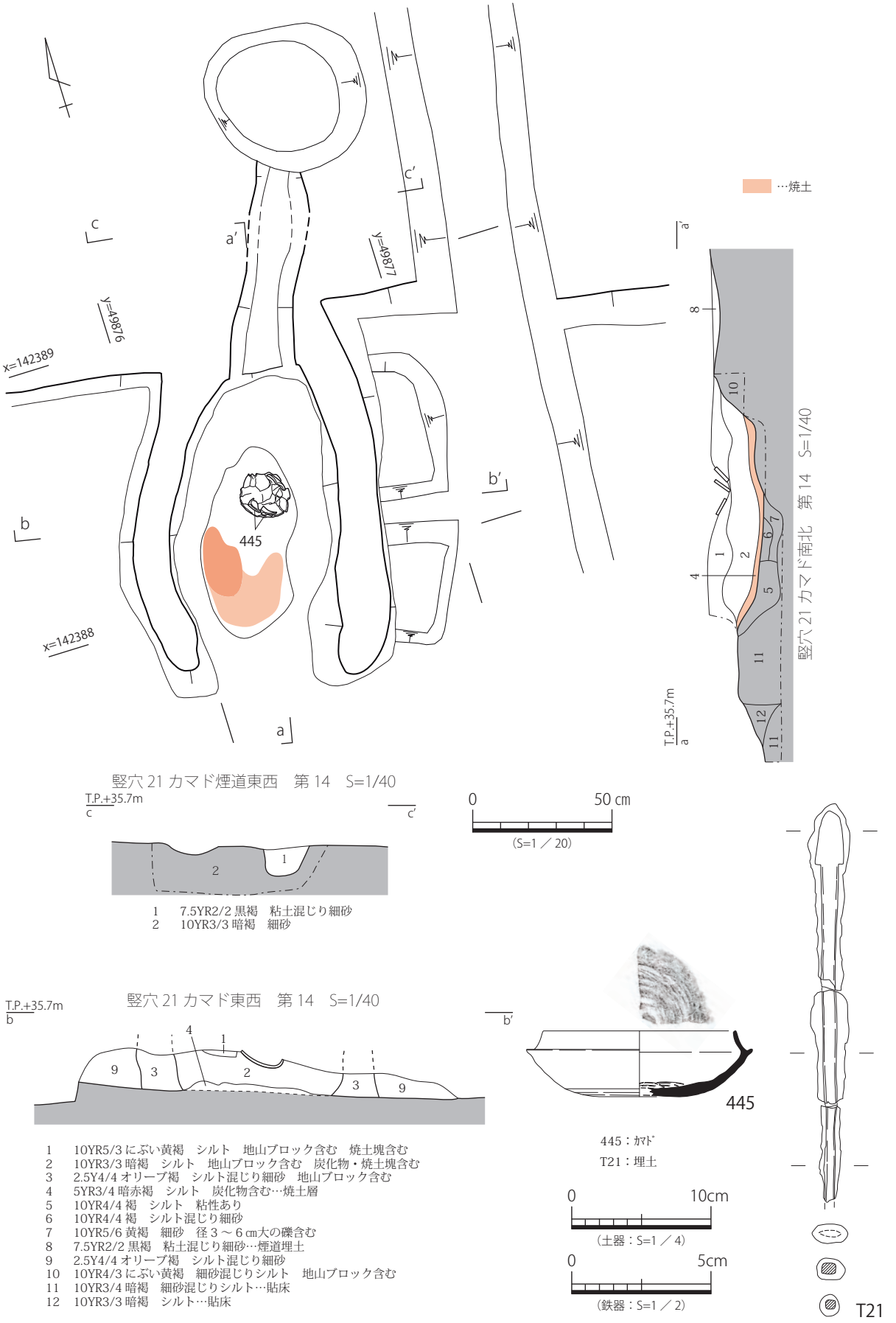


図 32　14- 竪穴 21　カマド及び出土遺物実測図

た土師器片は図示できなかったが、おそらく支脚に転用されたと考えられる。また炭化物層が確認でき、当時の機能面と考えられる。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.17m、深さ約 0.14m を測る。埋土は暗褐シルトである。

支柱穴は 4 基確認できた。ＳＰ 34 は円形を呈し、直径約 0.57m、深さ約 0.40m を測る。断面形状は逆台形を呈する。覆土の下に柱痕が確認できた。埋土は覆土が褐細砂～シルト、柱痕がにぶい黄褐細砂、掘方が褐細砂～シルトと暗褐シルトである。ＳＰ 35 は円形を呈し、直径約 0.64 m、深さ約 0.45m を測る。断面形状は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が地山ブロック土を含む褐細砂～シルト、掘方が褐細砂～シルトと暗褐細砂～シルトである。遺物は甑底部 (461) が出土した。ＳＰ 36 は楕円形を呈し、長軸約 1.08 m、短軸約 0.81 m、深さ約 0.43m を測る。断面形状は段落ちにＵ字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐粘質シルト、掘方がにぶい黄褐細砂である。ＳＰ 37 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.68 m、深さ約 0.22m を測る。断面形状は段落ちにＵ字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方が褐細砂～シルトである。

ＳＫ 31 は南東隅で検出した浅い楕円形を呈する土坑である。撹乱に切られるため、ＳＰ 36 との切り合い関係は不明である。長軸約 0.79 m、短軸約 0.70 m、深さ約 0.04m を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は褐細砂～シルトと褐細砂である。遺物は須恵器杯身 (452・454)・砥石 (S38) が出土した。また図示した遺物の他に、土師器高杯片が出土した。

ＳＫ 32 は南西隅で検出した土坑である。一部撹乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、楕円形を呈すると考えられる。長軸約 0.93 m、短軸約 0.74 m、深さ約 0.09m を測る。断面形状は段落ちに逆台形を呈する。埋土は単層で、暗赤褐粘質シルトである。遺物は土師器甕 (458・459) が出土した。

ＳＫ 33 は南端で検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸約 0.65 m、短軸約 0.51 m、深さ約 0.16m を測る。断面形状は不整形である。埋土は上層がにぶい黄褐シルト、下層が黒褐粘質シルトと褐細砂～シルトである。遺物は須恵器杯蓋 (450・451)、砥石 (S38) が出土した。

ＳＰ 38 は円形を呈し、直径約 0.25 m、深さ約 0.21m を測る。

出土遺物の年代からＭＴ 85 ～ＴＫ 43 型式併行期と判断できる。

14 ―竪穴 23(図 40 ～ 42)

第 14 調査区北東側で検出した竪穴建物である。14- 竪穴 18 に切られる。主軸方位 N-10°-E、検出面の標高は 35.6 ～ 35.3m である。平面形状は方形を呈する。規模は、長辺約 5.80m、短辺約 5.50m、深さ約 0.40m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (ＳＰ 1 ～ 4)、ピット (ＳＰ 415) を検出した。

埋土は黒褐粗砂混じりシルト～粘土と暗褐粗砂混じり粘質土である。遺物は製塩土器片 (464)、床面近くから臼玉 2 点、須恵器甕片、土師器高杯片・製塩土器片・壺片が出土した。

貼床は地山ブロック土を多量に含む暗褐シルトである。床面直上から土師器杯 (463)、臼玉 (S39・S40・S41・S42)、管玉 (S43) が出土した。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられ、煙道が建物外へと延びる。カマド構築材は褐粗砂混じりシルトと暗褐粗砂混じりシルトである。カマド内部には炭化物層が確認でき、カマド機能面と考えられる。また焼土塊や炭化物を多量に含む堆積が認められ、これらはカマドの上部構造の崩落土と考えられる。遺物は土師器甕 (462)、図示した遺物の他に、土師器高杯片・壺片、製塩土器片が出土した。

周壁溝は幅約 0.16 m、深さ約 0.08m を測る。埋土は黒褐粗砂混じりシルトと黒褐シルト～粘土である。

支柱穴は 4 基確認できた。ＳＰ 1 は円形を呈し、直径約 0.50 m、深さ約 0.41m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘方上層が黒褐シルト、下層が暗褐シルト混じり細砂と褐シルト混じり細砂である。ＳＰ 2 は円形を呈し、直径約 0.50 m、深さ約 0.62m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。覆土の下に柱痕が確認できた。埋土は覆土が黒褐粗砂混じりシルトと褐粗砂混じりシルト、柱痕が黒褐シルト～粘土、掘方が暗褐粗砂混じり粘土と暗褐シルトである。ＳＰ 3 は楕円形を呈し、長軸約 0.69 m、短軸約 0.31 m、深さ約 0.57m を測る。断面形状はＶ字

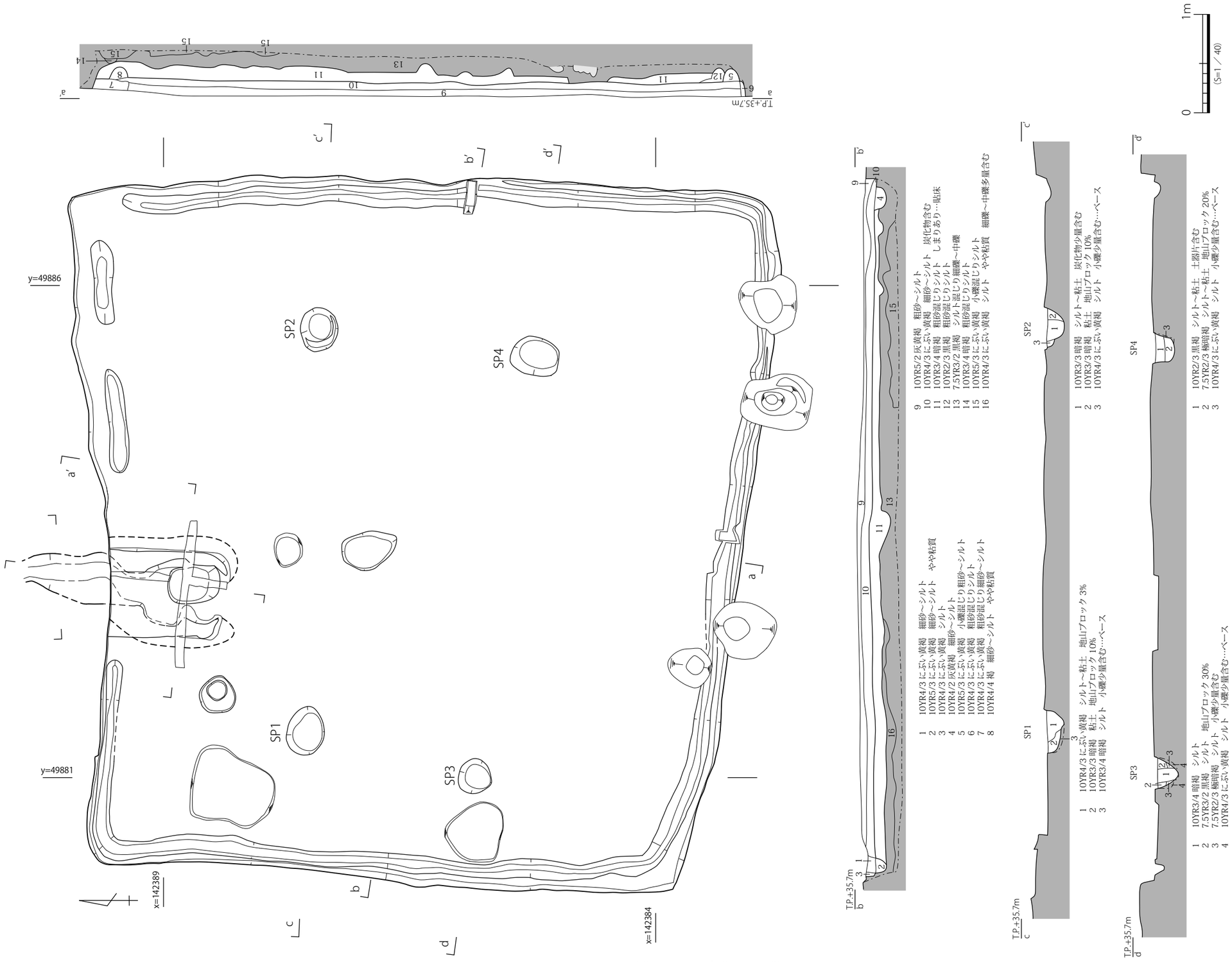
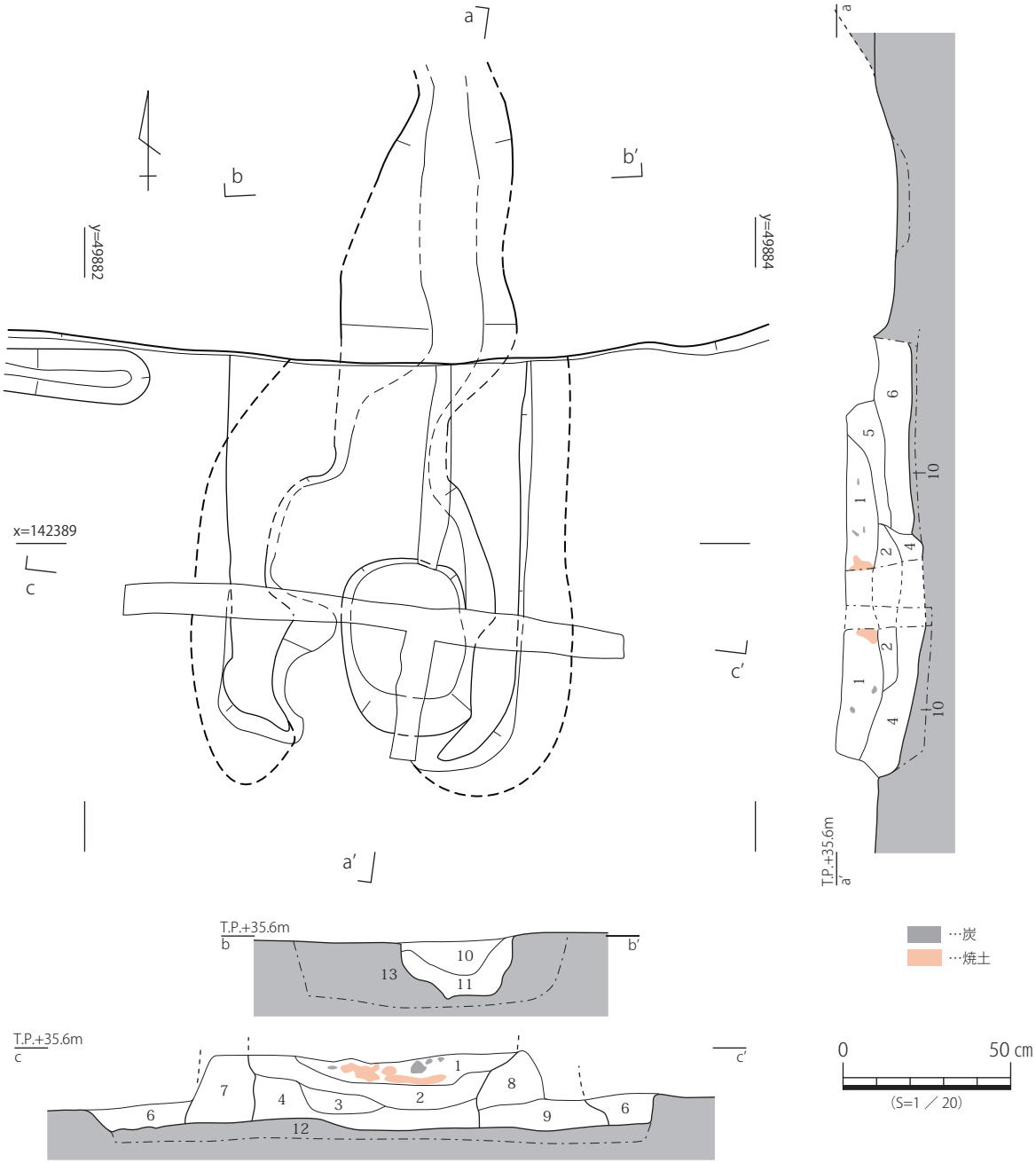


図 33　14- 竪穴 2　平・断面図



1　7.5YR3/2 黒褐　シルト～粘土　炭化物含む　焼土多量含む　土器片含む
2　10YR2/3 黒褐　粘土
3　10YR3/3 暗褐　シルト～粘土
4　10YR3/3 暗褐　シルト～粘土　地山ブロック 15%
5　10YR3/4 暗褐　シルト　地山ブロック 30%
6　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト　地山ブロック 40%…貼床
7　10YR3/4 暗褐　シルト　地山ブロック 40%
8　10YR3/4 暗褐　シルト　地山ブロック 40%
9　7.5YR3/2 黒褐　シルト～粘土　地山ブロック 10%　小礫少量含む
10　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂…煙道埋土
11　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト　地山ブロック含む…煙道埋土
12　10YR4/4 褐　シルト　小礫多量含む…ベース
13　10YR5/3 にぶい黄褐　細砂…ベース

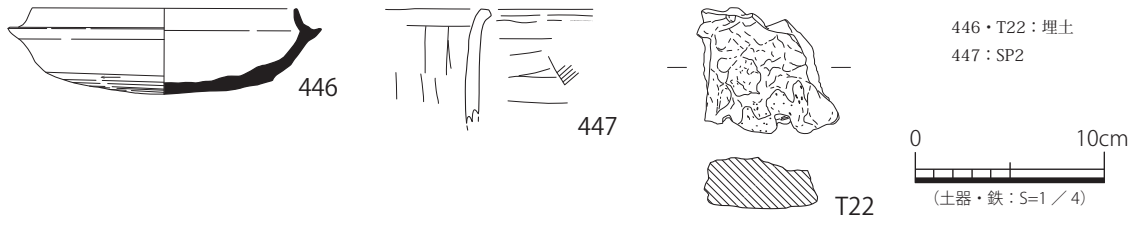
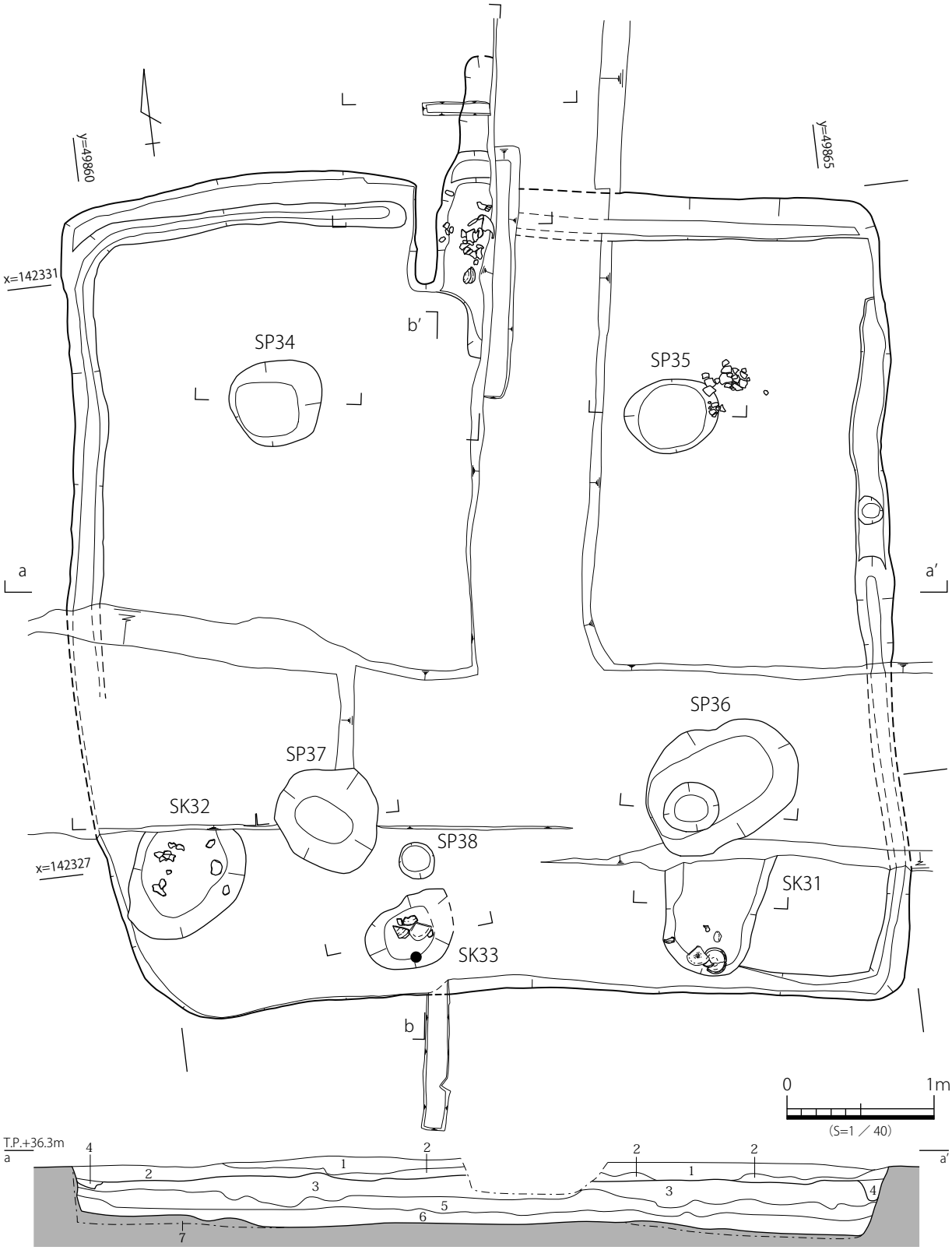


図 34　14- 竪穴 2　カマド及び出土遺物実測図



1　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂　炭化物含む　土器片含む
2　10YR4/3 褐　細砂～シルト　炭化物含む
3　10YR4/4 褐　細砂～シルト　粘土ブロック 3%…貼床
4　10YR3/3 暗褐　シルト…周壁溝
5　10YR6/3 にぶい黄橙　細砂　しまり強　炭化物含む　白い砂…貼床
6　10YR5/3 にぶい黄褐　シルト混じり細砂　黒色・地山ブロック含む…貼床
7　10YR5/4 にぶい黄褐　シルト…ベース

図 35　14- 竪穴 30　平・断面図 (1)

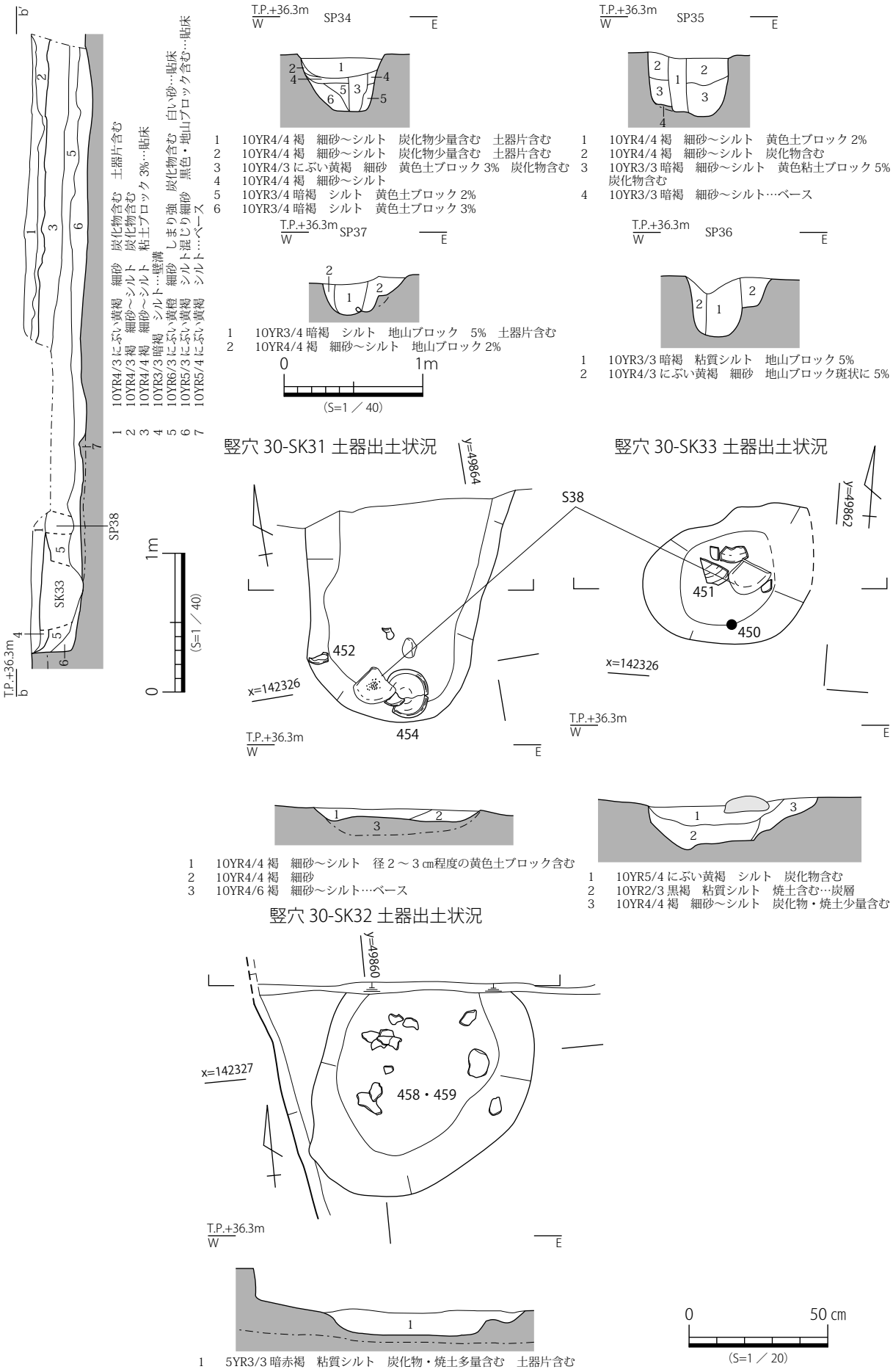


図 36　14- 竪穴 30　平・断面図 (2)

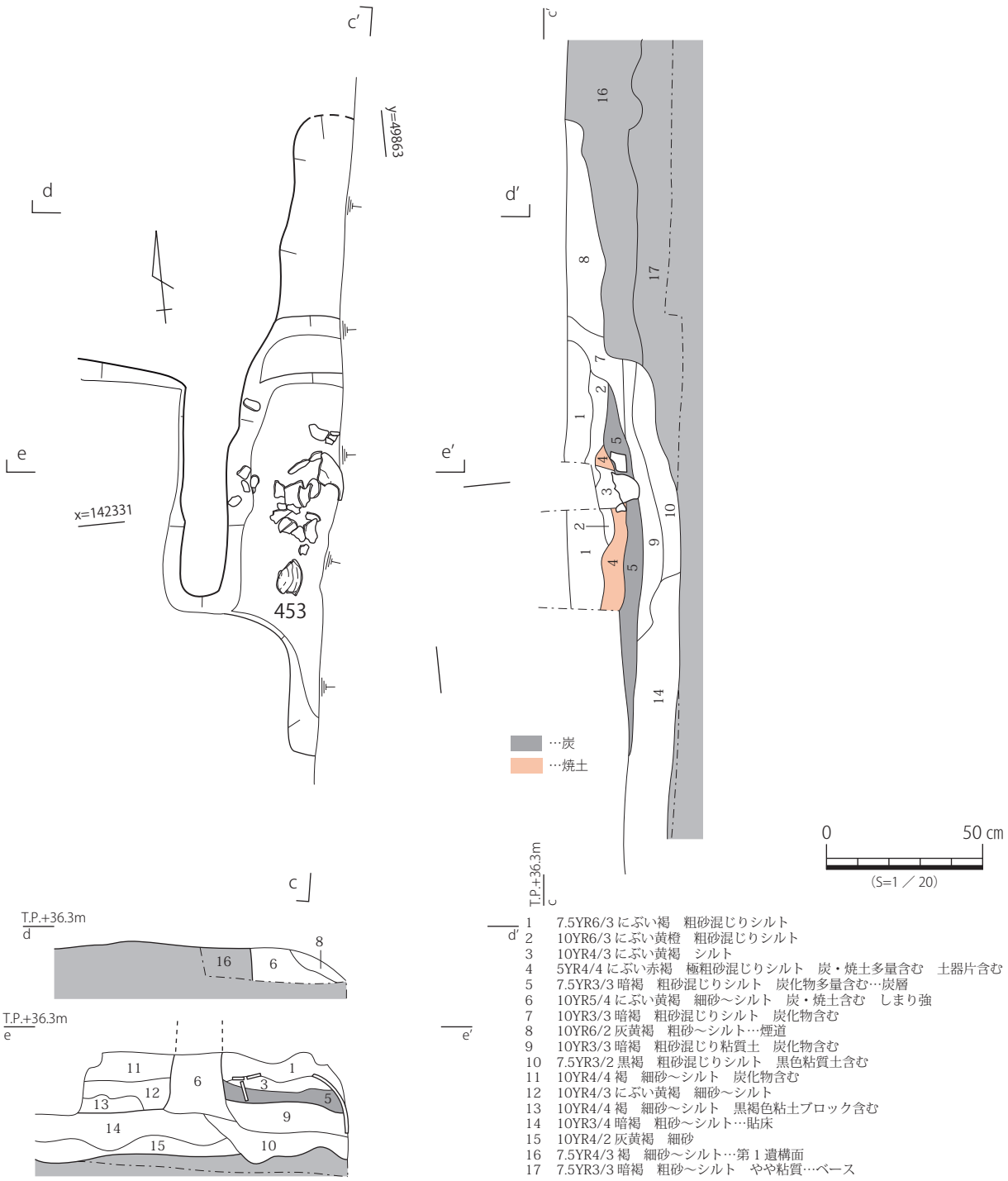


図 37　14- 竪穴 30　カマド

形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト～粘土、掘方が暗褐粗砂混じりシルトと褐粗砂混じりシルト、灰褐粗砂混じりシルトである。ＳＰ４は円形を呈し、直径約 0.50 m、深さ約 0.37m を測る。断面形状はやや歪なＵ字形を呈する。埋土は上層が暗褐粗砂混じりシルト～粘土、下層が暗褐シルトである。

ＳＰ 415 は建物南端で検出したピットである。14- 竪穴 18 に切られるため、全体の形状は不明であるが、楕円形を呈すると考えられる。短軸約 0.33 m、深さ約 0.26m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は上層が暗褐シルト、下層が暗褐細砂～シルトである。

出土遺物の年代から、古墳時代後期前葉と推定できる。

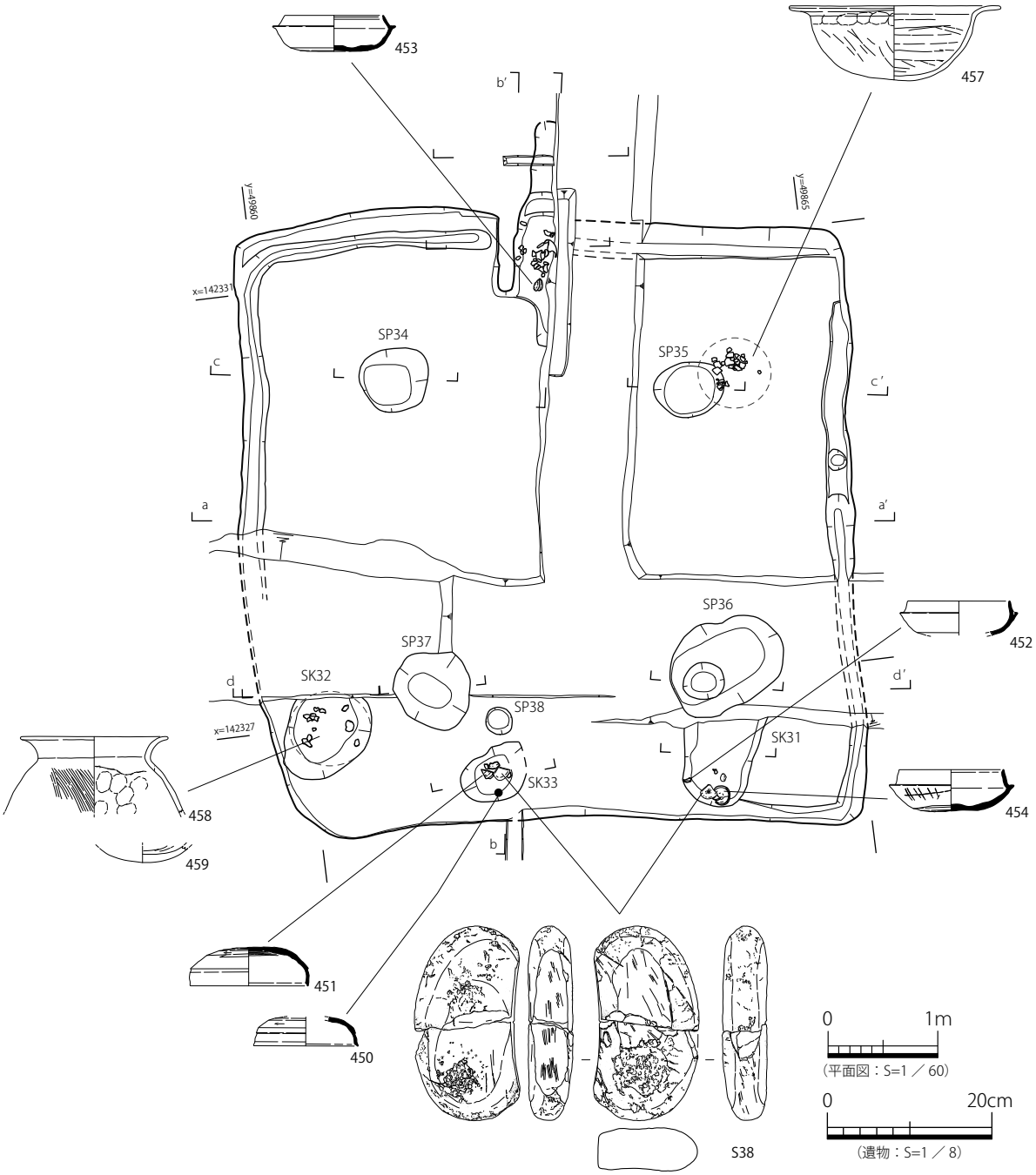


図 38　14- 竪穴 30　遺物出土状況

27 ―竪穴 7(図 43)

第 27 調査区北側で検出した竪穴建物である。27- 竪穴 2 と 14- 竪穴 15 と 14- 竪穴 16 に切られるため、全体の形状は不明である。第 14 調査区では検出できなかった。主軸方位 N-2° -W、検出面の標高は 35.6m である。規模は、長辺約 3.2m 以上、短辺約 2.9m 以上、深さ約 0.20m を測る。

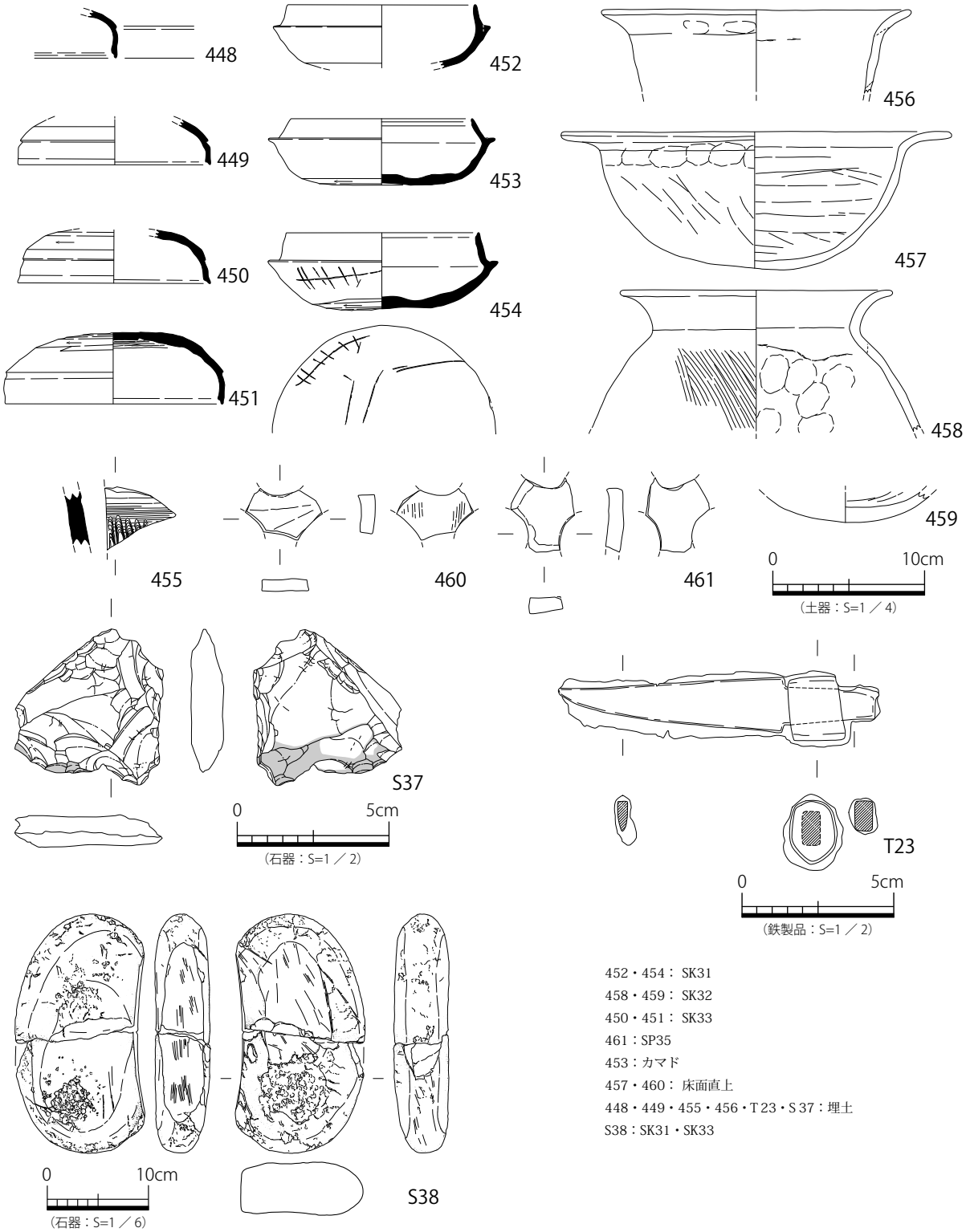
埋土はにぶい黄褐シルト混じり細砂とにぶい黄橙シルト混じり細砂､灰黄褐シルト混じり細砂である。また図示できなかったが､須恵器杯蓋片が出土した。

貼床はにぶい黄橙シルト混じり細砂である。西側には礫層が確認でき、床面が判然としなかった。後述する地震の影響と考えられる。

周壁溝は幅約 0.14 m、深さ約 0.02m を測る。

支柱穴は南東側の 1 基を確認できた｡円形を呈し、直径約 0.36 m、深さ約 0.14m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は単層で、にぶい黄橙シルト混じり細砂である。

建物の切り合い関係から、古墳時代後期前半としておく。



452・454： SK31
458・459： SK32
450・451： SK33
461：SP35
453：カマド
457・460： 床面直上
448・449・455・456・T 23・S 37：埋土
S38：SK31・SK33

図 39　14- 竪穴 30　出土遺物実測図

27 －竪穴 2(図 44 ～ 46)

第 27 調査区北側で検出した竪穴建物である。撹乱に切られ、調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-9°-W、検出した標高は 35.5m である。平面形状は方形で、規模は、長辺約 6.10m、短辺約 4.7m 以上、深さ約 0.20m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (ＳＰ１・２・４・６)、ピット (ＳＰ５・7) を検出した。

埋土は灰黄褐細砂～中粒砂混じりシルトである。遺物は埋土から須恵器杯身 (406)・杯蓋 (465)、須恵器杯身片・壺片、土師器甑片が出土した。

貼床は暗褐シルト～細砂とにぶい黄橙シルト混じり細砂である。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられ、煙道が建物の外へと延びる。カマド構築材は暗褐細砂～シルトとにぶい黄褐シルトである。カマド内部は掘窪め、底部に被熱面が確認できたことから、カマドの機能面と考えられる。被熱面上面の堆積は、カマドの上部構造の崩落土と考えられる。遺物はカマド内部から須恵器瓹 (468)、土師器甕 (470)・粗製高杯 (469)、図示した遺物の他に土師器甑片が出土した。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.20 m、深さ約 0.05m を測る。埋土は黒褐細砂混じりシルトである。

支柱穴は 4 基確認できた。ＳＰ１は円形を呈し、直径約 0.43 m、深さ約 0.31m を測る。断面形状は椀状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい黄褐細砂、掘方が褐細砂である。ＳＰ２は円形を呈し、直径約 0.38 m、深さ約 0.26m を測る。断面形状は椀状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂～シルト、掘方が褐細砂～シルトである。ＳＰ４は調査区外へと展開するため、全体の形状は不明である。断面形状は不整形である。直径約 0.58 m、深さ約 0.34m を測る。埋土は上層が暗褐シルト混じり細砂、下層が地山ブロック土を含む暗褐シルト混じり細砂である。ＳＰ６は円形を呈し、直径約 0.28 m、深さ約 0.27m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。埋土は単層で、暗褐シルト混じり細砂である。

ＳＰ５は撹乱に切られるため、全体の形状は不明である。直径約 0.71 m、深さ約 0.24m を測る。断面形状は不整形である。埋土は褐シルト混じり細砂である。ＳＰ７は不整形なピットで、直径約 0.29 m、深さ約 0.20m を測る。断面形状は椀状を呈する。埋土は単層で、暗褐シルト混じり細砂である。

出土遺物からＭＴ 85 ～ＴＫ 43 型式併行期と判断できる。

14 －竪穴 18(図 47 ～ 48)

第 14 調査区中央やや北寄りで検出した竪穴建物である。14- 竪穴 2 を切る。主軸方位 N-13°-W、検出面の標高は 35.5 ～ 35.4m である。平面形状は方形で、規模は、長辺 4.40m、短辺 4.10m、深さ 0.25m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (ＳＰ１～４)、ピットを検出した。

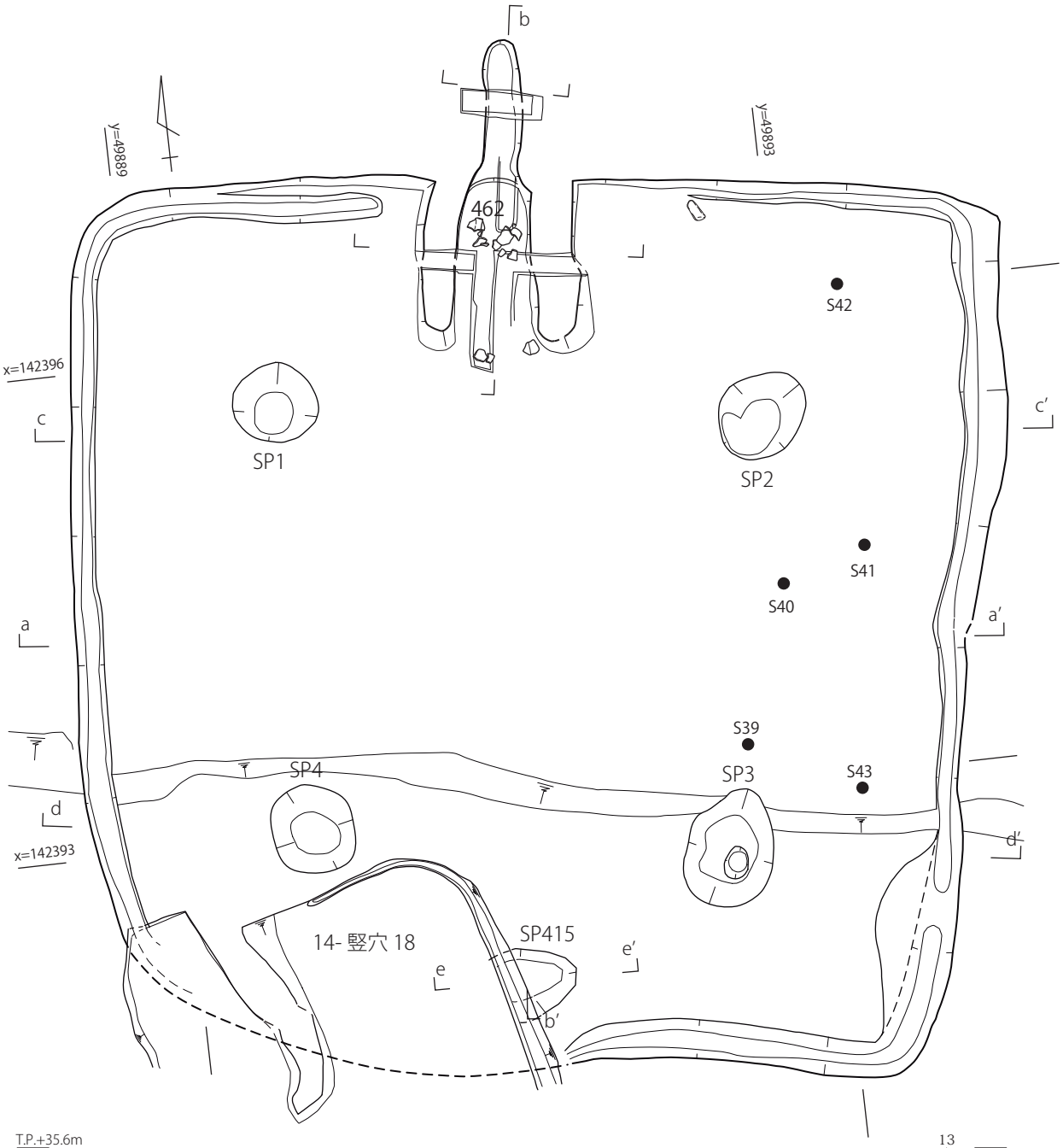
埋土は黒褐細砂～シルトと暗褐細砂～シルトである。埋土から須恵器杯蓋 (471・472)・器台 (473)・瓹 (474)、土師器椀 (476)、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片、土師器甕片・高杯片・壺片、製塩土器片、サヌカイト製の剥片が出土した。

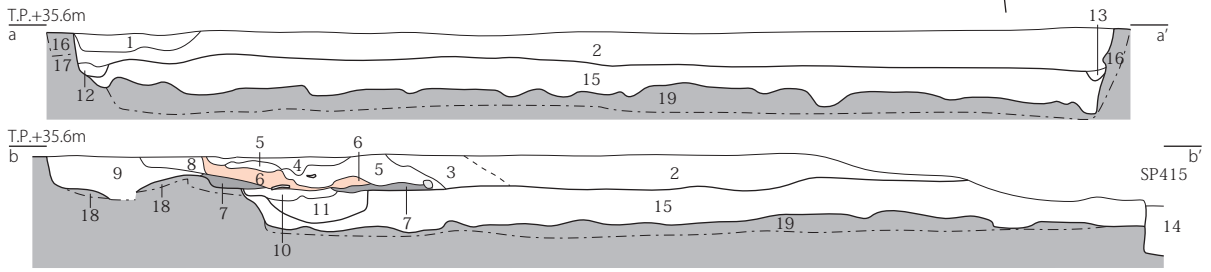
貼床は地山ブロック土を含む暗褐シルトである。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられる。カマド構築材は灰黄褐シルトである。カマド内部はやや掘窪める。遺物はカマドの機能面から土師器甕 (477) や大型の甕の体部、その他図示した遺物の他に、土師器甕片が出土した。

周壁溝は幅約 0.11 m、深さ約 0.05m を測る。埋土は褐シルトと暗褐シルトである。

支柱穴は 4 基確認できた。ＳＰ１は楕円形を呈し、長径約 0.52 m、短径約 0.4 m、深さ約 0.24m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘方が黄灰シルトと黒褐細砂～シルトである。ＳＰ２はやや歪な円形を呈し、直径約 0.43 m、深さ約 0.28m を測る。断面形状は段落ちに逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗灰黄シルト、掘方が暗オリーブ褐シルトとオリーブ褐シルトである。遺物は須恵器壺 (475) が出土した。ＳＰ３は円形を呈し、直径約 0.35 m、深さ約 0.17m を測る。断面形状は椀状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘方が黒褐細礫混じりシルトである。ＳＰ４は円形を呈し、直径約 0.27 m、深さ約 0.12m を測る。断面形状は椀状を呈する。埋土は単層で、オリーブ褐シルトである。



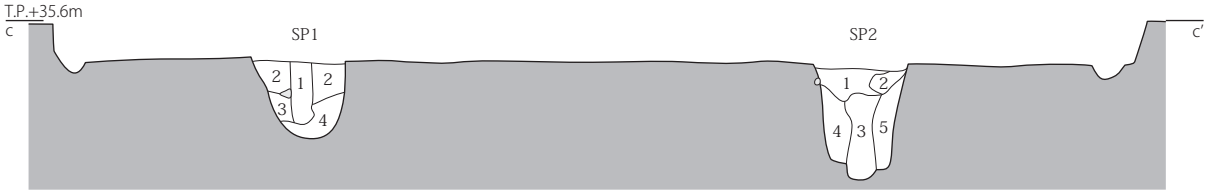


1　7.5YR2/2 黒褐　粗砂混じりシルト～粘土
2　7.5YR3/3 暗褐　粗砂混じり粘質土　地山ブロック斑状に 7%　炭化物含む　土器片含む
3　7.5YR3/2 黒褐　細礫混じりシルト
4　7.5YR3/3 暗褐　粗砂混じりシルト　炭化物・焼土含む
5　10YR3/4 暗褐　細礫混じりシルト　やや粘質　炭化物・焼土含む　土器片含む
6　7.5YR3/4 暗褐　粗砂混じり粘質土　炭化物・焼土多量含む
7　7.5YR2/2 黒褐　粘土…炭層
8　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト
9　7.5YR4/3 褐　細礫混じり粗砂～シルト　焼土含む…煙道埋土
10　7.5YR3/3 暗褐　シルト混じり細砂　径 5 ㎝程度の地山ブロック斑状に 10%
11　7.5YR3/4 暗褐　細砂　径 2 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック亜角礫状に 3%
12　7.5YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト　やや粘質　地山ブロック斑状に 5%
13　7.5YR3/2 黒褐　シルト～粘土　地山ブロック 2%
14　10YR3/4 暗褐　シルト　地山ブロック 2%　炭化物含む　土器片含む
15　10YR3/4 暗褐　シルト　地山ブロック 40%　砂礫多量含む…貼床
16　7.5YR3/2 黒褐　シルト
17　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト
18　10YR3/4 暗褐　細砂～シルト…ベース
19　10YR5/4 にぶい黄褐　極細砂～シルト　砂礫多量含む…ベース

…炭・焼土混
…炭

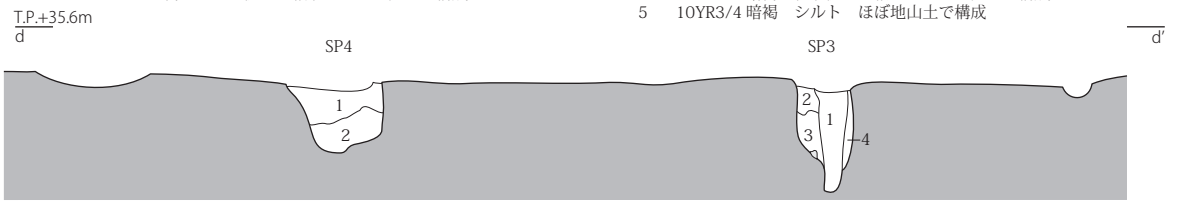
0　1m
（S=1／40）

図 40　14- 竪穴 23　平・断面図



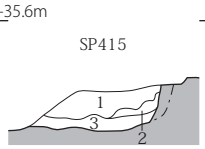
1　5YR2/2 黒褐　シルト　径 1 ㎝程度の地山ブロック斑状に 2%
2　7.5YR3/2 黒褐　シルト　径 2 ㎝程度の地山ブロック 5%
3　7.5YR3/4 暗褐　シルト混じり細砂
4　7.5YR4/4 褐　シルト混じり細砂　ほぼ地山土で構成

1　7.5YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト　地山ブロック斑状に 3%
2　10YR4/4 褐　粗砂混じりシルト
3　10YR2/2 黒褐　シルト～粘土　炭化物含む
4　10YR3/3 暗褐　粗砂混じり粘土　ほぼ地山土で構成
5　10YR3/4 暗褐　シルト　ほぼ地山土で構成

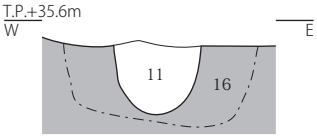


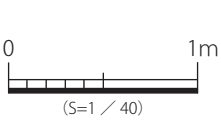
1　10YR3/3 暗褐　粗砂混じりシルト～粘土　土器片含む
2　10YR3/4 暗褐　シルト　地山ブロック斑状に 20%

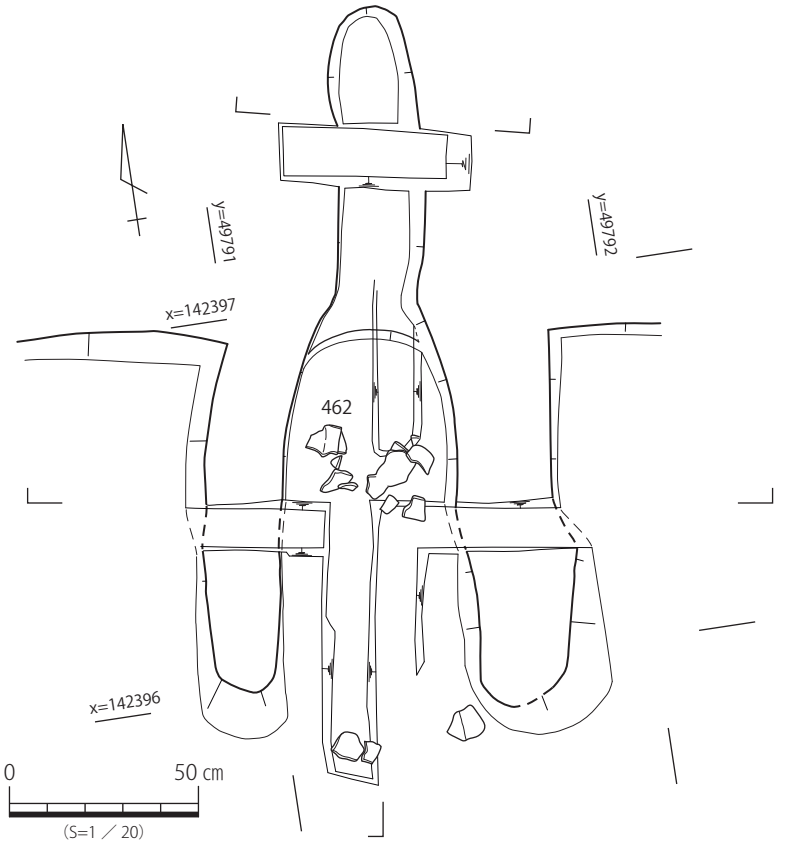
1　7.5YR3/3 暗褐　シルト～粘土　地山ブロック斑状に 5%　炭化物含む
2　7.5YR3/4 暗褐　粗砂混じりシルト　炭化物含む
3　7.5YR4/3 褐　粗砂混じりシルト　地山ブロック斑状に 30%
4　7.5YR4/2 灰褐　粗砂混じりシルト　地山ブロック 60%　炭化物含む

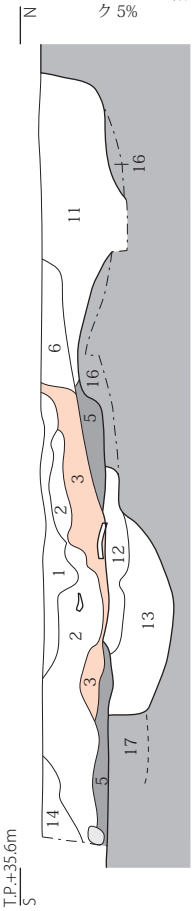


1　10YR3/4 暗褐　シルト　地山ブロック 2%
炭化物含む　土器片含む
2　10YR3/4 暗褐　シルト
3　10YR3/4 暗褐　細砂～シルト　地山ブロック 5%

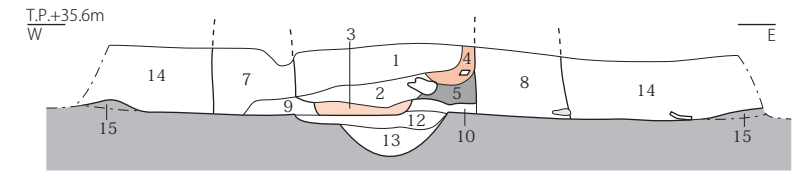








1　7.5YR3/3 暗褐　粗砂混じりシルト　炭化物・焼土含む
2　10YR3/4 暗褐　細礫混じりシルト　やや粘質　炭化物・焼土含む
土器片含む
3　7.5YR3/4 暗褐　粗砂混じり粘質土　炭化物・焼土多量含む
4　5YR4/4 にぶい赤褐　粗砂混じりシルト　ほぼ焼土
5　7.5YR2/2 黒褐　粘土　炭化物多量含む
6　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト
7　7.5YR4/3 褐　粗砂混じりシルト
8　7.5YR3/3 暗褐　粗砂混じりシルト
9　10YR4/4 褐　粗砂混じりシルト
10　7.5YR3/2 黒褐　シルト～粘土
11　7.5YR4/3 褐　細礫混じり粗砂～シルト　焼土含む…煙道埋土
12　7.5YR3/3 暗褐　シルト混じり細砂　径 5 ㎝大の地山ブロック斑状に 10%
13　7.5YR3/4 暗褐　細砂　径 2 ～ 3 ㎝大の地山ブロック亜角礫状に 3%
14　7.5YR3/2 黒褐　細礫混じりシルト
15　10YR4/4 褐　粗砂混じりシルト　やや粘質…貼床
16　10YR3/4 暗褐　細砂～シルト…ベース
17　7.5YR3/3 暗褐　シルト混じり細砂　径 1 ㎝大の地山ブロック 3%



…炭・焼土混
…炭
…焼土

図 41　14- 竪穴 23　断面図及びカマド

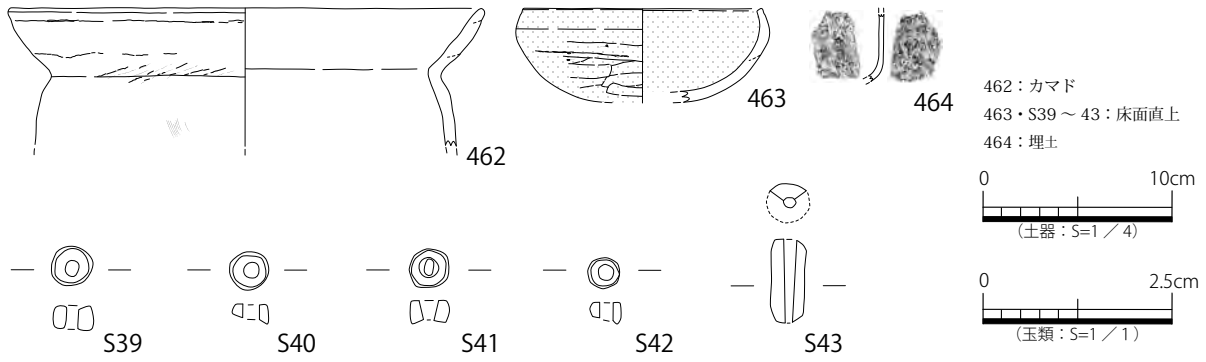


図 42　14- 竪穴 23　出土遺物実測図

出土遺物からＴＫ 43 ～ＴＫ 209 型式併行期と判断できる。

14 －竪穴 12(図 49 ～ 51)

第 14 調査区中央北側で検出した竪穴建物である。主軸方位 N-7° -W、検出面の標高は 35.6 ～ 35.5m である。平面形状は方形を呈する。規模は、長辺約 5.40m、短辺約 5.30m、深さ約 0.45m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (ＳＰ１～４)、土坑 (ＳＫ 363)、ピット (ＳＰ５) を検出した。

埋土は灰黄褐礫混じりシルトである。埋土から須恵器杯蓋 (478)、土師器壺 (482)・甑 (483・484)・甕 (481)、須恵器杯身片、土師器甑片･甕片･高杯片･壺片、製塩土器片が出土した。

貼床はにぶい黄礫混じりシルトである。遺物はカマド左袖横の床面から手捏鉢 (480)、鉄滓 (T24) が出土した。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられる。カマド構築材は極暗褐シルト～粘土である。カマド底部には炭化物層が確認でき、機能面と考えられる。

遺物は土師器甕 (481)、図示した遺物の他に、カマドから須恵器杯身片・壺片が出土した。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.14 m、深さ約 0.10m を測る。埋土は灰黄細砂～シルトと黄灰シルト、暗褐粘土である。

支柱穴は 4 基確認できた。ＳＰ１は楕円形を呈し、長径約 0.93 m、短径約 0.62 m、深さ約 0.51m を測る。断面形状は段落ちにＵ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト～粘土、掘方が黒褐シルトである。ＳＰ２は円形を呈し、直径約 0.28 m、深さ約 0.32m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト～粘土、掘方が灰黄褐シルトである。ＳＰ３は円形を呈し、直径約 0.45 m、深さ約 0.41m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂混じりシルト、掘方が暗褐シルトと黒褐シルトである。ＳＰ４円形を呈し、直径約 0.55 m、深さ約 0.46m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。埋土は上層が暗褐細砂混じりシルト、下層がにぶい黄褐シルトと黒褐砂礫混じりシルトである。

ＳＫ 363 は不整形な形状を呈する。長径約 0.87 m、深さ約 0.23m を呈する。断面形状はやや歪な逆台形を呈する。埋土は上層が黒褐シルト～粘土、下層が暗褐シルトと暗褐極細砂である。須恵器杯身 (479) が出土した。

ＳＰ５は楕円形を呈し、長径約 0.78 m、短径約 0.63 m、深さ約 0.30m を測る。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐粘土と暗褐極細砂、掘方が褐極細砂である。

出土遺物の年代から、ＴＫ 209 型式併行期と判断できる。

27 －竪穴 140(図 52)

第 27 調査区南側で検出した竪穴建物である。27- 竪穴 130 に切られ、調査区外へ広がるため全体の形状は不明である。主軸方位 N-59° -E、検出面の標高は 36.1m である。規模は、長辺約 3.5m 以上、短辺約 2.6m 以上、深さ約 0.30m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、周壁溝と支柱穴 (ＳＰ１・２) を検出した。

埋土はにぶい黄褐シルト混じり細砂である。遺物は製塩土器片が出土した。

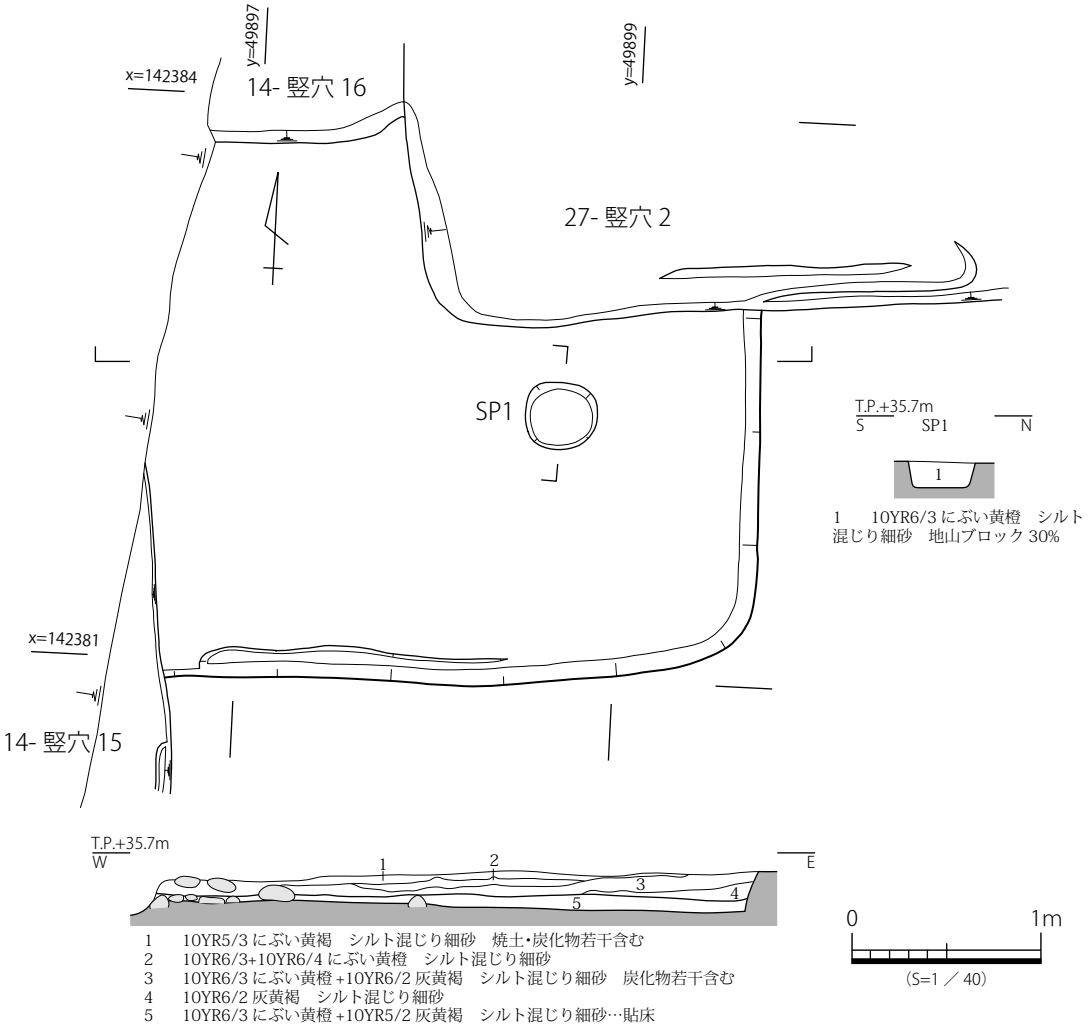


図 43　27- 竪穴 7　平・断面図

貼床は厚く施工されている。埋土は上層が暗褐粗砂混じりシルト、中層が黒褐粗砂混じりシルト、下層が暗褐細砂～シルトである。遺物は貼床除去中に土師器甕 (485)、製塩土器 (486)・製塩土器片が出土した。

周壁溝は幅約 0.10 m、深さ約 0.03m を測る。埋土は灰黄褐シルト混じり細砂である。

支柱穴は 2 基確認できた。ＳＰ１は円形を呈し、直径約 0.49 m、深さ約 0.18m を測る。断面形状は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト混じり中粒砂～細砂、掘方が暗褐粗砂混じり細砂～シルトと褐灰粗砂混じり細砂～微細砂である。ＳＰ２は円形を呈し、直径約 0.43 m、深さ約 0.13m を測る。断面形状は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト混じり微細砂、掘方が暗褐粗砂混じり細砂～微細砂と暗褐粗砂混じり細砂～シルトである。

竪穴建物の切り合い関係と出土遺物から本建物の構築時期は古墳時代後期後半と判断できる。

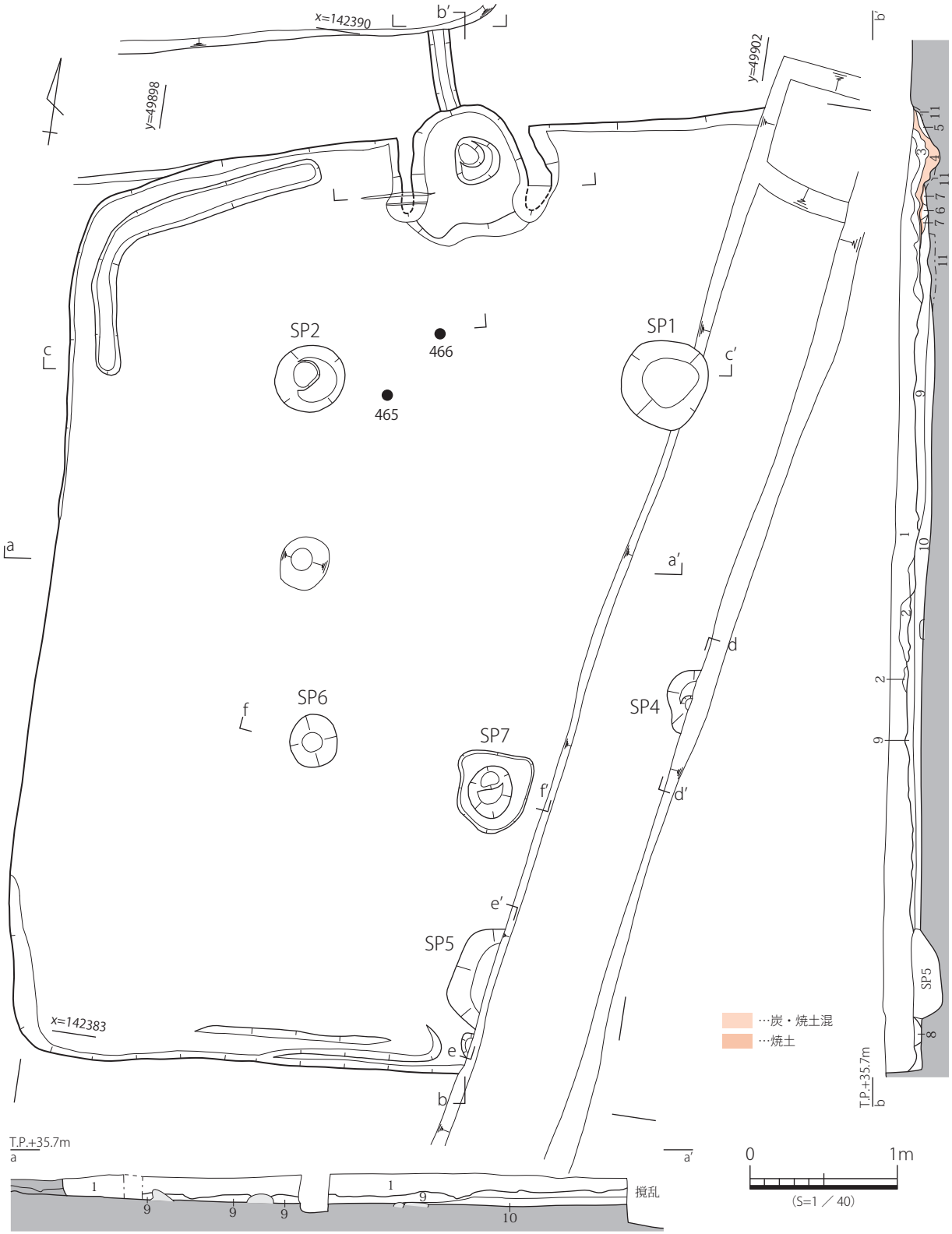
27 －竪穴 130(図 53 ～ 54)

第 27 調査区南側で検出した竪穴建物である。撹乱に切られ、調査区外へ広がる。主軸方位 N-32°-W、検出面の標高は 36.1m である。平面形状は方形を呈する。規模は、長辺約 6.00m、短辺約 4.4m 以上、深さ約 0.20m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (ＳＰ１～３) を検出した。

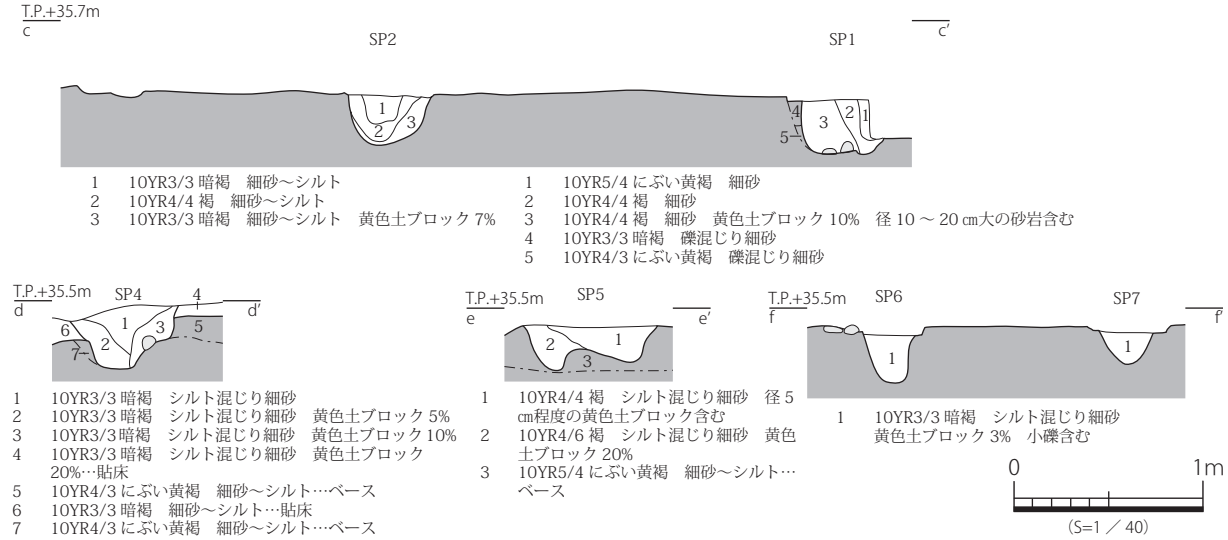
埋土は暗褐細砂～シルトである。遺物は須恵器椀 (488)、土師器甕 (489)、須恵器杯蓋片、土師器高杯片が出土した。

貼床はにぶい黄褐細砂～シルトと褐シルト混じり細砂、暗褐粗砂混じり細砂～シルトである。遺物は掘方から須恵器杯蓋 (487)、臼玉 (S44) 、須恵器杯



1　10YR4/2 灰黄褐　細砂～中粒砂混じりシルト　径２～３㎝程度の地山ブロック 7%　炭化物含む
2　10YR3/2 黒褐　シルト～細砂　径５㎝程度の地山ブロック 10%
3　7.5YR5/6 明褐　シルト混じり細砂　２～３㎝大の焼土粒含む…カマド袖崩落土＜カマド廃絶時＞
4　7.5YR3/1 黒褐　シルト混じり細砂　焼土・炭化物・炭粘土多量含む…灰かぶり層
5　10YR3/2 黒褐　シルト
6　7.5YR4/6 褐　シルト　被熱　４層上面がカマド使用時の機能面
7　7.5YR3/3 暗褐　シルト　上面に焼土　被熱著しい
8　10YR3/2 黒褐　細砂混じりシルト　径１㎝程度の地山ブロック斑状に 3%
9　10YR3/3 暗褐　シルト～細砂　径５㎝程度の地山ブロック 10%…貼床
10　10YR6/3 にぶい黄橙 +10YR5/2 灰黄褐　シルト混じり細砂…貼床
11　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト…ベース

図 44　27- 竪穴 2　平・断面図



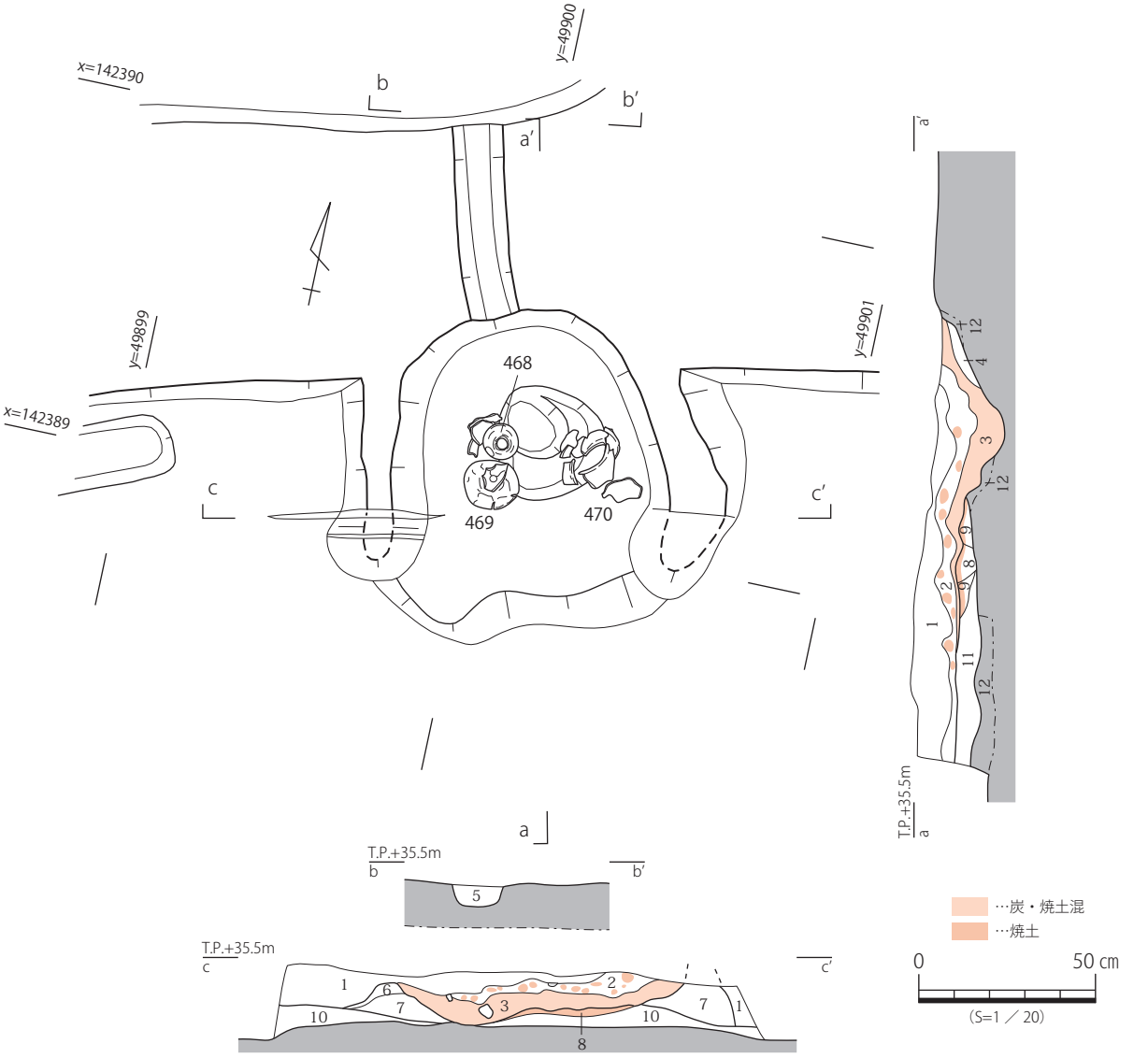
1　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト
2　10YR4/4 褐　細砂～シルト
3　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト　黄色土ブロック 7%

1　10YR5/4 にぶい黄褐　細砂
2　10YR4/4 褐　細砂
3　10YR4/4 褐　細砂　黄色土ブロック 10%　径 10 ～ 20 ㎝大の砂岩含む
4　10YR3/3 暗褐　礫混じり細砂
5　10YR4/3 にぶい黄褐　礫混じり細砂

1　10YR3/3 暗褐　シルト混じり細砂
2　10YR3/3 暗褐　シルト混じり細砂　黄色土ブロック 5%
3　10YR3/3 暗褐　シルト混じり細砂　黄色土ブロック 10%
4　10YR3/3 暗褐　シルト混じり細砂　黄色土ブロック 20%…貼床
5　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト…ベース
6　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト…貼床
7　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト…ベース

1　10YR4/4 褐　シルト混じり細砂　径 5 ㎝程度の黄色土ブロック含む
2　10YR4/6 褐　シルト混じり細砂　黄色土ブロック 20%
3　10YR5/4 にぶい黄褐　細砂～シルト…ベース

1　10YR3/3 暗褐　シルト混じり細砂　黄色土ブロック 3%　小礫含む



1　10YR3/3 暗褐　細砂…竪穴埋土
2　7.5YR5/6 明褐　シルト混じり細砂　2 ～ 3 ㎝大の焼土粒含む…カマド袖崩落土＜カマド廃絶時＞
3　7.5YR3/1 黒褐　シルト混じり細砂　焼土・炭化物・炭粘土多量含む…灰かぶり層
4　10YR3/2 黒褐　シルト
5　10YR3/2 黒褐　細砂～シルト　にぶい黄褐色シルトブロック含む…煙道埋土
6　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト…カマド袖
7　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト　黄褐色粘砂質土の中に暗褐色土ブロック 5%…カマド袖
8　7.5YR4/6 褐　シルト　被熱…機能面
9　7.5YR3/3 暗褐　シルト　上面に焼土　被熱著しい
10　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト…貼床
11　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト…貼床
12　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト…ベース

図 45　27- 竪穴 2　断面図及びカマド

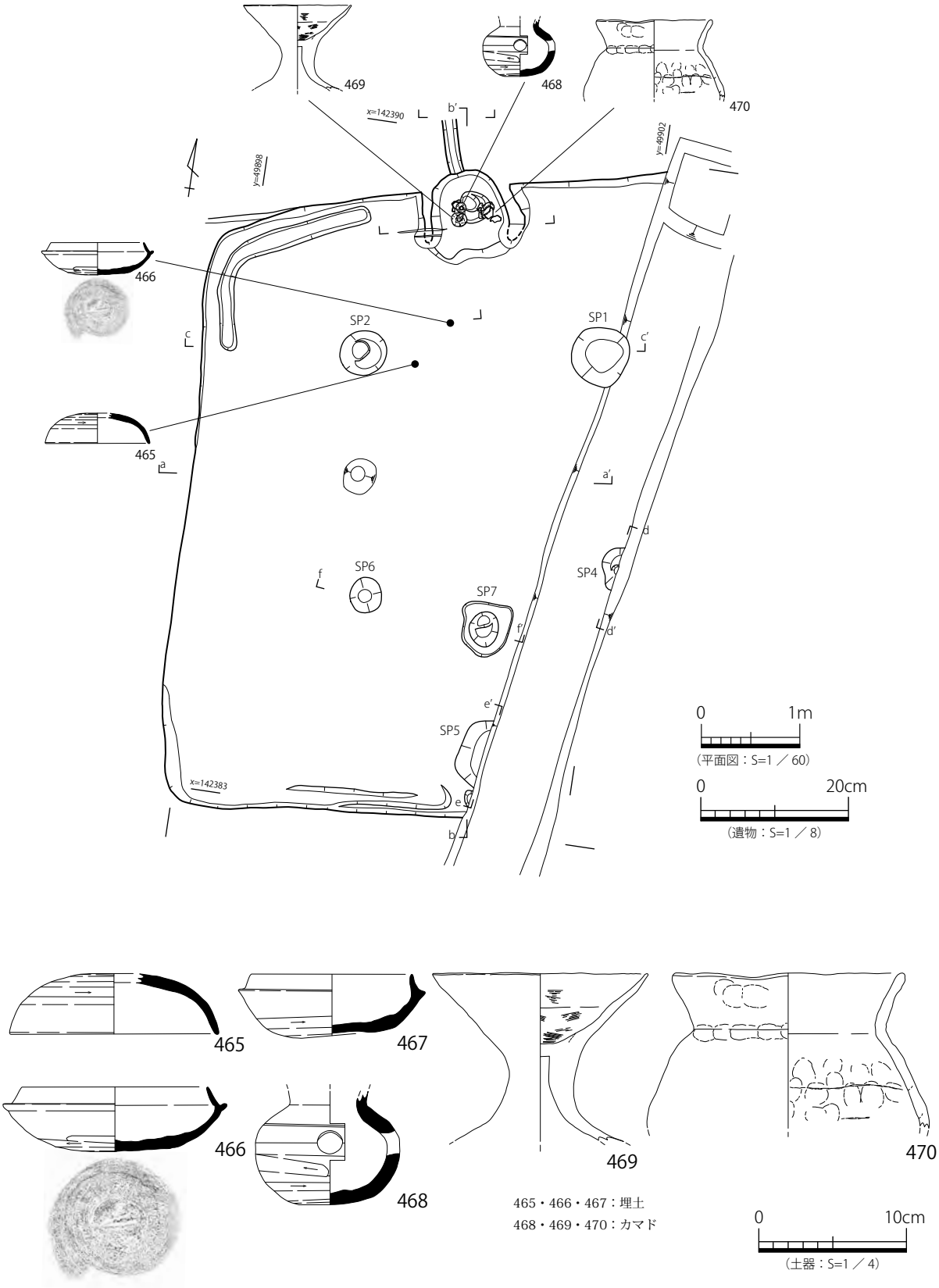


図 46　27- 竪穴 2　遺物出土状況及び出土遺物実測図

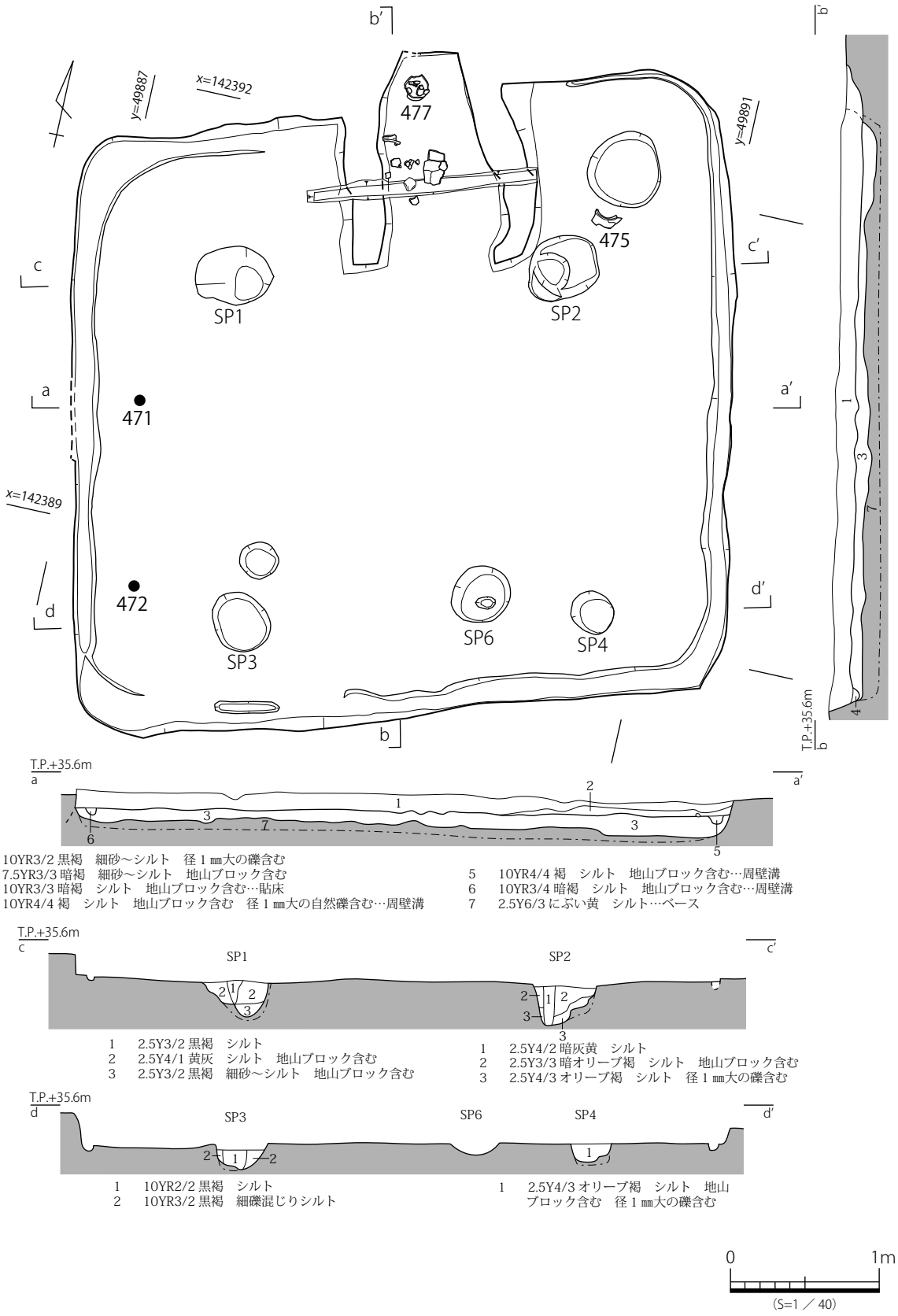
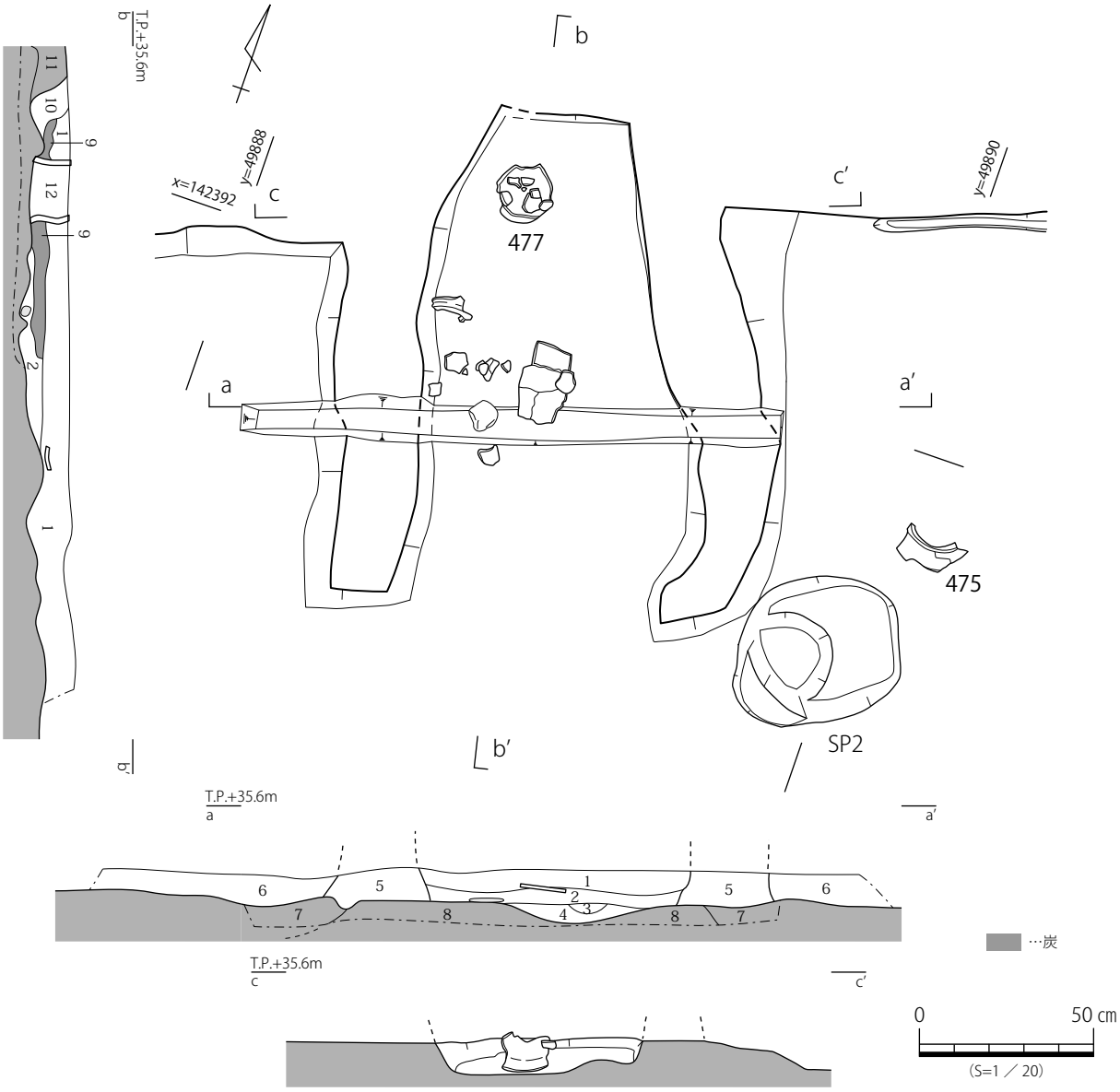
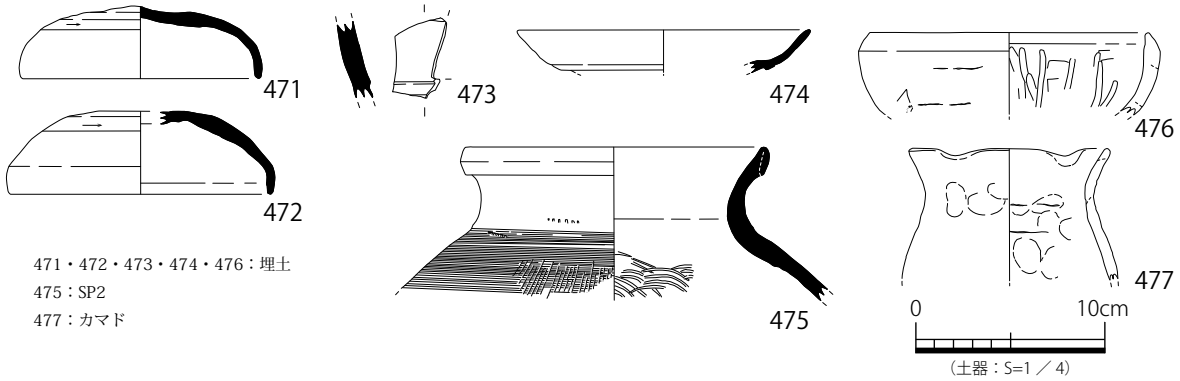


図 47　14- 竪穴 18　平・断面図

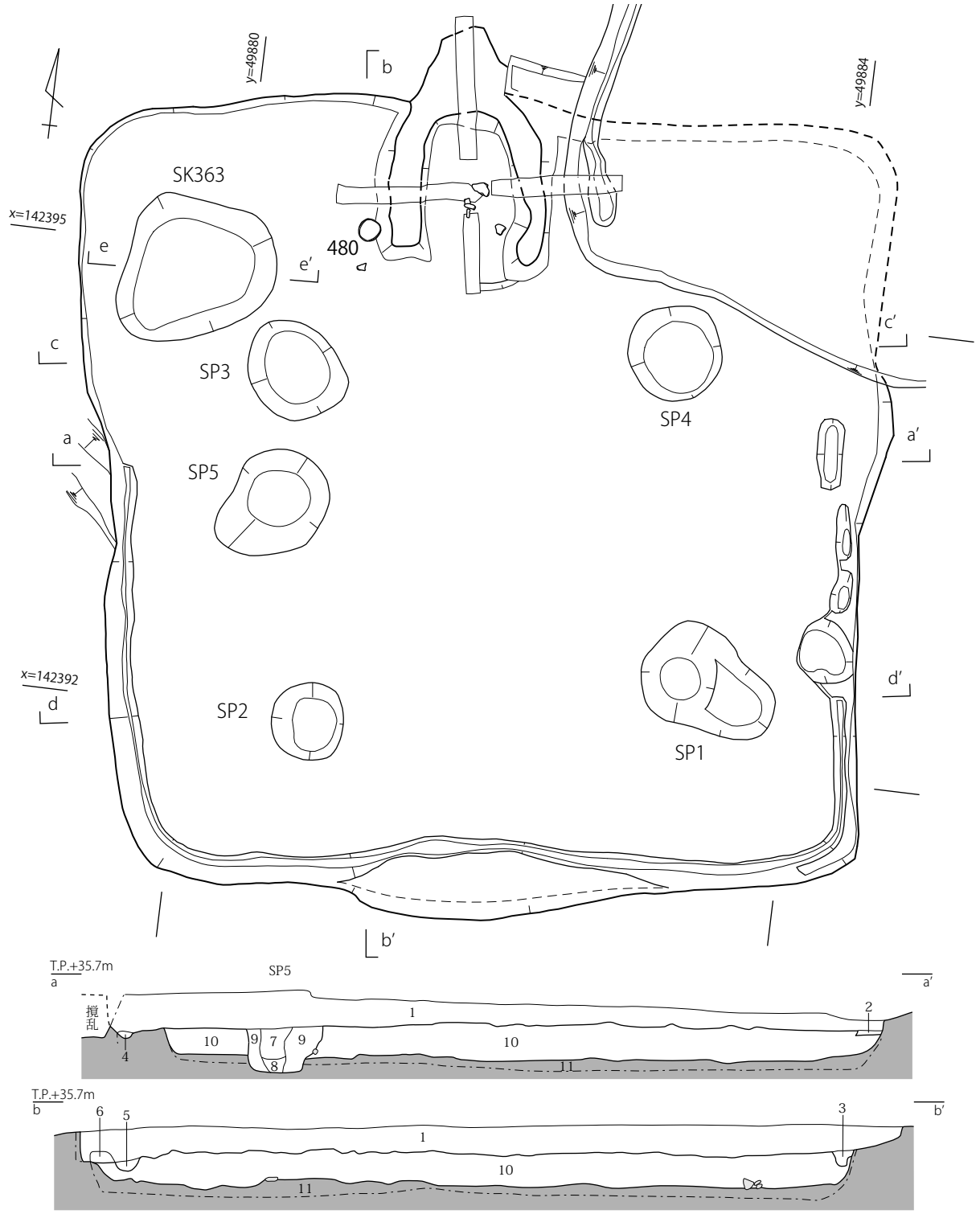


1　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト　地山ブロック含む　径 1 ㎜大の礫含む
2　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト　地山ブロック含む
3　10YR3/3 暗褐　シルト　地山ブロック含む
4　10YR3/3 暗褐　シルト　地山ブロック含む
5　10YR4/2 灰黄褐　シルト
6　10YR4/2 灰黄褐　シルト　地山ブロック含む
7　10YR3/2 黒褐　シルト　地山ブロック含む…貼床
8　2.5Y5/3 黄褐　シルト
9　10YR2/2 黒褐　シルト　炭化物多量含む
10　10YR4/2 灰黄褐　シルト　径 1 ㎜大の礫含む
11　10YR3/2 黒褐　シルト　地山ブロック含む…14- 竪穴 23
12　10YR5/2 灰黄褐　シルト



471・472・473・474・476：埋土
475：SP2
477：カマド

図 48　14- 竪穴 18　カマド及び出土遺物実測図



1　10YR4/2 灰黄褐　礫混じりシルト　炭化物含む
2　7.5YR5/4 にぶい褐　シルト…周壁溝
3　2.5Y6/2 灰黄　細砂～シルト…周壁溝
4　2.5Y4/1 黄灰　シルト　地山ブロック含む…周壁溝
5　7.5YR3/3 暗褐　粘土…周壁溝
6　7.5YR5/4 にぶい褐　極細砂～シルト
7　10YR2/3 黒褐　粘土　地山ブロック 7%
8　10YR3/4 暗褐　極細砂　砂礫多量含む
9　10YR4/4 褐　極細砂　10YR3/3 暗褐色シルトブロック状に 20%
10　2.5Y6/3 にぶい黄　礫混じりシルト　粘土ブロック含む…貼床
11　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト…ベース

1　10YR2/3 黒褐　シルト～粘土　地山ブロック 25%
2　10YR3/4 暗褐　シルト　10YR2/3 黒褐色シルトブロック状に 7%
3　10YR3/4 暗褐　極細砂　10YR2/3 黒褐色シルトブロック状に 3%　砂礫少量含む

0　1m
(S=1 ／ 40)

図 49　14- 竪穴 12　平・断面図

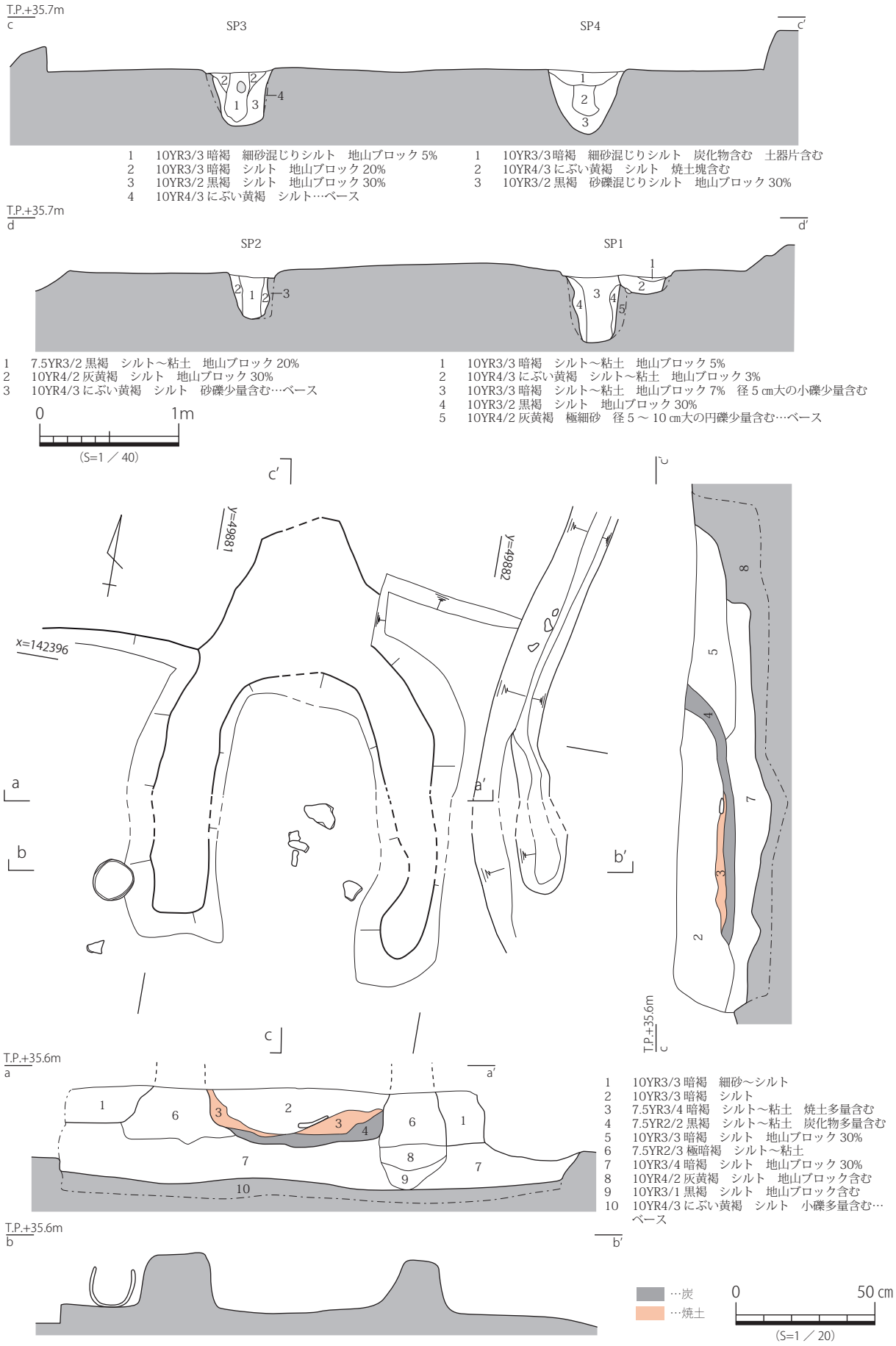


図 50　14- 竪穴 12　断面図及びカマド

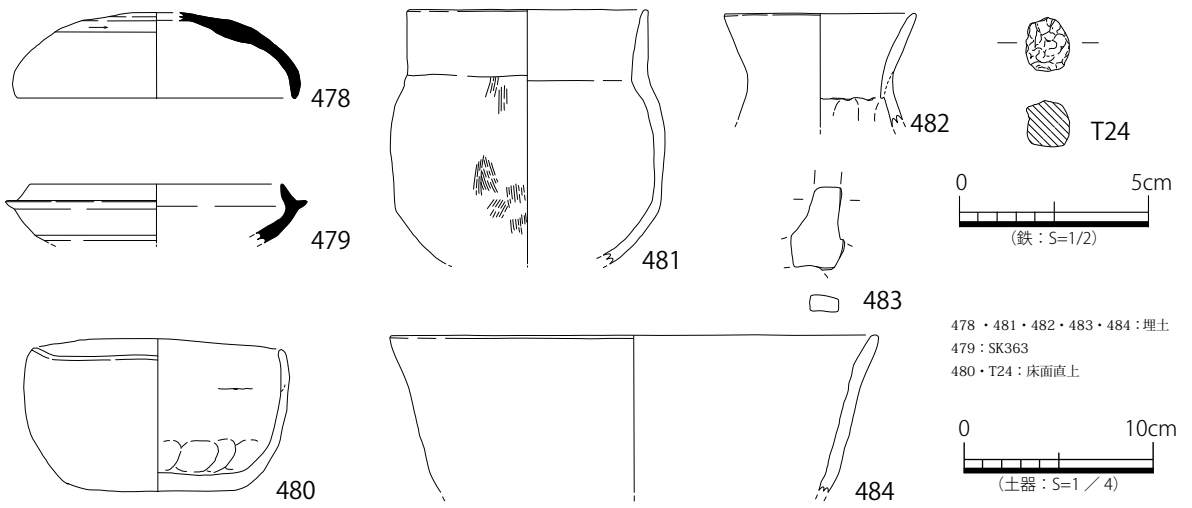


図 51　14- 竪穴 12　出土遺物実測図

身片・壺底部片、土師器甕片・高杯片が出土した。

カマドは竪穴建物西側中央に作り付けられる。カマド内部は掘窪め、中央やや奥に支脚石を配置する。カマド内部の堆積は、カマドの上部構造の崩落土と考えられる。カマド構築材はにぶい黄褐シルト混じり細砂である。遺物は土師器甕片・甑片が出土した。

周壁溝は幅約 0.15 m、深さ約 0.04m を測る。埋土は暗褐細砂～シルトである。

支柱穴は３基確認できた。ＳＰ１は円形を呈し、直径約 0.34 m、深さ約 0.27m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐中粒砂～シルト、掘方が地山ブロック土を含む暗褐中粒砂～シルトである。ＳＰ２は円形を呈し、直径約 0.38 m、深さ約 0.24m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が地山ブロック土を含む暗褐細砂～シルト、掘方が暗褐細砂～シルトとにぶい黄褐シルトである。ＳＰ３は円形を呈し、直径約 0.40 m、深さ約 0.15m を測る。断面形状は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂～シルト、掘方が暗褐中粒砂～シルトと暗褐細砂～シルトである。遺物は土師器高杯片・壺片が出土した。

出土遺物の年代から、古墳時代後期後半と判断できる。

14 －竪穴 29(図 55 ～ 56)

第 14 調査区北側で検出した竪穴建物である。14- 竪穴 26 を切り、撹乱に切られる。主軸方位 N-0°-W、検出面の標高は 35.3m である。平面形状は方形を呈する。規模は、長辺約 4.70m、短辺約 3.80m、深さ約 0.30m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (ＳＰ 413)、ピット (ＳＰ 403) を検出した。

埋土は暗褐シルトである。埋土から須恵器高杯片、土師器高杯片が出土した。

貼床は暗褐細砂～シルトと黒褐シルトである。遺物は貼床内から須恵器杯身片が出土した。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられる。カマド構築材は暗褐細砂～シルトと黒褐細砂～シルトである。カマド内部はやや掘窪める。カマド内部から須恵器甑 (491) と、完形の須恵器有蓋高杯 (490) が出土した。この高杯は、カマドの焼土面中央に倒位で置かれた状態で出土し、煤などの被熱を受けている痕跡はなかった。大阪難波宮 NW84-SB214 カマド出土の粘土を巻いて支脚としていた高杯が報告されており、本例も支脚として使用されていた可能性が高い。調査中にそのような認識はなかったため、高杯に巻かれていた粘土を確認できなかったものと思われる。図示した遺物の他に、カマドから土師器高杯片が出土した。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.10 m、深さ約 0.08m を測る。埋土は黒褐シルト～粘土である。

支柱穴は北東側の 1 基を確認した。ＳＰ 413 は円形を呈し、直径約 0.34 m、深さ約 0.32m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。覆土の下に柱痕が確認でき、埋土は覆土が暗褐細砂～シルト、柱痕が黒褐細砂、掘方がにぶい黄褐細砂と黒褐細砂である。

ＳＰ 403 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.41 m、深さ約 0.42m を測る。断面形状は不整形である。

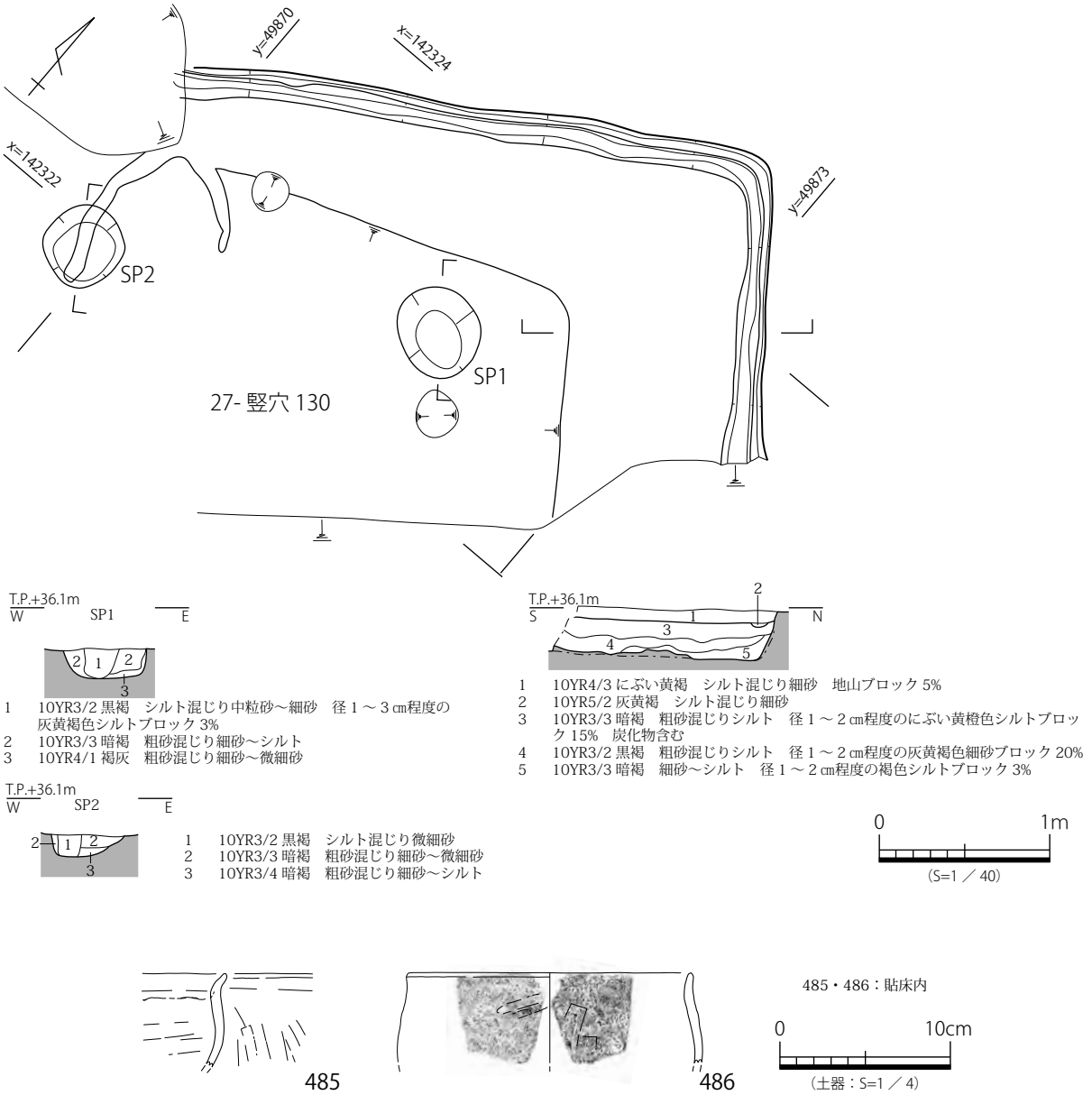


図 52　27- 竪穴 140　平・断面図及び出土遺物実測図

埋土は上層が黒褐シルト、中層が黒褐細砂～シルト、下層がオリーブ黒細砂である。

出土遺物の年代からＴＫ 209 型式併行期と判断できる。

14 ―竪穴 24(図 57)

第 14 調査区北端で検出した竪穴建物である。撹乱とＳＫ 325 に切られる。第 27 調査区でも検出した。主軸方位 N-1° -E、検出面の標高は 35.6m である。平面形状は横長方形を呈する。規模は、長辺約 5.0m 以上、短辺約 4.00m、深さ約 0.40m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、周壁溝と支柱穴 (ＳＰ１・３・5)、ピット (ＳＰ２・4) を検出した。

埋土は黒褐粘土である。遺物は土師器片が出土した。

貼床は暗褐シルト～粘土である。

周壁溝は幅約 0.10 m、深さ約 0.04m を測る。埋土は黒褐シルト～粘土である。

支柱穴は３基確認できた。ＳＰ１はやや歪な円形を呈し、直径約 0.31 m、深さ約 0.20m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐粘土、掘方が黒褐シルト～粘土である。ＳＰ３は楕円形を呈し、長径約 0.48 m、深さ約 0.25m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。埋土は上層が暗褐シルト、中層が黒褐シルト、下層

が極暗褐シルトである。ＳＰ５は撹乱に大きく切られるため、底部のみを確認した。残存長径 0.20 m、深さ約 0.07m を測る。埋土は黒褐シルト～粘土である。

ＳＰ２は調査区外へと広がるため、全体の形状は不明である。直径約 0.46 m、深さ約 0.18m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は上層が黒褐シルト～粘土、下層が暗褐粘土である。ＳＰ４は不整形な形状で、直径約 0.28 m、深さ約 0.20m を測る。断面形状はＵ字形を呈する。埋土は灰黄褐シルト～粘土と黒褐シルト～粘土である。

出土遺物は土師器片が出土したが、細片であるため詳細な時期は不明である。

14 －竪穴 10(図 58)

第 14 調査区中央南側で検出した竪穴建物である。主軸方位 N-2°-E、検出面の標高は 35.8m である。平面形状は方形で、規模は、長辺約 4.90m、短辺約 4.50m、深さ約 0.20m、を測る。

重機掘削後の平面精査で床面直上であることが判明した。遺構検出を行い、周壁溝と支柱穴 (ＳＰ１～４)、ピット (ＳＰ 191) を検出した。

貼床は暗灰黄シルト混じり細砂と黒褐シルトである。図示できなかったが、貼床内から土師器高杯片が出土した。

周壁溝は幅約 0.11 m、深さ約 0.12 m を測る。埋土は灰黄細砂混じりシルトである。

支柱穴は４基確認できた。ＳＰ１は円形を呈し、直径約 0.48 m、深さ約 0.18m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方がにぶい黄褐シルトである。ＳＰ２はやや不整形な円形を呈し、長径約 0.68 m、短径約 0.53 m、深さ約 0.10m を測る。断面形状は浅い皿状である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト～粘土と暗褐シルト、掘方がにぶい黄褐シルトである。ＳＰ３は円形を呈し、直径約 0.42 m、深さ約 0.14m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト～粘土、掘方がにぶい黄褐シルトである。ＳＰ４は円形を呈し、直径約 0.50 m、深さ約 0.16m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方上層が小礫少量含む暗褐シルト、下層が暗褐シルトである。

ＳＰ 191 は円形を呈し、直径約 0.27 m、深さ約 0.18m を測る。断面形状はＵ字形である。埋土は単層で暗褐粗砂混じりシルトである。

出土遺物がいずれも細片であるため、詳細な時期は不明である。

14 －竪穴 32(図 59)

第 14 調査区北端で検出した竪穴建物と考えられる方形の遺構である。14- ＳＫ 401 と撹乱に切られ、調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-13°-E、検出面の標高は 35.1m である。規模は、長辺約 4.2m 以上、短辺約 4.0m 以上、深さ約 0.25m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、支柱穴 (ＳＰ１) とピット (ＳＰ２・３) を検出した。

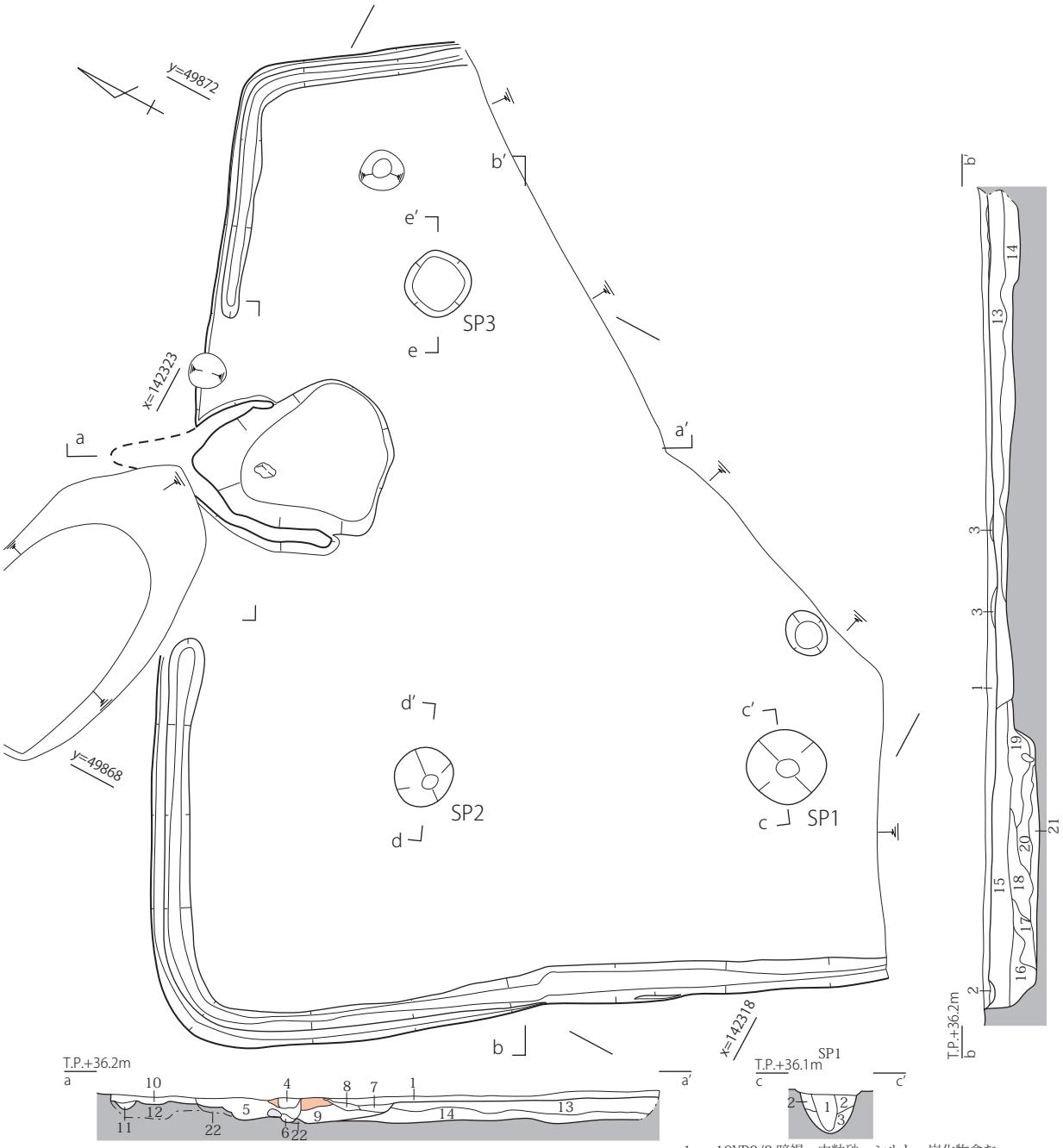
埋土は黒褐シルト～粘土である。埋土からは図示できなかったが、須恵器高杯片が出土した。

貼床は地山ブロック土を含む黒褐シルトと暗褐シルト、黒褐シルト～粘土である。

支柱穴は南西側の１基を確認した。ＳＰ１は円形を呈し、直径約 0.31 m、深さ約 0.15m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト混じり粗砂、掘方が黒褐粗砂混じりシルトである。

ＳＰ２は 14- ＳＫ 401 に切られるため、全体の形状は不明であるが、円形を呈すると考えられる。直径約 0.36 m、深さ約 0.29m を測る。断面形状は不整形である。埋土は上層がにぶい黄褐粗砂～細砂、中層が黒褐粗砂混じりシルト、下層が黒褐シルト混じり粗砂～細砂である。ＳＰ３は調査区外へ広がるため、全体の形状は不明であるが、円形を呈すると考えられる。断面形状はやや歪な逆台形である。直径約 0.25 m、深さ約 0.26m を測る。埋土は極暗褐シルト～粘土と黒褐極細砂である。

出土遺物がいずれも細片であるため、詳細な時期は不明である。



1　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト　黒色ブロック 7%　土器細片含む…住居埋土
2　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト　黒褐色ブロック 10%
3　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト
4　7.5YR4/2 灰褐　細砂　焼土塊・炭化物含む
5　10YR4/2 灰黄褐　細砂　径 1 ㎝程度の暗褐色シルトブロック 5%　焼土塊 5%　炭化物含む
6　7.5YR3/2 黒褐　細砂～中粒砂　焼土塊 10%
7　10YR4/2 灰黄褐　細砂～中粒砂　径 2 ㎝程度の暗褐色シルトブロック 3%
8　7.5YR3/2 黒褐　細砂混じりシルト　径 1 ㎝程度の地山ブロック 5%
9　10YR3/1 黒褐　細砂混じりシルト　焼土塊・炭化物 10%
10　10YR3/3 暗褐　粗砂混じりシルト
11　10YR4/2 灰黄褐　中粒砂混じりシルト
12　10YR3/3 暗褐　粗砂混じり微細砂～シルト　径 1 ㎝程度の黒褐色粘土ブロック 1%　径 10 ㎝大の礫含む
13　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト　径 1 ～ 3 ㎝程度の灰黄褐色シルトブロック 10%　炭化物含む
14　10YR4/4 褐　シルト混じり細砂　径 1 ～ 2 ㎝程度の灰黄褐色シルトブロック 5%　炭化物含む
15　10YR3/4 暗褐　粗砂混じり細砂～シルト　炭化物含む
16　10YR3/3 暗褐　粗砂混じり細砂～シルト　径 1 ～ 2 ㎝程度のにぶい黄褐色シルトブロック 5%
17　10YR6/4 にぶい黄橙　シルト混じり細砂～中粒砂　径 2 ～ 3 ㎝程度の黒褐色シルトブロック 5%
18　10YR3/4 暗褐　粗砂混じり微細砂～シルト　径 1 ㎝程度のにぶい黄橙色細砂ブロック 2%
19　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト　径 1 ～ 2 ㎝程度のにぶい黄橙色細砂ブロック 3%　炭化物含む
20　10YR3/3 暗褐　微細砂～シルト
21　10YR3/4 暗褐　細砂～シルト　径 1 ㎝程度のにぶい黄橙色細砂ブロック 2%
22　10YR3/3 暗褐　砂礫…ベース

SP1
1　10YR3/3 暗褐　中粒砂～シルト　炭化物含む
2　10YR3/3 暗褐　中粒砂～シルト　黄色土ブロック 3%
3　10YR3/4 暗褐　細砂～シルト

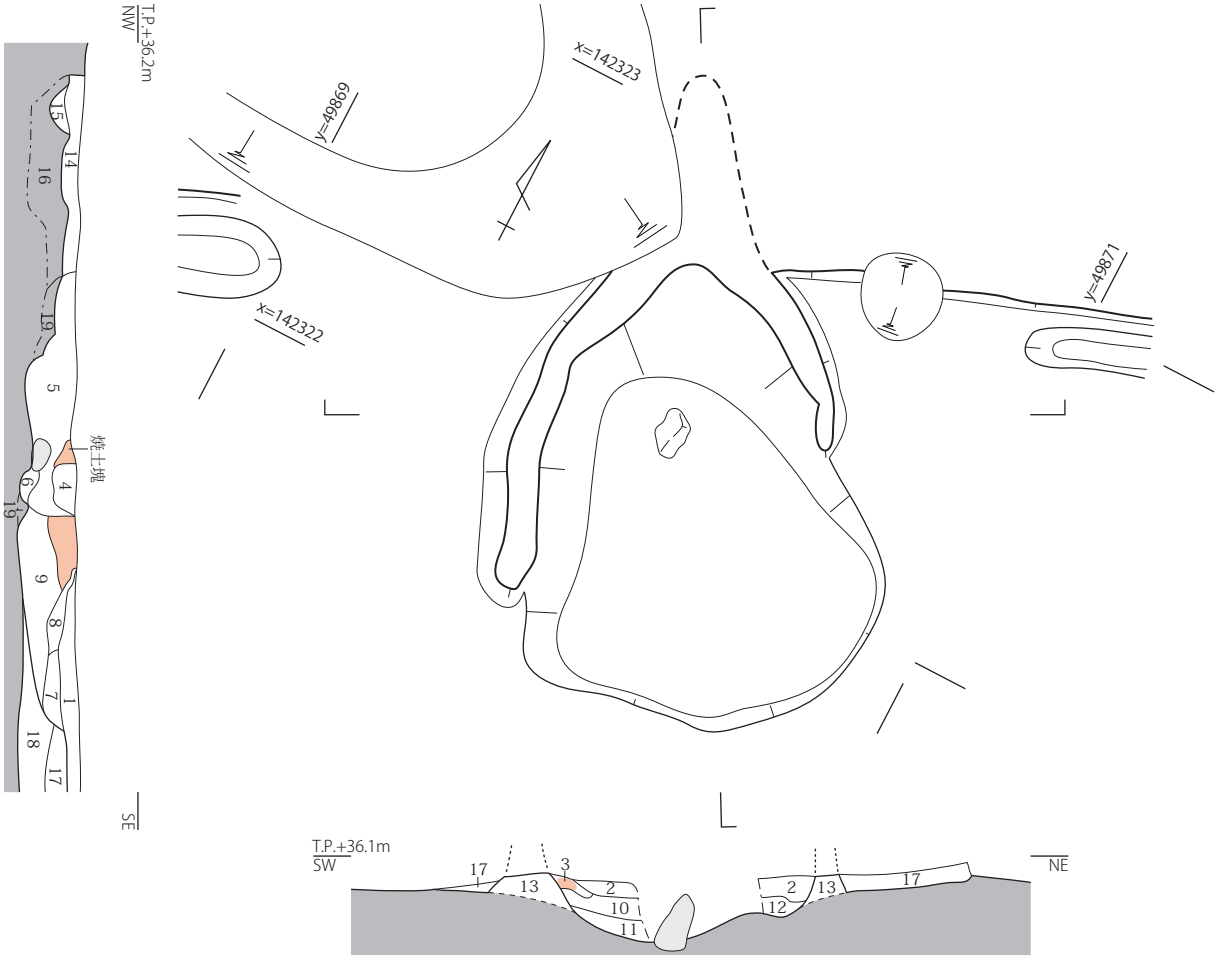
SP2
1　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト　黄色土ブロック 3%
2　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト　土器片含む
3　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト

SP3
1　10YR3/4 暗褐　細砂～シルト
2　10YR3/3 暗褐　中粒砂～シルト　土器片含む
3　10YR3/4 暗褐　細砂～シルト
4　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト…ベース

…焼土

0　1m
（S=1／40）

図 53　27- 竪穴 130　平・断面図



1　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト　黒色ブロック 7%　土器細片含む
2　10YR3/3 暗褐　極細砂　径 2 ～ 3 ㎝程度の黒褐色土ブロック 20%
3　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト　焼土含む
4　7.5YR4/2 灰褐　細砂　焼土塊・炭化物含む
5　10YR4/2 灰黄褐　細砂　径 1 ㎝程度の暗褐色シルトブロック 5%　焼土塊 5%　炭化物含む
6　7.5YR3/2 黒褐　細砂～中粒砂　焼土塊 10%
7　10YR4/2 灰黄褐　細砂～中粒砂　径 2 ㎝程度の暗褐色シルトブロック 3%
8　7.5YR3/2 黒褐　細砂混じりシルト　径 1 ㎝程度の地山ブロック 5%
9　10YR3/1 黒褐　細砂混じりシルト　焼土塊・炭化物 10%
10　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト混じり細砂～中粒砂　黒褐色土ブロック 10%
11　2.5Y4/2 暗灰黄　細砂～中粒砂
12　10YR4/2 灰黄褐　シルト混じり細砂～中粒砂
13　10YR5/3 にぶい黄褐　シルト混じり細砂　径 5 ～ 8 ㎝程度の地山ブロック 20%
14　10YR3/3 暗褐　粗砂混じりシルト
15　10YR4/2 灰黄褐　中粒砂混じりシルト
16　10YR3/3 暗褐　粗砂混じり微細砂～シルト　径 1 ㎝程度の黒褐色粘土ブロック 1%　径 10 ㎝大の礫含む…ベース
17　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト　径 1 ～ 3 ㎝程度の灰黄褐色シルトブロック 10%　炭化物含む…貼床
18　10YR4/4 褐　シルト混じり細砂　径 1 ～ 2 ㎝程度の灰黄褐色シルトブロック 5%　炭化物含む…貼床
19　10YR3/3 暗褐　砂礫…ベース

…焼土

0　50 ㎝
（S=1 ／ 20）

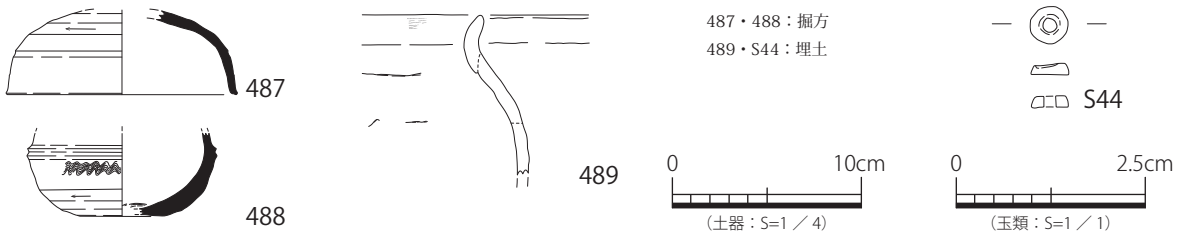
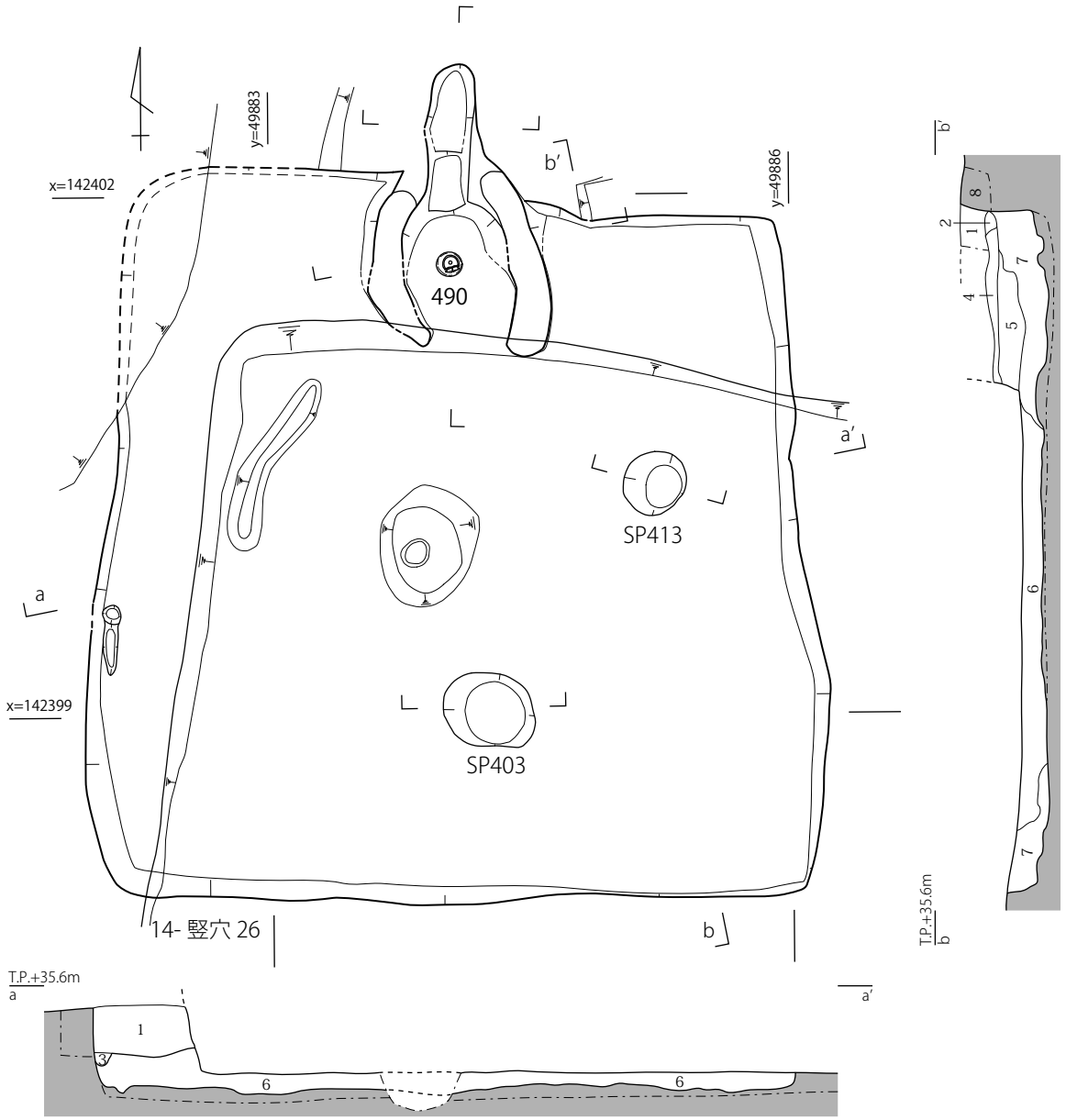
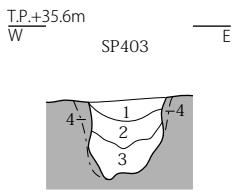


図 54　27- 竪穴 130　カマド及び出土遺物実測図





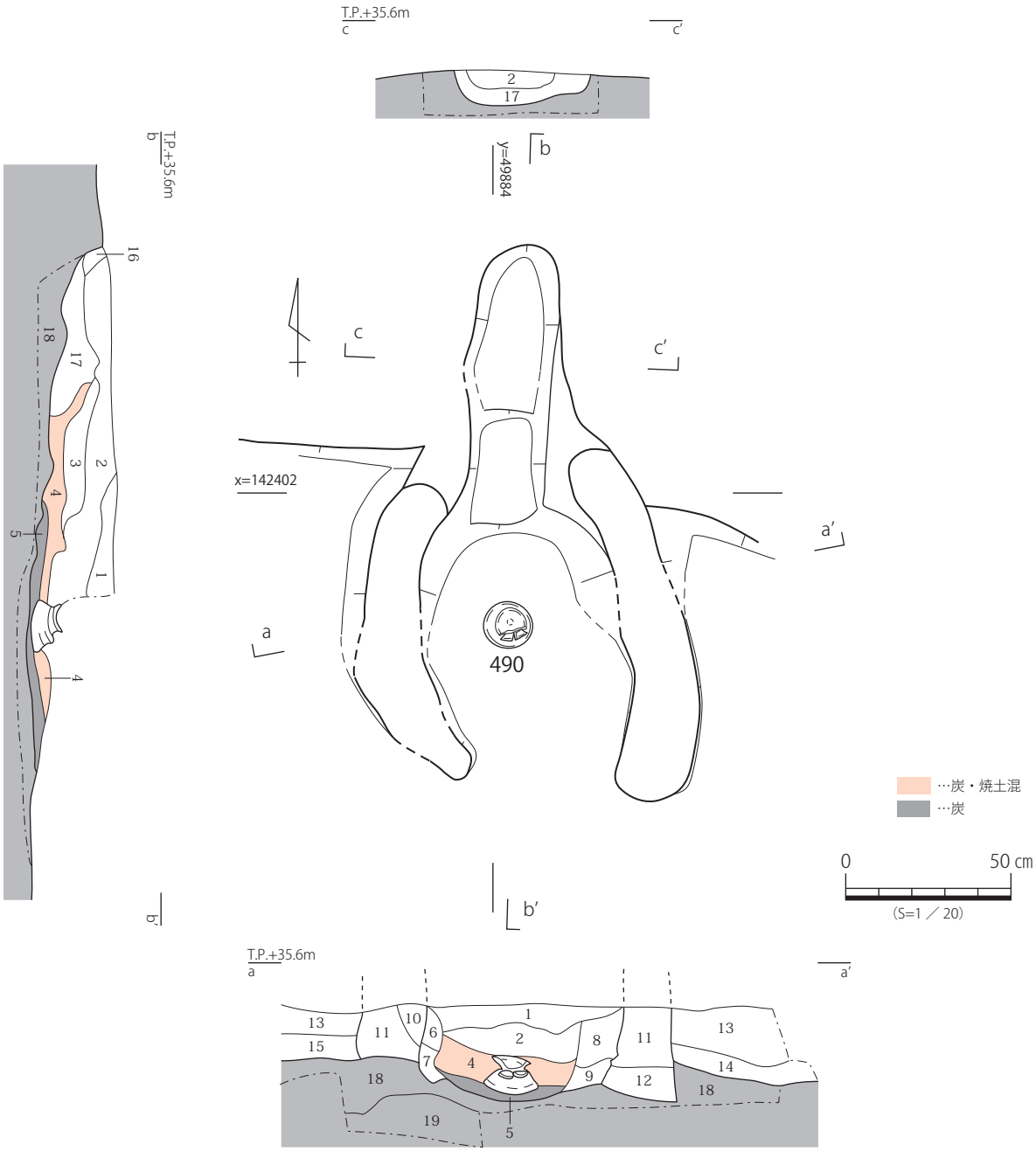
1　10YR2/2 黒褐　シルト
2　10YR3/2 黒褐　細砂～シルト　黒色粘土ブロック 5%　地山ブロック 5%
3　7.5Y3/2 オリーブ黒　細砂
4　10YR4/4 褐　砂礫混じり細砂…ベース

1　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト　地山ブロック斑状に 5%　炭化物含む　土器片含む
2　10YR3/2 黒褐　細砂
3　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂
4　10YR3/2 黒褐　細砂

1　10YR3/3 暗褐　シルト　炭化物含む　土器片含む
2　10YR3/2 黒褐　細砂～シルト
3　10YR3/2 黒褐　シルト～粘土…周壁溝
4　10YR3/4 暗褐　細砂～シルト　焼土塊含む…貼床
5　10YR3/3 暗褐　シルト…貼床
6　10YR3/2 黒褐　シルト　地山ブロック含む…貼床
7　10YR2/2 黒褐　シルト　地山ブロック含む…貼床
8　10YR4/4 褐　シルト…地山

0　1m
（S=1／40）

図 55　14- 竪穴 29　平・断面図



1	10YR3/3 暗褐　シルト　焼土塊含む	8	10YR4/3 にぶい黄褐　細礫混じり細砂
2	10YR2/3 黒褐　シルト　地山ブロック 3%	9	10YR3/4 暗褐　シルト
3	10YR3/3 暗褐　シルト　土器片含む	10	10YR3/3 暗褐　細砂～シルト
4	10YR2/2 黒褐　シルト　炭化物・焼土塊多量含む	11	10YR3/2 黒褐　細砂～シルト　しまりあり
5	10YR2/3 黒褐　シルト　炭化物多量含む…炭層	12	10YR2/3 黒褐　シルト
6	10YR4/2 灰黄褐　細砂～シルト	13	10YR2/2 黒褐　細砂～シルト
7	10YR3/4 暗褐　細砂～シルト	14	10YR2/3 黒褐　細砂～シルト
		15	10YR3/3 暗褐　シルト
		16	10YR3/3 暗褐　シルト
		17	10YR3/4 暗褐　シルト
		18	10YR3/3 暗褐　シルト
		19	10YR2/3 黒褐　細礫混じりシルト

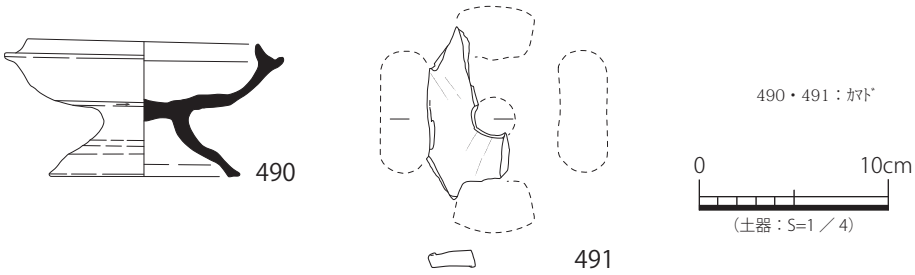
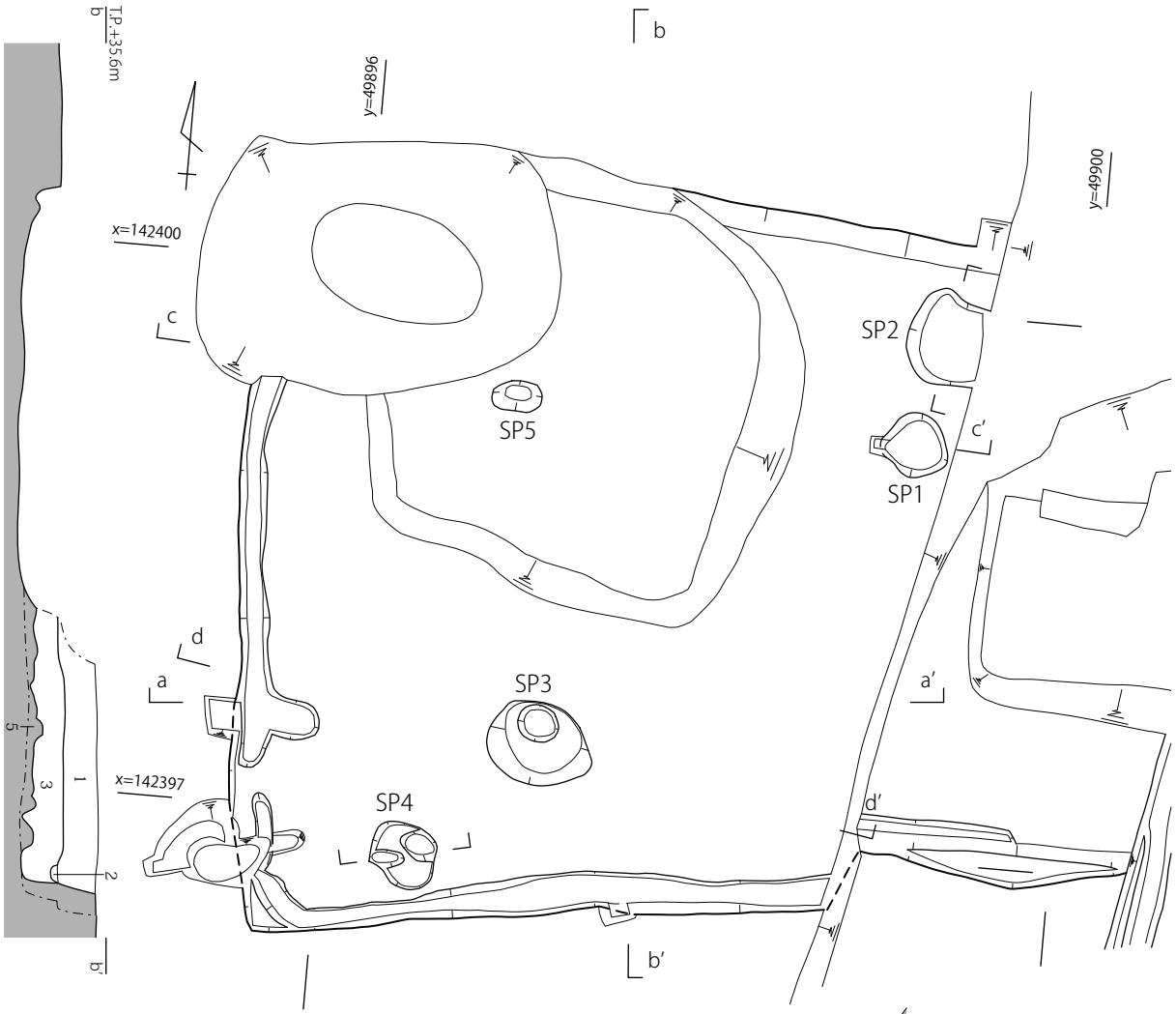
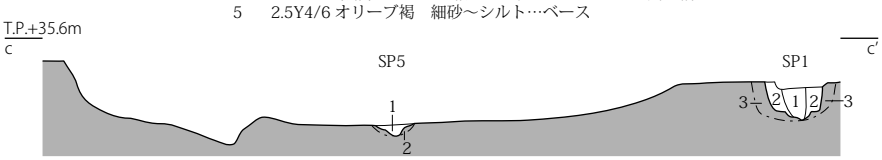


図 56　14- 竪穴 29　カマド及び出土遺物実測図

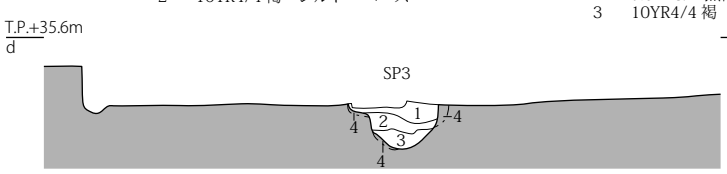


1　7.5YR3/2 黒褐　粘土　地山ブロック 15%
2　10YR3/3 暗褐　シルト～粘土　地山ブロック 10%…周壁溝
3　10YR3/4 暗褐　シルト～粘土　地山ブロック 30%…貼床
4　10YR3/2 黒褐　シルト～粘土　地山ブロック 10%…周壁溝
5　2.5Y4/6 オリーブ褐　細砂～シルト…ベース

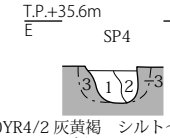


1　10YR2/3 黒褐　シルト～粘土　地山ブロック 10%
2　10YR4/4 褐　シルト…ベース

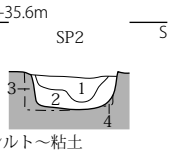
1　10YR2/2 黒褐　粘土
2　7.5YR3/2 黒褐　シルト～粘土　地山ブロック 5%
3　10YR4/4 褐　シルト…ベース



1　7.5YR3/3 暗褐　シルト　地山ブロック 10%
2　7.5YR3/2 黒褐　シルト　地山ブロック 25%
3　7.5YR2/3 極暗褐　シルト　地山ブロック 10%
4　7.5YR3/4 暗褐　シルト～粘土…ベース



1　10YR4/2 灰黄褐　シルト～粘土　地山ブロック 3%
2　7.5YR3/2 黒褐　シルト～粘土　地山ブロック 30%
3　10YR4/4 褐　シルト～粘土…ベース



1　7.5YR3/2 黒褐　シルト～粘土
2　7.5YR3/3 暗褐　粘土　地山ブロック 20%
3　7.5YR3/2 黒褐　シルト～粘土　地山ブロック 10%…ベース
4　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト…ベース

図 57　14- 竪穴 24　平・断面図

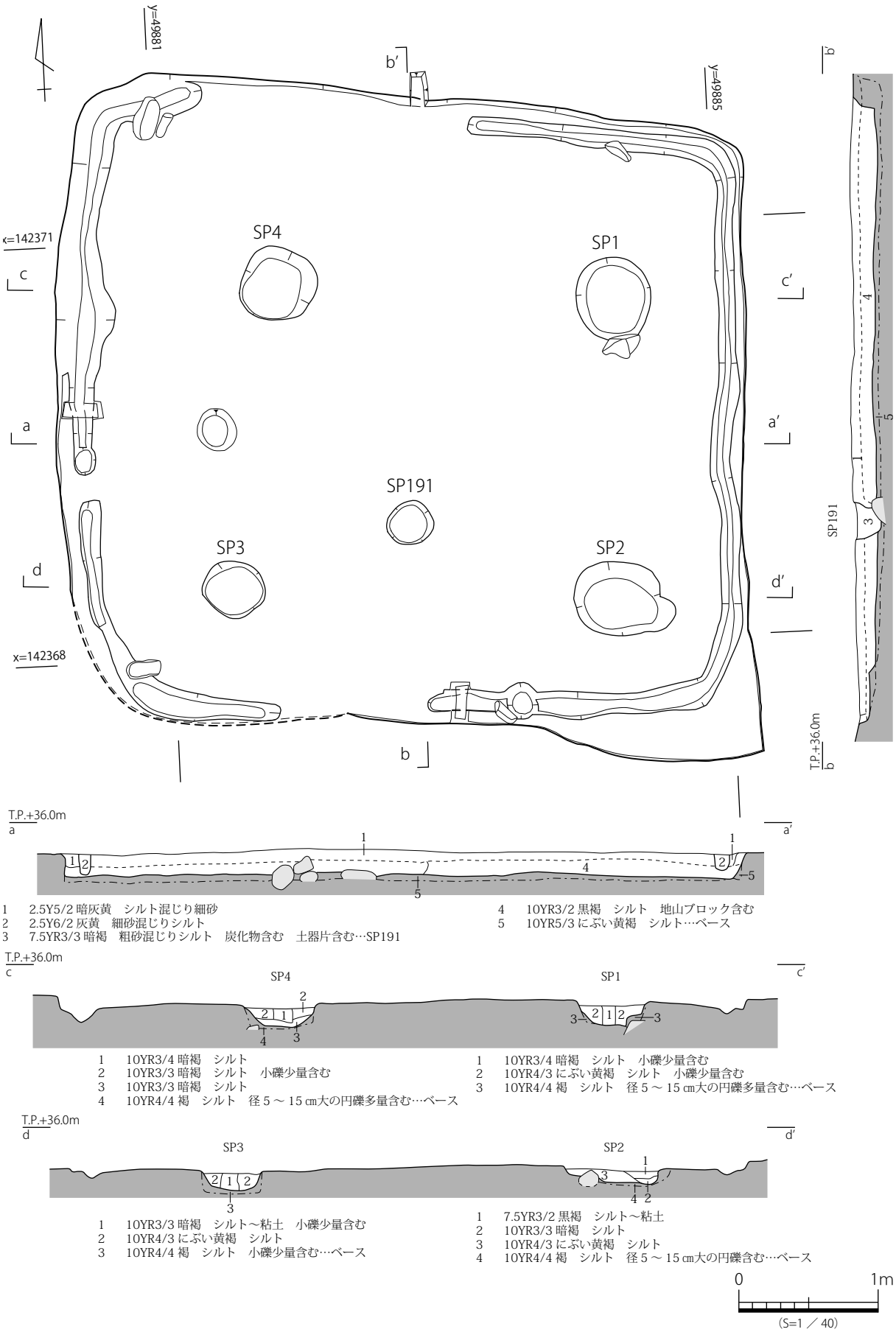
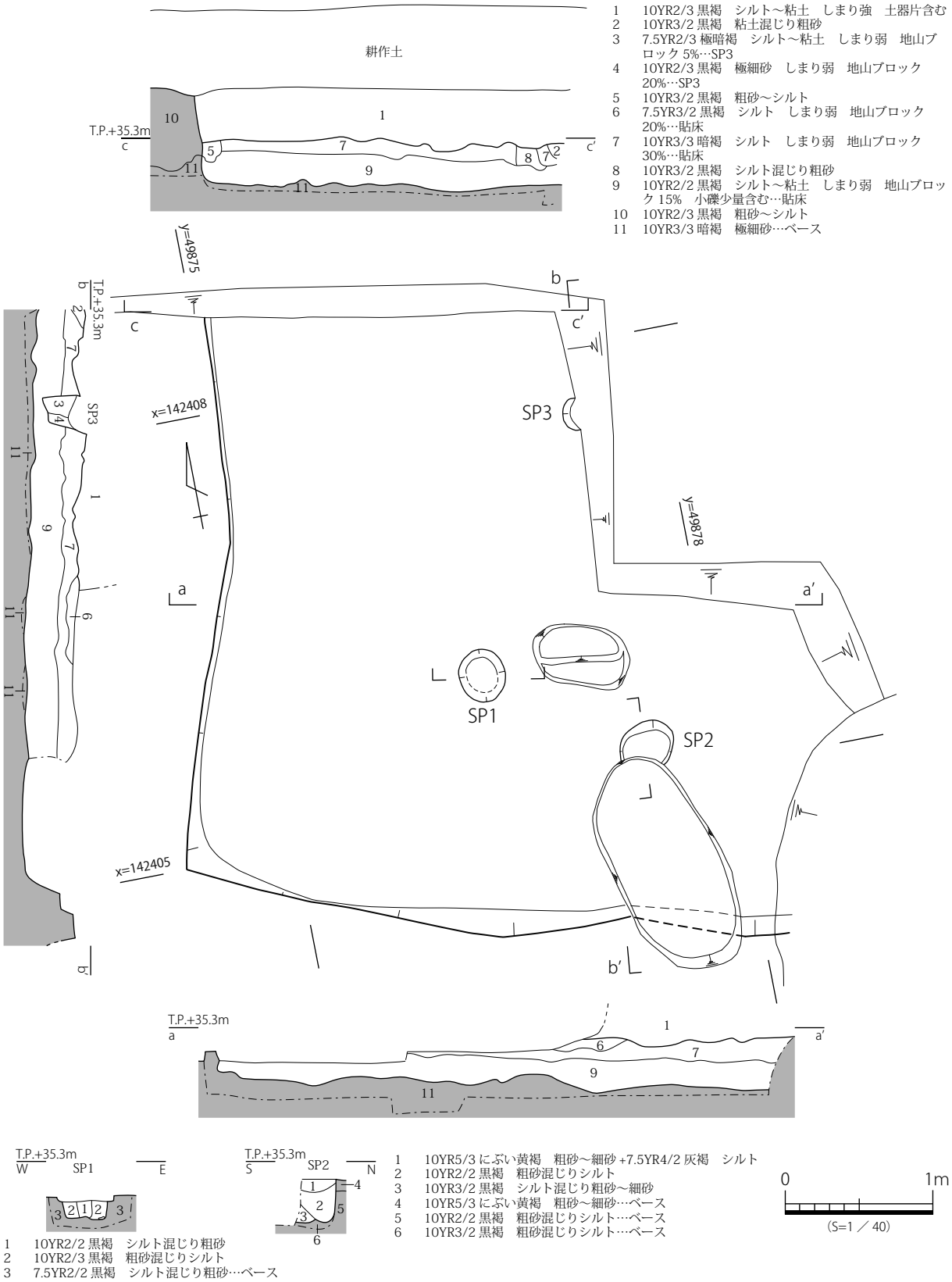


図 58　14- 竪穴 10　平・断面図



1　10YR2/3 黒褐　シルト～粘土　しまり強　土器片含む
2　10YR3/2 黒褐　粘土混じり粗砂
3　7.5YR2/3 極暗褐　シルト～粘土　しまり弱　地山ブロック 5%…SP3
4　10YR2/3 黒褐　極細砂　しまり弱　地山ブロック 20%…SP3
5　10YR3/2 黒褐　粗砂～シルト
6　7.5YR3/2 黒褐　シルト　しまり弱　地山ブロック 20%…貼床
7　10YR3/3 暗褐　シルト　しまり弱　地山ブロック 30%…貼床
8　10YR3/2 黒褐　シルト混じり粗砂
9　10YR2/2 黒褐　シルト～粘土　しまり弱　地山ブロック 15%　小礫少量含む…貼床
10　10YR2/3 黒褐　粗砂～シルト
11　10YR3/3 暗褐　極細砂…ベース

1　10YR2/2 黒褐　シルト混じり粗砂
2　10YR2/3 黒褐　粗砂混じりシルト
3　7.5YR2/2 黒褐　シルト混じり粗砂…ベース

1　10YR5/3 にぶい黄褐　粗砂～細砂 +7.5YR4/2 灰褐　シルト
2　10YR2/2 黒褐　粗砂混じりシルト
3　10YR3/2 黒褐　シルト混じり粗砂～細砂
4　10YR5/3 にぶい黄褐　粗砂～細砂…ベース
5　10YR2/2 黒褐　粗砂混じりシルト…ベース
6　10YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト…ベース

図 59　14- 竪穴 32　平・断面図

（２）　掘立柱建物

14 －掘立 1(図 60)

第 14 調査区の南で検出した掘立柱建物である。2 × 3 間の側柱建物跡でＳＰ 100 ～ 109 の 10 基で構成する。主軸方位は N-34.5° -W、検出面の標高は 36.2m である。梁行総長約 4.45m、桁行総長約 7.50m、床面積は約 33.4㎡を測る。芯芯間距離は約 3.0 ～ 2.0m である。

ＳＰ 103 は円形を呈し、直径約 0.36 m、深さ約 0.14 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐粗砂混じりシルト、掘方が暗褐粗砂混じりシルトとにぶい黄褐小礫混じりシルトである。ＳＰ 102 は円形を呈し、直径約 0.28 m、深さ約 0.18 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐粗砂混じりシルト、掘方が黒褐粗砂混じりシルトと黒褐小礫混じりシルトである。ＳＰ 101 は楕円形を呈し、直径約 0.56 m、短径約 0.42 m、深さ約 0.2 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐粗砂～シルト、掘方が暗褐砂礫混じりシルトと暗褐細砂～シルトである。ＳＰ 100 は円形を呈し、直径約 0.4 m、深さ約 0.26 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が黒褐粗砂混じりシルト、下層が黒褐粗砂～シルトである。ＳＰ 109 は円形を呈し、直径約 0.32 m、深さ約 0.2 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい黄褐粗砂～シルト、掘方が黒褐粗砂～シルトである。ＳＰ 108 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.48 m、深さ約 0.28 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐粗砂混じりシルト、掘方が灰褐細砂～シルトと黒褐細砂～シルトである。ＳＰ 107 は円形を呈し、直径約 0.32 m、深さ約 0.22 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐粗砂混じりシルト、掘方が黒褐粗砂混じりシルトと暗褐粗砂～シルト、褐粗砂～シルトである。ＳＰ 106 は円形を呈し、直径約 0.32 m、深さ約 0.13 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐粗砂～シルト、掘方が暗褐粗砂混じりシルトである。ＳＰ 105 は不整形な形状を呈する。長径約 0.74 m、短径約 0.72 m、深さ約 0.28 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。ＳＰ 104 は不整形な形状を呈する。長径約 0.62 m、短径約 0.62 m、深さ約 0.24 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が黒褐粗砂混じりシルト、中層が褐細砂～シルト、下層が暗褐粗砂混じりシルトである。

遺物は図示できなかったが、ＳＰ 106 より弥生土器片、ＳＰ 101・107・108 より弥生土器片・土師器片が出土した。いずれも細片であるため、詳細な時期は不明である。

14 －掘立 2(図 61)

第 14 調査区の南側で検出した掘立柱建物である。1 × 3 間の側柱建物で、ＳＰ 110 ～ 115・105・117 の 8 基で構成する。主軸方位は N-84° -W、検出面の標高は 36.2m である。梁行総長約 3.70m、桁行総長約 7.1 ～ 6.5m、床面積は約 25.2 ㎡を測る。芯芯間距離は約 3.7 ～ 1.3m である。

ＳＰ 113 は隅丸長方形を呈し、長辺約 0.74 m、短辺約 0.48 m、深さ約 0.3 mを測る。断面形状は椀状を呈する。埋土は上層が褐シルトとにぶい黄褐細砂混じりシルト、下層が褐細砂～中礫である。ＳＰ 112 は不整形な形状を呈し、直径約 0.88 m、短径約 0.78 m、深さ約 0.22 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい黄褐シルト、掘方が灰黄褐シルトと褐シルト、褐細砂～中礫である。ＳＰ 111 は不整形な形状を呈し、直径約 0.8 m、短径約 0.74 m、深さ約 0.3 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい黄褐シルト、掘方が灰黄褐シルトとにぶい黄褐シルト、暗褐細砂である。ＳＰ 110 は隅丸方形を呈し、長辺約 0.82 m、短辺約 0.68 m、深さ約 0.28 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層がにぶい黄褐細砂～中粒砂、中層が褐細砂、下層が暗褐細砂～中粒砂と灰黄褐シルト混じり細砂である。ＳＰ 117 は隅丸方形を呈し、長辺約 1.0 m、深さ約 0.4 mを測る。断面形状は不整形である。埋土は上層暗褐粗砂混じりシルト、中層が暗褐粗砂～シルトと褐細砂、暗褐細砂～シルト、下層が暗褐粗砂混じりシルトである。ＳＰ 105 は不整形な形状で、長径約 0.76 m、短径約 0.7 m、深さ約 0.34 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐粗砂～シルトと褐粗砂～シルト、掘方が暗褐砂礫混じりシルトと暗褐粗砂混じりシルト、暗褐粗砂～シルト、褐小礫混じり粗砂～シルトである。ＳＰ 115

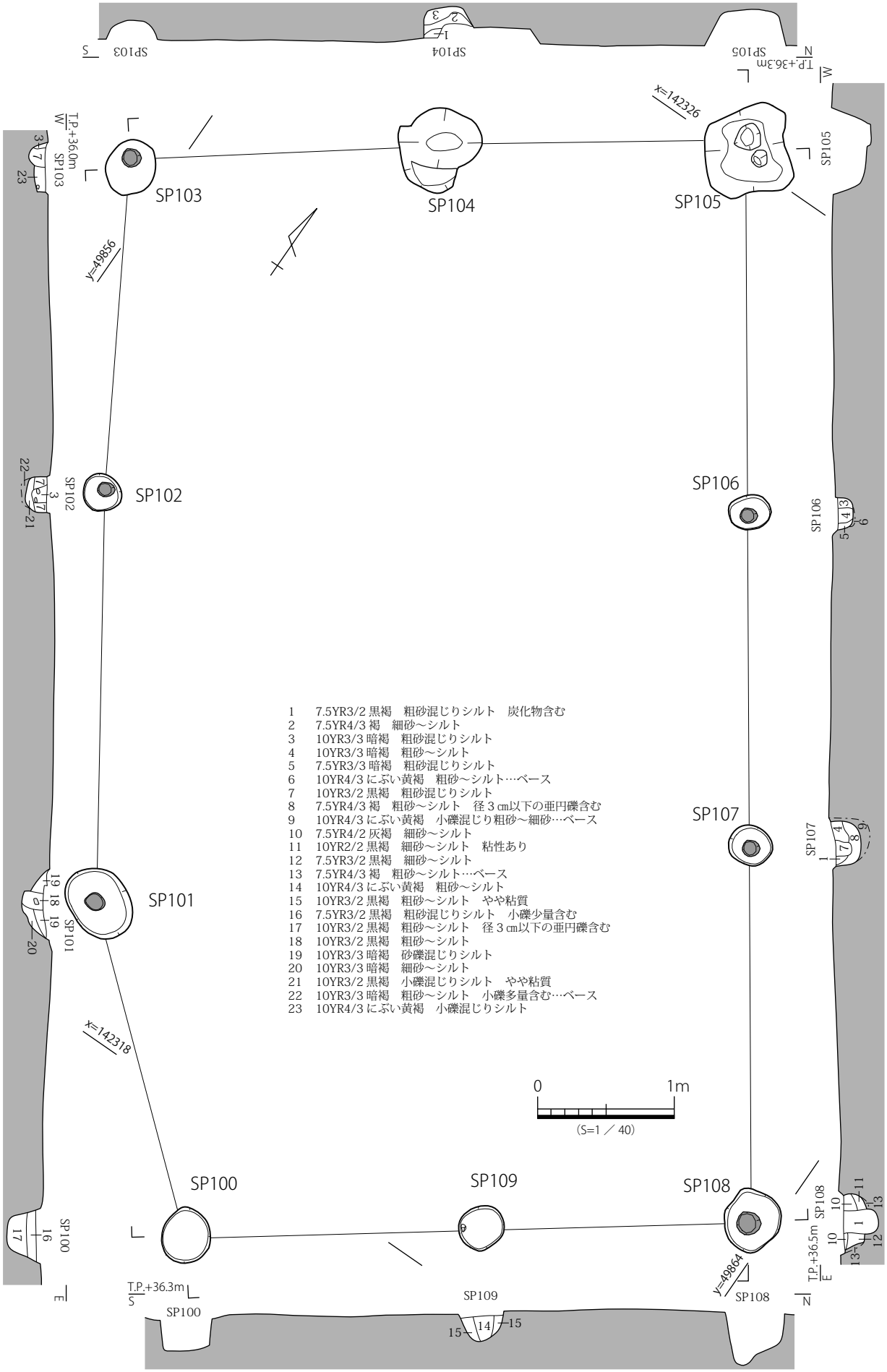
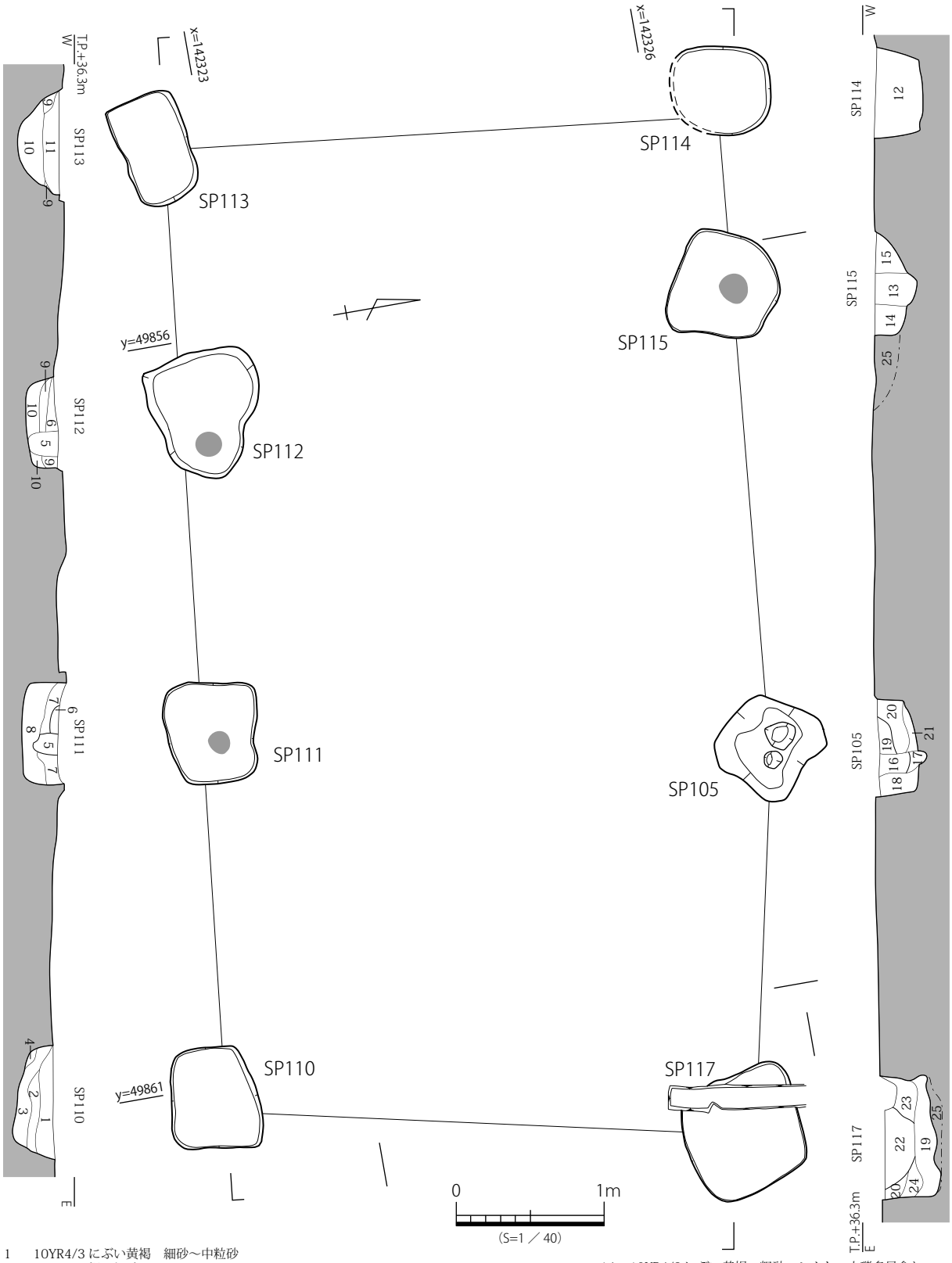
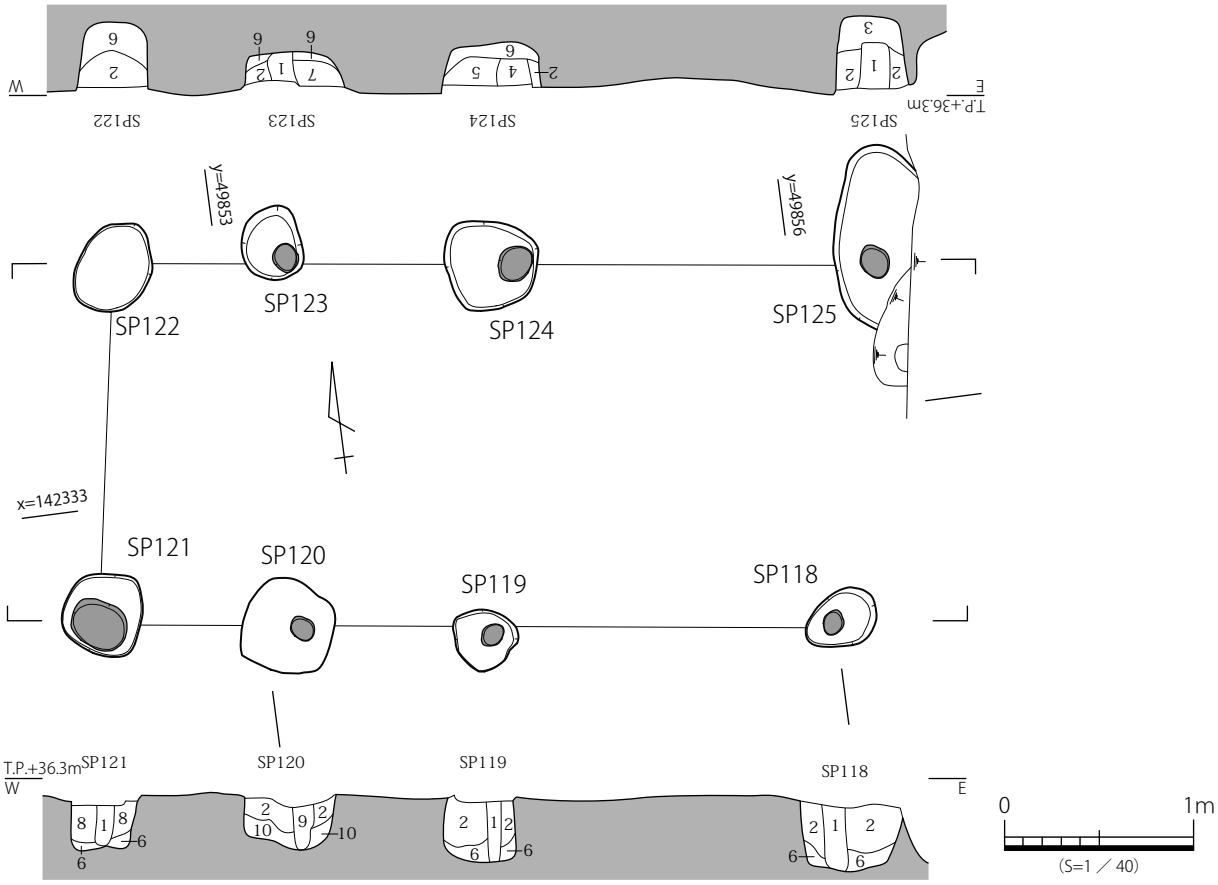


図 60　14- 掘立 1　平・断面図



1　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～中粒砂
2　10YR4/4 褐　細砂
3　10YR3/3 暗褐　細砂～中粒砂　径１㎝程度の地山ブロック 1%
4　10YR6/2 灰黄褐　シルト混じり細砂
5　10YR5/3 にぶい黄褐　シルト　灰白色細砂ブロック含む
6　10YR6/2 灰黄褐　シルト　炭化物含む
7　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト　灰白色細砂ブロック含む　地山ブロック含む
8　10YR3/3 暗褐　細砂　径１～２㎝程度の地山ブロック 2%
9　10YR4/4 褐　シルト　ほぼ地山土で構成
10　10YR4/4 褐　細砂～中礫
11　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂混じりシルト
12　10YR4/4 褐　シルト混じり砂礫　径３㎝以下の亜円礫多量含む
13　10YR4/4 褐　砂礫混じりシルト
14　10YR4/3 にぶい黄褐　粗砂～シルト　小礫多量含む
15　10YR4/3 にぶい黄褐　粗砂～シルト　小礫若干含む
16　10YR3/3 暗褐　粗砂～シルト
17　10YR4/4 褐　粗砂～シルト　やや粘質
18　10YR3/3 暗褐　砂礫混じりシルト
19　10YR3/3 暗褐　粗砂混じりシルト
20　10YR3/4 暗褐　粗砂～シルト
21　10YR4/4 褐　小礫混じり粗砂～シルト
22　10YR3/4 暗褐　粗砂混じりシルト
23　10YR4/4 褐　細砂　やや粘質
24　10YR3/4 暗褐　細砂～シルト
25　10YR4/4 褐　粗砂～シルト…ベース

図 61　14- 掘立 2　平・断面図



1　10YR4/2 灰黄褐　シルト混じり細砂
2　10YR4/2 灰黄褐　シルト　径３～５㎝程度の地山ブロック含む
3　10YR5/2 灰黄褐　微細砂　径３㎝大の礫含む
4　10YR4/2 灰黄褐　シルト混じり細砂　径１㎝大の礫含む
5　10YR4/2 灰黄褐　シルト　径３～５㎝程度の地山ブロック含む　炭化物含む
6　10YR5/2 灰黄褐　微細砂
7　10YR4/2 灰黄褐　シルト　径３～５㎝程度の地山ブロック含む　径２㎝大の礫含む
8　10YR4/2 灰黄褐　シルト　径３～５㎝程度の地山ブロック含む　径２～３㎝大の礫含む
9　10YR5/3 にぶい黄褐　細砂
10　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂　径１㎝大の地山ブロック含む

図 62　14- 掘立 3　平・断面図

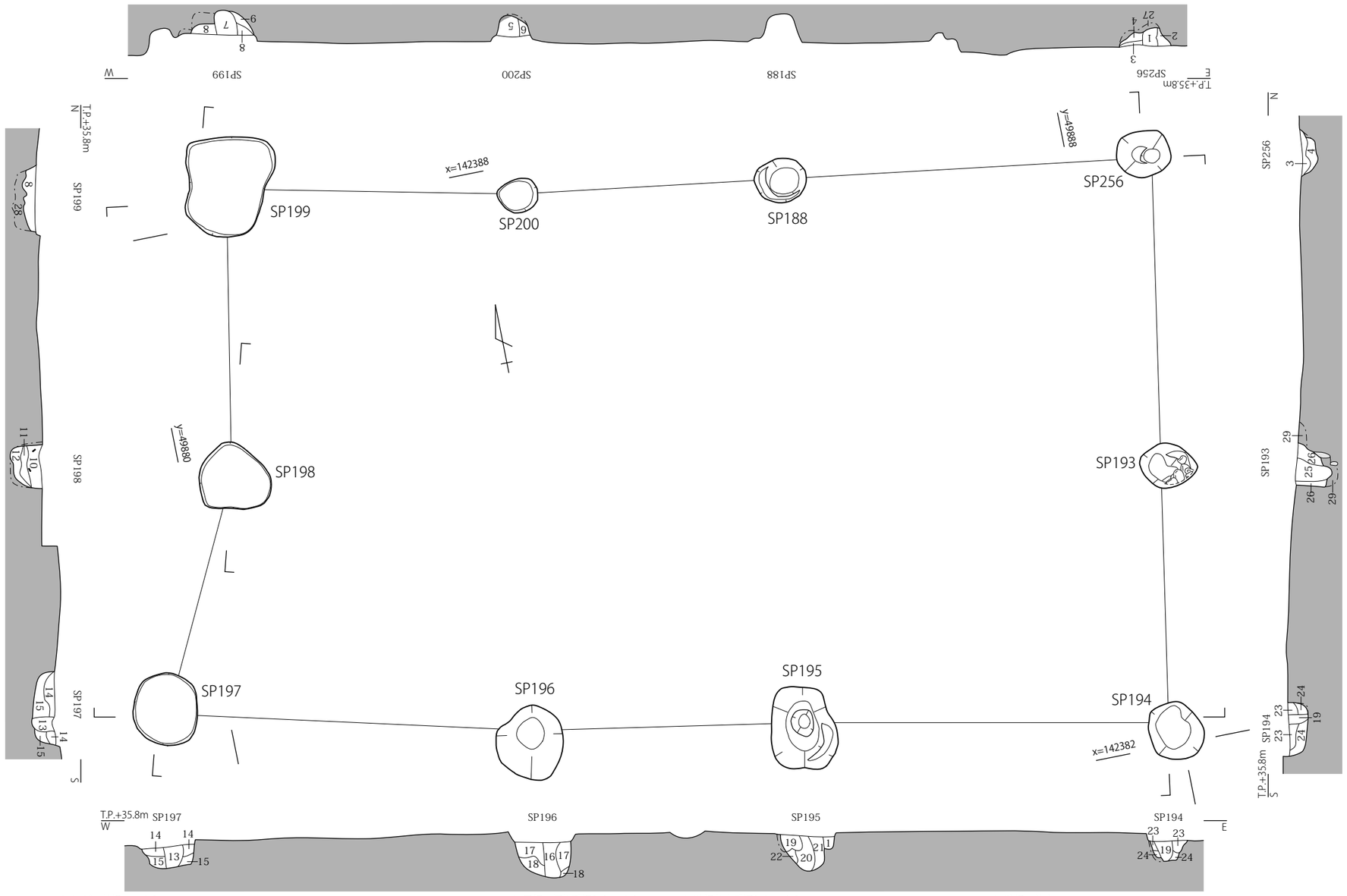
は不整形な形状で、長径約 0.82 m、短径約 0.74 m、深さ約 0.28 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐砂礫混じりシルト、掘方がにぶい黄褐粗砂～シルトである。ＳＰ 114 は円形を呈し、直径約 0.72 m、深さ約 0.32 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は褐シルト混じり砂礫である。

遺物は図示できなかったが、ＳＰ 117 から須恵器瑳片が出土した。細片であるため、詳細な時期は不明である。

14 －掘立 3(図 62)

第 14 調査区の南側で検出した側柱建物である。一部を撹乱に切られる。1 × 3 間の側柱建物で、ＳＰ 118 ～ 125 の 8 基で構成する。主軸方位は N-83° -W、検出面の標高は 36.3m である。梁行総長約 2.00m、桁行総長約 4.00m、床面積は約 8.0㎡を測る。芯芯間距離は約 2.0 ～ 0.9m である。

ＳＰ 125 は一部を撹乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、楕円形を呈すると考えられる。長径約 0.98 m、短径約 0.36 m、深さ約 0.4 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が灰黄褐シルト混じり細砂、掘方が灰黄褐シルトと灰黄褐微細砂である。ＳＰ 124 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.52 m、深さ約 0.24 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が灰黄褐シルト混じり細砂、掘方が灰黄褐シルトと灰黄褐微細砂である。ＳＰ 123 は円形を呈し、直径約 0.4 m、深さ約 0.22 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が灰黄褐シルト混じり細砂、掘方が灰黄褐シルトと灰黄褐微細砂である。ＳＰ 122 は楕円形を呈し、長径約 0.52 m、短径約 0.38 m、深さ約 0.25 mを測る。断面形状はＵ字形である。埋土は上層が灰黄褐シル



1　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト
2　10YR4/2 灰黄褐　シルト
3　10YR5/2 灰黄褐　砂礫混じり細砂
4　10YR5/4 にぶい黄褐　細礫混じり細砂
5　10YR3/2 黒褐　シルト～粘土　炭化物含む　土器片含む
6　10YR3/4 暗褐　シルト～粘土
7　10YR3/3 暗褐　シルト～粘土　地山ブロック 3%
8　10YR4/2 灰黄褐　シルト～粘土
9　10YR3/4 暗褐　細砂～シルト
10　7.5YR2/2 黒褐　極細砂混じりシルト　土器片含む
11　7.5YR2/2 黒褐　極細砂混じりシルト　10YR3/4 暗褐色小礫混じりシルト
12　7.5YR2/2 黒褐　粘質土　地山ブロック 10%
13　7.5YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト
14　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト～粘土
15　10YR3/3 暗褐　細礫～中礫混じり粗砂～シルト
16　7.5YR4/3 褐　粘土
17　10YR3/2 黒褐　粘土
18　7.5YR3/3 暗褐　シルト～粘土
19　10YR5/3 にぶい黄褐　粘土
20　7.5YR3/2 黒褐　粘土
21　10YR3/3 暗褐　粘土
22　10YR5/2 灰黄褐　シルト～粘土
23　10YR4/2 灰黄褐　シルト～粘土
24　7.5YR5/3 にぶい褐　シルト～粘土
25　7.5YR4/3 褐　細砂～シルト
26　7.5YR4/2 灰褐　細砂～シルト
27　10YR4/2 灰黄褐　礫混じり細砂…ベース
28　10YR4/4 褐　シルト混じり細礫～中礫…ベース
29　7.5YR4/3 褐　細礫混じりシルト…ベース

図 63　14- 掘立 6　平・断面図

ト、下層が灰黄褐微細砂である。ＳＰ 121 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.47 m、深さ約 0.28 m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が灰黄褐シルト混じり細砂、掘方が灰黄褐シルトと灰黄褐微細砂である。ＳＰ 120 は歪な形状を呈する。直径約 0.54 m、深さ約 0.28 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい黄褐細砂、掘方が灰黄褐シルトと暗灰黄細砂である。ＳＰ 119 は歪な形状を呈する。直径約 0.36 m、短径約 0.32 m、深さ約 0.44 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が灰黄褐シルト混じり細砂、掘方が灰黄褐シルトと灰黄褐微細砂である。ＳＰ 118 は楕円形を呈し、直径約 0.4 m、短径約 0.3 m、深さ約 0.37 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき､埋土は柱痕が灰黄褐シルト混じり細砂、掘方が灰黄褐シルトと灰黄褐微細砂である。

遺物は図示できなかったが、ＳＰ 124 から須恵器杯身片が出土した。細片であるため、詳細な時期は不明である。14- ＳＤ１との切り合い関係から、古代以降と考えられる。

14 －掘立 6(図 63)

第 14 調査区の中央やや北寄りで検出した掘立柱建物である。14 －竪穴２を切る。２×３間の側柱建物で、ＳＰ 193 ～ 200・188・256 の 10 基で構成する。主軸方位は N-79°-W、検出面の標高は 35.7m である。梁行総長約 4.80m、桁行総長約 8.60m、床面積は約 41.3㎡を測る。芯芯間距離は約 3.2 ～ 2.2m である。

ＳＰ 199 は不整形な形状を呈し､長径約 0.86 m、短径約 0.76 m、深さ約 0.3 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト～粘土、掘方が灰黄褐シルトと暗褐細砂～シルトである。ＳＰ 198 は不整形な形状を呈し、長径約 0.62 m、短径約 0.6 m、深さ約 0.28 mを測る。断面形状はＵ字形である。埋土は上層が黒褐極細砂混じりシルト、中層が黒褐極細砂混じりシルト、下層が黒褐粘質土である。ＳＰ 197 は円形を呈し、直径約 0.62 m、深さ約 0.22 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐粗砂混じりシルト、掘方がにぶい黄褐シルト～粘土と暗褐細礫～中礫混じり粗砂～シルトである。ＳＰ 196 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.64 m、深さ約 0.38 mを測る。断面形状はＵ字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐粘土、掘方が黒褐粘土と暗褐シルト～粘土である。ＳＰ 195 は隅丸方形を呈し、長辺約 0.76 m、短辺約 0.6 m、深さ約 0.34 mを測る。断面形状は不整形である。埋土はにぶい黄褐シルトとにぶい黄褐粘土、黒褐粘土、暗褐粘土、灰黄褐シルト～粘土である。ＳＰ 194 は円形を呈し、直径約 0.54 m、深さ約 0.22 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい黄褐粘土、掘方が灰黄褐シルト～粘土とにぶい黄褐シルト～粘土である。ＳＰ 193 は楕円形を呈し、長径約 0.5 m、短径約 0.39 m、深さ約 0.3 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐細砂～シルト、掘方が灰褐細砂～シルトである。ＳＰ 256 は円形を呈し、直径約 0.46 m、深さ約 0.18 mを測る。断面形状は不整形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい黄褐シルト、掘方が灰黄褐シルトと灰黄褐砂礫混じり細砂、にぶい黄褐小礫混じり細砂である。ＳＰ 188 は円形を呈し、直径約 0.44 m、深さ約 0.24 mを測る。断面形状はＵ字形である。ＳＰ 200 は円形を呈し、直径約 0.32 m、深さ約 0.22 mを測る。断面形状はＵ字形である。埋土は黒褐シルト～粘土と暗褐シルト～粘土である。

遺物は図示できなかったが、ＳＰ 198 から須恵器杯身片・杯蓋片、ＳＰ 200 から瓦片が出土した。いずれも細片であるため､詳細な時期は不明である。14- 竪穴２との切り合い関係から、ＭＴ 85 型式併行期以降と考えられる。

14 －掘立 7(図 64)

第 14 調査区の中央で検出した掘立柱建物である。２×３間の側柱建物で、ＳＰ 201 ～ 210 の 10 基で構成する。主軸方位は N-79°-W、検出面の標高は 35.6m である。梁行総長約 3.60m、桁行総長約 6.30m、床面積は約 22.7㎡を測る。芯芯間距離は約 2.6 ～ 0.7m である。

ＳＰ 209 は不整形な形状を呈し、長径約 1.22 m、短径約 0.66 m、深さ約 0.26 mを測る。断面形状は不整形である。埋土は黒褐シルトと黒褐細砂～シルトである。ＳＰ 208 は楕円形を呈し、長径約 0.76 m、短径約 0.48 m、深さ約 0.31 mを測る。断面形状はＵ字形である。埋土は黒褐粘土と暗褐

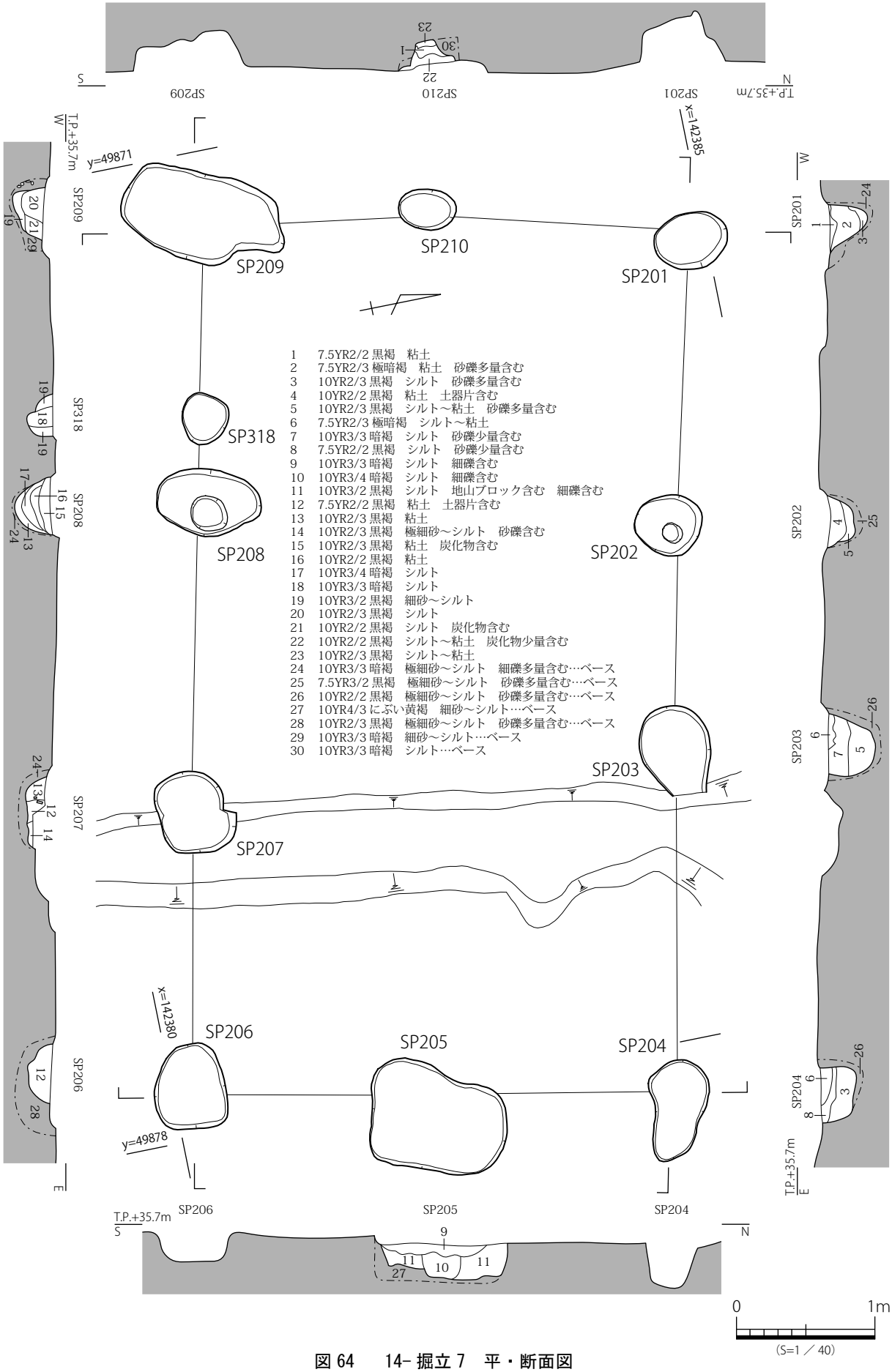
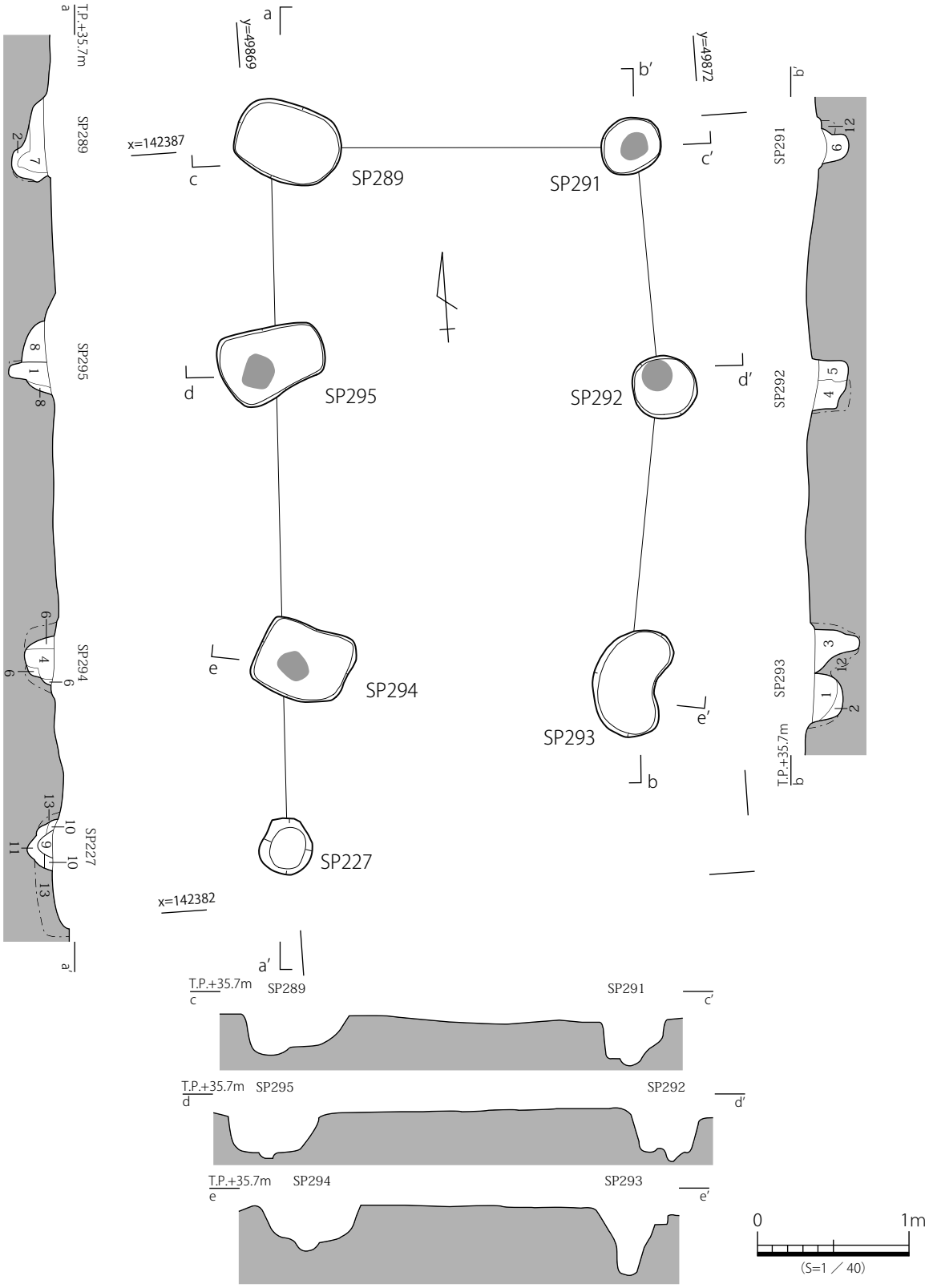


図 64　14- 掘立 7　平・断面図



1　10YR2/3 黒褐　粘質シルト
2　10YR3/2 黒褐　細砂
3　10YR2/3 黒褐　粘質シルト　土器片含む
4　10YR2/3 黒褐　粘質シルト　地山ブロック 3%　炭化物含む
5　10YR2/3 黒褐　細砂～シルト　地山ブロック斑状に含む　土器片含む
6　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト
7　10YR3/3 暗褐　細砂
8　10YR3/3 暗褐　シルト
9　10YR2/3 黒褐　粘土
10　10YR3/4 暗褐　シルト～粘土
11　10YR2/2 黒褐　粘土
12　10YR3/4 暗褐　細砂…ベース
13　10YR3/3 暗褐　シルト…ベース

図 65　14- 掘立 9　平・断面図

シルトである。ＳＰ 207 は一部を撹乱に切られる。長径約 0.66 m、短径約 0.58 m、深さ約 0.2 mを測る。埋土は黒褐粘土と黒褐極細砂～シルトである。ＳＰ 206 は楕円形を呈し、長径約 0.64 m、短径約 0.56 m、深さ約 0.21 mを測る。断面形状は椀形であり。埋土は黒褐粘土である。ＳＰ 205 は不整形な形状を呈し、長径約 1.08 m、短径約 0.78 m、深さ約 0.28 mを測る。断面形状は不整形である。埋土は暗褐シルトと黒褐シルトである。ＳＰ 204 は不整形な形状を呈し、長径約 0.75 m、短径約 0.44 m、深さ約 0.26 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は極暗褐シルト～粘土と黒褐シルトである。ＳＰ 203 は一部を撹乱に切られるため、全体の形状は不明である。短径約 0.52 m、深さ約 0.38 mを測る。断面形状はＵ字形である。埋土は極暗褐シルト～粘土と暗褐シルト、黒褐シルト～粘土である。ＳＰ 202 は円形を呈し、直径約 0.5 m、深さ約 0.25 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は黒褐粘土と黒褐シルト～粘土である。ＳＰ 201 は楕円形を呈し、長径約 0.54 m、短径約 0.5 m、深さ約 0.32 mを測る。断面形状はＵ字形である。埋土は上層が黒褐粘土、中層が極暗褐粘土、下層が黒褐シルトである。ＳＰ 210 は円形を呈し、直径約 0.28 m、深さ約 0.23 mを測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は上層が黒褐シルト～粘土、中層が黒褐粘土、下層が黒褐シルト～粘土である。

遺物は図示できなかったが、ＳＰ 207 から須恵器杯身片が出土した。細片であるため、詳細な時期は不明である。

14 －掘立 9(図 65)

第 14 調査区の中央西寄りで検出した掘立柱建物である。1 × 3 間の側柱建物で、ＳＰ 227・289・291 ～ 295 の 7 基で構成する。主軸方位は N-3°-E、検出面の標高は 35.6m である。梁行総長約 2.50m、桁行総長約 4.60m、床面積は約 11.5㎡を測る。芯芯間距離は約 2.5 ～ 1.3m である。

ＳＰ 289 は隅丸長方形を呈し、長辺約 0.7 m、短辺約 0.54 m、深さ約 0.26 mを測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が暗褐細砂、下層が黒褐細砂である。ＳＰ 295 は隅丸長方形を呈し、長辺約 0.72 m、短辺約 0.56 m、深さ約 0.28 mを測る。断面形状は椀形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐粘質シルト、掘方が暗褐シルトである。ＳＰ 294 は隅丸長方形を呈し、長辺約 0.72 m、短辺約 0.58 m、深さ約 0.2 mを測る。断面形状はＵ字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐粘質シルト、掘方が暗褐細砂～シルトである。ＳＰ 227 は円形を呈し、直径約 0.38 m、深さ約 0.26 mを測る。断面形状は椀形に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐粘土、掘方が暗褐シルト～粘土と黒褐粘土である。ＳＰ 293 は不整形な形状を呈し、長径約 0.72 m、短径約 0.42 m、深さ約 0.24 と 0.32 mを測る。埋土は黒褐粘質シルトと黒褐細砂、黒褐粘質シルトである。ＳＰ 292 は円形を呈し、直径 0.44 m、深さ約 0.24 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘方が黒褐粘質シルトである。ＳＰ 291 は円形を呈し、直径約 0.4 m、深さ約 0.2 mを測る。断面形状はＵ字形である。埋土は暗褐細砂～シルトである。

遺物は図示できなかったが、ＳＰ 291 から土師器片が出土した。細片であるため、詳細な時期は不明である。

14 －掘立 11(図 66)

第 14 調査区の北側で検出した 2 × 2 間の掘立柱建物ないし柵列と考えられる遺構である。ＳＰ 418 ～ 422 の 5 基で構成する。主軸方位は N-87°-E、検出面の標高は 35.4m である。梁行総長約 3.40m、桁行総長約 5.80m を測る。芯芯間距離は約 2.9 ～ 1.4m である。

ＳＰ 419 は円形を呈し、直径約 0.46 m、深さ約 0.46 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が暗褐シルト混じり細砂、下層が黒褐細砂である。ＳＰ 420 は隅丸長方形を呈し、長辺約 0.9 m、短辺約 0.68 m、深さ約 0.24 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は暗褐シルト混じり細砂である。ＳＰ 421 は不整形な形状を呈し、長径約 0.82 m、短径約 0.78 m、深さ約 0.38 mを測る。断面形状は逆台形の段落ちである。埋土は上層が暗褐シルト混じり細砂、下層が黒褐細砂である。ＳＰ 422 は隅丸長方形を呈し、長辺約 1.0 m、短辺約 0.58 m、深さ約 0.28 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細礫混じりシルト、掘方が暗褐シルトと黒褐シルトである。ＳＰ 418 はやや歪な隅丸方形を呈し、長

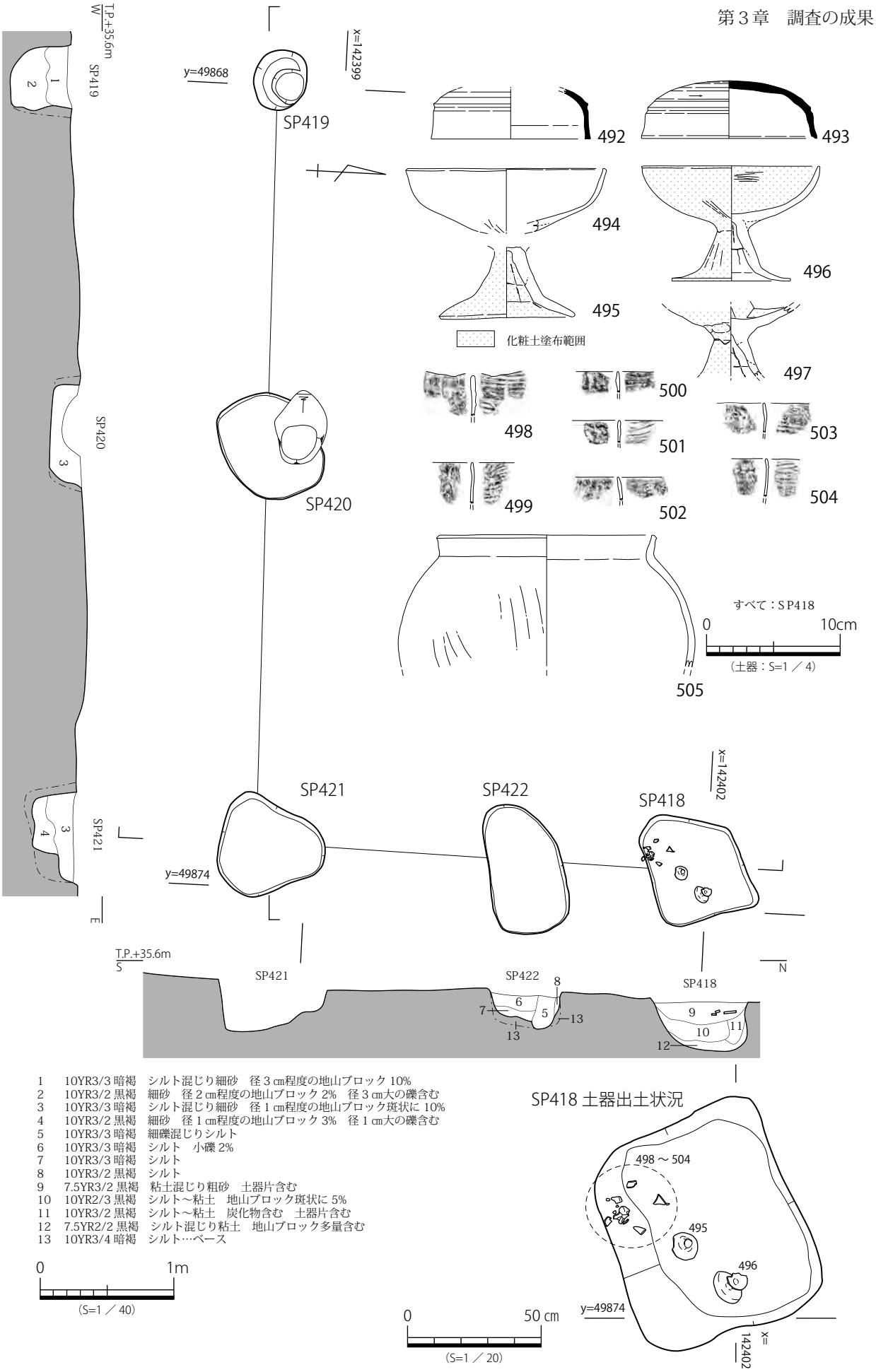


図 66　14- 掘立 11　平・断面図及び出土遺物実測図

辺約 1.0 m、短辺約 0.82 m、深さ約 0.38 mを測る。断面形状は椀状を呈する。埋土は上層が黒褐粘土混じり粗砂、中層が黒褐シルト～粘土、下層が黒褐シルト混じり粘土である。

遺物はＳＰ 418 の中～上層から須恵器杯蓋 (492・493)、土師器高杯 (494・495・496・497)・甕 (505)、製塩土器 (498 ～ 504) がまとまって出土した。図示した遺物の他に、ＳＰ 418 から須恵器杯蓋片、土師器甕片・高杯片が出土した。

出土遺物の年代からＴＫ 208 ～ＴＫ 23 型式並行期と判断できる。

14 －掘立 12(図 67)

第 14 調査区の北側で検出した 1 × 4 間の掘立柱建物ないし柵列と考えられる遺構である。ＳＰ 414・427 ～ 431・433・434 の 8 基で構成する。主軸方位は N-77.5° -E、検出面の標高は 35.5m である。梁行総長約 2.40m、桁行総長約 8.00m、床面積は約 19.2㎡を測る。芯芯間距離は約 2.4 ～ 1.7m である。

ＳＰ 414 は楕円形を呈し、長径約 0.38 m、短径約 0.26 m、深さ約 0.22 mを測る。断面形状は逆台形である。ＳＰ 434 は円形を呈し、直径約 0.54 m、深さ約 0.26 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が暗褐粗砂混じりシルト、中層が黒褐小礫混じり細砂～シルト、下層が暗褐粗砂混じり細砂～シルトである。ＳＰ 433 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.48 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は黒褐小礫混じり細砂～シルトである。ＳＰ 427 はやや歪な円形を呈し、長径約 0.58 m、短径約 0.5 m、深さ約 0.26 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が暗褐粗砂混じりシルト、中層が黒褐粗砂混じりシルト、下層が暗褐シルトである。ＳＰ 428 はやや歪な円形を呈し、長径約 0.38 m、短径約 0.3 m、深さ約 0.26 mを測る。断面形状はＵ字形である。埋土は暗褐シルトと黒褐シルトである。ＳＰ 429 は楕円形を呈し、長径約 0.52 m、短径約 0.4 m、深さ約 0.34 mを測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が黒褐粗砂混じりシルト、中層が黒褐シルト、下層が暗褐シルトと黒褐シルトである。ＳＰ 430 は円形を呈し、直径約 0.42 m、深さ約 0.3 mを測る。断面形状はＵ字形である。埋土は上層が黒褐シルトとにぶい黄褐細砂～シルト、中層が暗褐シルト、下層が黒褐粗砂混じりシルトである。ＳＰ 431 は円形を呈し、直径約 0.4 m、深さ約 0.3 mを測る。断面形状は逆台形である。上層が暗褐粗砂混じりシルト、下層が暗褐シルトである。

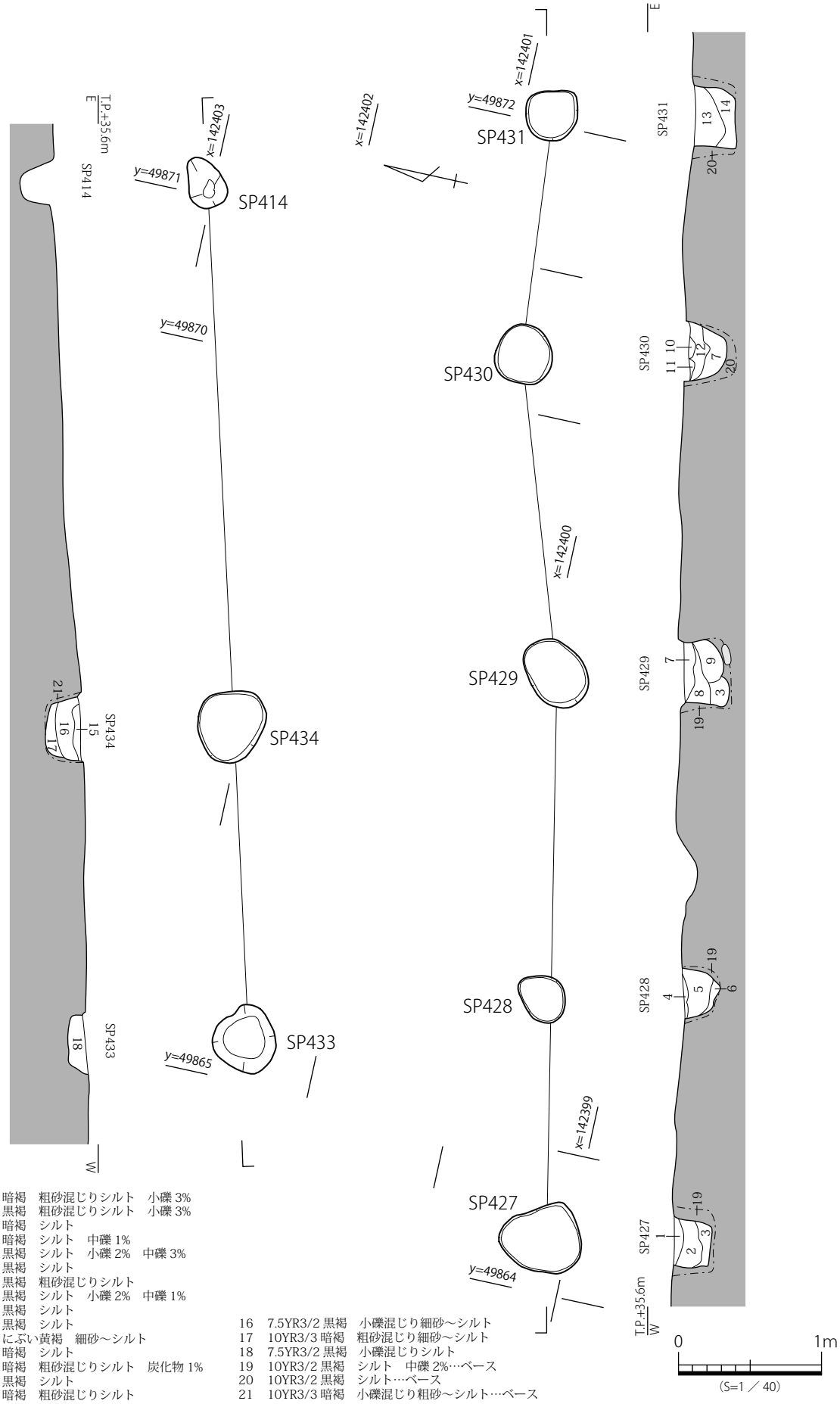
遺物は図示できなかったが、ＳＰ 431 から土師器片が出土した。細片であるため、詳細な時期は不明である。

14 －掘立 13(図 68)

第 14 調査区の北西側で検出した 1 × 3 間の掘立柱建物である。ＳＰ 384 ～ 389・409・417 の 8 基で構成する。主軸方位は N-88° -E、検出面の標高は 35.3m である。梁行総長約 3.00m、桁行総長約 9.20m、床面積は約 27.6㎡を占める。芯芯間距離は約 3.3 ～ 2.3m である。

ＳＰ 387 は楕円形を呈し、長径約 0.68 m、短径約 0.4 m、深さ約 0.32 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が灰褐シルト混じり細砂、中層が黒褐シルト混じり細砂、下層が黒褐細砂である。ＳＰ 386 は円形を呈し、直径約 0.74 m、深さ約 0.2 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が灰褐シルト混じり細砂、下層が黒褐細砂である。ＳＰ 385 は円形を呈し、直径約 0.8 m、深さ約 0.18 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は灰褐シルト混じり細砂である。ＳＰ 384 は円形を呈し、直径約 0.7 m、深さ約 0.2 mを測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は上層が灰褐シルト混じり細砂、下層が黒褐粗砂～シルトである。ＳＰ 388 は円形を呈し、直径約 0.74 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は黒褐粗砂～シルトである。ＳＰ 409 は不整形な形状を呈する。長径約 1.4 m、短径約 0.78 m、深さ約 0.3 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は黒褐細礫混じりシルトと黒褐粗砂～シルト、極暗褐細砂～シルトである。抜き取りの可能性が考えられる。ＳＰ 417 は円形を呈し、直径約 0.76 m、深さ約 0.38 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が黒褐粗砂～シルト、中層が黒褐細礫混じりシルト～粘土、下層が黒褐粗砂混じりシルト～粘土である。ＳＰ 389 は円形を呈し、直径約 0.7 m、深さ約 0.24 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は黒褐粗砂～シルトと暗褐粗砂混じりシルト、暗褐細砂～シルトである。

遺物は図示できなかったが、ＳＰ 384 から製塩



1　10YR3/4 暗褐　粗砂混じりシルト　小礫 3%
2　10YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト　小礫 3%
3　10YR3/3 暗褐　シルト
4　10YR3/4 暗褐　シルト　中礫 1%
5　10YR3/2 黒褐　シルト　小礫 2%　中礫 3%
6　10YR2/3 黒褐　シルト
7　10YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト
8　10YR3/2 黒褐　シルト　小礫 2%　中礫 1%
9　10YR3/1 黒褐　シルト
10　10YR3/2 黒褐　シルト
11　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト
12　10YR3/4 暗褐　シルト
13　10YR3/4 暗褐　粗砂混じりシルト　炭化物 1%
14　10YR2/2 黒褐　シルト
15　10YR3/3 暗褐　粗砂混じりシルト
16　7.5YR3/2 黒褐　小礫混じり細砂～シルト
17　10YR3/3 暗褐　粗砂混じり細砂～シルト
18　7.5YR3/2 黒褐　小礫混じりシルト
19　10YR3/2 黒褐　シルト　中礫 2%…ベース
20　10YR3/2 黒褐　シルト…ベース
21　10YR3/3 暗褐　小礫混じり粗砂～シルト…ベース

図 67　14- 掘立 12　平・断面図

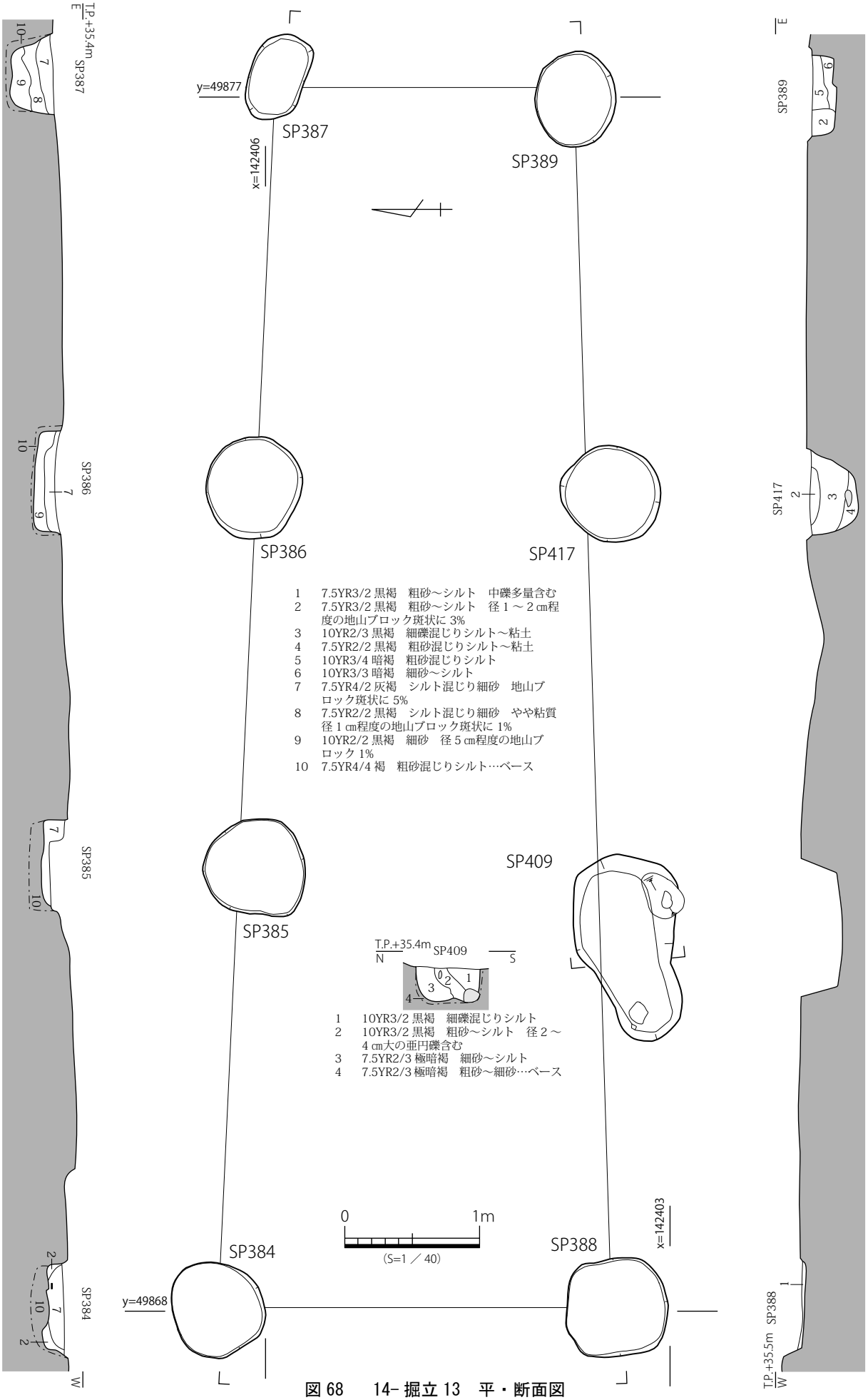


図 68　14- 掘立 13　平・断面図

土器片が出土した。細片であるため、詳細な時期は不明である。

14 －掘立 14(図 69)

第 14 調査区の北西側で検出した調査区外に延びる 1 間以上の掘立柱建物と考えられる遺構である。ＳＰ 383・390 で構成する。主軸方位は N-86.5°-W、検出面の標高は 35.5m である。桁行総長約 1.80m を測る。芯芯間距離は約 1.8m である。

ＳＰ 390 は円形を呈し、直径約 0.74 m、深さ約 0.3 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が黒褐細砂混じりシルト、下層が黒褐シルトである。ＳＰ 383 は不整形な形状で、直径約 0.76 m、深さ約 0.36 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂混じりシルト、掘方が黒褐細砂混じりシルトと灰黄褐細砂である。

遺物はＳＰ 383 から須恵器壺 (506) が出土した。また図示できなかったが、ＳＰ 390 から製塩土器片が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代中期中葉と考えられる。

14 －掘立 15(図 70)

第 14 調査区の北西側で検出した 1 × 2 間以上の総柱建物で、調査区外へ広がる。ＳＰ 397・448 ～ 451 の 5 基で構成する。主軸方位は N-53°-E、検出面の標高は 35.5m である。梁行総長約 1.10m、桁行総長約 4.10m、床面積は約 4.5㎡を測る。芯芯間距離は約 2.1 ～ 1.0m である。

ＳＰ 450 は一部を撹乱に切られるため、全体の形状は不明である。直径約 0.3 m、深さ約 0.32 m を測る。断面形状はＵ字形である。埋土は上層が暗褐シルト、下層が黒褐シルトである。ＳＰ 397 は撹乱に切られ、一部のみ残存していた。円形を呈し、直径約 0.36 m、深さ約 0.32 mを測る。断面形状はＵ字形である。埋土は暗褐シルトである。ＳＰ 451 は円形を呈し、直径約 0.3 m、深さ約 0.24 mを測る。断面形状はＵ字型である。埋土は黒褐細砂～シルトである。ＳＰ 448 は円形を呈し、直径約 0.32 m、深さ約 0.3 mを測る。断面形状はＵ字形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が地山ブロック土を含む黒褐シルト、掘方が黒褐シルトと暗褐細砂～シルトである。ＳＰ 449 は調査区外へと展開するため、全体の形状は不明である。直径約 0.42 m、深さ約 0.14 mを測る。断面形状はＵ字形である。埋土は黒褐シルトと黒褐粘質シルトである。

遺物は図示できなかったが、ＳＰ 397 から土師器片が出土した。細片であるため、詳細な時期は不明である。

14 －掘立 16(図 71)

第 14 調査区の中央北側で検出した掘立柱建物である。14- 竪穴 12・26 に切られる。1 × 3 間を残した側柱建物で、ＳＰ 349・374・405・408・416 の 5 基で構成する。主軸方位は N-17°-E、検出面の標高は 35.5m を測る。残存梁行総長約 2.50m、桁行総長約 5.20m、床面積は約 13.0㎡を測る。芯芯間距離は 2.5 ～ 1.7m である。

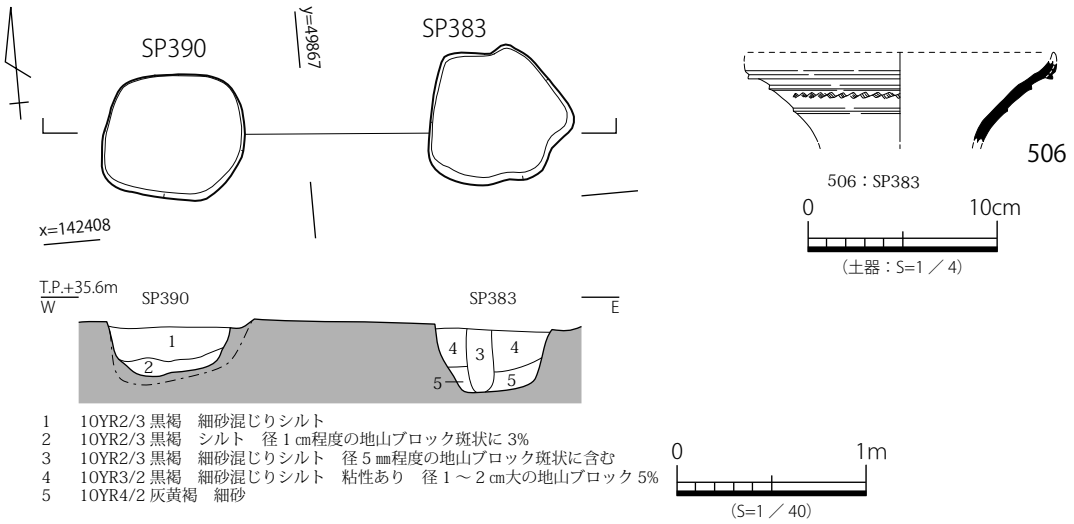
ＳＰ 416 は撹乱に切られ、一部のみ残存していた。円形を呈し、直径約 0.54 m、深さ約 0.1 mを測る。ＳＰ 374 は撹乱に切られ、一部のみ残存していた。円形を呈し、直径約 0.62 m、深さ約 0.32 mを測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が暗褐シルト～粘土、下層が暗褐極細砂～シルトである。ＳＰ 349 は楕円形を呈し、長径約 0.84 m、短径約 0.66 m、深さ約 0.34 mを測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は上層が暗褐粘土、下層が黒褐シルトである。ＳＰ 405 は円形を呈し、直径約 0.72 m、深さ約 0.3 mを測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は上層が黒褐粘土、下層がにぶい黄褐シルトである。ＳＰ 408 はやや歪な隅丸方形を呈し、長辺約 0.8 m、短辺約 0.72 m、深さ約 0.26 mを測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は上層が黒褐シルト～粘土、下層が黒褐粘土である。

遺物が出土していない 14- 竪穴 12・26 との切り合い関係から、古墳時代中期後葉～後期前葉と推定しておく。

27 －掘立 16(図 72)

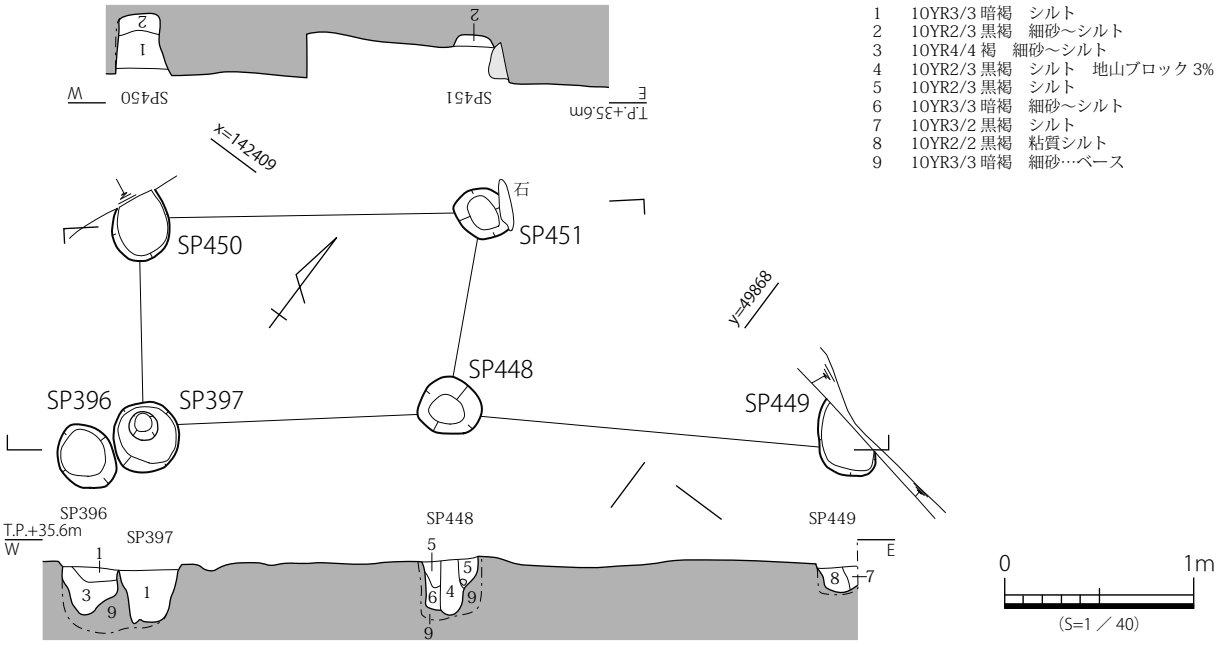
第 27 調査区の中央で検出した 2 × 3 間の掘立柱建物である。ＳＰ 1 ～ 8 の 8 基で構成する。主軸方位は N-62°-W、検出面の標高は 35.6m である。梁行総長約 2.75m、桁行総長約 4.30m、床面積は約 11.8㎡を測る。芯芯間距離は約 1.9 ～ 1.2m である。

ＳＰ 1 は円形を呈し、直径約 0.46 m、深さ約 0.08 mを測る、断面形状は皿状である。埋土は灰



1　10YR2/3 黒褐　細砂混じりシルト
2　10YR2/3 黒褐　シルト　径 1 ㎝程度の地山ブロック斑状に 3%
3　10YR2/3 黒褐　細砂混じりシルト　径 5 ㎜程度の地山ブロック斑状に含む
4　10YR3/2 黒褐　細砂混じりシルト　粘性あり　径 1 ～ 2 ㎝大の地山ブロック 5%
5　10YR4/2 灰黄褐　細砂

図 69　14- 掘立 14　平・断面図及び出土遺物実測図



1　10YR3/3 暗褐　シルト
2　10YR2/3 黒褐　細砂～シルト
3　10YR4/4 褐　細砂～シルト
4　10YR2/3 黒褐　シルト　地山ブロック 3%
5　10YR2/3 黒褐　シルト
6　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト
7　10YR3/2 黒褐　シルト
8　10YR2/2 黒褐　粘質シルト
9　10YR3/3 暗褐　細砂…ベース

図 70　14- 掘立 15　平・断面図

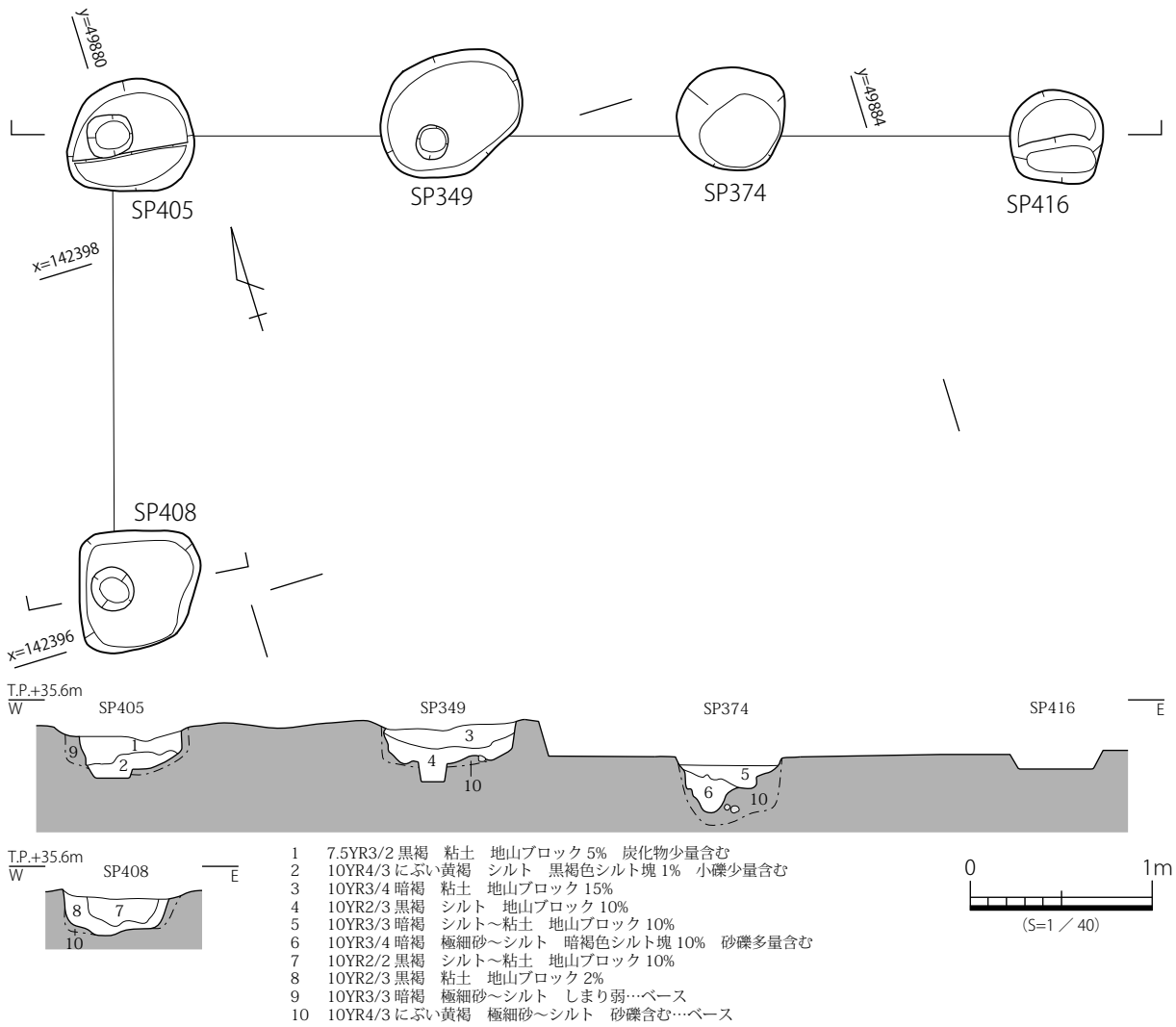


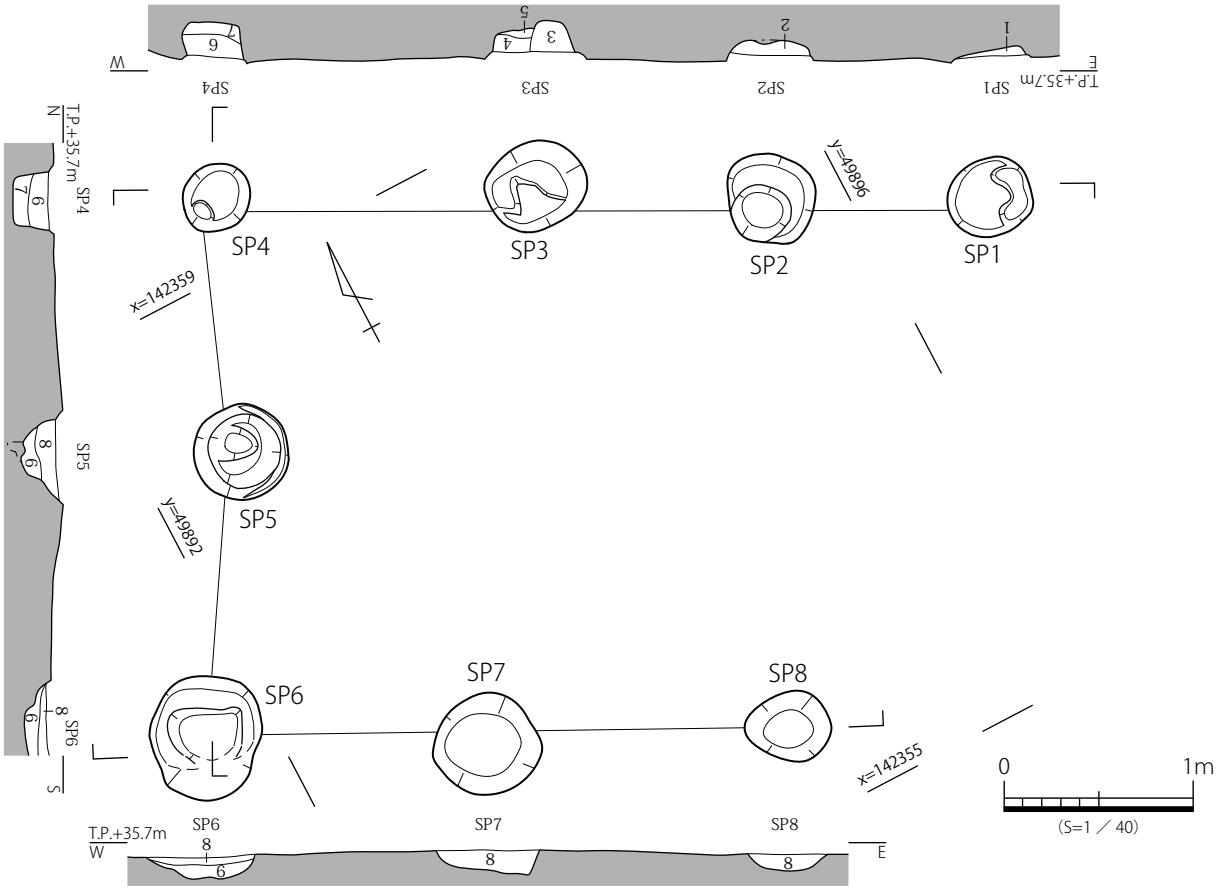
図 71　14- 掘立 16　平・断面図

黄褐細砂混じりシルトである。ＳＰ２は円形を呈し、直径約 0.52 m、深さ約 0.12 mを測る、断面形状は皿状である。埋土は黒褐シルト混じり細砂～中粒砂である。ＳＰ３は円形を呈し、直径約 0.54 m、深さ約 0.2 mを測る、断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト混じり細砂～中粒砂、掘方が灰黄褐シルト混じり中粒砂～粗砂である。ＳＰ４は円形を呈し、直径約 0.4 m、深さ約 0.22 mを測る、断面形状は逆台形である。埋土は上層が灰黄褐細砂～中粒砂、下層がにぶい黄褐シルト混じり細砂～中粒砂である。ＳＰ５は円形を呈し、直径約 0.52 m、深さ約 0.22 mを測る、断面形状は椀状である。埋土は上層が灰黄褐細砂～中粒砂、下層が灰黄褐中粒砂～粗砂である。ＳＰ６はやや歪な円形を呈し、直径約 0.66 m、深さ約 0.14 mを測る、断面形状は皿状である。埋土は上層が灰黄褐細砂～中粒砂、下層が灰黄褐中粒砂～粗砂である。ＳＰ７は円形を呈し、直径約 0.58 m、深さ約 0.14 mを測る、断面形状は皿状である。埋土は灰黄褐細砂～中粒砂である。ＳＰ８は円形を呈し、直径約 0.46 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は皿状である。埋土は灰黄褐細砂～中粒砂である。

遺物は図示できなかったが、ＳＰ２から土師器片が出土した。細片であるため、詳細な時期は不明である。

27 ―掘立 1(図 73)

第 27 調査区の南側で検出した１×２間の掘立柱建物である。27- 竪穴 130・140 を切る。ＳＰ 113・119 ～ 123 で構成する。主軸方位は N-11°-E、検出面の標高は 36.1m である。梁行総長約 1.60m、桁行総長約 3.70m、床面積は約 5.9㎡を測る。芯芯間距離は約 1.9 ～ 1.6m である。



1　10YR4/2 灰黄褐　細砂混じりシルト　径３㎝程度の地山ブロック 5%
2　10YR3/2 黒褐　シルト混じり細砂～中粒砂　径１㎝程度の地山ブロック 2%
3　10YR3/2 黒褐　シルト混じり細砂～中粒砂
4　10YR4/2 灰黄褐　シルト混じり中粒砂～粗砂
5　10YR4/2 灰黄褐　シルト混じり中粒砂～粗砂　径３㎝程度の地山ブロック 5%
6　10YR4/2 灰黄褐　細砂～中粒砂　地山ブロック斑状に 5%
7　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト混じり細砂～中粒砂
8　10YR4/2 灰黄褐　細砂～中粒砂

図 72　27- 掘立 16　平・断面図

ＳＰ 120 は円形を呈し、直径約 0.26 m、深さ約 0.24 mを測る。断面形状はＵ字形である。埋土は灰黄褐細砂である。ＳＰ 121 は円形を呈し、直径約 0.3 m、深さ約 0.26 mを測る。断面形状はＵ字形である。埋土は灰黄褐細砂である。ＳＰ 122 は円形を呈し、直径約 0.24 m、深さ約 0.1 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は灰黄褐細砂である。ＳＰ 113 は楕円形を呈し、長径約 0.4 m、短径約 0.26 m、深さ約 0.14 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は灰黄褐細砂である。ＳＰ 123 は円形を呈し、直径約 0.3 m、深さ約 0.2 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は灰黄褐細砂である。ＳＰ 119 は円形を呈し、直径約 0.28 m、深さ約 0.26 mを測る。断面形状はＵ字形である。埋土は灰黄褐細砂である。

遺物はＳＰ 121 から土師質土器杯 (507) が出土した。図示した遺物の他に、ＳＰ 113・123 から須恵器片・土師器片が出土した。

切り合い関係から、古墳時代後期後半以降と考えられる。

14 ー掘立 100(図 74)

第 14 調査区の北側で検出した柵列ないし掘立柱建物と考えられる遺構である。撹乱に切られ、14-竪穴 4 を切る。ＳＰ１～３で構成する。１×１間の側柱建物で、梁行総長約 1.50m、桁行総長約 1.50m、床面積は約 2.25㎡を占める。主軸方位は N-17° -E、芯芯間距離は約 1.5m である。

ＳＰ１は円形を呈し、直径約 0.34 m、深さ約 0.28 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐粘質シルト、掘方が暗褐粗砂混じりシルトである。ＳＰ３は楕円形を呈し、長径約 0.46 m、短径約 0.34 m、深さ約 0.14 mを測る。断面形状は逆台形に柱

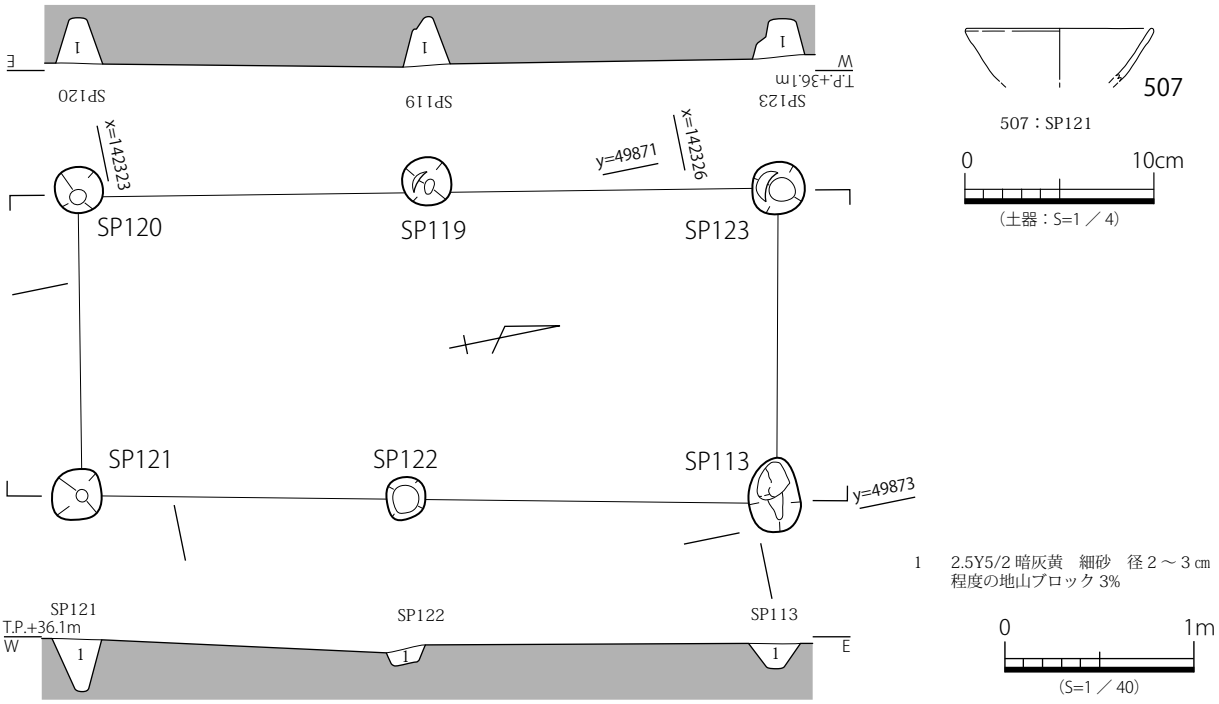


図 73　27- 掘立 1　平・断面図及び出土遺物実測図

痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐小礫混じり極細砂、掘方がにぶい黄褐小礫混じりシルトである。ＳＰ２は円形を呈し、直径約 0.3 m、深さ約 0.32 mを測る。断面形状はＵ字形である。埋土は暗褐粘質シルトと褐小礫混じりシルトである。

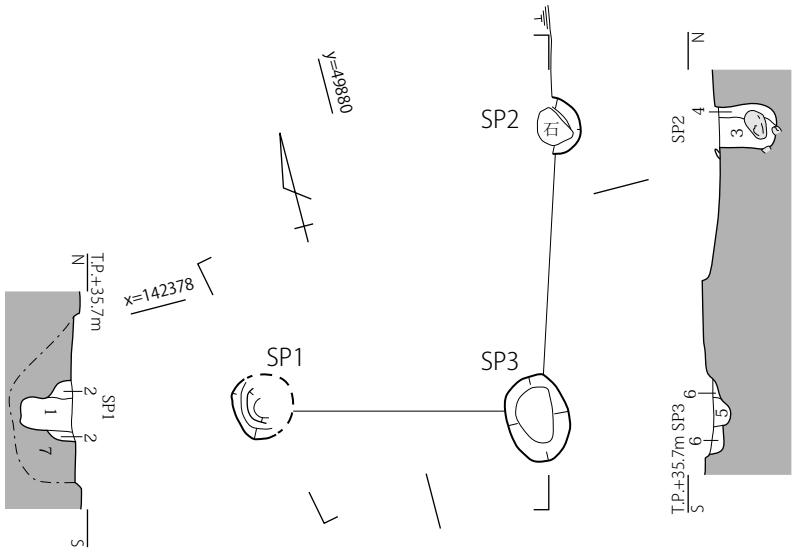
遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から、ＴＫ 23 ～ＭＴ 15 型式併行期以降と考えられる。

14 －掘立 10(図 75)

第 14 調査区の北側で検出した掘立柱建物と考えられる遺構である。ＳＰ 350 ～ 353・355・356 で構成する。1 × 3 間の側柱建物で、梁行総長約 1.70m、桁行総長約 4.00m、床面積は約 6.8㎡を占める。主軸方位は N-72°-W、芯芯間距離は約 2.0 ～ 1.0m である。

ＳＰ 355 は円形を呈し、直径約 0.58 m、深さ約 0.32 mを測る。断面形状は「へ」の字状である。埋土は柱痕が黒褐シルト～粘土、下層が黒褐粘土である。ＳＰ 356 は楕円形を呈し、長径約 0.7 m、短径約 0.54 m、深さ約 0.34 mを測る。断面形状は不整形である。埋土は黒褐粘土である。ＳＰ 353 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.56 m、深さ約 0.44 mを測る。断面形状はＵ字形を呈する。埋土は上層が黒褐シルト～粘土、中層が黒褐シルト混じり細砂、下層が暗褐シルト混じり細砂である。ＳＰ 352 は円形を呈し、直径約 0.58 m、深さ約 0.22 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト混じり細砂、掘方がにぶい黄褐細砂である。ＳＰ 351 は円形を呈し、直径約 0.7 m、深さ約 0.26 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂混じりシルトと黒褐シルト混じり細砂、掘方がにぶい黄褐シルト混じり細砂とにぶい黄褐細砂である。ＳＰ 350 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.74 m、深さ約 0.44 mを測る。断面形状はＵ字形である。埋土は上層が灰黄褐シルト混じり細砂、中層が黒褐細砂混じりシルト、下層がにぶい黄褐シルト混じり細砂である。

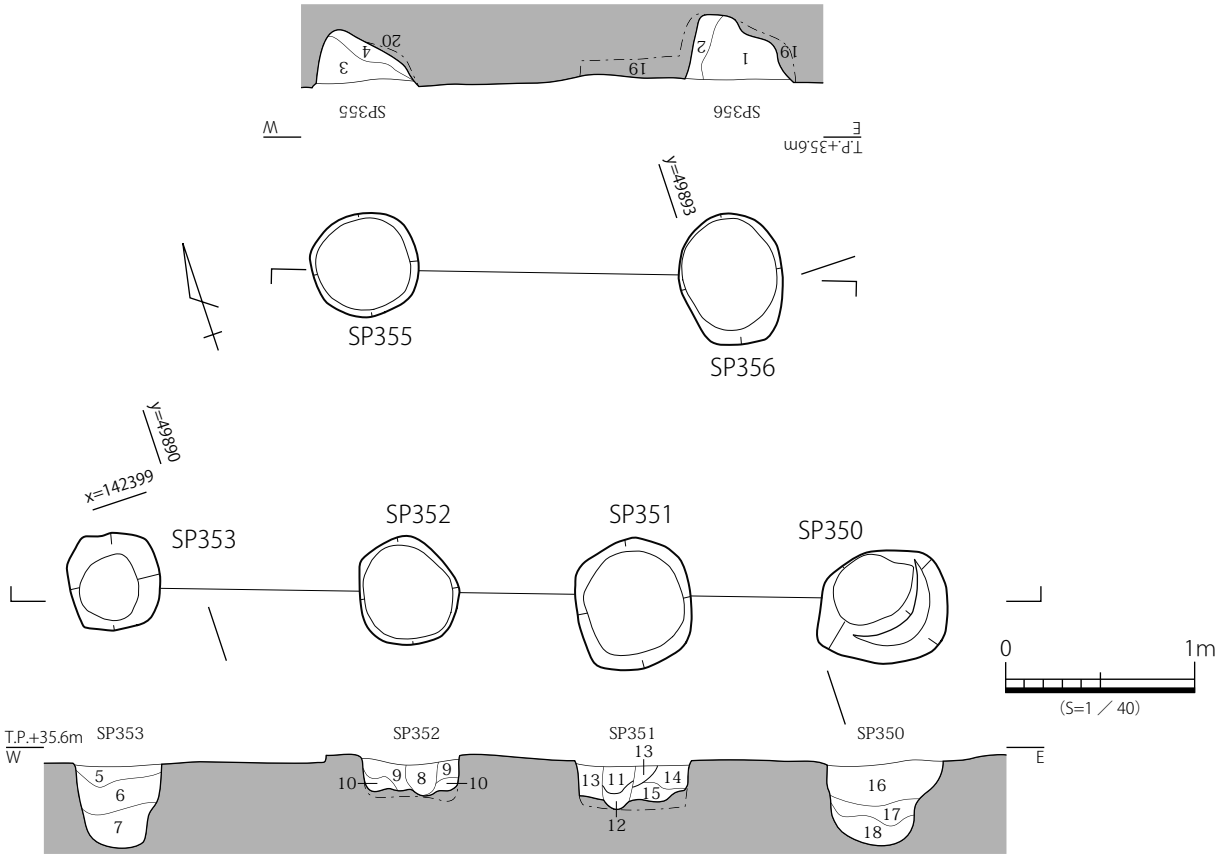
図示できなかったが、ＳＰ 350・351・352 から土師器片が出土した。いずれも細片であるため、詳細な時期は不明である。



1　10YR3/4 暗褐　粘質シルト
2　10YR3/3 暗褐　粗砂混じりシルト
3　7.5YR3/3 暗褐　粘質シルト +10YR6/4 にぶい黄橙　小礫混じりシルト
4　10YR4/4 褐　小礫混じりシルト
5　10YR3/3 暗褐　小礫混じり極細砂
6　10YR4/3 にぶい黄褐　小礫混じりシルト
7　10YR6/3 にぶい黄橙　砂礫混じりシルト…ベース

0　1m
（S=1／40）

図 74　14- 掘立 100　平・断面図



1　7.5YR3/2 黒褐　粘土　地山ブロック 20%
2　10YR3/2 黒褐　粘土　地山ブロック 20%
3　10YR2/3 黒褐　シルト～粘土　地山ブロック 10%
4　10YR2/2 黒褐　粘土　地山ブロック 15%
5　10YR3/2 黒褐　シルト～粘土　径 2 ㎝程度の地山ブロック亜角礫状に 3%
6　10YR3/2 黒褐　シルト混じり細砂　径 1 ㎝程度の地山ブロック亜角礫状に 2%
7　10YR3/3 暗褐　シルト混じり細砂　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック亜円礫状に 3%
8　10YR3/2 黒褐　シルト混じり細砂
9　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂　径 1 ㎝程度の地山ブロック 3%
10　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂　地山ブロック 30%
11　10YR3/2 黒褐　細砂混じりシルト
12　10YR3/2 黒褐　シルト混じり細砂　径 3 ㎝程度の地山ブロック多量含む
13　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト混じり細砂
14　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂　しまりあり
15　10YR5/3 にぶい黄褐　細砂
16　10YR4/2 灰黄褐　シルト混じり細砂　径 0.5 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック 5%　炭化物含む
17　10YR3/2 黒褐　細砂混じりシルト　径 1 ㎝程度の地山ブロック 10%
18　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト混じり細砂　径 1 ㎝程度の地山ブロック 2%
19　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト　小礫少量含む…ベース
20　10YR4/4 褐　シルト　小礫少量含む…ベース

図 75　14- 掘立 10　平・断面図

（３）　柵列

14 －柵列 1(図 76)

第 14 調査区の北西で検出した柵列である。4 間でＳＰ 423 ～ 426・466 で構成する。主軸方位は N-87°-E、検出面の標高は 35.5m である。芯芯間距離は 1.9 ～ 0.6m を測る。

ＳＰ 423 は円形を呈し、直径約 0.34 m、深さ約 0.34 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層がにぶい黄褐細砂、下層が暗褐細砂である。ＳＰ 466 は円形を呈し、直径約 0.4 m、深さ約 0.32 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は暗褐細砂～シルトである。ＳＰ 424 は円形を呈し、直径約 0.24 m、深さ約 0.2 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層がにぶい黄褐細砂、下層が暗褐細砂である。ＳＰ 425 は円形を呈し、直径約 0.3 m、深さ約 0.16 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂、掘方がにぶい黄褐細砂とにぶい黄褐シルト混じり細砂である。ＳＰ 426 は円形を呈し、直径約 0.48 m、深さ約 0.14 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂、掘方がにぶい黄褐細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

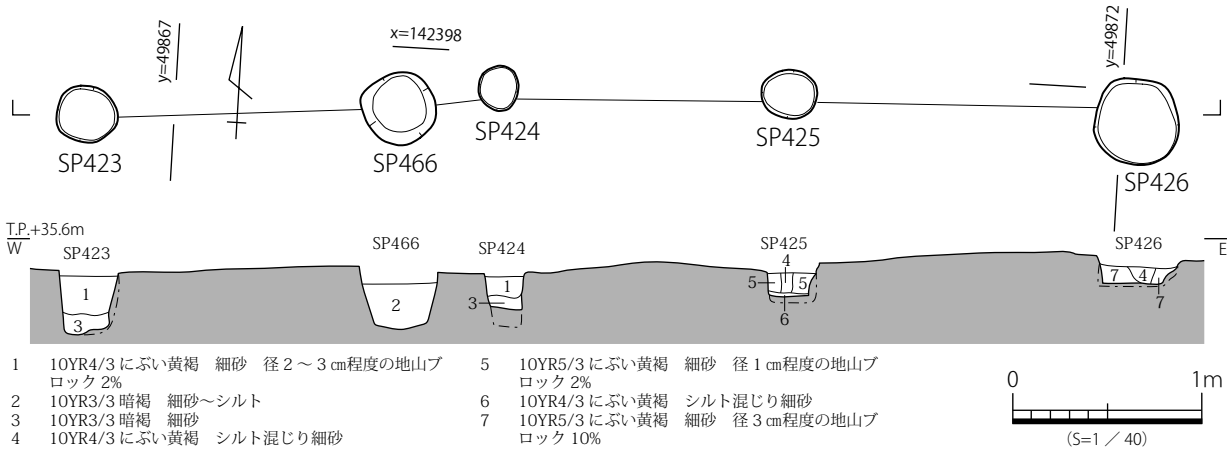


図 76　14- 柵列 1　平・断面図

（４） ＳＤ

14 －ＳＤ 1(図 77)

第 14 調査区の南西側で検出した南北方向の溝である。14- ＳＤ２に切られる。主軸方位 N-6°-E、検出面の標高は 36.2m である。長さ約 26.0m、幅約 1.1 ～ 1.8m、深さ約 0.06 ～ 0.2m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は c 断面で上層が褐粗砂～シルトと暗褐粗砂～シルト、下層が暗褐細砂～シルトと褐粗砂～細砂である。d 断面では単層で灰黄褐粗砂混じりシルトである。

遺物は須恵器杯底部 (508) が出土した。図示した遺物の他に、須恵器杯身片、土師皿片が出土した。出土遺物の年代から古代の溝と判断できる。

14 －ＳＤ 2(図 77)

第 14 調査区の南西側で検出した溝である。14- ＳＤ１を切る。南から西へ屈曲して方位 N-39°- W → N-84°-E の方位をとる。検出面の標高は 36.2m である。長さ約 5.0m、幅約 0.90m 深さ約 0.15m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で、b 断面で黒褐粗砂～シルト a 断面で暗褐細砂～シルトである。

遺物は出土していないが、14- ＳＤ１を切ることから、古代以降と考えられる。

14 －ＳＤ 3(図 77)

第 14 調査区の南西側で検出した溝である。やや湾曲して方位 N-53°-W で調査区外へ延びる。検出面の標高は 36.2m である。長さ約 2.62m、幅約 1.00m、深さ約 0.3m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は上層がにぶい黄褐シルト混じり粗砂、下層が暗褐シルト混じり粗砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＤ 29(図 78)

第 14 調査区の南西隅で検出した東西方向の溝である。調査区外から直線的に主軸方位 N-77°-W に延びる。検出面の標高は 36.2m である。長さ約 3.08m、幅約 0.94m、深さ約 0.5m を測る。断面形状は不整形である。

埋土はラミナが確認できる４～６層の暗褐粗砂とにぶい黄褐粘質シルト、暗褐礫混じり粗砂をベースに、１～３層の暗褐細礫混じり細砂と褐細礫混じり細砂、暗褐細礫混じり細砂の掘り返し後の堆積が確認できる。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＤ 39・27 －ＳＤ 139(図 78)

第 14・27・39・41 調査区にかけて検出した直線溝であり、条里型地割の坪界線に相当する。主軸方位は N-78°～ 80°-W で西から東へほぼ平坦な勾配で流下する。検出面の標高は 36.0m、溝底の標高は 35.2 m～ 35.5m を測る。長さ約 31.2m、幅約 1.3 ～ 2.0m、深さ約 0.9 ～ 0.4m を測る。断面形状はＶ字形・逆凸形を呈す。41- ＳＤ１と 39- ＳＤ１については (C) 周辺区画において後述する。

埋土は a 断面では上層が灰黄褐細砂～中粒砂と灰黄褐細砂、中層が暗灰黄シルト～中粒砂と灰黄褐細砂、にぶい黄褐シルト混じり細砂、下層がにぶい黄褐シルト混じり細砂と暗灰黄シルト混じり細砂、暗灰黄極細砂～細砂、最下層が灰黄褐シルト混じり極細砂～細砂である。このうち４・９・10 層にラミナが確認できた。b 断面では上層がにぶい黄褐シルト、中層がにぶい黄褐砂質土、下層が暗褐粘土とにぶい黄褐シルト～粘土である。５層にラミナが確認できた。一定の水流を持ちながら、溝が埋没していったことが窺える。

遺物は須恵器高杯 (518)、土師質皿 (509)・杯 (510・511・512・513)・ 皿 (514・515)・ 足 釜 (516・517) が出土した。図示した遺物の他に、須恵器杯身片・高杯片・壺片・甕片、サヌカイト剥片、黒色土器片、三足羽釜片、いぶし瓦片が出土した。

一部に古墳時代の須恵器 (518) が混入しているが、主体となるのは 14 世紀頃と考えられる。

14 －ＳＤ 46(図 79)

第 14 調査区の南東側で検出した東西方向の溝である。第 27 調査区では確認できなかった。やや直線的で主軸方位 N-60°-W である。検出面の標高は 36.2m である。長さ約 4.40m、幅約 0.70m、深さ約 0.26m を測る。断面形状は椀状である。

埋土は上層がにぶい黄褐シルト、下層が暗褐シルトである。

遺物は図示できなかったが、須恵器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

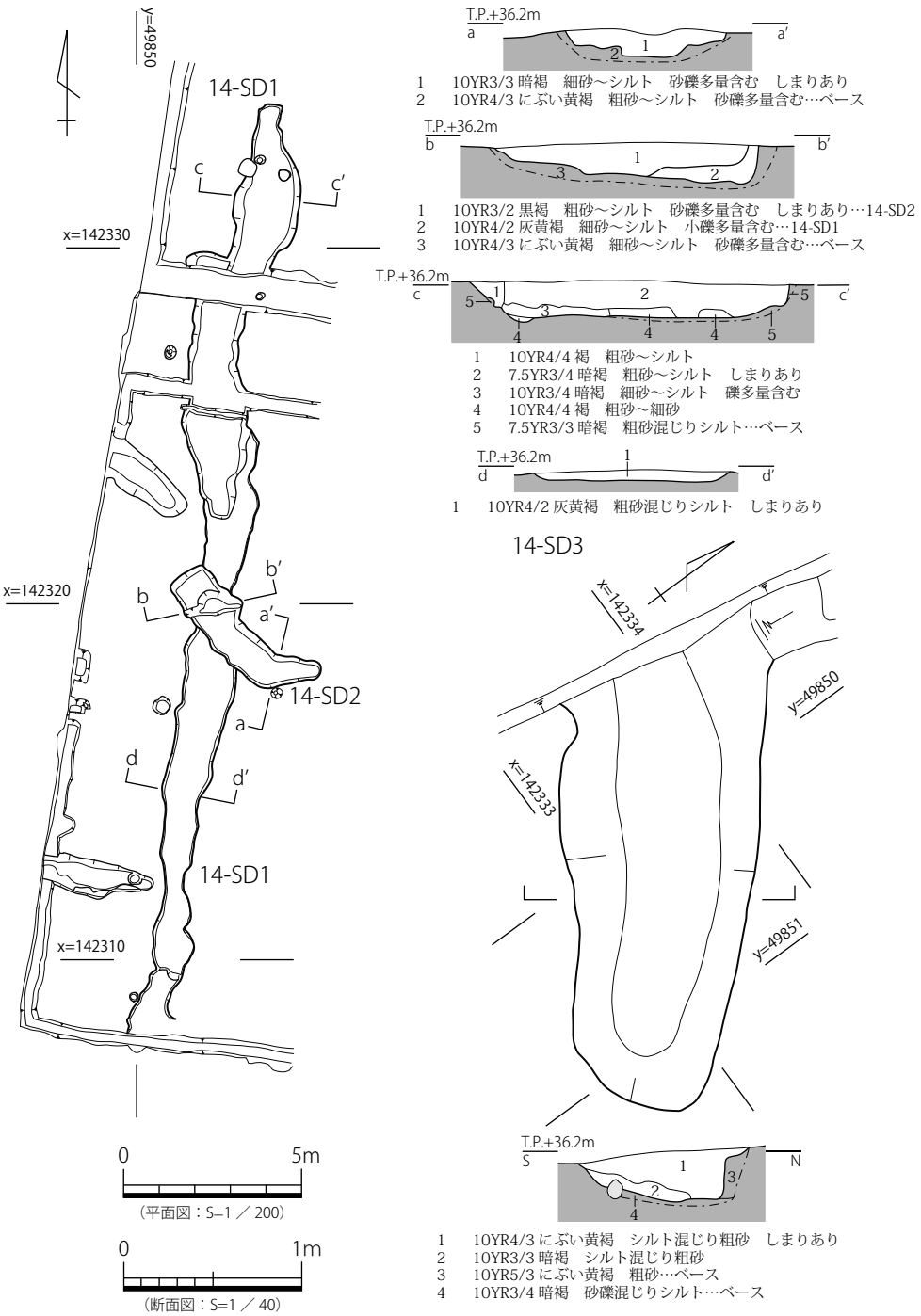


図 77　14-SD1・2・3　平・断面図及び出土遺物実測図

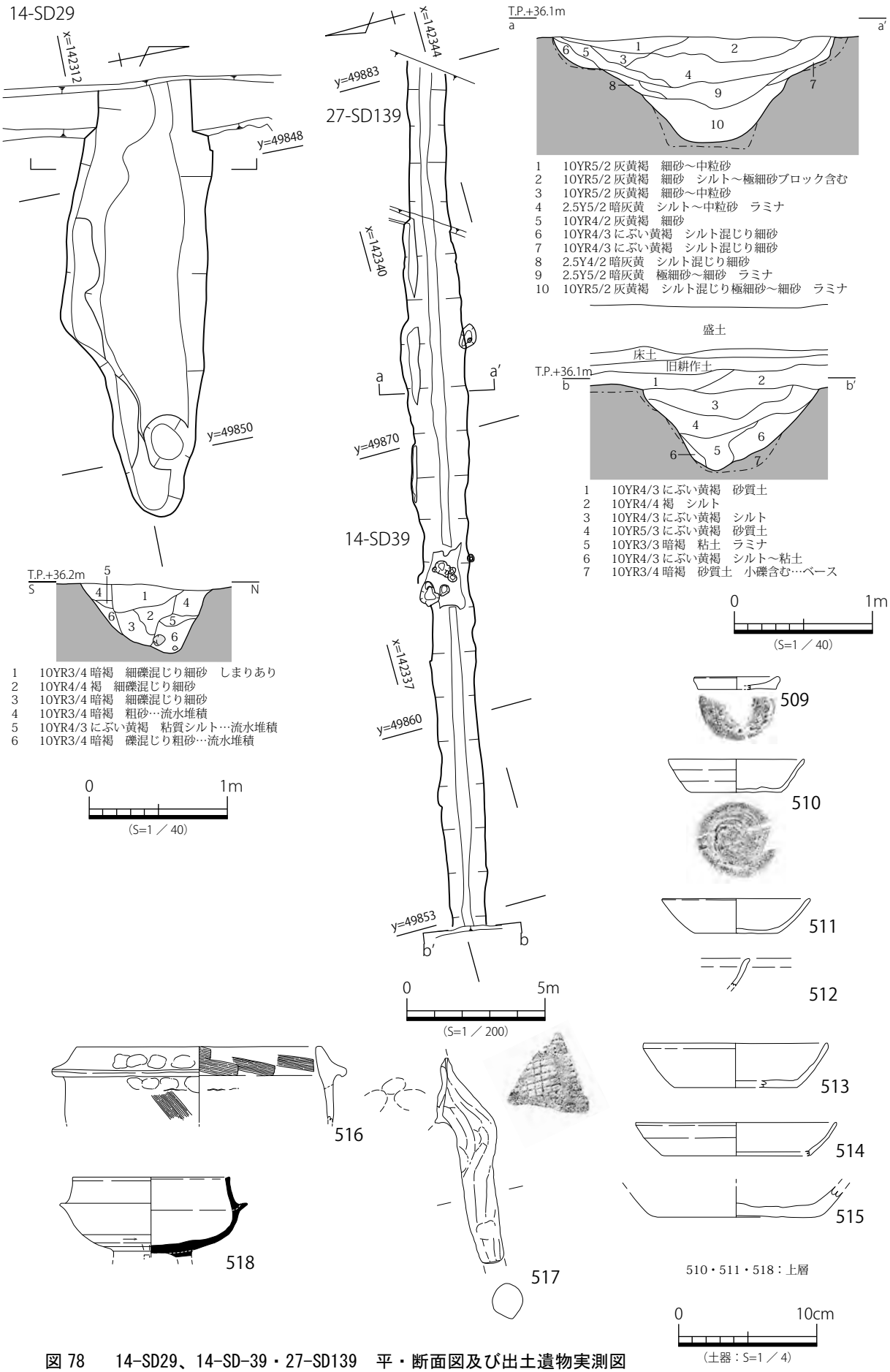


図 78　14-SD29、14-SD-39・27-SD139　平・断面図及び出土遺物実測図

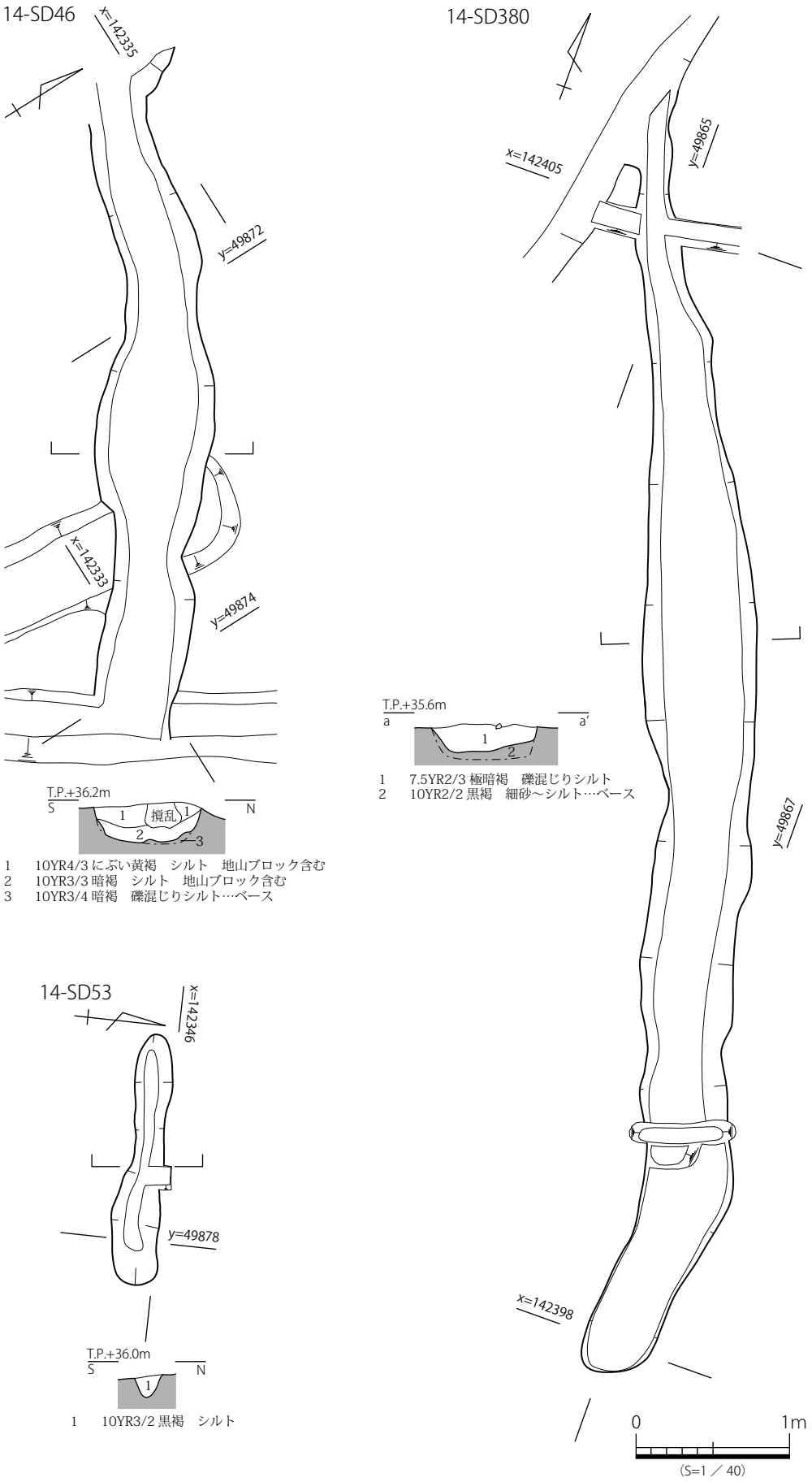


図 79　14-SD46・53・380　平・断面図

14 －ＳＤ 53(図 79)

第 14 調査区の中央で検出した東西方向の溝である。直線的で主軸方位 N-90°-W である。検出面の標高は 35.9m である。長さ約 1.60m、幅約 0.18m、深さ約 0.14m を測る。断面形状は V 字形である。

埋土は単層で黒褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＤ 380(図 79)

第 14 調査区の北西側で検出した溝である。14-ＳＤ 70 に切られる。やや湾曲して主軸方位 N-21°-W である。検出面の標高は 35.5 ～ 35.4m である。長さ約 8.80m を検出し、幅約 0.7 ～ 0.4m、深さ約 0.2 ～ 0.1m を測る。断面形状は逆台形から不整形である。

埋土は単層で極暗褐礫混じりシルトである。

遺物は図示できなかったが、土師器片が出土した。細片であるため、詳細な時期は不明である。

14・27 －ＳＤ 60(図 80)

第 14 調査区の中央で検出した東西方向の溝である。14- ＳＤ 70 を切る。直線的に主軸方位 N-83°-W で調査区外へ延びる。検出面の標高は 35.8 ～ 35.7m である。長さ約 14.0m、幅約 0.5 ～ 0.4m、深さは 0.1m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は a 断面で上層がにぶい黄シルト、下層が暗灰黄シルトである。c 断面では単層で灰黄褐粗砂～シルトである。

遺物は図示できなかったが、土師器片が出土した。ＳＤ 70 との切り合い関係から、ＴＫ 217 型式併行期以降と考えられる。

14・27 －ＳＤ 70(図 80 ～ 82)

第 14・27 調査区の中央で検出したＬ字形に屈曲する溝である。東側の調査区外から主軸方位 N-83°-W で直行し、西側で屈曲して、北に主軸方位 N-7°-E で調査区外へ延びる。検出面の標高は 35.8 ～ 35.6m である。東西方向長さ約 41.6m、南北方向長さ約 42.0m を検出した。幅約 1.3 ～ 2.5m、深さ約 1.0 ～ 1.4 mを測る。断面形状は V 字形である。

遺物は上層・中層・最下層と分けて取上げを行った。上層は、ブロックを含む人為的な埋め戻し土と考えられる堆積である。中層はラミナが顕著に認められる自然堆積層である。最下層も自然堆積層で、中層に比べ粗砂のラミナが認められる。

また各セクション間の埋土の対応関係は、流水堆積が確認できること、また基盤層が礫層～粘土層と変化することに起因する堆積土の差異のため、明確には押さえられなかった。

a 断面は、埋土は上層が 1 ～ 3 層の暗灰黄シルトとにぶい黄細砂～シルト、黄灰シルトである。中層が 4 ～ 8 層の黒褐シルトと灰黄細砂～シルト、黄灰細砂～シルト、灰黄礫混じりシルト、灰黄細砂～シルト。下層が 9 ～ 12 層の灰黄細砂と浅黄シルト、灰黄シルト、浅黄細砂。最下層が 13・14 層の黄灰シルトと暗灰黄シルトである。

上層の底面の標高は 35.4 m、最下層の標高は 34.8 mを測る。

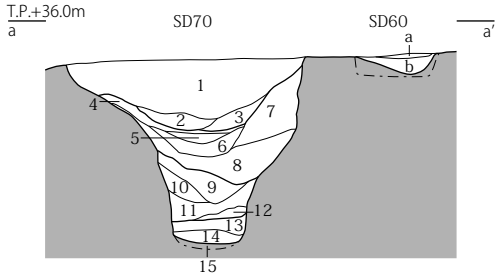
b 断面は、上層が 1 ～ 5 層の黒褐小礫混じり粗砂～シルトと黒褐粗砂混じり粘質土、黒褐粗砂～シルト、暗褐粗砂～シルトである。中層が 6 ～ 10 層の黒褐粗砂混じりシルト、黒褐粗砂混じり粘質土とにぶい黄褐小礫混じりシルト､黒褐粗砂混じり粘質土、灰褐細砂～シルトである。下層が 11・12 層の暗褐小礫混じり粗砂～シルトと褐小礫混じり粗砂～シルト。最下層が 13・14 層の暗褐粗砂～シルトと暗褐粗砂混じり粘質土である。

上層の底面の標高は 35.4 m、最下層の標高は 34.8 mを測る。

c 断面は、上層が 1 ～ 4 層のにぶい黄褐シルトとにぶい黄褐細砂～シルト、灰黄褐シルト、にぶい黄褐シルト。中層が 5 ～ 7 層の黒褐粘土と灰黄褐シルト～粘土、褐灰シルト～粘土である。下層が 8 ・ 9 層の灰白細砂～シルトと褐灰シルト～粘土。最下層が 10 ～ 13 層の灰黄褐シルト～粘土と黒褐粘土、にぶい黄橙シルト、灰黄褐細砂～シルトである。

上層の底面の標高は 35.2 m、最下層の標高は 34.7 mを測る。

d 断面は、上層が 1 ～ 4 層の灰黄褐シルトと灰黄褐細砂～シルト、灰黄褐細砂～粗砂、灰黄褐シルト。中層が 5 ～ 7 層の黒褐粘土と褐灰細砂～シルト、灰黄褐細砂～シルトである。上・中層の肩となる溝堆積層が、 8 ～ 11 層の灰黄褐細砂～シルトとにぶい黄橙シルト混じり粗砂、灰黄褐細砂～シルト、にぶい黄橙シルト混じり粗砂である。最下層は 12・13 層で、灰黄褐細砂～シルトと褐灰細砂～シルトである。



a　2.5Y6/3 にぶい黄　シルト　径 1 ㎜大の礫含む
b　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト　地山ブロック含む　径 1 ～ 2 ㎜大の礫含む
1　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト　地山ブロック含む…人為的に埋め戻した土
2　2.5Y6/3 にぶい黄　細砂～シルト　地山ブロック含む
3　2.5Y5/1 黄灰　シルト　径 1 ㎜大の自然礫含む
4　2.5Y3/1 黒褐　シルト　ラミナ
5　2.5Y7/2 灰黄　細砂～シルト
6　2.5Y5/1 黄灰　細砂～シルト　地山ブロック含む　径 1 ㎜大の礫含む
7　2.5Y6/2 灰黄　礫混じりシルト　地山ブロック含む
8　2.5Y6/2 灰黄　細砂～シルト　地山ブロック含む
9　2.5Y7/2 灰黄　細砂　ラミナ
10　2.5Y7/4 浅黄　シルト…溝壁崩落土
11　2.5Y6/2 灰黄　シルト
12　2.5Y7/4 浅黄　細砂…溝壁崩落土
13　2.5Y4/1 黄灰　シルト　ラミナ
14　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト
15　2.5Y6/3 にぶい黄　礫混じり粗砂…ベース

a　10YR4/2 灰黄褐　粗砂～シルト
1　10YR3/2 黒褐　小礫混じり粗砂～シルト
2　7.5YR3/2 黒褐　小礫混じり粗砂～シルト
3　7.5YR3/1 黒褐　粗砂混じり粘質土
4　7.5YR3/2 黒褐　粗砂～シルト
5　10YR3/4 暗褐　粗砂～シルト
6　7.5YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト　やや粘質　ラミナ
7　7.5YR3/2 黒褐　粗砂混じり粘質土
8　10YR4/3 にぶい黄褐　小礫混じりシルト
9　7.5YR3/2 黒褐　粗砂混じり粘質土
10　7.5YR4/2 灰褐　細砂～シルト
11　10YR3/4 暗褐　小礫混じり粗砂～シルト
12　7.5YR4/3 褐　小礫混じり粗砂～シルト
13　7.5YR3/3 暗褐　粗砂～シルト
14　7.5YR3/3 暗褐　粗砂混じり粘質土
15　7.5YR5/4 にぶい褐　小礫混じり粗砂～シルト…ベース

0　1m
（S=1 ／ 40）

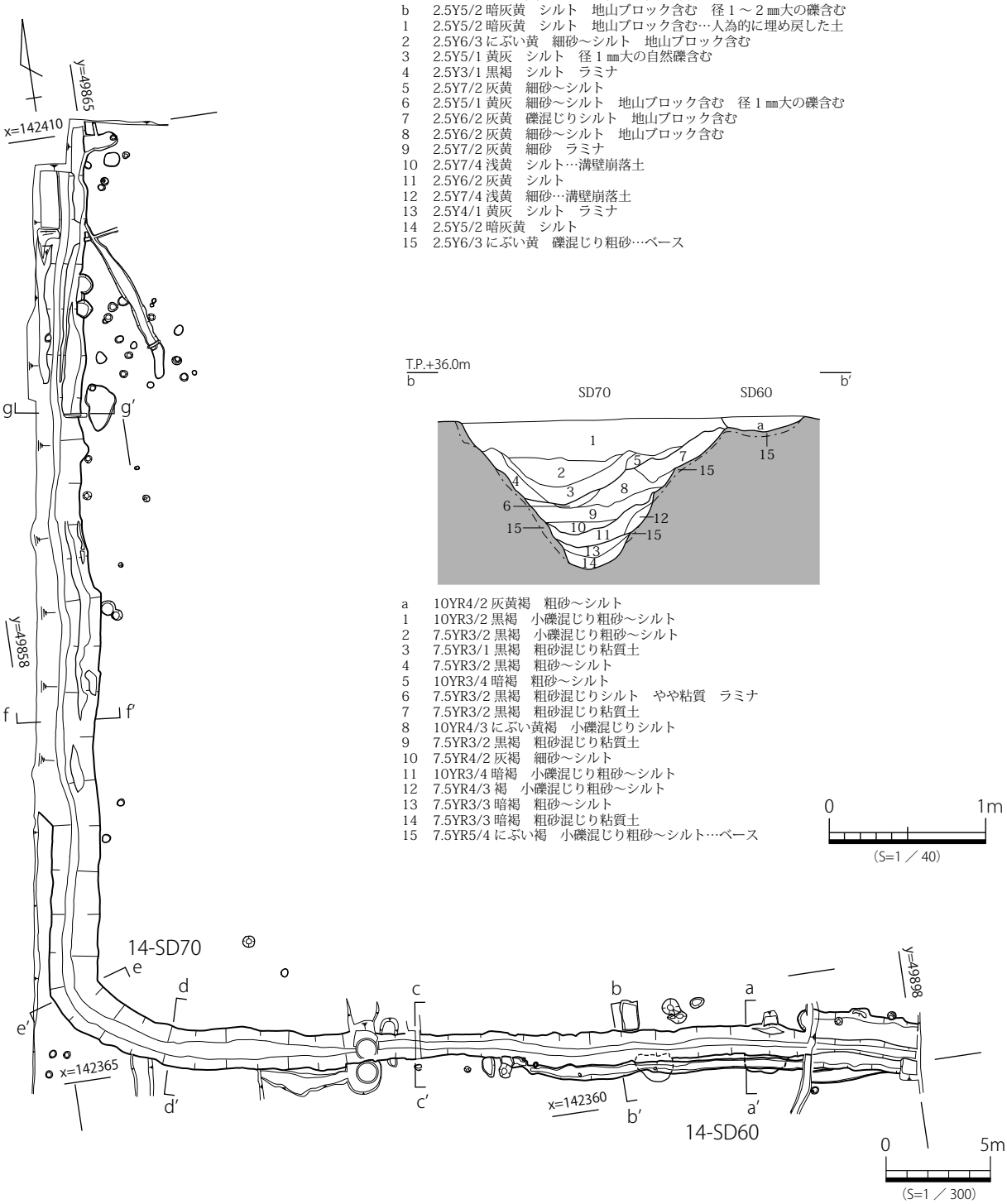
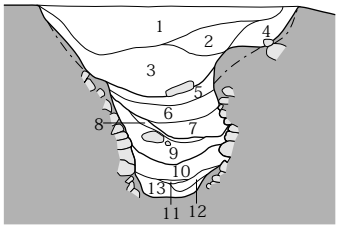


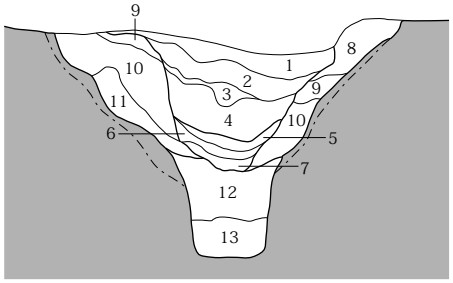
図 80　14・27-SD60、14・27-SD70　平・断面図

T.P.+36.0m
c　　c′



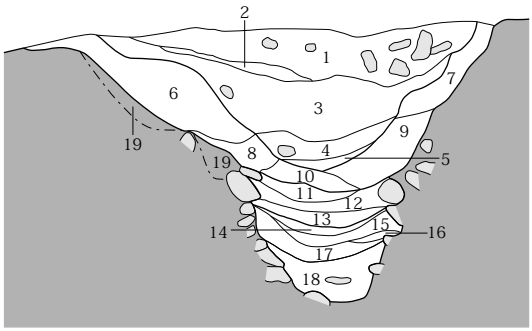
1　10YR5/3 にぶい黄褐　シルト　地山ブロック含む
2　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト　地山ブロック含む　径５㎜大の礫含む
3　10YR5/2 灰黄褐　シルト　径２～５㎜大の礫含む
4　10YR6/3 にぶい黄褐　シルト　地山ブロック含む
5　10YR3/1 黒褐　粘土　滞水層
6　10YR5/2 灰黄褐　シルト～粘土　ラミナ　径２㎜大の礫含む
7　10YR5/1 褐灰　シルト～粘土
8　10YR8/1 灰白　細砂～シルト　流水堆積
9　10YR4/1 褐灰　シルト～粘土　径１㎜大の礫含む
10　10YR5/2 灰黄褐　シルト～粘土　ラミナ　径２～５㎝大の礫含む
11　10YR3/1 黒褐　粘土　滞水層
12　10YR6/3 にぶい黄橙　シルト
13　10YR4/2 灰黄褐　細砂～シルト

T.P.+36.0m
d　　d′



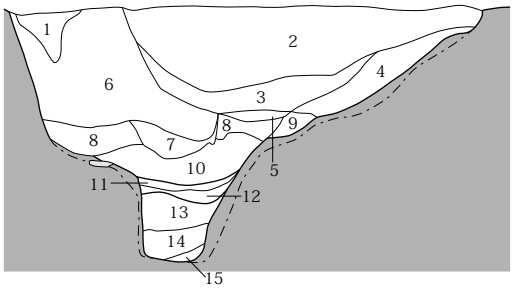
1　10YR6/2 灰黄褐　シルト　地山ブロック含む　径２～５㎝大の礫含む
2　10YR5/2 灰黄褐　細砂～シルト　地山ブロック含む　径２～５㎝大の礫含む
3　10YR6/2 灰黄褐　細砂～粗砂　地山ブロック含む
4　10YR5/2 灰黄褐　シルト　径２㎜～３㎝大の礫含む
5　10YR3/1 黒褐　粘土　滞水層
6　10YR5/1 褐灰　細砂～シルト
7　10YR5/2 灰黄褐　細砂～シルト
8　10YR6/2 灰黄褐　細砂～シルト　径５㎜大の礫含む
9　10YR6/4 にぶい黄橙　シルト混じり粗砂
10　10YR5/2 灰黄褐　細砂～シルト　地山ブロック含む　径２～５㎜大の礫含む
11　10YR6/3 にぶい黄橙　シルト混じり粗砂…地山崩落土
12　10YR5/2 灰黄褐　細砂～シルト　ラミナ
13　10YR5/1 褐灰　細砂～シルト　径２～５㎝大の礫含む

T.P.+36.0m
e　　e′



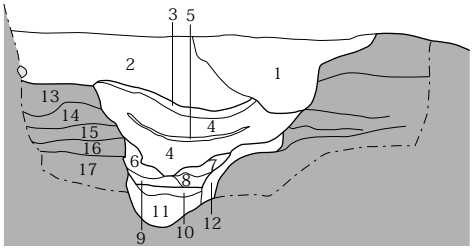
1　10YR3/3 暗褐　粗砂～シルト　径 10 ㎝以下の亜円礫含む　炭化物含む　土器含む
2　10YR4/3 にぶい黄褐　小礫混じりシルト　炭化物含む
3　7.5YR3/2 黒褐　小礫混じり粘質土　径５㎝以下の亜円礫含む　炭化物含む　土器片含む
4　7.5YR2/1 黒　粗砂混じり粘質土　径３㎝以下の亜円礫含む　土器片含む
5　7.5YR3/2 黒褐　粗砂～細砂　径２㎝以下の亜円礫含む
6　7.5YR3/2 黒褐　小礫混じり粗砂～シルト
7　7.5YR3/3 暗褐　小礫混じり粗砂～シルト　径３㎝以下の亜円礫含む　炭化物含む　土器片含む
8　7.5YR3/4 暗褐　粘質土混じり粗砂
9　7.5YR3/4 暗褐　粘質土混じり粗砂
10　7.5YR2/2 黒褐　粗砂混じり粘質土
11　7.5YR4/2 灰褐　小礫混じり粗砂～細砂
12　7.5YR3/3 暗褐　砂礫
13　7.5YR2/2 黒褐　小礫混じり細砂～シルト
14　10YR2/1 黒　粘土
15　7.5YR2/2 黒褐　粗砂混じり粘質土
16　7.5YR3/2 黒褐　粘質土混じり砂礫
17　7.5YR2/2 黒褐　粗砂混じり粘質土
18　7.5YR3/2 黒褐　砂礫
19　7.5YR3/3 暗褐　シルト混じり粗砂…ベース

T.P.+36.0m
f　　f′



1　7.5YR3/2 黒褐　細砂…根穴
2　10YR3/4 暗褐　シルト　地山ブロック含む
3　10YR2/3 黒褐　シルト　地山ブロック含む
4　10YR3/3 暗褐　シルト　地山ブロック含む
5　10YR3/2 黒褐　シルト　地山ブロック含む
6　7.5YR2/2 黒褐　シルト　地山ブロック含む
7　10YR2/3 黒褐　シルト
8　7.5YR3/2 黒褐　シルト　地山ブロック含む
9　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト　地山ブロック含む
10　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト　地山ブロック含む
11　7.5YR3/2 黒褐　シルト　ラミナ
12　10YR3/4 暗褐　細砂
13　10YR4/4 褐　細砂　上下にラミナあり
14　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト　地山ブロック含む　ラミナ
15　10YR6/2 灰黄褐　細砂　ラミナ

T.P.+36.0m
g　　g′



1　10YR2/3 黒褐　シルト～粘土　地山ブロック含む　径 10 ㎝大の礫含む
2　10YR2/2 黒褐　シルト～粘土　地山ブロック含む　径 10 ㎝大の礫含む　炭化物含む
3　10YR2/1 黒　シルト～粘土　炭化物含む
4　10YR2/2 黒褐　シルト　地山ブロック斑状に含む
5　2.5Y6/2 灰黄　細砂
6　2.5Y5/3 黄褐　粗砂～細砂　径２㎝大の礫含む
7　2.5Y5/2 暗灰黄　粗砂
8　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂
9　2.5Y5/3 黄褐　微細砂
10　10YR3/1 黒褐　粘土
11　2.5Y5/3 黄褐　微細砂～細砂　ラミナ
12　2.5Y5/3 黄褐　細砂～中粒砂　径３㎝大の礫含む
13　10YR2/2 黒褐　シルト混じり細砂
14　10YR5/3 にぶい黄褐　細砂　黒色ブロック含む
15　2.5Y5/3 黄褐　細礫～中礫
16　10YR5/3 にぶい黄褐　細砂～中粒砂　黒色粘土ブロック含む
17　2.5Y6/2 灰黄　細砂　黒色シルトブロック含む

0　1m
(S=1／40)

図 81　14・27-SD70　断面図

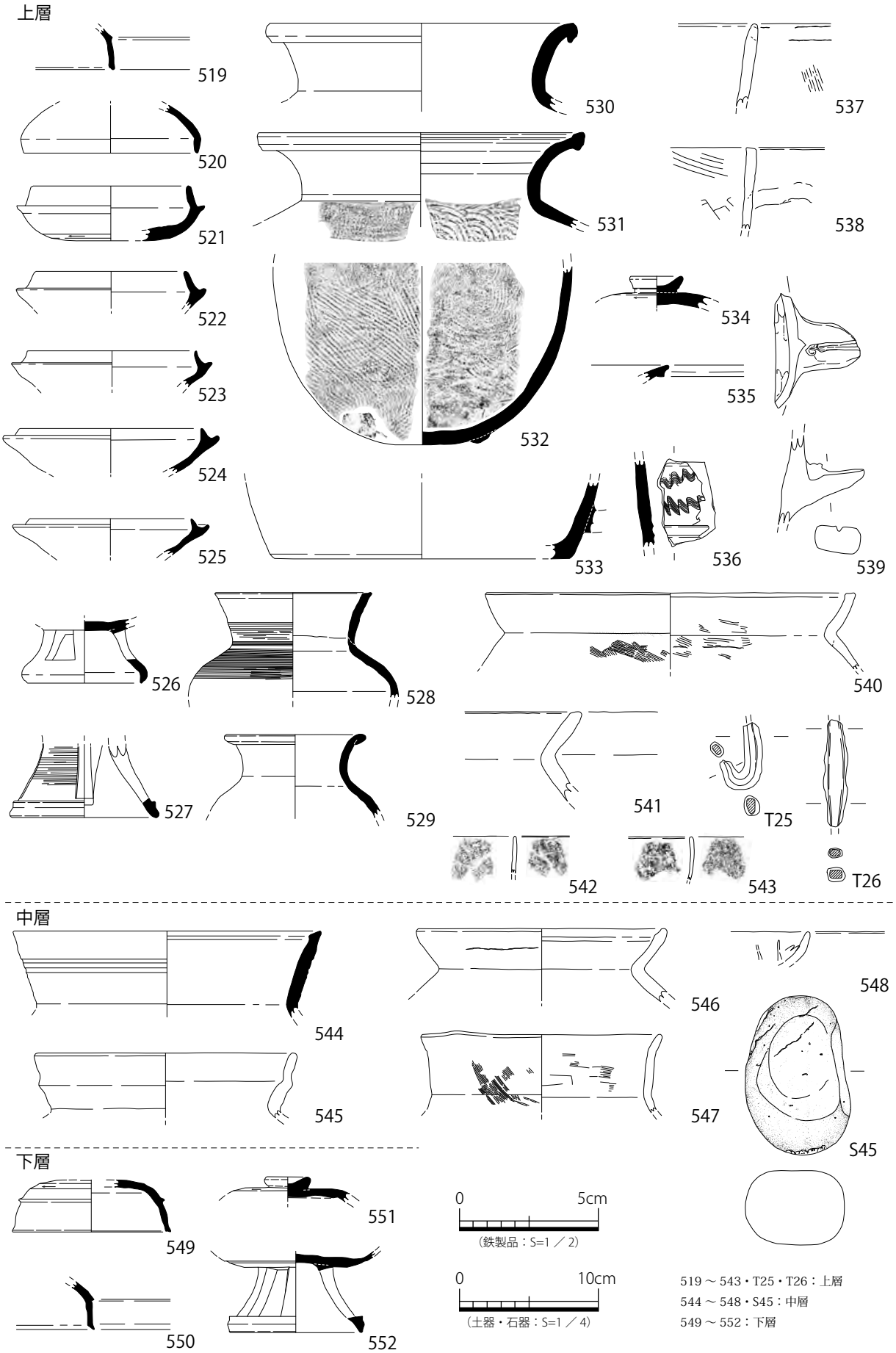


図 82　14・27-SD70 出土遺物実測図

上層の底面の標高は 35.2 m、最下層の標高は 34.6 mを測る。

e 断面は、上層が 1 ～ 5 層の暗褐粗砂～シルトとにぶい黄褐小礫混じりシルト、黒褐小礫混じり粘質土、黒粗砂混じり粘質土、黒褐粗砂～細砂である。上層の肩になる溝堆積層が、7 ～ 10 層の黒褐小礫混じり粗砂～シルトと暗褐粘質土混じり粗砂、黒褐粗砂混じり粘質土である。中層が 11 ～ 13 層の灰褐小礫混じり粗砂～細砂と暗褐砂礫、黒褐小礫混じり細砂～シルトである。最下層が 14 ～ 18 層の黒粘土と黒褐粗砂混じり粘質土、黒褐粘質土混じり砂礫、黒褐粗砂混じり粘質土、黒褐砂礫である。

上層の底面の標高は 35.2 m、最下層の標高は 34.4 mを測る。

f 断面は、上層が 2 ～ 5 層の暗褐シルトと黒褐シルトで、地山のブロック土を含む。上層の肩になる溝堆積層が 6 ～ 10 層の黒褐シルトと暗褐細砂～シルト、にぶい黄褐細砂～シルトである。

中層が 11・12 層の黒褐シルトと暗褐細砂、最下層が 13 ～ 15 層の褐細砂と暗褐細砂～シルト、灰黄褐細砂である。

上層の底面の標高は 35.9 m、最下層の標高は 34.3 mを測る。

g 断面は、上層が 1 ・ 2 層の黒褐シルト～粘土と黒褐シルト～粘土、中層が 3 ～ 5 層の黒シルト～粘土と黒褐シルト、灰黄細砂である。下層が 6 ～ 9 層の黄褐粗砂～細砂と暗灰黄粗砂、暗灰黄細砂、黄褐微細砂。最下層が 10 ～ 12 層の黒褐粘土と黄褐微細砂～細砂、黄褐細砂～中粒砂である。

上層の底面の標高は 35.1 m、最下層の標高は 34.6 mを測る。

14・27- ＳＤ 70 は首長居館を方形に区画する溝と考えられる。東西方向の溝は、流水の影響による堆積が認められ、ゆっくりと埋没していった過程が読み取れる。また自然堆積で埋没した溝を掘り直していたことが確認できた。特に南北溝では掘り直しが顕著であり、また溝幅が広い。東西方向の溝は、南北方向と比較すると狭くなり、顕著な掘り直しが確認できないが、上層の堆積状況から、同様に掘り直しが行われていたと考えられる。掘り直しが明確でなかった理由として、東西方向の溝の基盤層が、礫層となっていることが影響し、掘り直しの際に同じ幅で掘削されたと考えられる。溝は掘り直しを行いながら、一定期間維持されたと考えられる。

溝の底部の標高は、上層と最下層とも南東側が高く、北西側が低くなる。東西方向の最大比高差は約 0.2 mで、 緩やかに西側に向かって傾斜したのち、南北方向では最大比高差約 0.2 mで傾斜する。ラミナが認められることから、水量の変化はあるものの、流水があったと考えられるが、水の供給源については今後の課題といえる。

遺物は上層から須恵器杯身 (521・522・523・524・525)・ 杯 蓋 (519・520)・ 有 蓋 高 杯 蓋 (534)・高杯 (526)・壺 (529)・甕 (530・531)・器台 (536)・口縁 (535)・底部 (532・533)、土師器甕 (540・541)・甑 (537・538・539)、製塩土器 (542・543)・鉄器釣針 (T25)・棒状鉄片 (T26) が出土した。中層からは、須恵器大型短頸壺 (544)、土師器杯 (548)・甕 (546)・壺 (545・547)、下層から須恵器杯蓋 (549・550)・高杯脚部 (552)・有蓋高杯蓋 (551)、が出土した。この他図示した遺物の他に、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片・甕片・壺片・甑片、土師器甑片・甕片・高杯片・製塩土器片、サヌカイト片、鉄滓が出土している。

出土遺物の年代から、本溝の開削時期は、ＴＫ 23 型式以降で最終埋没はＴＫ 217 型式併行期と考えられる。

27 －ＳＤ 12(図 83)

第 27 調査区の中央で検出した南北方向の溝である。主軸方位 N-81° -E で直線的に調査区外へと展開する。検出面の標高は 35.7m である。長さ約 2.73m を検出し、幅約 0.75m、深さ約 0.2m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層でにぶい黄褐シルト混じり細砂である。

遺物は底面で土師器甕 (553・554) が出土した。図示した遺物の他に、須恵器甑片、製塩土器片が出土した。

出土遺物から古墳時代後期頃と判断できる。

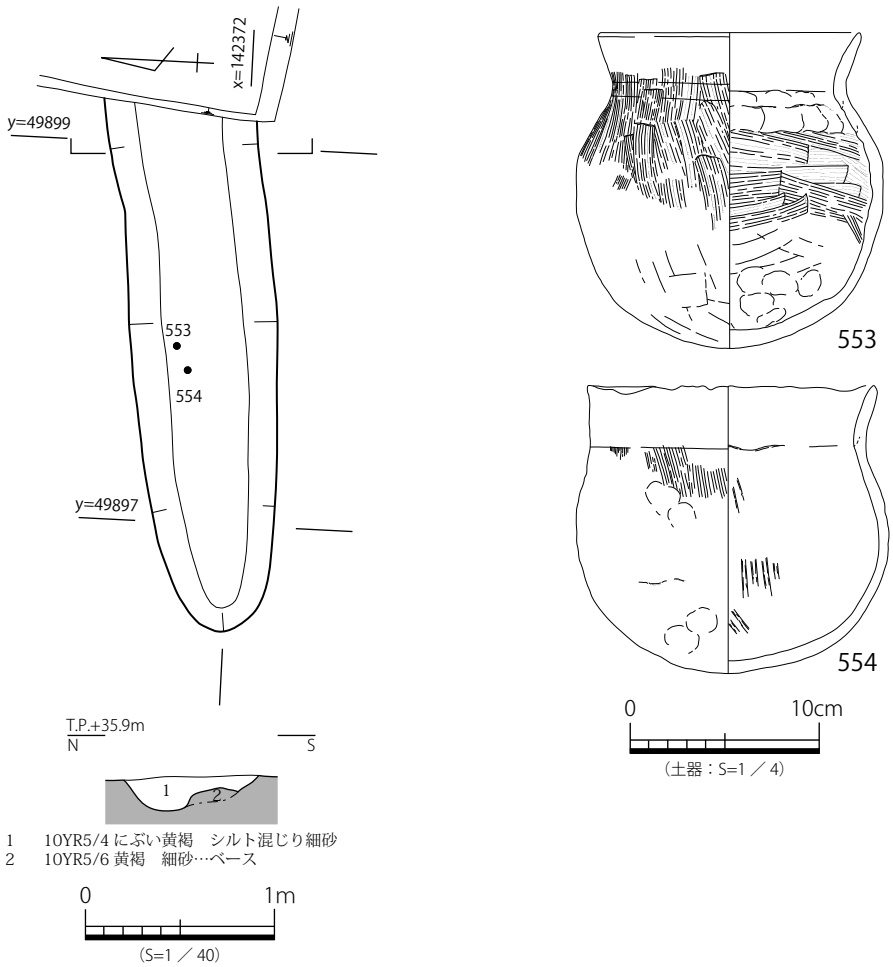


図 83　27-SD12　平・断面図及び出土遺物実測図

（５）　ＳＫ

14 －ＳＫ 55(図 84)

第 14 調査区の中央で検出した土坑である。撹乱に切られるため、全体の形状は不明である。竪穴建物の可能性も考えられる。上層の埋土を除去後、土坑の中央でＳＰ 61 を検出した。主軸方位 N-77°-W、検出面の標高は 36.0 ～ 35.9m である。長辺約 3.76m、短辺約 2.1m 以上、深さ約 0.19m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が黒褐シルト、下層が暗褐シルト～粘土である。

ＳＰ 61 は、円形を呈し、直径約 0.33m、深さ約 0.23m を測る。埋土は黒褐シルトである。

遺物は須恵器杯身 (555)、土師器片が出土した。出土遺物から古墳時代後期前半と判断できる。

14 －ＳＫ 5(図 84)

第 14 調査区の南側で検出した長方形を呈する土坑である。調査当初、土坑墓の可能性が想定できたため、１層除去後に検出を行ったが、棺材の痕跡は確認できなかった。主軸方位 N-6°-W、検出面の標高は 36.15m である。長軸約 2.38m、短軸約 0.90m、深さ約 0.16m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は上層が褐シルト、下層が褐礫混じり細砂～シルトである。

遺物は図示できなかったが、鉄片が出土した。時期が判明する遺物の出土がなかったため、詳細な時期は不明である。

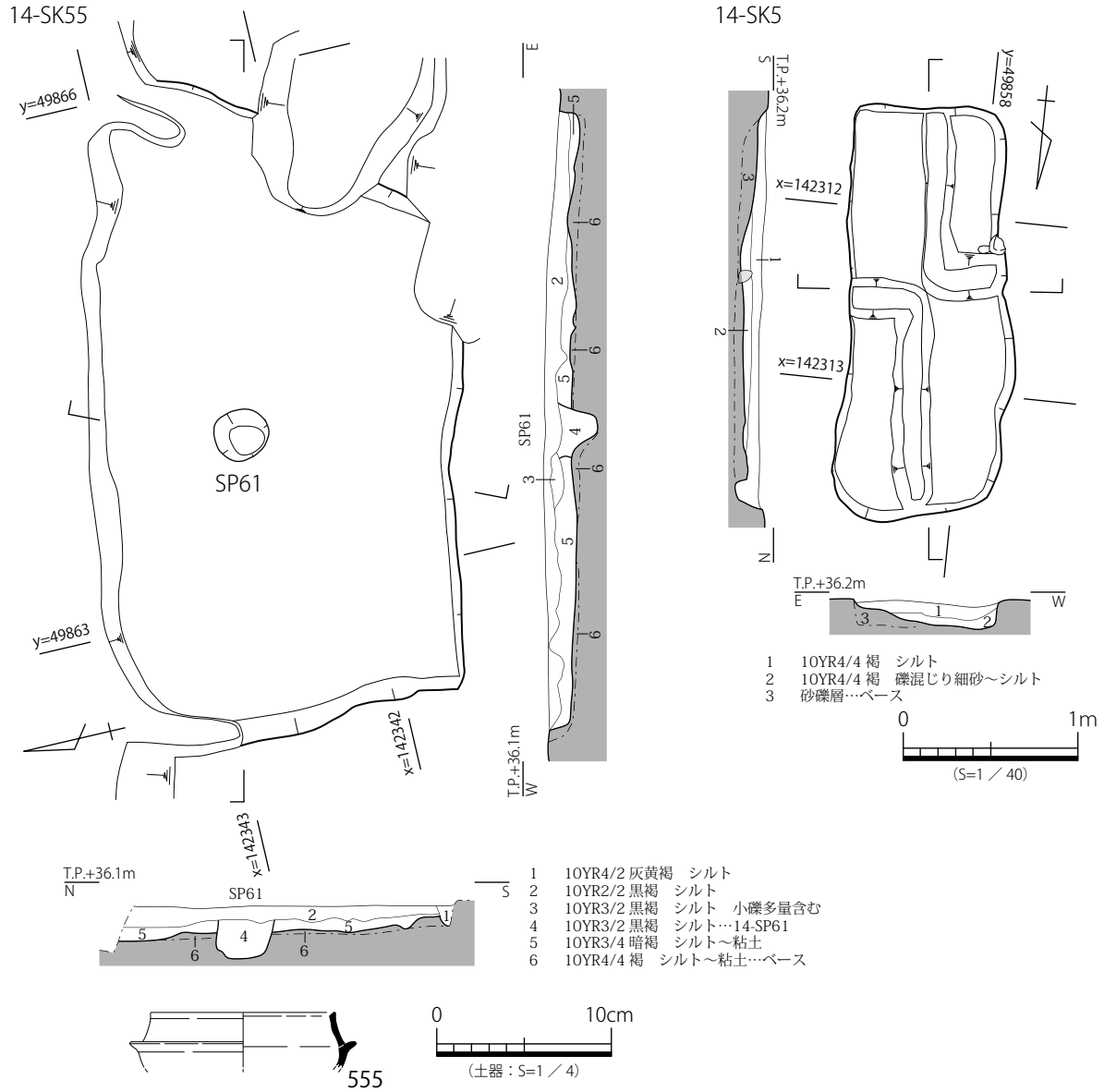


図 84　14-SK55・5　平・断面図及び出土遺物実測図

14 －ＳＫ 22(図 85)

第 14 調査区の南側で検出した楕円形を呈する土坑である。主軸方位 N-85°-W、検出面の標高は 36.15m である。長軸約 1.56m、短軸約 0.44m、深さ約 0.1m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 23(図 85)

第 14 調査区の南東側で検出した溝状の土坑である。主軸方位 N-79°-W、検出面の標高は 36.2m である。長さ約 2.50m、幅約 0.70m、深さ約 0.24m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は暗褐礫混じり細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 24(図 85)

第 14 調査区の南側で検出した長方形を呈する土坑である。主軸方位 N-11°-E、検出面の標高は 36.2m である。長軸約 1.40m、短軸約 1.04m、深さ約 0.26m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は上層が暗褐細礫混じりシルト、下層が褐粗砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 52(図 85)

第 14 調査区の中央で検出した卵形を呈する土坑である。主軸方位 N-3°-W、検出面の標高は 35.6m である。長軸約 1.00m、短軸約 0.34m、深さ約 0.12m、を測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で暗褐シルト混じり細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 54(図 85)

第 14 調査区の中央で検出した円形を呈する土坑である。主軸方位 N-51°-W、検出面の標高は 35.7m である。長軸約 0.86m、短軸約 0.78m、深さ約 0.12m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は２層に分層でき、黒褐シルトと暗褐シルトである。

遺物は図示できなかったが、須恵器杯身片が出土した。

14 －ＳＫ 57(図 57)

第 14 調査区の中央で検出した土坑である。平面形状は不整形で、主軸方位 N-75°-W、検出面の標高は 35.9m である。長軸約 1.10m、短軸約 0.52m、深さ約 0.14m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 77(図 86)

第 14 調査区の中央で検出した長方形を呈する土坑である。主軸方位 N-3°-E、検出面の標高は 35.6m である。長軸約 1.45m、短軸約 0.64m、深さ約 0.24m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で暗褐小礫混じりシルトである。

遺物は図示できなかったが、土師器片が出土した。細片であるため、詳細な時期は不明である。

14 －ＳＫ 80(図 86)

第 14 調査区の中央で検出した土坑である。14-ＳＤ 60・70 に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-83°-W、検出面の標高は 35.7m である。長軸約 1.80m、短軸約 1.2m 以上、深さ約 0.7m を測る。断面形状は椀状を呈すると考えられる。

埋土は上層がにぶい黄褐細砂、中層が黒褐シルトと暗褐細砂～シルト、下層が黒褐シルトと暗褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。切り合い関係から、ＴＫ 217 型式併行期以前と考えられる。

14 －ＳＫ 84(図 86)

調査区の中央で検出した土坑である。14- ＳＤ 60・70 に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-81°-W、検出面の標高は 35.7m である。長軸約 2.10m、短軸約 0.8m 以上、深さ約 0.34m を測る。断面形状は逆台形を呈すると考えられる。

埋土は３層に分層でき、暗灰黄細砂～シルトと黄褐シルト、黄褐細砂である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係からＴＫ 217 型式併行期以前と考えられる。

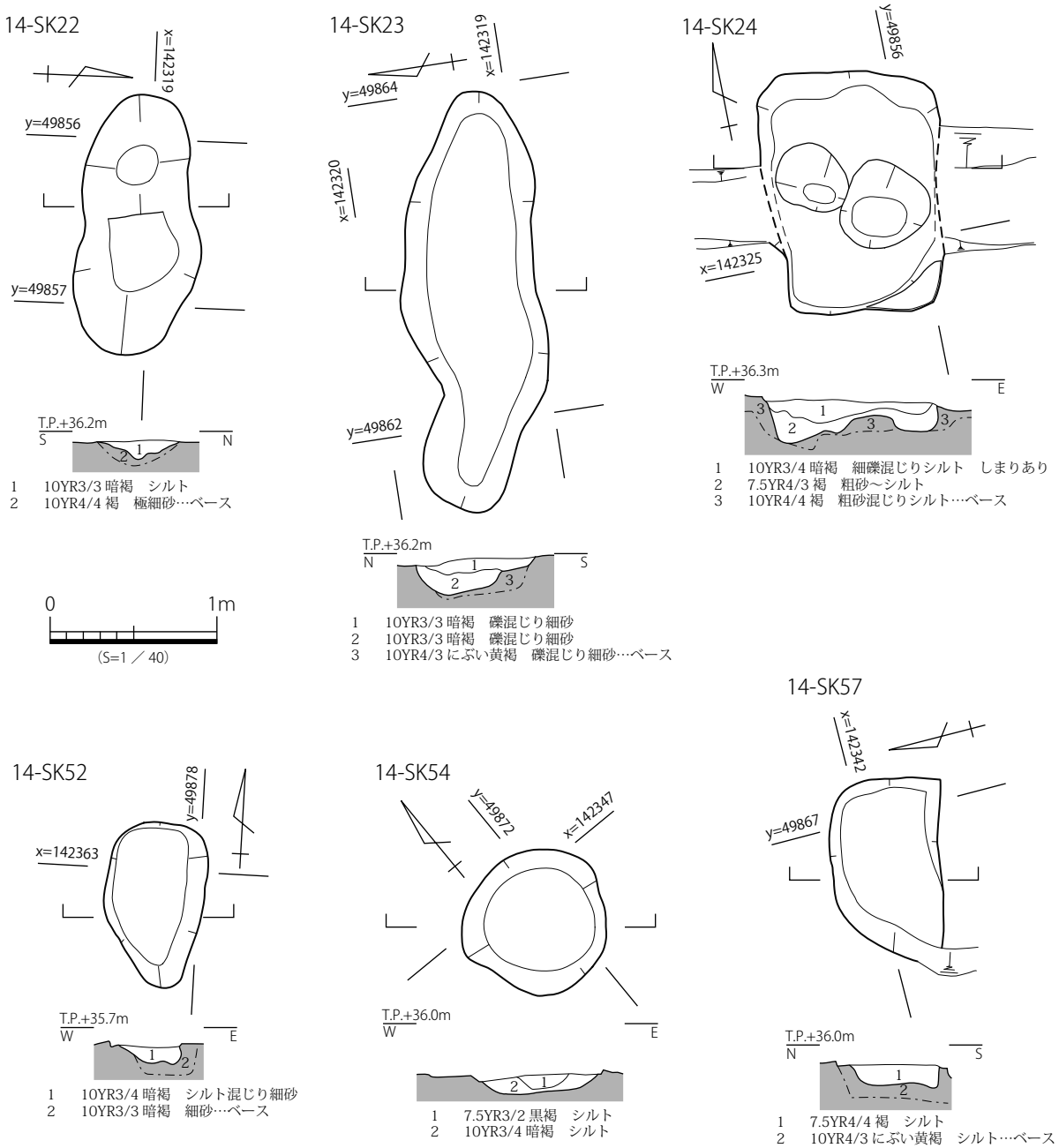


図 85　14-SK22・23・24・52・54・57　平・断面図

14 － S K 98(図 86)

第 14 調査区の西側中央で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位 N-30° -W、検出面の標高は 35.8m である。長軸約 1.86m、短軸約 1.66m、深さ約 0.3m を測る。断面形状は椀状で南肩にテラスを有する。

埋土は 5 層に分層でき、上層がにぶい黄褐粗砂～細砂、中層が灰黄褐細砂～シルトと暗褐シルト、にぶい黄褐細砂～シルト。下層がにぶい黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 － S K 165(図 87)

第 14 調査区の中央で検出した土坑である。平面形状は溝状を呈する。主軸方位 N-81° -E、検出面の標高は 35.8m である。長さ約 1.20m、幅約 0.42m、深さは 0.2m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で黒褐細砂～シルトである。

遺物は土師器高杯 (556)、土師器壺片が出土した。出土遺物の年代から古墳時代後期後葉と判断できる。

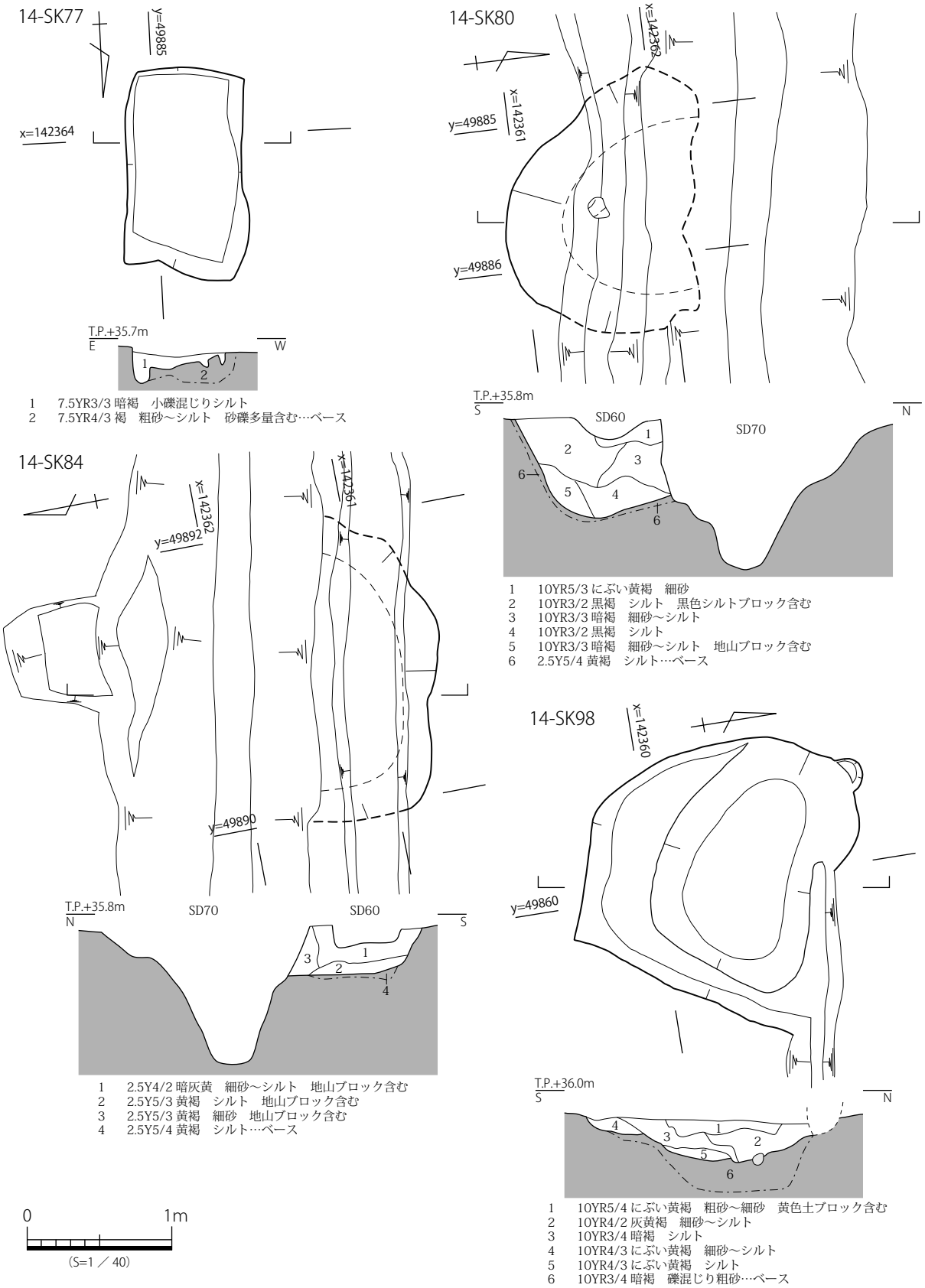


図 86　14-SK77・80・84・98　平・断面図

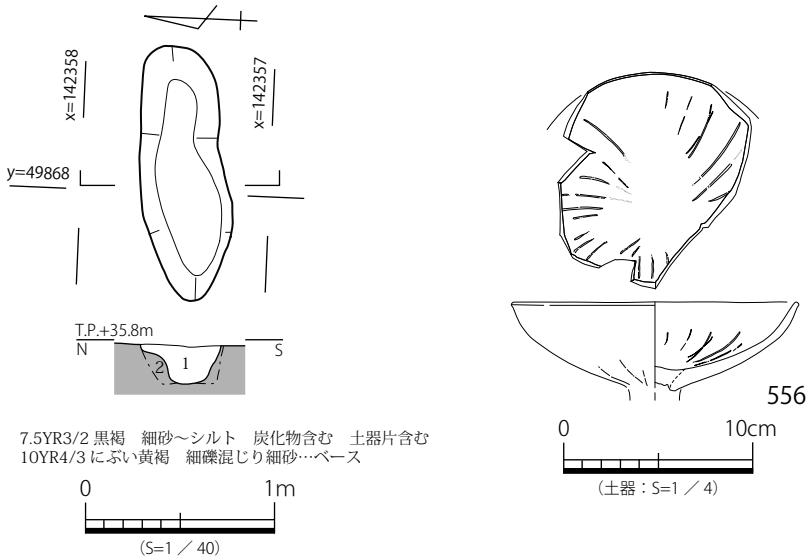


図 87　14-SK165　平・断面図及び出土遺物実測図

14 －ＳＫ 99(図 88)

第 14 調査区の中央西端で検出した土坑と考えられる遺構である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-68°-W、検出面の標高は 35.9m である。長軸約 3.1m 以上、短軸約 1.80m、深さ約 0.4m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が暗褐シルト、中層が褐シルト、下層が褐礫混じりシルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 100(図 88)

第 14 調査区の中央で検出した土坑である。撹乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、隅丸方形を呈し、竪穴建物の可能性も考えられる。主軸方位 N-10°-E、検出面の標高は 35.8m である。長軸約 3.74m、短軸約 1.7m 以上、深さ約 0.1m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で灰黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 152(図 88)

第 14 調査区の中央南側で検出した不整形な土坑である。主軸方位 N-13°-E、検出面の標高は 36.2m である。長軸約 1.06m、短軸約 1.00m、深さ約 0.42m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層がにぶい黄褐シルト、中層が灰黄褐細砂混じりシルト、下層がにぶい黄褐細砂～微細砂である。

遺物は図示できなかったが、土師器片が出土した。遺物は細片のため、詳細な時期は不明である。

14 －ＳＫ 155(図 88)

第 14 調査区の中央で検出した不整形な土坑である。主軸方位 N-90°-W、検出面の標高は 35.95m である。長軸約 1.40m、短軸約 1.20m、深さ約 0.60m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は上層がにぶい黄橙シルト、中層が灰白シルト、下層が灰黄褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 160(図 88)

第 14 調査区の中央で検出した楕円形を呈する土坑である。主軸方位 N-79°-E、検出面の標高は 36.35m である。長軸約 1.20m、短軸約 0.66m、深さ約 0.24m を測る。断面形状は逆台形に段落ちを有する。

埋土は上層が黒褐粗砂～シルトとにぶい黄褐小礫混じり粗砂～シルト、下層が暗褐小礫混じり粗砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 170(図 89)

第 14 調査区の中央で検出した楕円形を呈する土坑である。主軸方位 N-76°-W、検出面の標高は 35.8m である。長軸約 2.08m、短軸約 0.80m、深さ約 0.35m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で黒褐粘質シルト～細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

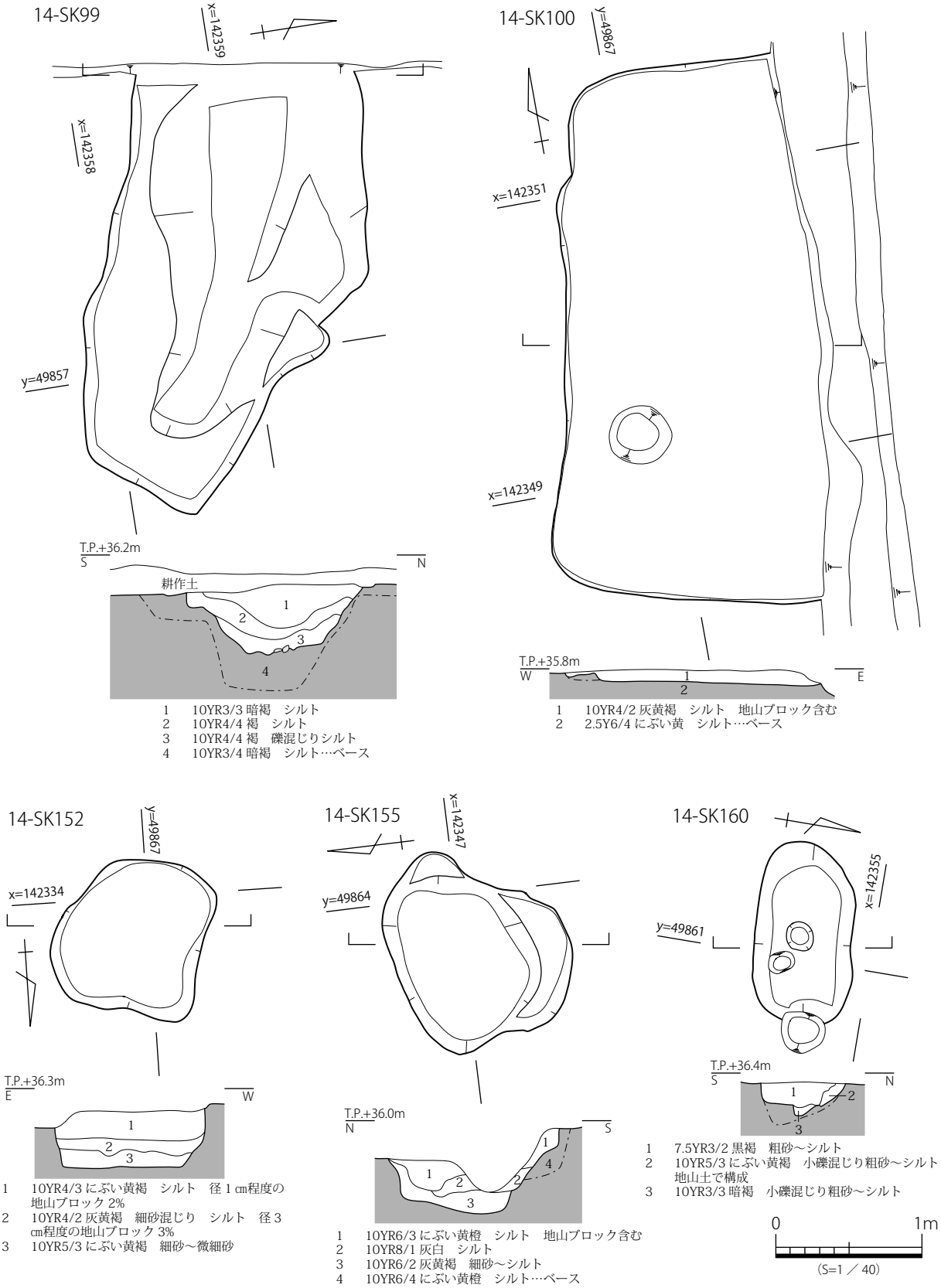


図 88　14-SK99・100・152・155・160　平・断面図

14 －ＳＫ 176(図 89)

第 14 調査区の中央西側で検出した水滴形を呈する土坑である。主軸方位 N-68°-W、検出面の標高は 35.9m である。長軸約 1.84m、短軸約 0.90m、深さ約 0.24m を測る。断面形状は逆台形に段落ちを有する。

埋土は上層がにぶい黄褐細砂～シルト、下層が褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 180(図 89)

第 14 調査区の中央西側で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位 N-70°-W、検出面の標高は 35.8m である。長軸約 2.86m、短軸約 2.36m、深さ約 0.42m を測る。断面形状は逆台形に段落ちを有する。

埋土は上層がにぶい黄褐シルト混じり細砂～細礫と黒褐シルト、下層が黒褐シルト混じり細砂～細礫と灰黄褐シルト混じり細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 184(図 89)

第 14 調査区の北西側で検出した隅丸方形を呈する土坑である。14- 竪穴 1 を切る。主軸方位 N-75°-W、検出面の標高は 35.35m である。長軸約 0.75m、短軸約 0.55m、深さ約 0.30m を測る。断面形状は逆台形である。

土層は上層が暗褐小礫混じり細砂～シルト、中層が極暗褐小礫混じり粗砂～シルトと黒褐小礫混じり粗砂～シルト、下層が地山ブロック土を多量に含む黒褐小礫混じり粗砂～シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から、古墳時代中期中葉以降と考えられる。

14 －ＳＫ 185(図 89)

第 14 調査区の北西で検出した卵形を呈する土坑である。14- 竪穴 1 を切る。主軸方位 N-17°-E、検出面の標高は 35.3m である。長軸約 1.35m、短軸約 0.70m、深さ約 0.30m、を測る。断面形状は椀状である。

埋土は上層が暗褐粗砂混じりシルト、下層がにぶい黄褐粗砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 186(図 89)

第 14 調査区の北西側で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位 N-57°-E、検出面の標高は 35.7m である。長軸約 3.70m、短軸約 1.50m、深さ約 0.6m を測る。断面形状は「へ」の字形である。

埋土は上層が極暗褐粗砂～シルト、下層が黒褐粘質土混じり粗砂～シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から、古墳時代中期中葉以降と考えられる。

14 －ＳＫ 229(図 89)

第 14 調査区の中央北側で検出した不整形な形状の土坑である。14- 竪穴 21 を切る。主軸方位 N-16°-W、検出面の標高は 35.5m である。長軸約 1.19m、短軸約 0.82m、深さ約 0.39m を測る。断面形状は「へ」の字形である。

埋土は上層が黒褐シルト、中層が黒褐細砂～シルト、下層が暗褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係からＭＴ 85 型式併行期以降と考えられる。

14 －ＳＫ 234(図 89)

第 14 調査区の中央南側で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位 N-6°-W、検出面の標高は 35.8m である。長軸約 1.74m、短軸約 1.04m、深さ約 0.20m を測る。断面形状は「へ」の字形である。

埋土は 2 層に分層でき、にぶい黄褐シルトと暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 238(図 90)

第 14 調査区の北東側で検出した楕円形を呈する土坑である。撹乱に切られ、14- 竪穴 15・16 を切る。主軸方位 N-82°-W、検出面の標高は 35.6m である。長軸約 0.86m、短軸約 0.80m、深さ約 0.4m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層がにぶい黄褐シルトと暗褐シルト、灰黄褐シルトと灰褐シルト、中層が黒褐シルト、下層が暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係からＴＫ 10 ～ＴＫ 43 型式併行期以降と考えられる。

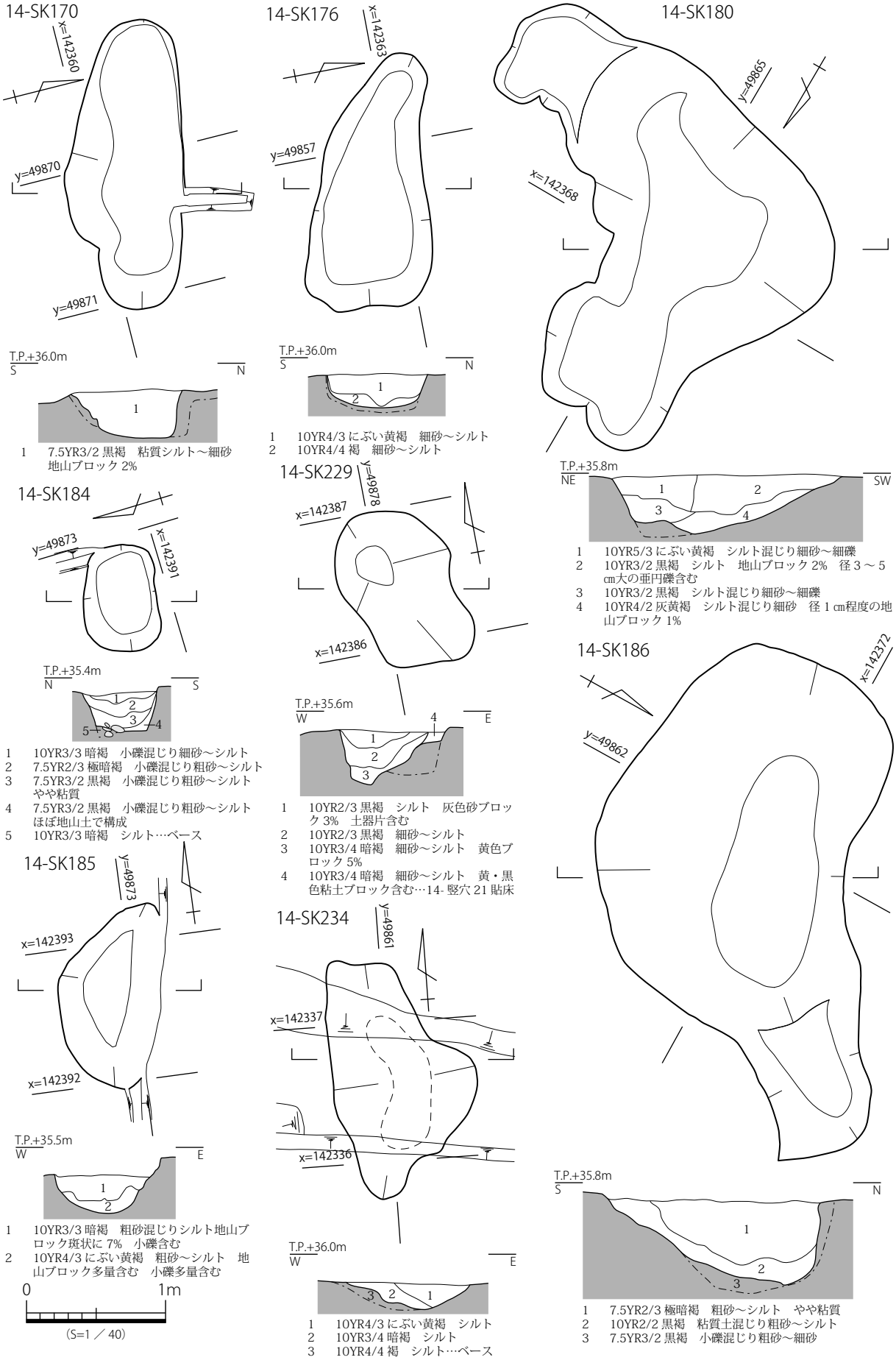


図 89　14-SK170・176・180・184・185・186・229・234　平・断面図

14 －ＳＫ 235(図 90)

第 14 調査区の北東側で検出した隅丸方形を呈する土坑である。14- 竪穴 15 を切る。主軸方位 N-0°-W、検出面の標高は 35.6m である。長軸約 2.14m、短軸約 1.34m、深さ約 0.3m を測る。断面形状は逆台形に段落ちを有する。

埋土は上層がにぶい黄褐シルト、下層が暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係からＴＫ 10 ～ＴＫ 43 型式併行期以降と考えられる。

14 －ＳＫ 260(図 90)

第 14 調査区の北東側で検出した隅丸方形の土坑である。14- 竪穴 16 を切る。主軸方位 N-36°-W、検出面の標高は 35.5m である。長軸約 1.46m、短軸約 1.00m、深さ約 0.65m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が黒粘土、中層が黒褐シルト～粘土、下層が黒褐粘土と黒褐シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、ＴＫ 10 ～ＭＴ 85 型式併行期以降と考えられる。

14 －ＳＫ 263(図 90)

第 14 調査区の北東側で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位 N-66°-W、検出面の標高は 35.6m である。長軸約 1.44m、短軸約 1.14m、深さ約 0.3m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は黒褐粘土と極暗褐粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 266(図 90)

第 14 調査区の北側中央で検出した不整形な形状の土坑である。14- 竪穴 2 の掘方の下で検出した。主軸方位 N-70°-E、検出面の標高は 35.5m である。長軸約 2.20m、短軸約 1.42m、深さ約 0.4m を測る。断面形状は段落ちにＵ字形である。

埋土は上層が黒褐粗砂混じり粘質土と極暗褐粗砂混じり粘質土、下層が褐粗砂混じり粘質土、暗褐細礫混じりシルト、暗褐粗砂～シルト。段落ち部分の埋土は、暗褐シルト混じり粗砂、灰褐粗砂、褐粗砂混じりシルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係からＭＴ 85 型式併行期以前と考えられる。

14 －ＳＫ 272(図 90)

調査区の中央北側で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位 N-84°-E、検出面の標高は 35.6m である。長軸約 3.00m、短軸約 2.40m、深さ約 0.25m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は上層が黒褐シルトと暗褐シルト～粘土、中層が黒褐シルト～粘土、下層が地山ブロック土を含む黒褐シルト～粘土である。

遺物は図示できなかったが、土師器片が出土した。細片であるため、詳細な時期は不明である。

14 －ＳＫ 275(図 91)

第 14 調査区の中央で検出した楕円形を呈する土坑である。主軸方位 N-84°-W、検出した標高は 35.8m である。長軸約 2.36m、短軸約 1.52m、深さ約 0.35m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が黒褐シルト～粘土、下層がにぶい黄褐シルトと暗褐シルト、暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 278(図 91)

第 14 調査区の中央で検出した楕円形を呈する土坑である。主軸方位 N-56°-E、検出面の標高は 35.6m である。長軸約 2.50m、短軸約 0.90m、深さ約 0.35m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が黒褐粘土、下層が黒褐シルト～粘土と暗褐シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 284(図 91)

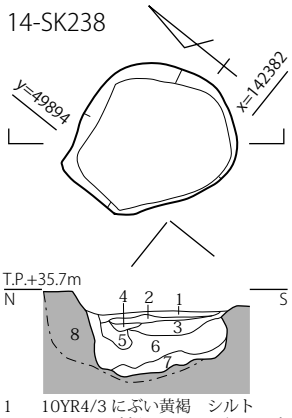
第 14 調査区の中央西側で検出した不整形な形状の土坑である。風倒木痕の可能性が考えられる。主軸方位 N-80°-E、検出面の標高は 35.8m である。長軸約 1.00m、短軸約 0.70m、深さ約 0.34m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で暗褐シルト～粘土である。

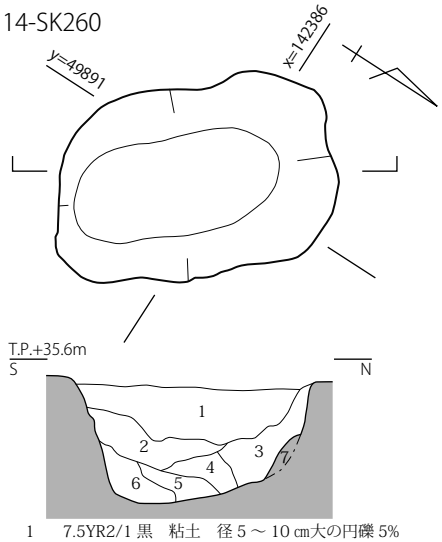
遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 285(図 91)

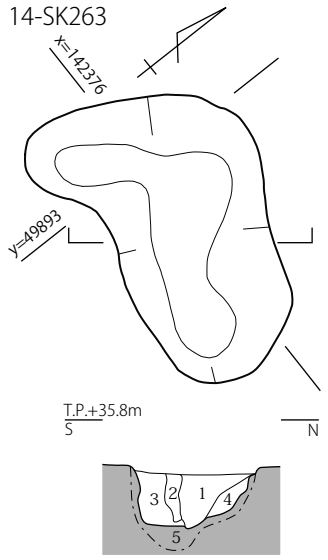
第 14 調査区の中央西側で検出した不整形な形状の土坑である。風倒木痕の可能性がある。主軸方位



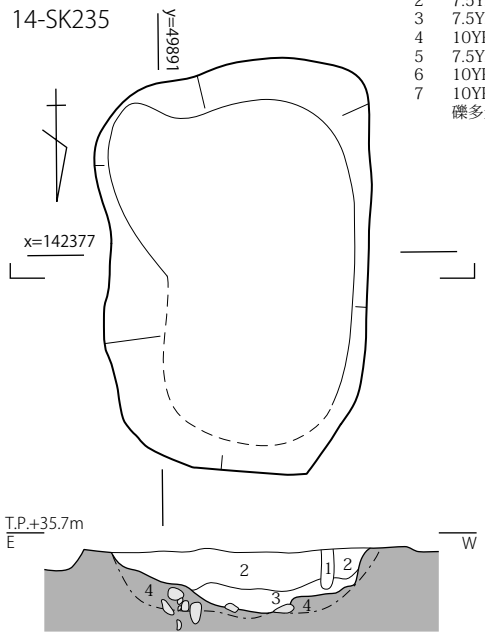
1　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト
2　10YR3/3 暗褐　シルト　径 1 ㎜大の自然礫含む
3　10YR3/3 暗褐　シルト　地山ブロック含む
4　10YR4/2 灰黄褐　シルト
5　7.5YR4/2 灰褐　シルト　地山ブロック含む
6　10YR3/2 黒褐　シルト　径 2 ㎜大の自然礫含む
7　10YR3/3 暗褐　シルト
8　10YR4/4 褐　シルト…ベース



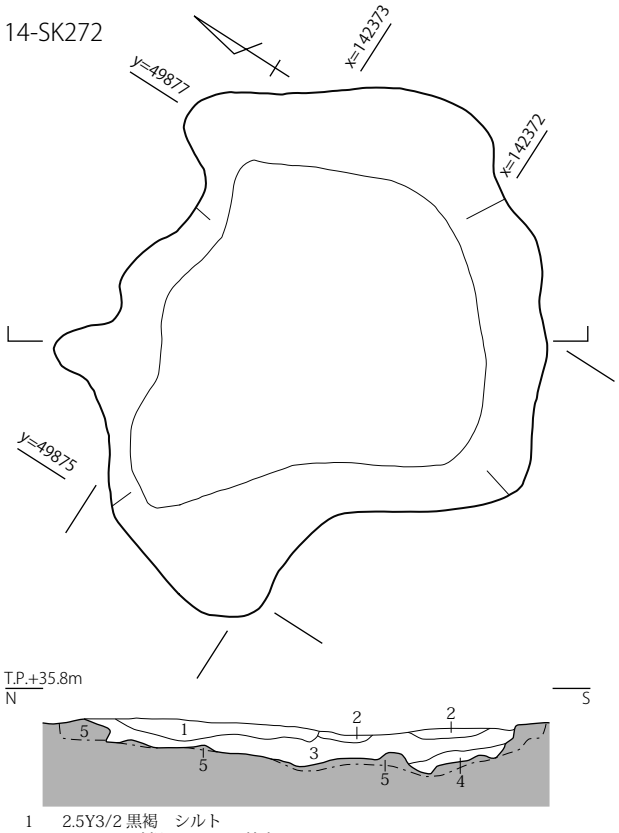
1　7.5YR2/1 黒　粘土　径 5 ～ 10 ㎝大の円礫 5%
2　7.5YR3/2 黒褐　シルト～粘土
3　7.5YR2/2 黒褐　粘土
4　10YR2/2 黒褐　シルト～粘土
5　7.5YR2/2 黒褐　粘土
6　10YR2/3 黒褐　シルト～粘土
7　10YR3/2 黒褐　シルト～粘土　径 5 ～ 10 ㎝大の円礫多量含む…ベース



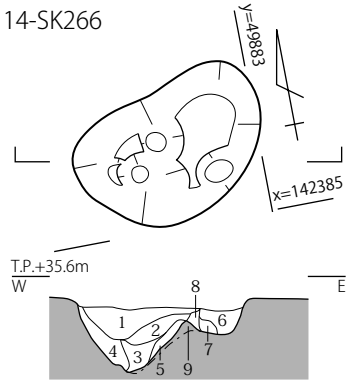
1　7.5YR2/2 黒褐　粘土
2　7.5YR3/2 黒褐　粘土
3　7.5YR2/3 極暗褐　粘土　地山ブロック含む
4　7.5YR2/3 極暗褐　粘土
5　10YR2/3 黒褐　シルト～粘土…ベース



1　10YR5/3 にぶい黄褐　細砂…根穴
2　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト　地山ブロック含む　径 1 ～ 2 ㎜大の自然礫含む
3　10YR3/3 暗褐　シルト　地山ブロック含む　径 1 ㎜大の自然礫含む
4　10YR4/4 褐　シルト…14- 竪穴 15 の埋土



1　2.5Y3/2 黒褐　シルト
2　10YR3/3 暗褐　シルト～粘土
3　10YR3/2 黒褐　シルト～粘土　砂礫含む
4　10YR3/2 黒褐　シルト～粘土　地山ブロック 2%
5　10YR5/3 にぶい黄褐　シルト　径 5 ～ 10 ㎝大の円礫多量含む…ベース



1　7.5YR3/2 黒褐　粗砂混じり粘質土
2　7.5YR2/3 極暗褐　粗砂混じり粘質土
3　7.5YR4/4 褐　粗砂混じり粘質土　地山ブロック斑状に含む　細礫含む
4　7.5YR3/4 暗褐　細礫混じりシルト
5　7.5YR3/4 暗褐　粗砂～シルト　細礫多量含む
6　7.5YR3/3 暗褐　シルト混じり粗砂
7　7.5YR4/2 灰褐　粗砂
8　7.5YR4/3 褐　粗砂混じりシルト
9　7.5YR4/4 褐　粗砂混じりシルト　細礫～中礫多量含む…ベース

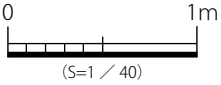


図 90　14-SK238・235・260・263・266・272　平・断面図

N-78°-W、検出面の標高は 35.8m である。長軸約 2.40m、短軸約 1.06m、深さ約 0.6m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は黒褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 286(図 91)

第 14 調査区の中央西側で検出した不整形な形状の土坑である。風倒木痕の可能性がある。主軸方位 N-87°-E、検出面の標高は 35.6m である。長軸約 3.20m、短軸約 1.14m、深さ約 0.7m を測る。断面形状は「へ」の字形である。

埋土は黒褐粘土と暗褐シルト～粘土がランダムに混じる。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 287(図 91)

第 14 調査区の北西側で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-21°-W、検出面の標高は 35.6m である。長さ約 1.60m、幅約 0.52m、深さ約 0.2m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が黒褐シルト、下層が黒褐細砂～シルトと黒細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 319(図 91)

第 14 調査区の北側中央で検出した土坑である。14- 竪 12 に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-73°-E、検出面の標高は 35.4m である。長軸約 0.9m 以上、短軸約 1.08 mある。

埋土は黒褐シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係からＴＫ 209 型式併行期以前と考えられる。

14 －ＳＫ 288(図 92)

第 14 調査区の北西側で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位 N-82°-W、検出面の標高は 35.6m である。長軸約 2.44m、短軸約 1.82m、深さ約 0.6m を測る。断面形状は椀状である。

埋土は上層が黒褐粘質シルト、中層が黒褐細砂～シルト、下層が黒褐細砂～シルトである。

遺物は図示できなかったが、土師器片が出土した。細片のため、詳細な時期は不明である。

14 －ＳＫ 322(図 92)

第 14 調査区の北西側で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位 N-11°-E、検出面の標高は 35.45m である。長軸約 2.20m、短軸約 1.10m、深さ約 0.14m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で黒褐細砂混じりシルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 324(図 92)

第 14 調査区の北西側で検出した不整形な形状の土坑である。風倒木痕の可能性が考えられる。主軸方位 N-47°-W、検出面の標高は 35.5m である。長軸約 2.30m、短軸約 1.00m、深さ約 0.5m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は黒褐シルト～粘土と黒褐粘土である。

遺物は図示できなかったが、土師器片が出土した。細片であるため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 325(図 92)

第 14 調査区の北東隅で検出した隅丸方形を呈する土坑である。14- 竪穴 24 を切る。主軸方位 N-85°-E、検出面の標高は 35.45 ～ 35.1m である。長軸約 2.00m、短軸約 1.40m、深さ約 0.8m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が黒褐粘土と暗褐シルト、黒褐シルト、中層が黒褐シルト～粘土と暗褐粘土、褐粘土と黒褐シルトである。下層が黒褐粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 378(図 93)

第 14 調査区の北西隅で検出した方形を呈する土坑である。主軸方位 N-9°-W、検出面の標高は 35.5m である。長軸約 3.06m、短軸約 3.00m、深さ約 0.2m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が黒褐粗砂～シルト、下層が黒褐細砂混じり粘質土である。

遺物は棒状鉄片 (T27) が出土した。図示した遺物の他に、製塩土器片・土師器片が出土している。いずれも細片であるため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 399(図 93)

第 14 調査区の北隅で検出した不整形な形状の土

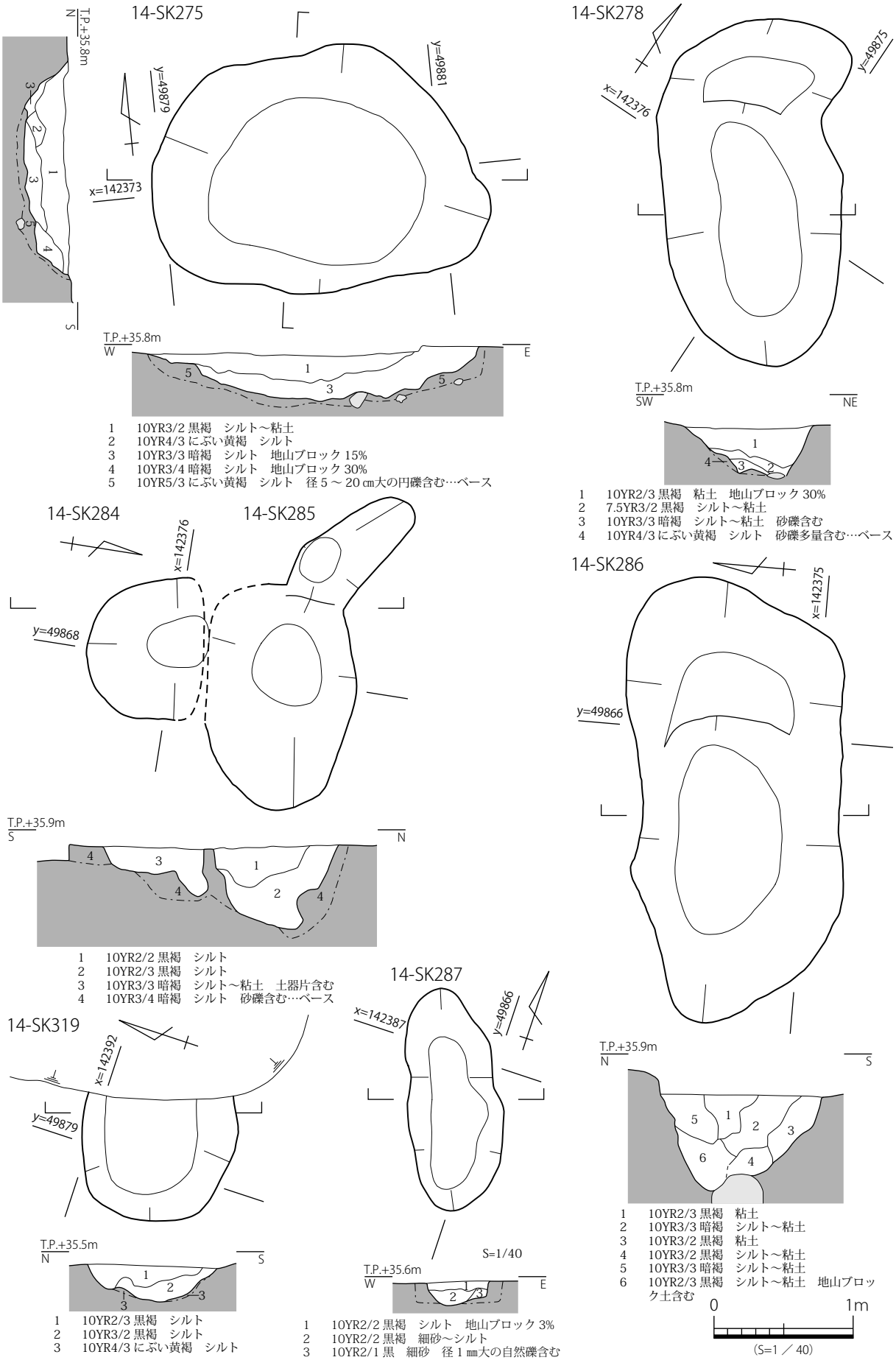


図 91　14-SK275・278・284・285・286・287・319　平・断面図

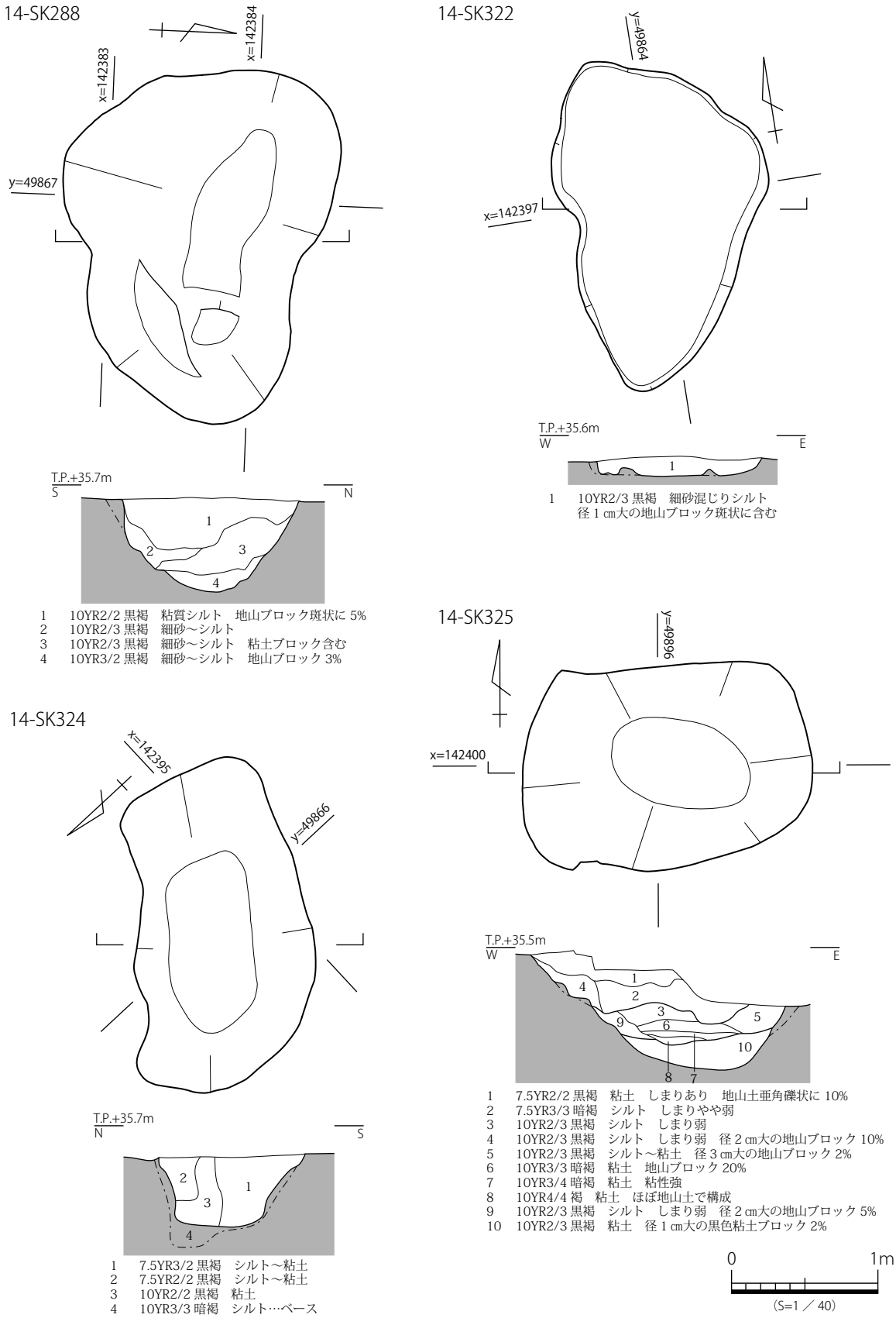


図 92　14-SK288・322・324・325　平・断面図

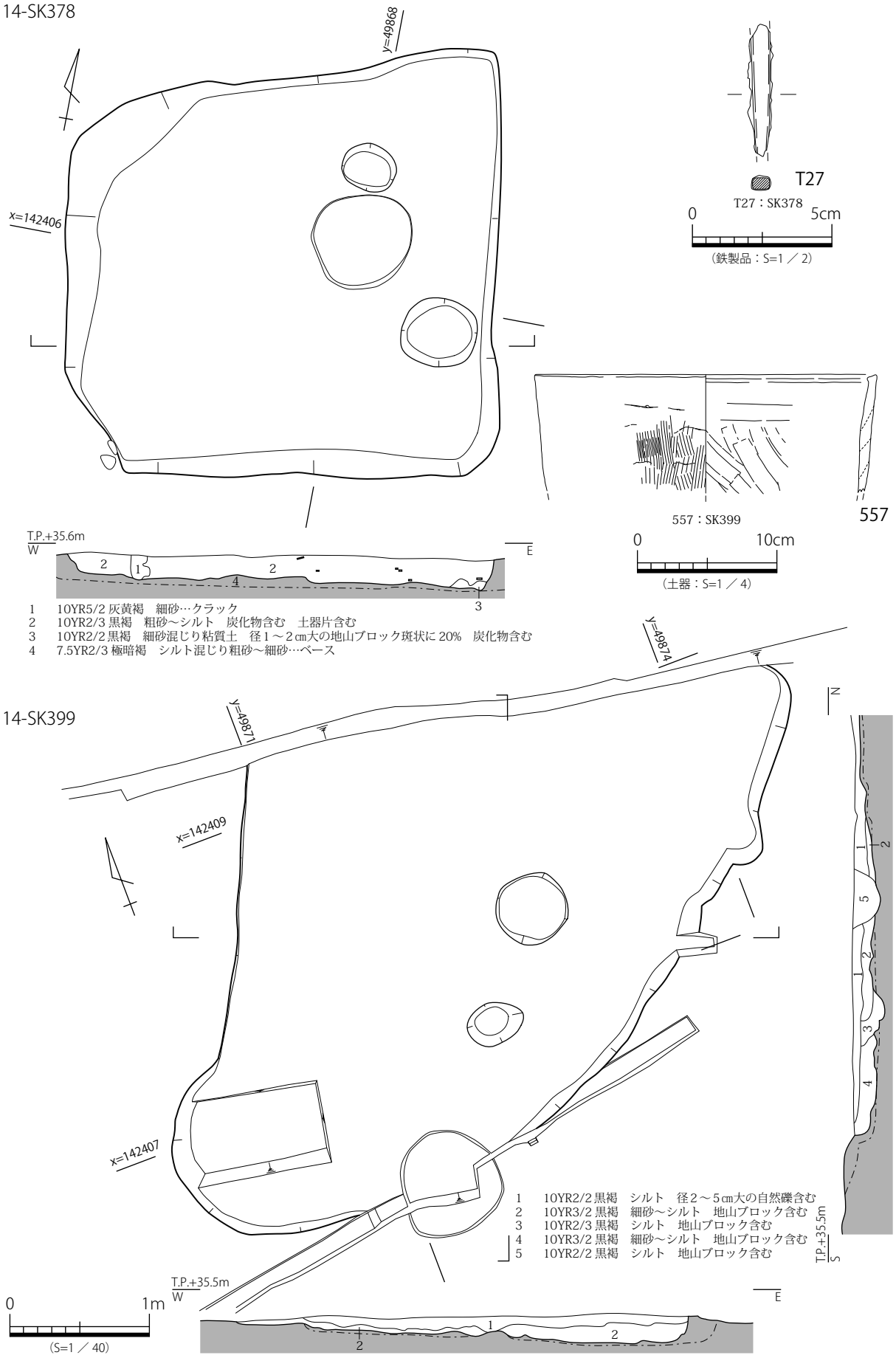


図 93　14-SK378・399　平・断面図及び出土遺物実測図

坑である。調査区外へ広がる。主軸方位 N-37°-E、検出面の標高は 35.3m である。長軸約 5.60m、短軸約 3.30m、深さ約 0.2m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は上層が黒褐シルト、下層が黒褐細砂～シルトと地山ブロック土を含む黒褐シルトである。

遺物は土師器甑 (557) が出土した。時期は不明である。

14 －ＳＫ 401(図 94)

第 14 調査区の北側で検出した楕円形を呈する土坑である。主軸方位 N-20°-W、検出面の標高は 35.25m である。長軸約 1.52m、短軸約 0.74m、深さ約 0.3m を測る。断面形状は方形である。

埋土は上層が黒褐粗砂～シルト、中層が暗褐粗砂～細砂、下層が暗褐細砂～シルトである。

遺物は図示できなかったが、土師器壺片が出土した。出土遺物から古墳時代後期頃と判断できる。

14 －ＳＫ 404(図 94)

第 14 調査区の北側で検出した土坑である。撹乱に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-82°-W、検出面の標高は 35.35m である。長軸約 1.5m 以上、短軸約 1.00m、深さ約 0.26m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が暗褐シルト～粘土、下層が黒褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 406(図 94)

調査区の北西側で検出した楕円形を呈する土坑である。主軸方位 N-22°-E、検出面の標高は 35.3m である。長軸約 1.50m、短軸約 0.90m、深さ約 0.2m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が暗褐細砂～シルト、下層が黒褐細砂である。

遺物は図示できなかったが、土師器片が出土した。細片のため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 407(図 94)

第 14 調査区の北西側で検出した楕円形を呈する土坑である。主軸方位 N-68°-E、検出面の標高は 35.3m である。長軸約 2.14m、短軸約 1.00m、深さ約 0.3m を測る。断面形状は逆台形で北肩にテラスを有する。

埋土は上層が黒褐細礫混じり細砂～シルト、下層が黒褐粗砂～シルトである。

遺物は図示できなかったが、土師器片が出土した。細片であるため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 410(図 94)

調査区の北西側で検出した円形を呈する土坑である。主軸方位 N-81°-E、検出面の標高は 35.3m である。長軸約 1.04m、短軸約 0.90m、深さ約 0.26m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が黒褐粗砂混じりシルト～粘土、下層が黒褐粗砂混じり粘質土である。

遺物は図示できなかったが、土師器片が出土した。細片であるため、時期は不明である。

14 －ＳＫ 469(図 94)

第 14 調査区の中央北端で検出した不整形な形状の土坑である。14- 竪穴 28 を切る。主軸方位 N-75°-E、検出面の標高は 35.2m である。長軸約 2.20m、短軸約 1.00m、深さ約 1.00m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は上層が黒褐粘土、中層が黒褐シルト～粘土と黒褐シルト、下層が黒褐粘土と暗褐シルトである。

遺物は土師器皿 (558) が出土した。出土遺物の年代から 7 ～ 8 世紀頃と考えられる。

27 －ＳＫ 19(図 95)

第 27 調査区の南側で検出した楕円形を呈する土坑である。27- 竪穴 3 に切られる。主軸方位 N-12°-E、検出面の標高は 35.6m である。長軸約 1.00m、短軸約 0.80m、深さ約 0.55m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が灰黄褐シルト混じり細砂と灰黄褐シルト混じり極細砂、中層が灰黄褐シルト混じり極細砂、下層が暗灰黄シルト混じり細砂と暗灰黄細砂である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から、ＴＫ 43 型式併行期以前と考えられる。

27 －ＳＫ 125(図 95)

調査区の南側で検出した卵型を呈する土坑である。主軸方位 N-0°-W、検出面の標高は 35.85m

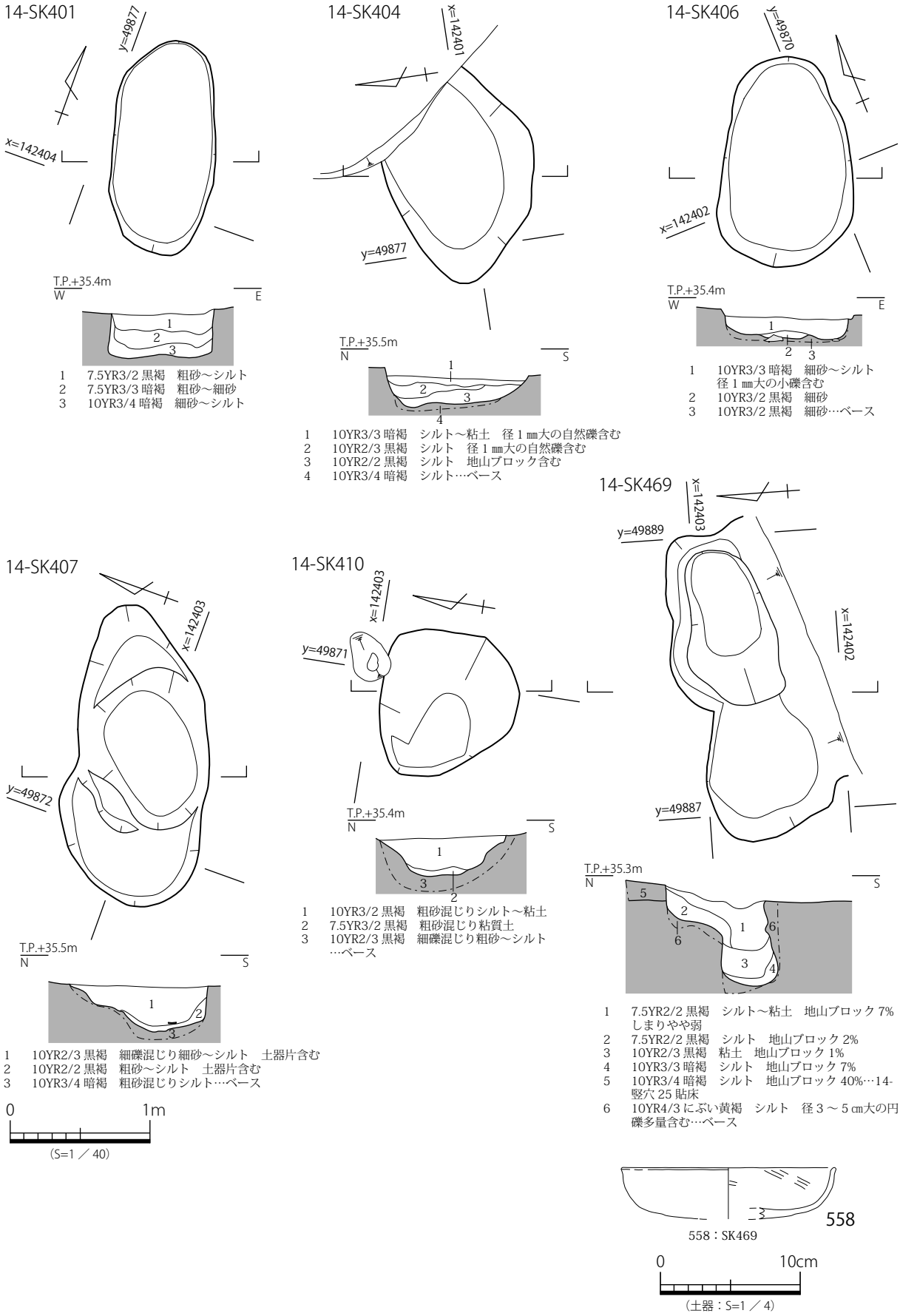
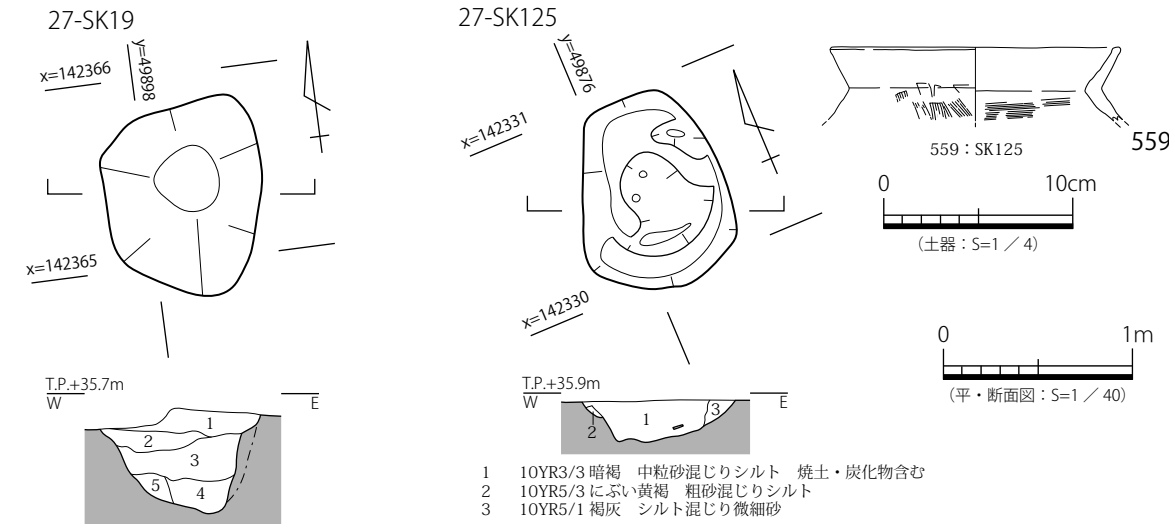


図 94　14-SK401・404・406・407・409・410・469　平・断面図及び出土遺物実測図



1　10YR4/2 灰黄褐 +10YR6/4 にぶい黄橙　シルト混じり細砂 +10YR7/3 にぶい黄橙　細砂
2　10YR4/2 灰黄褐　シルト混じり極細砂
3　10YR4/2 灰黄褐 +10YR3/2 黒褐　シルト混じり極細砂
4　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト混じり細砂
5　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂

1　10YR3/3 暗褐　中粒砂混じりシルト　焼土・炭化物含む
2　10YR5/3 にぶい黄褐　粗砂混じりシルト
3　10YR5/1 褐灰　シルト混じり微細砂

図 95　27-SK19・125　平・断面図及び出土遺物実測図

である。長軸約 1.00m、短軸約 0.80m、深さ約 0.20m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は 3 層に分層でき、暗褐中粒砂混じりシルトとにぶい黄褐粗砂混じりシルト、褐灰シルト混じり微細砂である。

遺物は土師器甕 (559) が出土した。図示した遺物の他に、口縁と頸部に波状文を施文した須恵器壺片が出土した。

出土遺物から古墳時代後期頃と判断できる。

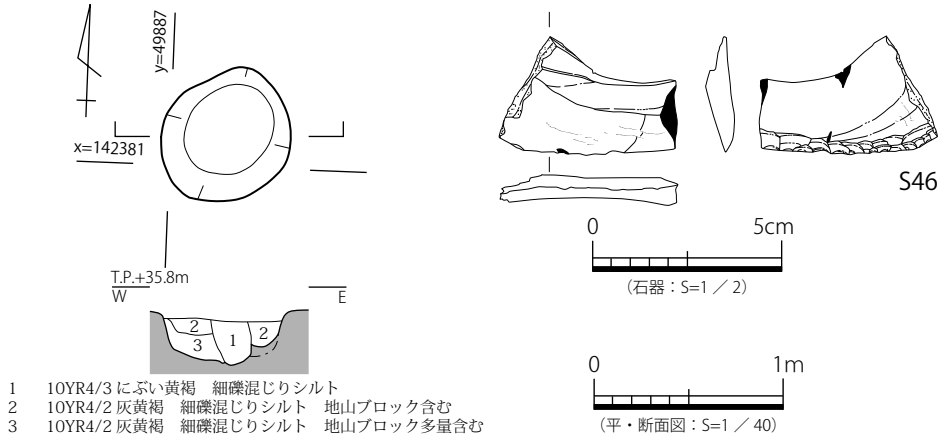
（6）ＳＰ

14 －ＳＰ 240(図 96)

第 14 調査区の中央で検出したピットである。検出面の標高は 35.7m である。平面形状は円形で、長径約 0.7m、短径約 0.6m、深さ約 0.3m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。

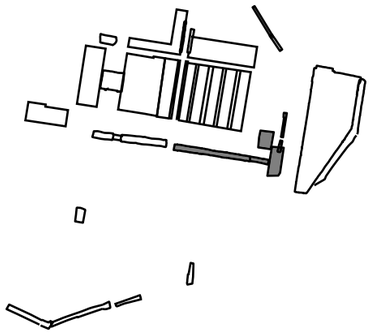
埋土は柱痕がにぶい黄褐細礫混じりシルト、掘方が灰黄褐細礫混じりシルトである。

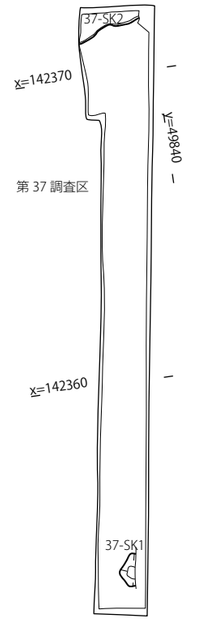
遺物はサヌカイト製スクレイパー (S46) が出土した。その他に遺物が出土していないため、時期は不明である。

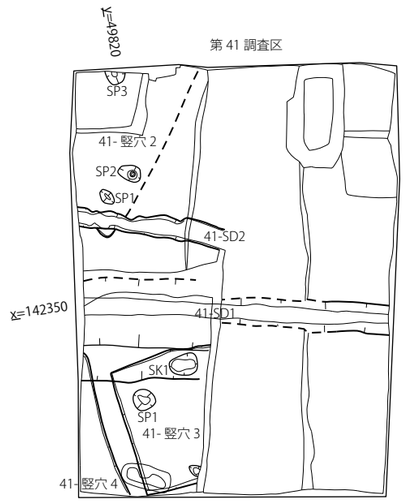


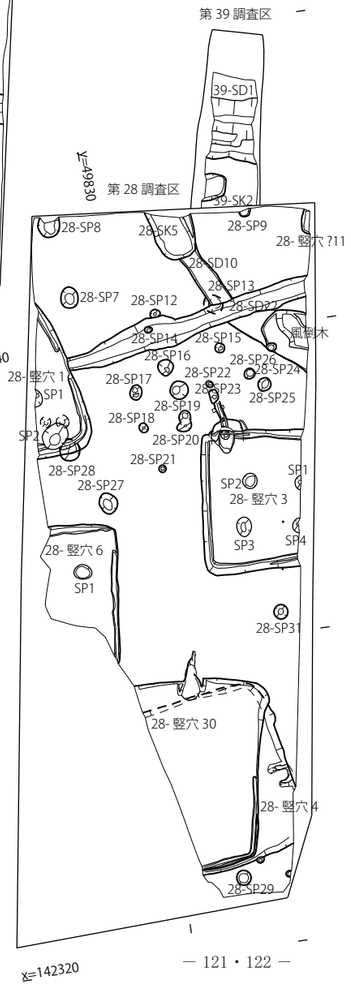
1　10YR4/3 にぶい黄褐　細礫混じりシルト
2　10YR4/2 灰黄褐　細礫混じりシルト　地山ブロック含む
3　10YR4/2 灰黄褐　細礫混じりシルト　地山ブロック多量含む

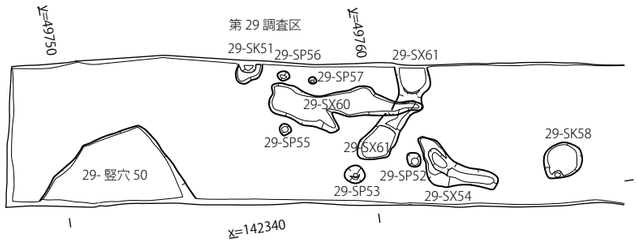
図 96　14-SP240　平・断面図及び出土遺物実測図











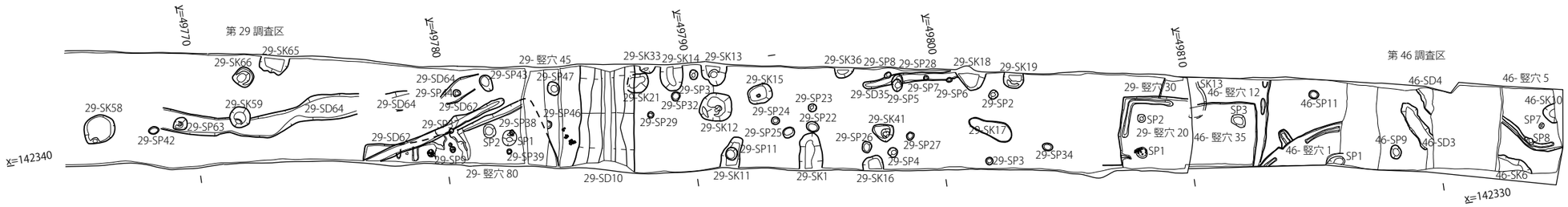


図 97　第 28・29・37・39・41・46 調査区平面図 (S=1/200)

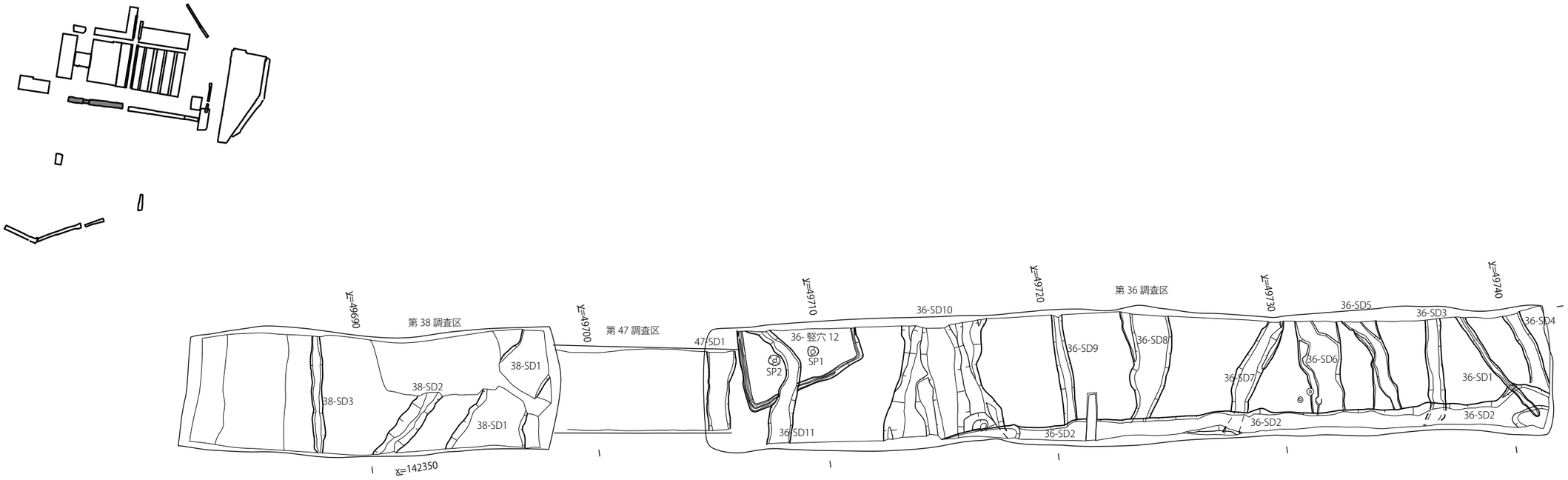


図 98　第 36・38・47 調査区平面図 (S=1/200)

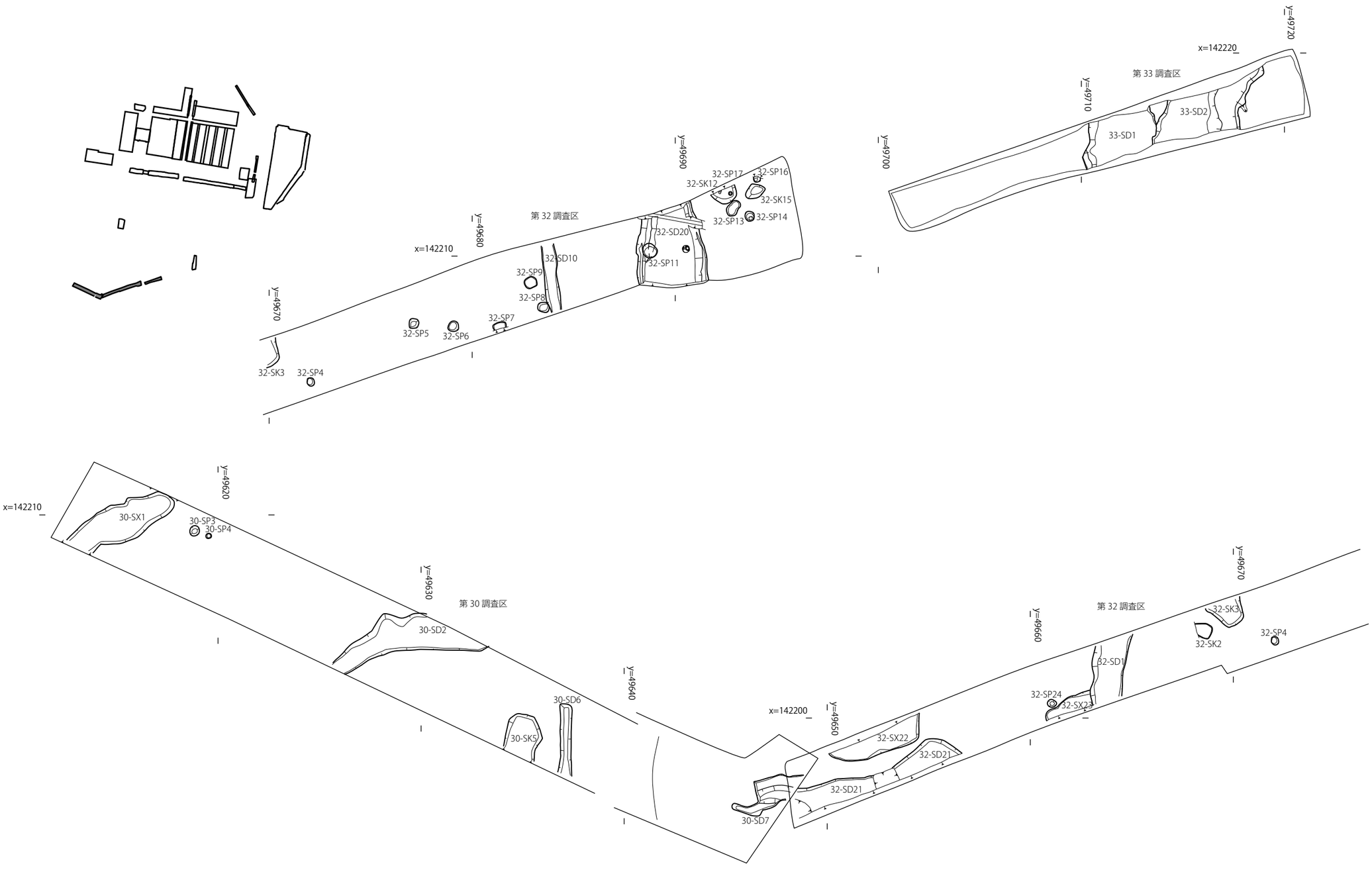
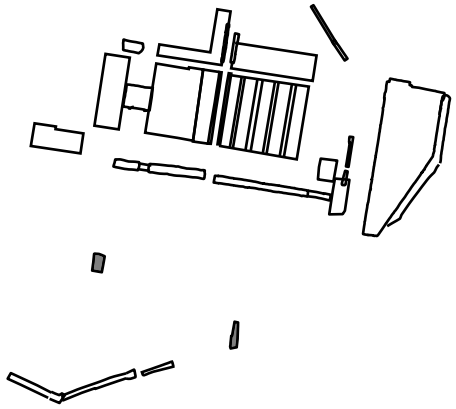
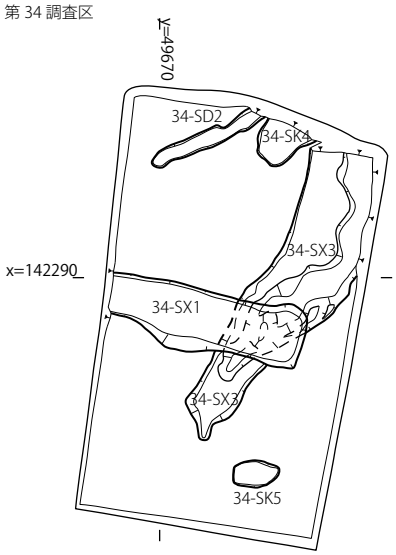


図 99　第 30・32・33 調査区平面図 (S=1/200)





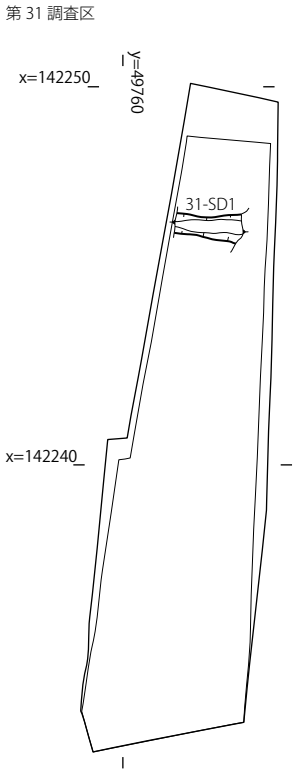


図 100　第 31・34 調査区平面図 (S=1/200)

C　周辺区画 (図 97 ～ 100)

(１)　竪穴建物

28 －竪穴 1(図 101)

第 28 調査区北西側で検出した竪穴建物である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ -18° - W、検出面の標高は 36.5m である。規模は、長辺約 5.0m 以上、短辺約 2.0m 以上、深さ約 0.60m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、周壁溝、支柱穴 (ＳＰ１)、 ピット (ＳＰ２) を確認した。

埋土は黒褐細砂～シルトと暗褐シルトである。遺物は土師器高杯 (562)、土師器高杯片が出土した。

貼床は暗褐シルトと褐灰細砂混じりシルト、にぶい黄細砂である。遺物は床面直上から土師器高杯 (560・561) が出土した。

周壁溝は幅約 0.22 m、深さ約 0.16m を測る。埋土は暗褐細礫混じりシルトである。

支柱穴は南東側の 1 基が確認できたが、調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。直径約 0.53 m、深さ約 0.25m を測る。断面形状は椀状である。埋土は黒褐シルトと暗褐シルトである。

ＳＰ２は楕円形を呈し、長径約 0.92 m、短径約 0.74 m、深さ約 0.28m を測る。断面形状は椀状で

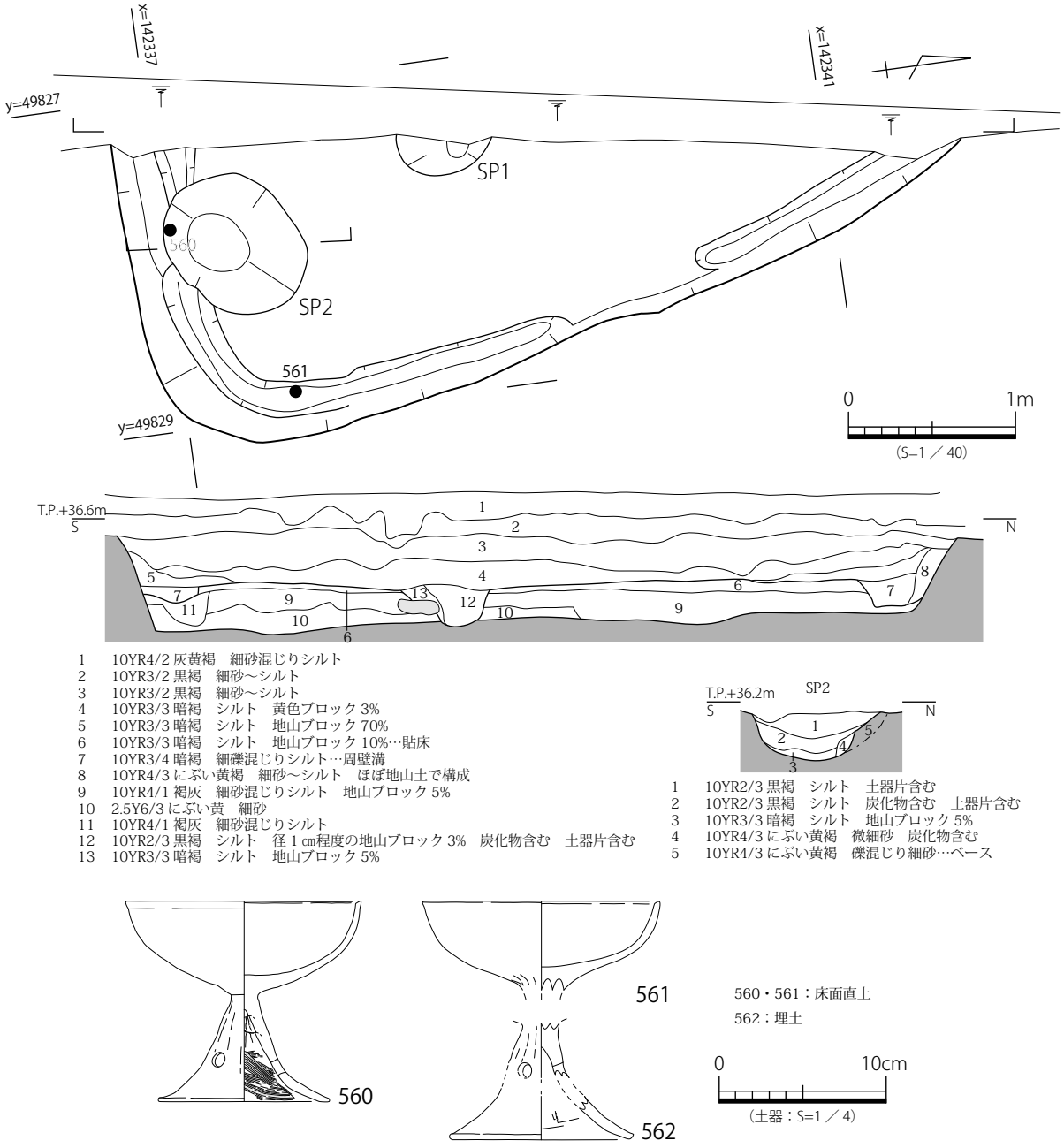


図 101　28- 竪穴 1　平・断面図及び出土遺物実測図

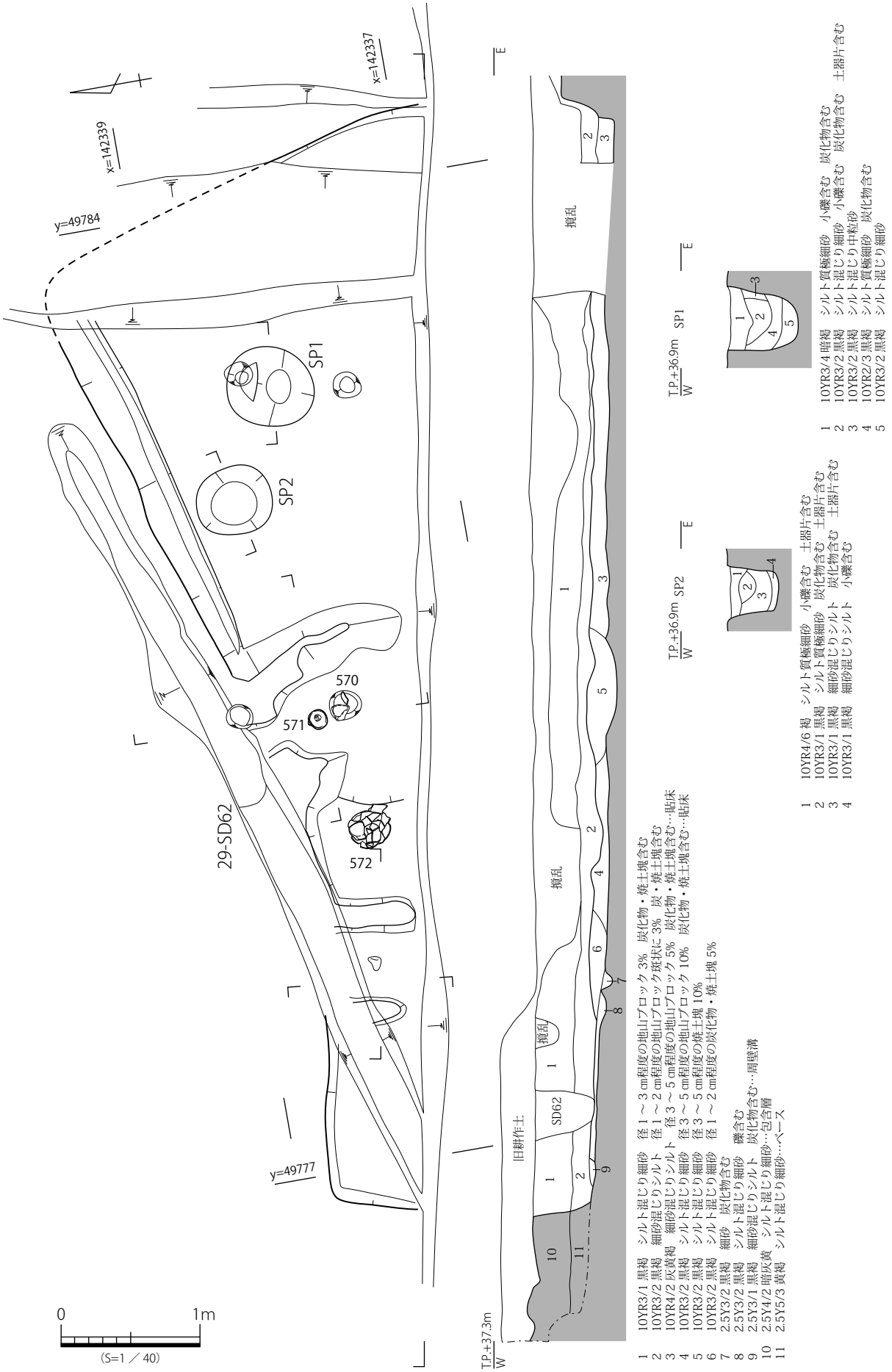
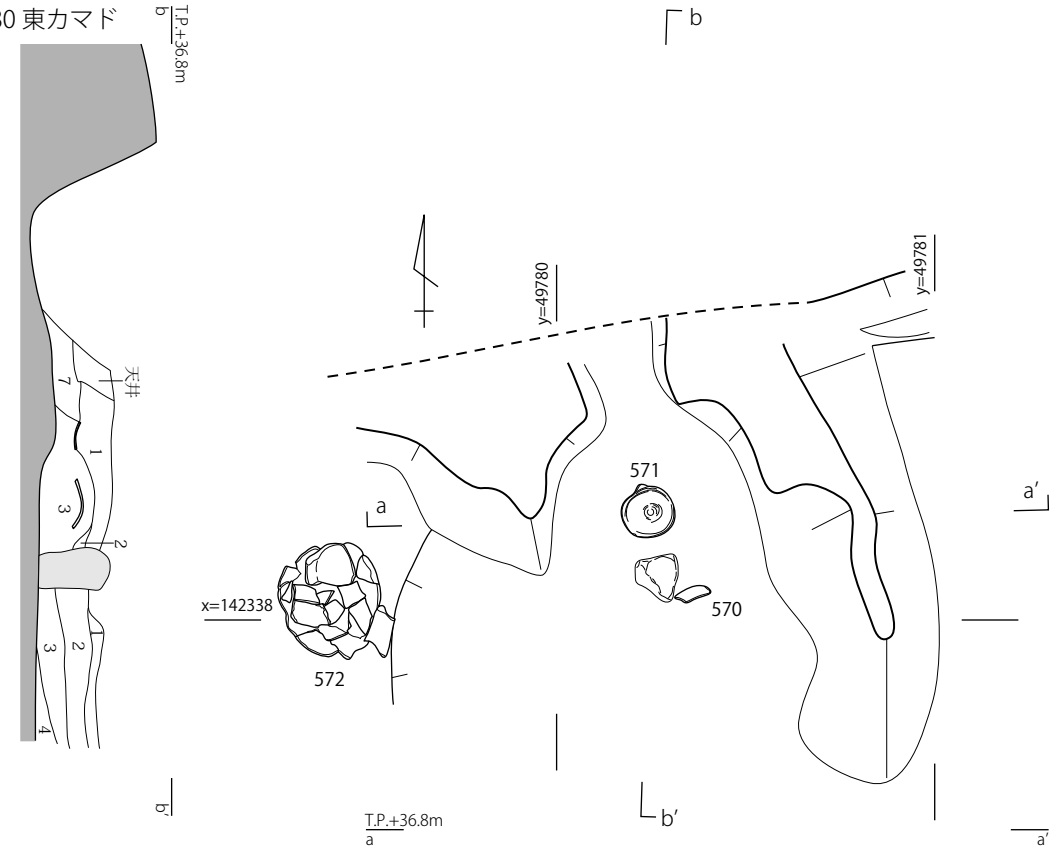
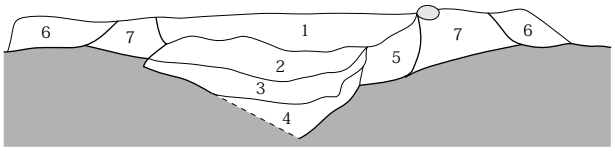


図 102　29- 竪穴 80　平・断面図

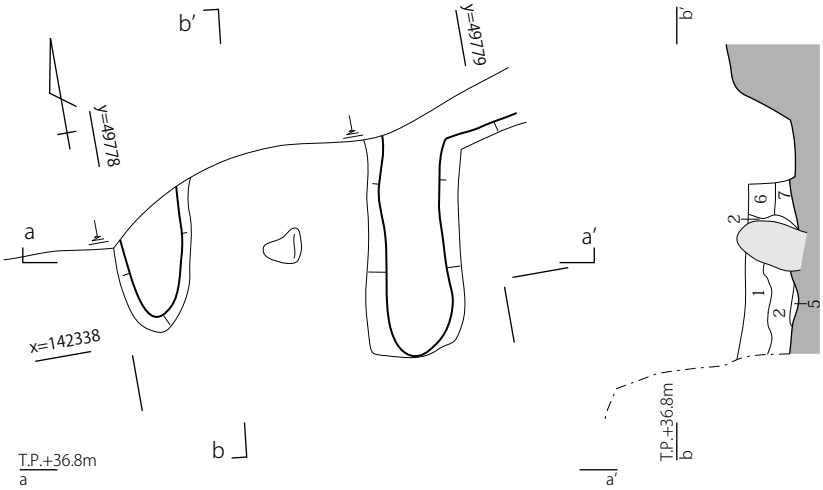
竪穴 80 東カマド

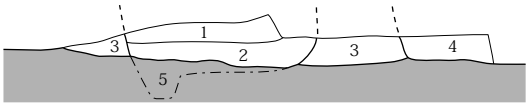


1　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト混じり極細砂
2　10YR3/4 暗褐　シルト混じり極細砂　焼土・炭含む
3　10YR4/4 褐　シルト　炭化物を２層より多く含む
4　10YR4/2 灰黄褐　細砂混じりシルト　炭と焼土を２層より少なく含む
5　10YR5/6 黄褐～ 10YR4/6 褐　シルト
6　10YR5/3 にぶい黄褐　シルト混じり細砂
7　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト　ほぼ地山土で構成



竪穴 80 西カマド





1　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト混じり細砂　径３～５㎝大の礫含む　焼土塊含む
2　10YR3/2 黒褐　細砂混じりシルト　径３㎝大の礫含む　炭・焼土粒含む
3　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト　ほぼ地山土で構成…カマド袖
4　2.5Y4/2 暗灰黄　細砂混じりシルト　径２～３㎝程度の地山ブロック 3%…埋土
5　2.5Y4/3 オリーブ褐　礫混じり細砂
6　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂混じりシルト
7　10YR3/3 暗褐　シルト　炭化物含む

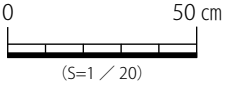


図 103　29- 竪穴 80　カマド

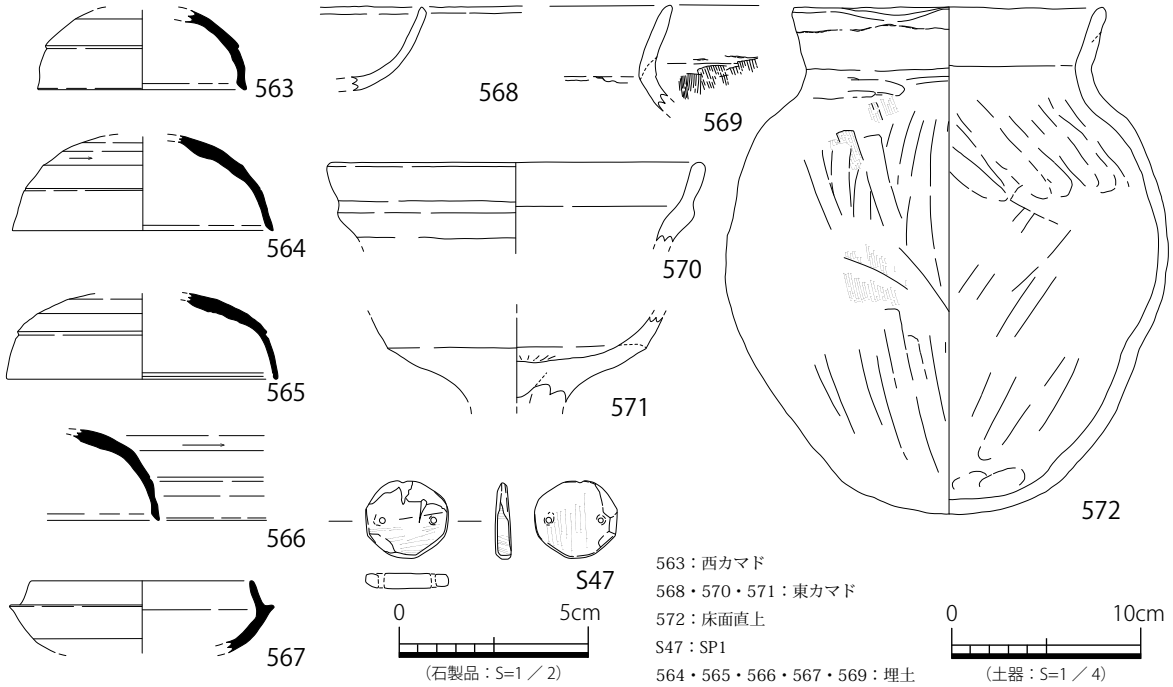


図 104　29- 竪穴 80　出土遺物実測図

ある。埋土は上層が黒褐シルト、下層が暗褐シルトとにぶい黄褐微細砂である。遺物はＳＰ２から製塩土器片が出土した。

出土遺物の年代から古墳時代中期頃と判断できる。

29 ―竪穴 80(図 102 ～ 104)

第 29 調査区中央で検出した竪穴建物である。29- ＳＤ 62 と撹乱に切られ、調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ -10°- W、検出面の標高は 37.0m である。規模は、長辺約 6.8m 以上、短辺約 3.0m 以上、深さ約 0.50m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマド２基と周壁溝、ピット (ＳＰ１・２) を検出した。

埋土は黒褐シルト混じり細砂である。埋土から須恵器杯蓋 (564・565・566)・杯身 (567)、土師器甕 (569)、須恵器杯身片・高杯片、土師器高杯片、石英塊が出土した。

貼床は灰黄褐細砂混じりシルトと黒褐シルト混じり細砂、黒褐シルト混じり細砂である。東カマドの周辺床面直上からほぼ完形の土師器甕 (572) が出土した。

カマドは北側に２基作り付けられる。東側カマドは、西側の袖部の残存が悪いが、馬蹄形を呈すると考えられる。カマド構築材は暗灰黄シルトで、ほぼ地山ブロック土で構成される。カマド内部は掘窪める。カマド中央には砂岩製の支脚石を据え、石には被熱が認められる。カマド内部の堆積は、上部構造の崩落土と考えられる。遺物は土師器壷 (570)・土師器高杯 (571)・土師器杯 (568) 、須恵器杯蓋片、土師器高杯片 (精製品で脚部に円孔あり) が出土した。

西側カマドは 29- ＳＤ 62 に切られるため、全体の形状は不明であるが、馬蹄形を呈すると考えられる。カマド中央に砂岩製の支脚石を据える。カマド構築材は暗灰黄シルトで、ほぼ地山ブロック土で構成されている。カマド内部には炭と焼土の堆積層が確認でき、当時の機能面と考えられる。遺物は須恵器杯蓋 (563) が出土した。

周壁溝は幅約 0.17m、深さ約 0.02m を測る。埋土は黒褐細砂混じりシルトである。

ＳＰ１は円形を呈し、直径約 0.46 m、深さ約 0.51m を測る。断面形状はＵ字形である。埋土は上層が暗褐シルト質極細砂、中層が黒褐シルト混じり細砂と黒褐シルト混じり中粒砂、黒褐シルト質極細砂、下層が黒褐シルト混じり細砂である。ＳＰ１から石製有孔円盤 (S47) が出土した。

ＳＰ２は円形を呈し、直径約 0.39 m、深さ約

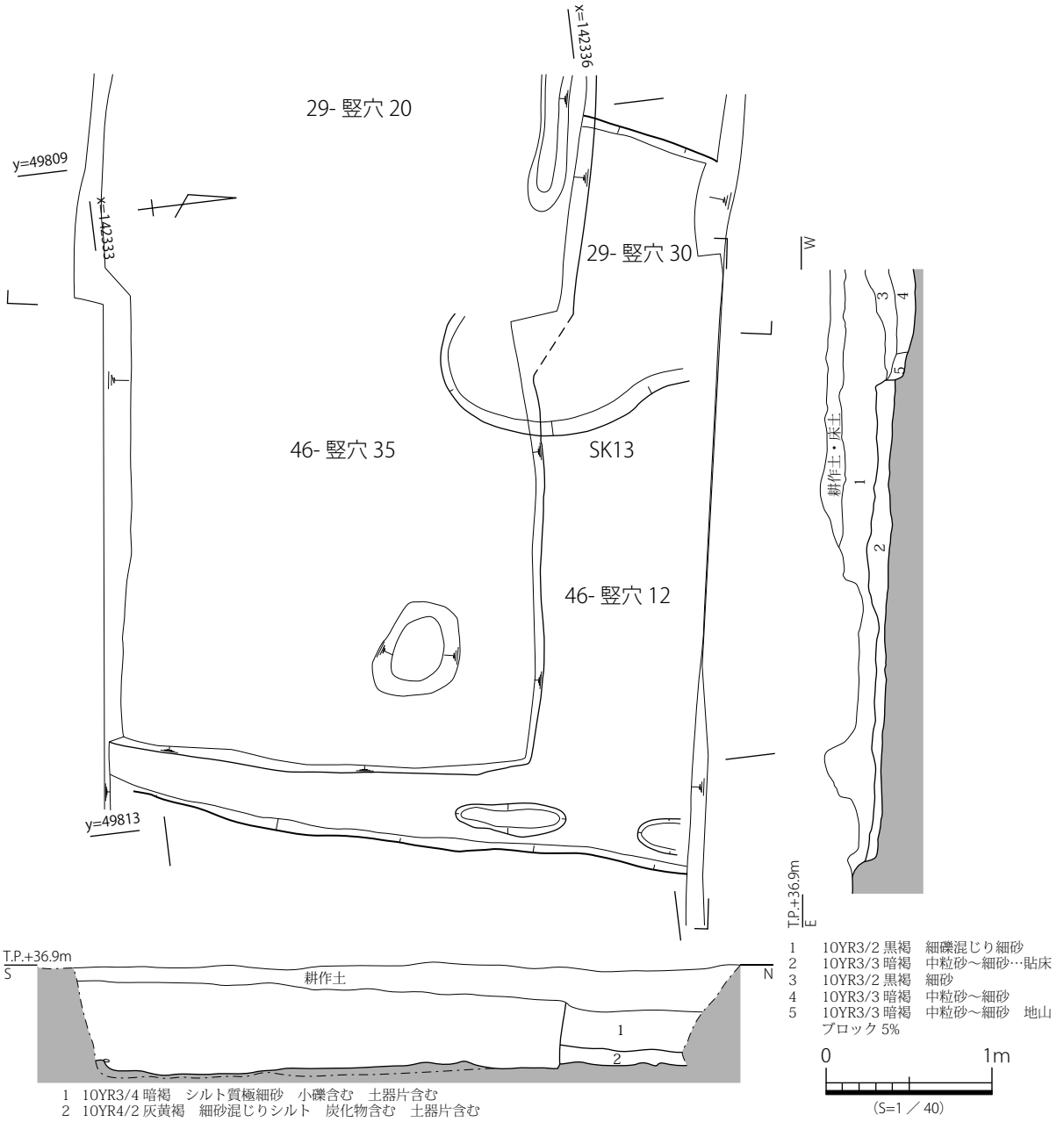


図 105　29- 竪穴 30・46- 竪穴 12　平・断面図

0.38m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が褐シルト質極細砂、中層が黒褐シルト質極細砂と黒褐細砂混じりシルト、下層が黒褐細砂混じりシルトである。遺物は須恵器杯蓋片が出土した。

東側カマドから古墳時代中期中葉を中心とした古相を示す土器が出土している。一方、西側カマドや埋土からは、ＭＴ 15 ～ＴＫ 10 型式並行期の須恵器が出土している。時期幅があるものの、本建物はＭＴ 15 ～ＴＫ 10 型式併行期に廃絶したものと考えておきたい。

29 －竪穴 30・46 －竪穴 12(図 105)

第 29 調査区東側、第 46 調査区西側で検出した竪穴建物である。29- 竪穴 20 に切られ、調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ -27°- Ｅ、検出面の標高は 36.6m である。規模は、長辺約 4.30m、短辺約 3.5m 以上、深さ約 0.30m を測る。

埋土の掘削後、貼床直上で遺構の検出を行い、周壁溝と土坑 (ＳＫ 13) を検出した。

埋土は黒褐細礫混じり細砂である。遺物は須恵器高杯片が出土した。

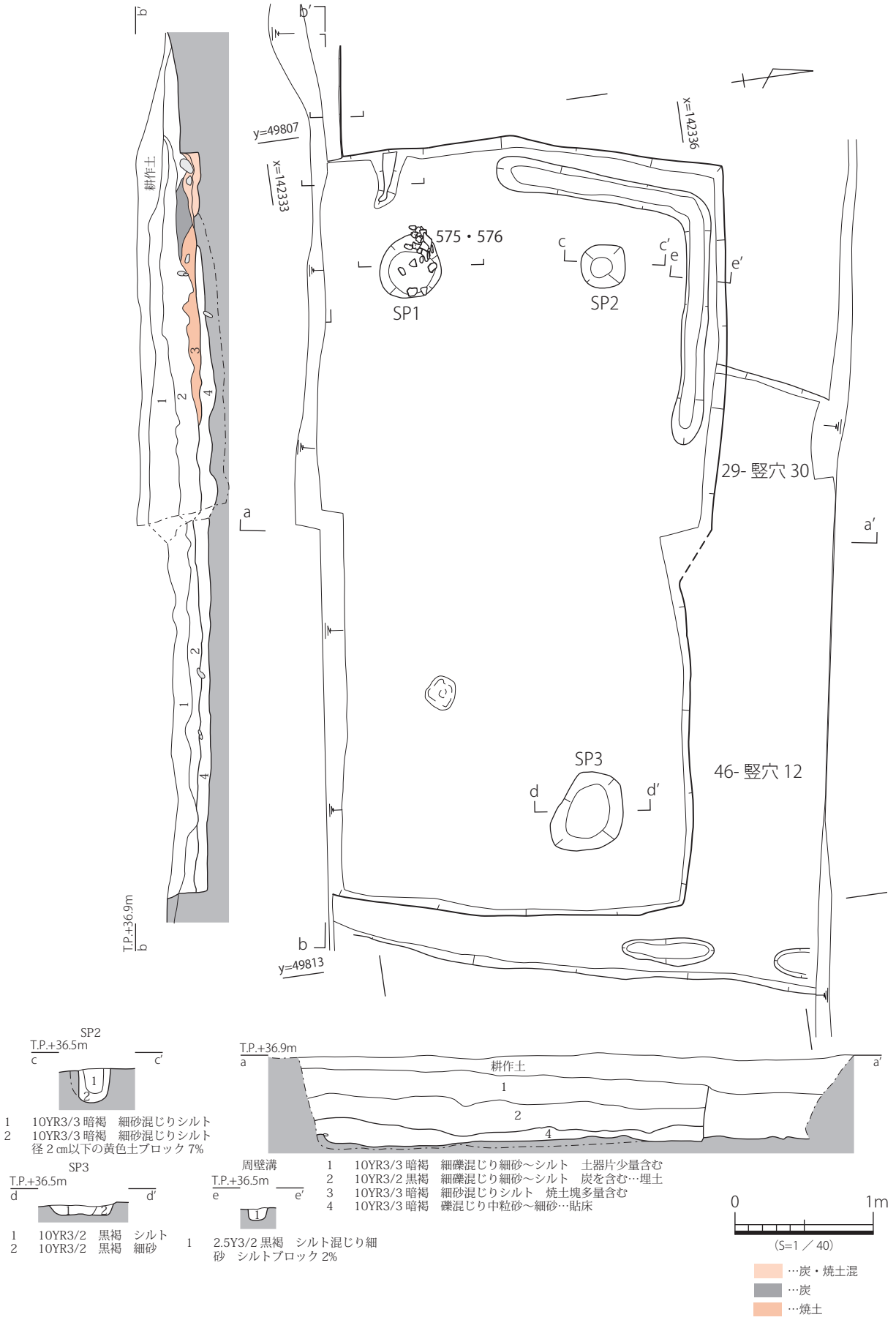


図 106　29- 竪穴 20・46- 竪穴 35　平・断面図

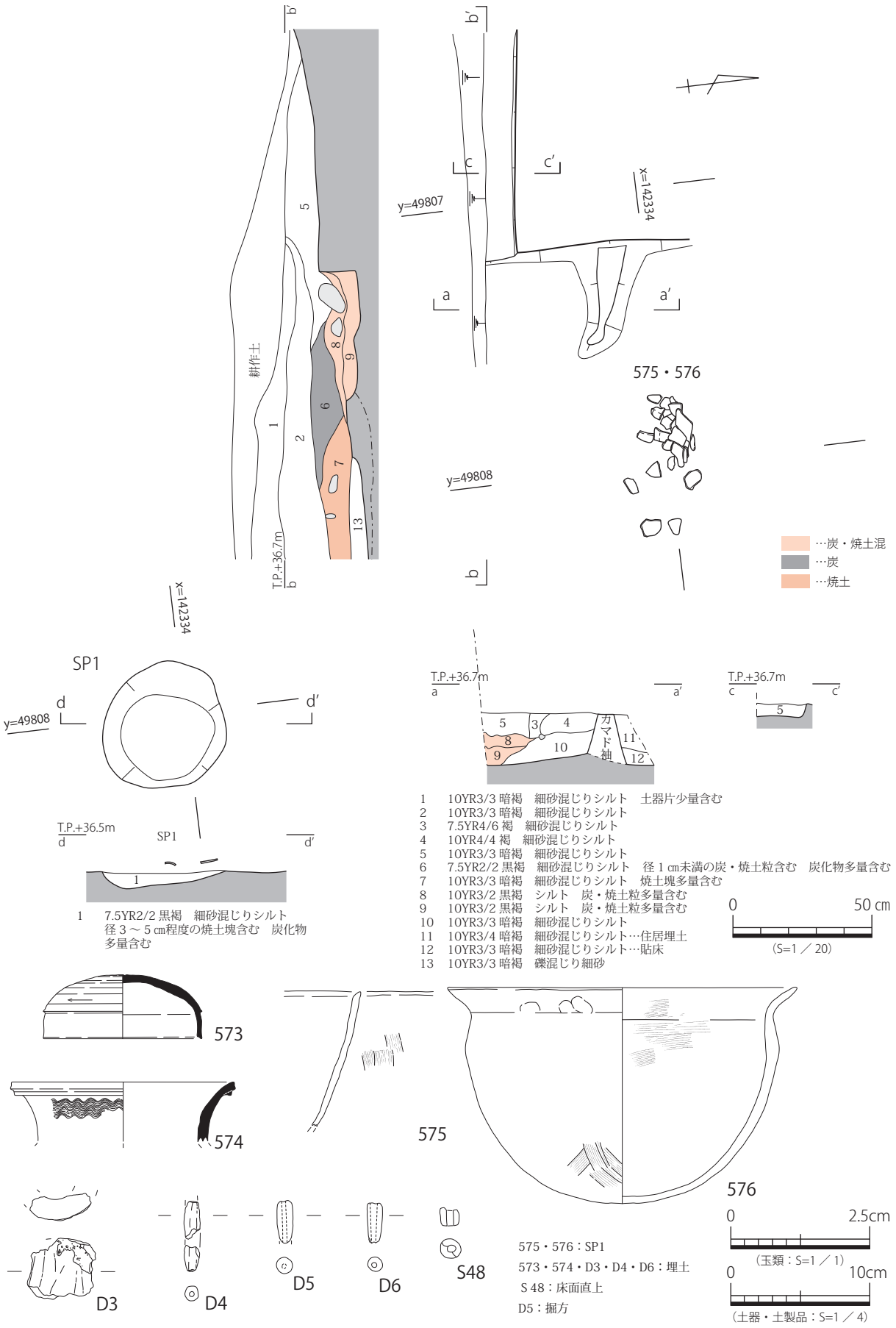


図 107　29- 竪穴 20・46- 竪穴 35　カマド及び出土遺物実測図

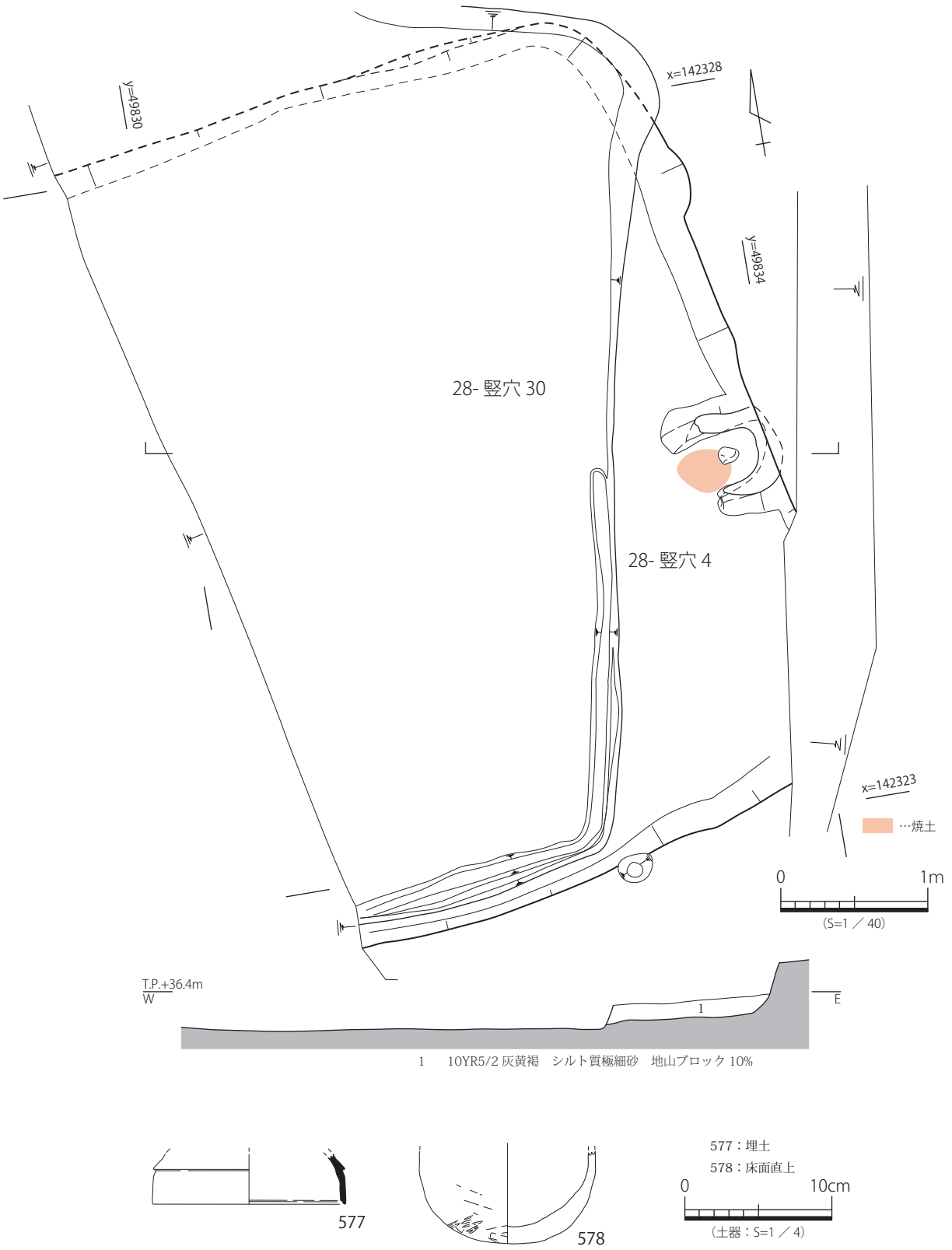


図 108　28- 竪穴 4　平・断面図及び出土遺物実測図

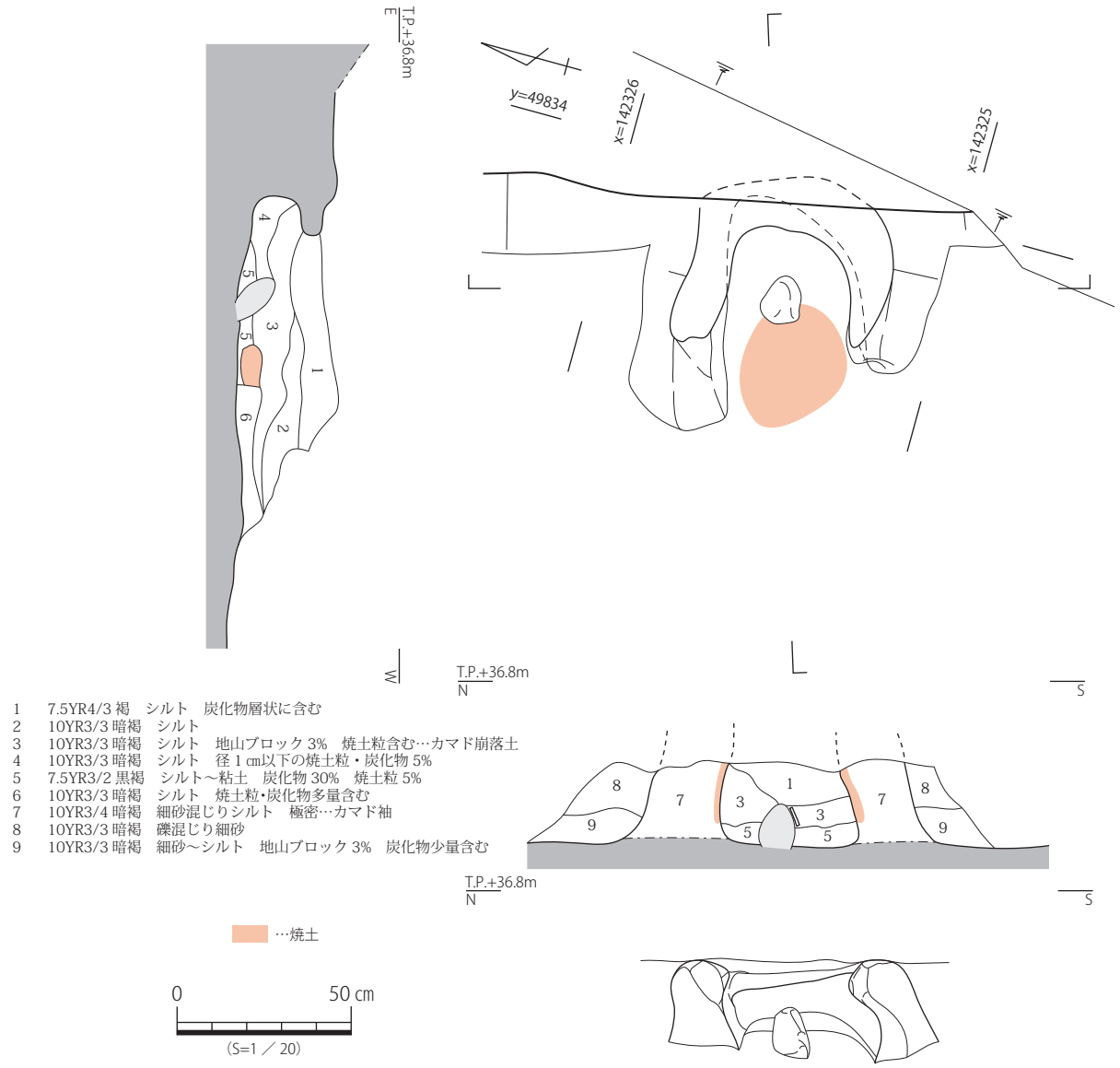


図 109　28- 竪穴 4　カマド

貼床は暗褐中粒砂～細砂である。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.21 m、深さ約 0.03m を測る。

ＳＫ 13 は、不整形な形状で、長軸約 1.70 m、短軸約 0.86 m、深さ約 0.29m を測る。埋土は上層が黒褐細砂、下層が暗褐中粒砂～細砂である。

出土遺物が細片であることから、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係からＴＫ 47 型式併行期以前と判断できる。

29 ―竪穴 20・46- 竪穴 35(図 106 ～ 107)

第 29 調査東側と第 46 調査区西側で検出した竪穴建物である。南側が調査区外へ広がるため、全体の形状は不明であるが、方形を呈すると考えられる。主軸方位Ｎ -9°- Ｅ、検出面の標高は 36.8m である。規模は、長辺約 5.60m、短辺約 2.9m 以上、深さ約 0.50m を測る。

埋土の掘削後、貼床直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (ＳＰ２・３)、ピット (ＳＰ１) を検出した。

埋土は暗褐細礫混じり細砂～シルトと黒褐細礫混じり細砂～シルトである。埋土から須恵器杯蓋 (573)・甕 (574)、鞴の羽口 (D3)、土錘 (D4・D6)、須恵器杯身片、土師器高杯片が出土した。

貼床は暗褐礫混じり中粒砂～細砂である。床面直上から土師器鍋 (576)・甑 (575)、臼玉 (S48)、掘方から土錘 (D5) が出土した。また貼床内から土師器高杯片が出土した。

カマドは竪穴建物西側中央に作り付けられ、煙道が延びる。カマド袖は北側袖を検出し、カマド構築材は褐細砂混じりシルトと暗褐細砂混じりシルトである。カマド内部はやや掘窪める。カマド内部には、炭化物層と焼土層が確認でき、カマド機能時の機能面と考えられる。

支柱穴は北側の２基を確認した。ＳＰ２は円形を呈し、直径約 0.23 m、深さ約 0.25m を測る。断面形状はＵ字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂混じりシルト、掘方が地山ブロック土を含む暗褐細砂混じりシルトである。ＳＰ３は不整形で、長径約 0.65 m、短径約 0.46 m、深さ約 0.07m を測る。断面形状は皿状である。埋土は黒褐シルトと黒褐細砂である。

ＳＰ１は円形を呈し、直径約 0.44 m、深さ約 0.06m を測る。断面形状は皿状である。埋土は黒褐細砂混じりシルトである。遺物は土師器甑 (575)、土師器鍋 (576) が出土した。

出土遺物の年代からＴＫ 47 型式併行期と判断できる。

28 －竪穴 4 (図 108 ～ 109)

第 28 調査区南側で検出した竪穴建物である。撹乱と 28- 竪穴 30 に切られ、調査区外へ広がるため、全体の形状は不明であるが、方形を呈すると想定できる。主軸方位Ｎ -11°- W、検出面の標高は 36.65m である。規模は、長辺約 5.60m、短辺約 3.8m 以上、深さ約 0.30m を測る。

調査時には 28- 竪穴 30 と切り合い関係の認識が無く、埋土を掘削中に切り合い関係を確認するに至った。埋土からは須恵器杯蓋 (577)・杯身片・杯蓋片・高杯片・壺片・瓿片、土師器甑片・甕片・高杯片が出土した。

貼床は灰黄褐シルト質極細砂である。床面直上から土師器甕 (578) が出土した。

カマドは東側中央に作り付けられ、馬蹄形を呈する。一部にカマドの上部構造を残す。カマド内には砂岩製の支脚石を据える。カマド構築材は暗褐細砂混じりシルトである。カマド内部の袖の壁面には被熱の痕跡が認められる。カマド内部には炭化物を含む褐シルトと暗褐シルトと黒褐シルトで、カマド上部からの崩落土と考えられる。遺物は土師器甕片、被熱した砂岩製支脚石が出土した。

出土遺物と 28- 竪穴 30 との切り合い関係からＴＫ 47 ～ＭＴ 15 型式併行期と考えられる。

41 －竪穴 3 (図 110)

第 41 調査区南西側で検出した竪穴建物である。41- ＳＤ１と撹乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、平面形状は方形を呈すると考えられる。主軸方位Ｎ -10°- W、検出面の標高は 36.5m である。規模は、長辺約 4.40m、短辺約 3.4m 以上、深さ約 0.30m を測る。

検出面上では、地震の影響による噴礫が確認できた。噴礫の影響により、竪穴建物が撹乱されている可能性が高い。埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、土坑 (ＳＫ１) とピット (ＳＰ１) を確認した。また、平面検出はできなかったが、断面からカマドの痕跡を確認した。

埋土は暗褐中粒砂混じりシルトと黒褐細砂～シルトである。遺物は須恵器杯蓋片・瓿片、土師器甕片・高杯片が出土した。

貼床は黒褐礫混じり中粒砂である。遺物は床直付近から土師器甑把手 (スリット入り) が出土した。

カマドは残存状態が悪く、断面で一部確認できた。カマドの推定範囲の周辺から須恵器高杯 (579)・土師器椀 (580) が出土した。

ＳＫ１は楕円形を呈し、長軸約 0.91 m、短軸約 0.70 m、深さ約 0.33m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は上層が黒褐細砂混じりシルト、下層が暗褐中粒砂混じりシルトと灰黄褐細砂混じりシルト、黒褐細砂～シルトである。遺物は須恵器杯身片・杯蓋片が出土した。

ＳＰ１は円形を呈し、直径約 0.71 m、深さ約 0.26m を測る。断面形状は不整形である。埋土は暗褐細砂混じりシルトである。

出土遺物の年代からＭＴ 15 ～ＴＫ 10 型式併行期と判断できる。

28 －竪穴 3(図 111 ～ 113)

第 28 調査区中央で検出した竪穴建物である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明であるが、方形を呈すると考えられる。主軸方位Ｎ -7°- Ｅ、検出面の標高は 36.5m である。規模は、長辺約 4.60m、短辺約 3.3m 以上、深さ約 0.50m を測る。

埋土の掘削後、貼床直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (ＳＰ１～４) を検出した。

埋土は灰黄褐シルト質極細砂とにぶい黄褐シル

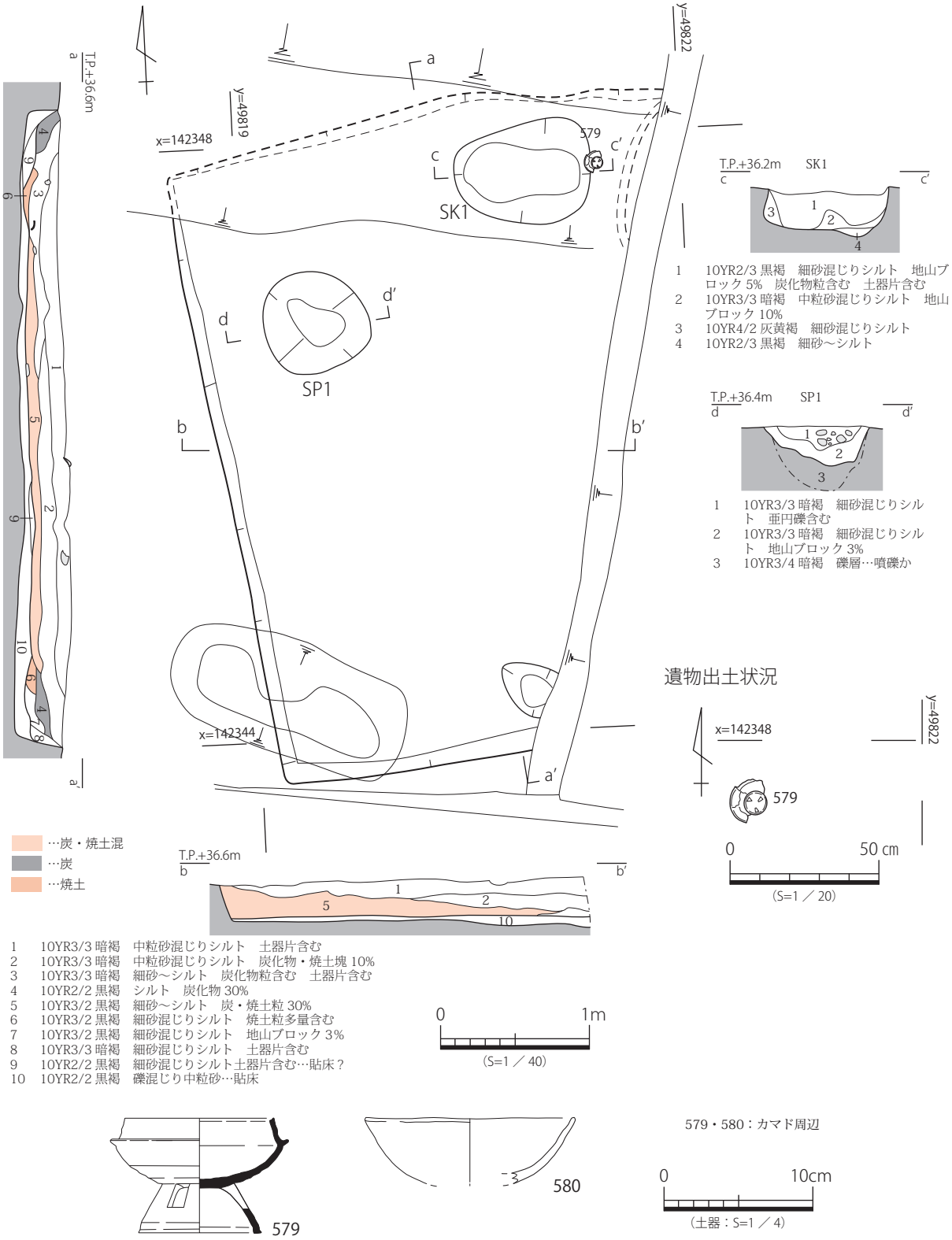


図 110　41- 竪穴 3　平・断面図及び出土遺物実測図

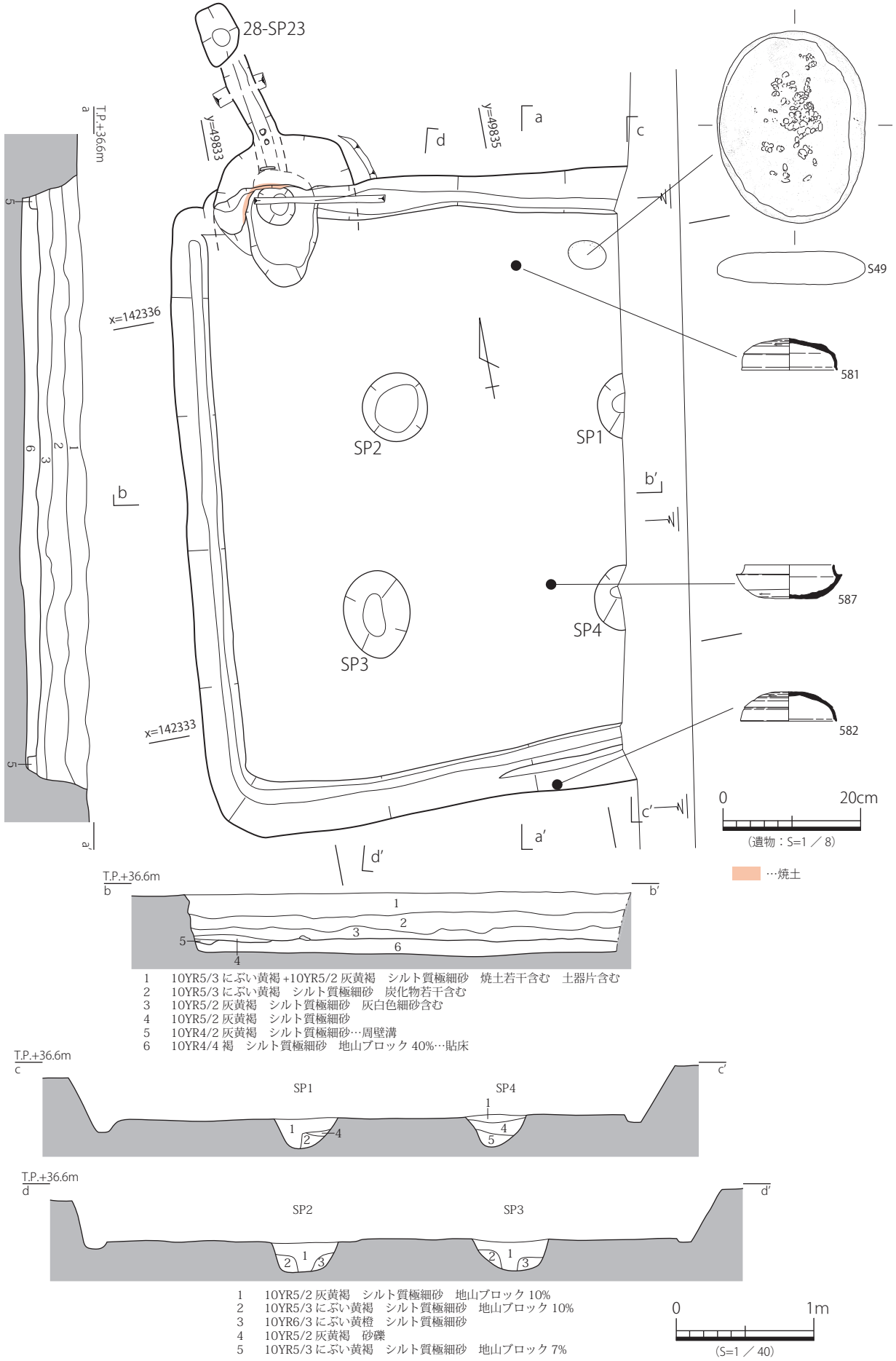
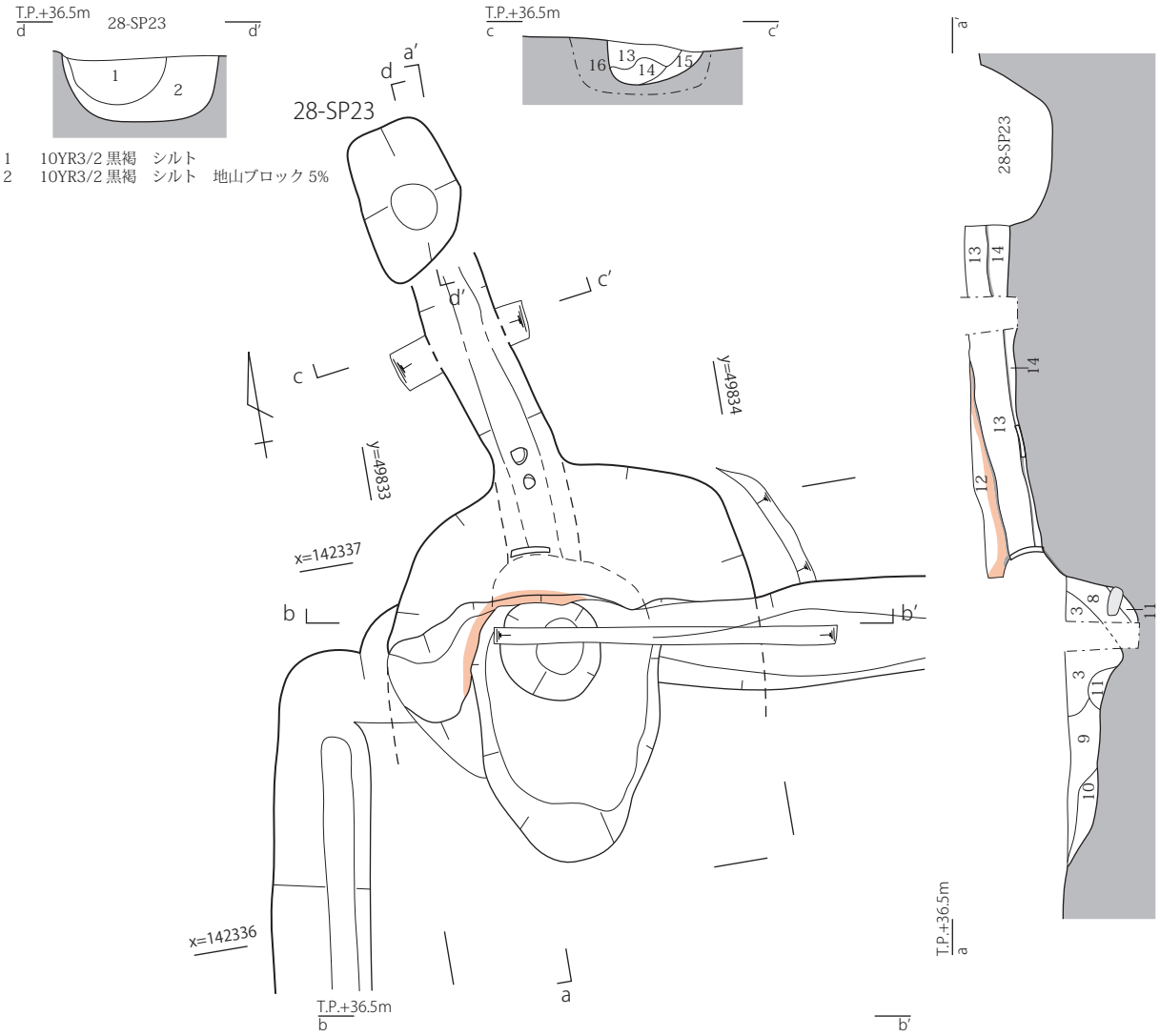
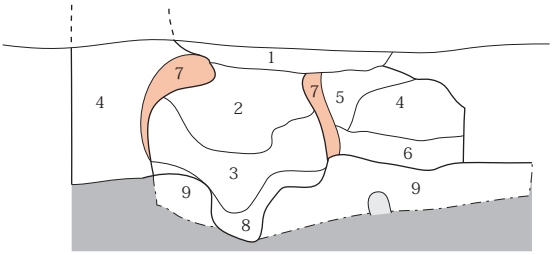
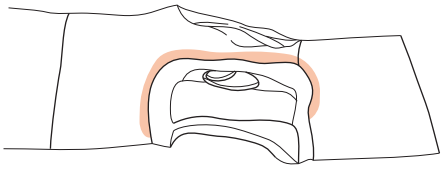


図 111　28- 竪穴 3　平・断面図





1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐　細砂混じりシルト
2　7.5YR3/3 暗褐　細砂混じりシルト　焼土含む
3　7.5YR3/3 暗褐　細砂混じりシルト　焼土粒・炭化物 10%
4　10YR4/4 褐　細砂混じりシルト　緊密度極密…カマド袖
5　10YR3/3 暗褐～ 10YR4/3 にぶい黄褐　シルト
6　10YR3/3 暗褐～ 10YR4/3 にぶい黄褐　シルト　径 1 ㎝程度の地山ブロック 3%
7　5YR4/6 赤褐　細砂…カマド袖の被熱部分
8　10YR3/1 黒褐　シルト～細砂
9　7.5YR3/2 黒褐　礫混じりシルト　円礫含む　地山ブロック 5%…貼床
10　10YR4/4 褐　シルト　炭化物 3%
11　10YR4/3 にぶい黄褐　細礫混じりシルト
12　5YR4/4 にぶい赤褐　シルト　被熱したカマドの射体で、内側に薄層の炭が付着する…カマドの煙道の天井部
13　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト　焼土粒・炭化物少量含む
14　5YR2/1 黒褐　シルト～粘土　炭が層状に堆積
15　10YR3/3 暗褐　シルト
16　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト…ベース



…炭
…焼土

0　50 ㎝
（S=1 ／ 20）

図 112　28- 竪穴 3　カマド

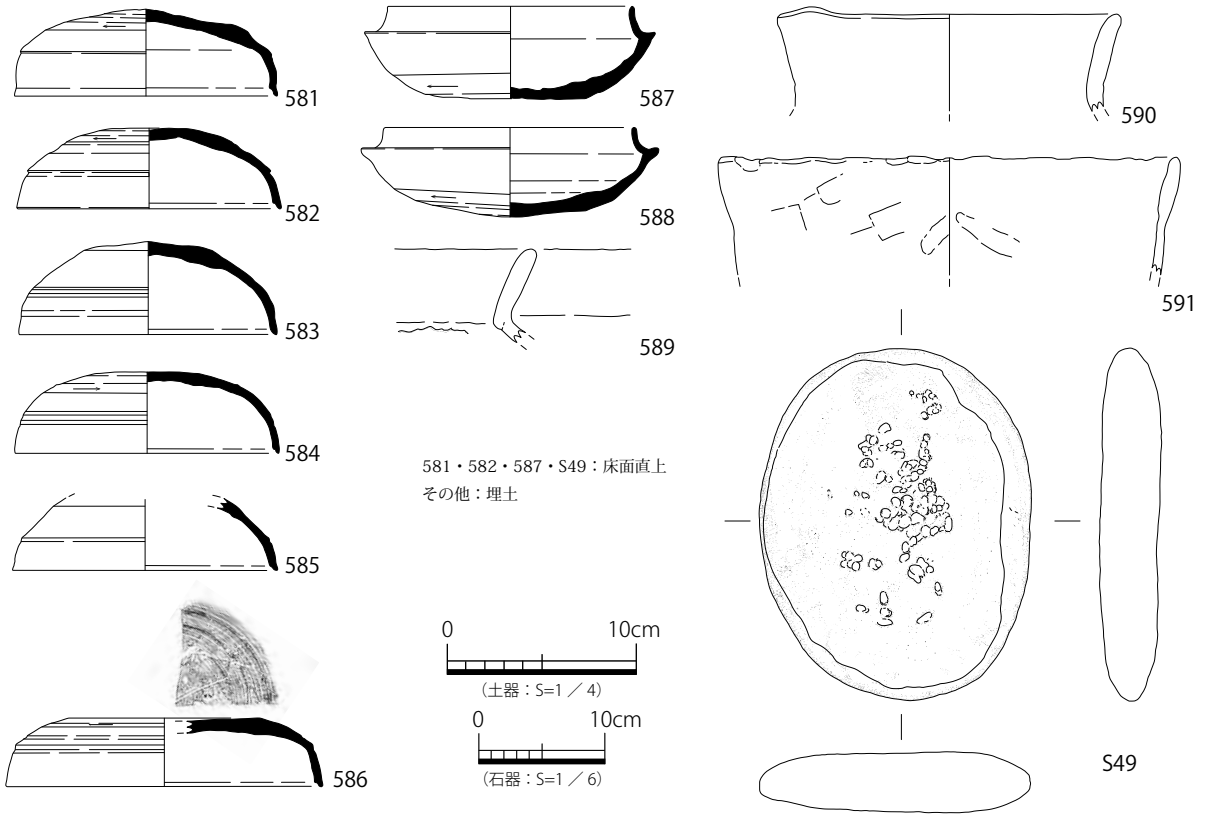


図 113　28- 竪穴 3　出土遺物実測図

ト質極細砂である。遺物は須恵器杯身 (588)・杯蓋 (583 ～ 586)、土師器甕 (589)・壺 (590)・甑 (591)、須恵器杯身片･杯蓋片･高杯片、土師器甑片･甕片・高杯片が出土した。

貼床は褐シルト質極細砂である。床面直上から須恵器杯蓋 (581・582)・杯身 (587)・石皿 (S49) が出土した。

カマドは、竪穴建物北東隅に作り付けられるが、埋土掘削段階で、カマド袖部をかなり掘り下げてしまっており、燃焼部の床面と、煙道部を確認した。カマドの奥壁側から煙道部の遺存は良好で、上部構造を残している。遺存している袖部や煙道部内側に被熱痕による赤色硬化が確認でき、さらに煙道部、内側には薄いスス層が見られた。カマド構築材は褐細砂混じりシルトとにぶい黄褐シルトである。カマド内部は掘窪める。カマド内部の煙道への壁には、土師器片を据える。

周壁溝は幅約 0.13 m、深さ約 0.06m を測る。埋土は灰黄褐シルト質極細砂である。

支柱穴は 4 基確認できた。ＳＰ１は調査区外へと展開するため、全体の形状は不明である。直径約 0.47m、深さ約 0.22m を測る。断面形状は椀状である。埋土は上層が灰黄褐シルト質極細砂、下層がにぶい黄褐シルト質極細砂と灰黄褐砂礫である。ＳＰ２は円形を呈し、直径約 0.49 m、深さ約 0.21m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が灰黄褐シルト質極細砂、下層がにぶい黄褐シルト質極細砂とにぶい黄橙シルト質極細砂である。遺物は須恵器杯蓋片が出土した。ＳＰ３は楕円形を呈し、長径約 0.64 m、短径約 0.48 m、深さ約 0.21m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が灰黄褐シルト質極細砂、下層がにぶい黄褐シルト質極細砂とにぶい黄橙シルト質極細砂である。ＳＰ４は調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。直径約 0.44 m、深さ約 0.24m を測る。断面形状はＵ字形である。埋土は上層が灰黄褐シルト質極細砂、中層が灰黄褐砂礫、下層がにぶい黄褐シルト質極細砂である。

出土遺物の年代から、ＴＫ 10 ～ＭＴ 85 型式併行期と判断できる。

28 －竪穴 6(図 114)

第 28 調査区中央で検出した竪穴建物である。撹乱に切られるため、全体の形状は不明である。主軸

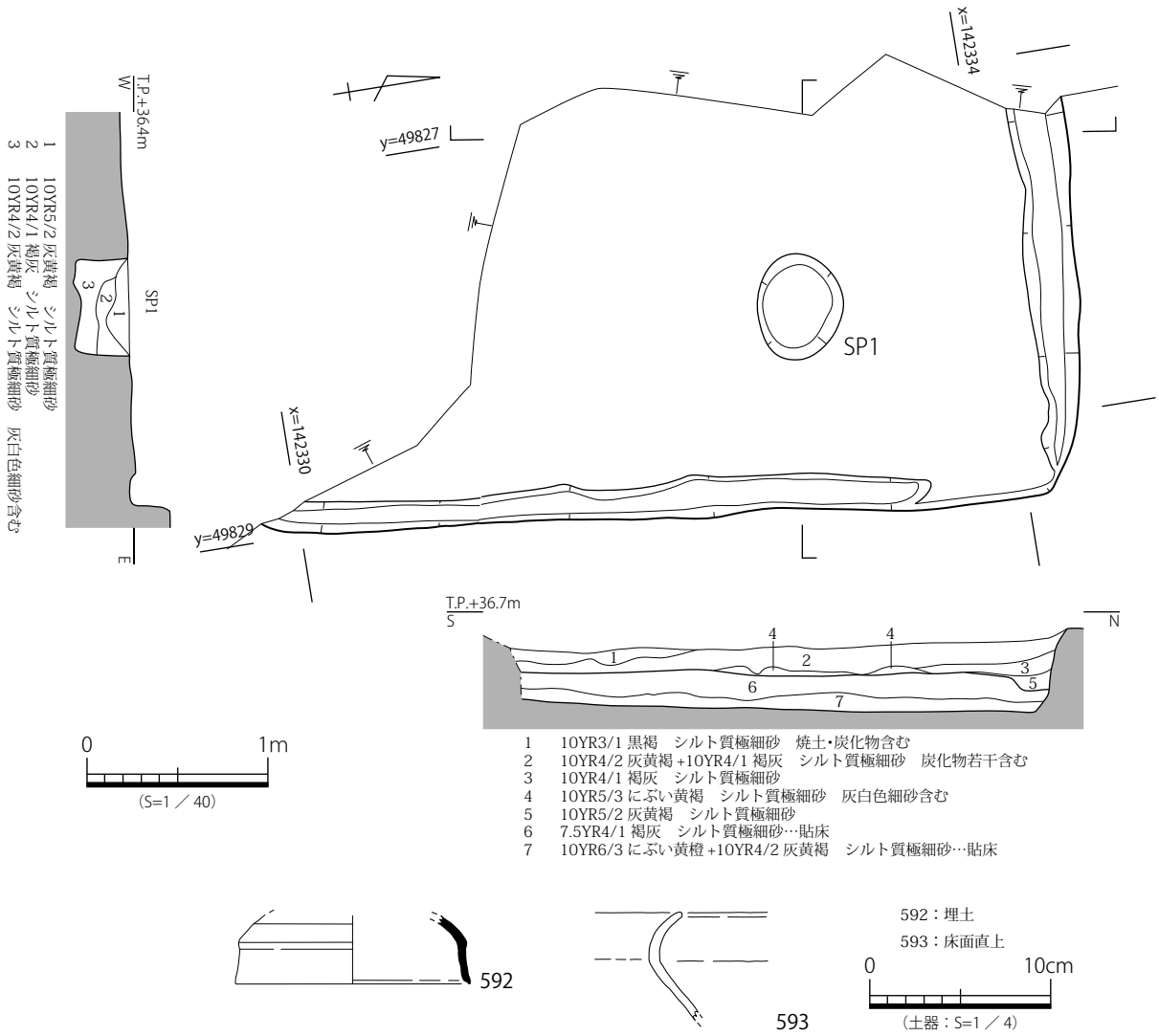


図 114　28- 竪穴 6　平・断面図及び出土遺物実測図

方位Ｎ -7°- Ｅ、検出面の標高は 36.6m である。規模は、長辺約 4.5m 以上、短辺約 2.5m 以上、深さ約 0.45m を測る

埋土の掘削後、貼床直上で遺構の検出を行い、周壁溝と支柱穴 (ＳＰ 1) を検出した。

埋土は黒褐シルト質極細砂と灰黄褐シルト質極細砂、褐灰シルト質極細砂とにぶい黄褐シルト質極細砂である。埋土から須恵器杯蓋 (592)、須恵器杯身片・高杯片が出土した。

貼床は褐灰シルト質極細砂と灰黄褐シルト質極細砂である。床面直上から土師器甕 (593) が出土した。

周壁溝は幅約 0.21 m、深さ約 0.08m を測る。埋土は灰黄褐シルト質極細砂である。

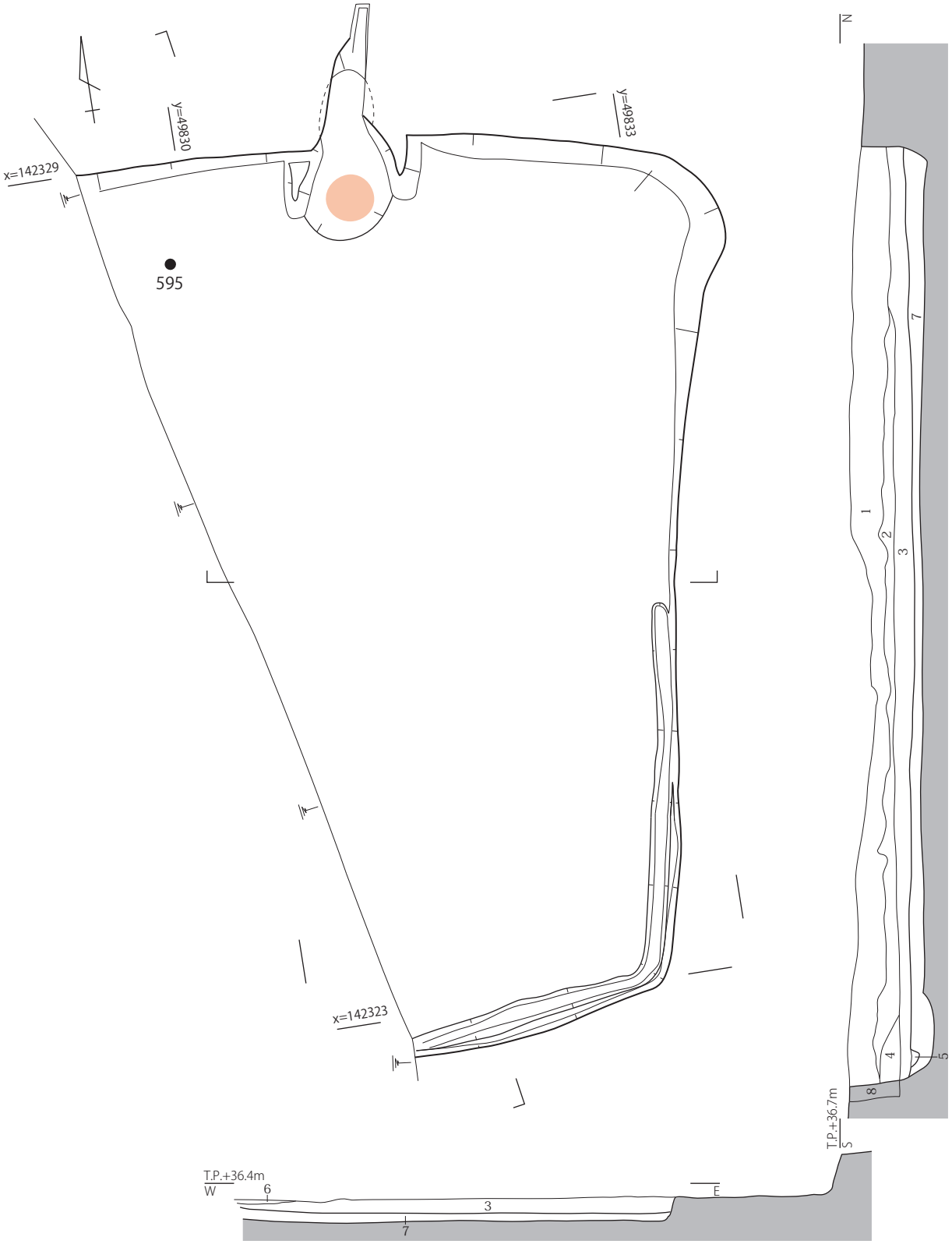
支柱穴は北東側の 1 基を確認した。ＳＰ 1 は円形を呈し、直径約 0.53 m、深さ約 0.30m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が灰黄褐シルト質極細砂、中層が褐灰シルト質極細砂、下層が灰黄褐シルト質極細砂である。

出土遺物からＴＫ 10 型式並行期頃と判断できる。

28 ―竪穴 30(図 115 ～ 116)

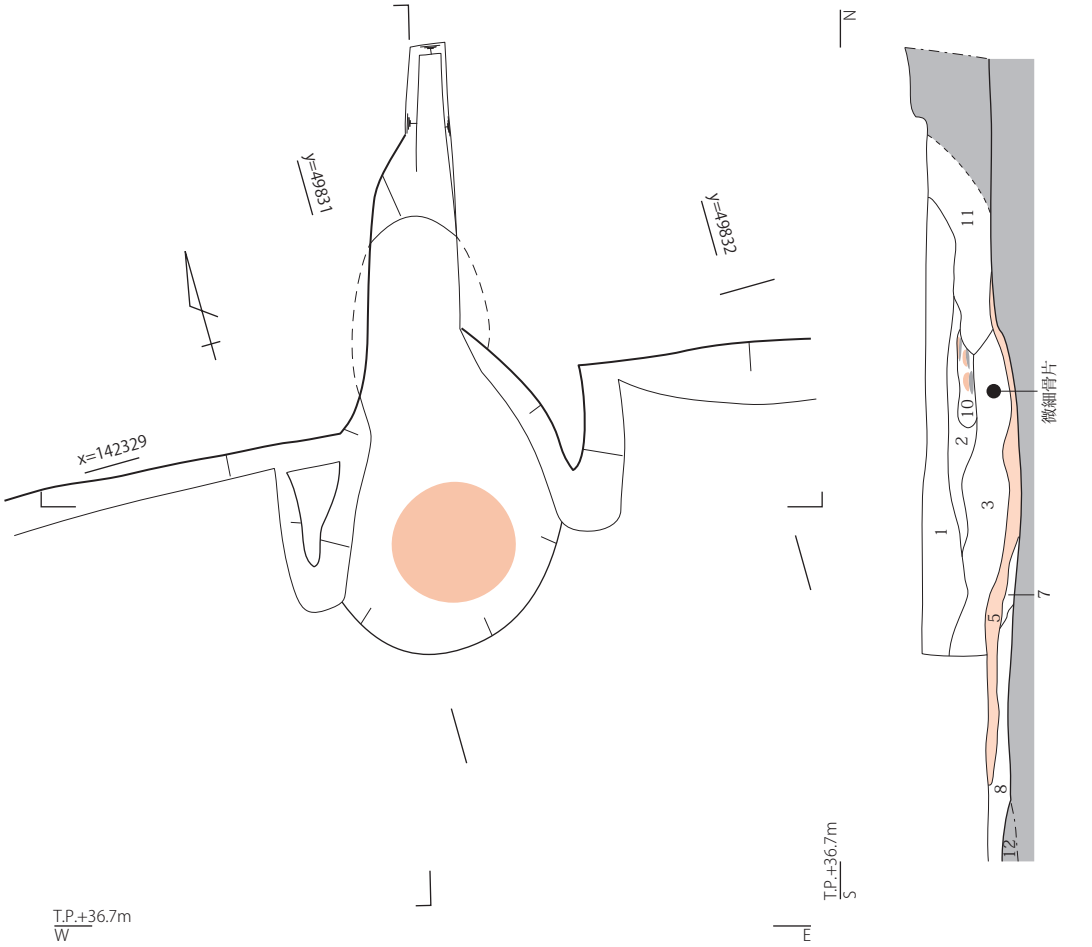
第 28 調査区南側で検出した竪穴建物である。撹乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、方形を呈すると想定できる。主軸方位Ｎ -10°- Ｅ、検出面の標高は 36.65m である。規模は、長辺約 6.10m、短辺約 4.2m 以上、深さ約 0.50m を測る。

調査時には 28- 竪穴 4 と切り合い関係の認識が無く、埋土を掘削中に切り合い関係を認識するに至った。埋土の掘削後､貼床直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝を検出したが、支柱穴は確認できなかった。

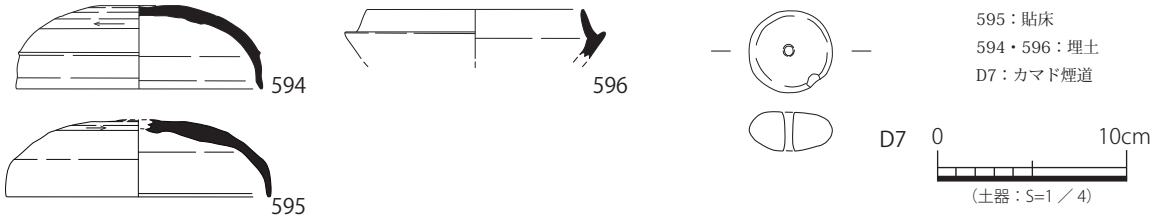


1　10YR3/3 暗褐　礫混じり細砂　土器片含む
2　10YR3/3 暗褐　細砂混じりシルト　地山ブロック 3%　炭化物含む　土器片含む
3　10YR3/2 黒褐　細砂混じりシルト
4　10YR3/2 黒褐　シルト
5　10YR4/2 灰黄褐　シルト…周壁溝
6　10YR3/3 暗褐　細砂混じりシルト　焼土・炭化物多量含む
7　10YR5/3 にぶい黄褐　シルト質極細砂　地山ブロック 10%…貼床
8　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト質極細砂…ベース

図 115　28- 竪穴 30　平・断面図



1　10YR3/3 暗褐　細砂混じりシルト…埋土
2　10YR3/3 暗褐　細砂混じりシルト　径２～５㎝程度の地山ブロック 5%　炭化物含む　土器片含む
3　10YR3/3 暗褐　シルト～粘土
4　10YR3/3 暗褐　シルト～粘土　地山ブロック 7%　焼土 7%
5　7.5YR2/2 黒褐　シルト～粘土　炭化物 40%　焼土 20%
6　10YR3/3 暗褐　細砂混じりシルト
7　5YR3/4 暗赤褐　細砂～シルト
8　10YR3/3 暗褐　礫混じり細砂～シルト…貼床
9　10YR3/3 暗褐　シルト　地山ブロック 3%…貼床
10　5YR4/6 赤褐　シルト　煙道の崩落土？を含む
11　10YR3/3 暗褐　細砂～シルト…煙道の崩落土
12　10YR4/3 にぶい黄褐　礫混じりシルト…ベース



595：貼床
594・596：埋土
D7：カマド煙道

図 116　28- 竪穴 30　カマド及び出土遺物実測図

埋土は暗褐礫混じり細砂と暗褐細砂混じりシルト、黒褐細砂混じりシルトである。埋土から須恵器杯身 (596)・杯蓋 (594)、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯蓋片・壺片が出土した。須恵器杯身 (596) は、当初 28- 竪穴 4 として取上げを行ったが、建物の西側埋土から出土しており、本建物に伴う遺物と考えられる。

貼床はにぶい黄褐シルト質極細砂である。貼床内から須恵器杯蓋 (595) が出土した。

カマドは北側中央に作り付けられ､煙道が延びる。カマド構築材は暗褐細砂混じりシルトである。カマド内部はやや掘窪め、底部に炭化物と焼土を含む堆積が確認できる。カマド機能面と考えられる。遺物はカマド煙道の基部から土製紡錘車 (D7) が、カマド上部構造の崩落土と考えられるカマド内部の堆積層中から微細骨片が検出されている。

周壁溝は幅約 0.12 m、深さ約 0.06m を測る。埋土は灰黄褐シルトである。

出土遺物の年代からＴＫ 43 型式併行期と判断できる。

46 －竪穴 1 (図 117)

第 46 調査区中央で検出した竪穴建物である。撹乱に切られ、調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位は不明である。検出面の標高は 36.6m である。規模は、長辺約 3.8m 以上、短辺約 1.7m 以上、深さ約 0.25m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (ＳＰ 1) を検出した。

埋土は暗褐細砂混じりシルトである。

貼床は黒褐中粒砂～細砂と暗褐細礫混じり中粒砂である。

カマドは竪穴建物北側で煙道部分と、カマド構築材の一部を確認した。カマド構築材は褐シルトである。平面的に焼土や炭層が確認できたことから、この範囲にカマドが構築されていたものと推定できる。

周壁溝は幅約 0.15 m、深さ約 0.04m を測る。

ＳＰ 1 は調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。直径約 0.73 m、深さ約 0.35m を測る。断面形状はＵ字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂混じりシルト、掘方が暗褐中粒砂～細砂と黒褐中粒砂～細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

46 －竪穴 5 (図 117)

第 46 調査区東側で検出した竪穴建物である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ -39° - W、検出面の標高は 36.6m である。規模は、長辺約 3.4m 以上、短辺約 2.4m 以上、深さ約 0.10m を測る。

埋土の掘削後、貼床直上で遺構の検出を行い、周壁溝とピット (ＳＰ７・８) を検出した。

埋土は黒褐シルト混じり細砂である。埋土から須恵器杯身片が出土した。

貼床は灰黄褐シルト混じり細砂である。

周壁溝はＳＰ８に切られる。幅約 0.10 m、深さ約 0.08m を測る。埋土は灰黄褐細砂である。

ＳＰ７は楕円形を呈し、長径約 0.25 m、短径約 0.21 m、深さ約 0.16m を測る。断面形状はＵ字形である。柱痕が確認でき､埋土は柱痕が黒褐シルト、掘方が地山ブロック土を含む黒褐シルトである。ＳＰ８は楕円形を呈し、長径約 0.41 m、短径約 0.22 m、深さ約 0.12m を測る。断面形状は椀状である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘方が暗褐シルトである。

出土遺物が埋土から出土した須恵器杯身片のみで、時期を判断する資料となり得なかった。

36 －竪穴 12(図 118)

第 36 調査区西側で検出した竪穴建物である。36- ＳＤ 11 に切られ、調査区外へ広がるため、全体の形状は不明であるが、方形を呈すると考えられる。主軸方位Ｎ -5° - W、検出面の標高は 37.1m である。規模は、長辺約 5.30m、短辺約 3.5m 以上、深さ約 0.30m を測る。

埋土の掘削後、貼床直上で遺構の検出を行い、周壁溝と支柱穴 (ＳＰ１・２) を検出した。

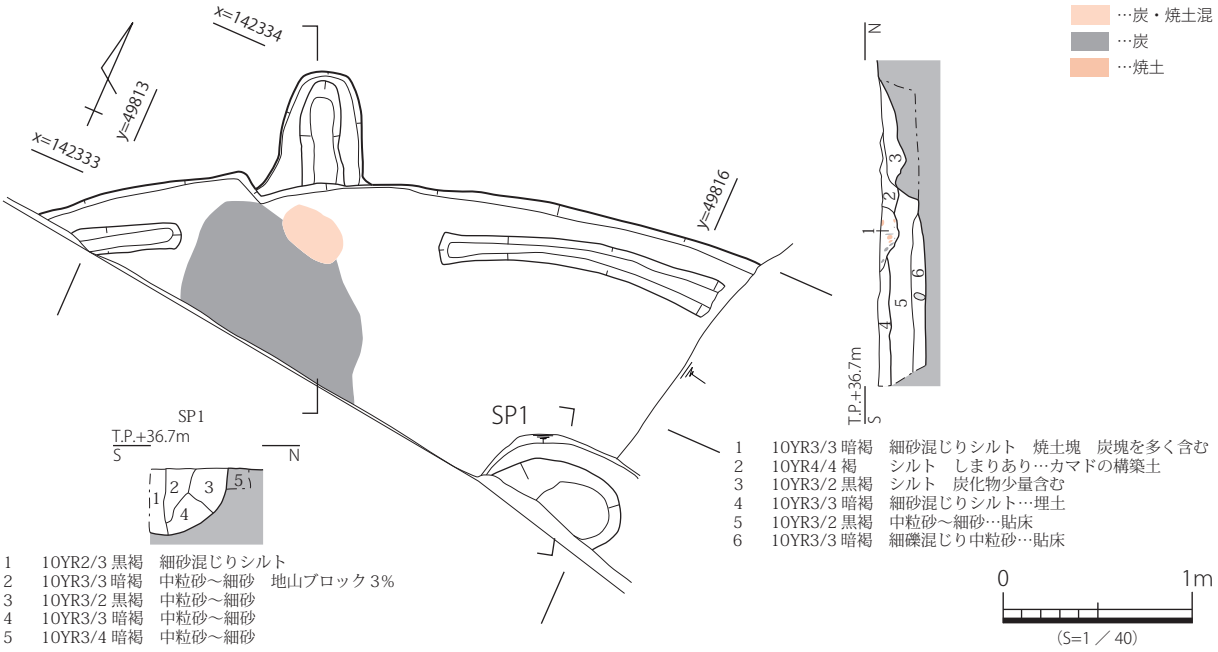
埋土はにぶい黄橙細砂混じりシルトと褐細砂混じりシルトである。遺物は須恵器片と土師器片が出土している。

貼床は暗褐細砂混じりシルト～微細砂である。

周壁溝は幅約 0.19 m、深さ約 0.14m を測る。埋土はにぶい黄褐シルト混じり細砂である。

支柱穴は東側の２基が確認でき、ＳＰ１は円形を呈し、直径約 0.49 m、深さ約 0.30m を測る。断面形状はＵ字形である。埋土は上層がにぶい黄褐細砂混じりシルト、下層がにぶい黄褐シルト混じり細砂である。ＳＰ２は円形を呈し、直径約 0.45 m、深

46- 竪穴 1



46- 竪穴 5

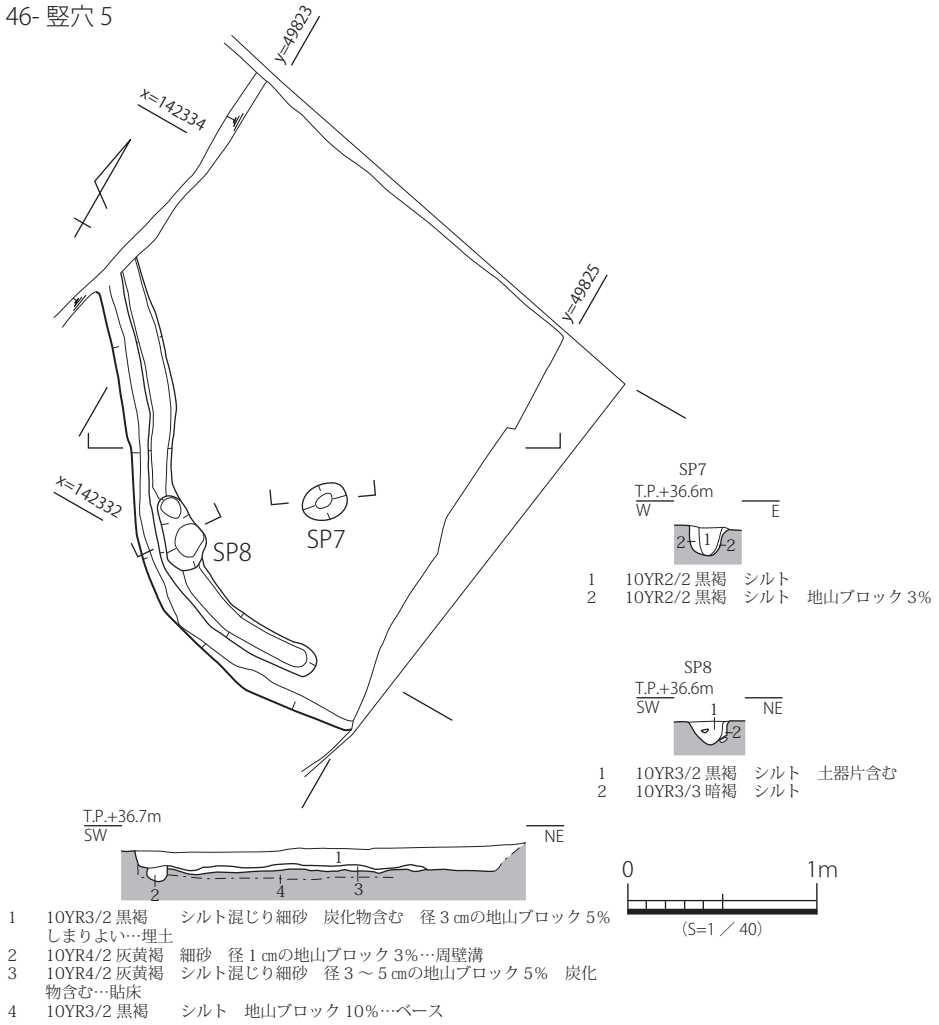
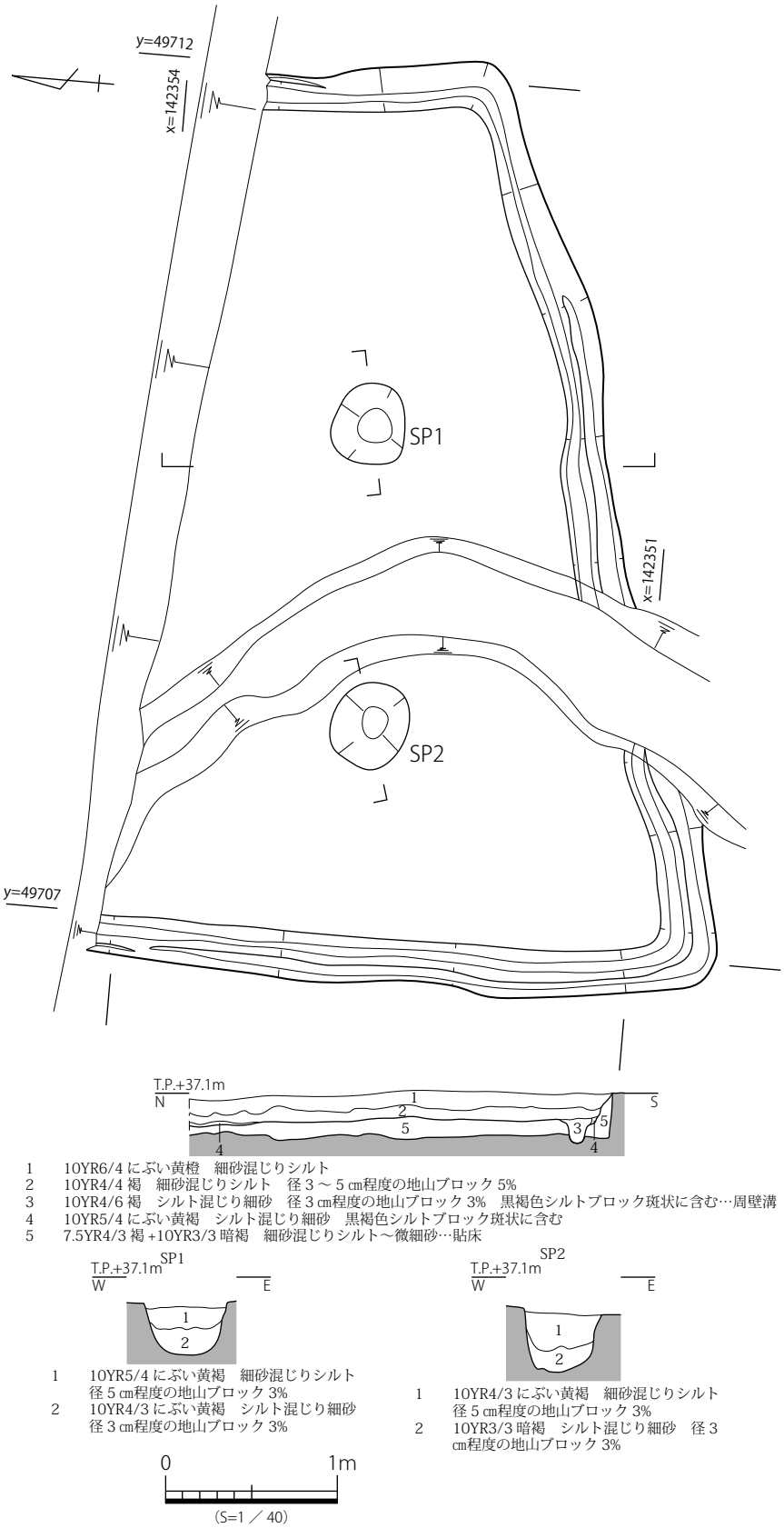


図 117　46- 竪穴 1・46- 竪穴 5　平・断面図



1　10YR6/4 にぶい黄橙　細砂混じりシルト
2　10YR4/4 褐　細砂混じりシルト　径 3 ～ 5 ㎝程度の地山ブロック 5%
3　10YR4/6 褐　シルト混じり細砂　径 3 ㎝程度の地山ブロック 3%　黒褐色シルトブロック斑状に含む…周壁溝
4　10YR5/4 にぶい黄褐　シルト混じり細砂　黒褐色シルトブロック斑状に含む
5　7.5YR4/3 褐 +10YR3/3 暗褐　細砂混じりシルト～微細砂…貼床

1　10YR5/4 にぶい黄褐　細砂混じりシルト
径 5 ㎝程度の地山ブロック 3%
2　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト混じり細砂
径 3 ㎝程度の地山ブロック 3%

1　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂混じりシルト
径 5 ㎝程度の地山ブロック 3%
2　10YR3/3 暗褐　シルト混じり細砂　径 3 ㎝程度の地山ブロック 3%

図 118　36- 竪穴 12　平・断面図

さ約 0.37m を測る。断面形状はＵ字形である。埋土は上層がにぶい黄褐細砂混じりシルト、下層が暗褐シルト混じり細砂である。

出土遺物が小片のため、時期は不明である。

29 －竪穴 50(図 119)

第 29 調査区西側で検出した竪穴建物と考えられる遺構である。調査区外に広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ -27°- W、検出面の標高は 36.9m である。規模は、長辺約 4.2m 以上、短辺約 3.0m 以上、深さ約 0.16m を測る。

検出面周辺は、噴礫の影響によると考えられる礫層の浮き上がりが確認できた。竪穴建物が撹乱されている可能性が考えられる。

埋土は暗褐シルト質極細砂である。埋土から土師器甕 (597) が出土した。

出土遺物から古墳時代中期後半～後期前葉と考えられる。

41 －竪穴 2(図 120)

第 41 調査区北西で検出した竪穴建物と考えられる遺構である。41- ＳＤ２に切られ、調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位推定Ｎ -34°- Ｅ、検出した標高は 36.15m である。規模は、長辺 6.3m 以上、短辺 3.5m 以上、深さ 0.20m を検出した。

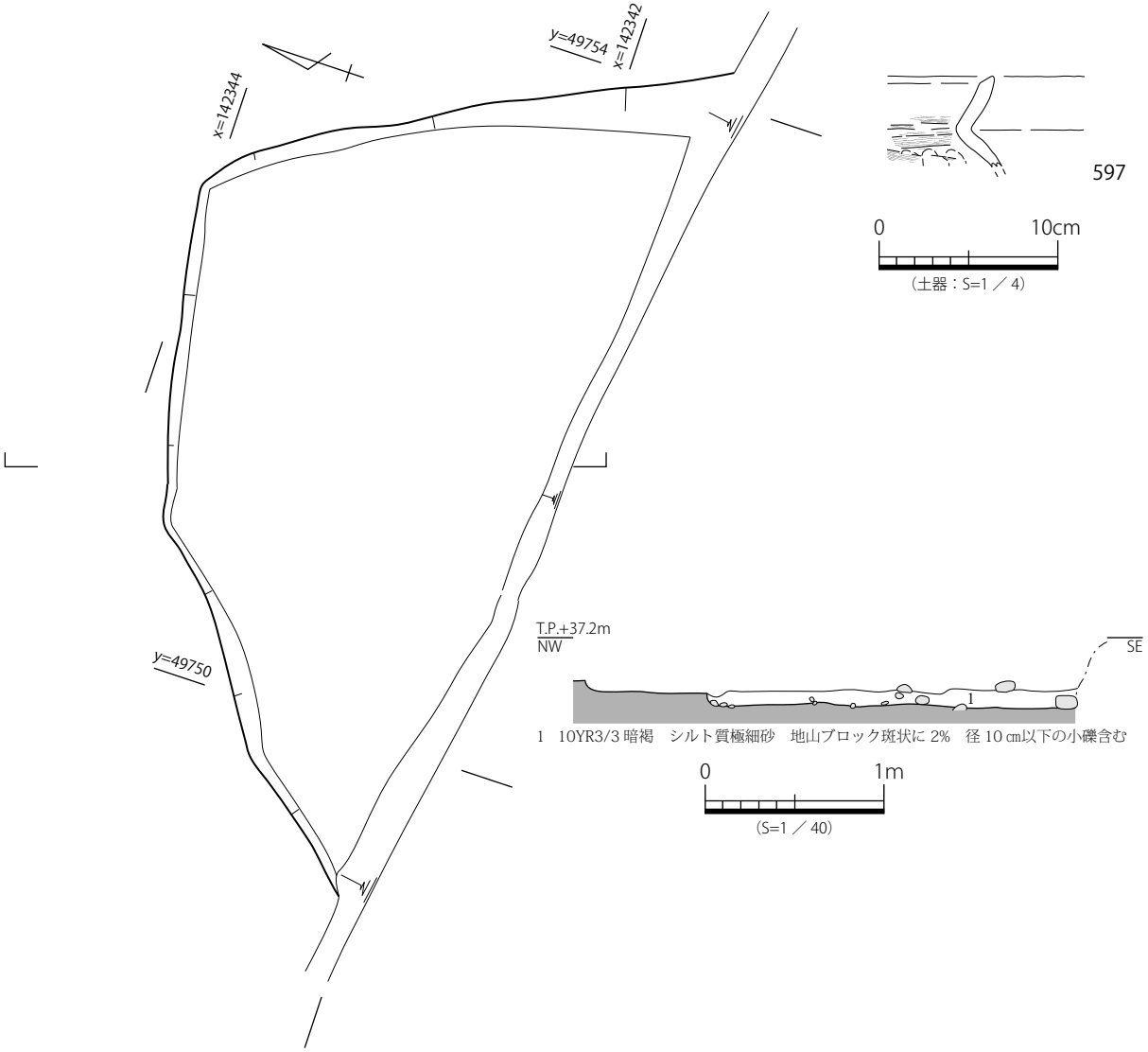


図 119　29- 竪穴 50　平・断面図及び出土遺物実測図

後世の削平によって検出段階で、一部で貼床面が確認でき、ピット（ＳＰ１～３）を検出した。

埋土は黒褐粗砂混じり細砂～シルトである。遺物は須恵器高杯 (598)、土師器甑把手が出土した。

貼床は灰黄褐粗砂混じりシルトと暗褐粗砂混じり細砂～シルトである。

ＳＰ１は楕円形を呈し、長径約 0.68 m、短径約 0.4 m、深さ約 0.10m を測る。断面形状は皿状である。埋土は灰黄褐粗砂混じりシルトである。ＳＰ２は楕円形を呈し、長径約 0.73 m、短径約 0.53 m、深さ約 0.41m を測る。断面形状はＵ字形である。埋土は上層が黒褐粗砂混じり細砂～シルト、下層が黒褐細砂～シルトである。ＳＰ３は調査区外へと展開するため、全体の形状は不明である。直径約

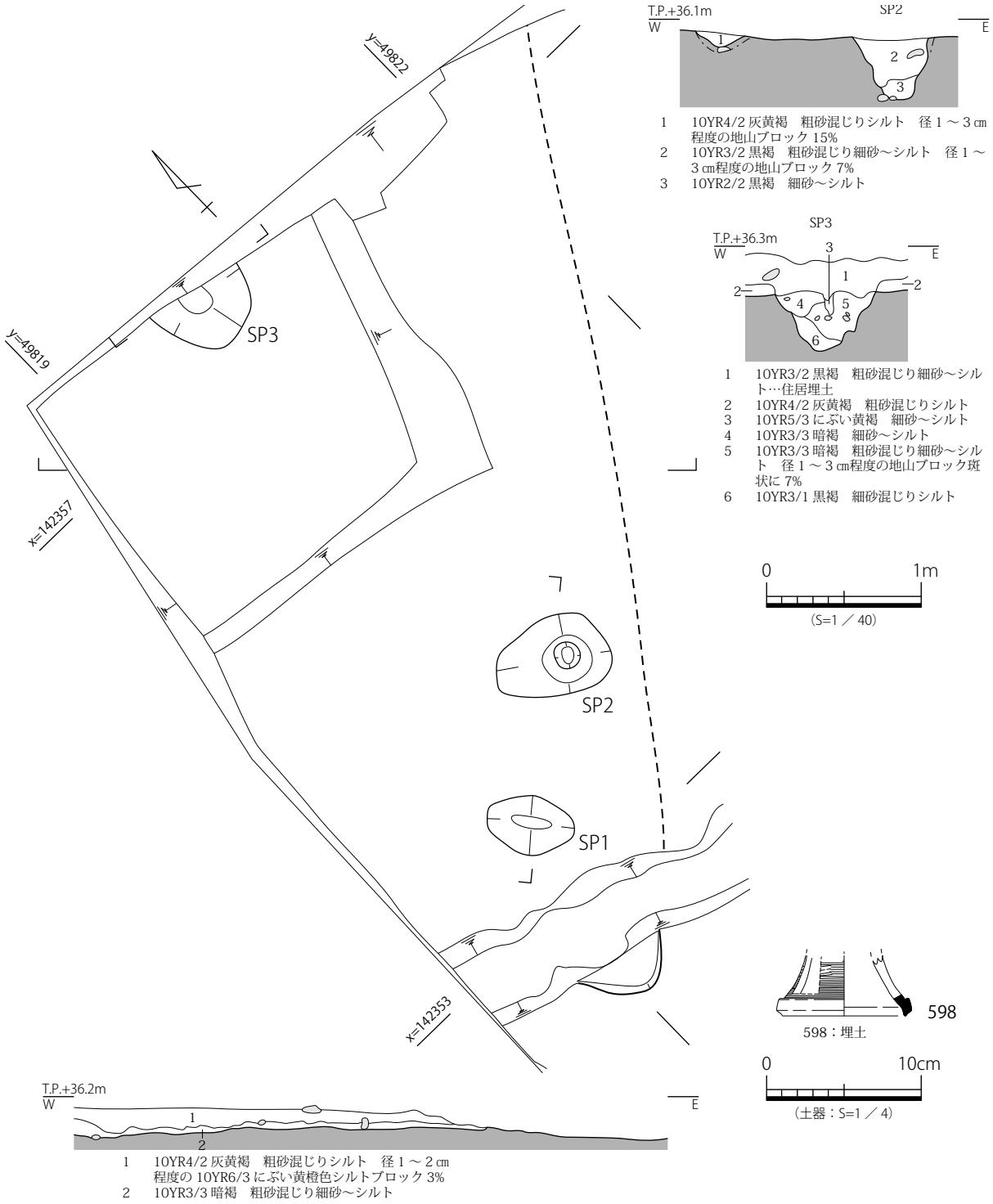


図 120　41- 竪穴 2　平・断面図及び出土遺物実測図

0.66 m、深さ約 0.39m を測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が暗褐細砂～シルトと暗褐粗砂混じり細砂～シルト、下層が黒褐細砂混じりシルトである。

出土遺物の年代からＴＫ 23 ～ＴＫ 47 型式併行期と判断できる。

29 －竪穴 45(図 121)

第 29 調査区中央で検出した竪穴建物と考えられる遺構である。29- 竪穴 80 と 29- ＳＤ 10 と撹乱に切られ、調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。検出面の標高は 36.7m である。

遺物は床面直上から須恵器杯蓋 (601・603・605)・杯身 (599・600・602・604)・有蓋高杯 (606) が出土した。埋土から須恵器杯身 (607・

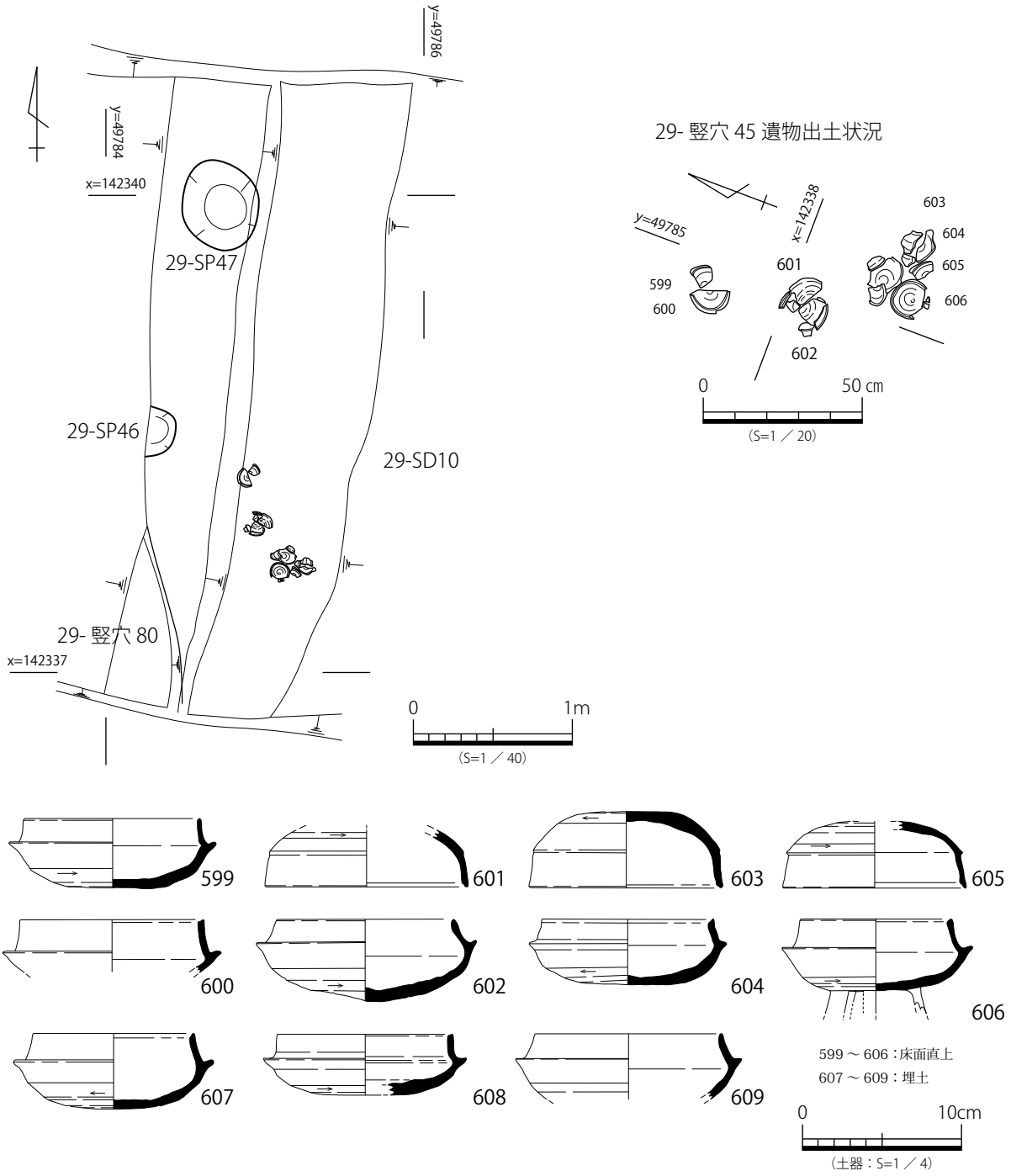


図 121　29- 竪穴 45　平面図及び出土遺物実測図

608・609) が出土した。

出土遺物からＴＫ 47 型式併行期と判断できる。

41 －竪穴 4 (図 122)

第 41 調査区南西側で検出した竪穴建物と考えられる遺構である。41- ＳＤ 1 に切られ、調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ -8° - W、検出面の標高は 36.45m である。規模は、長辺約 4.9m 以上、短辺約 1.4m 以上、深さ約 0.20m を測る。

埋土の掘削後、貼床直上で遺構の検出を行ったが、竪穴建物に附属する遺構は確認できなかった。

埋土は暗褐シルト質極細砂とにぶい黄褐極細砂混じり粘土、暗褐シルト質極細砂である。遺物は須恵器片・土師器片が出土した。

貼床は黒褐礫混じり中粒砂である。

出土遺物が小片のため、時期は不明である。

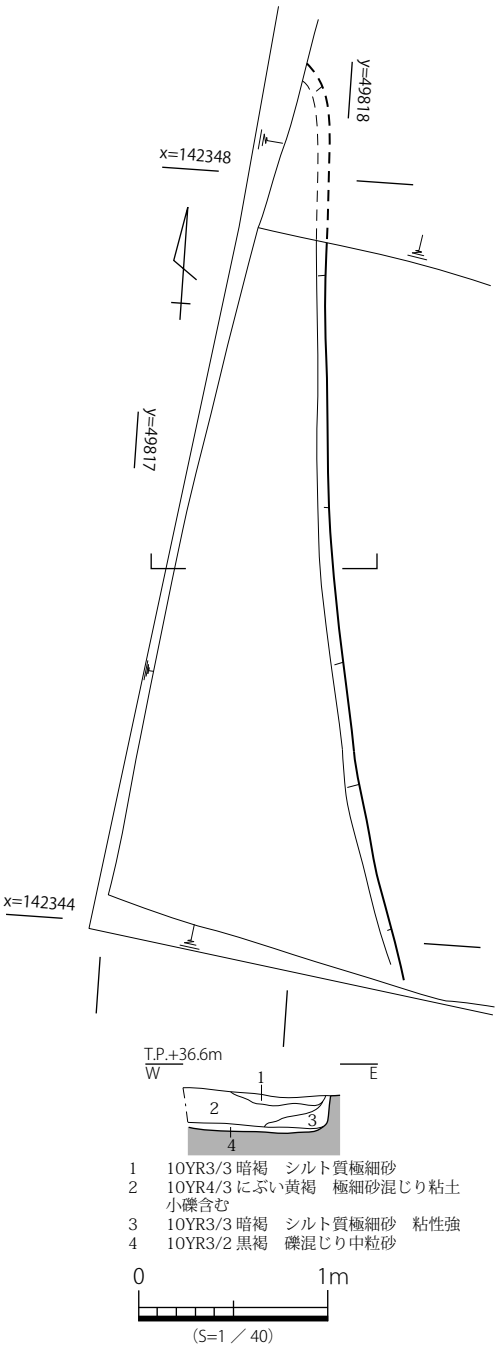


図 122　41- 竪穴 4　平・断面図

（２）　ＳＤ

30 －ＳＤ７・32 －ＳＤ21(図 123 ～ 124)

第 30 と第 32 調査区にまたがって検出した溝である。やや湾曲して主軸方位Ｎ -78°- Ｅで調査区外へ延びる。検出面の標高は 38.6 ～ 38.7m である。長さ約 11.64m を検出し、幅約 0.30 ～ 1.50m、深さは 0.25m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で、a 断面で黒褐細砂～シルト、b 断面で黒褐粗砂混じり中粒砂～シルトである。

遺物は須恵器甕 (610) が出土した。口縁部の残りがよく、体部は細かく破砕して廃棄されている。

出土遺物の年代からＴＫ 208 型式併行期と判断できる。

30 －ＳＤ 2(図 125)

第 30 調査区の中央で検出した溝である。やや湾曲して主軸方位 N-90°-W から N-57°-E で調査区外へ延びる。検出面の標高は 37.5m である。長さ約 6.70m を検出し、幅約 1.10 ～ 1.80m、深さは 0.15m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で暗灰黄シルト混じり細砂である。

遺物は須恵器杯身片・高杯片が出土したが、細片のため、詳細な時期は不明である。

30 －ＳＤ 6(図 125)

第 30 調査区の南東で検出した溝である。直線的に主軸方位 N-0°-W で調査区外へ延びる。検出面の標高は 37.55m である。長さ約 3.70m を検出し、幅約 0.60m、深さは 0.15m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が暗灰黄細砂～中粒砂、下層が暗灰黄シルト混じり細砂～中粒砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

29 －ＳＤ 35(図 126)

第 29 調査区の東側で検出した溝である。東西にやや蛇行して主軸方位 N-80°-W で調査区外へ延びる。29- ＳＫ 18 に切られる。検出面の標高は 36.65m である。長さ約 3.80m を検出し、幅約 0.40m、深さ約 0.06m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で褐シルト質極細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

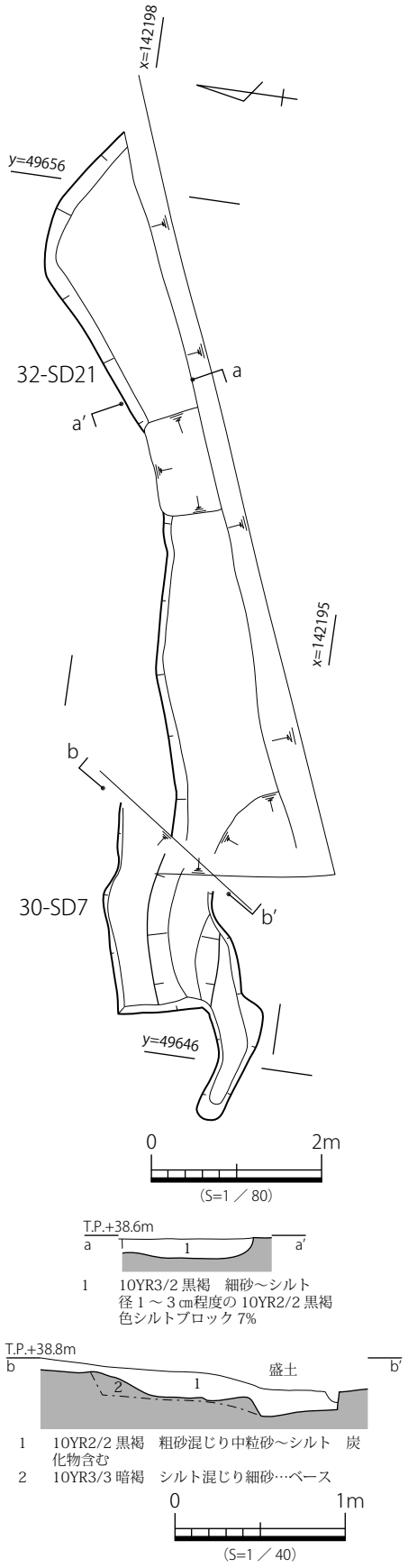


図 123　30-SD7・32-SD21　平・断面図

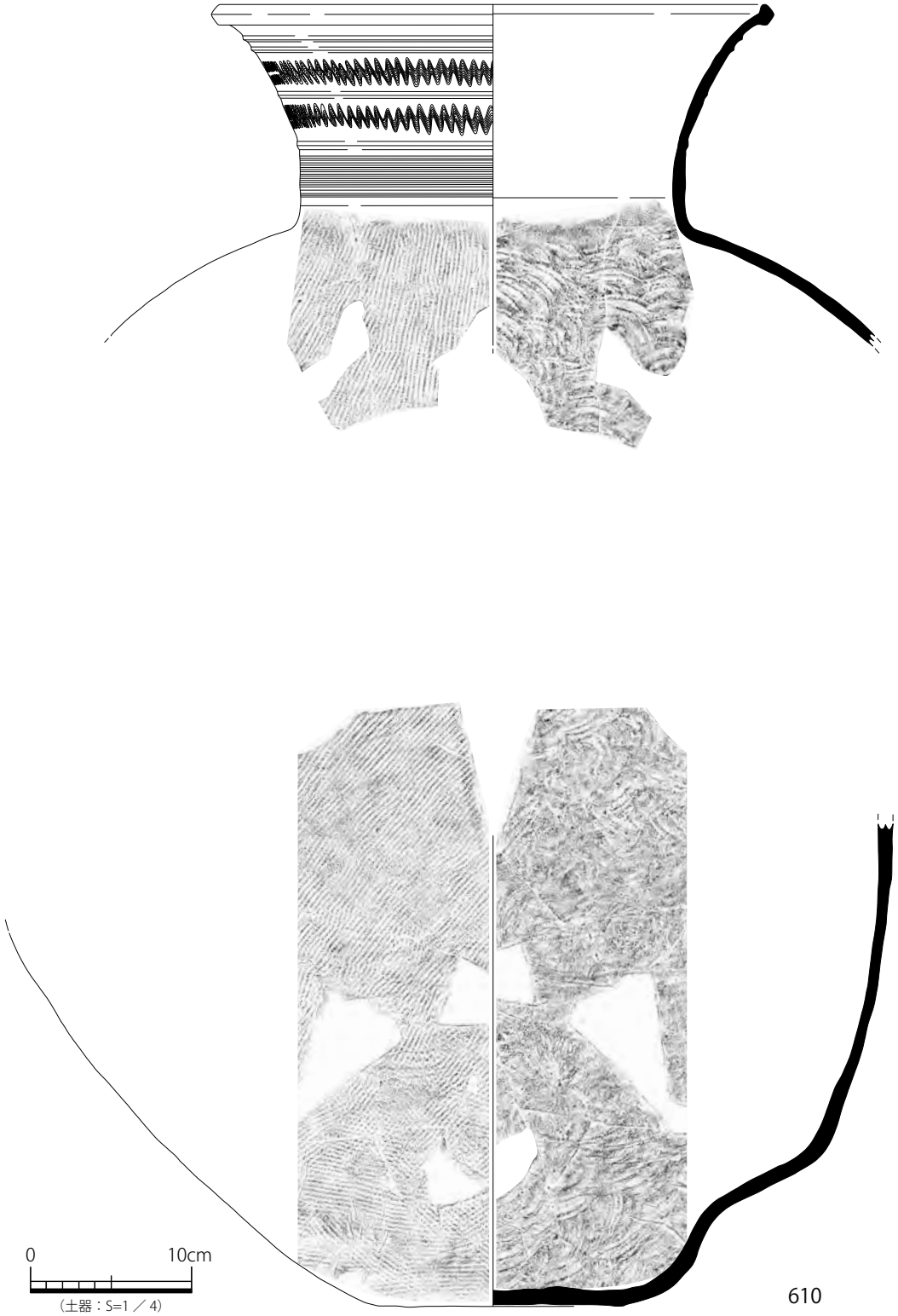


図 124　30-SD7　出土遺物実測図

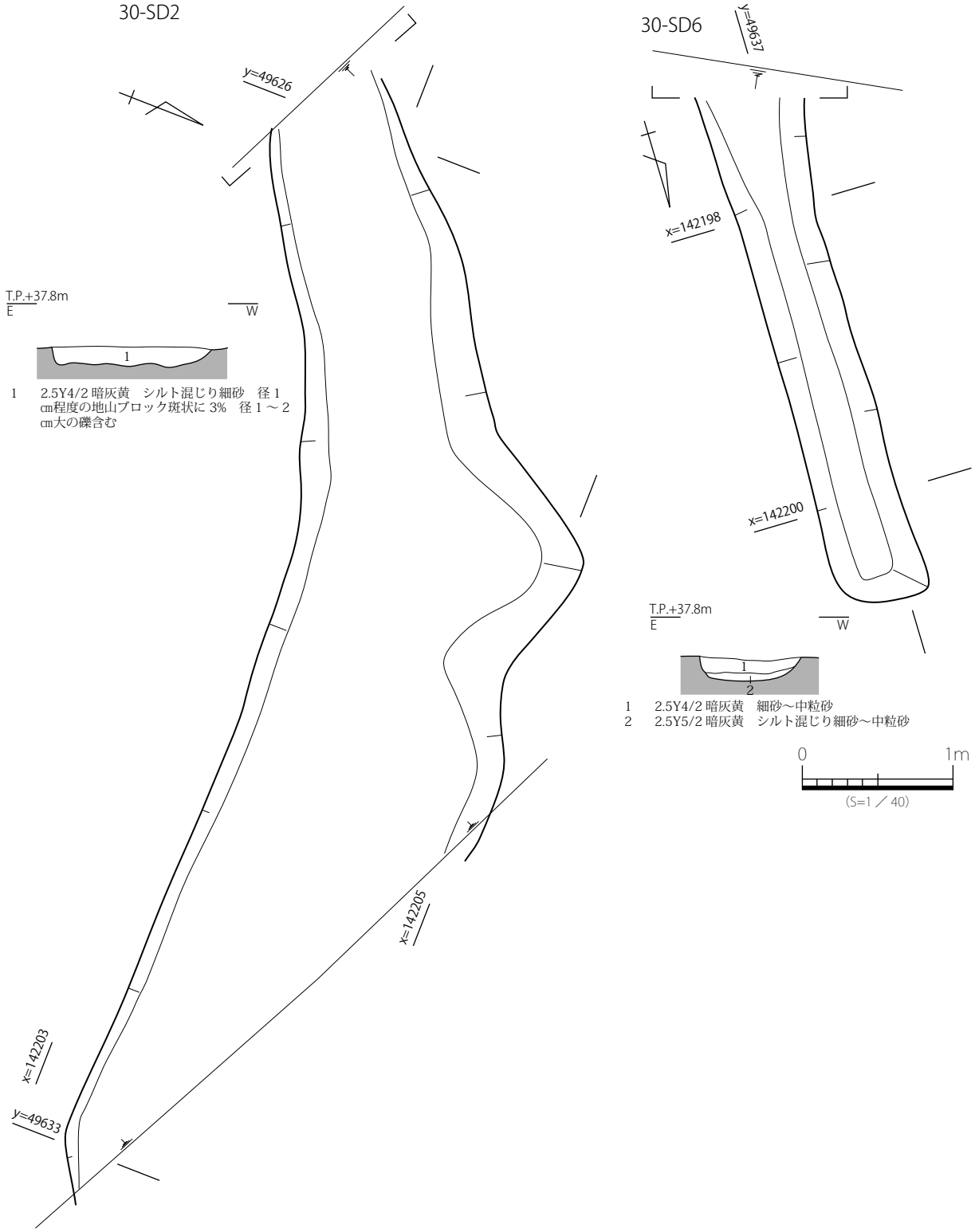


図 125　30-SD2・6　平・断面図

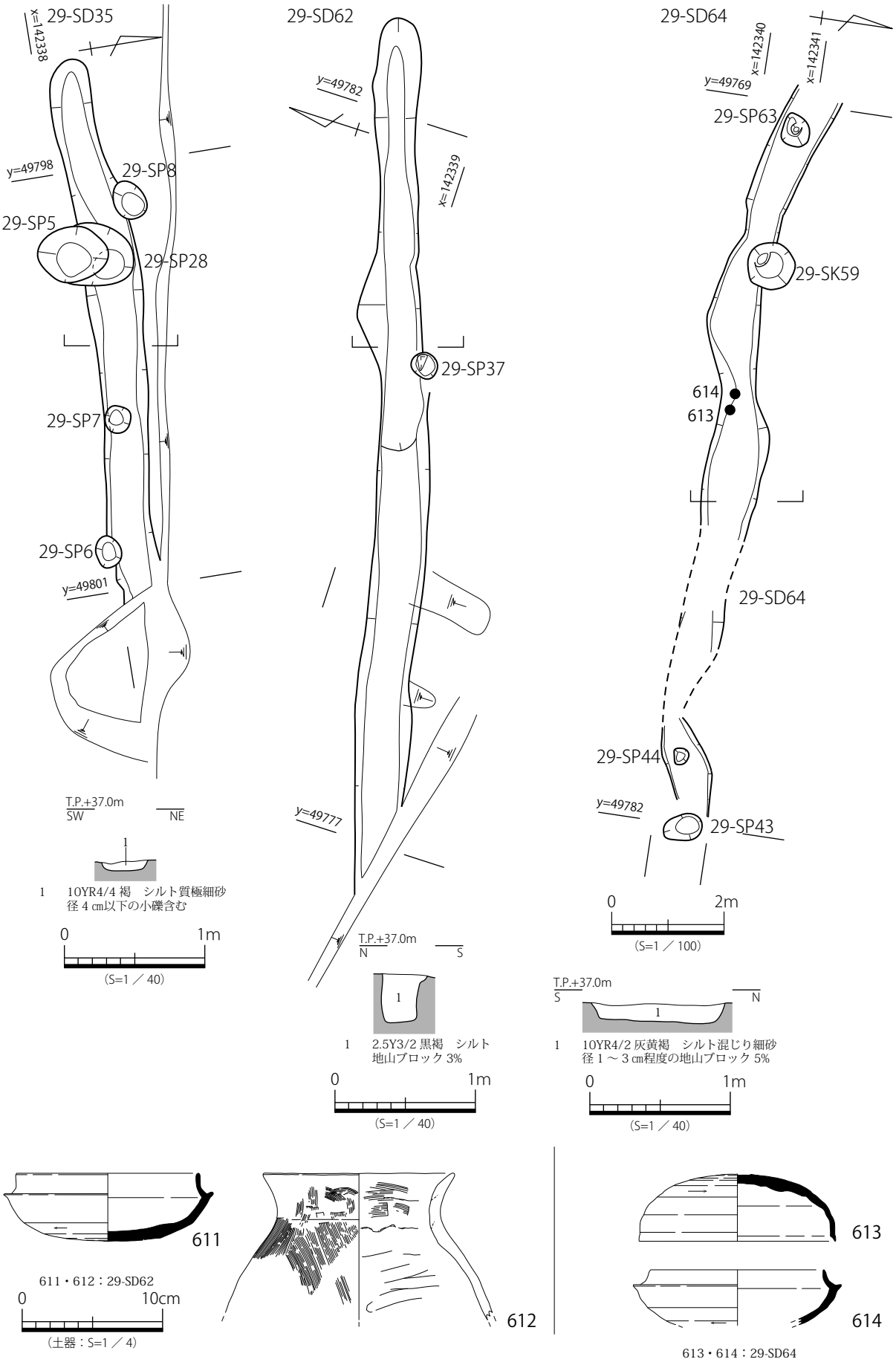


図 126　29-SD35・62・64　平・断面図及び出土遺物実測図

29 － ＳＤ 62(図 126)

第 29 調査区の中央で検出した溝である。直線的に主軸方位 N-70° -E で東西方向に調査区外へ延びる。29- ＳＰ 37 に切られる。検出面の標高は 36.8m である。長さ約 6.0m を検出し、幅約 0.40m、深さ約 0.30m を測る。断面形状は方形である。

埋土は単層で、黒褐シルトである。

遺物は埋土から須恵器杯身 (611) と土師器甕 (612) が出土した。図示した遺物の他に、須恵器蓋のつまみ片、サヌカイト剥片が出土した。

出土遺物からＴＫ 10 型式併行期頃と判断できる。

29 － ＳＤ 64(図 126)

第 29 調査区の中央で検出した溝である。蛇行して主軸方位 N-79° -W から N-84° -E である。29- ＳＫ 59 に切られる。検出面の標高は 36.9m である。長さ約 13.0m を検出し、幅約 0.90m、深さ約 0.10m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、灰黄褐シルト混じり細砂である。

遺物は埋土から須恵器杯蓋 (613)・杯身 (614) がまとまって出土した。図示した遺物の他に、須恵器杯蓋片・高杯片が出土した。

出土遺物からＭＴ 85 型式併行期と判断できる。

29 － ＳＤ 10(図 127)

第 29 調査区の中央で検出した南北方向の溝である。直線的に主軸方位 N-9° -E で調査区外へ延びる。検出面の標高は 36.8m である。長さ約 4.30m を検出し、幅約 2.20m、深さ約 1.10m を測る。断面形状は二段Ｖ字形である。

埋土は上層がオリーブ褐細礫混じりシルト、中層が黄褐シルト混じり粘土とオリーブ褐細礫混じりシルトである。下層が暗灰黄細砂混じり粘土と黒褐シルト混じり粘質土、オリーブ褐細砂～極細砂と暗灰黄中礫混じり粘土、オリーブ褐細砂～極細砂と暗オリーブ褐細砂、灰黄褐細砂である。ラミナ層と粘性土の交互堆積が確認でき、流水と滞水があったことが窺える。

埋土から須恵器杯 (615)・皿 (616) が出土した。図示した遺物の他に、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯蓋片・壺片、土師器高杯片・杯片、黒色土器Ａ類片、石英塊が出土した。

出土遺物から９世紀頃と判断できる。

31 － ＳＤ 1(図 127)

第31調査区の北で検出した東西方向の溝である。直線的に主軸方位 N-85° -W で調査区外へ延びる。検出面の標高は 37.6m である。長さ約 18.2m を検出し、幅約 0.60m、深さ約 0.10m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で暗灰黄細砂～中粒砂である。

遺物は須恵器杯底部 (617) が出土した。

出土遺物から古代と判断できる。

32 － ＳＤ 20(図 128 ～ 129)

第 32 調査区の東側で検出した南北方向の溝である。直線的に主軸方位 N-3° -W で調査区外へ延びる。検出面の標高は 38.45m である。長さ約 3.90m を検出し、幅約 3.40m、深さ約 0.80m を測る。断面形状は逆台形にテラスである。第９調査区で検出した９- ＳＤ 205 の続きである。

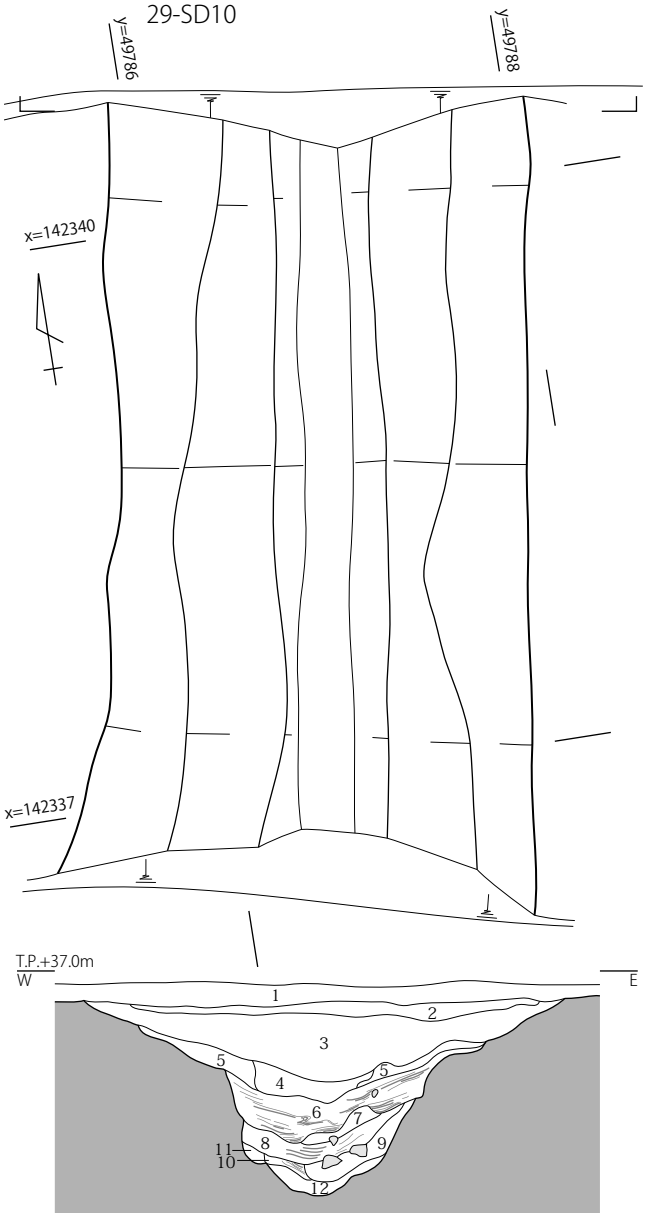
埋土は上層が暗灰黄シルト混じり細砂と暗灰黄シルト混じり細砂、暗灰黄細砂、暗灰黄シルト混じり細砂、暗灰黄細砂で、人為的な埋め戻し土と考えられる。下層が黄灰シルト混じり細砂～中粒砂と黒褐中粒砂、暗灰黄微細砂、黒褐シルト混じり中粒砂、黒褐微細砂～細砂、オリーブ褐シルト混じり細砂、黒褐シルト混じり細砂～中粒砂、黒褐シルト～微細砂で、人為的な埋め戻し土と考えられる。

遺物は上層より多量の遺物が出土している。須恵器杯 (621 ～ 627)・杯Ｂ (630 ～ 633)・杯蓋 (618・619・620)・蓋 (628・629)・皿 (634・635)・高杯 (636・637)・横瓶 (638)、壺 (639)、土師器杯 (640 ～ 643)・甕 (644 ～ 648)・把手 (649)、飯蛸壺 (D8)、石器 (S50) が出土した。

下層から須恵器杯身 (653)・杯蓋 (650・651・652)・蓋 (654・655)・高杯 (656・657)・鉢 (658)・把手 (659)、土師器椀 (660) が出土した。

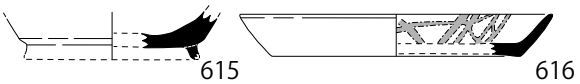
須恵器の遺存状況は比較的良好であり、完形品に復元できるものも数点ある。これらは７世紀から８世紀に所属する。下層出土遺物の中には古墳時代の杯身・杯蓋が存在するなど、やや古相を示す。図示した遺物の他に、須恵器壺片、土師器甕片・壺片・蓋片、安山岩板石、骨片、炭化物が出土した。

下層出土遺物から溝の掘削時期は、７世紀中葉～後葉、最終埋没は７世紀末葉～８世紀中葉と判断



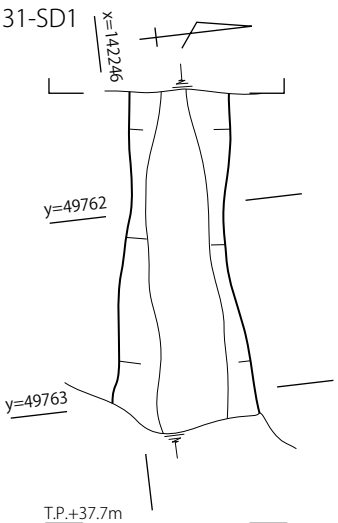
1　2.5Y4/4 オリーブ褐　シルト質極細砂　小礫混じる
2　2.5Y5/6 黄褐　シルト混じり粘土
3　2.5Y4/3 オリーブ褐　細礫混じりシルト
4　2.5Y5/4 黄褐　シルト混じり粘土
5　2.5Y4/6 オリーブ褐　細礫混じりシルト
6　2.5Y4/2 暗灰黄　細砂混じり粘土　ラミナあり
7　2.5Y3/1 黒褐　シルト混じり粘質土
8　2.5Y4/3 オリーブ褐　細砂～極細砂　ラミナあり
9　2.5Y4/2 暗灰黄　中礫混じり粘土
10　2.5Y4/3 オリーブ褐　細砂～極細砂　ラミナあり
11　2.5Y3/3 暗オリーブ褐　細砂　粘性あり
12　10YR4/2 灰黄褐　細砂　粘性あり　10YR5/1 褐灰色粘土のラミナ

0　1m
(S=1／40)



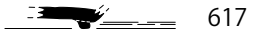
615・616：29-SD10

0　10cm
(土器：S=1／4)



1　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂～中粒砂

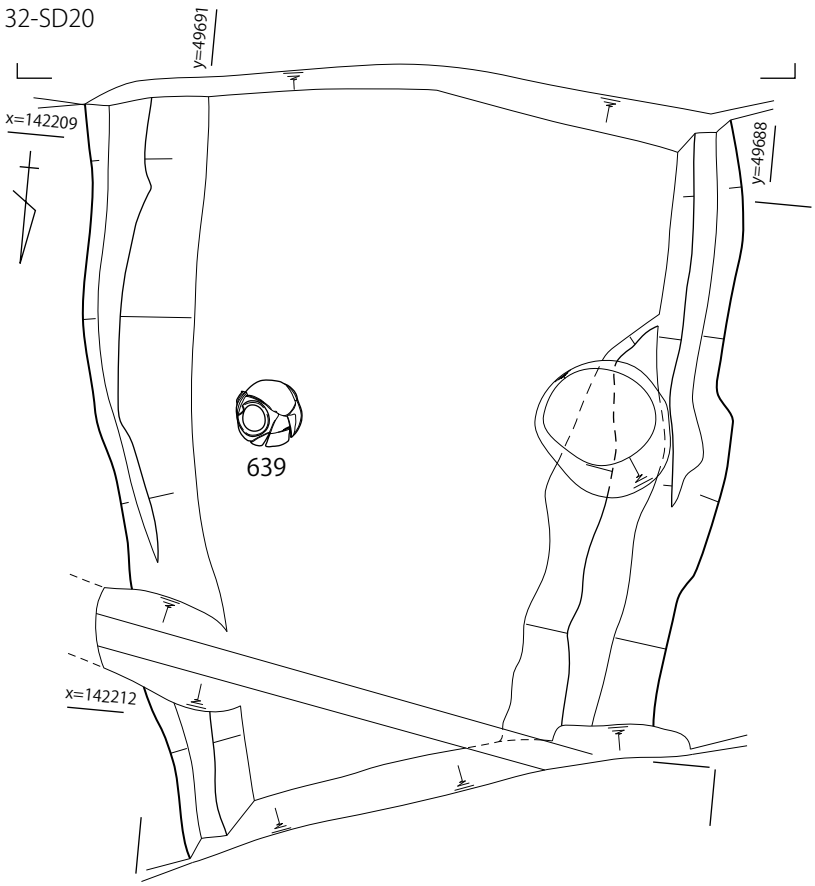
0　1m
(S=1／40)

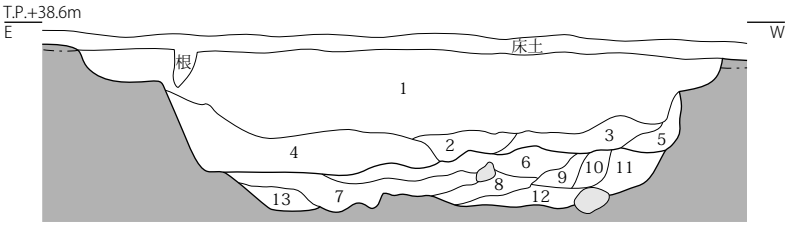


617：31-SD1

0　10cm
(土器：S=1／4)

図 127　29-SD10・31-SD1　平・断面図及び出土遺物実測図





1　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト混じり細砂　径２～３㎝大の礫含む　炭化物含む
2　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト混じり細砂　径１㎝程度の地山ブロック 1%　炭化物含む
3　2.5Y4/2 暗灰黄　細砂
4　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト混じり細砂　径３㎝程度の地山ブロック 3%　炭化物含む
5　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂　径３～５㎝程度の地山ブロック 5%
6　2.5Y4/1 黄灰　シルト混じり細砂～中粒砂　炭化物含む (ここから下層扱い)
7　2.5Y3/1 黒褐　中粒砂
8　2.5Y5/2 暗灰黄　微細砂　径１～２㎝程度の地山ブロック 5%
9　2.5Y3/1 黒褐　シルト混じり中粒砂　径２㎝程度の地山ブロック 3%
10　2.5Y3/2 黒褐　微細砂～細砂　径１～３㎝程度の地山ブロック 5%
11　2.5Y4/4 オリーブ褐　シルト混じり細砂　ほぼ地山土で構成
12　10YR3/1 黒褐　シルト混じり細砂～中粒砂　径１㎝程度の地山ブロック斑状に 5%
13　2.5Y3/2 黒褐　シルト～微細砂　径５㎝程度の地山ブロック 3%

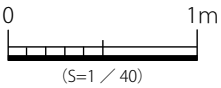


図 128　32-SD20　平・断面図

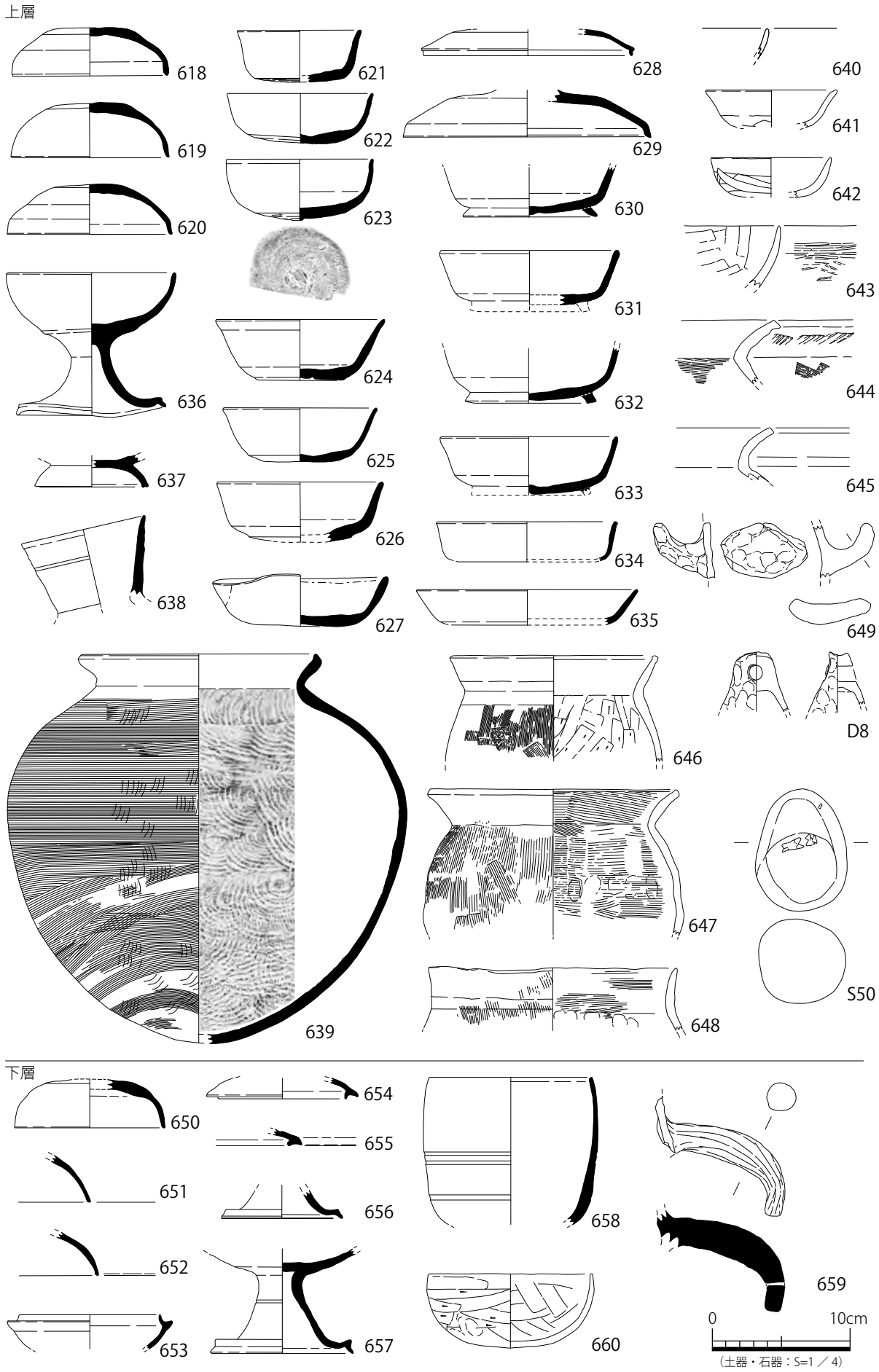


図 129　32-SD20　出土遺物実測図

できる。

36 － ＳＤ 10(図 130 ～ 131)

第 36 調査区の西側で検出した南北方向の溝である。直線的に主軸方位 N-2° -E で調査区外へ延びる。検出面の標高は 37.1m である。長さ約 4.90 mを検出し、幅約 4.00 ～ 5.30m、深さは 1.20m を測る。断面形状は逆台形にテラスである。第 9 ・32 調査区で検出した、 9 - ＳＤ 205 と 32- ＳＤ 20 と同一の溝である。

埋土は上層が灰黄細砂混じりシルトと灰黄細砂～極細砂、灰黄細砂混じり極細砂～シルト、暗灰黄極粗砂～細礫、黄褐細砂混じり粗砂～細砂である。中層が黄灰細砂混じりシルトと黄褐細砂混じりシルト、暗灰黄細砂混じりシルトである。上・中層とも、人為的な埋め戻し層と考えられる。下層が灰オリーブ微細砂と灰オリーブ細砂～中粒砂、灰オリーブ　シルト混じり細砂～中粒砂と黄灰シルト混じり微細砂、灰シルトである。ラミナが確認でき、流水による堆積があったことが窺える。

遺物は下層より須恵器杯 (661)・杯Ｂ (662)・鉢 (664)・壺 (663)・甕 (665)、土師器甕 (666) が出土した。また図示した遺物の他に、須恵器杯身片 (ＴＫ 217 型式)・高杯片、土師器椀片が出土した。

出土遺物から 7 世紀後半～ 8 世紀頃と判断できる。

33 － ＳＤ 1 (図 132 ～ 133)

第 33 調査区の中央で検出した南北方向の溝である。直線的に主軸方位 N-5° -W で調査区外へ延びる。検出面の標高は 38.05m である。長さ約 2.0 mを検出し、幅約 3.30m、深さ約 0.50m を測る。断面形状は逆台形にテラスである。

埋土は上層が褐灰細砂混じりシルトとにぶい黄粘土混じり極細砂、黄灰シルト混じり細砂、下層が黒褐シルト混じり細砂～中粒砂と暗灰黄シルト～細砂である。

遺物は上層から土師器杯 (667・669・670)・鍋 (671)・羽釜 (672)・白磁碗 (668)、平瓦 (D9)、図示した遺物の他に、須恵器壺片・黒色土器Ａ類片が出土した。

溝の埋没時期は白磁碗 (668) から 8 世紀末～ 10 世紀中頃と判断できる。

33 － ＳＤ 2 (図 132 ～ 133)

第 33 調査区の東側で検出した南北方向の溝である。直線的に主軸方位 N-17° -E で調査区外へ延びる。検出面の標高は 37.9m である。長さ約 2.8 mを検出し、幅約 4.00m、深さ約 0.40m を測る。断面形状は逆台形にテラスである。

埋土は上層が灰シルト混じり粘土と黄灰シルト、灰オリーブ極細砂、灰オリーブ極細砂～中粒砂、黄灰細砂混じりシルトである。ラミナが確認でき、流水があったことが窺える。下層が褐灰粘土混じりシルトと褐灰粘土混じりシルト～極細砂、黄灰シルト混じり細砂、黄灰細砂～細礫、黒褐シルト混じり極細砂～細砂、褐灰細砂混じりシルトである。ラミナは確認できず、溝の肩からの崩落土と考えられる。

遺物は下層から須恵器杯 (677)・高台付底部 (678)・蓋 (673 ～ 676)・横瓶 (680)・長頸壺体部 (679)、土師器杯 (681)・甕 (682・683)・鍋 (685)、移動式カマド (684) が出土した。また図示した遺

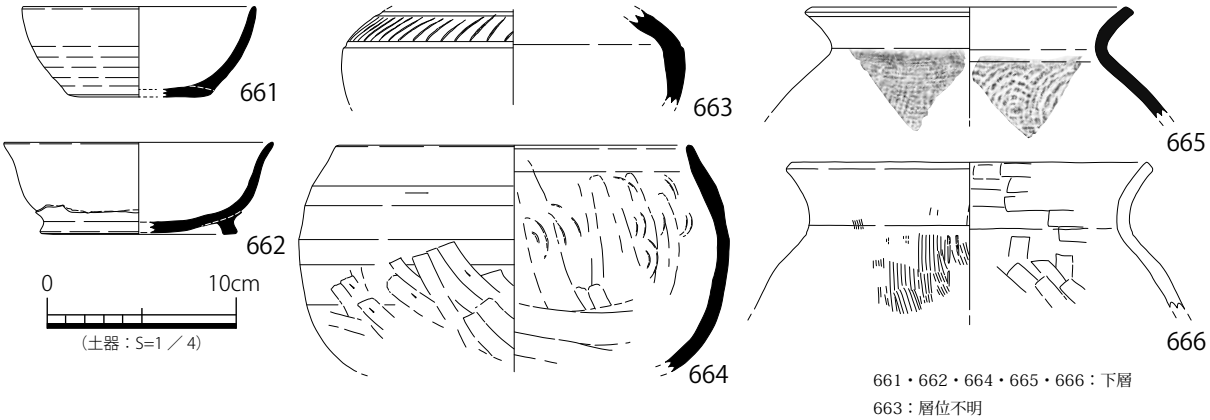
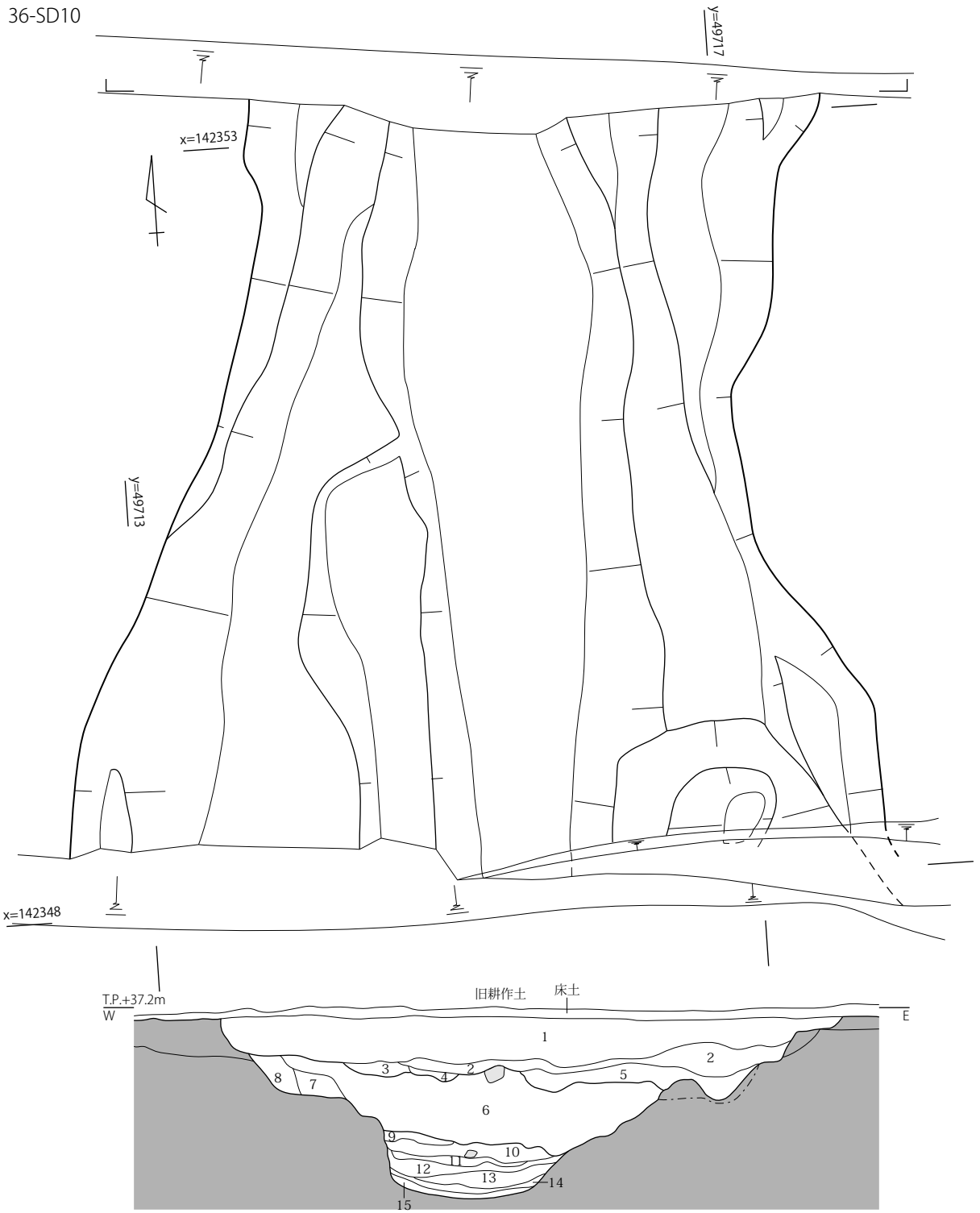


図 130　36-SD10　出土遺物実測図



1　2.5Y6/2 灰黄　細砂混じりシルト　径３～５㎝大の礫含む　径３㎝程度の地山ブロック 2%
2　2.5Y6/2 灰黄　細砂～極細砂
3　2.5Y6/2 灰黄　細砂混じり極細砂～シルト
4　2.5Y5/2 暗灰黄　極粗砂～細礫　径３㎝大の礫含む
5　2.5Y5/3 黄褐　細砂混じり粗砂～細砂　径３㎝大の礫含む
6　2.5Y4/1 黄灰　細砂混じりシルト　径３～15㎝大の礫含む…人為的埋め戻し土
7　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂混じりシルト　径５㎝程度の地山ブロック 3%
8　2.5Y5/3 黄褐　細砂混じりシルト　径３㎝程度の地山ブロック 5%
9　5Y5/2 灰オリーブ　微細砂
10　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト混じり中粒砂～粗砂
11　5Y5/2 灰オリーブ　微細砂　弱ラミナあり
12　5Y5/2 灰オリーブ　細砂～中粒砂　弱ラミナあり
13　5Y5/2 灰オリーブ　シルト混じり細砂～中粒砂　弱ラミナあり
14　2.5Y4/1 黄灰　シルト混じり微細砂　ラミナあり
15　5Y5/1 灰　シルト　ラミナあり

0　1m
(S=1／40)

図 131　36-SD10　平・断面図

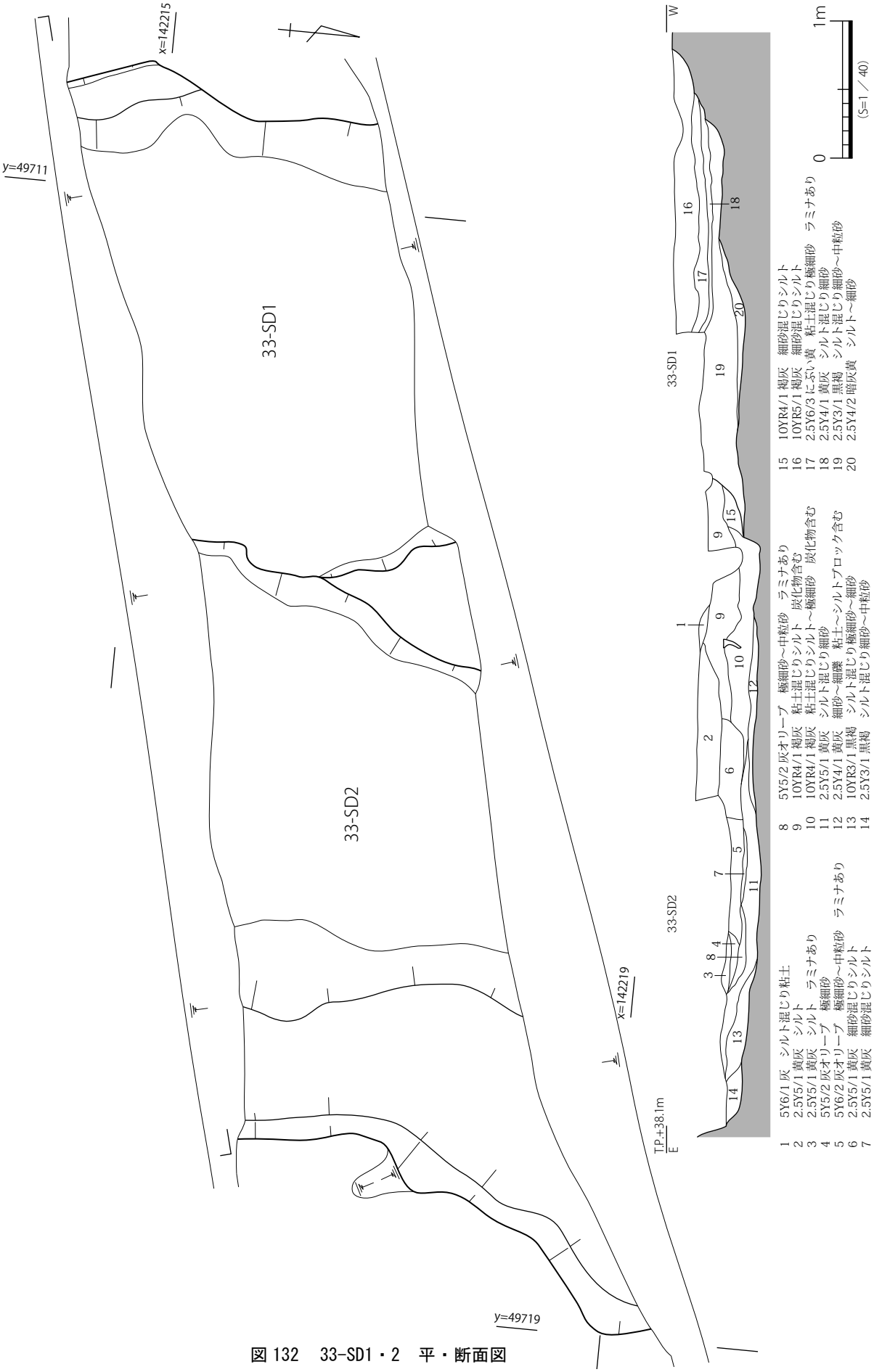
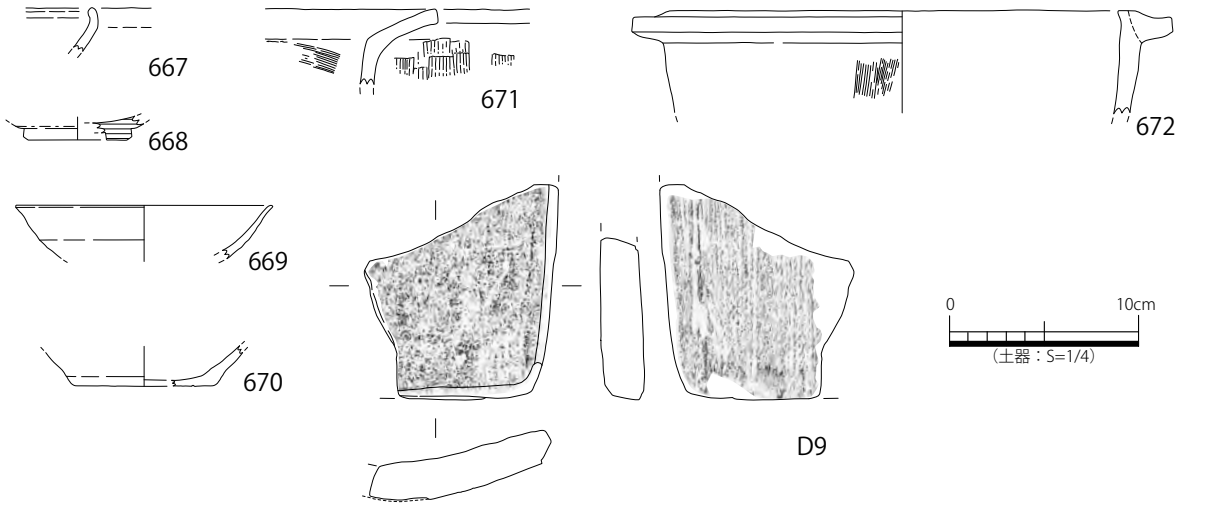


図 132　33-SD1・2　平・断面図

33-ＳＤ1 出土遺物



33-ＳＤ２出土遺物

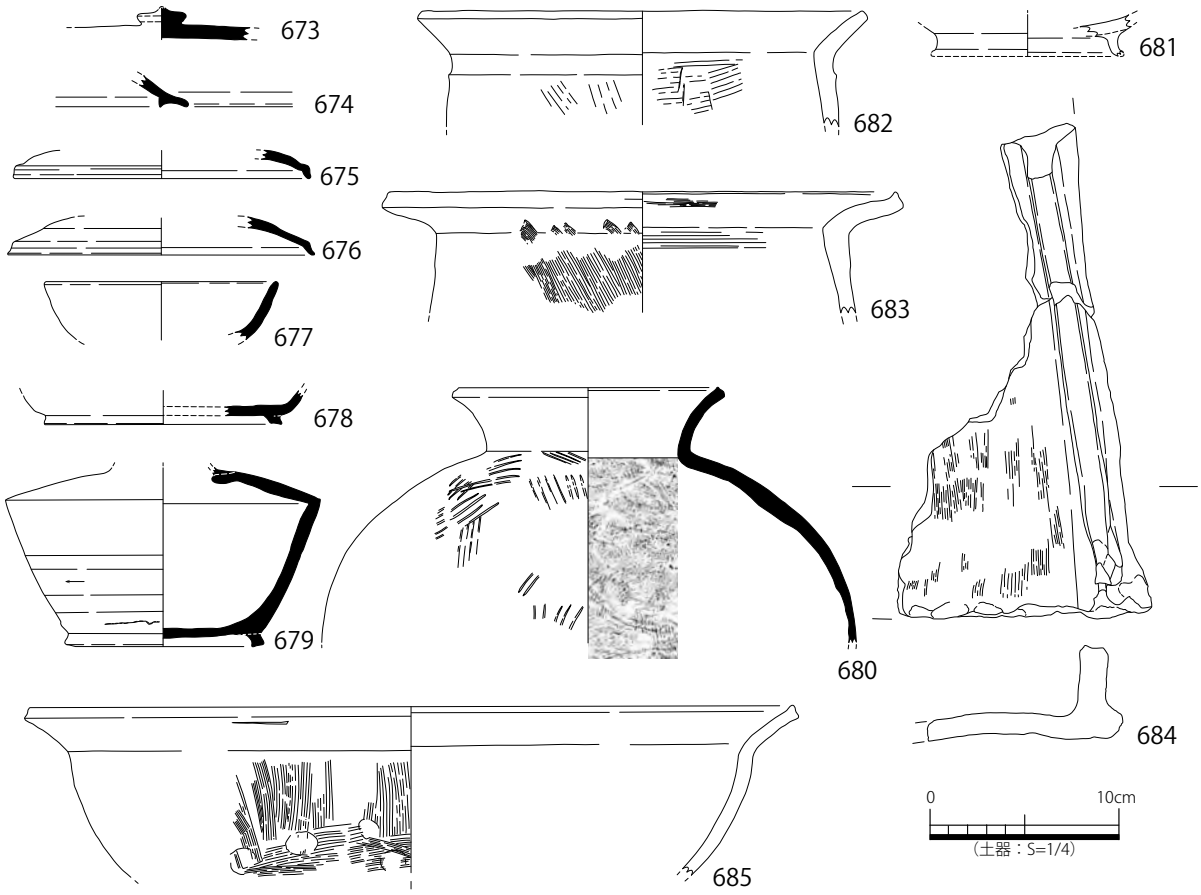


図 133　33-SD1・2　出土遺物実測図

物の他に、須恵器杯片・杯蓋片・高杯片・壺片、土器甕片・壺片が出土した。掘削時期は須恵器壺(679)・横瓶(680)、土師器鍋(685)などから、8世紀前半と判断できる。

41－ＳＤ1(図134～135)

第41調査区の中央で検出した東西方向の溝である。主軸方位N-80°-Wで直線的に延びる。調査区外へ延び14-ＳＤ39･39-ＳＤ1と同一の溝である。東側半分は、撹乱に切られ溝底のみ検出した。北側の溝の肩も圃場整備の際の造成で滅失している。検出面の標高は36.55mである。長さ約9.90 mを検出し、幅約3.80m、深さは1.10mを測る。断面形状はＶ字形にテラスである。

埋土は上層が灰黄中粒砂～細砂と暗灰黄中粒砂～細砂、暗灰黄粗砂混じり細砂で、人為的な埋め戻し土と考えられる。中層が暗灰黄小礫混じり細砂と暗灰黄小礫～中礫混じり細砂、黄灰粘質中粒砂～細砂とオリーブ褐中粒砂～細砂で、溝の肩からの崩落土と流水堆積層である。下層は黄灰粘土～細砂とオリーブ褐粘土～細砂で、ラミナ構造をもつことから、流水堆積と考えられる。

遺物は上層から大量に出土した。青磁蓮弁文碗(687)、十瓶山産須恵器杯(688)・東播系片口鉢(692・693)、土師器鍋(691)、製塩土器(686)、土師器足釜(690)が出土した。また図示した遺物の他に、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片・杯Ｂ片、土師器甑片・鍋片・皿片が出土した。

青磁片(687)や東播系須恵器鉢(692・693)などから、本溝の埋没時期は13世紀後半～14世紀前半と判断できる。

39－ＳＤ1(図136)

第39調査区の北側で検出した東西方向の溝である。主軸方位N-77°-Wで直線的に延びる。前述した14-ＳＤ39・41-ＳＤ1と同一の溝である。検出面の標高は36.4mである。長さ約1.70 mを検出し、幅約2.7m以上、深さ約0.90mを測る。断面形状はＶ字形にテラスである。

埋土は最上層がにぶい黄褐細砂混じりシルト、上層がにぶい黄橙細砂と灰黄褐シルト、にぶい黄褐細砂混じりシルト、にぶい黄橙細砂である。最上層と上層共に人為的な埋め戻し土と考えられる。中層は灰黄褐シルト、にぶい黄褐細砂～中粒砂とにぶい黄褐細砂～中粒砂、にぶい黄褐細砂と灰黄褐礫混じり細砂と黄褐シルト混じり細砂、にぶい黄褐シルトである。溝の肩からの崩落土と流水堆積層である。下層は黄褐シルトでラミナ構造が確認できた。流水堆積層と考えられる。

遺物は土師器皿(694)・杯(695～700)、十瓶山産須恵器杯(701・702)、土師器羽釜(703・704・705)が出土した。また図示した遺物の他に、須恵

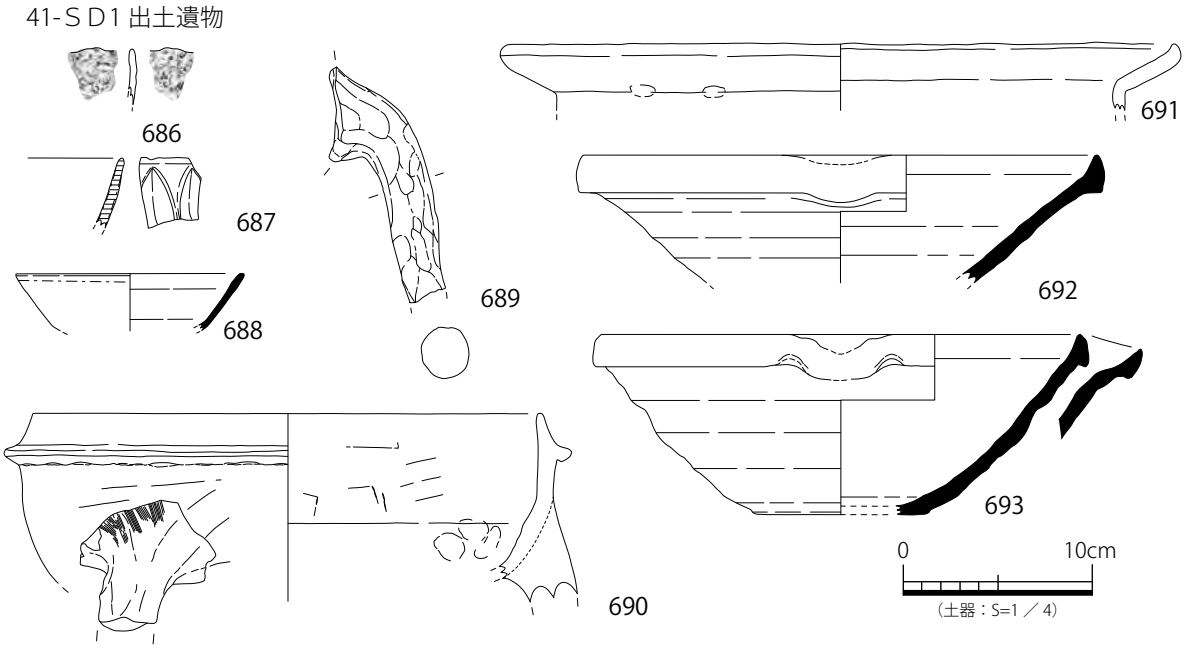


図134　41-SD1　出土遺物実測図

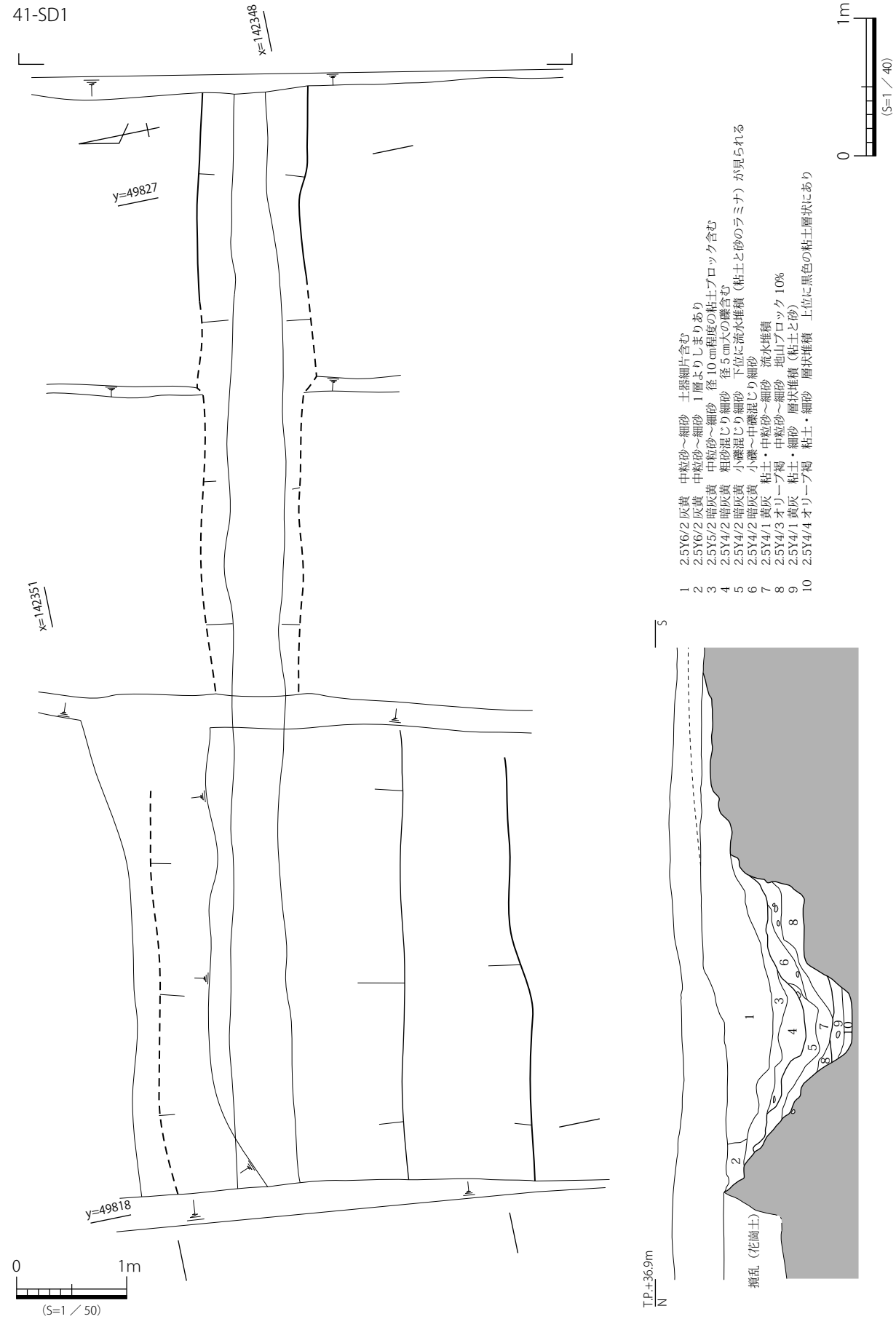
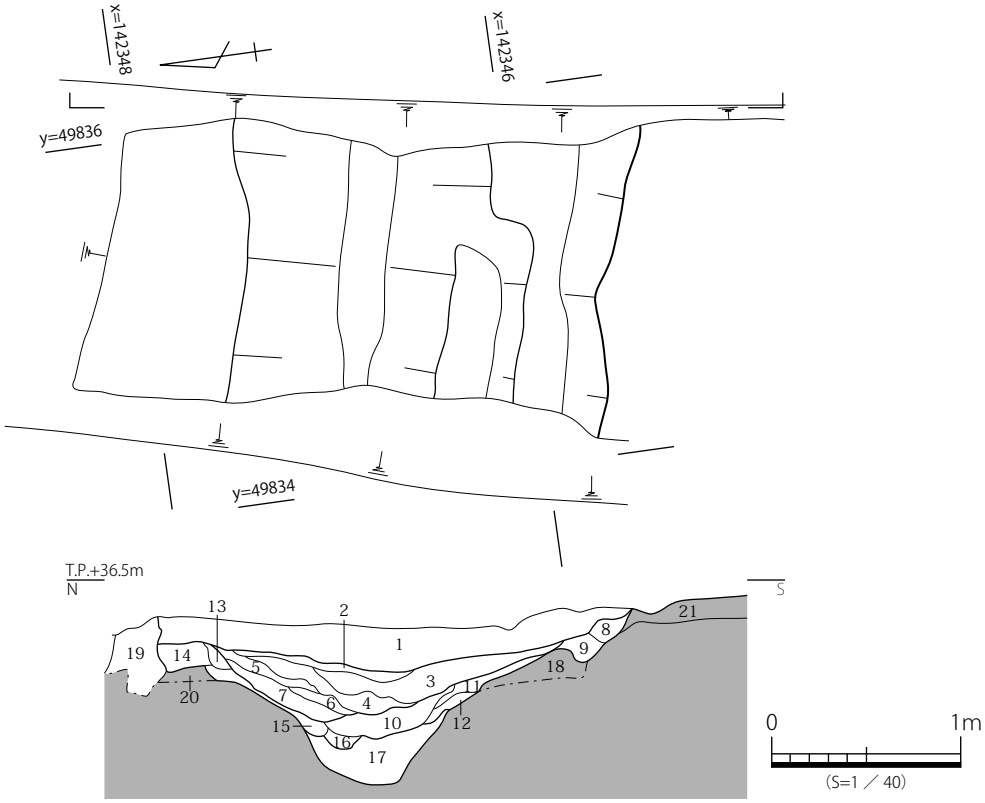


図 135　41-SD1　平・断面図



1　10YR5/4 にぶい黄褐　細砂混じりシルト　径２～３㎝大の礫少量含む
2　10YR6/4 にぶい黄橙　細砂
3　10YR5/2 灰黄褐　シルト
4　10YR5/3 にぶい黄褐　細砂混じりシルト
5　10YR7/4 にぶい黄橙　細砂
6　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂混じりシルト　径５㎝程度の地山ブロック含む
7　10YR5/4 にぶい黄褐　細砂混じりシルト
8　10YR4/4 褐　シルト混じり細砂
9　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～中粒砂混じりシルト　径３㎝程度の地山ブロック含む
10　10YR5/2 灰黄褐　シルト　細砂をラミナ状に含む
11　10YR5/3 にぶい黄褐　細砂～中粒砂
12　10YR5/4 にぶい黄褐　細砂～中粒砂
13　10YR5/3 にぶい黄褐　細砂　径３㎝程度の地山ブロック 5%
14　10YR5/2 灰黄褐　礫混じり細砂
15　10YR5/6 黄褐　シルト混じり細砂
16　10YR5/4 にぶい黄褐　シルト　細砂～中粒砂をラミナ状に含む
17　10YR5/6 黄褐　シルト　細砂～中粒砂をラミナ状に含む
18　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト混じり粗砂～細礫　径３㎝大の礫含む…ベース
19　10YR5/4 にぶい黄褐　微細砂～細砂…攪乱
20　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト混じり細砂～中粒砂…ベース
21　10YR5/4 にぶい黄褐　シルト混じり細砂…ベース

39-ＳＤ1 出土遺物

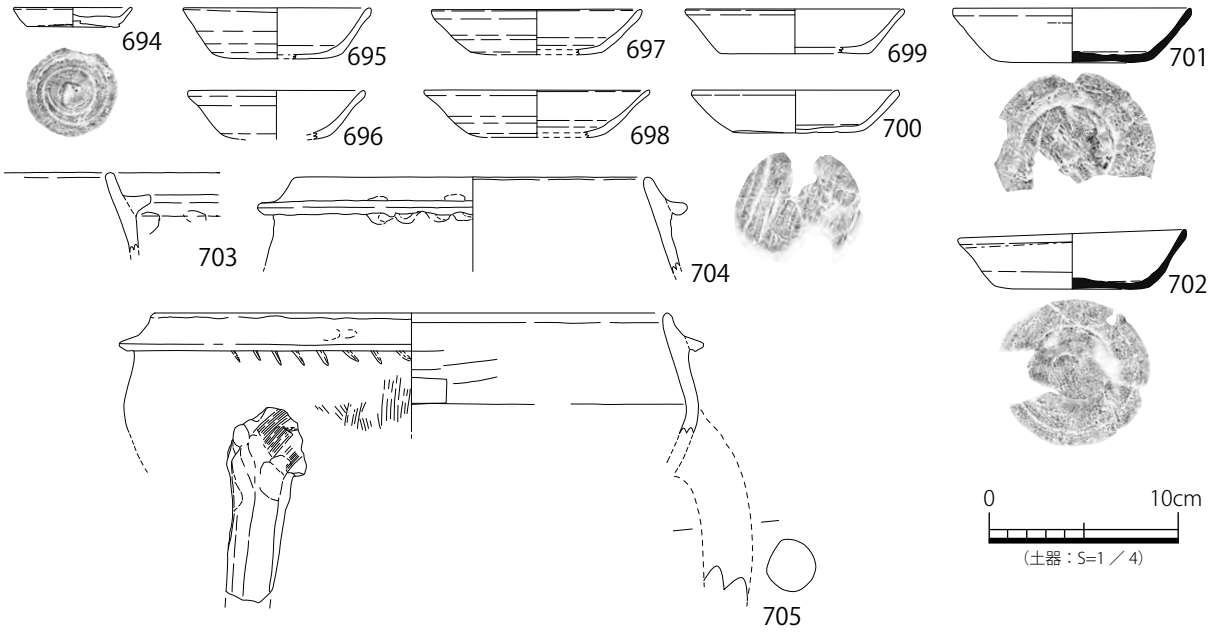


図 136　39-SD1　平・断面図及び出土遺物実測図

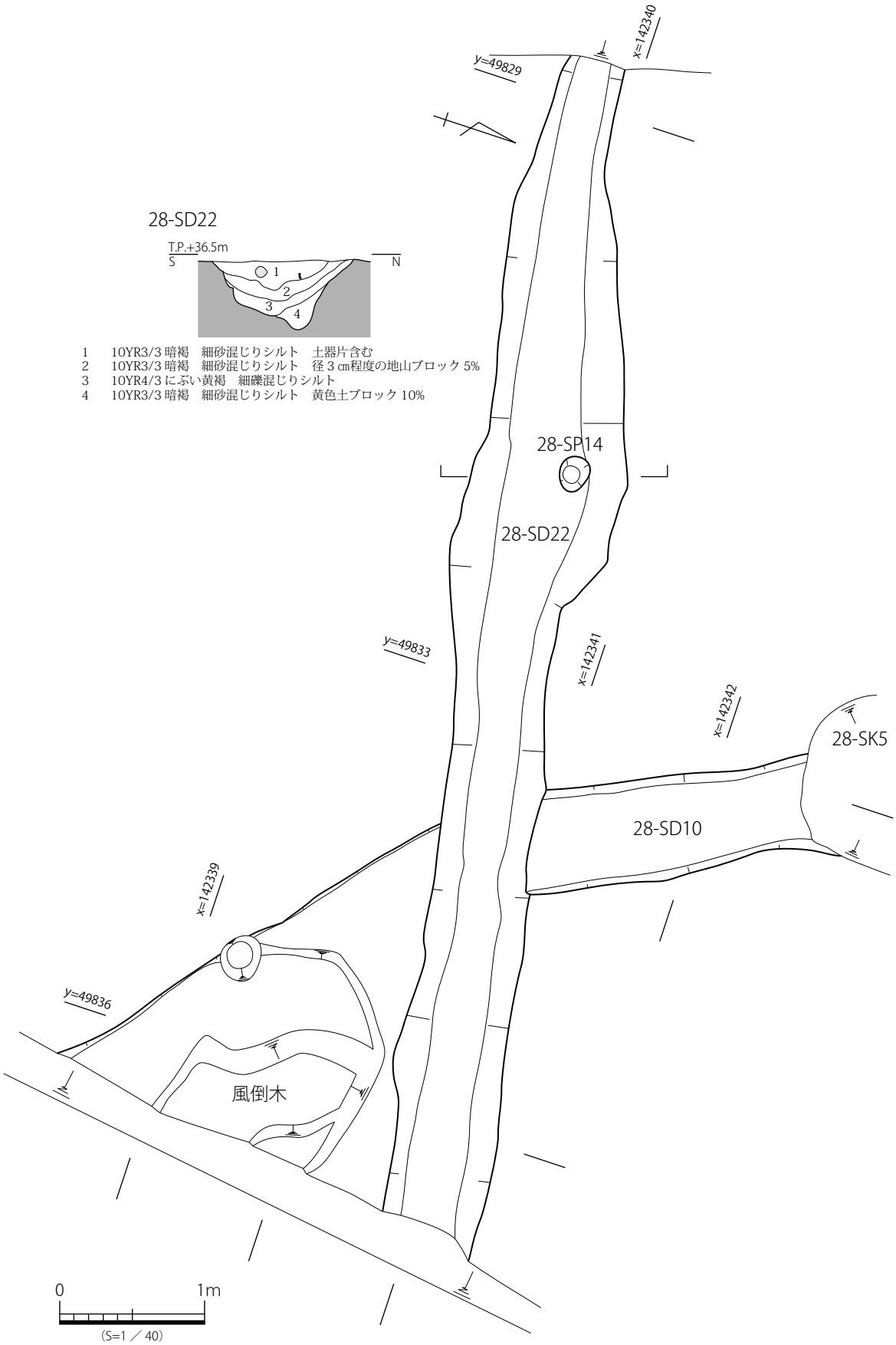


図 137　28-SD22・SD10　平・断面図

器杯身片・高杯片、土師器高杯片・杯片・皿片が出土した。

十瓶山産須恵器杯 (701・702) から 13 世紀後半～ 14 世紀前半と判断できる。

28 － ＳＤ 22(図 137)

第 28 調査区の北側で検出した東西方向の溝である。直線的に主軸方位 N-79° -E で延びる。検出面の標高は 36.45m である。長さ約 8.10m を検出し、幅約 0.50 ～ 1.00m、深さ約 0.50m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は上層が暗褐細砂混じりシルト、中層がにぶい黄褐細礫混じりシルト、下層が暗褐細砂混じりシルトである。

遺物は図示できなかったが、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片、土師器甑片・高杯片が出土した。細片のため詳細な時期は不明である。

28 － ＳＤ 10(図 137)

第 28 調査区の北側で検出した南東から北西へと延びる溝である。直線的に主軸方位 N-27° -W で延びる。28- ＳＫ 5 と 28- ＳＤ 22 に切られる。検出面の標高は 36.45m である。長さ約 1.90m を検出し、幅約 0.70m、深さは 0.04m を測る。断面形状は浅い皿状である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

32 － ＳＤ 1(図 138)

第 32 調査区の西側で検出した南北方向の溝である。直線的に主　は 38.7m である。長さ約 3.1m を検出し、幅約 1.60m、深さは 0.40m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層がにぶい黄橙シルト混じり細砂とにぶい黄褐細砂混じりシルト、下層が褐細砂である。

遺物はサヌカイト製のスクレイパー (S51) が出土した。図示した遺物の他に、須恵器壺片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

32 － ＳＤ 10(図 138)

第 32 調査区の東側で検出した南北方向の溝である。直線的に主軸方位 N-5° -W で調査区外へ延びる。検出面の標高は 38.4m である。長さ約 3.22m を検出し、幅約 0.70m、深さ約 0.10m を測る。断面形状は方形である。

埋土は単層で、灰褐細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

34 － ＳＤ 2(図 138)

第 34 調査区の北側で検出した溝である。やや蛇行して主軸方位 N-65° -E で調査区外へ延びる。検出面の標高は 37.2m である。長さ約 3.08m を検出し、幅約 0.50m、深さ約 0.10m を測る。断面形状は方形である。

埋土は単層で、褐シルト混じり細砂～中粒砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

36 － ＳＤ 1(図 139)

第 36 調査区の東側で検出した南北方向の溝である。36- ＳＤ 2 を切る。やや湾曲して主軸方位 N-25° -W で調査区外へ延びる。検出面の標高は 37.1m である。長さ約 5.60m、幅約 0.30m、深さ約 0.20m を測る。断面形状は椀状である。

埋土は単層で、にぶい褐シルト混じり細砂～微細砂である。

遺物は須恵器片が出土したが、細片のため時期は不明である。切り合い関係から 10 ～ 12 世紀前半以降と考えられる。

36 － ＳＤ 2(図 139)

第 36 調査区の南側で検出した東西方向の溝である。直線的に主軸方位 N-85° -W で調査区外へ延びる。東側で幅が広くなり、深さも増す。検出面の標高は 37.15 ～ 37.15m である。長さ約 26.0m、幅約 1.90m、深さ約 0.55 ～ 0.10m を測る。断面形状は不整形から浅い皿状である。

埋土は a 断面では、上層が灰細砂と灰オリーブ細砂、掘り直しが確認でき、下層が暗灰黄細砂～中粒砂と黄灰礫混じり粗砂～細礫、黒褐シルト混じり細砂～中粒砂である。b 断面では、3 層に分層でき、にぶい黄褐細砂とにぶい黄褐細砂～細礫、にぶい黄褐シルト混じり細砂である。c 断面は上層がにぶい黄褐シルト混じり細砂～微細砂と黒褐細砂混じり粗砂、下層が褐粗砂混じりシルトと暗褐粗砂混じり細砂～シルト。である。

遺物は須恵器片・土師器片・黒色土器 A 類片が出土した。黒色土器 A 類片から 10 世紀～ 12 世紀前半と判断できる。

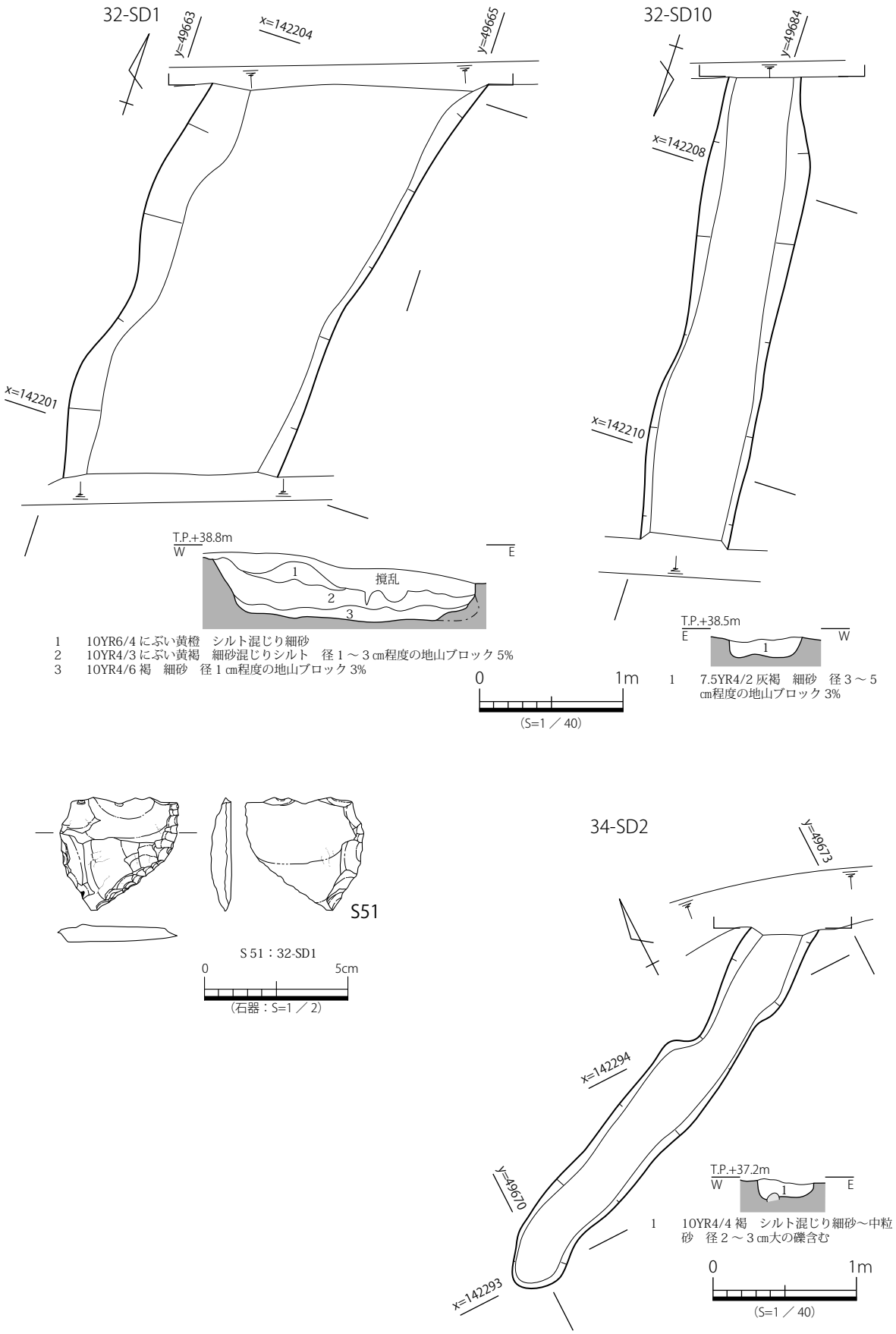


図 138　32-SD1・10、34-SD2　平・断面図及び出土遺物実測図

36 － ＳＤ 4(図 139)

第 36 調査区の東側で検出した南北方向の溝である。36- ＳＤ２に切られる。やや湾曲して主軸方位 N-22°-W で調査区外へ延びる。検出面の標高は 37.1m である。長さ約 3.80m を検出し、幅約 0.60m、深さは 0.20m を測る。断面形状は方形である。

埋土は単層で、にぶい黄褐シルト混じり細砂である。

遺物は出土していないため、時期は不明である。

36 － ＳＤ 3(図 140)

第 36 調査区の東側で検出した南北方向の溝である。36- ＳＤ２に切られる。南でやや屈曲して主軸方位 N-3°-E で調査区外へ延びる。検出面の標高は 37.1m である。長さ約 4.63m を検出し、幅約 0.70m、深さは 0.30m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層がにぶい黄褐細砂、中層がにぶい黄褐細砂～中粒砂、下層がにぶい黄褐細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

36 － ＳＤ 5(図 140)

第 36 調査区の東側で検出した南北方向の溝である。やや湾曲して主軸方位 N-2°-E で調査区外へ延びる。検出面の標高は 37.1m である。長さ約 4.00m を検出し、幅約 0.70 ～ 1.10m、深さは 0.25m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が褐細砂、下層がにぶい黄褐細砂～中粒砂とにぶい黄褐シルト混じり細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

36 － ＳＤ 6(図 141)

第 36 調査区の東側で検出した南北方向の溝である。直線的に主軸方位 N-3°-E で調査区外へ延びる。検出面の標高は 37.15m である。長さ約 4.02m を検出し、幅約 1.50 ～ 1.80m、深さは 0.30m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が褐細砂、下層がにぶい黄褐シルト混じり細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

36 － ＳＤ 7(図 141)

第 36 調査区の中央で検出した南北方向の溝である。やや蛇行して主軸方位 N-36°-E で調査区外へ延びる。検出面の標高は 37.15m である。長さ約 5.40m、幅約 1.00m、深さは 0.35m を測る。断面形状は椀状である。

埋土は上層が褐細砂、下層がにぶい黄褐細砂～中粒砂である。

遺物は須恵器甕片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

36 － ＳＤ 8(図 142)

第 36 調査区の中央で検出した南北方向の溝である。やや湾曲して主軸方位 N-13°-E で調査区外へ延びる。検出面の標高は 37.15m である。長さ約 4.50m を検出し、幅約 0.70 ～ 1.80m、深さは 0.20m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で、黒褐粗砂混じりシルト～微細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

36 － ＳＤ 9(図 142)

第 36 調査区の中央で検出した溝である。36- ＳＤ２に切られる。直線的に主軸方位 N-0°-W で調査区外へ延びる。検出面の標高は 37.1m である。長さ約 4.80m を検出し、幅約 0.60m、深さは 0.15m を測る。断面形状は椀状である。

埋土は単層で、にぶい黄褐粗砂混じり細砂～微細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

36 － ＳＤ 11(図 143)

第 36 調査区の西側で検出した溝である。36- 竪穴 12 を切る。北で屈曲して主軸方位 N-40°-W から N-20°-E で調査区外へ延びる。検出面の標高は 37.05m である。長さ約 5.50m を検出し、幅約 0.50 ～ 1.00m、深さは 0.20m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層がにぶい褐シルト混じり細砂、下層が褐細砂混じりシルトである。

遺物は須恵器片・土師器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

38 － ＳＤ 1(図 144)

第 38 調査区の東側で検出した溝である。直線的に主軸方位 N-36°-E で延びる。撹乱に切られ、

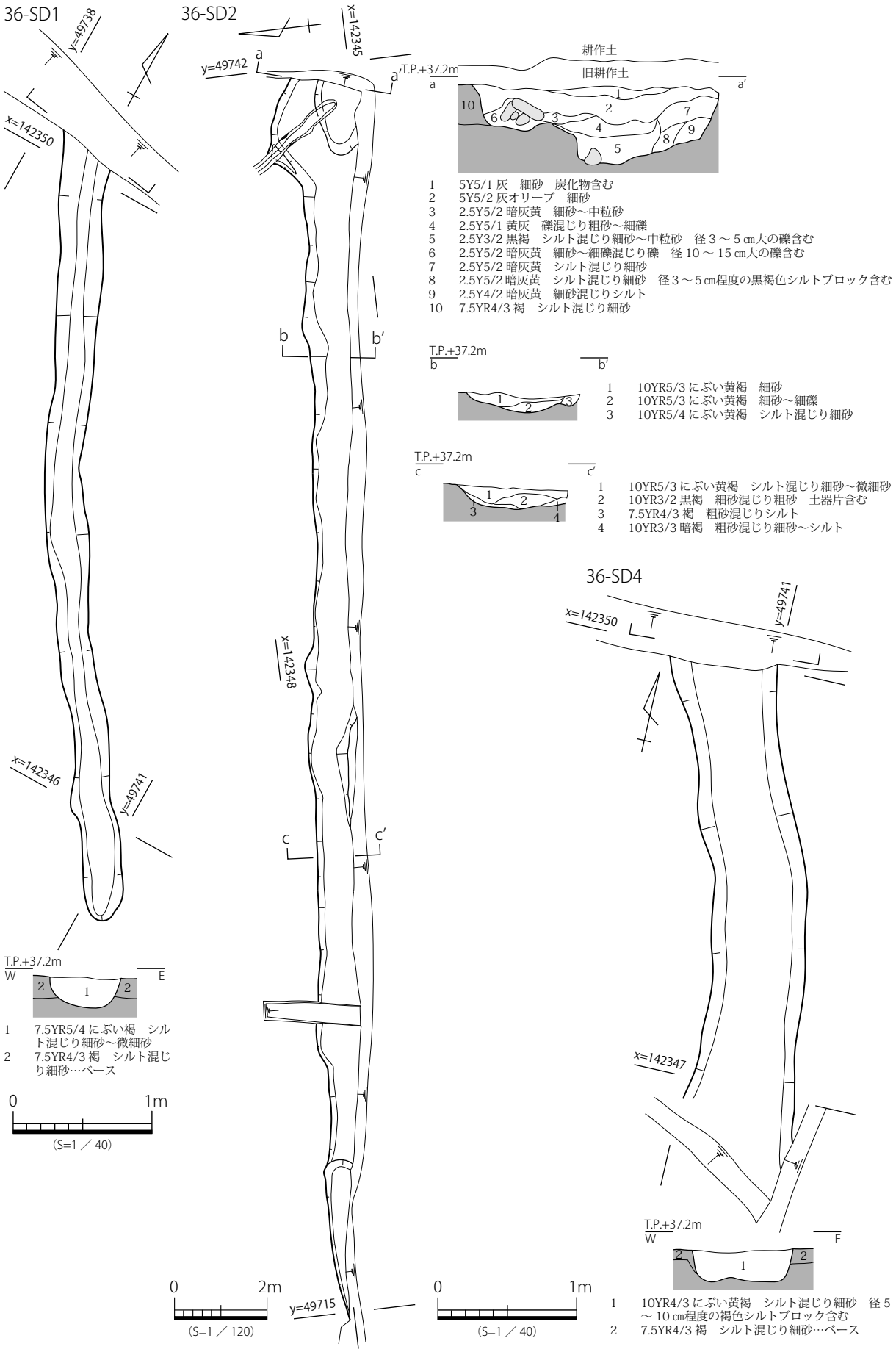
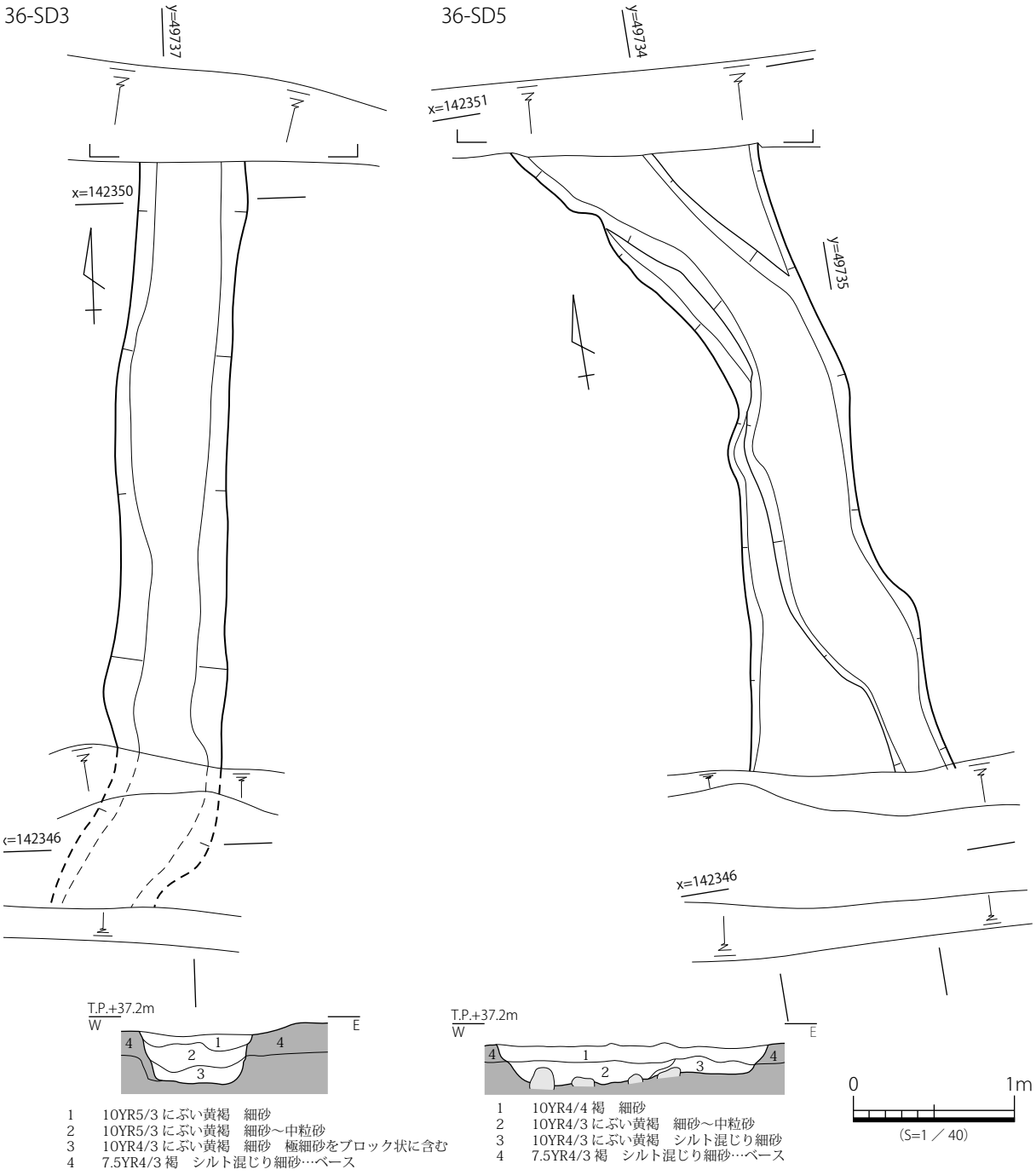


図 139　36-SD1・2・4　平・断面図



1　10YR5/3 にぶい黄褐　細砂
2　10YR5/3 にぶい黄褐　細砂～中粒砂
3　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂　極細砂をブロック状に含む
4　7.5YR4/3 褐　シルト混じり細砂…ベース

1　10YR4/4 褐　細砂
2　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～中粒砂
3　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト混じり細砂
4　7.5YR4/3 褐　シルト混じり細砂…ベース

図 140　36-SD3・5　平・断面図

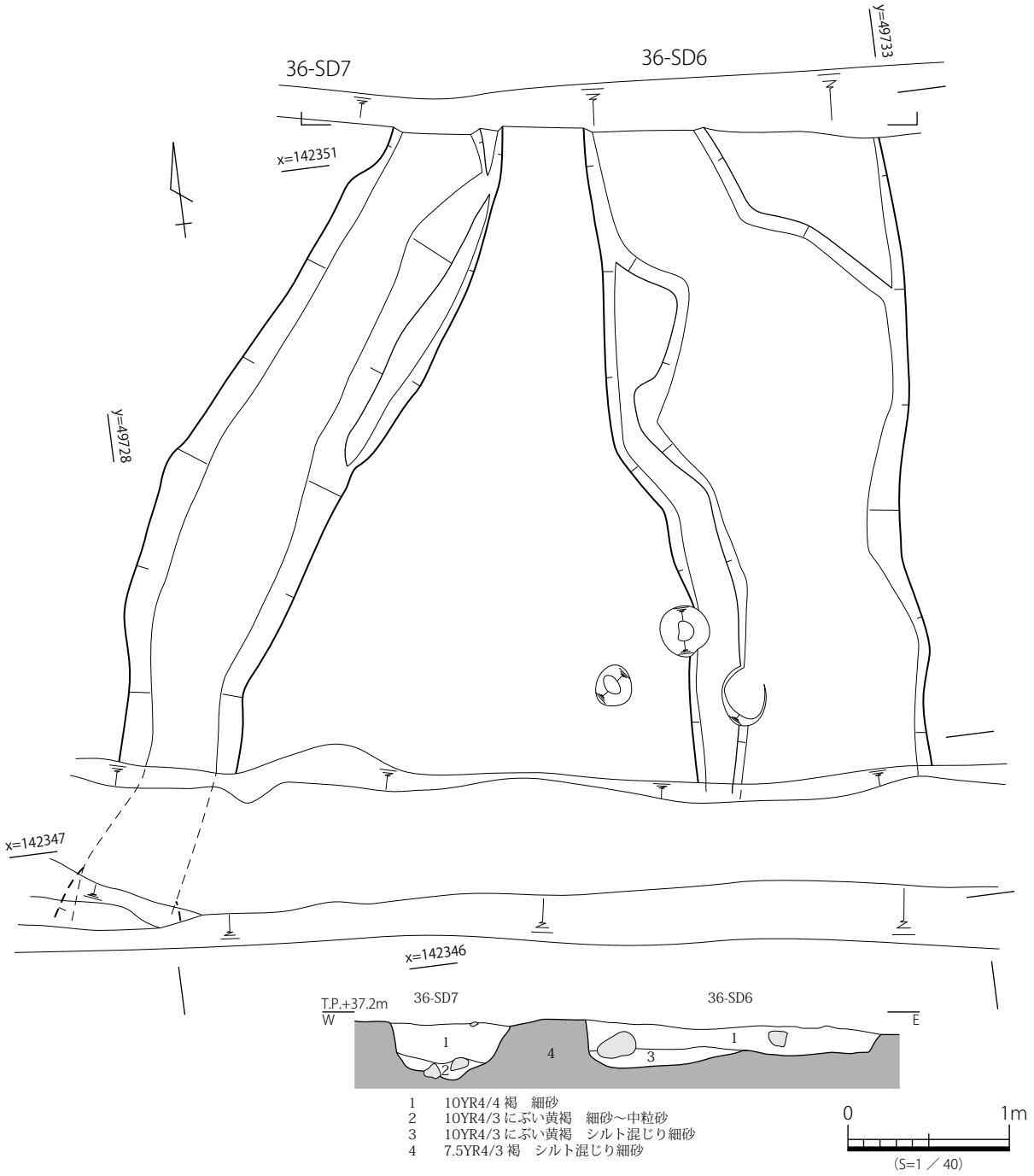


図 141　36-SD6・7　平・断面図

調査区外へ延びる。検出面の標高は 37.1m である。長さ約 5.50m を検出し、幅約 2.50m、深さは 0.15m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で黒褐細砂混じりシルトである。

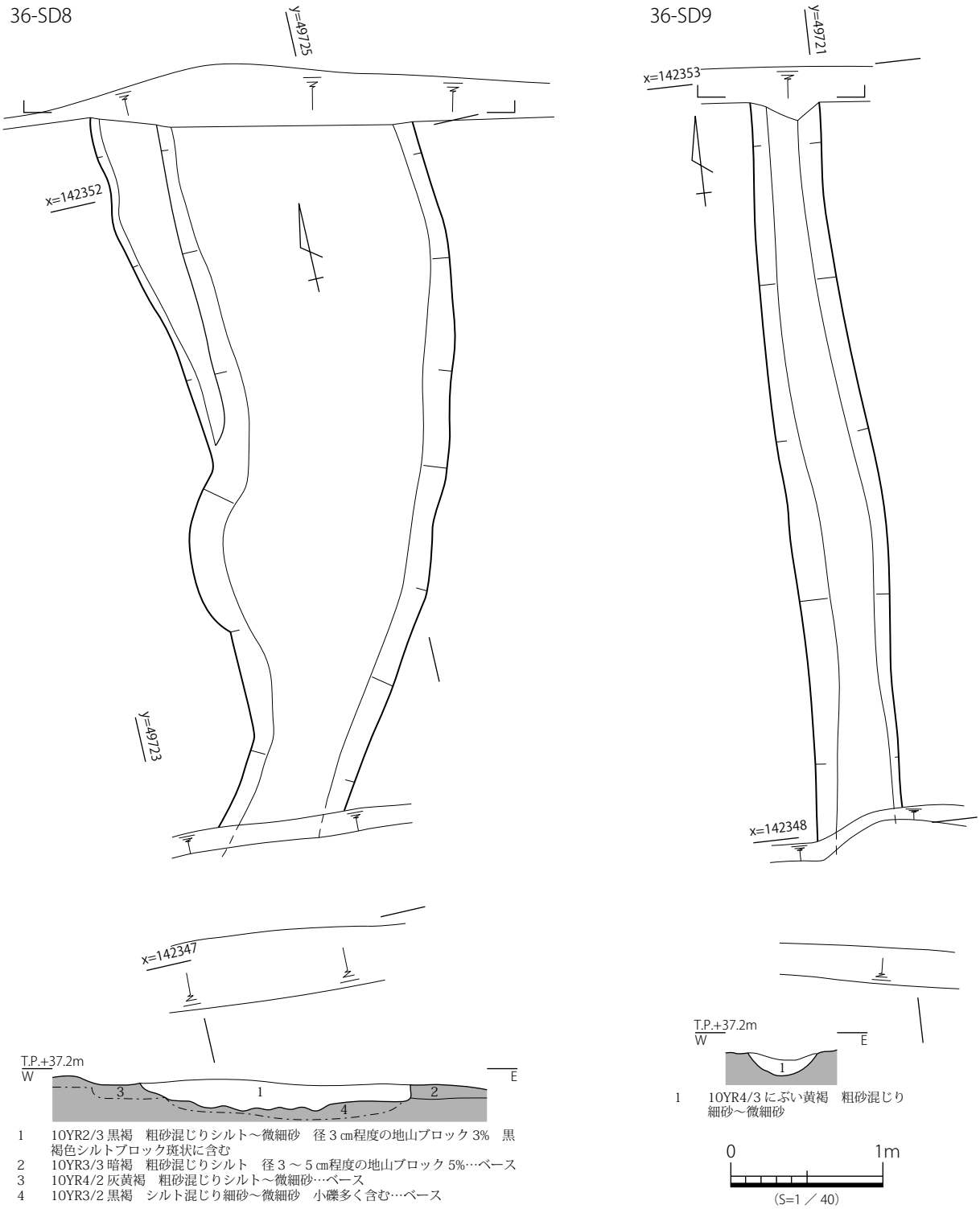
遺物が出土していないため、時期は不明である。

38 － S D 2(図 144)

第 38 調査区の中央で検出した溝である。直線的に主軸方位 N-47° -E で延び、撹乱に切られ、調査区外へ延びる。検出面の標高は 37.15m である。長さ約 3.50m、幅約 1.00m、深さは 0.40m を測る。断面形状は V 字形にテラスである。

埋土は 3 層に分層でき、黒褐細砂混じりシルトと暗灰黄シルト混じり細砂、黄灰シルト混じり細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。



1　10YR2/3 黒褐　粗砂混じりシルト～微細砂　径３㎝程度の地山ブロック 3%　黒褐色シルトブロック斑状に含む
2　10YR3/3 暗褐　粗砂混じりシルト　径３～５㎝程度の地山ブロック 5%…ベース
3　10YR4/2 灰黄褐　粗砂混じりシルト～微細砂…ベース
4　10YR3/2 黒褐　シルト混じり細砂～微細砂　小礫多く含む…ベース

1　10YR4/3 にぶい黄褐　粗砂混じり細砂～微細砂

図 142　36-SD8・9　平・断面図

38 －ＳＤ 3(図 145)

第 38 調査区の中央で検出した南北方向の溝である。直線的に主軸方位 N-5°-E で調査区外へ延びる。検出面の標高は 37.2m である。長さ約 5.10m を検出し、幅約 0.50m、深さは 0.10m を測る。断面形状は椀状である。

埋土は単層で、にぶい黄褐シルト混じり細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

41 －ＳＤ 2(図 145)

第 41 調査区の北側で検出した東西方向の溝であ

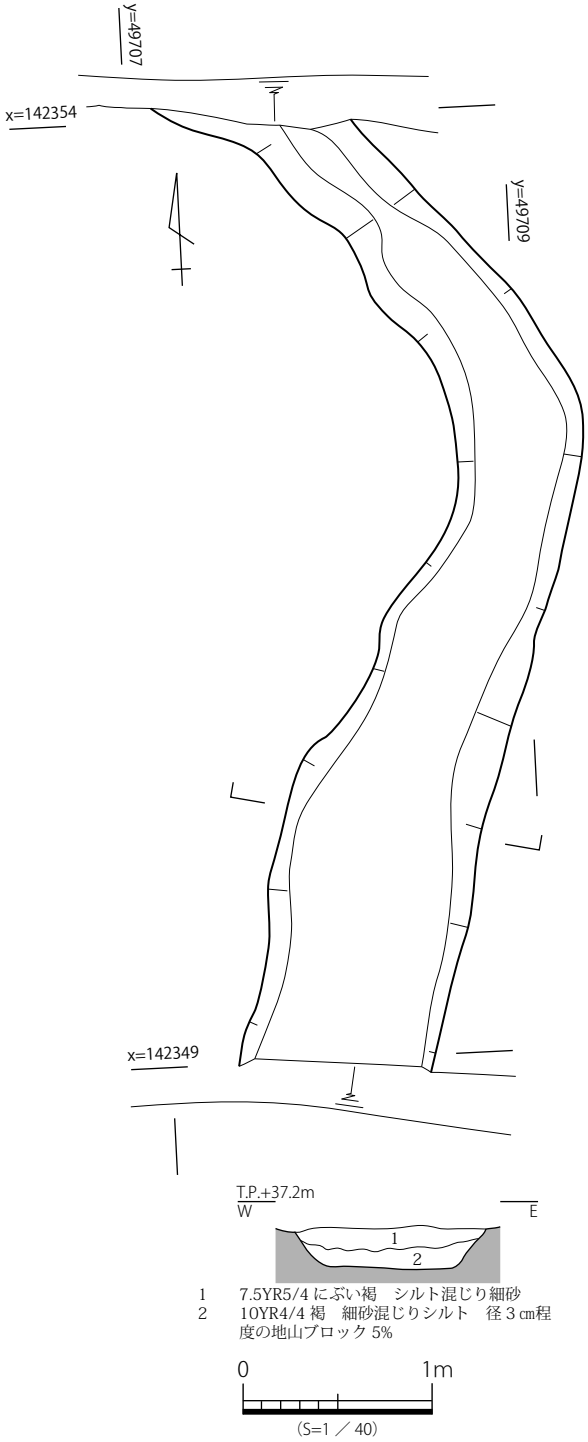


図 143　36-SD11　平・断面図

る。直線的に主軸方位 N-70°-W で調査区外へ延びる。検出面の標高は 36.0m である。長さ約 4.70m を検出し、幅約 0.80m、深さは 0.25m を測る。断面形状は方形である。

埋土は単層で、暗オリーブ褐細礫混じりシルトである。

遺物は須恵器高杯蓋片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

46 － S D 3(図 145)

第 46 調査区の中央で検出した溝である。直線的に主軸方位 N-30°-W で延び、撹乱に切られる。検出面の標高は 36.6m である。長さ約 2.0m を検出し、幅は 0.55m、深さは 0.20m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、黒褐細砂混じりシルトである。

遺物は須恵器片・土師器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

46 － S D 4(図 145)

第 46 調査区の中央で検出した溝と考えられる遺構である。直線的に主軸方位 N-24°-W で延び、撹乱に切られ、調査区外へ延びる。検出面の標高は 36.5m である。長さ約 1.10m を検出し、幅約 0.5m 以上、深さは 0.15m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は黒褐細砂混じりシルトである

遺物は土師器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

47 － S D 1(図 145)

第 47 調査区の東側で検出した南北方向の溝である。直線的に主軸方位 N-9°-E で調査区外に延びる。検出面の標高は 37.2m である。長さ約 3.40m、幅約 1.20m、深さは 0.30m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が暗褐中粒砂～細砂、下層が灰黄褐中粒砂である。

遺物は土師器甕片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

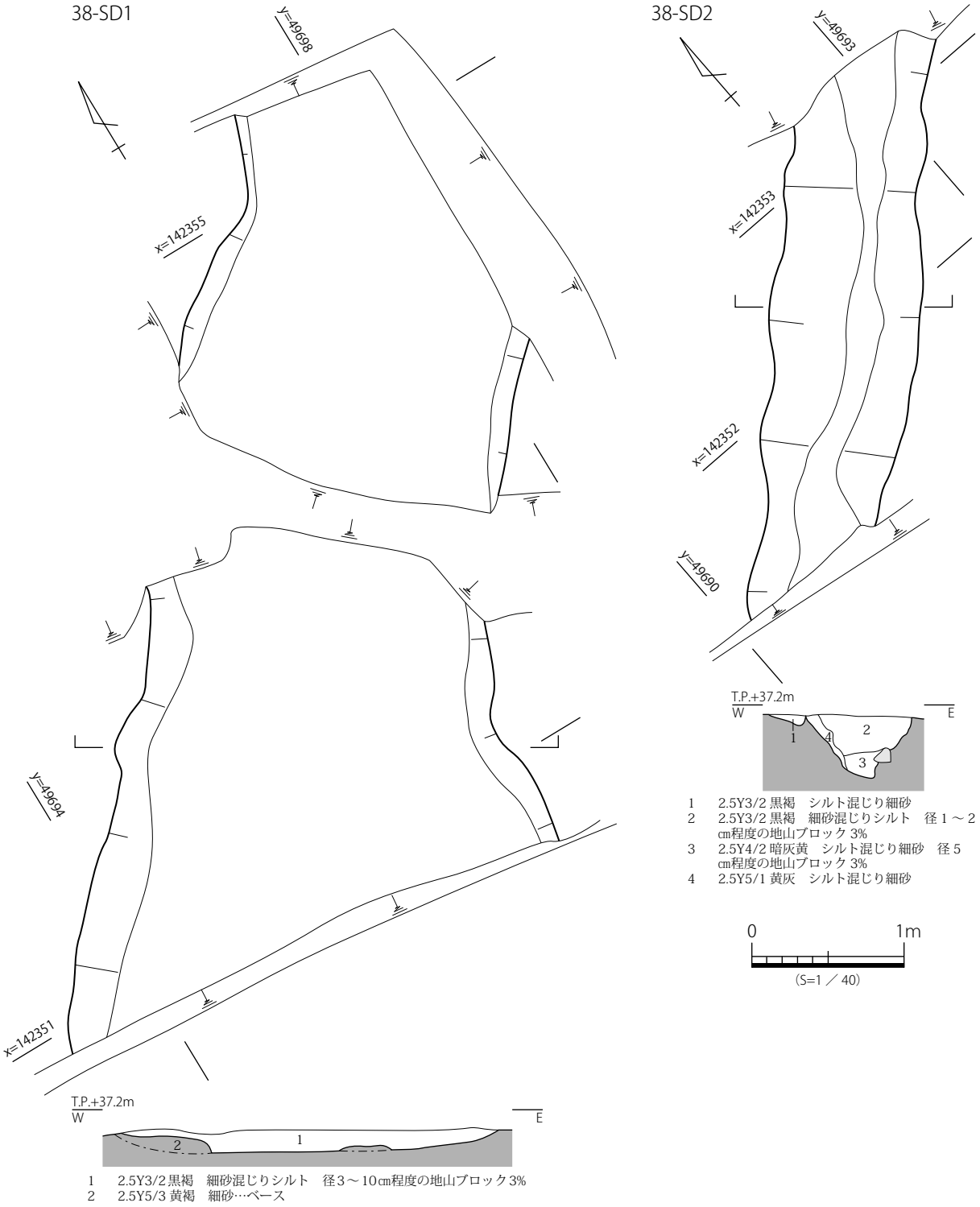


図 144　38-SD1・2　平・断面図

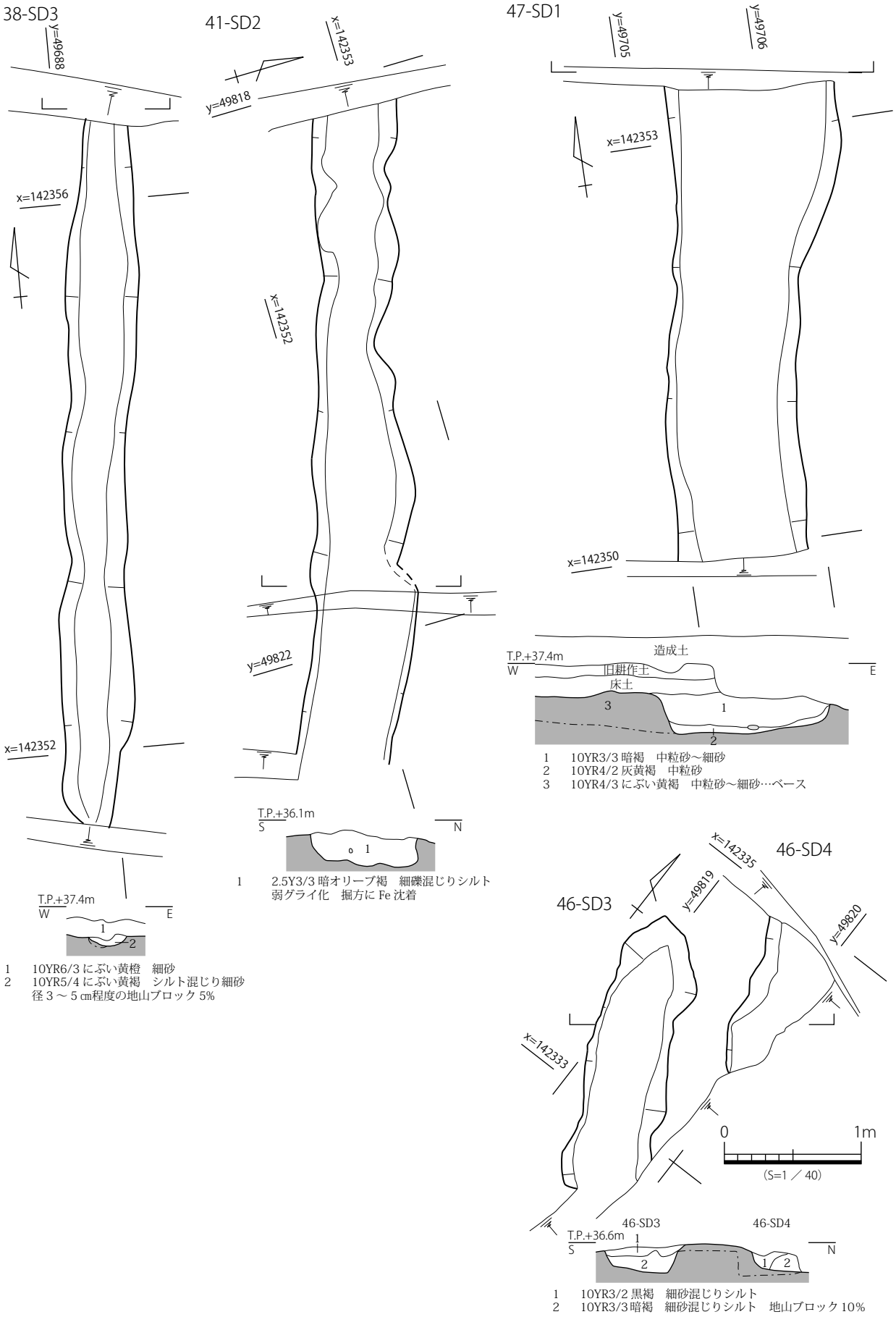


図 145　38-SD3・41-SD2・47-SD1・46-SD3・4　平・断面図

（３）ＳＫ

28－ＳＫ5(図146)

第28調査区の北側で検出した土坑である。調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ-15°-Ｗ、検出面の標高は36.5mである。長軸約1.8m以上、短軸約1.30m、深さ約0.20mを測る。断面形状は浅い皿状である。土層は２層に分かれる。

埋土は上層が黒褐細砂混じりシルト、下層が暗褐細砂混じりシルトである。

遺物は須恵器杯蓋(706)が出土した。図示した遺物の他に、須恵器片・土師器片が出土した。出土遺物の年代からＴＫ208型式併行期と判断できる。

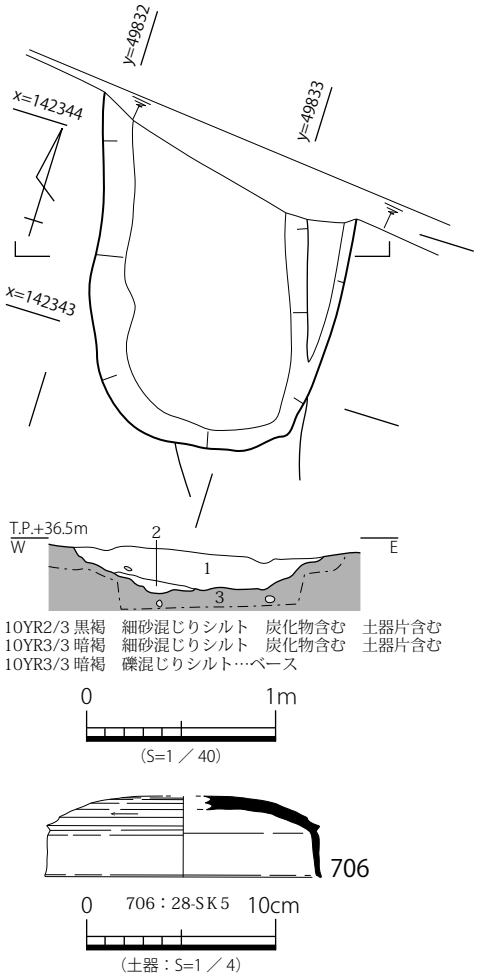


図146　28-SK5平・断面図及び出土遺物実測図

29－ＳＫ1(図147)

第29調査区の東側で検出した土坑である。調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ-8°-Ｅ、検出面の標高は36.8mである。長軸約1.4m以上、短軸約0.90m、深さ約0.40mを測る。断面形状は椀状にテラスである。

埋土は上層が灰オリーブシルト混じり微細砂で、人為的な埋め戻し土と考えられる。下層は黄灰シルト混じり微細砂～細砂と黄灰微細砂～細砂で、ラミナが確認できたことから、流水堆積層と考えられる。

遺物は須恵器片・土師器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

29－ＳＫ11(図147)

第29調査区の東側で検出した土坑である。29-ＳＰ11に切られ、調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ-23°-Ｅ、検出面の標高は36.85mである。長軸約1.2m以上、短軸約0.75m、深さ約0.40mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が暗オリーブ褐細礫混じりシルト、中層がオリーブ褐中礫～細礫、下層が暗オリーブ褐細砂である。

遺物は図示できなかったが鉄滓が出土した。他の遺物が出土していないため、時期は不明である。

29－ＳＫ12(図147)

第29調査区の東側で検出した円形の土坑である。主軸方位Ｎ-75°-Ｅ、検出面の標高は36.7mである。長軸約1.30m、短軸約1.10m、深さ約0.40mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層でにぶい黄褐シルト質極細砂である。

遺物は須恵器蓋(707)が出土した。図示した遺物の他に、須恵器杯身片・杯蓋片が出土した。出土遺物から古墳時代後期頃と判断できる。

29－ＳＫ13(図147)

第29調査区の東側で検出した土坑である。調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ-13°-Ｅ、検出面の標高は36.85mである。長軸約1.00m、短軸約0.8m以上、深さ約0.50mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が暗褐シルト、中層が暗褐礫混じりシルト、下層が暗褐礫混じり細砂と暗褐細砂である。

遺物は滑石製勾玉形模造品 (S52) が出土した。出土遺物から古墳時代後期頃と判断できる。

29 － S K 14(図 147)

第 29 調査区の東側で検出した土坑である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N -4° - E、検出面の標高は 36.85m である。長軸約 1.0m 以上、短軸約 0.90m、深さ約 0.50m を測る。断面形状は椀状に段落ちである。

埋土は上層が暗褐細礫混じりシルト、下層が黒褐礫混じりシルトである。

遺物は図示できなかったが、鉄滓が出土した。時期は不明である。

29 － S K 15(図 147)

第 29 調査区の東側で検出した隅丸方形を呈する土坑である主軸方位 N -78° - E、検出面の標高は 36.7m である。長軸約 1.00m、短軸約 0.70m、深さ約 0.45m を測る。断面形状は方形に段落ちである。

埋土は暗オリーブ褐シルトである。

遺物は須恵器杯身片・杯蓋片、鉄滓、焼土塊が出土した。出土遺物から古墳時代後期と判断できる。

29 － S K 16(図 147)

第 29 調査区の東側で検出した土坑と考えられる遺構である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N -3° - W、検出した標高は 36.8m である。長軸約 0.80m、短軸約 m0.5 以上、深さ約 0.55m を測る。断面形状は U 字形に段落ちである。

埋土は暗灰黄細砂～シルトと黒褐シルトである。

遺物は土師器高杯片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

29 － S K 17(図 147)

第 29 調査区の東側で検出した楕円形を呈する土坑である。主軸方位 N -59° - W、検出面の標高は 36.6m である。長軸約 1.85m、短軸約 0.75m、深さ約 0.05m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で暗オリーブ褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

29 － S K 19(図 148)

第 29 調査区の東側で検出した土坑である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N -13° - E、検出面の標高は 36.8m である。長軸約 0.80m、短軸約 0.6m 以上、深さ約 0.75m を測る。断面形状は方形である。

埋土は上層が黒褐細砂混じりシルト、中層が灰黄褐シルト混じり極細砂、下層が黒褐シルト混じり細砂である。

遺物は須恵器杯身 (709・711)・杯蓋 (708・710)・提瓶 (712)、土師器甑 (713) がまとまって出土した。図示した遺物の他に、須恵器片・土師器片が出土した。出土遺物の年代からＴＫ 47 ～ＭＴ 15 型式併行期と判断できる。

29 － S K 18(図 148)

第 29 調査区の東側で検出した土坑である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N -4° - E、検出面の標高は 36.7m である。長軸約 1.20m、短軸約 0.7m 以上、深さ約 0.20m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は上層が暗オリーブ褐細砂～シルト、下層がオリーブ褐細砂である。

遺物は土師器高杯片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

29 － S K 21(図 148)

第 29 調査区の東側で検出した円形を呈する土坑である。29- S D 10 に切られる。主軸方位 N -82° - E、検出面の標高は 36.7m である。長軸約 0.80m、短軸約 0.60m、深さ約 0.25m を測る。断面形状は椀状である。

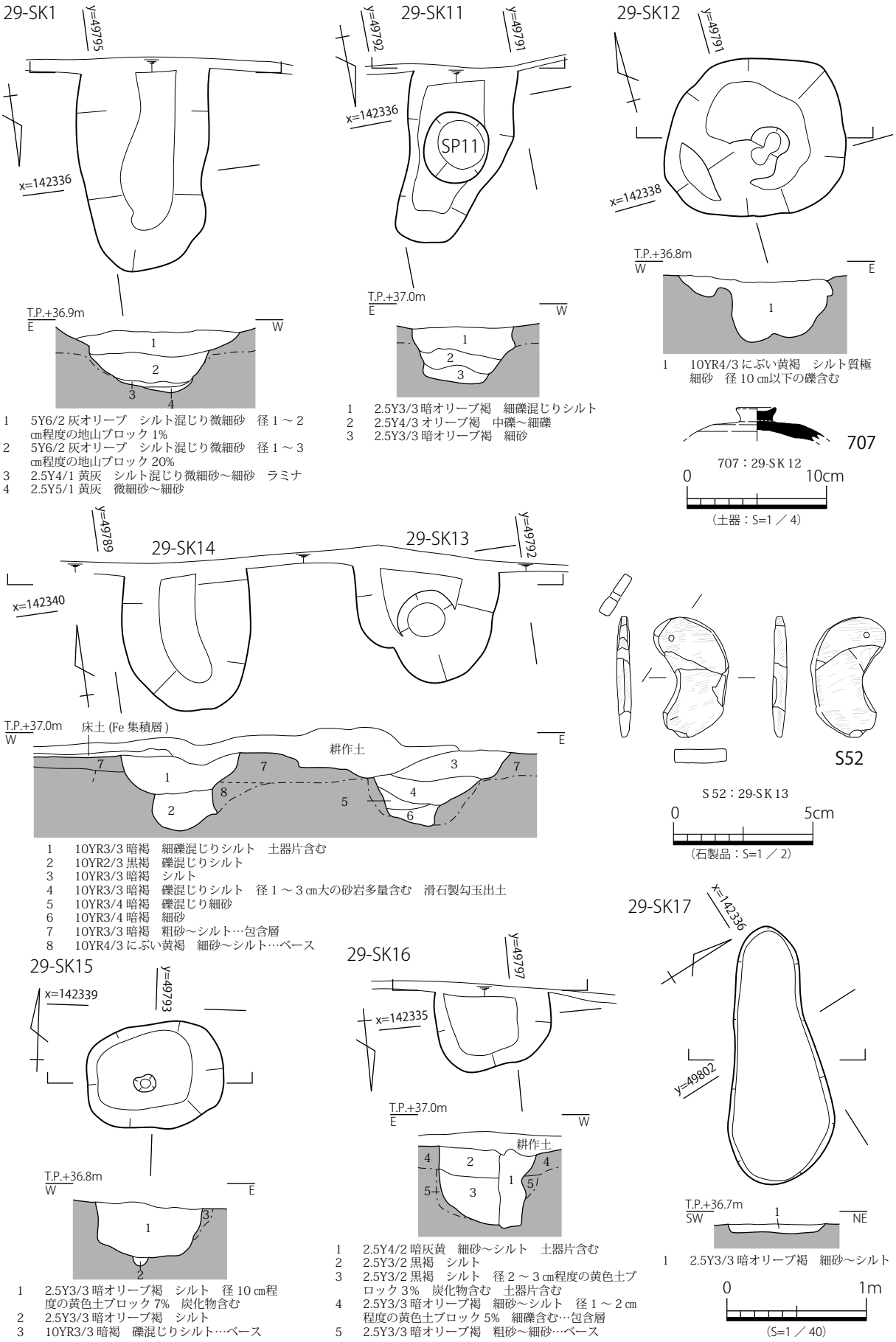
埋土は上層がにぶい黄褐シルト、下層が暗褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

29 － S K 33(図 148)

第 29 調査区の東側で検出した土坑と考えられる遺構である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N -14° - E、検出面の標高は 36.85m である。長軸約 0.60m、短軸約 0.3m 以上、深さ約 0.50m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が暗灰黄シルト混じり細砂、中層が暗灰黄細砂、下層が黒褐シルト混じり細砂である。



1　5Y6/2 灰オリーブ　シルト混じり微細砂　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック 1%
2　5Y6/2 灰オリーブ　シルト混じり微細砂　径 1 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック 20%
3　2.5Y4/1 黄灰　シルト混じり微細砂～細砂　ラミナ
4　2.5Y5/1 黄灰　微細砂～細砂

1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐　細礫混じりシルト
2　2.5Y4/3 オリーブ褐　中礫～細礫
3　2.5Y3/3 暗オリーブ褐　細砂

1　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト質極細砂　径 10 ㎝以下の礫含む

1　10YR3/3 暗褐　細礫混じりシルト　土器片含む
2　10YR2/3 黒褐　礫混じりシルト
3　10YR3/3 暗褐　シルト
4　10YR3/3 暗褐　礫混じりシルト　径 1 ～ 3 ㎝大の砂岩多量含む　滑石製勾玉出土
5　10YR3/4 暗褐　礫混じり細砂
6　10YR3/4 暗褐　細砂
7　10YR3/3 暗褐　粗砂～シルト…包含層
8　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト…ベース

1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐　シルト　径 10 ㎝程度の黄色土ブロック 7%　炭化物含む
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐　シルト
3　10YR3/3 暗褐　礫混じりシルト…ベース

1　2.5Y4/2 暗灰黄　細砂～シルト　土器片含む
2　2.5Y3/2 黒褐　シルト
3　2.5Y3/2 黒褐　シルト　径 2 ～ 3 ㎝程度の黄色土ブロック 3%　炭化物含む　土器片含む
4　2.5Y3/3 暗オリーブ褐　細砂～シルト　径 1 ～ 2 ㎝程度の黄色土ブロック 5%　細礫含む…包含層
5　2.5Y3/3 暗オリーブ褐　粗砂～細砂…ベース

1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐　細砂～シルト

図 147　29-SK1・11・12・13・14・15・16・17　平・断面図及び出土遺物実測図

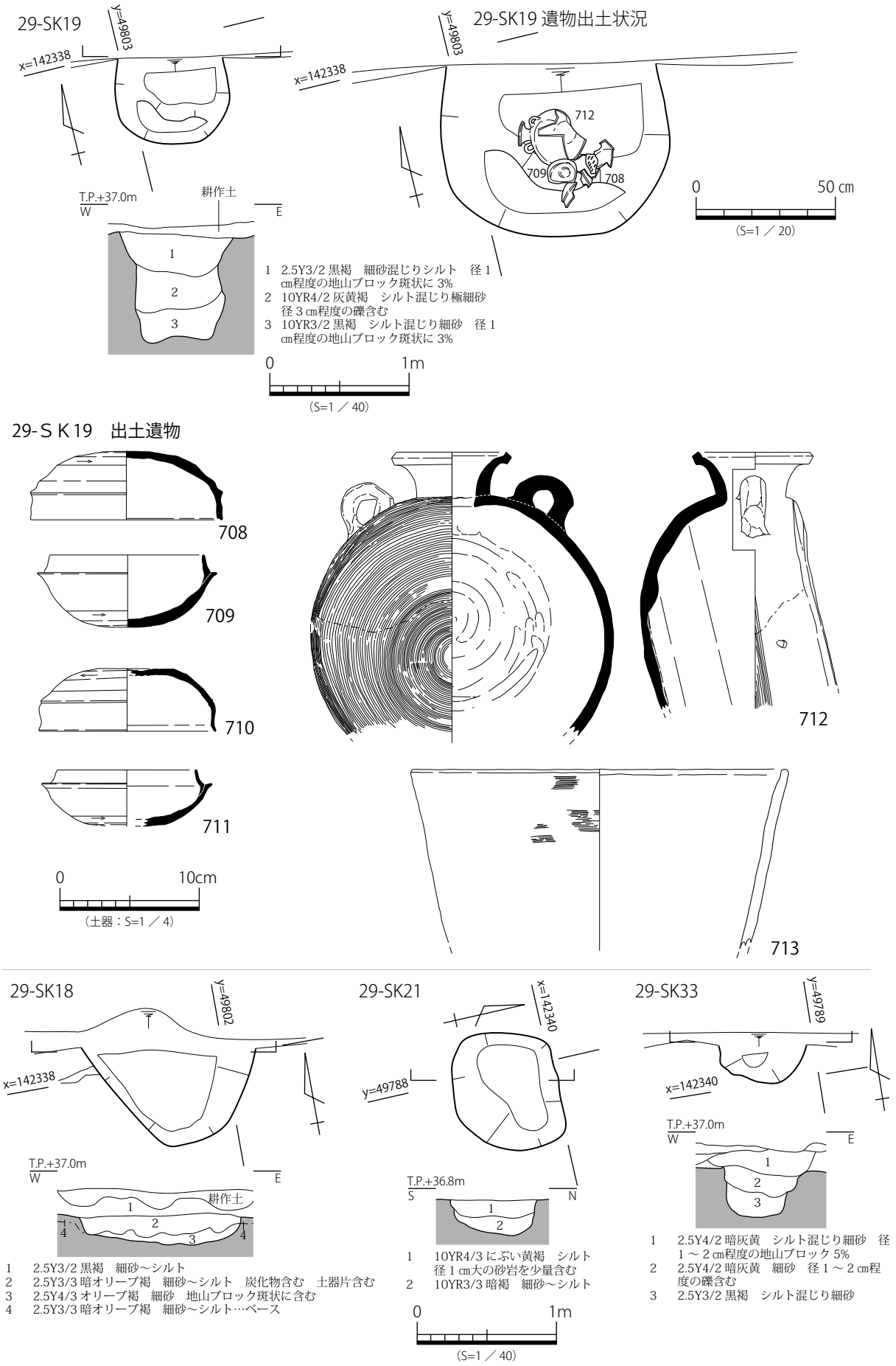


図 148　29-SK18・19・21・33　平・断面図及び出土遺物実測図

遺物が出土していないため、時期は不明である。

29 － ＳＫ 36(図 149)

第 29 調査区の東側で検出した土坑と考えられる遺構である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ -89°- W、検出面の標高は 36.7m である。長軸約 0.80m､短軸約 0.4m 以上、深さ約 0.55m を測る。断面形状は方形である。

埋土は上層が黒褐シルト混じり細砂、下層が暗オリーブ褐シルト混じり細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

29 － ＳＫ 41(図 149)

第 29 調査区の東側で検出した楕円形を呈する土坑である。主軸方位Ｎ -58°- W、検出面の標高は 36.6m である。長軸約 0.85m、短軸約 0.70m、深さ約 0.40m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。

埋土は黒褐細砂～シルトと暗オリーブ褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

29 － ＳＫ 51(図 149)

第 29 調査区の西側で検出した土坑である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ -33°- Ｅ、検出面の標高は 37.0m である。長軸約 0.80m、短軸約 0.6m 以上、深さ約 0.30m を測る。断面形状は方形に段落ちである。

埋土は上層が暗褐シルト混じり細砂、下層がにぶい黄褐シルト混じり細砂である。

遺物は土師器片が出土したが、細片であるため詳細な時期は不明である。

29 － ＳＫ 58(図 149)

第 29 調査区の西側で検出した円形を呈する土坑である。主軸方位Ｎ -53°- Ｅ、検出面の標高は 36.85m である。長軸約 1.20m、短軸約 1.10m、深さ約 0.30m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は上層が暗灰黄礫混じり細砂～シルト、下層がオリーブ褐細砂である。

遺物は土師器底部 (714) が出土した。出土遺物から古墳時代後期頃と判断できる。

29 － ＳＫ 65(図 149)

第 29 調査区の中央で検出した土坑である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ -29°- Ｅ、検出面の標高は 37.0m である。長軸約 1.15m、短軸約 0.6m 以上、深さ約 0.40m を測る。断面形状は方形に段落ちである。

埋土は上層が暗褐シルト混じり細砂、下層が暗褐細砂である。

遺物は須恵器甕 (715) が出土した。出土遺物から古墳時代中期後半と判断できる。

29 － ＳＫ 66(図 149)

第 29 調査区の中央で検出した隅丸方形を呈する土坑である。主軸方位Ｎ -45°- Ｅ、検出面の標高は 36.9m である。長軸約 0.70m、短軸約 0.70m、深さ約 0.50m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。

埋土は上層が黒褐シルト混じり細砂、中層が暗褐シルト混じり細砂と黒褐シルト混じり細砂、下層が暗褐細砂である。

遺物は須恵器片・土師器片が出土したが、細片であるため時期は不明である。

30 － ＳＫ 5(図 150)

第 30 調査区の中央で検出した土坑である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ -12°- Ｅ、検出面の標高は 37.6m である。長軸約 2.0m 以上、短軸約 1.60m、深さ約 0.10m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、黒褐シルト混じり細砂である。

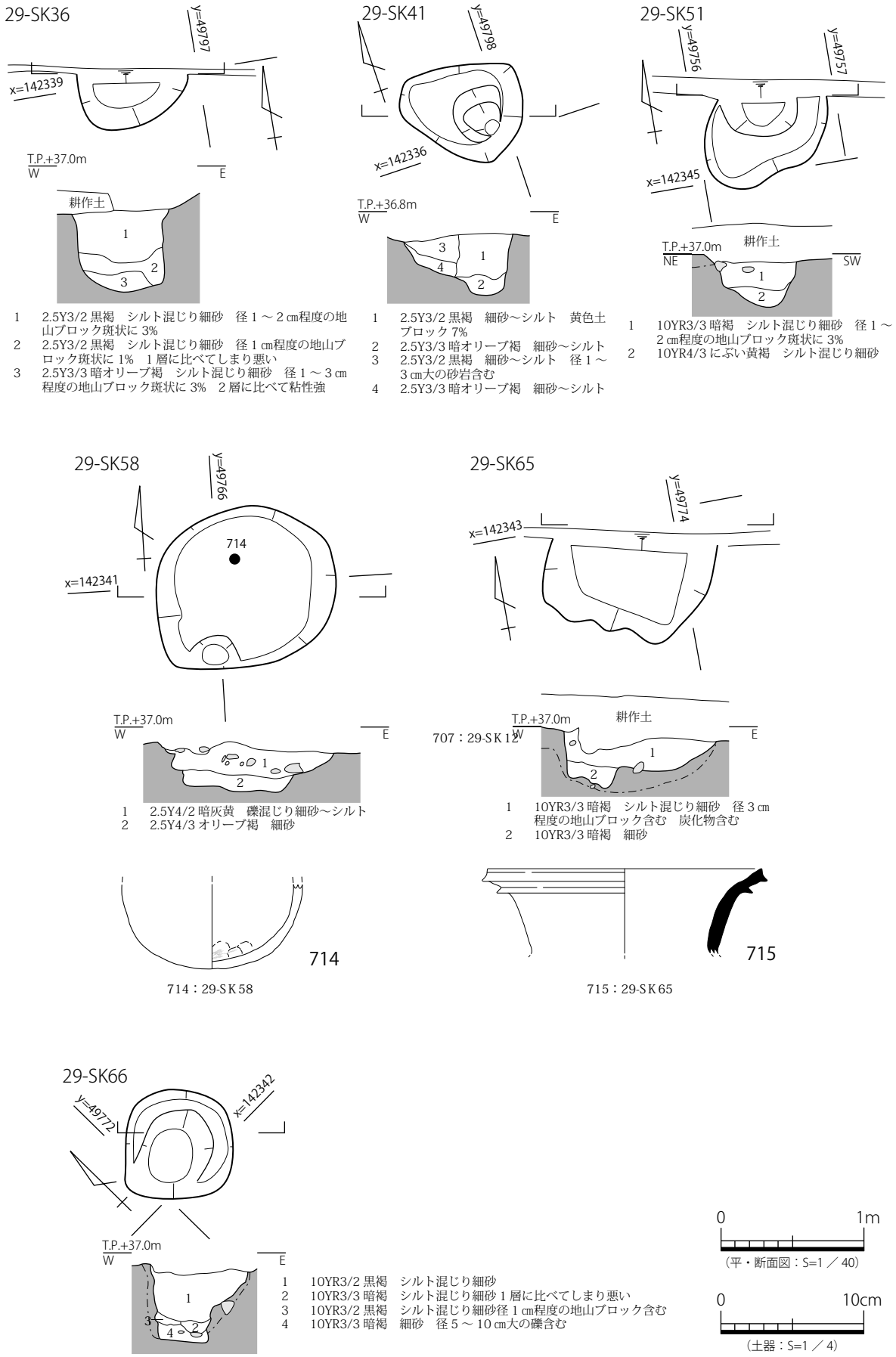
遺物が出土していないため、時期は不明である。

32 － ＳＫ 2(図 150)

第 32 調査区の中央で検出した土坑である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ -80°- W、検出面の標高は 38.4m である。長軸約 0.90m､短軸約 0.70m､深さ約 0.10m を測る。断面形状は方形である。

埋土は単層で、暗褐シルト混じり細砂～微細砂である。

遺物は図示できなかったが、鉄片が出土した。時期は不明である。



29-SK36

1　2.5Y3/2 黒褐　シルト混じり細砂　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック斑状に 3%
2　2.5Y3/2 黒褐　シルト混じり細砂　径 1 ㎝程度の地山ブロック斑状に 1%　1 層に比べてしまり悪い
3　2.5Y3/3 暗オリーブ褐　シルト混じり細砂　径 1 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック斑状に 3%　2 層に比べて粘性強

29-SK41

1　2.5Y3/2 黒褐　細砂～シルト　黄色土ブロック 7%
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐　細砂～シルト
3　2.5Y3/2 黒褐　細砂～シルト　径 1 ～ 3 ㎝大の砂岩含む
4　2.5Y3/3 暗オリーブ褐　細砂～シルト

29-SK51

1　10YR3/3 暗褐　シルト混じり細砂　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック斑状に 3%
2　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト混じり細砂

29-SK58

1　2.5Y4/2 暗灰黄　礫混じり細砂～シルト
2　2.5Y4/3 オリーブ褐　細砂

29-SK65

1　10YR3/3 暗褐　シルト混じり細砂　径 3 ㎝程度の地山ブロック含む　炭化物含む
2　10YR3/3 暗褐　細砂

714：29-SK58

715：29-SK65

29-SK66

1　10YR3/2 黒褐　シルト混じり細砂
2　10YR3/3 暗褐　シルト混じり細砂 1 層に比べてしまり悪い
3　10YR3/2 黒褐　シルト混じり細砂径 1 ㎝程度の地山ブロック含む
4　10YR3/3 暗褐　細砂　径 5 ～ 10 ㎝大の礫含む

（平・断面図：S=1 ／ 40）

（土器：S=1 ／ 4）

図 149　29-SK36・41・51・58・65・66　平・断面図及び出土遺物実測図

32 － S K 3(図 150)

第 32 調査区の中央で検出した土坑である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位N -32° - W、検出面の標高は 38.45m である。長軸約 1.80m、短軸約 1.2m 以上、深さ約 0.20m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層がオリーブ褐細砂、下層が暗褐シルト混じり細砂と褐シルト混じり細砂、にぶい黄褐シルト混じり細砂～中粒砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

32 － S K 12(図 150)

第 32 調査区の東側で検出した土坑である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位N -58° - E、検出面の標高は 38.3m である。長軸約 1.30m、短軸約 0.7m 以上、深さ約 0.15m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、黒褐極細砂混じりシルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

32 － S K 13(図 150)

第 32 調査区の東側で検出した楕円形を呈する土坑である。主軸方位N -37° - E、検出面の標高は 38.3m である。長軸約 0.80m、短軸約 0.50m、深さ約 0.20m を測る。断面形状は方形である。

埋土は単層で、褐シルト混じり細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

32 － S K 15(図 150)

第 32 調査区の東側で検出した楕円形を呈する土坑である。主軸方位N -70° - E、検出面の標高は 38.3m である。長軸約 1.00m、短軸約 0.70m、深さ約 0.20m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、にぶい黄褐シルト混じり細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

34 － S K 4(図 150)

第 34 調査区の北側で検出した土坑である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位N -43° - E、検出面の標高は 37.2m である。長軸約 1.2m 以上、短軸約 1.20m、深さ約 0.10m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は上層が灰黄褐細砂～中粒砂、下層がオリーブ褐シルト混じり細砂である。

遺物は須恵器片が出土したが、細片であるため、詳細な時期は不明である。

34 － S K 5(図 150)

第 34 調査区の南側で検出した卵型を呈する土坑である。主軸方位N -85° - E、検出面の標高は 37.1m である。長軸約 1.20m、短軸約 0.70m、深さ約 0.10m を測る。断面形状は浅い皿状にテラスである。

埋土は単層で、暗灰黄シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

37 － S K 1(図 151)

第 37 調査区の北側で検出した土坑である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位N -18° - E、検出面の標高は 35.8m である。長軸 1.10m、短軸約 0.5m 以上、深さ約 0.20m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で、暗褐シルト質極細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

37 － S K 2(図 151)

第 37 調査区の南側で検出した土坑と考えられる遺構である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位N -75° - E、検出面の標高は 35.8m である。長軸約 1.9m 以上、短軸約 0.8m 以上、深さ約 0.20m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で暗褐シルト質極細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

39 － S K 2(図 151)

第 39 調査区の中央で検出した土坑である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位N -87° - E、検出面の標高は 36.4m である。長軸約 0.8m 以上、短軸約 0.80m、深さ約 0.30m を測る。断面形状は「へ」の字形である。

埋土は上層がにぶい黄褐細砂混じりシルト、下層がにぶい黄褐シルト混じり細砂とにぶい黄褐細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

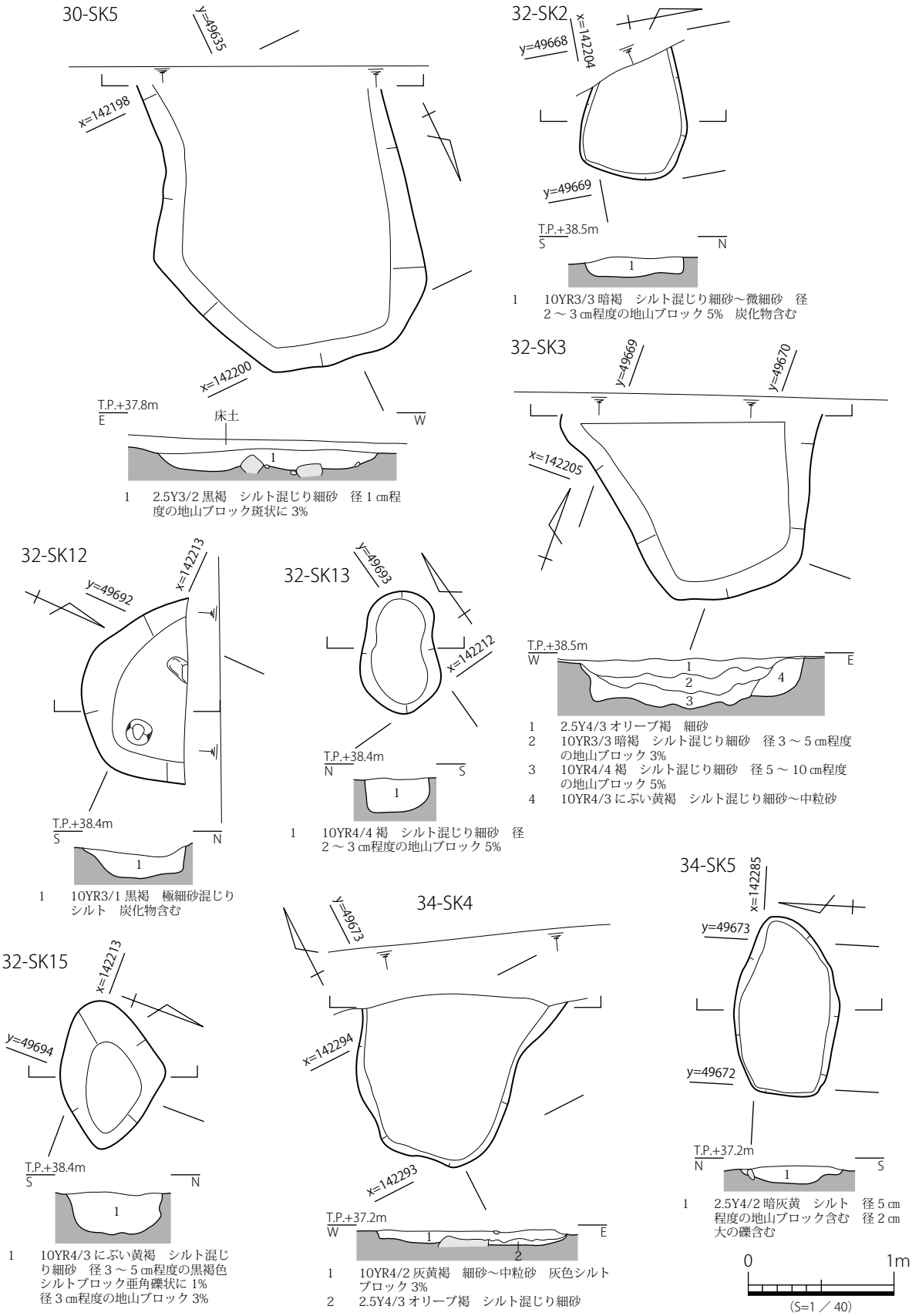


図 150　30-SK5・32-SK2・3・12・13・15・34-SK4・5　平・断面図

46 － ＳＫ 6(図 151)

第 46 調査区の中央で検出した土坑である。撹乱に切られ、調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ -70° - W、検出面の標高は 36.6m である。長軸約 1.3m 以上、短軸約 0.7m 以上、深さ約 0.20m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、黒褐細砂～粘土である。

遺物は土師器高杯 (716) が出土した。出土遺物から古墳時代中期と判断できる。

46 － ＳＫ 10(図 151)

第 46 調査区の東で検出した土坑と考えられる遺構である。46- 竪穴 5 の貼床下で検出し、調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ -77° - W、検出面の標高は 36.45m である。長軸約 0.80m、短軸約 0.5m 以上、深さ約 0.50m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は 3 層に分層でき、黒褐細砂～シルトと黒褐細砂混じりシルト、灰黄褐細砂～シルトである。

遺物は須恵器片・土師器片が出土したが、細片であるため詳細な時期は不明である。

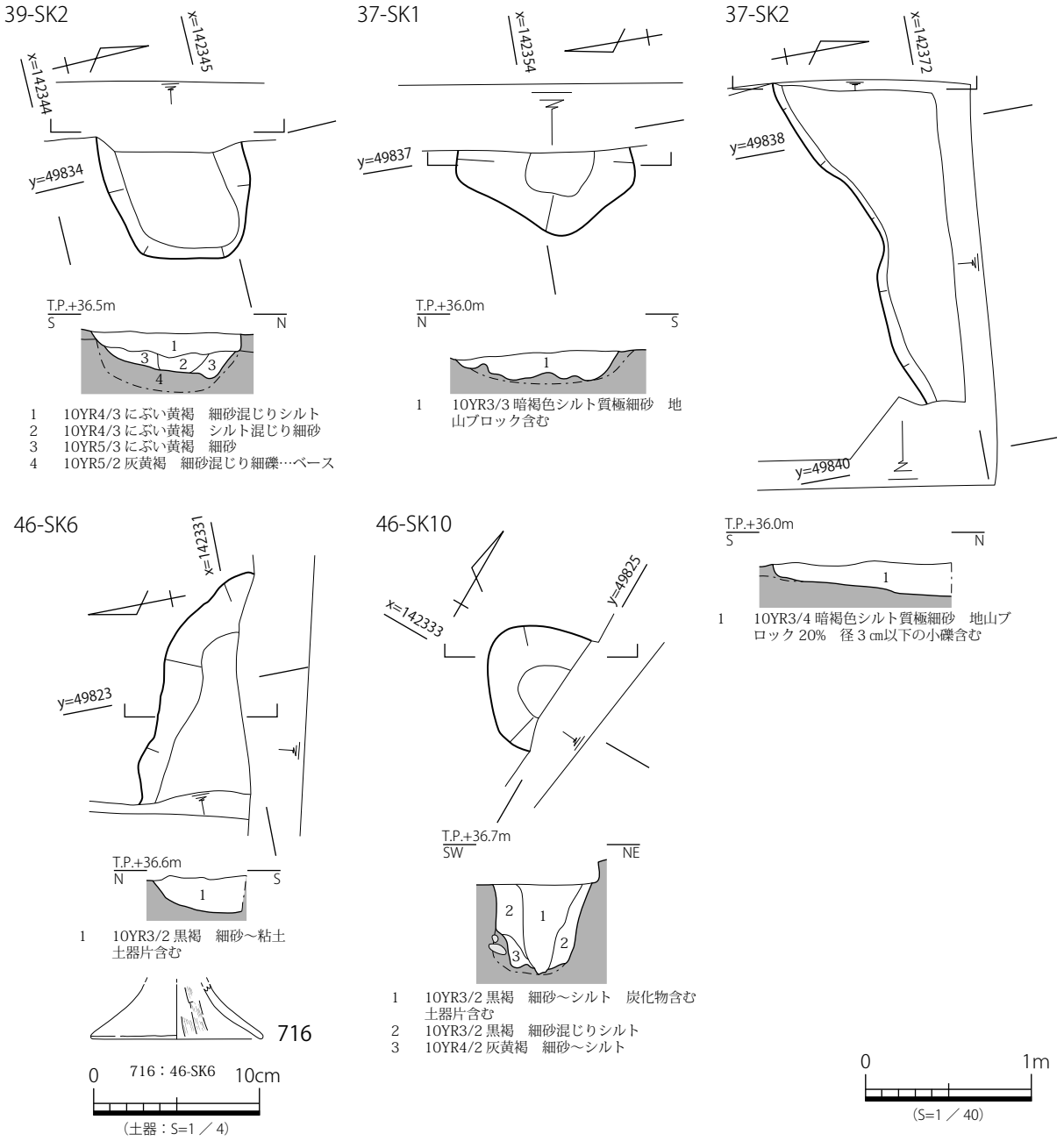


図 151 37-SK1・2・39-SK2・46-SK6・10 平・断面図及び出土遺物実測図

（４）　ＳＸ

29 － ＳＸ 54(図 152)

第 29 調査区の西側で検出した性格不明遺構である。主軸方位Ｎ -48°- W、検出面の標高は 36.9m である。平面形状は三日月形で、長軸約 2.90m、短軸約 0.99m、深さ約 0.23m を測る。断面形状は椀状である。

埋土は上層が暗灰黄シルト質細砂、下層がオリーブ褐シルト質極細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

29 － ＳＸ 60(図 152)

第 29 調査区の西側で検出した性格不明遺構である。主軸方位Ｎ -79°- W、検出面の標高は 36.8m である。平面形状は不整形で、長軸約 5.00m、短軸約 0.97m、深さ約 0.12m を測る。断面形状は方形である。

埋土は単層で、褐シルト質極細砂である。

遺物は須恵器杯蓋 (717) が出土した。出土遺物からＴＫ 23 型式併行期と判断できる。

29 － ＳＸ 61(図 152)

第 29 調査区の西側で検出した性格不明遺構である。29- ＳＸ 60 に切られる。主軸方位Ｎ -41°- Ｅ、検出面の標高は 36.9m である。平面形状は不整形で、長軸約 3.5m 以上、短軸約 0.90m、深さ約 0.20m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が黒褐シルト質極細砂、下層が褐シルト質極細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

30 － ＳＸ 1 (図 153)

第 30 調査区の北西で検出した性格不明遺構である。やや湾曲して主軸方位Ｎ -65°- Ｅで調査区外へ広がる。検出面の標高は 37.6m である。長さ約 5.6m を検出し、幅は約 1.90 ～ 1.20m、深さは 0.20m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、暗灰黄細礫混じりシルト～細砂である。

遺物は出土していため、時期は不明である。

32 － ＳＸ 22(図 153)

第 32 調査区の北西で検出した性格不明遺構である。主軸方位Ｎ -71°- Ｅで調査区外へ広がる。検出面の標高は 38.6 mである。平面形状は不整形で、長軸約 4.92 m以上、短軸約 1.0 m以上、深さ約 0.17 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、灰黄褐極細砂～シルトである。

遺物は出土していないため、時期は不明である。

32 － ＳＸ 23(図 153)

第 32 調査区の西側で検出した性格不明遺構である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ -71°- Ｅ、検出面の標高は 38.5m である。長軸約 2.4m 以上、短軸約 0.8m 以上、深さ約 0.25m を測る。断面形状は方形である。

埋土は上層が暗褐　シルト～極細砂、下層が黒褐細砂混じりシルトと黒褐シルト混じり極細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

34 － ＳＸ 1 (図 154)

第 34 調査区の中央で検出した性格不明遺構である。調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ -76°- W、検出面の標高は 37.2m である。長軸約 5.2m 以上、短軸約 1.70m、深さ約 0.10m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、黄褐シルト混じり細砂である。

遺物は出土していないため、時期は不明である。

34 － ＳＸ 3 (図 154 ～ 155)

第 34 調査区の東側で検出した性格不明遺構である。34- ＳＸ 1 に切られ、調査区外へ広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位Ｎ -35°- Ｅ、検出面の標高は 37.15m である。長軸約 8.3m 以上、短軸約 2.00m、深さ約 0.33m を測る。断面形状は逆台形にテラスである。

埋土は上層がにぶい黄褐シルト混じり細砂、下層が褐シルト混じり細砂～中粒砂である。

遺物は須恵器杯身 (718・719・720)・高杯 (722・723)・提瓶 (721)・壺 (725)・土管 (724) が出土した。出土遺物の年代からＴＫ 43 型式以降と考えられる。

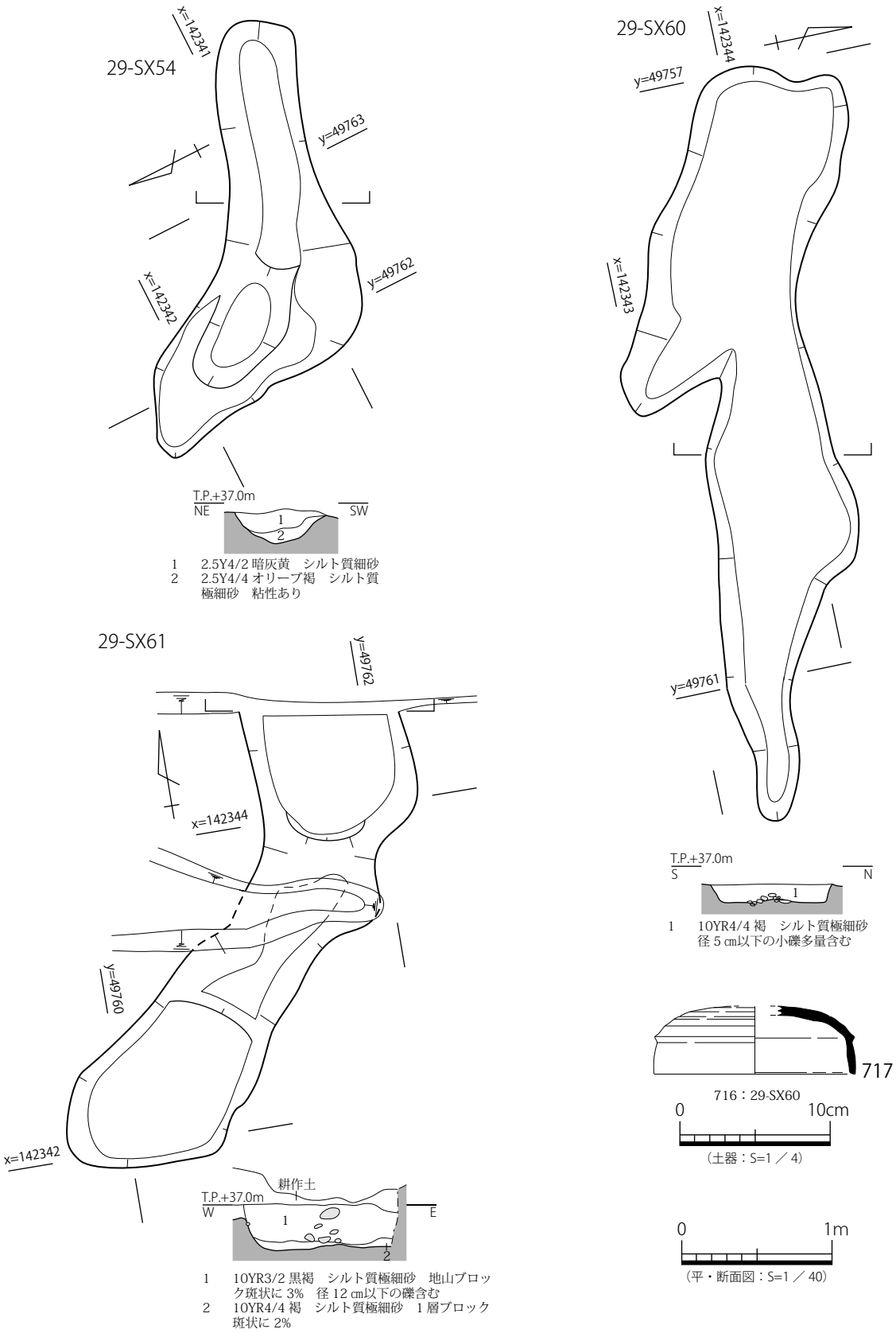


図 152　29-SX54・60・61　平・断面図及び出土遺物実測図

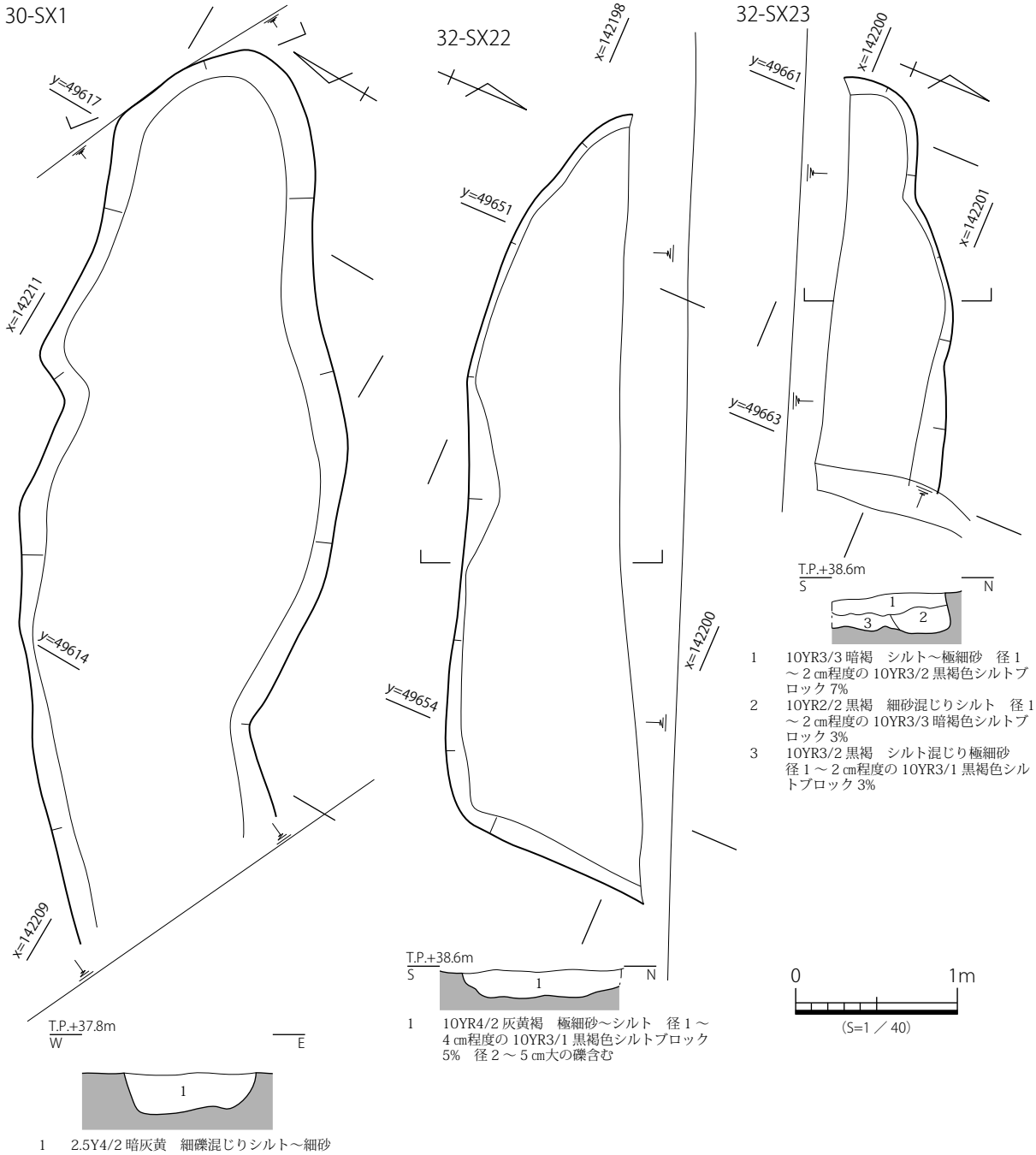


図 153　30-SX1・32-SX22・23　平・断面図

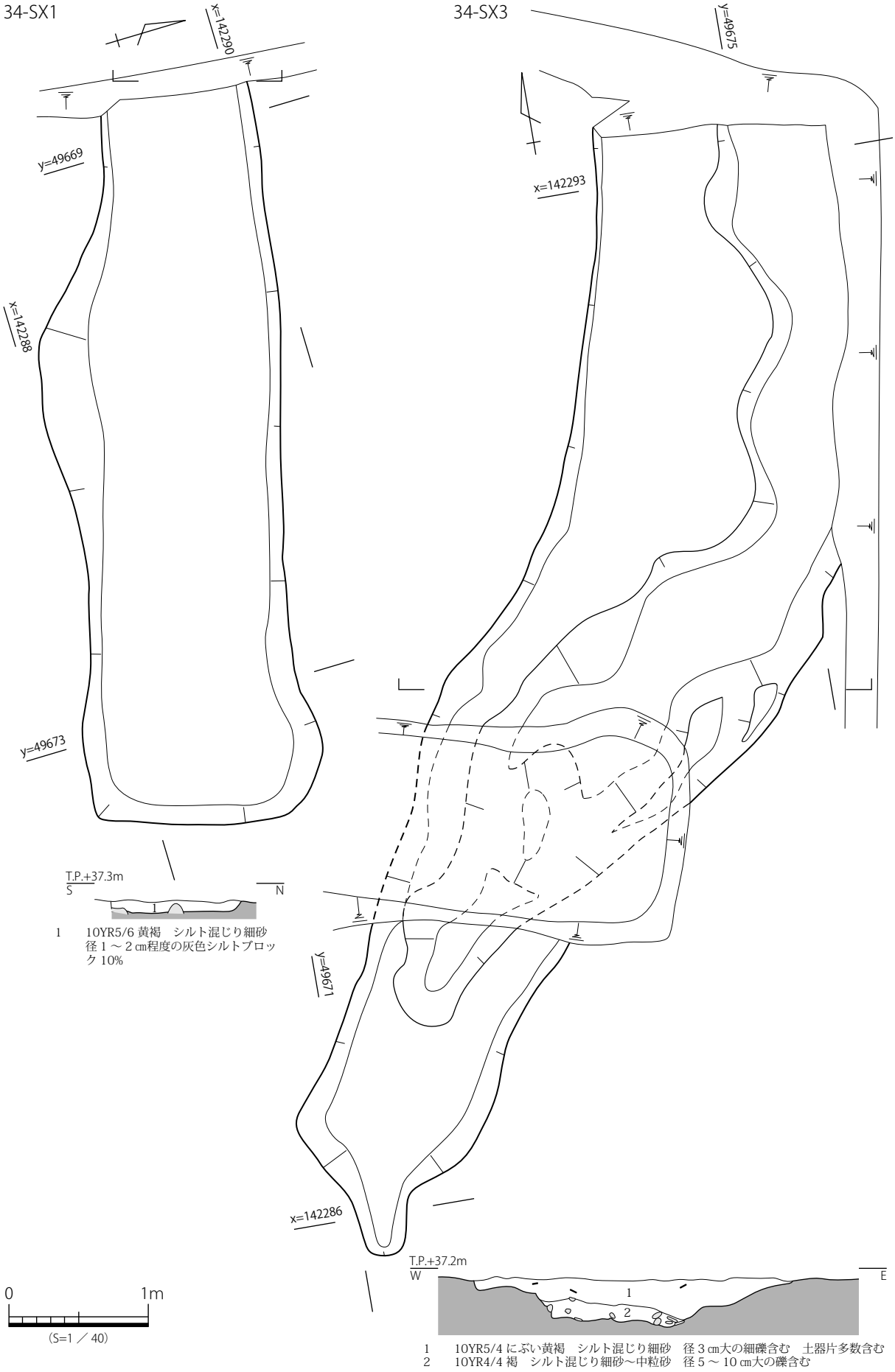


図 154　34-SX1・3　平・断面図

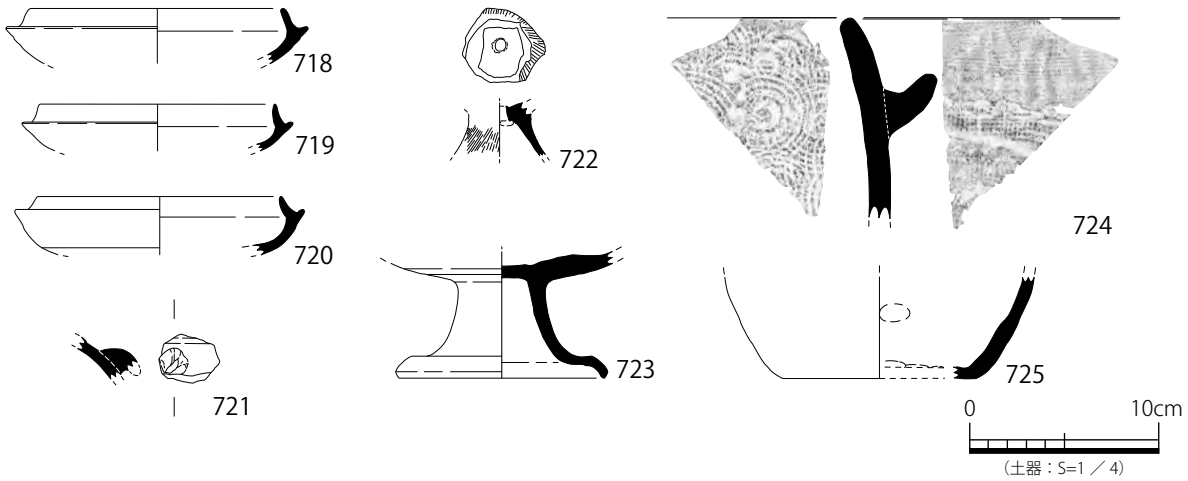


図 155　34-SX3　出土遺物実測図

(５)　ＳＰ

29 －ＳＰ 5(図 156)

第 29 調査区の東側で検出したピットである。検出面の標高は 36.65m である。平面形状は楕円形で、長軸約 0.5m、短軸約 0.4m、深さ約 0.25m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、暗灰黄シルト混じり微細砂である。

遺物は銅銭 (M1) が出土したが表面の剥離が著しく文字は判読できない。

32 －ＳＰ 14(図 156)

第 32 調査区の東側で検出したピットである。検出面の標高は 38.3m である。平面形状は円形で、長軸約 0.5m、短軸約 0.45m、深さ約 0.35m を測る。断面形状は方形である。

埋土は上層が褐細砂混じりシルト、下層がにぶい黄褐シルト混じり細砂である。

遺物は須恵器杯 (726) が出土した。

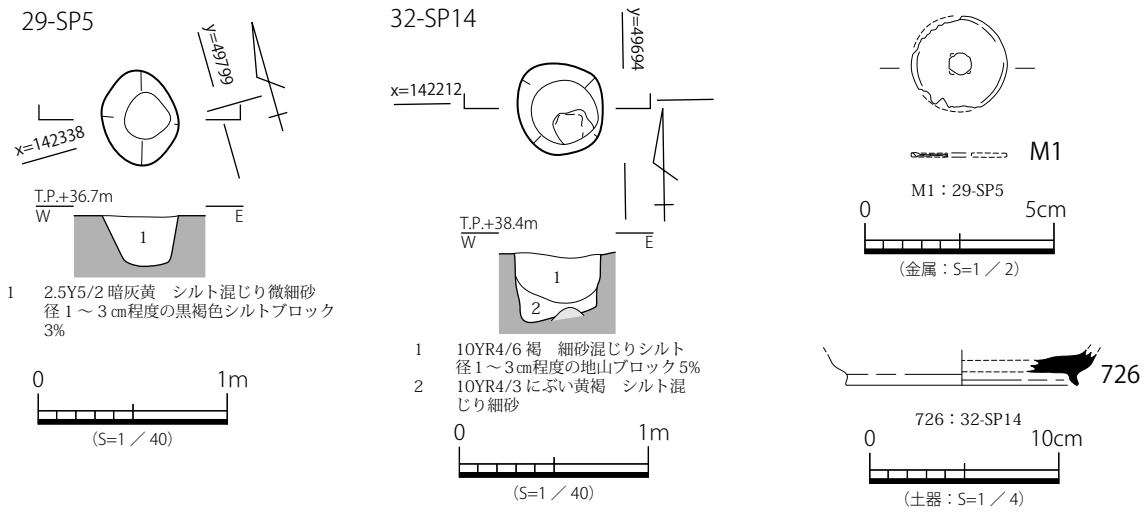


図 156　29-SP5・32-SP14 平・断面図及び出土遺物実測図

本節で紹介する資料は、重機掘削中や遺構面等から出土することにより帰属遺構が不明確な資料や、整理作業の進捗に伴い、遺構出土資料として取り扱うことが困難となった資料である。個々の資料の特長については、観察表を参照して頂きたい。

中央区画　出土遺物

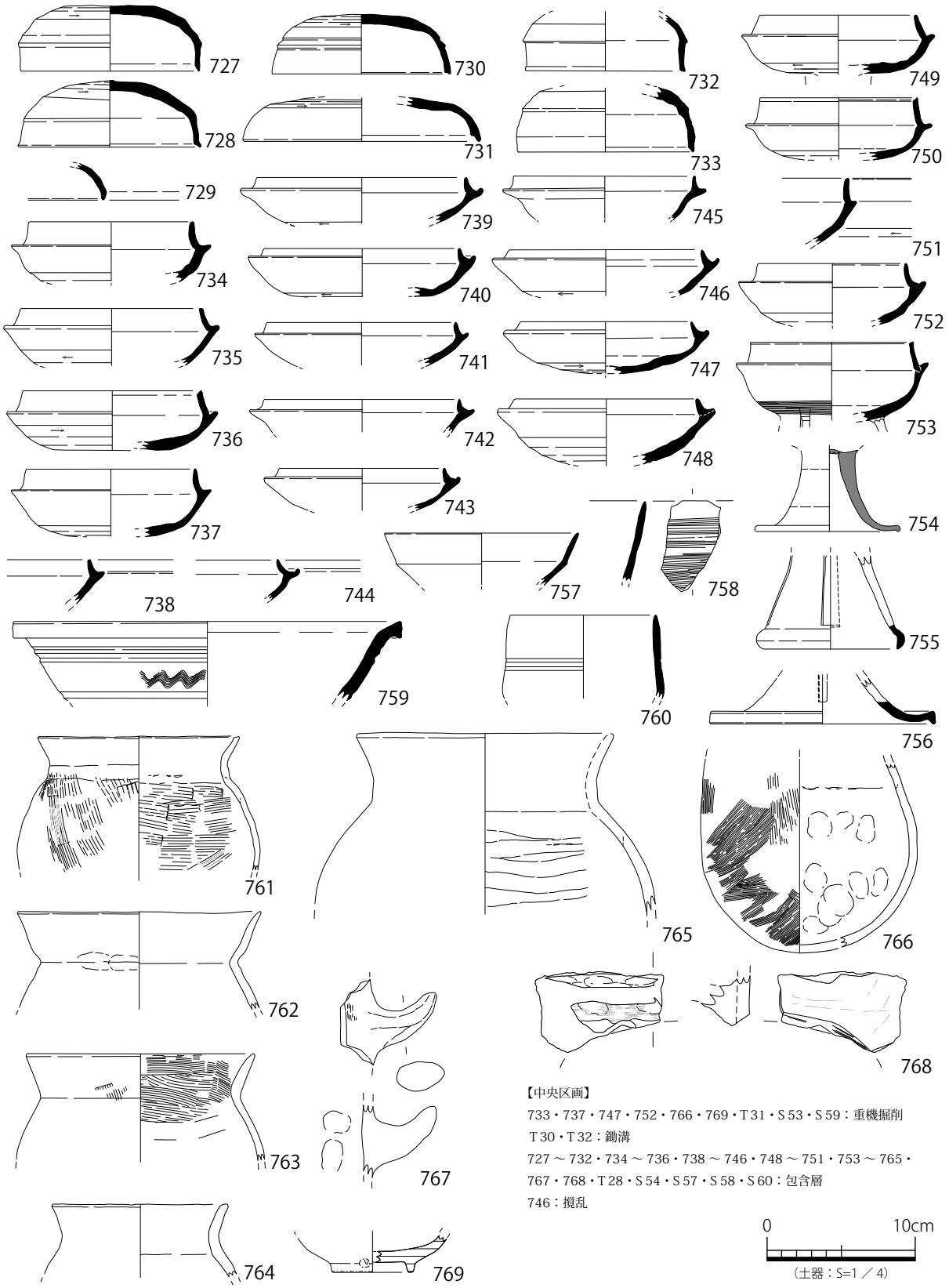


図 157　遺構外出土遺物実測図 (1)

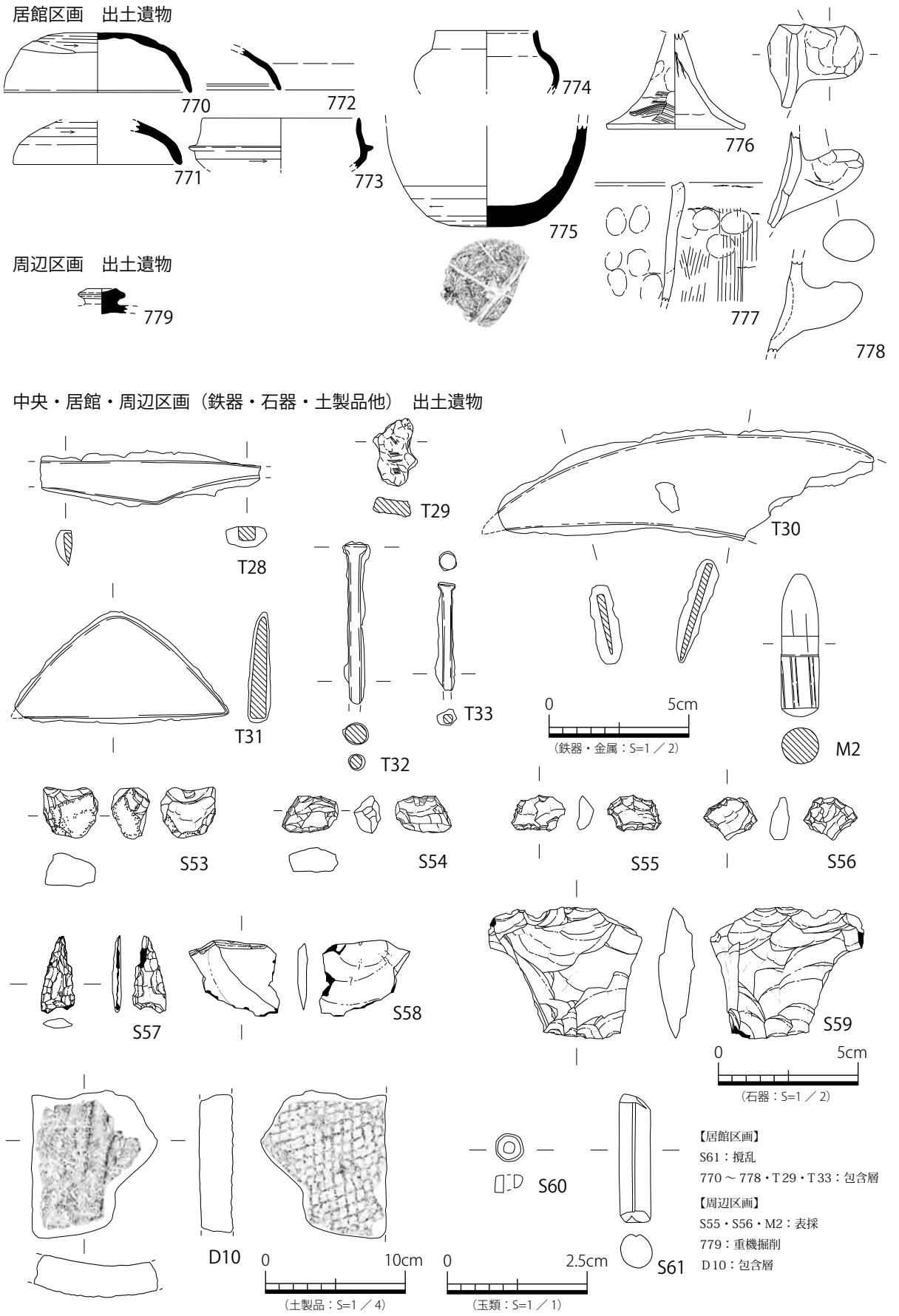


図 158　遺構外出土遺物実測図 (2)

第Ⅳ章　自然科学分析

第１節　14- ＳＤ 70 堆積土壌分析

辻本　裕也・馬場 健司
(パリノ・サーヴェイ株式会社)

はじめに

萩前・一本木遺跡は、香東川扇状地の扇央 (標高 34m) に位置し、発掘調査により、古墳時代後期の遺物が出土する深さ 1.3m 程度の溝が確認されている。溝を充填する堆積物は、土壌・堆積物の偽礫、人為的偽礫、自然堆積物など多様な層相をなす堆積物からなり、各堆積層の由来を把握することが古墳時代後期の人間活動を把握する上で重要と考える。そこで、今回の分析調査では溝の埋没過程に関する情報を得ることを目的として、以下に示す自然科学分析調査を実施し、その検討を行う。

(1) 現地調査

溝充填堆積物の累重状況について、堆積学的・土壌学的な見地から観察記載を行う。同時に不撹乱柱状試料の採取を行う。

(2) 室内分析調査

採取した不撹乱柱状試料について、Ｘ線写真撮影観察、土壌薄片作製鑑定を行い、メソ・ミクロスケールでの堆積・土壌構造の観察記載を行う。また、その結果を踏まえ、土壌生成が進行している層準を中心に植物珪酸体分析を実施し、当時の植生環境に関する情報を得る。

以上の現地調査結果及びＸ線写真観察･薄片観察･植物珪酸体分析結果に基づいて、堆積物の成因や人為的擾乱状況について複合的に検討する。また埋没期を通じた溝周辺の植生や土地利用状況に関する検討を行う。

１．現地調査・試料採取

現地調査は平成 24 年７月９日・10 日の２日間で実施した。調査地点の堆積層の層相観察を行い、調査担当者と打ち合わせた上で、断面より不撹乱柱状試料を採取した。

試料採取地点の層序及び試料採取位置を図 159 に示す。なお、図中の層序区分については後述する分析調査結果を踏まえて表記してある。

２．調査方法

(1) 堆積物Ｘ線写真撮影観察

１地点・２地点・３地点の不撹乱柱状試料について、厚さ 1cm まで板状に成形し、浸潤状態のまま、管電圧 50kvp、電流 3mA、照射時間 270 秒のＸ線強度条件において軟Ｘ線写真撮影を実施した。撮影は (財) 元興寺文化財研究所の協力を得た。なお、軟Ｘ線写真の記載は、堆積物について宮田ほか (1990)、土壌について佐藤 (1990a・b)、森ほか (1992)、成岡 (1993) などを参考とする。

(2) 堆積物薄片作製鑑定

薄片作製鑑定は、図 159 に示す層準について実施する。試料は樹脂による固化の後、ダイヤモンドカッターにより切断して薄片用のチップとした。そのチップをスライドガラスに貼り付け、＃ 180 ～ #800 の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ 0.1mm 以下まで研磨した。さらに、メノウ板上で＃ 2500 の研磨剤を用いて正確に 0.03mm の厚さに調整した。スライドガラス上で薄くなった薄片の上にカバーガラスを貼り付け完成とした。なお、盛土の由来を検討するために盛土直下の堆積物についても薄片鑑定を併せて実施した。

薄片観察はメソスケール・ミクロスケールでの観察を行う。メソスケールでの観察は、主に実体顕微鏡下で行い、堆積・土壌構造の記載を行う。ミクロスケールでの観察は、砂粒の鉱物組成・粒度の状況を観察する。この際の薄片観察結果は、松田ほか (1999) による表示を用いる。これは、試料中の砕屑粒について､中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砕屑粒を構成する鉱物片及び岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、試料の地質学的情報だけではなく、試料中における砂の含量や粒径組成により、試料の構造的な特徴も見出すことができる。

(3) 植物遺体同定

植物珪酸体分析は、乾燥重量を計測後、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム：比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。分析残渣から一定量を計り取り、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に産出するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) 及び葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下､機動細胞珪酸体と呼ぶ) を､近藤 (2004) の分類を参考にして同定･計数する。

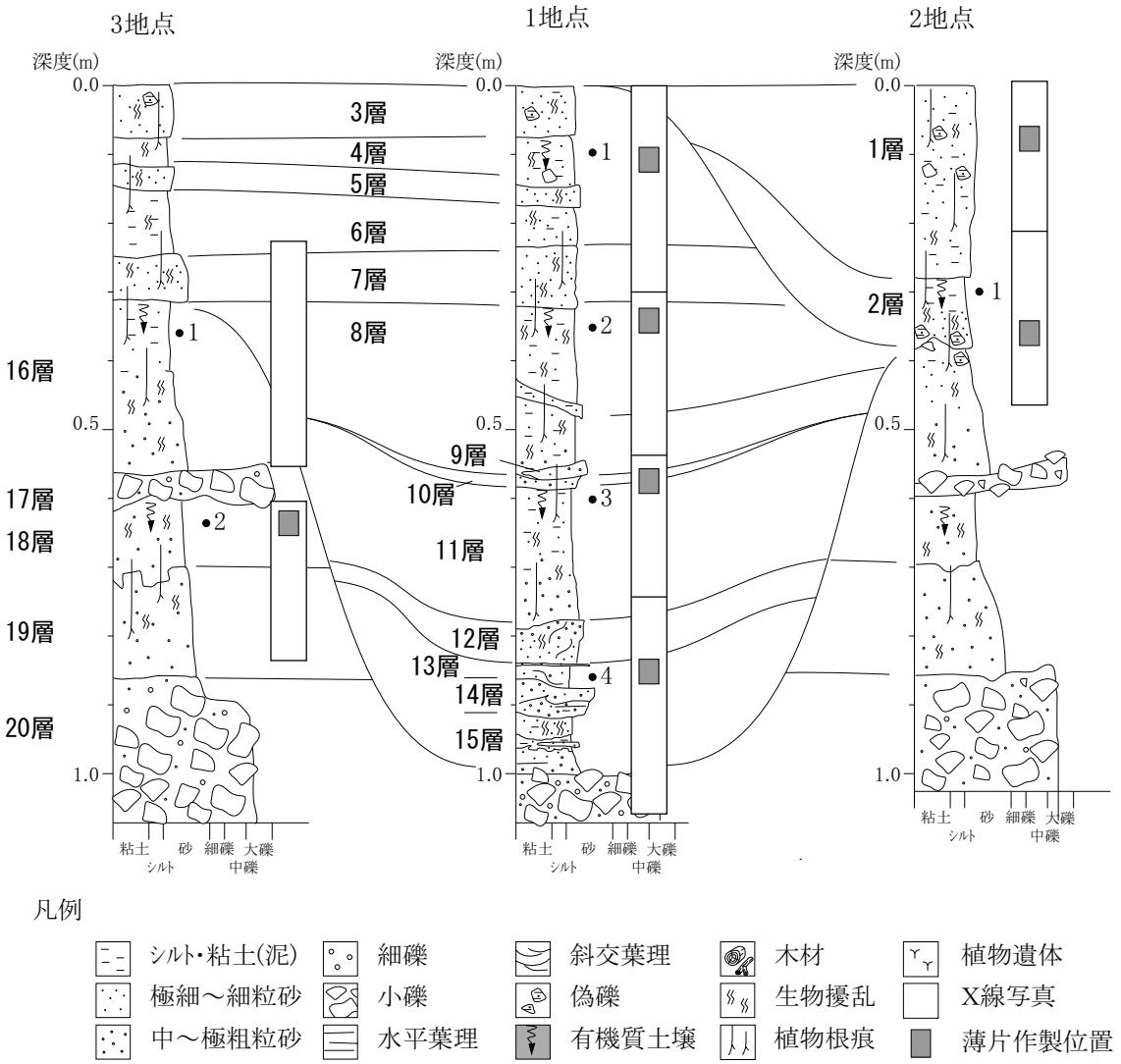


図 159　調査地点の層序及び分析資料採取位置

※サンプル採取位置は、14-SD70 のｇ断面

結果は、堆積物 1g 当たりの植物珪酸体含量の一覧表として示す。

３．分析結果

３－１．Ｘ線写真及び薄片観察結果

ここでは、１地点～３地点の試料及びＸ写真・薄片観察結果について記載する。試料及びＸ線写真を図 160 ～ 162、土壌薄片写真を図版 1 に示す。

(1) 1 地点

Ｘ線写真観察の結果、１地点の溝充填堆積物は３層から 15 層に区分される。各層の層相について以下に記載する。

３層：比較的淘汰の良い泥混じり極細粒～細粒砂からなる。全体に現生植物の根成孔隙が密に分布する。Ｘ線写真では明色を呈しており、密度の高い堆積物からなることが確認される。著しく擾乱されている。

４層：やや腐植に富む泥質極細粒砂からなる。全体に現生植物の根成孔隙が密に分布する。Ｘ線写真では暗色を呈しており、密度の低い堆積物からなることが確認される。著しく擾乱されており、下位層との層界は不明瞭である。

５層：比較的淘汰の良い泥混じり極細粒～細粒砂からなる。全体に現生植物の根成孔隙が密に分布する。Ｘ線写真では明色を呈しており、密度の高い堆積物からなることが確認される。著しく擾乱されている。

６層：やや腐植に富む泥質極細粒砂からなる。全体に現生植物の根成孔隙が密に分布する。Ｘ線写真では暗色を呈しており、密度の低い堆積物からなる

ことが確認される。著しく擾乱されており、下位層との層界は不明瞭である。

7層：泥混じり極細粒～細粒砂からなる。全体に現生植物の根成孔隙が密に分布する。X線写真では明色を呈しており、密度の高い堆積物からなることが確認される。著しく擾乱されている。人為的に取り込まれたとみられる中礫が含まれる。

8層：やや腐植に富む泥質極細粒砂からなる。全体に現生植物の根成孔隙が密に分布する。X線写真では暗色を呈しており、密度の低い堆積物からなることが確認される。著しく擾乱されており、下位層との層界は不明瞭である。また、本層より溝斜面に対して平行に堆積している状況が確認される。細粒砂の薄層を挟在する。周囲の土壌の再堆積層とみられる。

9層：泥混じり極粗粒砂～細粒砂からなる。X線写真では明色を呈しており、密度の高い堆積物からなる。初生の堆積構造とみられる葉理構造が不連続であるが確認される。擾乱されている。

10層：泥混じり細粒砂からなり、上方粗粒化する。X線写真及び土壌薄片では明瞭な葉理構造が確認される。下に凸な外形をなす。層相から、比較的短期間に形成された氾濫堆積物若しくは降雨時に周囲から流入した再堆積物の可能性が高い。

11層：やや腐植に富む泥質極細粒砂からなる。X線写真では明暗のトーンが明瞭であるが層状に積層している状況は確認されない。密度の低い堆積物と高い堆積物が混在している状況が窺える。また、これら密度の異なる堆積物の層界は流線状に変形しており、下位堆積物が上位に引きづり上げられているようにもみえる。下位層との層界は明瞭である。

12層：泥混じり細粒砂からなる。X線写真では、本層が水平方向の剪断応力により右方向に土塊として移動している状況が確認される。

13層；泥の葉理を挟在する、腐植質泥からなる。葉理構造が発達するが、X線写真及び薄片写真のいずれでも、変形している状況が確認される。

14層：極細粒砂～細粒砂からなり、著しく変形しており、写真右側では下位の15層と接している状況が確認される。

15層：白色を呈する細粒砂の葉理を挟在する砂質泥からなる。本層もまた著しく変形している。X線写真ではその変形に伴う流線状の構造が明瞭に確認される。なお、15層から11層にかけて確認された変形構造は一連の変形構造と判断される。このような変形構造は、水底下の堆積物で確認される変形構造に類似しているが、葉理の連続性が比較的良いことから、地震動に由来するとは特定できない。

20層：溝の基底をなす砂礫。掘削時の人為的擾乱により著しく乱れている。また、偽礫が散在している状況も確認される。

(2) 2地点

1層：泥質細粒砂からなり、上部ほど密度が高くなる傾向はある。X線写真では明暗のコントラストが確認される。明暗のコントラストの境界で堆積物の粒度が異なっており、その輪郭は亜角を呈するものも認められる。層全体に1mm以下の根成孔隙が密に分布する。人為的営力により形成された埋め土の可能性がある。

2層：やや腐植に富む、炭混じりの砂質泥～泥質砂からなる。X線写真では不明瞭ながら葉理状の構造が確認される。下部には溝再掘削時に生じたとみられる砂質泥・泥質砂の偽礫が散在する。これら偽礫は明暗のコントラストをなす。

16層：泥質細粒～中粒砂からなる。全体に生物擾乱が顕著である。上位層との層界は凹凸が著しい。

(3) 3地点

16層：泥質細粒～中粒砂からなる。全体に生物擾乱が顕著である。層との層界は凹凸が著しい。最上部は密度の高い堆積物からなる。断面の乾燥によるクラックが多数存在する。そのクラックは樹木根とみられる孔隙にそって発達している状況が確認される。本来の堆積は再質泥～泥質砂の積層であったと判断される。氾濫堆積物とみられる。

17層：シート状に堆積する砂礫層である。マトリクスは砂層からなり、葉理構造が部分的に確認される。洪水堆積物とみられる。

18層：生物擾乱の顕著な泥質砂からなる。X線写真でも著しく擾乱されている状況が確認される。相対的に暗色を呈しており、土壌薄片では根成孔隙及び粒団状の構造が確認される。下位層との層界は比較的明瞭である。

19層：塊状をなす細粒～中粒砂からなる。上部は擾乱されているが、X線写真では初生の堆積構造である葉理状の構造が比較的明瞭に確認される。

20層：調査区全体に堆積する流路充填堆積物。肉眼観察により、規則的な礫の配列(インブリケーション)が確認される。20層上部から19層への層

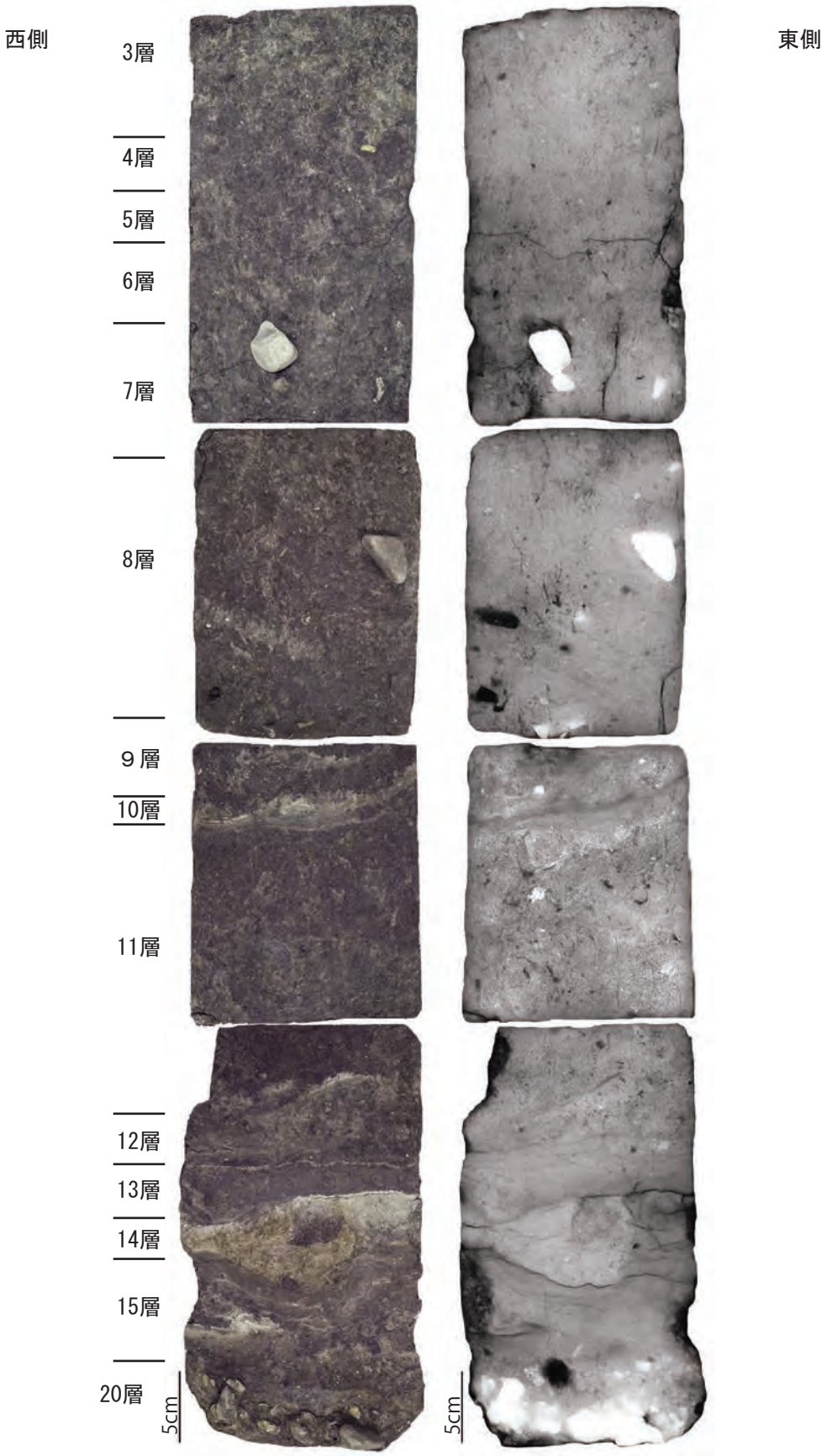


図 160　1 地点の資料及び X 線写真

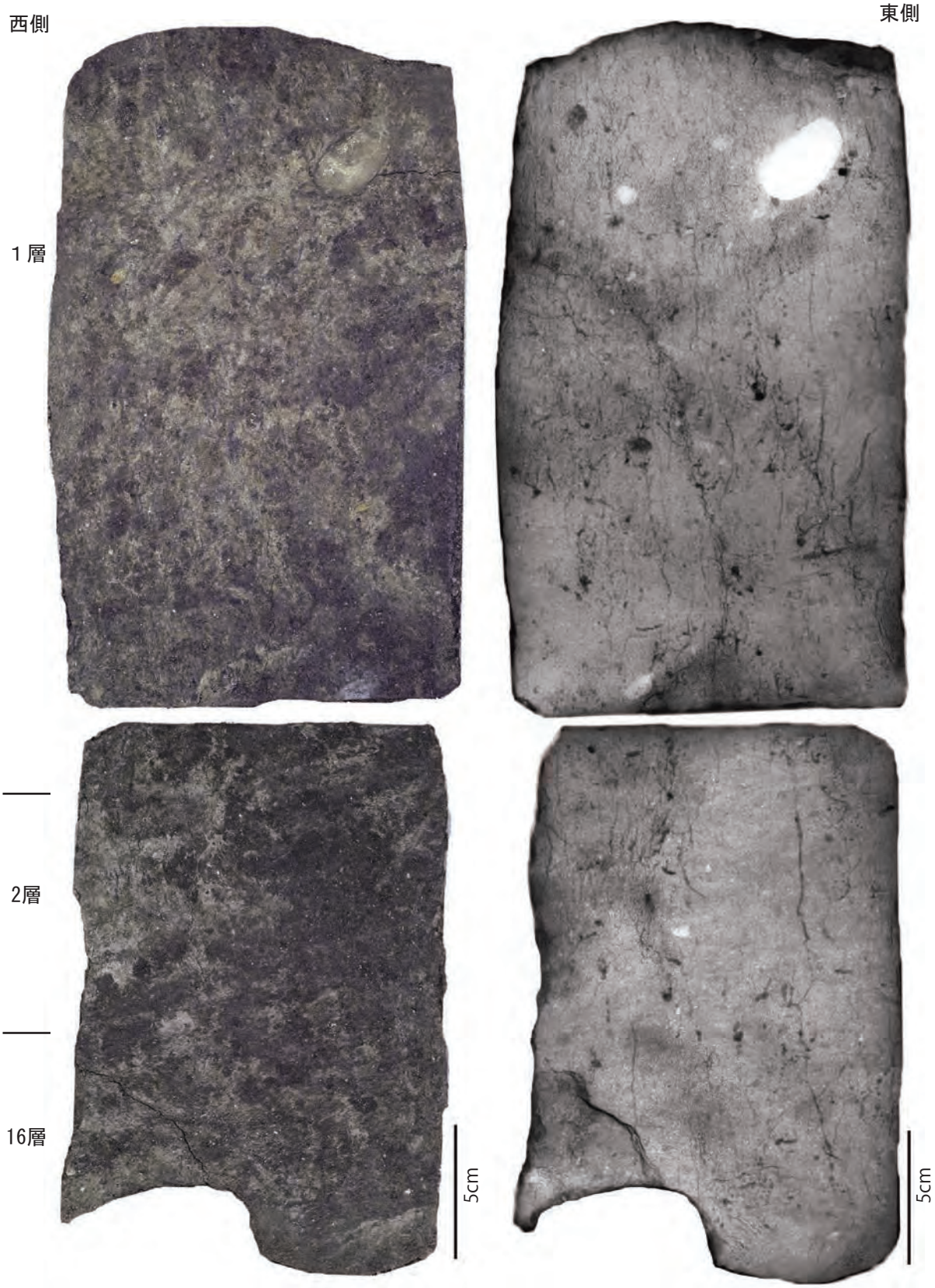


図 161　2 地点の資料及び X 線写真

図 162　3 地点の資料及び X 線写真

4層

13層

1層

8層

18層

2層と16層の層界付近

9層～11層

1cm

図版１　土壌薄片写真

相変化は連続的であり、間に土壌生成層準を挟在しないことから、流路が減水していく過程を示していると判断される。

３－２．植物珪酸体分析結果

結果を表１、図 163 に示す。植物珪酸体を図版１に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔 (溶食痕) が認められる。以下に、各地点の産状を述べる。

・1 地点

下位から上位にかけて、植物珪酸体含量密度に層位変化が見られる。試料番号 4 では約 14,000 個 /g であるが、試料番号 3 と 2 で 5,000 ～ 6,300 個 /g に減少し、試料番号 1 では再び増加して約 1,2000 個 /g となる。

植物珪酸体の産状は各試料で同様であり、メダケ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やイチゴツナギ亜科、ススキ属なども認められる。なお、試料番号 4 では 1 地点の他の試料と比較してヨシ属の含量が多い。試料番号 4 と 3 では、植物珪酸体の他に珪藻殻片も検出される。

また各試料から栽培植物のイネ属由来の短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体が産出する。その含量は概して少なく、短細胞珪酸体が 100 個 /g 未満～ 100 個 /g 程度、機動細胞珪酸体が 100 個 /g 未満～ 200 個 /g 程度である。試料番号 4 と 3 では短細胞列や籾 (穎) に形成される穎珪酸体、試料番号 1 で短細胞列も認められる。

・2 地点

試料番号 2 では、他地点の試料と比較して植物珪酸体含量密度が高く、約 16,000 個 /g である。メダケ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やイチゴツナギ亜科、ススキ属なども認められる。またイネ属もわずかに見られ、短細胞珪酸体が 100 個 /g 未満、機動細胞珪酸体が 200 個 /g 程度である。

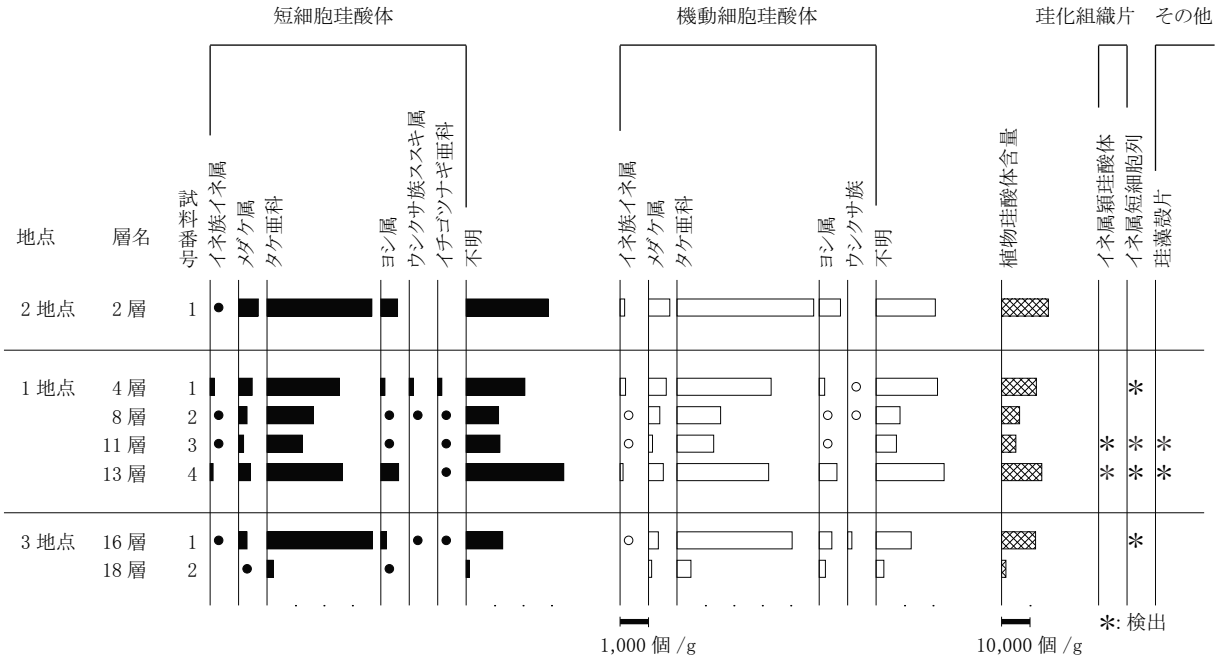
・3 地点

植物珪酸体含量は、試料番号 2 で約 1,500 個 /g、試料番号 1 で約 1,2000 個 /g である。試料番号 2 では分類群や含量が少なく、メダケ属を含むタケ亜科やヨシ属が認められる。試料番号 1 ではメダケ

表１　　植物珪酸体含有量

分　類　群	上段:地点　下段:試料番号						
	1地点				2地点	3地点	
	1	2	3	4	2	1	2
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属	100	<100	<100	100	<100	<100	－
メダケ属	500	300	200	400	700	300	<100
タケ亜科	2,500	1,600	1,200	2,700	3,700	3,700	200
ヨシ属	100	<100	<100	600	600	200	<100
ウシクサ族ススキ属	100	<100	－	－	－	<100	－
イチゴツナギ亜科	100	<100	<100	<100	－	<100	－
不明	2,100	1,100	1,200	3,400	2,900	1,300	100
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属	200	<100	<100	100	200	<100	－
メダケ属	600	400	100	500	700	300	100
タケ亜科	3,300	1,500	1,300	3,200	4,800	4,000	500
ヨシ属	200	<100	<100	600	700	400	200
ウシクサ族	<100	<100	－	－	－	100	－
不明	2,200	800	700	2,400	2,100	1,200	300
合　計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	5,700	3,300	2,800	7,300	7,900	5,700	400
イネ科葉身機動細胞珪酸体	6,600	3,000	2,200	6,900	8,500	6,300	1,100
植物珪酸体含量	12,300	6,300	5,000	14,200	16,400	12,000	1,500
珪化組織片							
イネ属穎珪酸体	－	－	＊	＊	－	－	－
イネ属短細胞列	＊	－	＊	＊	－	＊	－
その他							
珪藻殻片	－	－	＊	＊	－	－	－

数値は含量密度（古/g）を示す。10の位で丸めている(100単位にする).合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている.<100:100個/g未満.－:未検出,＊:検出



乾土 1g あたりの個数で示す。●○は 100 個未満を定性的に示す。

図 163　植物珪酸体含有の層位的変化

属を含むタケ亜科の産出が目立ち、イネ属、ヨシ属やイチゴツナギ亜科、ススキ属なども認められる。イネ属の含量は少なく、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体がいずれも 100 個 /g 未満である。

4．考察

ここでは、上述してきた分析結果に基づいて、調査地点における堆積環境の変化と植物珪酸体からみた周辺植生の変遷について検討する。

(1) 堆積環境変遷

20 層～ 18 層形成期の調査区は、層相から流路帯に位置していたことが推定される。20 層の礫層は瓦状構造 (インブリケーション) をなし、およそ北西から北東への古流行を示している。これら砂礫層は扇状地性の堆積物で、上に凸な外形をなしていることから、充填後に流路変更が行われ、調査地点は高燥な場所に変化したことが推定される。18 層形成期にはこの微高地状上に樹木などが生育していたことが根成孔隙の状況から推定される。

17 層形成期には、再び流路の末端部が進入し、16 層形成期には土壌生成が進行する時期を挟在する、氾濫堆積物が流入する氾濫原の堆積環境に変化した。この段階で調査区への流路の流入は認められなくなり、氾濫原の環境が維持されている。古墳時代の遺構は、これら氾濫堆積物を基盤堆積物として構築されている。

古墳時代の溝充填堆積物の層相からは、15 層から 9 層形成期までの溝内は水位が高かったことが推定される。特に 15 層～ 13 層では明瞭な葉理構造が確認されることから、水流が生じていたことも推定される。また、15 層から 19 層の堆積物は著しく変形していた。この変形構造については地震動による変形の可能性があるが、上位層準からの植物根痕などの擾乱により特定には至っていない。ここでは可能性の指摘に止めておく。

8 層より上位層準では、氾濫堆積物が流入する時期を挟在しながら、土壌生成が進行する状況下で埋没していったことが推定される。氾濫堆積物の流入は上位層準に向けて顕著となることから、当時の調査区の基準面は上昇傾向にあったことが推定される。このような基準面の上昇が人間活動との関連性について発掘調査成果を踏まえた評価が今後必要である。再構築されている溝は、下部は周辺土壌が再堆積しているが、1 層形成期には埋め戻しの作業が行われている。

(2) 植物珪酸体からみた植生変遷

植物珪酸体分析は、古墳時代の遺構の基盤堆積物 (18 層・16 層)、古墳時代の溝充填堆積物 (1 地点)、

と、再構築されている溝充填堆積物２層について実施した。

植物珪酸体含量密度は層位によって差が見られるものの、植物珪酸体の産状はほぼ同様であり、メダケ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やイチゴツナギ亜科、ススキ属などが認められる。

植物珪酸体の産状を見る限り、基盤層の 18 層が形成期、溝充填期、を通じて、周辺には同様なイネ科植物が生育していたことがうかがえる。ただし、16 層より上位の堆積物では栽培種のイネ族が産出するようになり、古墳時代とされる溝充填堆積物下部の 13 層などで湿潤な場所に生育するヨシ属の含量が上位よりも多いなど、多少の植生の違いが確認される。13 層でのヨシ属の相対的な多産傾向は、水の存在を示唆する珪藻の殻片も含まれていたことを考慮すれば、溝内に流水若しくは滞水があったことを示唆する。この点は層相とも同調的であり、溝掘削当初は水が流れていたことが推定される。

栽培植物のイネ属は 16 層形成期以降、集水域において栽培植物のイネ族が生育していたことを示唆する。稲作が行われた水田跡の土壌では、栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壌中に蓄積され、植物珪酸体含量 (植物珪酸体密度) が高くなる。水田跡 (稲作跡) の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体 (機動細胞由来) が試料 1g 当り 5,000 個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている (杉山 ,2000)。また現在の耕作土の分析事例では、イネ属短細胞珪酸体が 135,200 個 /g、機動細胞珪酸体が 23,900 個 /g を検出した事例が報告されている (辻本ほか ,2003)。ただし、大阪湾岸や瀬戸内沿岸域の氾濫原上に立地する考古遺跡から検出された弥生時代前期の水田跡での植物珪酸体分析では、イネ属の機動細胞珪酸体が数百個 /g 程度にとどまる分析結果が多い (辻ほか ,2004)。これらの点を考慮すれば、今回のイネ属含量から調査地点で稲作が行われた可能性を積極的に支持することは難しいものの、溝周辺などで稲作が行われて耕作土が流入した可能性も否定できない。今後さらに周辺に分布する当該期の堆積物についてイネ属の空間的、層位的分布を調べ、稲作の消長や分布について検討する必要があろう。

＜引用文献＞

近藤錬三 2010『プラント・オパール図譜』北海道大学出版会 387p.

杉山真二 2000「植物珪酸体 (プラント・オパール)」辻　誠一郎 (編著)『考古学と自然科学３　考古学と植物学』同成社 189-213.

辻　康男・辻本　裕也・田中　義文・馬場　健司・松元　美由紀 ,2004「付章　前田遺跡の自然科学分析」『前田遺跡 (第 20 地点) 発掘調査概要報告書－弥生前期水田跡の構造と水利動態－』芦屋市教育委員会 1-36.

辻本　裕也・辻　康男・田中　義文・馬場　健司 2003「自然科学分析の成果」『勝部遺跡 大阪国際空港周辺緑地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人大阪府文化財調査研究センター 151-192.

宮田雄一郎・山村恒夫・鍋谷　淳・岩田尊夫・八幡雅之・結城智也・徳橋秀一 1990「淡水生デルタの形成過程－琵琶湖愛知川河口部を例として－ 2. 地質構成と堆積相」『地質学雑誌』96,839-858.

森　也寸志・滋賀摂子・岩間憲治・渡辺紹裕・丸山利輔 1992「土地利用による土壌間隙構造の差異－軟Ｘ線による観察を中心として－」『土壌の物理性 ,No. 66』19-27.

成岡　市 1993「土壌粗間隙の形態とその測定法　土壌の不均一性と物質移動の研究前線」『日本土壌肥料科学雑誌』64-1,90-97.

佐藤幸一 1990a「八郎潟干拓地重粘土水田土の粗間隙の発達とその意義」『農業土木学会誌』60,25-30.

佐藤幸一 1990b「八郎潟干拓地における畑地と草地土壌の粗間隙の発達とその意義」『農業土木学会誌』60,287-292.

第２節　放射性炭素年代

辻本　裕也・高橋　敦
(パリノ・サーヴェイ株式会社)

はじめに

萩前・一本木遺跡では、古墳時代後期～奈良時代を中心とした竪穴建物跡、掘立柱建物跡等の遺構が検出されている。今回の分析調査では、古墳時代の竪穴建物や炭敷土坑 (3-SK28) から出土した炭化材を対象として、遺構の年代確認のための放射性炭素年代測定と、木材利用を検討するための樹種同定を実施する。

1．試料

試料は、5- 竪穴 30 と 3- 竪穴 45 炭焼土層から出土した炭化材各 1 点、3-SK28 から出土した炭化材 3 点 (①～③) の合計 5 点である。放射性炭素年代測定は 5 点全点、樹種同定は 5- 竪穴 30、3- 竪穴 45 炭焼土層、3-SK28 ①の 3 点と、他 2 点の年代測定試料についても実施する。

2．分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

試料に土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する (酸・アルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅 (Ⅱ) と銀箔 (硫化物を除去するため) を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃ (30 分)850℃ (2 時間) で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOX-Ⅱ) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いてデルタ 13C を産出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma;68%) に相当する年代である。なお、暦年較正　は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い (14C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。暦年較正は、測定誤差σ、2σ (σは統計的に真の値が 68%、2σは真の値が 95% の確率で存在する範囲) 双方の値を示す。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類 (分類群) を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982)、Wheeler 他 (1998)、Richter 他 (2006) を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林 (1991) や伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) を参考にする。

3．結果

(1) 放射性炭素年代測定

炭化材の同位体効果による補正を行った測定結

果 (補正年代) と暦年較正結果を表 2 に示す。また、誤差を 2 σで計算した暦年代範囲の確率分布 (2 σ) を図 164 に示す。

炭化材の補正年代は、5- 竪穴 30 が 1,640 ± 30BP、3- 竪穴 45 炭焼土層が 1,590 ± 20BP、3-SK28 ①が 1,620 ± 30BP、3- SK28 ②が 1,500 ± 30BP、3-SK28 ③が 1,620 ± 20BP である。また、測定誤差を 2 σとして計算した暦年較正結果 (確率 1) は、5- 竪穴 30 が cal AD342-443、3- 竪穴 45 炭焼土層が cal AD421-539、3-SK28 ①が cal AD406-537、3-SK28 ②が cal AD534-636、3-SK28 ③が cal AD394-534 である。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を表 3 に示す。炭化材は、広葉樹 2 分類群 (コナラ属コナラ亜属クヌギ節・クリ近似種) に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (Quercus subgen. Quercus sect. Cerris)　ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1 ～ 2 列、道管は孔圏外で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 ～ 20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ近似種 (cf. Castanea crenata Sieb. et Zucc.)

ブナ科クリ属試料は小片であり、年輪界付近で割れている。環孔材で、孔圏外の小道管は漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 ～ 15 細胞高。

木材組織の特徴からクリが最も近いと考えられるが、よく似たコナラ節の可能性もあるため、クリ近似種としている。

4．考察

(1) 各遺構の年代

5- 竪穴 30 から出土した炭化材は、補正年代で 1,600 ± 30BP で、暦年較正結果 (2 σの確率 1 位) は cal AD342-443 であった。この結果から、炭化材の年代として、3 世紀中頃～ 4 世紀中頃が推定される。炭化材は落葉広葉樹のクヌギ節に同定されており、樹齢による大幅な測定誤差が生じる可能性は低いことから、遺構の構築年代も炭化材の年代に近いと考えられる。

3- 竪穴 45 の炭焼土層から出土した炭化材は、補正年代で 1,590 ± 20BP、暦年較正結果は cal AD421-539 であった。この結果から、炭化材は 5 世紀前葉～ 6 世紀中頃の年代が推定される。炭化材は、竪穴 40 と同じくクヌギ節に同定されており、樹齢による年代誤差は考えにくいことから、5- 竪穴 40 よりも新しい時期の住居と考えられる。

3-SK28 から出土した炭化材 3 点は、試料①と③の補正年代が 1,610 ± 20BP と 1,620 ± 20BP で近似する一方、試料②は 1,500 ± 30BP であり、他の 2 点と約 100 年の年代差がある。暦年較正結果でも、試料①が cal AD406-537、試料③が cal AD394-534 で、ほぼ同時期を示すのに対し、試料②は cal AD534-636 となる。試料①、③の年代は、竪穴 45 の炭化材とほぼ同時期を示している。一方、試料③については、新しい時期を示すことから、後代の混入等に由来する可能性がある。

(2) 木材利用

5- 竪穴 30 と 3- 竪穴 45 から出土した炭化材は、いずれも広葉樹のクヌギ節に同定された。クヌギ節は、水辺に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い。竪穴建物跡から出土していることから、構築部材等の強度を要する部位に利用された可能性がある。年代測定の結果では、竪穴 45 よりも竪穴 30 の方がやや古い。この年代差が建物の年代差を示しているとすれば、古墳時代中期～後期頃の本遺跡周辺の低地にクヌギ節が生育し、その木材を継続して利用していたことが推定される。

なお、香川県内では、古墳時代中期～後期の木材利用に関する資料が少ない。確認されている事例をみると、太田下・須川遺跡で柱材にクヌギ節、柄にコウヤマキ、曲物にヒノキ属、日暮・松林遺跡の木樋にアスナロ属が報告された例がある (伊東・山田 ,2012)。

表 2　放射性炭素年代測定結果

地区 遺構 試料№	種類	処理方法	測定年代 BP	δ13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果				Code №.
						誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比	
5-竪穴30	炭化材	AaA	1,490±20	-16.00 ± 0.60	1,600±30 (1,638±25)	σ	cal AD 383 - cal AD 433	cal BP 1,567 - 1,517	0.949	IAAA-123222
							cal AD 495 - cal AD 503	cal BP 1,455 - 1,447	0.051	
						2σ	cal AD 342 - cal AD 443	cal BP 1,608 - 1,507	0.820	
							cal AD 448 - cal AD 463	cal BP 1,502 - 1,487	0.022	
							cal AD 483 - cal AD 532	cal BP 1,467 - 1,418	0.157	
3-竪穴45 炭焼土層	炭化材	AaA	1,640±20	-28.13 ± 0.44	1,590±20 (1,586±24)	σ	cal AD 429 - cal AD 443	cal BP 1,521 - 1,507	0.177	IAAA-123223
							cal AD 450 - cal AD 462	cal BP 1,500 - 1,488	0.141	
							cal AD 483 - cal AD 533	cal BP 1,467 - 1,417	0.682	
						2σ	cal AD 421 - cal AD 539	cal BP 1,529 - 1,411	1.000	
3-SK28 ①	炭化材	AaA	1,620±20	-25.80 ± 0.41	1,610±30 (1,605±26)	σ	cal AD 415 - cal AD 441	cal BP 1,535 - 1,509	0.365	IAAA-123224
							cal AD 484 - cal AD 532	cal BP 1,466 - 1,418	0.635	
						2σ	cal AD 406 - cal AD 537	cal BP 1,544 - 1,413	1.000	
3-SK28 ②	炭化材	AAA	1,520±20	-25.90 ± 0.28	1,500±30 (1,500±25)	σ	cal AD 549 - cal AD 596	cal BP 1,401 - 1,354	1.000	IAAA-123225
						2σ	cal AD 466 - cal AD 482	cal BP 1,484 - 1,468	0.021	
							cal AD 534 - cal AD 636	cal BP 1,416 - 1,314	0.979	
3-SK28 ③	炭化材	AAA	1,600±20	-24.12 ± 0.36	1,620±20 (1,617±24)	σ	cal AD 406 - cal AD 437	cal BP 1,544 - 1,513	0.538	IAAA-123226
							cal AD 488 - cal AD 530	cal BP 1,462 - 1,420	0.462	
						2σ	cal AD 394 - cal AD 534	cal BP 1,556 - 1,416	1.000	

1)処理方法のAAAは、酸処理－アルカリ処理－酸処理を示す。アルカリ濃度が1M未満の場合には、AaAと表記している。
2)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
3)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
4)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。
5)暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を使用した。
6)暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
7)年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。
8)統計的に真の値が入る確率はσは68.3%、2σは95.4%である
9)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

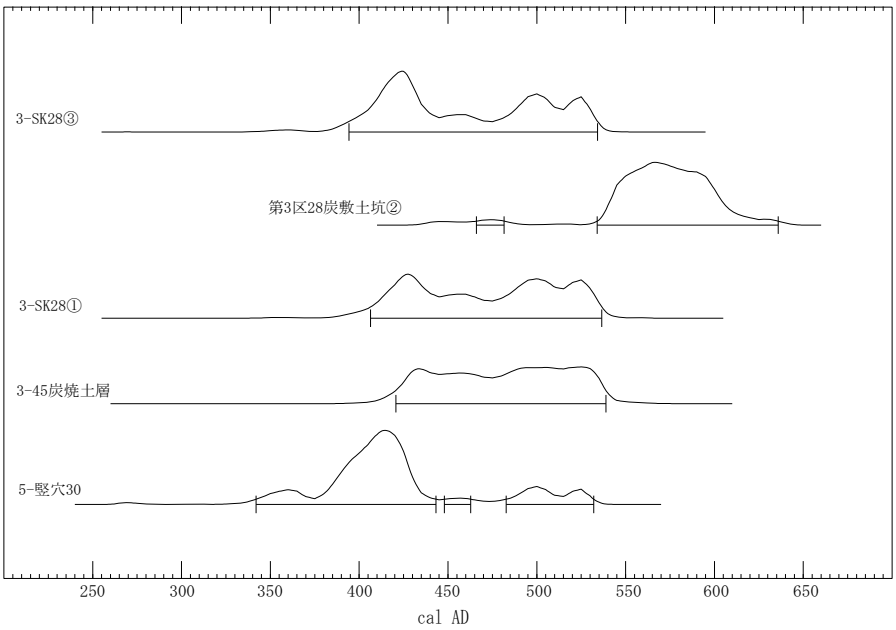
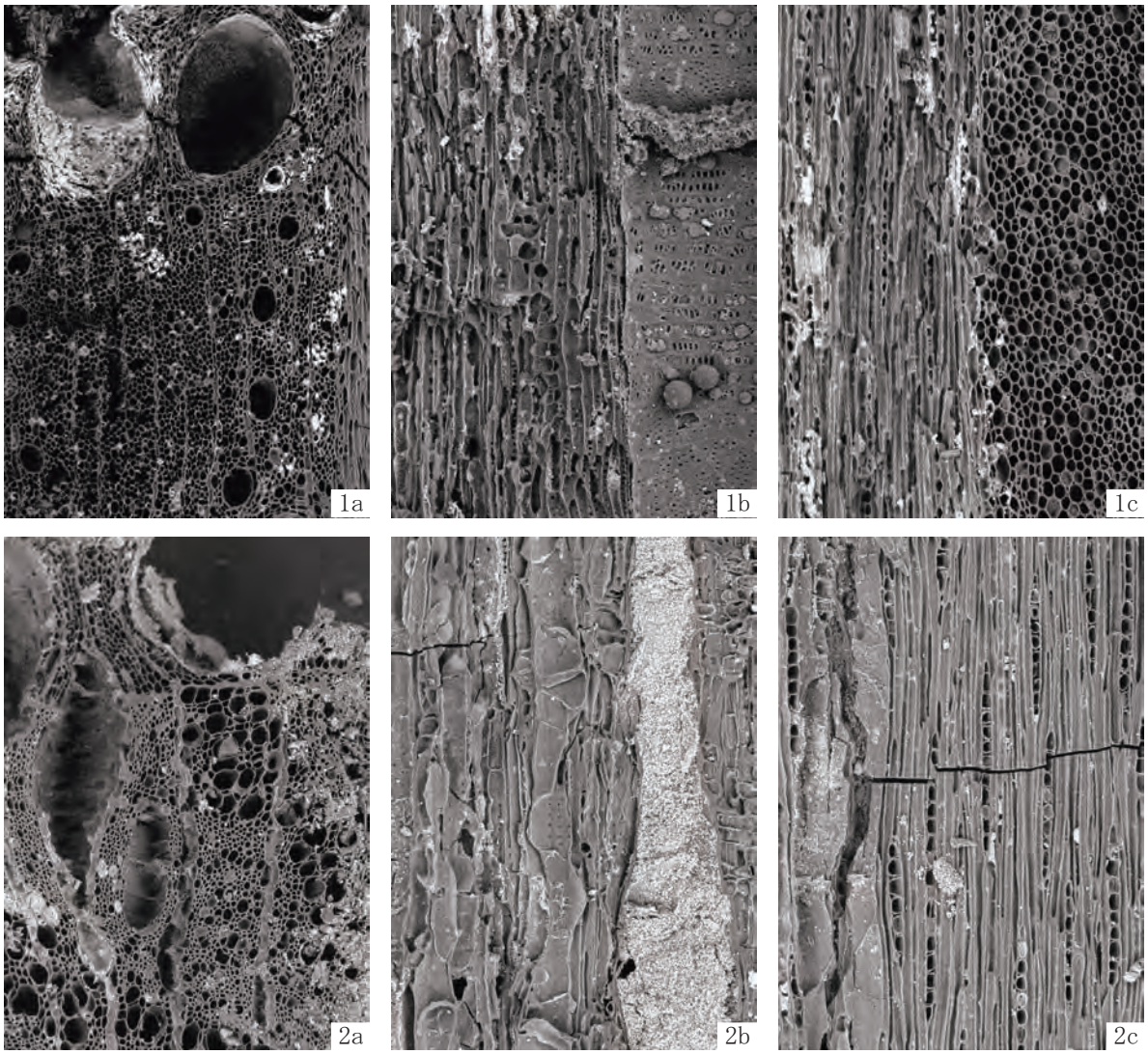


図 164　暦年較正結果（確率分布：2σ）

表 3　樹種同定結果

遺構	層位	番号	種類
5- 竪穴30	―	―	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
3- 竪穴45	炭焼土層	―	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
3- SK28	―	①	クリ近似種
3- SK28	―	②	クリ近似種
3- SK28	―	③	クリ近似種



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(3-竪穴45;炭焼土層)
2. クリ近似種(3-SK28;試料①)
　a:木口,b:柾目,c:板目

200μm:a
200μm:b,c

図版 2　炭化材

＜引用文献＞

林　昭三 1991『日本産木材　顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所

伊東隆夫 1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料 31』京都大学木質科学研究所 81-181.

伊東隆夫 1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料 32』京都大学木質科学研究所 66-176.

伊東隆夫 1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料 33』京都大学木質科学研究所 83-201.

伊東隆夫 1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料 34』京都大学木質科学研究所 30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

伊東隆夫・山田昌久 (編)2012『木の考古学　出土木製品用材データベース』海青社 449p.

島地　謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社 176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編)1998『広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩 (日本語版監修) 海青社 122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

第３節　検出された液状化噴脈における礫径について

山中　稔
（香川大学工学部）

１．調査地点及び噴脈の状況

図 165 に、調査した液状化噴脈の箇所を示す。第 7 調査区及び第 9 調査区内に位置している。

２．第 7 調査区で検出した液状化噴脈について

図版 3(a) ～ (d) に、第 7 調査区で検出した液状化噴脈の状況を示す。地表面において粒径の大きな礫が局所的に帯状に分布し、その帯状分布を横断するようにトレンチ掘削すると、液状化による噴脈の存在が確認された ((a) 図版)。噴脈の状況から、表層部の細粒土を突き破るように噴礫が上昇していることが分かる ((b) 図版)。噴脈の左右の細粒土層の厚さが異なるが、上昇した噴礫により特に左側の地盤が沈下したためと考えられる。 (c) 図版に示す断面において攪乱状態で土質試料を採取した。サンプリング位置は、噴脈内が 7-1 ～ 7-3、液状化を引き起こした土層内が 7-4 と 7-5、噴脈の両側の細粒土層内が 7-6 及び 7-7 である ((d) 図版)。

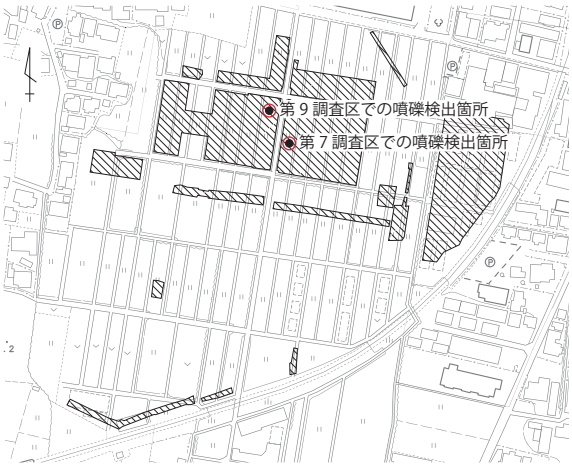
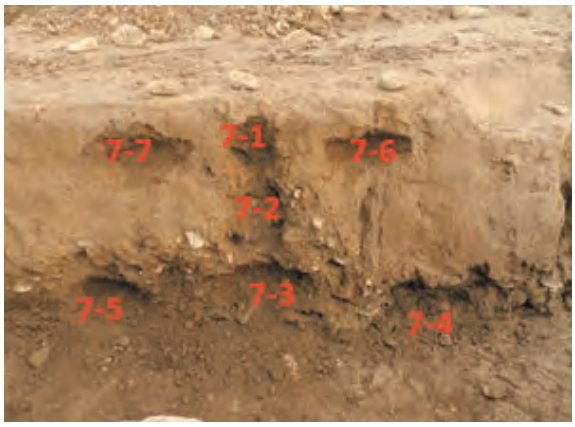


図 165　調査した噴脈検出箇所

(a) 斜め写真

(b) 正面写真

(c) サンプリング断面



(d) サンプリング位置

図版 3　第 7 調査区の噴礫の状況

採取した土質試料を用いて、地盤工学会基準「石材を含む地盤材料の粒度試験方法 (JGS0132-2009)」に準じて粒度試験を実施した。

第 7 調査区の液状化跡から採取した土質試料の粒度試験の結果として、表 4 には粒径の通過質量百分率を、図 166 には粒径加積曲線を、表 5 には粒度試験結果一覧を示す。噴脈内の試料においては、下位の 7-3 試料の粒径が全体的に大きく、上位の 7-2 試料、7-1 試料になるにしたがい、粒径は全体的に小さくなっている。液状化層内の 7-4 試料の粒径は噴礫内の 7-2 及び 7-3 試料と同程度であるが、同じ液状化層内の 7-5 試料は細粒分 (0.075mm 以下) が少なく、礫分 (2 ～ 75mm) が多く、粒径の分布幅が狭い。噴脈の両側から採取した細粒土試料 (7-6 及び 7-7) の粒径は、細粒分が 50％以上と細粒であり、礫分はほとんど含まれていない。

以上のことから勘案すると、地表面下約 1 mに水平に分布する砂礫層が大きな揺れの地震によって液状化現象を発生させた。この砂礫層の上位の細粒土層が、液状化発生の砂礫層に蓋をするように堆積することにより、砂礫層の間隙水圧が急激に上昇した。上昇した間隙水圧は、細粒土層の弱部を貫入して地表部に噴出した。この間隙水圧が、砂礫層を構成する石分 (75mm 以上) や礫分 (2 ～ 75mm) を押し上げて噴脈を形成した。間隙水圧は地表面に近くなるほど小さくなるため、噴脈内の粒径は下位 (7-3) ほど大きく、上位 (7-1) ほど小さくなっている。

表 4　　第 7 調査区の液状化跡の粒径の通過質量百分率

粒径（mm）	通過質量百分率(%)						
	噴脈内			液状化層内		噴脈両側の細粒土層内	
	7 - 1	7 - 2	7 - 3	7 - 4	7 - 5	7 - 6	7 - 7
122.8	100		100.0				
120.1				100			
75.0	95	100.0	97.0	96.0	100.0		
53.0	89.6	88.4	92.3	90.4	98.4		
37.5	82.7	74.0	78.9	71.6	94.5		
26.5	75.2	67.2	71.3	58.7	87.7		
19.0	68.9	56.7	61.6	50.1	80.4		
9.5	59.8	43.6	44.6	37.4	58.6		100.0
4.75	53.9	34.7	33.0	31.1	29.5	100.0	99.9
2.00	47.5	26.4	23.3	24.9	12.9	99.9	99.5
0.850	42.2	20.0	13.6	17.5	7.9	99.6	98.3
0.425	38.1	15.6	8.9	12.3	4.8	98.3	93.9
0.250	35.8	13.6	7.5	10.6	4.0	95.2	87.1
0.106	31.2	11.3	6.3	8.8	3.4	76.4	62.3
0.075	28.9	10.6	6.0	8.3	3.2	67.9	53.8

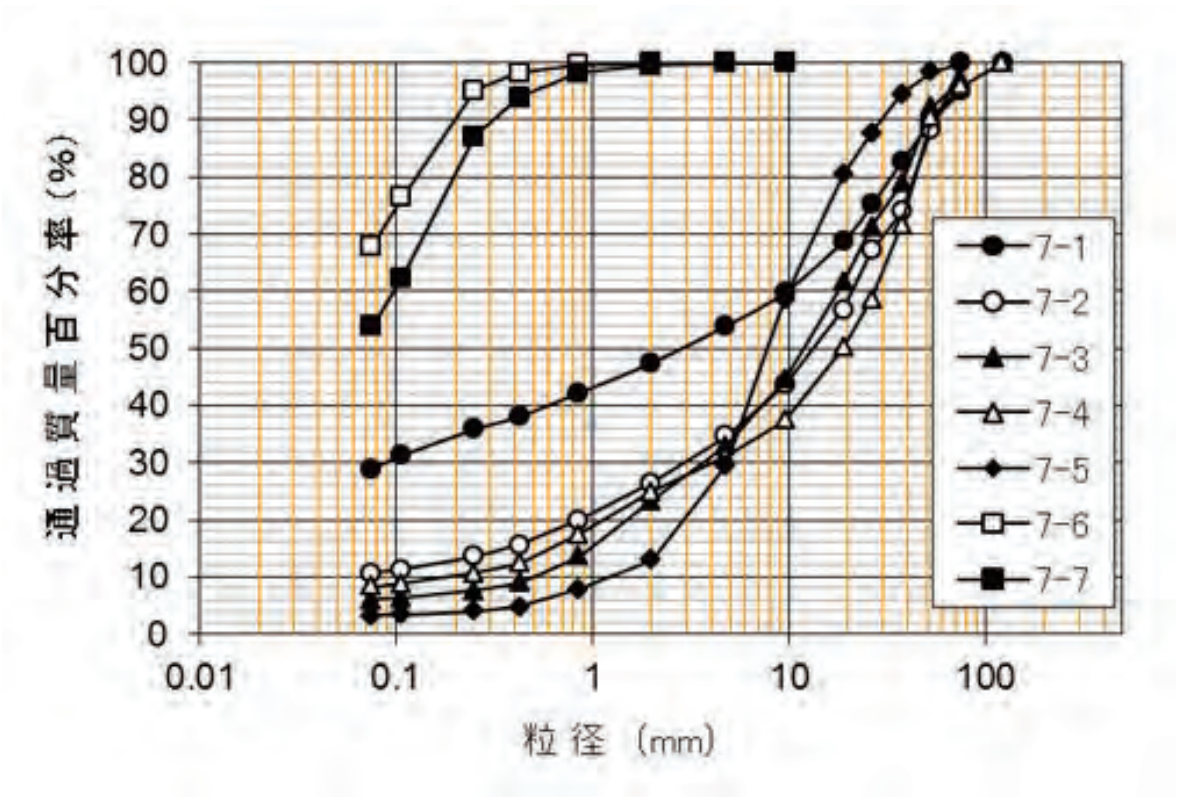


図 166　粒径加積曲線（第 7 調査区）

表 5　　粒度試験結果一覧表（第 7 調査区）

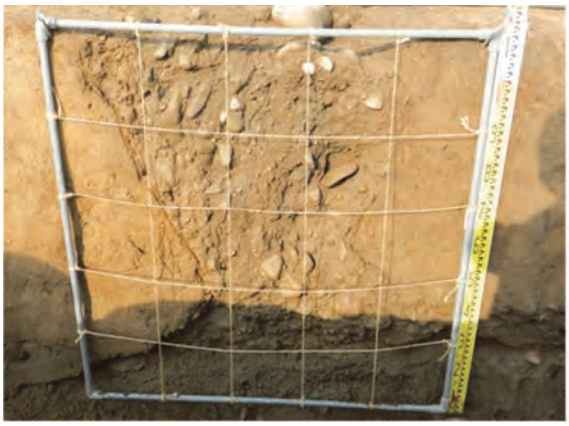
試料番号	噴脈内			液状化層内		細粒土層内	
	7 - 1	7 - 2	7 - 3	7 - 4	7 - 5	7 - 6	7 - 7
石分（75mm以上）（%）	14.6	-	13.9	7.8	-	-	-
粗礫分（19～75mm）（%）	16.5	43.3	24.5	42.1	19.6	-	-
中礫分（4.75～19mm）（%）	15.0	22.0	28.6	19.0	50.9	-	0.1
細礫分（2～4.75mm）（%）	6.4	8.3	9.7	6.2	16.6	0.1	0.4
粗砂分（0.85～2mm）（%）	5.3	6.4	9.7	7.4	5.0	0.3	1.2
中砂分（0.25～0.85mm）（%）	6.4	6.4	6.1	6.9	3.9	4.4	11.2
細砂分（0.075～0.25mm）（%）	6.9	3.0	1.5	2.3	0.8	27.3	33.3
シルト分（0.005～0.075mm）（%） 粘土分（0.005mm以下）（%）	28.9	10.6	6.0	8.3	3.2	67.9	53.8
2mmふるい通過質量百分率（%）	47.5	26.4	23.3	24.9	12.9	99.9	99.5
0.075mmふるい通過質量百分率（%）	28.9	10.6	6.0	8.3	3.2	67.9	53.8
最大粒径　D_{max}　(mm)	122.8	75.0	122.8	120.1	75.0	4.75	9.5
60%粒径　D_{60}　(mm)	9.70	21.0	18.0	27.7	9.87	-	0.1
50%粒径　D_{50}　(mm)	2.90	14.5	12.2	18.9	7.78	-	-
30%粒径　D_{30}　(mm)	0.09	3.04	3.73	4.06	4.82	-	-
10%粒径　D_{10}　(mm)	-	-	0.55	0.19	1.21	-	-
均等係数　$U_C=D_{60}/D_{10}$	-	-	32.5	148.7	8.16	-	-
曲率係数　$U_C'=D_{30}^2 / (D_{10}\times D_{60})$	-	-	1.39	3.20	1.94	-	-

３．第９調査区で検出した液状化噴脈について

図版 4(a) ～ (d) に、第９調査区で検出した液状化噴脈の状況を示す。地表面で帯状に分布する砂礫土を横断するように深さ約 1.2m でトレンチ掘削された ((a) 図版)。液状化の発生により生じた噴脈の幅は、地表部で約 70cm、下部ほど狭くなり約 50cm となる。噴脈の断面は上側に広がった形となっている ((b) 図版、(c) 図版)。サンプリング位置は、噴脈内が 9-1 ～ 9-3、液状化を引き起こした土層内が 9-4 と 9-5、噴脈の両側の細粒土層内が 9-6 及び 9-7 である ((d) 図版)。

(a) 斜め写真

(b) 正面写真



(c) サンプリング断面

(d) サンプリング位置

図版 4　第 9 調査区の噴礫の状況

第９調査区の液状化跡から採取した土質試料の粒度試験の結果として、表６には粒径と通過質量百分率を、図 167 には粒径加積曲線を、表７には粒度試験結果一覧を示す。

噴脈内の試料の粒度分布は、下位の 9-3 から上位の 9-1 になるにしたがい、粒径は全体に大きくなっている。大きな粒径の礫が地表部付近まで噴出したことが分かる。液状化層内の 9-4 と 9-5 は、9-4 の方が砂分 (0.075 ～ 2.00mm) を多く含み 9-5 より細粒である。9-4 と 9-5 の最大粒径は 75.0mm と粗礫分を含んでいる。噴脈の両側から採取した細粒土試料 (9-6 及び 9-7) の粒径は、細粒分 (0.075mm 以下) を多く含むが、第７調査区の細粒土試料 (7-6 及び 7-7) と比較すると、若干細粒分含有量が小さい値となっている。

表 6　第 9 調査区の液状化跡の粒径の通過質量百分率

粒径（mm）	通過質量百分率(%)						
	噴脈内			液状化層内		噴脈両側の細粒土層内	
	9 - 1	9 - 2	9 - 3	9 - 4	9 - 5	9 - 6	9 - 7
117.4	100						
94.0		100.0					
75.0	94.0	95.0		100.0	100.0		
53.0	81.6	86.3	100.0	92.8	80.8		
37.5	65.4	79.0	97.8	88.4	65.3		
26.5	57.5	72.8	94.7	83.5	56.8		
19.0	50.4	67.7	93.6	78.7	50.2		
9.5	41.6	58.4	85.8	70.6	41.9	100.0	100.0
4.75	35.7	51.7	73.2	62.2	36.6	99.8	99.9
2.00	29.9	44.3	55.2	51.8	30.7	99.4	99.7
0.85	26.4	36.0	39.4	41.9	24.8	97.7	99.0
0.425	21.0	26.0	27.7	27.0	17.1	92.8	94.9
0.250	16.1	17.4	20.3	16.3	12.1	82.1	77.1
0.106	10.3	9.1	9.7	6.0	7.7	56.1	40.4
0.075	9.4	8.1	8.6	5.1	7.0	49.4	34.9

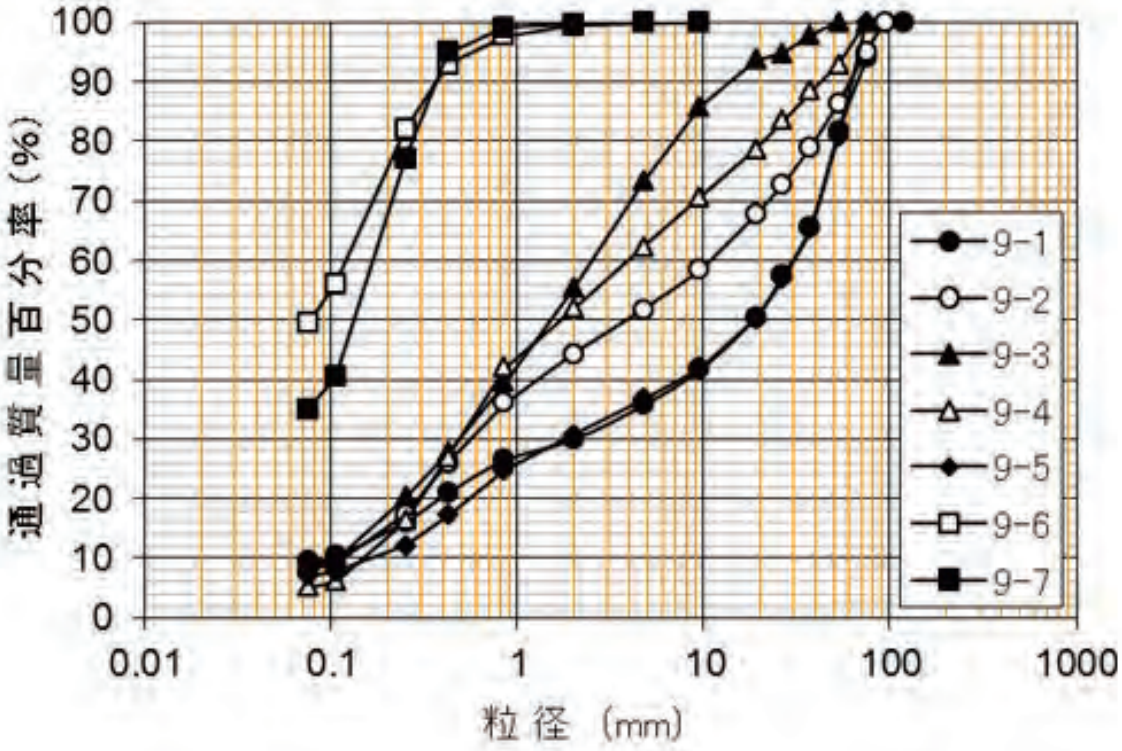


図 167　粒径加積曲線（第 9 調査区）

表７　　粒度試験結果一覧表（第９調査区）

試料番号	噴脈内			液状化層内		細粒土層内	
	９－１	９－２	９－３	９－４	９－５	９－６	９－７
石分（75mm以上）（%）	11.6	5.8	-	-	-	-	-
粗礫分（19～75mm）（%）	38.0	26.5	6.4	21.3	49.8	-	-
中礫分（4.75～19mm）（%）	14.7	16.0	20.4	16.5	13.6	0.2	0.1
細礫分（2～4.75mm）（%）	5.8	7.4	18.0	10.4	5.9	0.4	0.2
粗砂分（0.85～2mm）（%）	3.5	8.3	15.8	9.9	5.9	1.7	0.7
中砂分（0.25～0.85mm）（%）	10.3	18.6	19.1	25.6	12.7	15.6	21.9
細砂分（0.075～0.25mm）（%）	6.7	9.3	11.7	11.2	5.1	32.7	42.2
シルト（0.005～0.075mm）（%） 粘土分（0.005mm以下）（%）	9.4	8.1	8.6	5.1	7.0	49.4	34.9
2mmふるい通過質量百分率（%）	29.9	44.3	55.2	51.8	30.7	99.4	99.7
0.075mmふるい通過質量百分率（%）	9.4	8.1	8.6	5.1	7.0	49.4	34.9
最大粒径　D_{max}　(mm)	117.4	94.0	55.0	75.0	75.0	9.50	9.50
60%粒径　D_{60}　(mm)	30.2	10.9	2.53	4.00	30.9	0.12	0.18
50%粒径　D_{50}　(mm)	18.6	3.91	1.53	1.67	18.8	0.08	0.14
30%粒径　D_{30}　(mm)	2.04	0.55	0.49	0.49	1.78	-	-
10%粒径　D_{10}　(mm)	0.09	0.13	0.11	0.17	0.19	-	-
均等係数　$U_C=D_{60}/D_{10}$	319.4	84.4	22.2	23.6	166.3	-	-
曲率係数　$U_C'=D_{30}^2 / (D_{10}\times D_{60})$	1.47	0.22	0.85	0.35	0.56	-	-

４．液状化を引き起こした地震動について

一般に液状化現象は、礫分や細粒分の含有率が多くなるほど発生しにくくなり、砂分が多いほど液状化が発生しやすいと言われている。また、一般に地震加速度が大きいほど､地震動継続時間が長いほど、液状化により地表面に噴出する噴礫や噴砂の粒径は大きくなるとされている。

第７調査区及び第９調査区での液状化による噴脈から採取した砂礫試料の粒度試験の結果から、一般的に液状化を引き起こしやすいと考えられてる粒径よりも大きな粒径の礫を多く含むことが明らかとなり、この液状化を引き起こした地震動は極めて大きかったことが推測される。

41 －竪穴 1 と地震痕跡 (図 168)

第 41 調査区東側断面で検出した竪穴建物である。撹乱と 41-SD 1 に切られ、断面でのみ竪穴建物の存在を確認した。

竪穴建物の貼床及びその上面に堆積している炭化物層と焼土層は、建物の南側では安定せず、盛り上がり波打った状況を呈する。

また、基本層序では調査区南側で不規則な堆積が確認でき (a ～ d 層)、竪穴建物のベースとなるⅣ層は、a ～ d 層の下層へと潜り込む。

こうした堆積の乱れは、地震の影響により基本層序及び竪穴建物内の堆積が変形したものと推定できる。噴礫や噴砂のように地表面に地震痕跡が確認できる以外にも、地下内部で部分的に不規則な変化が起こりうることが確認できた事例といえる。

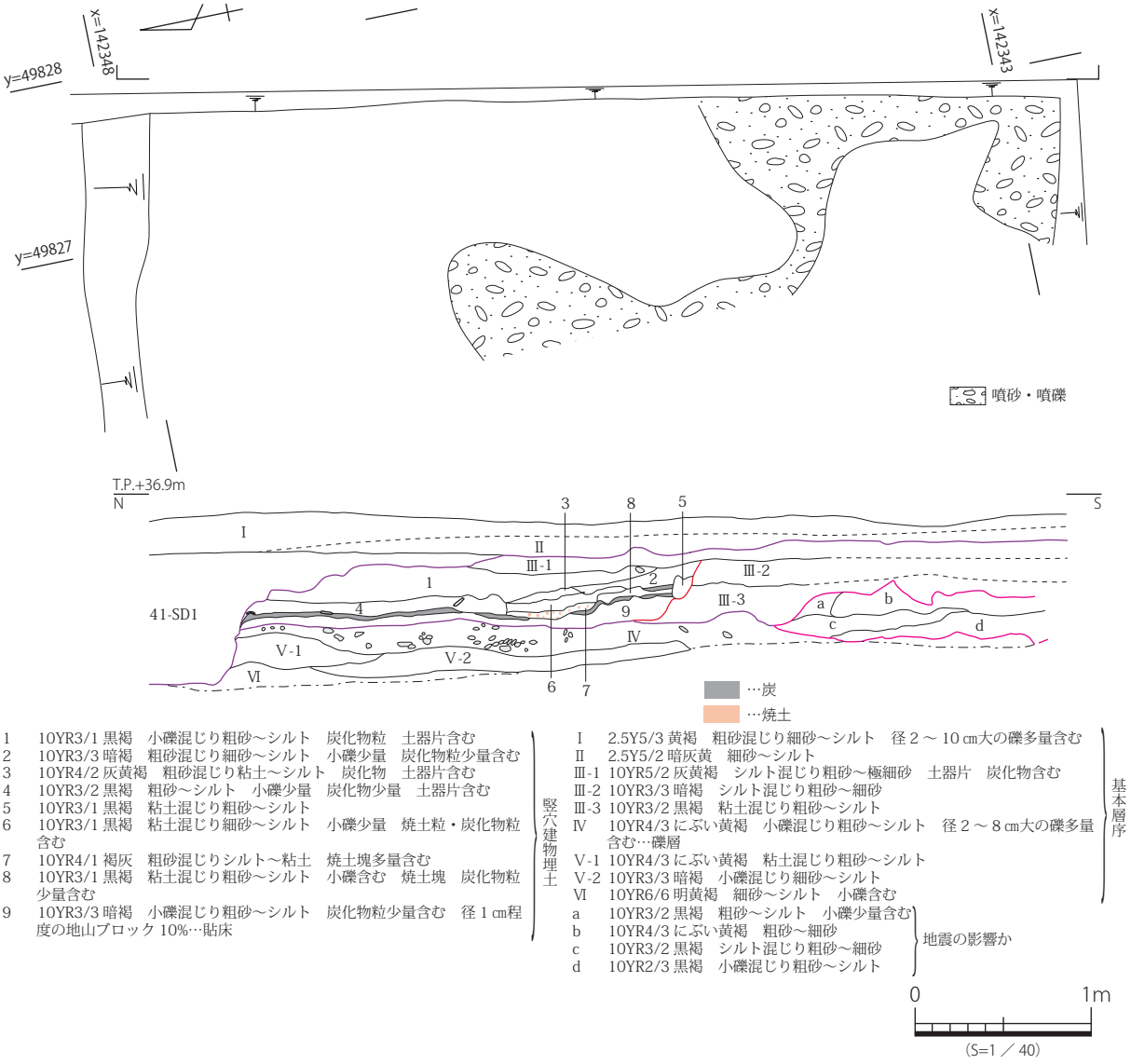


図 168 41- 竪穴 1 断面図

第Ⅴ章　まとめ

第１節　萩前・一本木遺跡の集落の変遷

はじめに

今回の萩前・一本木遺跡の調査では、竪穴建物94棟、掘立柱建物34棟を検出した。また、集落に附属する柵列や溝、土坑、柱穴などを確認した。すべての建物や遺構が同時期に存在していたわけではなく、遺跡の中心となる古墳時代中期中葉～飛鳥時代までの約200年間は連続的に、飛鳥時代以降は14世紀前半まで断続的に、居住や人の営みが行われたことが明らかになった。

２　時期区分と集落の変遷

発掘調査成果をもとに、萩前・一本木遺跡の集落の変遷を７時期に区分することができる。Ⅰ期：古墳時代中期中葉～後葉、Ⅱ期：古墳時代中期後葉～末葉、Ⅲ期：中期末～後期初頭、Ⅳ期：古墳時代後期前葉～後期、Ⅴ期：飛鳥時代、Ⅵ期：古代、Ⅶ期：中世である。須恵器編年で、Ⅰ期は須恵器出現以前～TK208まで、Ⅱ期はTK23～TK47、Ⅲ期はMT15～MT85、Ⅳ期はTK47～TK209、Ⅴ期はTK217～TK46に相当する。

【Ⅰ期：古墳時代中期中葉～後葉】　(図169)

Ⅰ期は、萩前・一本木遺跡の集落の開始時期に当たる。竪穴建物７棟、掘立柱建物２棟、溝１条、土坑１基を確認した。

14-竪穴１と14・27-竪穴20が最初期の竪穴建物であり、その後順次、竪穴建物が建設されたと考えられる。竪穴建物には、集落の出現期からカマドを構築しているが、7・42-竪穴５のように中央炉と考えられる施設をもつものも存在する。また14-竪穴１は、他の竪穴建物のカマドと比べて袖が長い構造となっており特徴的である。竪穴建物は、調査範囲に散発的に確認でき、建物の建設に大きな制約がなかったと考えられる。

【Ⅱ期：古墳時代中期後葉～末葉】(図169)

Ⅱ期は、萩前・一本木遺跡の拡大期に相当する。竪穴建物19棟、掘立柱建物１棟、溝１条、土坑４基を確認した。

Ⅰ期に比べ建物数は増加し、掘立柱建物もやや棟数を減じるが、確認できる。建物間の距離が近くなり、集住を始める傾向にある。竪穴建物にはカマドが確認できるが、８-竪穴１のように竪穴中央に焼土の確認できる土坑をもつものも存在する。

【Ⅲ期：古墳時代中期末～後期初頭】(図170)

Ⅲ期は、萩前・一本木遺跡の最盛期に相当する。竪穴建物28棟、掘立柱建物７棟、溝２条を確認した。

Ⅲ期の竪穴建物と掘立柱建物は、Ⅱ期に比べ増加し、また竪穴建物の規模が拡大し、一定の範囲に集住する傾向を示す。掘立柱建物では、総柱建物が確認できた。

首長居館の区画溝(14・27-SD70)が掘削される。今回の調査で確認できた首長居館区画は、南西隅の部分であり、北・東方向にさらに展開することが判明した。溝によって区画された首長居館区画内では、竪穴建物の主軸方位が、首長居館区画外のものとは異なり、正方位を向く傾向を示す。また一辺約7.2mの14-竪穴２、一辺約6.4ｍの14-竪穴26など、大型の竪穴建物が確認できる。

【Ⅳ期：古墳時代後期前葉～後期末】(図170)

Ⅳ期は、萩前・一本木遺跡の衰退期に相当する。竪穴建物21棟、掘立柱建物６棟、柵列４列、溝７条、土坑12基を確認した。

首長居館区画内の竪穴建物は減少傾向にあり、竪穴の規模も縮小する。首長居館区画外では竪穴建物の棟数に変化がないが、規模は縮小する。前段階と同じ場所に集住する傾向はこの時期も継続する。竪穴建物のカマドの煙道が、建物外へと延びる傾向を示す。

溝では8･9-SD３･42-SD２･7-SD１、8･9-SD５･42-SD４、11-SD７･44-SD３･45-SD４のように、同じ集落内で区画を意図とした溝が掘削される。また柵列もこの時期に確認できることから、集落内で区画を意図していることがうかがえる。

【Ⅴ期：飛鳥時代】(図171)

Ⅴ期では、この時期の建物は確認できておらず、集落の中心が移動した可能性が考えられる。このほか溝３条、土坑１基を確認した。

この時期に、首長居館の溝が埋められ、やや時期をおいてこれまでの集落の中心の西側に大溝(9-SD205･11-SD2･32-SD20･36-SD10)が掘削される。大溝は、Ⅳ期の南西方向から北東方向への地形に沿

った方向とは異なり、条里に沿った南北方向へと変化する。また基盤層が砂礫層である部分においても真直ぐに掘削されており、南北方向への強い指向性が読み取れる。大溝内には流水堆積が確認できることから、基幹水路として利用された可能性が高い。この溝の掘削後、流水等により溝が埋没した際には浚渫が行われており、管理が行われていたことがうかがえる。

【Ⅵ期：古代】(図 171)

Ⅵ期では、掘立柱建物６棟を確認できたが、点在する傾向を示す。このほか溝６条、土坑２基を確認した。

この時期には、33-SD1・２が掘削されている。この溝は複数回にわたる洪水砂で埋没しており、また洪水砂の中には多量の土器を包含する。このことから古代の集落の中心は、今回の調査地よりも南側に展開していた可能性が高い。また多量の洪水砂が確認できたことで、近隣にこの砂をもたらす河川の存在が考えられる。河川の影響により、今回の調査地周辺の土地利用が不安定化したことが想定できる。

【Ⅶ期：中世】(図 172)

Ⅶ期の遺構は、調査対象地の西側に多く、溝６条、土坑２基を確認した。建物は確認できず、居住域としての利用はされていなかったと想定できる。

遺構は溝が中心で、Ⅵ期とは異なり、東西方向を指向する傾向を示す。14-SD39・27-SD139・39-SD １・41-SD １は、調査地を東西に掘削された溝で、流水堆積が確認でき、掘削幅や掘削深度が他の溝とは規模を異にすることから、基幹水路と考えられる。

３　まとめ

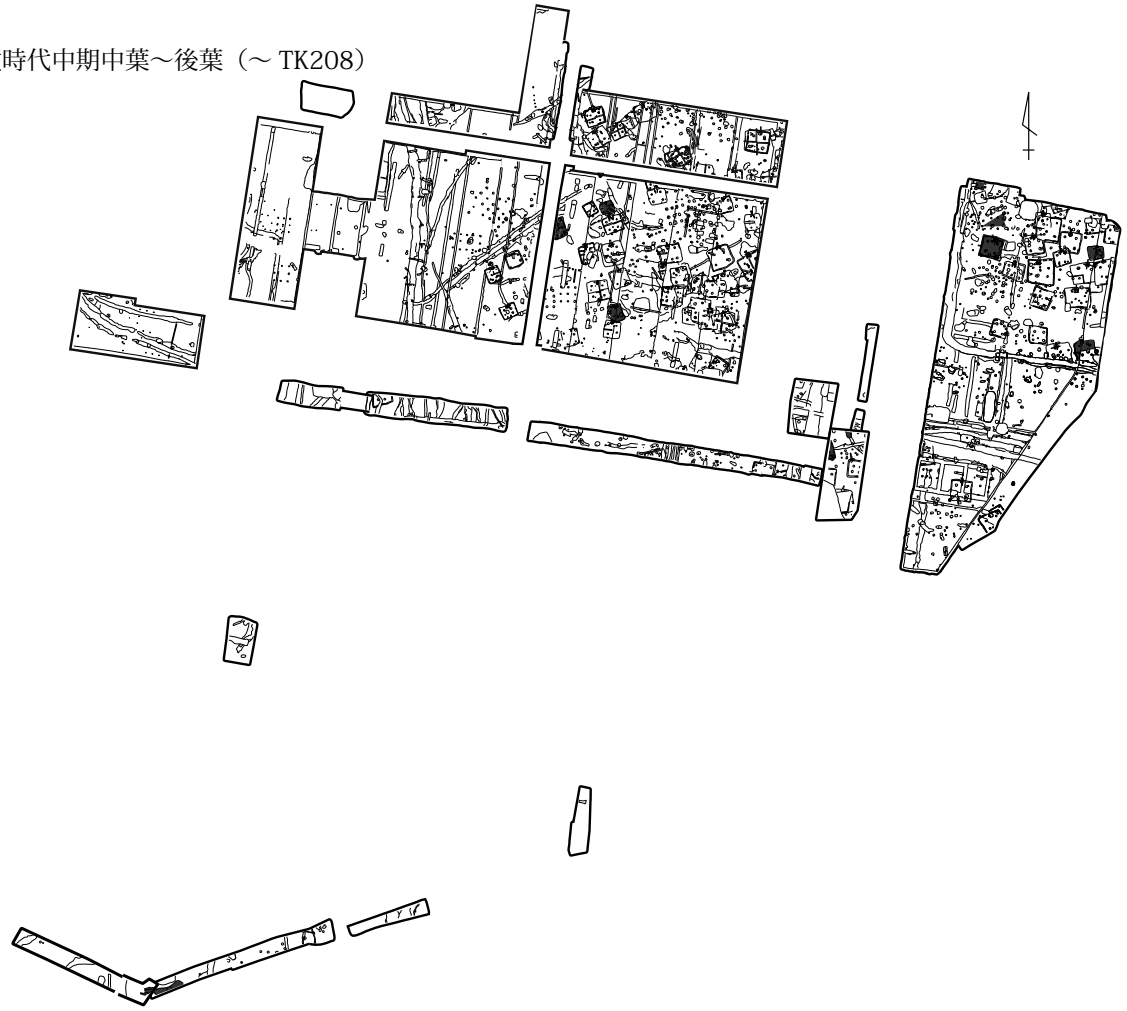
以上、萩前･一本木遺跡の変遷を見てきた。萩前･一本木遺跡では、弥生土器や石器が出土していることから、弥生時代には人の活動が確認できるようになる。

人の居住が確認できるようになるのは、古墳時代中期中葉からで、この時期から約 200 年間にわたり、活発な活動が展開されていたことが明らかになった。集落の変遷を見ていくと、居住を開始してから首長居館の造営に至るまでに急速に発展し、そして集落の廃絶は急速に進んだと考えられる。こうした発展・廃絶には、何らかの社会的・地理的要因が考えられるが、その鍵となる首長居館区画は、南西隅の部分にあたり、居館の中心となる施設は確認できなかった。

今後の周辺の調査の蓄積により、中心となる施設が判明することで、集落の発展と廃絶に至る経緯が明らかになる可能性が考えられる。

(舩築)

古墳時代中期中葉～後葉（～ TK208）



古墳時代中期後葉～末葉（TK23 ～ TK47）

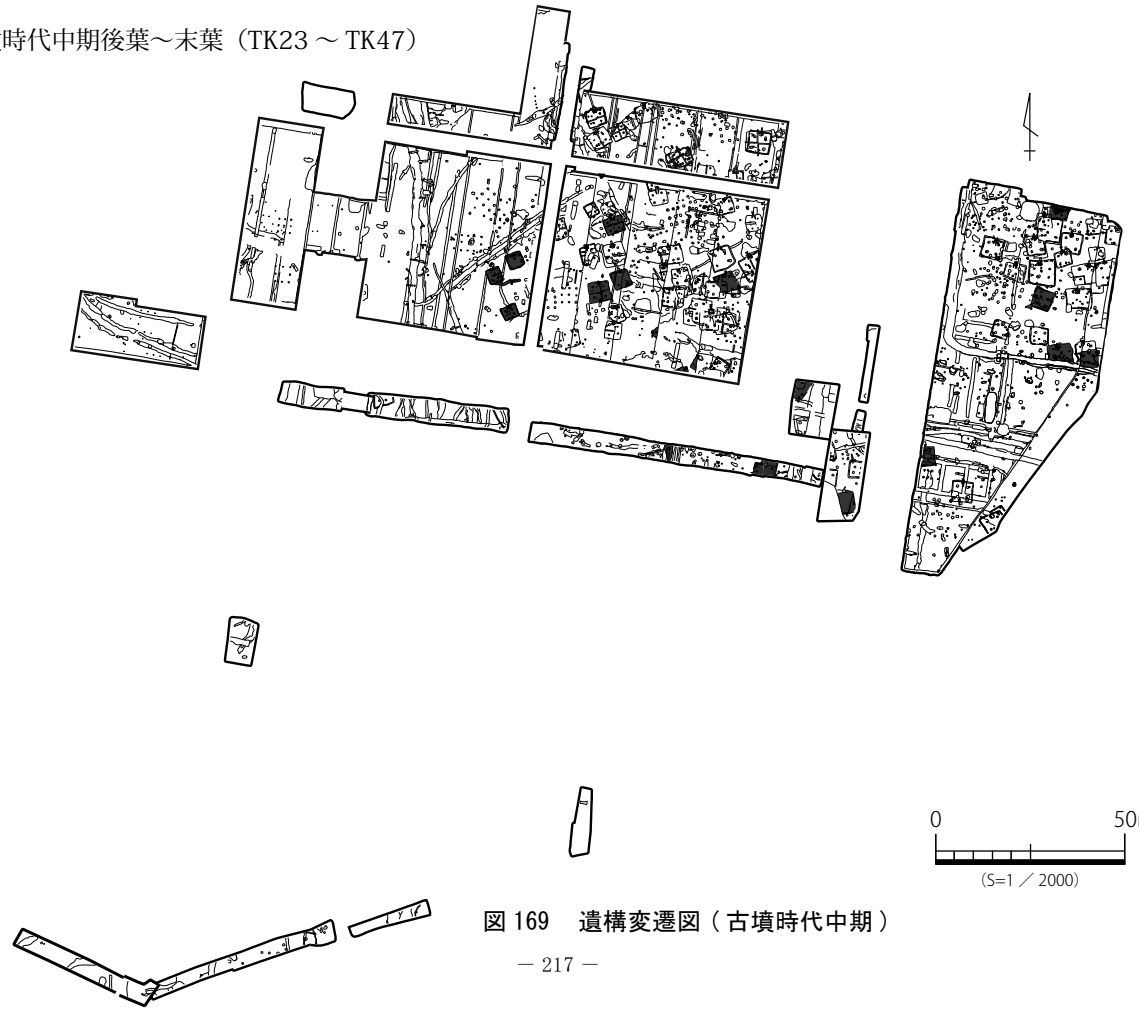
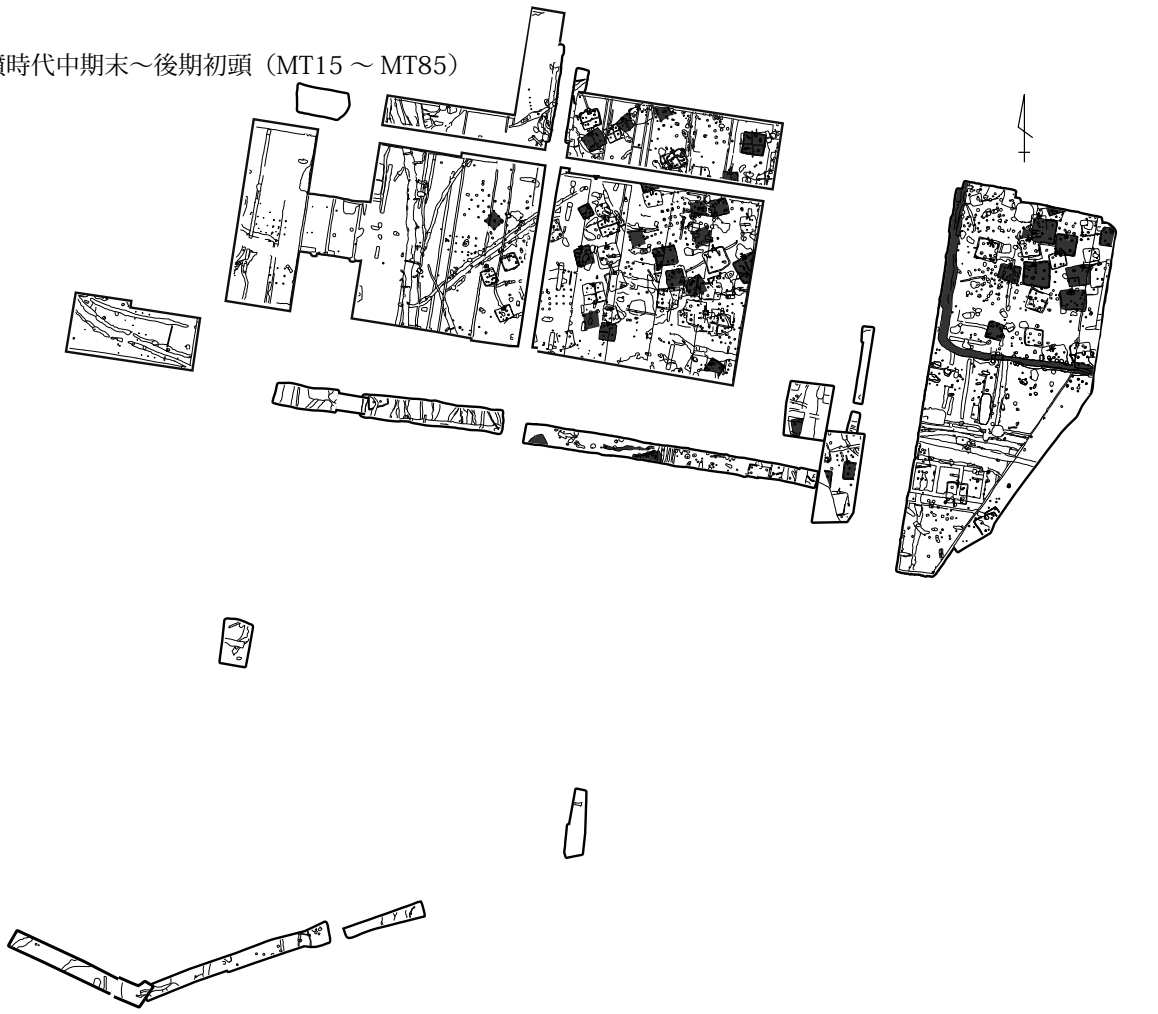


図 169　遺構変遷図（古墳時代中期）

古墳時代中期末～後期初頭（MT15 ～ MT85）



古墳時代後期前葉～後期末（TK43 ～ TK209）

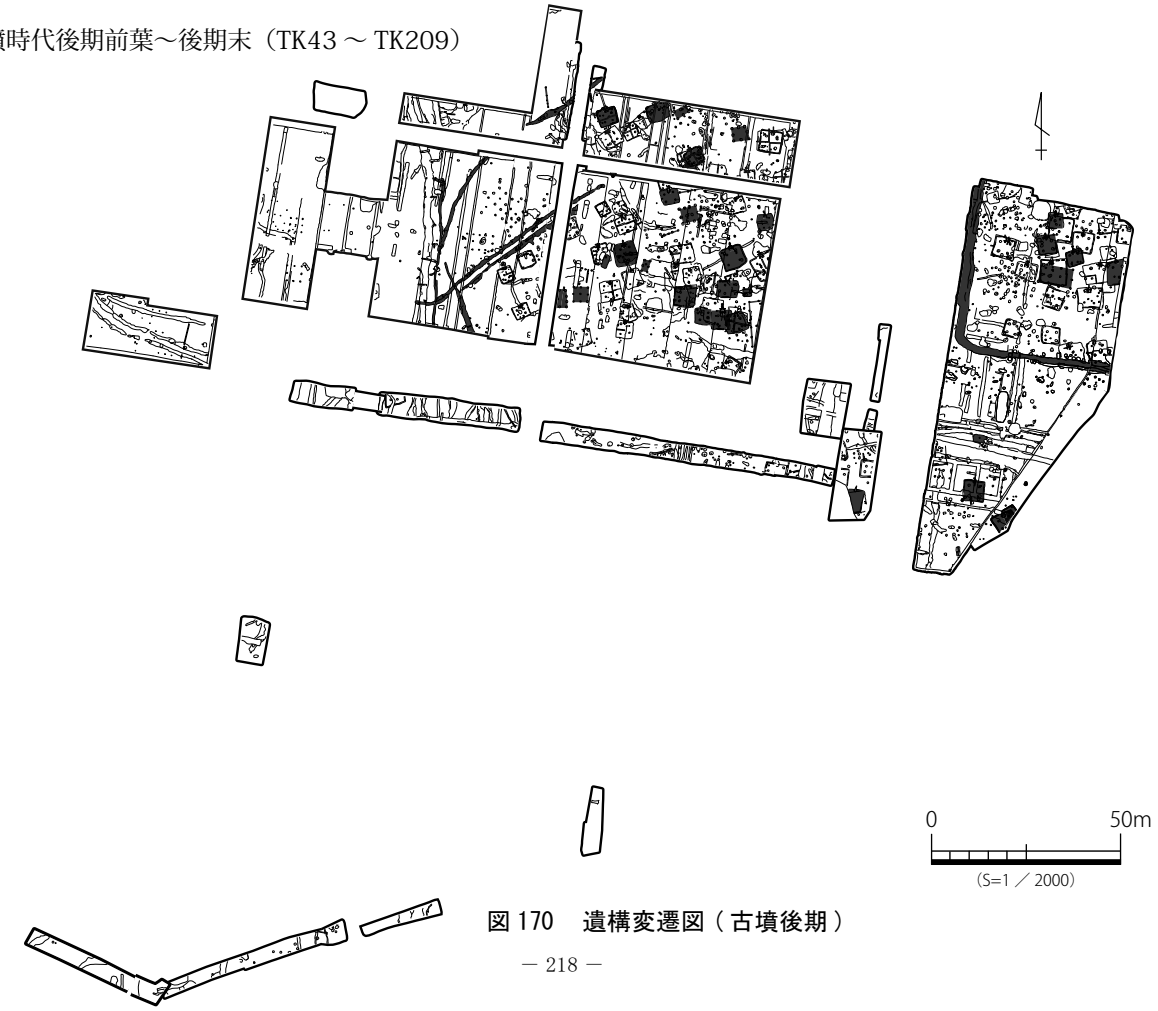


図 170　遺構変遷図（古墳後期）

飛鳥時代（飛鳥 TK217 ～）

古代

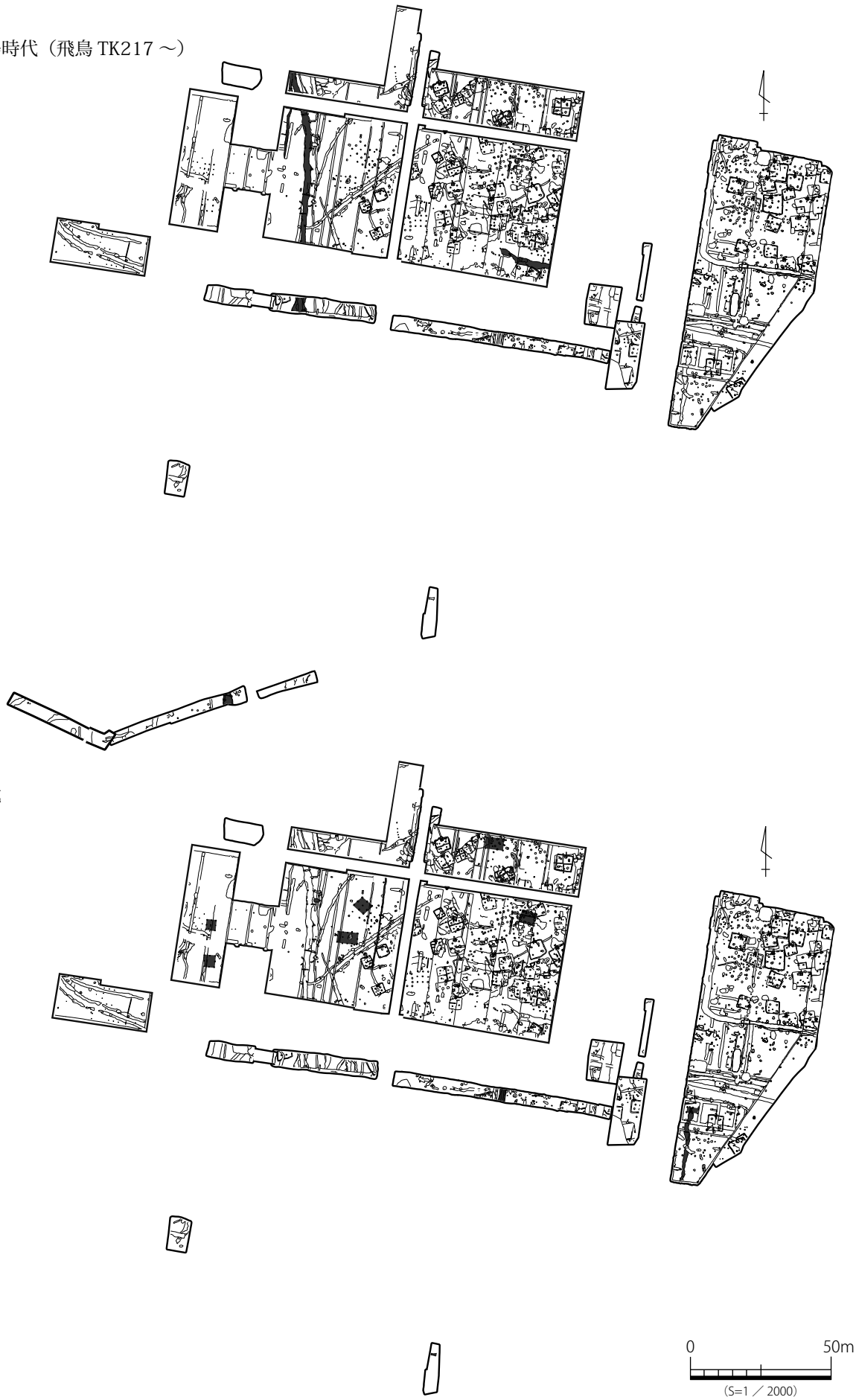


図 171　遺構変遷図（飛鳥～古代）

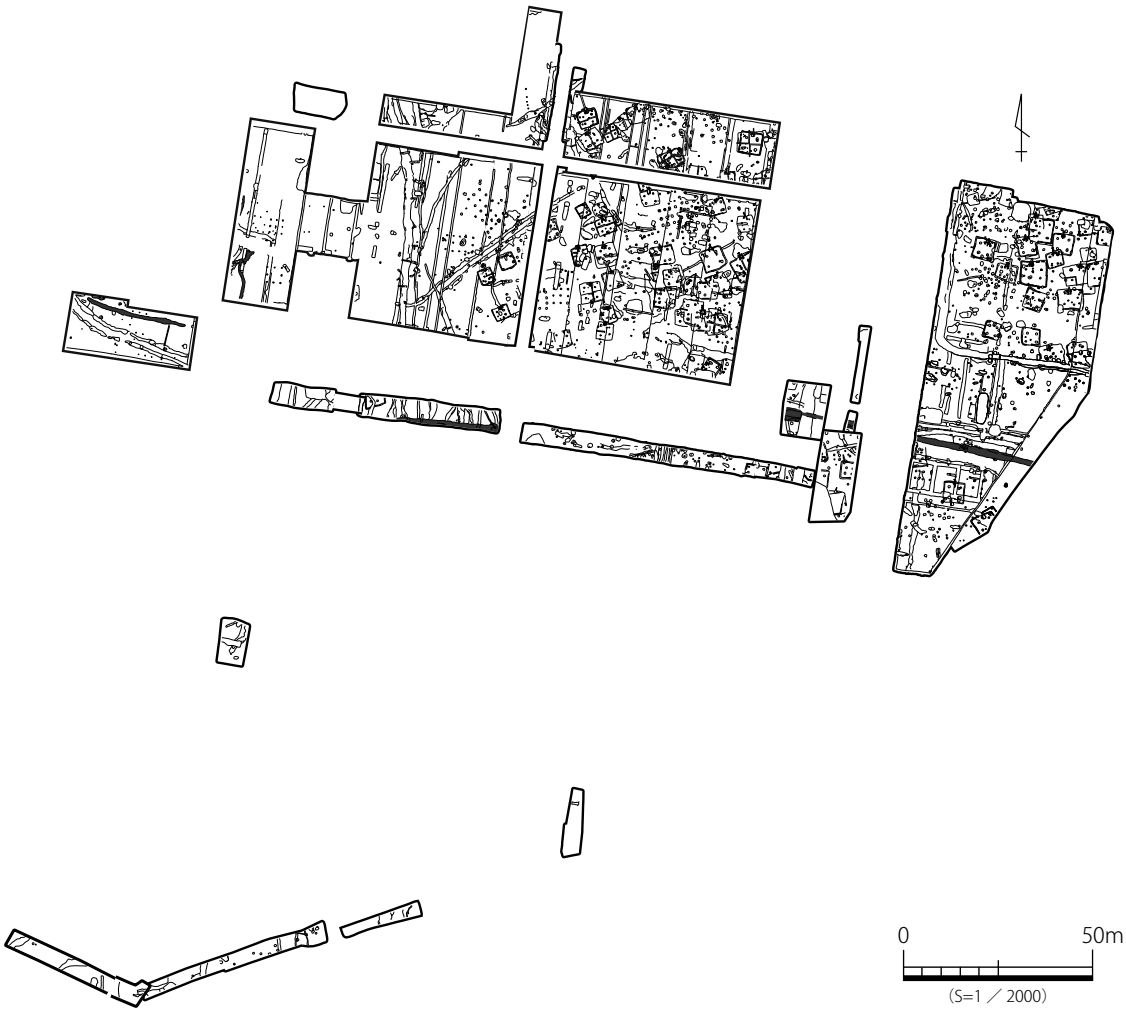


図 172　遺構変遷図（中世）

表 8　　遺構一覧表 (1)

竪穴建物	時期
14-竪穴1	中期中葉
14・27-竪穴20	中期中葉
28-竪穴1	中期
6-竪穴1	TK208
14・27-竪穴22	TK208
7・42-竪穴5	TK208～TK23
6・23-竪穴8	TK208～TK23
14-竪穴19	TK23
27-竪穴3	TK23
6-竪穴7	TK23～TK47
3-竪穴55・21-竪穴10	TK23～TK47
4-竪穴1	TK23～TK47
6-竪穴2	TK23～TK47
41-竪穴2	TK23～TK47
6・23-竪穴6	TK23～MT15
14-竪穴4	TK23～MT15
14-竪穴25	TK23～MT15
8-竪穴1	TK47
8-竪穴2	TK47
14-竪穴40	TK47
29-竪穴30・46-竪穴12	TK47
29-竪穴20・46-竪穴35	TK47
29-竪穴45	TK47
8-竪穴4	TK47～MT15
28-竪穴4	TK47～MT15
5-竪穴45	～中期後半
10-竪穴90	中期中葉～後期前葉
14-竪穴26	中期後半～後期前半
29-竪穴50	中期後半～後期前半
23-竪穴5	後期前葉
14-竪穴23	後期前葉
7-竪穴3	後期前半
14-竪穴28	後期前半
10-竪穴310	MT15～TK10
27-竪穴1	MT15～TK10
14-竪穴16	TK10～MT85
28-竪穴3	TK10～MT85
29-竪穴80	MT15～TK10
41-竪穴3	MT15～TK10
28-竪穴6	TK10
3-竪穴45	TK10
10-竪穴110	TK10
10-竪穴201	TK10
4-竪穴20	TK10
6・23-竪穴9	TK10
4-竪穴99・22-竪穴7・5-竪穴30	TK10
4-竪穴30・22-竪穴6	TK10
14-竪穴5	TK10
7・24-竪穴7・26-竪穴6	TK10～MT85
21-竪穴20・4-竪穴54・3-竪穴34	TK10～MT85
3-竪穴108	TK10～MT85
14-竪穴21	MT85
14-竪穴2	MT85
14-竪穴15	TK10～TK43

竪穴建物	時期
21-竪穴18・3-竪穴35・4-竪穴18	MT85～TK43
14-竪穴30	MT85～TK43
27-竪穴2	MT85～TK43
4-竪穴91	TK43
28-竪穴30	TK43
3-竪穴40	TK43～209
14-竪穴18	TK43～209
27-竪穴130	後期後半
27-竪穴140	後期後半
5-竪穴1・23-竪穴10	TK209
10-竪穴210	TK209
6-竪穴3	TK209
21-竪穴8・3-竪穴110・4-竪穴122	TK209
10-竪穴301	TK209
10-竪穴60	TK209
21-竪穴2	TK209
22-竪穴1	TK209
14-竪穴12	TK209
14-竪穴29	TK209
10-竪穴50	TK209～217
3-竪穴50	TK209～217

掘立柱建物	時期
14-掘立14	中期中葉
14-掘立11	TK208～TK23
14-掘立100	TK23～MT15
5・23-掘立2	MT15～TK10
14-掘立16	中期後半～後期前半
4-掘立3	後期前半
4-掘立4	後期前半
6-掘立1	後期前半
8-掘立3	後期前半
10-掘立2	後期前半
14-掘立6	MT85～
5・22・4-掘立1	後期後半
7・42-掘立1	6末～7初
23-掘立1	6末～7初
7-掘立2	6末～7初
10-掘立1	後期
9-掘立1	古代
14-掘立3	古代～
9-掘立2	9末後葉～
10-掘立3	11前半
12-掘立1	11前半
12-掘立2	11前半

柵列	時期
5-柵列1	TK43
3-柵列1	後期
5・22-柵列2	後期
11-柵列1	後期

表 9　　遺構一覧表 (2)

溝	時期
30-SD7・32-SD21	TK208
8-SD7	TK47
29-SD62	TK10
29-SD64	MT85
14・27-SD70	TK23以降～TK217
44・45-SD1	TK43
8・9-SD3・42-SD2・7-SD1	後期
8・9-SD5・42-SD4	後期
27-SD12	後期
9-SD117	後期
11-SD7・44-SD3・45-SD4	後期後半
9-SD200・11-SD1	飛鳥Ⅲ～
3-SD1・4-SD3	飛鳥Ⅲ
9-SD205・11-SD2・32-SD20・36-SD10	飛鳥Ⅲ
29-SD10	9世紀
31-SD1	古代
8-SD6	古代
14-SD1	古代
33-SD1	古代
33-SD2	古代
12-SD22	中世
12-SD26	中世
13-SD1	中世
14-SD39・27-SD139・39-SD1・41-SD1	中世
36-SD1	中世
36-SD2	中世

土坑	時期
28-SK5	TK208
24-SK2	TK23～TK47
29-SK19	TK47～MT15
46-SK6	中期
29-SK65	中期後半
3-SK106	TK43
3-SK107	TK43
6・24-SK5	TK43
14-SK55	後期前半
3-SK28	後期
29-SK12	後期
29-SK13	後期
29-SK15	後期
14-SK54	後期
14-SK165	後期
14-SK401	後期
29-SK58	後期
14-SK469	7～8世紀
9-SK219	古代
9-SK2	10世紀～
13-SK6	中世
13-SK12	中世

第２節　萩前・一本木遺跡における古墳時代後半期の遺物諸相

はじめに

萩前・一本木遺跡の出土遺物は、土器・土製品、石製品、金属遺物などコンテナ約 200 箱に及ぶ。古墳時代中期から後期にかけての連続的な遺構から出土した土器がそのほとんどを占める。主に住居跡や土坑から、ある程度まとまって出土した遺物で、一括性の高い遺物と考えられる。その他にも、古代には灌漑用とも考えられる南北方向の大型水路 (9-SD205・32- SD20) から飛鳥時代の土器が出土している。また、中世になると東西方向に流走する中世坪界線に相当する基幹水路 (14-SD39・27-SD139・41-SD1・39- SD1) を検出しており、そこからも遺物が出土している。

古墳時代後半期の土器様式は須恵器と土師器の系譜の異なる２種の土器群から構成される。須恵器に関しては大阪府陶邑窯址群から出土した資料の編年がなされており [中村 1980] [田辺 1981・1982] 、こうした生産地における編年は、消費地においても、資料の時期差の根拠として大いに有効性を持っている。しかしながら、消費地における土器様式は、土師器を含む多様な土器群が混在することで、固有の地域色として特徴づけられるものであり、その歴史的意義を明らかにするための独自の編年作業も必要とされる。本節では、そうした観点に立って、須恵器･土師器両種の土器群の器種組成や、土師器の形態・調整手法に着目し、当地域の土器様式の変遷を辿るものである。

(1)　土器の分類

A. 土師器 (図 174・175)

土師器の器種には、杯・高杯・壺・甕・鍋・甑・手捏土器・製塩土器・移動式カマドがある。

杯は底部の形状に基づき、２大別する。

杯Aは､飛鳥Ⅲ期以降に頻出する平底の杯である。杯 B は古墳時代中期～後期に所属する丸底の杯である。丁寧なナデやミガキを施し、化粧土を塗布する精製品が多い。口縁部の形状によりア～エ、胎土・色調・調整の属性により ⅰ～ⅲに細分する。杯 B では、口縁部ア・イは各１点のみで、ウ・エが多い。口縁部ウは胎土 i 群に相関し、口縁部エは ii・iii 群に相関するようである。土師器杯においては、i → ii → iii と漸移的に変遷する。

高杯は、杯部の形状に基づき、２大別する。

高杯 A は、布留式で一般的であった杯部が外反する高杯である。部分的な資料で数も少なく、全体形は不明である。高杯 B は、杯部が椀形を呈する高杯である。脚柱部の高さによって B1：大型と B2：小型に細分する。高杯 B1・B2 共に接合技法はア・イが多く、脚柱部基部は細い。高杯 C としたものは、形状が様々で粗製品を一括する。(469) はカマド内から出土しているので支脚と考えられる。

本遺跡では高杯 B が主体で、TK208 ～ TK43 型式に位置付けられる。B1 は [片桐 2002] の B2 にあたり、形態変化と法量変化による編年基準が示されている。B2 は、B1 よりも形態の矮小化や円孔が穿たれないなど、後出的要素を含んでいる。

壺は、小型丸底土器の壺 A・B と、大型で貯蔵用と考えられる壺 C・D に 4 大別する。

壺 A は、体部が一部欠損しているので、穿孔の有無は不明であるが、須恵器瑳の模倣品の可能性がある。壺 B は、直口壺である。壺 C は大型の壺で体部は卵形を呈し丸底､口縁部は直立する。壺 D は、中部瀬戸内系の二重口縁である。口縁部の破片が２点出土している。

手捏土器は、平底で形状が歪な鉢形を呈する粗製品を一括する。

製塩土器は、破片が多かったが極力図化に努めた。大久保分類 [大久保 2010] に基づき２大別する。

移動式カマドは、付け庇の破片が出土している。全体形は不明。

甕は、口頸部や全体のプロポーションの形態に基づき、甕 A ～ F に６大別し、さらに内面の調整技法により Ⅰ ～Ⅴ、端部形態により A ～ f などに細分する。

甕 A は、口頸部が屈曲・外反した後口縁部はそのまま外傾し、外面にハケ調整を施す土器である。ほとんどが甕 A に属す。口径の大きさによって A1：小型 (口径 10㎝前後) と A2：中型 (口径 12 ～ 20㎝以下) と A ３：大型 (口径 20㎝以上) に分けられる。

甕 A1 は、さらに形態と調整によって２種に細分できる。いずれも底部にドーナツ状の濃い煤が付着し、器壁表面が強い被熱によって摩滅著しい個体が多い。これらの事象から甕 A1 は炉などへの低い浮

表 10　土師器甕属性相関表

		口縁部形状								
		a	b	c1	c2	d1	d2	e1	e2	f
甕	A1		3	1	1	1	2			
	A2	11	7	4	6	7	1			
	A3	3	6	1	1		1			
	B	1	5							
	C		1							
	D					1				
	E	1	3							
	F			1		4	1	2	3	

		内面調整					
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅴ'
甕	A1	2	1	3		4	1
	A2		1	8	8	5	4
	A3	1	3		5	1	1
	B				3	1	
	C				1		
	D						1
	E				3		
	F			3	2		1

置きや直置きを想定できる [中野 2012]。甕 A1-1 は口縁端部 b と内面調整Ⅴ・Ⅴ' に、甕 A1-2 は口縁端部 d2 と内面調整Ⅰ・Ⅱに相関するようである。甕 A1-2 に関して言えば、古代以降、都城や周辺地域などによく見かける形態であるから、系譜を外の地域に求めることが可能であろう。

甕 A2･A3 は、全体形がわかる資料の制約もあり、便宜的に口径の大きさで区分したが、端部 a ～ d2、内面調整Ⅱ～Ⅴと広範囲にわたって相関するようである。とりわけ、端部 a・b、内面調整Ⅳが多い。

甕 B は、指頭圧痕を顕著に残す中型の甕である。カマド内から出土する傾向があり、支脚転用品とも考えられる。[*1]

甕 C は、タタキ調整を施し、弥生時代からの系譜を引く古相の土器で、混入品の可能性がある。甕 C・D は 1 点のみの出土である。

甕 E は、粗製で口縁部が直立し端部は先細りしている。[*2]

甕 F は､広義の「布留式甕」とされる。甕 F では、布留式甕特有の形状である口縁端部 e1・e2 となり、本遺跡では 5 点出土している。この形状は甕 A ～ E のいずれにも該当しない。内面調整はⅢ・Ⅳが見られ､布留式甕の規範が弛緩した時期のものと言える。

古墳時代中期から後期にかけて土師器甕の体部が伸び、布留式甕から長胴甕への形態変化は広く知られているところであるが、本遺跡では、完存の資料が乏しいこともあって長胴甕 (≧器高 30㎝) と認識できる資料は少なく、中間の卵形を呈する資料が多い。

鍋は、内外面に煮炊きの痕跡を残し、器高に比して口径が大きく (器高＜口径)、甕とは一線を画する器種である。全体のプロポーションに基づき、3 大別 (鍋 A・B・C) する。把手を有さず肩部が張らない浅鍋形 (鍋 A1・A2・C) と、把手を有す大型・球形 (鍋 B) がある。鍋 C は 8 世紀以降に所属する。

甑は体部から口縁部にかけて緩やかに直線的に開く砲弾形を呈す。底部は断片的なものがほとんどであるが、蒸気孔形態は復元すると単孔 (円)、2 孔 (半円形)、多孔 (円 1 ＋楕円 4) などがある。把手はいわゆる牛角状の中実把手で断面形態によって 4 区分 (把手 a ～ d) する。大型の鍋 C や移動式カマドに伴う可能性もある。把手上面に切り込みを入れるものもある。接合技法が確認できるものでは、貼付技法 (杉山 1994) やソケット部を有す挿入技法などがある。

B. 須恵器 (図 176)

須恵器の器種には、杯・高杯・壺・甕・瓶類 (平瓶・提瓶・横瓶)・鉢類・甑・器台がある。

杯身・杯蓋はプロポーションにより 5 大別 (①～⑤) した。さらに杯蓋は、口縁部と天井部の境の形状により A ～ D､口縁端部形状でア～オを細別した。杯身も同じく口縁部から受部の形態によって A ～ D、口縁端部形状でア～オを区別した。杯身・杯蓋の口縁部径の計測結果を図 173 に示した。

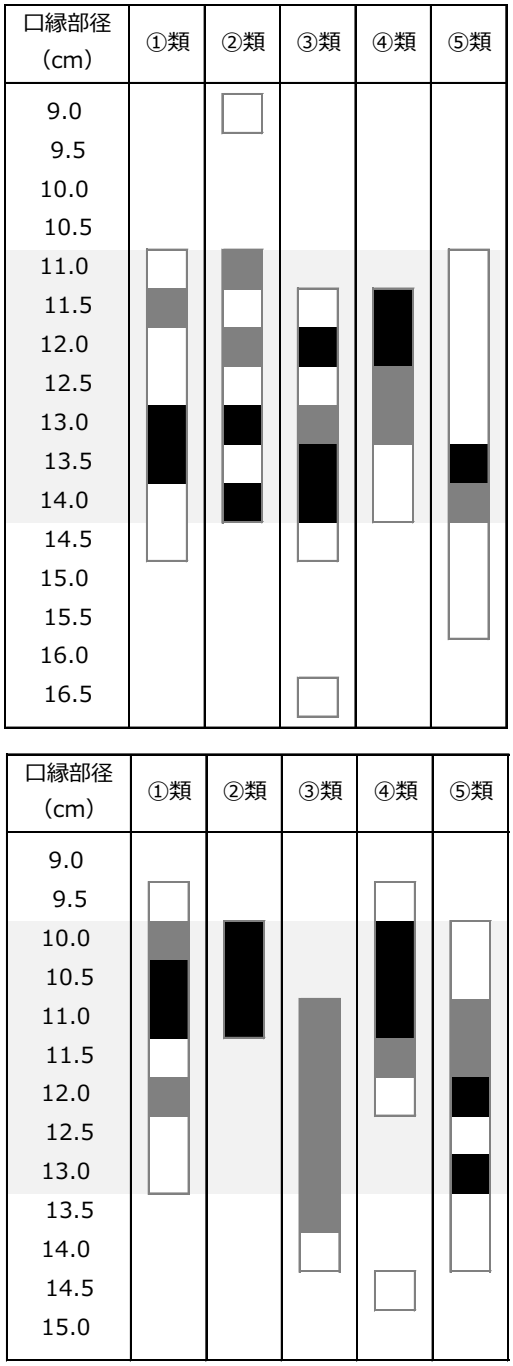
本遺跡出土の杯身・杯蓋は、陶邑編年の TK208 から TK217 型式に所属する。

無蓋高杯 A は、全体のプロポーションにより 2 大別する。無蓋高杯 A は、褐灰色を呈する焼成堅緻で、大阪府陶邑窯跡群などで散見される形態である。時期は TK208 型式併行期を中心とする時期に所属する。無蓋高杯 B は杯蓋を返して杯部とした軟質の製品である。時期は TK209 型式以降を中心とする時期に所属する。

本遺跡では、MT15 ～ TK43 型式に盛行する長脚高杯と確認できる資料は乏しく、3 - 竪穴 45 出土の該期の杯部 (89)、包含層出土の脚部片の数点だけである。

有蓋高杯は、スカシ形状と脚部の形態によって 3 大別 (有蓋高杯 A・B・C) する。有蓋高杯 B は、焼成堅緻で脚端部が角端面を有すものから、焼成不良で裁頭円錐形を呈し脚端部に端面を有さないものへ

図 173　須恵器杯蓋（上段）・杯身（下段）の法量



灰色の範囲は 10% 以下、黒色は 20% 以上

と形骸化する。

壺・甕は、短頸壺・広口壺・長頸壺・台付壺などがある。

瓶類は、提瓶・平瓶・横瓶などがある。提瓶は環状の把手を付すものと鍵状の把手ものがある。

鉢類は、捏鉢・把手付鉢・内湾口縁鉢などがある。

その他、細片だが器台片・甑底部片などが出土している。

(2)　各期の様相 (図 177 ～ 179)

本遺跡で出土した土器群の変遷を、ある一定の同時性を示す遺構から出土した土器群として認識した上で、大きく６段階に区分し、各段階の様相を以下にまとめる。その際、出土位置や遺構の切り合い状況等を加味した上で、時期決定には型式変化が追いやすい須恵器杯身・杯蓋・高杯や土師器高杯を基軸とし、編年案を作成した。古墳時代中期から後期を概ねⅠ～Ⅴ期、古代以降をⅥ期に分ける。

第Ⅰ期：古墳時代中期中葉 須恵器導入以前

28- 竪穴 1、14- 竪穴 1 出土土器が該当する。これらの竪穴建物からは須恵器が出土せず、布留系の土師器甕や土師器高杯 B1 が出土している。器種組成が土師器のみであることから、その他の遺構よりやや先行すると想定しておく。高杯 B1 が主体で脚部にスカシ孔を穿つものはこの頃までである。

第Ⅱ期：古墳時代中期後葉 TK208

14- 竪穴 22、7- 竪穴 5 出土土器が該当する。

須恵器の無蓋高杯は形態が多様で、まだ定型化していない。蓋杯の量は２・３点程と、高杯と同じ程度の比率である。須恵器は杯蓋①類とした焼成堅緻のものが多い。

土師器は、杯・高杯 B1・小型丸底壺といった精製土器の比率が高い。製塩土器は外面タタキ調整を施す薄型小型椀の A 類、備讃Ⅴ式がすでに存在し、脚台式は認められない。肩部ヨコハケ・端部内面肥厚の布留系甕 F の特徴を有す甕がこの時期まで存続するが、内面調整はヘラケズリではなくナデやハケ調整となっており規範が弛緩した形状である。

第Ⅲ期：古墳時代中期後葉～末葉　TK23 ～ TK47

14- 掘立 11- ＳＰ 418、14- 竪穴 4、6- 竪穴 7、8- 竪穴 1、8- 竪穴 4 出土土器が該当する。前段階

土師器　形態・手法分類

杯

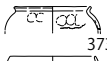
A

平底。口縁部が直線的に開く。
いわゆる「畿内系土師器」

器表面に化粧土を塗布する。
内面に放射状暗文、外面ｃ手法

B

丸底。体部は半球形状を呈す。


373

374

胎土は茶色を呈し、精良。丁寧なナデ・ミガキ調整
化粧土を塗布しない。

200

内面は放射状ヘラミガキ。

146

胎土はにぶい黄橙色を呈し、やや粗い。
器表面に化粧土を塗布する。
板ナデにより器面を平滑にする。

660

胎土は茶色を呈し、やや粗い。
化粧土を塗布しない。
板ナデやケズリ調整。

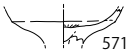
＜口縁部形態＞
ア：短く外折する。
イ：くの字状に内折する。
ウ：内湾し、端部は内傾する面をなす。
エ：内湾し、先細りする。

＜胎土・色調・調整＞
ｉ群：精良・茶～赤褐色・丁寧なナデ or ミガキ／放射状暗文
ii 群：やや粗い・にぶい黄橙色・板ナデ
iii 群：やや粗い・茶褐色・ケズリ／板ナデ

高杯

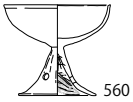
A 外反

272


571

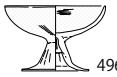
段あり。
全体形は不明。

B1 椀形


560

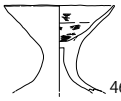
胎土は灰黄色を呈し、精良。
杯部は深い。
長脚で脚柱部から裾部にかけて緩やかに開く。３方向円形スカシを穿孔。

B2 椀形


496

胎土は赤褐色を呈し、やや粗い。内外面全体に化粧土を塗布。
杯部は浅い。
低脚で、脚柱部と裾部の境が明瞭に屈曲する。

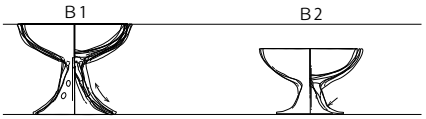
C


469

粗製高杯

348

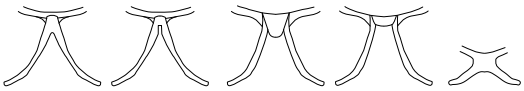
＜法量：口径・脚部高＞



脚部高 6.8 ～ 7.1 ㎝
口 13.1 ～ 14.2 ㎝

H5.4 ～ 6.0 ㎝
口 13.4 ㎝

＜脚部接合技法＞



ア　脚頂部凸面。完成した脚頂部を包み込むようにして、杯部を作り足していく。
イ　脚部側から刺突した痕跡があるもの。
ウ　脚柱部は中空。杯部から円盤状の粘土を充填する。
エ　脚柱部は中空。杯部から平らな粘土を充填する。
オ　脚柱部中実。

壺

A

404

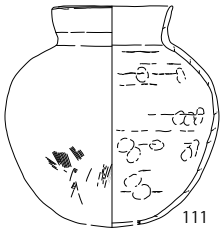
小型丸底壷
口縁部は二重口縁で、外面にミガキを施し赤褐色の化粧土を塗布するである。

B

309

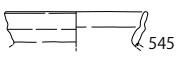
直口壷
体部は偏球形を呈す。
外面にミガキやハケを施し赤褐色の化粧土を塗布する精製品や、化粧土は塗布せずにぶい黄橙色を呈するものがある。

C


111

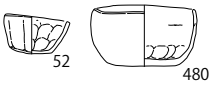
大形直口壷。貯蔵用。
体部は球形を呈す。

D


545

口縁部中位で屈曲し、端部は丸くおさめる。

手捏土器


52
480

平底で鉢形。

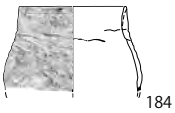
製塩土器

A

386

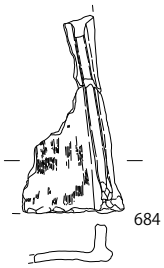
備讃Ⅴ式［大久保］
小型・薄手で丸底筒型タイプ
外面タタキ調整

B


184

備讃Ⅵ式［大久保］
大型ボウルタイプ
外面貝殻状痕

移動式カマド


684

付け底系の移動式カマド
全体が遺存する物がなく、形態の詳細は不明。

図 174　土器形態分類図（１）

土師器　形態・手法分類

甕

A1

A1-1

体部は球形、
内面調整は、体部を上下に2分割してユビナデ

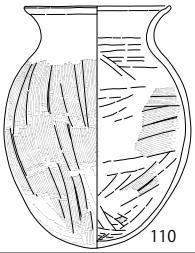
A1-2

体部は下膨れ状の球形、
口縁端部 d2、外面調整は明瞭なハケ、内面調整はケズリやハケ

A2

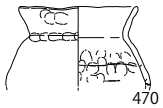
中型甕（口径 12 ～ 20 ㎝以下）
体部は球形
口頸部は屈曲・外傾、緩やかに屈曲もしくは外反
口縁端部 a・b。

A3



大型甕（口径 20 ㎝以上）
体部は卵形もしくは長胴形、口頸部が湾曲・大きく外反し、端部は端部 a・b が多い。
　外面調整は斜上縦方向のストロークの短いハケや板ナデ

B

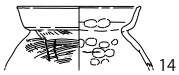


全体的に粗製の作りで、器面調整を施さないので、器面に凹凸あり。
端部 a・b。

C

外面タタキ調整。1 点のみ。

D

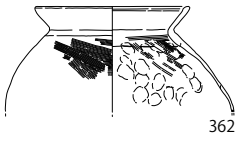


頸部は屈曲し、口縁部中位で強く内湾する、いわゆる「受口状口縁」。1 点のみ。

E

体部は球形を呈する。口縁部は直口し、端部は先細りする。粗製品が多い。
「大形甕形製塩土器」か。

F



体部は球形か。
頸部はくの字状に強く屈曲し、口縁部は内湾するか直線的に開く。
外面ヨコハケ、内面ハケ調整を施す。布留式甕の系譜を引く。

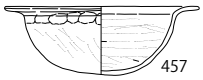
鍋

口径＞器高

A1

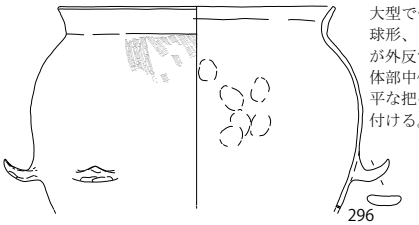
体部は短胴形を呈し、口頸部が湾曲・外反もしくは屈曲し、肩部が張らず丸底もしくは平底状を呈する。外面調整は明瞭なハケ。

A2



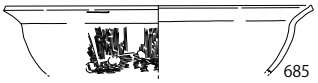
口縁部が水平まで折れ曲がり帽子形を呈す。内外面調整は平滑ナデ。1 点のみの出土である。

B



大型で体部が球形、口縁部が外反する。体部中位に偏平な把手を貼付ける。

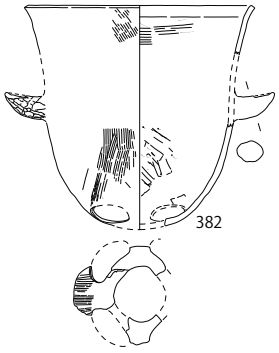
C



大型で体部が半球形、口縁部が外傾する。

甑

A



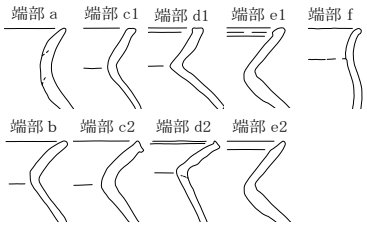
体部は砲弾形を呈す。口縁部は直口する or 若干外に開く。
体部に扁平な把手を 2 ヶ張り付ける。

＜底部蒸気孔＞
単孔
2 孔
多孔（1 ＋ 4 孔）

＜把手接合技法＞
差込み
貼付け

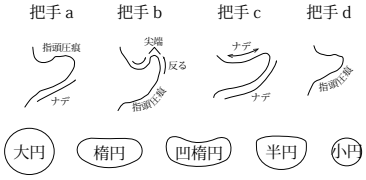
＜内面調整＞
Ⅰ類：ケズリ・ハケ
Ⅱ類：板ナデ・ハケ
Ⅲ類：ハケ
Ⅳ類：板ナデ
Ⅴ類：指ナデ
Ⅴ’類：指頭圧痕

＜端部形態＞



端部 a：先細り
端部 b：丸くおさめる
端部 c：c1 上方に端面をもつ
　　c2 外方に端面をもつ
端部 d：d1 内側に肥厚し、上方に端面をもつ
　　d2 内側に肥厚し、外方に端面をもつ
端部 e：e1 内傾させ内側に肥厚する
　　e2 内傾させた面をもつ
端部 f：折り曲げることによって口縁部とする。

＜把手形態＞



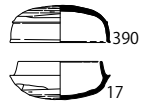
把手 a：基部の太い短い棒状。上面は指頭圧痕、下面はナデ。断面大円形が多い。
把手 b：先端が尖り、反りが強い牛角状。上面ナデ、面指頭圧痕。
把手 c：上面を丁寧なナデによって窪ませ、太い舌状。上面・下面ナデ。断面は凹楕円形か半円形。
把手 d：短い角状。断面小円形。
※切り込み・切り落とし

図 175　土器形態分類図（2）

須恵器　形態・手法分類

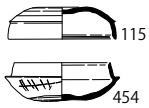
杯蓋・杯身

①



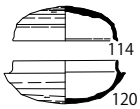
杯蓋①は口縁部と天井部境ⓐ・b、端部ア・イ、杯身①は受部境ⓐ・b、端部イが圧倒的に多くア・オも含まれる。
胎土は精良なものが多く、焼成堅緻。蓋の重ね焼き痕が明瞭で，外面に降灰による黄緑色のゴマや、一部釉状の玉ダレが見られる。
（濃い青灰色・焼成温度 1100 ～ 1200°）

②



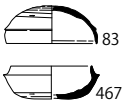
杯蓋②は口縁部と天井部境 a・b・c、端部㋓、杯身②は受部境 a・b、端部オ。
胎土はやや粗く、黒色粒を含むものもある。
焼成はやや不良～良
（灰褐色・焼成温度 950 ～ 1050°）

③



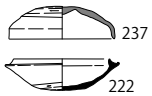
杯蓋③は口縁部と天井部境 b・c、端部イ・ウ、杯身③は受部境ⓑ・c、端部オ。
胎土はやや粗く、焼成は不良～良
（黄灰～灰褐色・焼成温度 950 ～ 1050°）

④

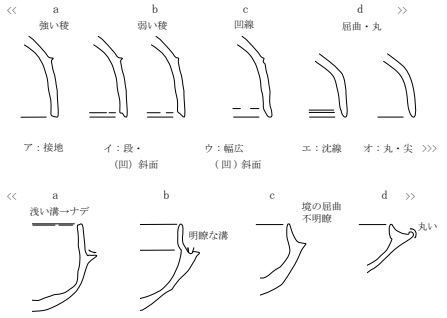


杯蓋④は口縁部と天井部境 b・c、端部イ・ウ、杯身④は受部境 a・b・ⓒ、端部イ・㋔。
口縁部径はやや小さい。
胎土はやや粗く、焼成はやや不良～良
（灰褐色・焼成温度 950 ～ 1050°）

⑤



杯蓋⑤は口縁部と天井部境 d、端部㋔・エ、杯身⑤は受部境 d、端部オ。底部は狭い平坦面をなす。
胎土はやや粗く、焼成は不良～良（赤褐色～灰褐・焼成温度 800 ～ 1050°）



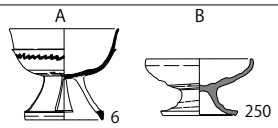
《杯蓋　―口縁部と天井部の境―》
- a：突線状の強い稜が巡る
- b：弱い稜が巡る
- c：凹線が巡り、口縁部やや短い
- d：屈曲 or 丸くなだらか

《杯身　―口縁部と受部の境―》
- a：溝を施したのちナデ
- b：明瞭な溝
- c：境の屈曲が不明瞭
- d：受端部を丸く仕上げる

《口縁端部形態》
- ア：端面がほぼ接地する
- イ：内端部に段 or（凹）斜面
- ウ：内端部に幅広 or（凹）斜面
- エ：内端部に沈線が巡る
- オ：端部は丸　or　尖る

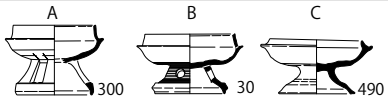
高杯

無蓋



無蓋高杯 A：杯部が椀形に大きく開き、外面に波状文や突帯を巡らせたもの
無蓋高杯 B：杯蓋を逆さにして杯部とし、ハノ字状に開く脚部を貼り付けたもの。

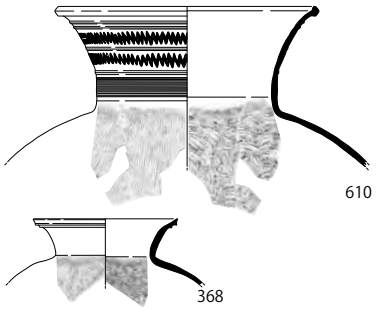
有蓋

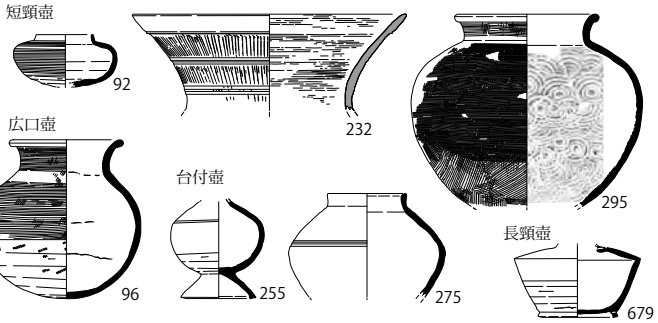


有蓋高杯 A：脚部に台形スカシを穿ち、脚端部を下方に曲げて丸く収めるもの。
有蓋高杯 B：脚部に円形スカシを穿ち、脚端部が裾端部角端面をもつもの。
有蓋高杯 C：脚部にスカシなし。

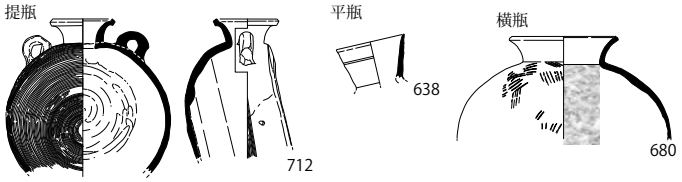
その他

壺・甕





瓶類



鉢類

他

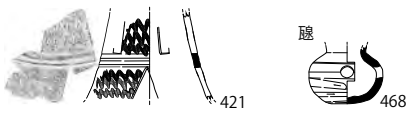


図 176　土器形態分類図（３）

に比べて遺構数が増加し、作り付けカマドが普及する。それに伴い土師器の新器種が採用される時期である。

供膳具では、須恵器無蓋高杯が数を減じ、有蓋高杯A・Bの２種が定型化する。また、蓋杯の占める割合は、高杯よりもやや多い。土師器高杯は、前代よりも短小化した高杯B2が一部見られるが[＊3]、土師器小型精製土器の数が減じ須恵器食器類にとって代わられる。

煮器具では、長胴化傾向(卵形？)の土師器甕が、カマドなどから甑や鍋などと伴って出土したり、新器種の小型甕A1、鍋A1の採用といった煮炊具の変化がみられる。

製塩土器は前段階同様備讃Ⅴ式が散見できる。

Ⅳ期：古墳時代後期初頭～中葉　ＭＴ 15 ～ＭＴ 85

27-竪穴1、3-竪穴45、10-竪穴110、3-竪穴108出土土器が該当する。第Ⅲ章で触れたように、3-竪穴45出土土器は須恵器壺類や土師器の壺甕類など大型器種の遺存状況が良好な土器群である。

須恵器蓋杯の出土量が多く、特に大型で特徴的な受部形状(受部境に明瞭な溝をなすb)の③類と小型④類が多い。③類の中には、焼成不良のものも含まれている。同じ住居内の床面直上やカマド内から出土した一括性の高い蓋杯でも大型器形と小型器形の併存が確認できる。有蓋高杯Bは、脚部が裁頭円錐形になり短脚・脚端部の簡略化する。

土師器甕は前代に続き小・中・大型のバリエーションが増え、その背景には炊事形態の多様化が考えられる。依然としてカマド内から大型甕Ａ３が出土することが多く、底部を欠き正位で出土している。このような甕はカマドの支脚もしくは構築材として転用された可能性も考えられる。[＊4]

土師器甕の手法では、工具による内面調整を省略化する傾向が見られ、ユビナデや指頭圧痕が顕著になる。製塩土器はやや大型の備讃Ⅵ式が含まれる。形態の似ている甕Ｅとしたものも製塩土器の可能性が考えられるが、外面調整に貝殻条痕が見られないことから、今後の検討課題である。

Ⅴ期：古墳時代後期後葉～７世紀初頭　ＴＫ43～ＴＫ209

27-竪穴2、6-竪穴３出土土器が該当する。須恵器杯身・杯蓋は⑤類が多く見られる。前段階に引き続き須恵器は焼成良好なものも存在するが、焼成不良の製品が増え粗雑化する。

有蓋高杯Ａ・Ｂは消滅し、有蓋高杯Ｃと無蓋高杯Ｂが増加する。甑の把手は扁平化する。前段階に比べ遺構数は変わらないものの、この段階の器種組成を概観できる資料が少なく、今後もう少し実態を明らかにしていく必要がある。

Ⅵ期：７世紀中葉～８世紀　ＴＫ 217 ～

9-SD205・32-SD20・36-SD10(古代の大溝)出土土器が該当する。一部古墳時代タイプの杯蓋が残るものの、新器種である高台付杯や皿、つまみ蓋、無蓋高杯、平瓶、長頸壺、畿内系土師器などが散見できる。[＊5]

おわりに

これまで遺構ごとの出土土器を集成・分類、時期を設定し各期の土器様相を述べてきた。土師器椀形高杯や須恵器高杯の型式変化や消長、カマド導入に伴う新機種(甑・鍋・長胴甕・支脚)や甕の法量分化など、炊事形態の様相を明らかにしてきた。

本稿は高松平野における消費遺跡の限定された地域社会に終始したものである。地域資料による可能性の一端を示したが、広域的な状況を踏まえた再考察とともに、今後検討を重ねる必要がある。(森原)

註釈

＊１　カマド内甕Ｂ出土例(8-竪穴4、27-竪穴2、14-竪穴18、27-竪穴3)等、時期はＴＫ 23 ～ＴＫ 209 型式(Ⅲ～Ⅳ期)に属す。

＊２　甕Ｅとした粗製の中型甕は、製塩土器備讃Ⅵ式への系譜関係を求める意見もある。その差異は、口縁部のヨコナデの有無と外面のタタキ目の存在が挙げられるが、法量や直立気味で先細りする口縁部形態など共通する要素も多い[大久保 2007]。

＊３　当地域では土師器高杯の法量の縮小化傾向が指摘されている[片桐 2002]。

＊４　カマド中央から正位で出土し底部を欠く大型甕は、第Ⅳ期以降の竪穴建物で多く見られる。(10-竪穴110(122)、4-竪穴20(体部片)、14-竪穴30(体部片)、10-竪穴310(甑165)、3-竪穴108(179)など)　さらに大型甕(122)は、外面の火前側の体部下半が欠損し残った 上側だが被熱を受けている。また口縁内側にはススの境界線が残り、この上に中型甕(127)を載せると合致することから、大型甕はカマドに掛けられていたもの、若しくは、カマドの構築材として利用されていた可能性が考えられる。

＊５　今回、県内調査窯跡資料(三谷三郎池西岸窯跡・打越窯跡・志度末窯跡・小谷３号窯跡)を実見する機会を得た。古代の大溝出土の甕などは志度末窯の製品と焼成・胎土が似ているので、系譜関係を求められるかもしれない。

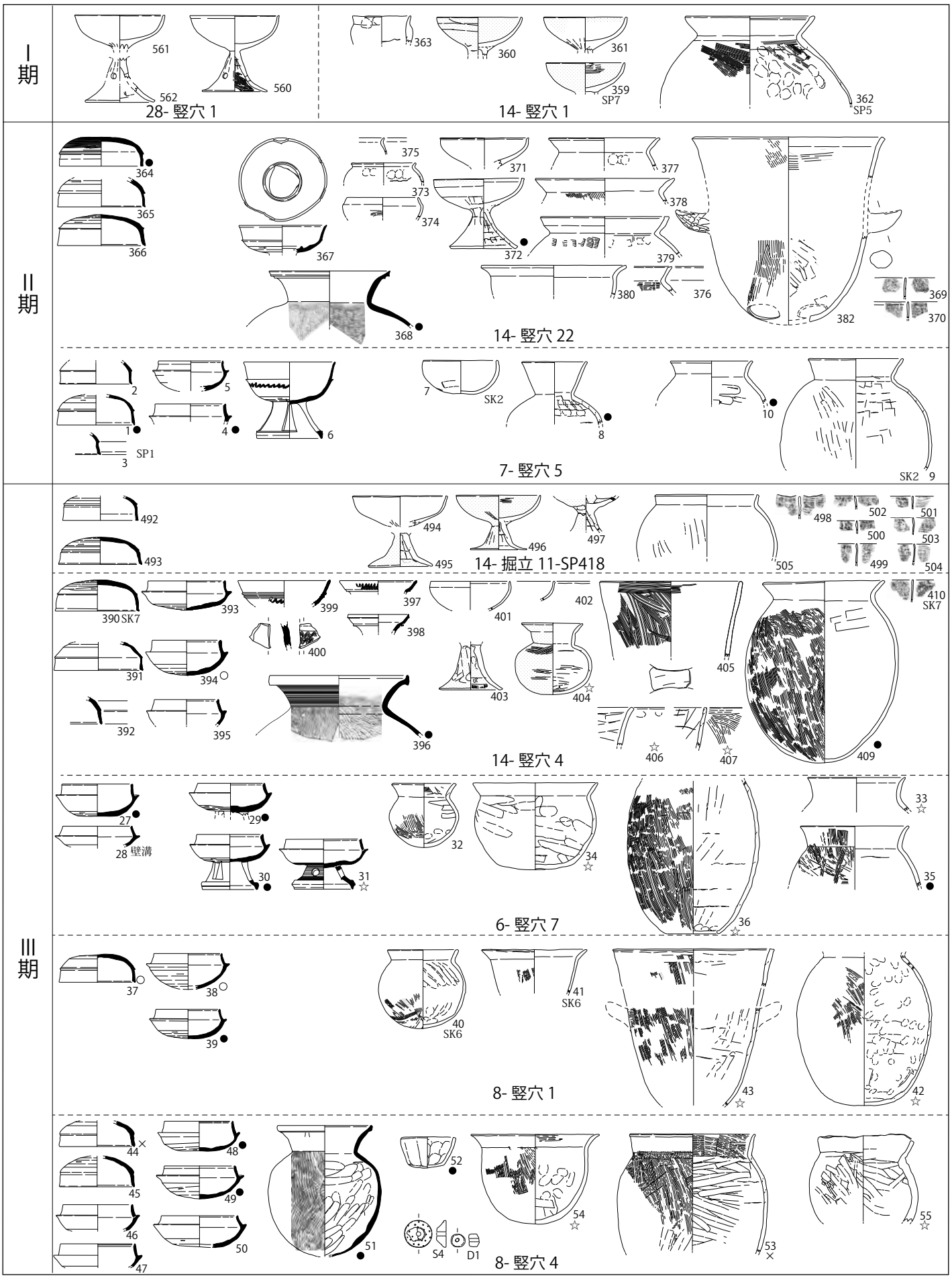


図 177　古墳時代後半期土器様相（1）

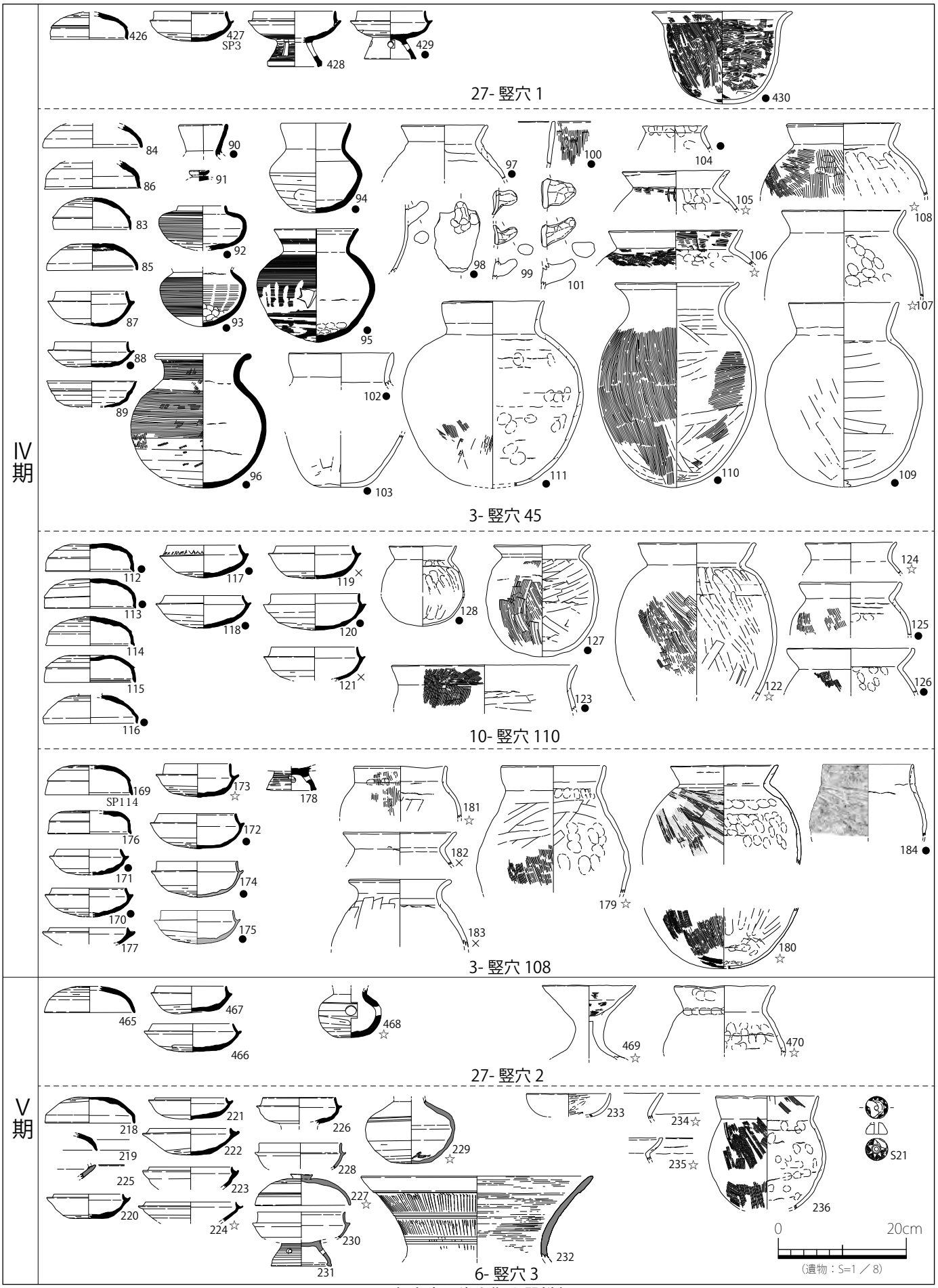
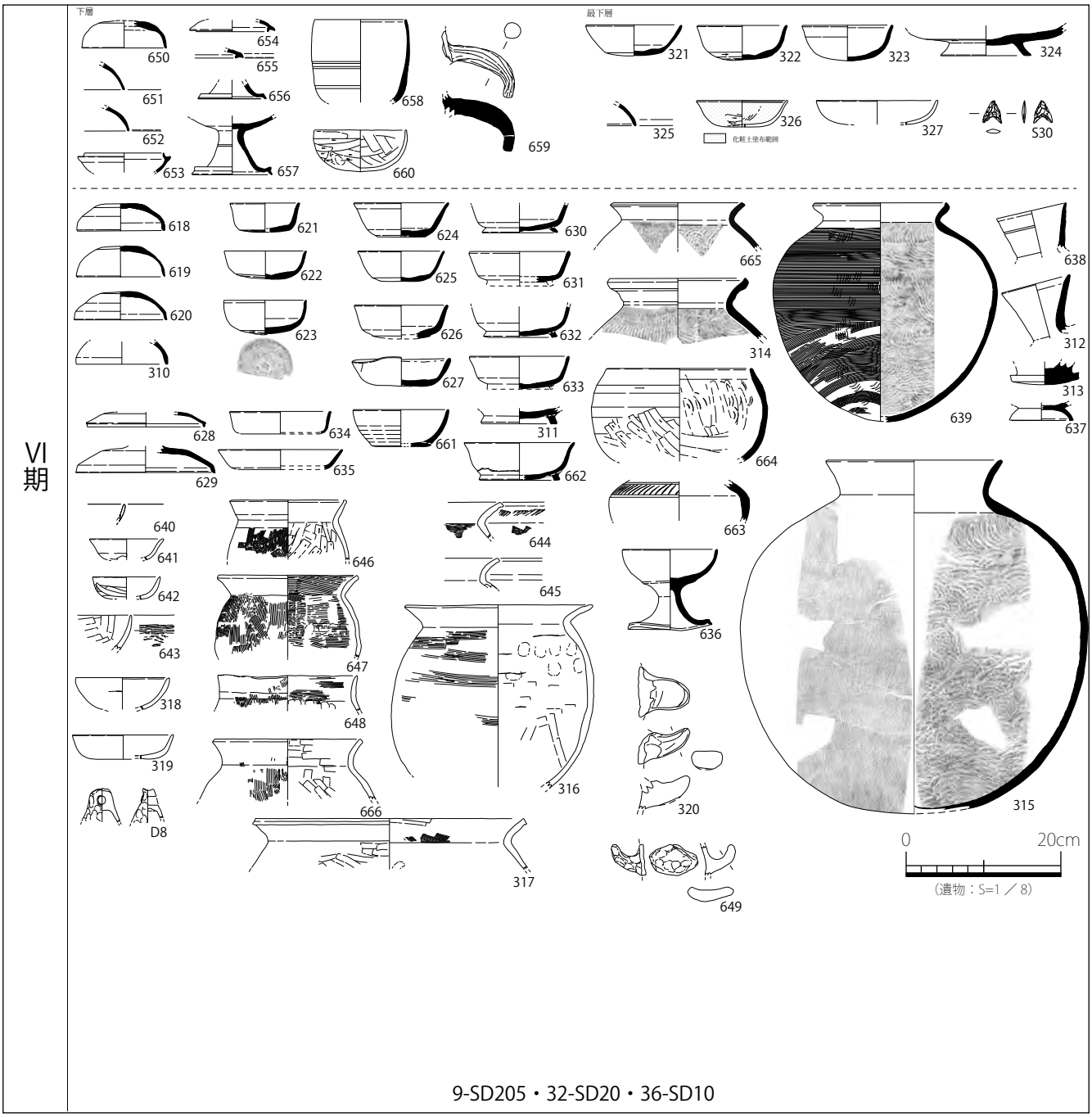


図 178　古墳時代後半期土器様相（２）



出土情報
● 貼床直上
○ 貼床付近
☆ カマド
× 貼床内

Ⅰ期	古墳時代中期中葉	須恵器導入以前
Ⅱ期	古墳時代中期後葉	ＴＫ208型式併行期
Ⅲ期	古墳時代中期後葉～末葉	ＴＫ23～ＴＫ47型式併行期
Ⅳ期	古墳時代後期初頭～中葉	ＭＴ15～ＭＴ85型式併行期
Ⅴ期	古墳時代後期後葉～7世紀初頭	ＴＫ43～ＴＫ209型式併行期
Ⅵ期	飛鳥・奈良時代	ＴＫ217型式～

図 179　古墳時代以降の土器様相（３）

表 11　遺構ごとにおける土器組成集計表

| 遺構名 | 評価 | 時期 | | 須恵器 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 土師器 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

＜参考文献＞

佐藤　竜馬　1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』関西大学
1995「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 18 冊　国分寺楠井遺跡』(財) 香川県埋蔵文化財調査センターほか
2000a「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 4 冊　空港跡地遺跡Ⅳ』(財) 香川県埋蔵文化財調査センターほか
2000b「西村型土器椀の系譜」『財団法人香川県埋蔵文化財調査研究紀要Ⅷ』(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
2016「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業 (1)9 世紀後葉～ 11 世紀前葉の供膳器種」『香川県埋蔵文化財センター年報　平成 26 年度』香川県埋蔵文化財センター
片桐 孝浩・佐藤 竜馬　1997「四国地方における 7 世紀の土器」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東 5　7 世紀の土器』
片桐 孝浩　2002「須恵器出現前後の土師器について」『樋端遺跡』香川県教育委員会　財団法人香川県埋蔵文化財センター
大久保 徹也　2010「瀬戸内の弥生・古墳時代土器製塩―生産 / 流通の変遷－」『製塩土器の分布状況から見た塩の生産 / 流通の検討―四国地域の弥生・古墳時代を例に』四国考古学研究会　土器製塩研究部会
2011「２年代の物差しと併行関係　土師器編年②瀬戸内」『古墳時代の考古学 1　古墳時代の枠組み』同成社
青柳 泰介編　2003『南郷遺跡群Ⅲ』　橿原考古学研究所調査報告第 74 冊 奈良県立橿原考古学研究所
京嶋　覚　1992「古墳時代後半期における土師器の器種構成」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書Ⅲ』(財) 大阪市文化財協会
1993「古墳時代後半期の土器の変遷」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書Ⅴ』(財) 大阪市文化財協会
杉井　健　1999「甑形土器の地域性」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室
田辺 昭三　1966『陶邑古窯址群』Ⅰ平安学園考古クラブ
1981『須恵器大成』角川書店
辻　美紀　1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室
寺澤　薫編　1986『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 49 冊　奈良県立橿原考古学研究所
中野　咲　2008「古墳時代中・後期における土師器杯の変遷と地域性－奈良盆地の事例について－」『和田晴吾先生還暦記念論集』同論集刊行会
2012「蒸し調理の普及からみた渡来系文化の受容過程―古墳時代中・後期における奈良盆地の事例についてー」『考古学論考第 35 冊』
佐藤　隆　2000「古代難波地域の土器様相とその史的背景」『難波宮址の研究第十一－前期難波宮内裏西方宮衙地域の調査―』財団法人大阪市文化財協会
中久保 辰夫 2016「古墳時代後半期における土器研究の現状」『土師編年研究の現在と各時代の特質―須恵器生産の成立から終焉までー』考古学研究会関西例会
小田 裕樹　2016「飛鳥・奈良時代における都城土器編年の現状」『土師編年研究の現在と各時代の特質―須恵器生産の成立から終焉までー』考古学研究会関西例会
古代の土器研究会　1992『古代の土器 1　都城の土器集成』
1993『古代の土器 2　都城の土器集成Ⅱ』
窯跡研修会編 2010『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜－』真陽社

2017 年 3 月 17 日　印刷
2017 年 3 月 30 日　発行

高松市埋蔵文化財調査報告第 177 集
新病院整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
萩前・一本木遺跡Ⅰ
－第２分冊－

著作権所有　高松市番町一丁目８番 15 号
発　行　者　高松市教育委員会
印　刷　者　株式会社　美巧社